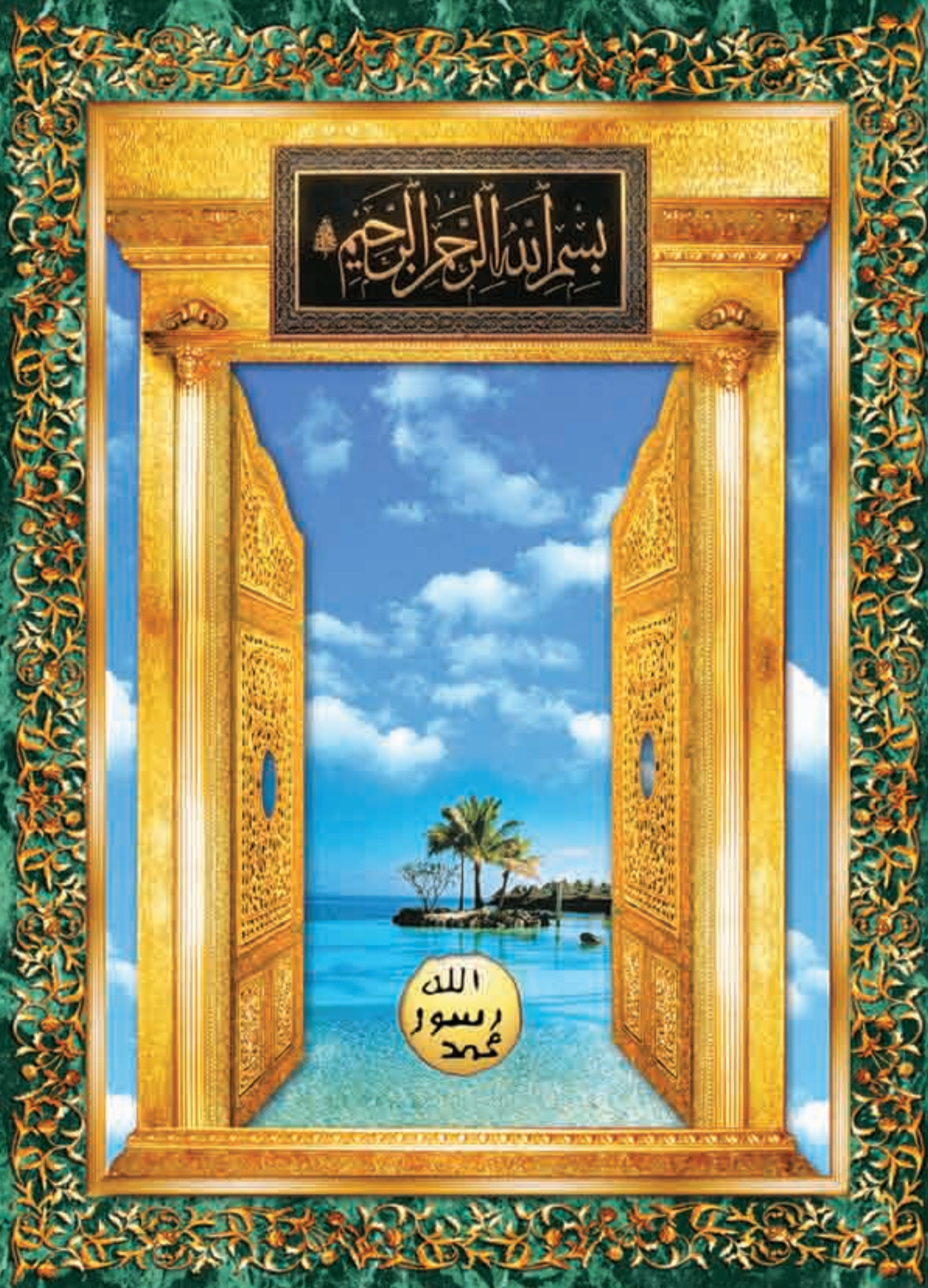
創造のアトラス

ハールン・ヤハウャ

作者について: ハールン・ヤハウャ(Harun Yahya)のペンネームで執筆活動を続けているアドナン・オクタール(Adnan Oktar)は、1956年にアンカラで生まれる。イスタンブールのミマール・シナン大学で芸術を学び、イスタンブール大学で哲学を学ぶ。1980年代より、政治、科学、信仰に関する著作を多く発表するようになる。世界で広く愛されているハールン・ヤハウャの著書は、アラーへの信仰と信仰についての深い洞察を求める人々に有用な手段となっている。ハールン・ヤハウャの作品は年齢、人種、国籍、追求する目的などに関わらず、すべての読者に影響を与えてくれるものばかりである。読んだ者の心を捉え、神の存在、一貫性、そして神が人類に与え賜れた価値によって生きること、といった重要な主題について考えるチャンスを与えてくれる。

بسم الله الرحمن الرحيم
الله
رسول
محمد

読者のみなさまへ

進化論は、反宗教的哲学に基づいて構成されている。そのため本書では、進化論の崩壊について特別な章を設けている。

ダーウィニズムでは万物創造の事実を否定しており、すなわちそれは神の存在を否定するものである。このことは過去**140**年間に、多くの人に信仰を捨てさせたり疑惑を抱かせる結果を導いてきた。だからこそ、進化論が欺瞞なのだということをすべての人に示すという所業は非常に大切な使命であり、重要な任務なのである。読者の中には、本書の一部しかお読みにならない人もいるであろうから、この主題を要約する章を設けることが適切だと思われる。

ハールン・ヤハウャの著作は、すべてコーランの一節を引用した信仰に関するものであり、神の言葉とそれに基づいて生きることについて学ぶものである。読者の頭に疑いや疑問の余地が残らないように、神の言葉にはすべて説明がついている。本書は誠実で分かりやすく流れるようなスタイルで書いてあり、どんな年代の人にも、どんな社会に属する人にも簡単に理解していただける。理解しやすい物語の効果のおかげで、いっきに読み進められる内容となっている。精神世界というものの存在を厳格に否定する人でも、本書に記載された事実には影響を受けることができ、内容の真実性は否定することができない。

本書およびハールン・ヤハウャによる他の著作は**1**つ**1**つ別個で読むのもいいが、まとめて読むのもお勧めできる。読者は各著作から素晴らしい利益が得られるため、各自の経験に関連付け熟考する際の参考に本書の議論を有用なものとしていただけることだろう。

さらに、神の慈悲を説くために著述された本書の出版はもちろんのこと、本書をお読みいただくだけでもイスラム世界への素晴らしい貢献となるであろう。著者のあらゆる著作は非常に説得力がある。ゆえに真の宗教を他に広めるために非常に有効な手段の**1**つは、この本の精読をお勧めしていただくことである。

ぜひこの本の巻末の関連書籍一覧もご覧いただきたい。信仰に関連するトピックの豊富な情報源は非常に有用で、読みごたえがある。

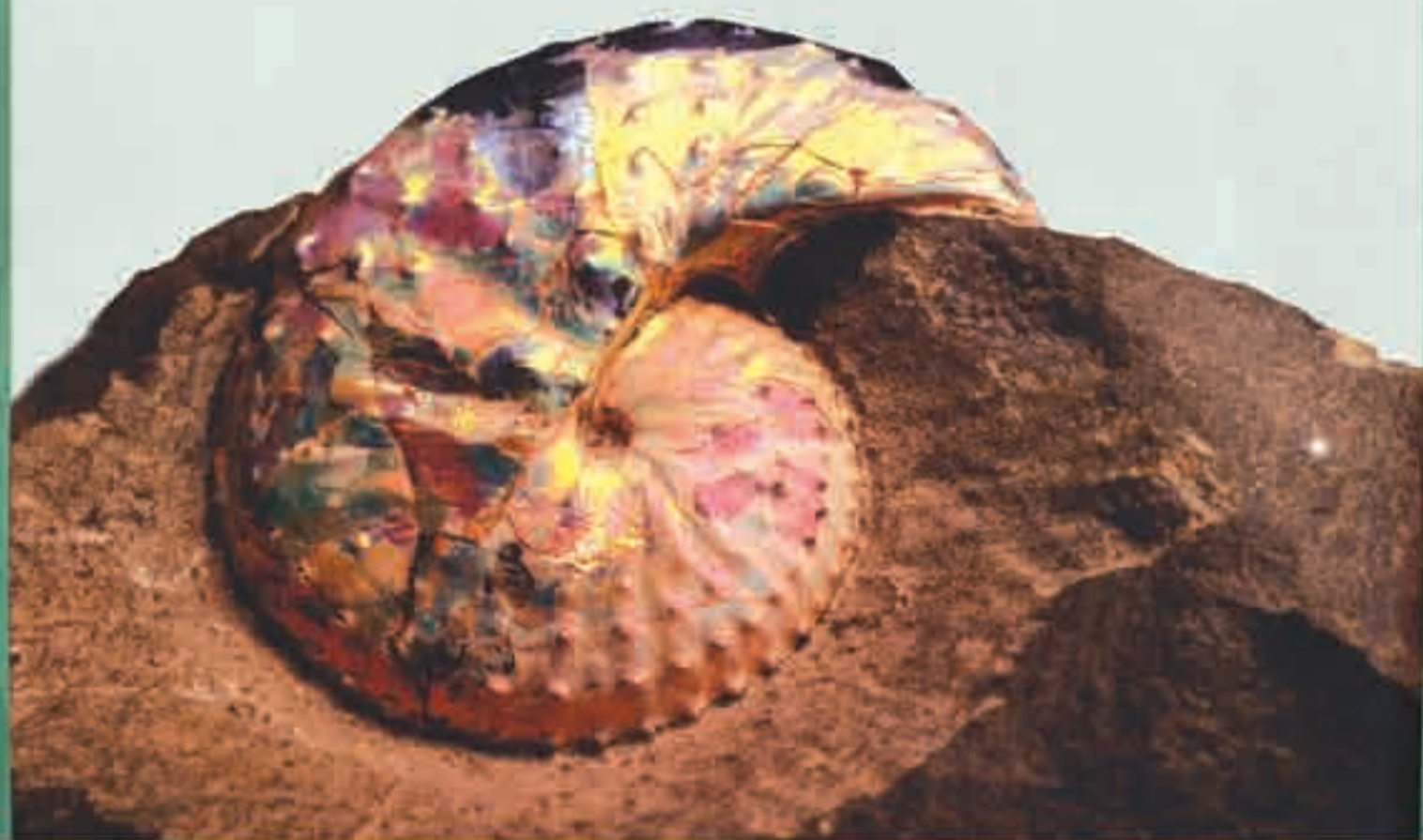
これらの著作には、他の書籍とは違い、著者の個人的な意見や疑わしい文献に基づいた説明、神聖なるものへの敬意や尊敬に対する不注意な記述、疑念を抱かせたり心を逸脱させたりする絶望や悲観といった主張は一切記載されていない。

翻訳
福見咲子
立石ゆかり
マイアットかおり

版元
GLOBAL PUBLISHING
Talatpasa Mah. Emirgazi Caddesi
İbrahim Elmas İş Merkezi A Blok Kat 4
Okmeydani - İstanbul / Turkey
Phone : (+90 212) 222 00 88

印刷
Secil Ofset
100 Yil Mah. MAS-SIT Matbaacilar Sitesi
4. Cadde No : 77 Bagcilar-Istanbul/Turkey
Phone : (+90 212) 629 06 15

コーランの引用
http://www.isuramu.net/kuruan/
日本ムスリム情報事務所『聖クルアーン』より

創造のアトラス

著者について

ハールン・ヤハウャ(Harun Yahya)のペンネームで執筆活動を続けているアドナン・オクタール(Adnan Oktar)は、1956年にアンカラで生まれた。アンカラで小学校、中等教育を受けた後、イスタンブールのミマール・シナン大学で芸術を学び、イスタンブール大学で哲学を学ぶ。

1980年代より、政治、科学、信仰に関する著作を多く発表するようになる。ハールン・ヤハウャは、進化論者の欺瞞、その主張の無効性、ダーウィニズムとファシズム、共産主義のような血なまぐさいイデオロギーとの関連性を暴く重要な書籍を多く著すことで知られるようになる。

ハールン・ヤハウャの作品は、57の言語に翻訳され、総計3万点の写真・イラストを含む4万5千ページにも上る量となっている。

彼のペンネームは、ハールン(アーロン)(Harun / Aaron)とヤハウャ(ジョン)(Yahya / John)を組合わせたものであり、人々の信仰が薄いことを嘆いて戦った尊厳な2人の預言者の名に由来する。彼の著書の装丁に施された預言者たちの印章は、コーラン(最後の聖書)と最後の預言者モハマド(神の祝福あれ、そして平和が与えられることを望む)を表し、この印章はイスラム教に関して書かれた彼の本の象徴となっている。

コーランの教えとスンナ(預言者の教え)[(神の祝福あれ、そして平和が与えられることを望む)]をもって反宗教的イデオロギーの主義の基礎に反証し、そして"最後の言葉"を使うことで、宗教に対立して掲げられる反対意見を沈黙させることが彼の目的である。

彼は究極の智と完璧なる道徳を達成した最後の預言者の印(神の祝福あれ、そして平和が与えられることを望む)を、最後の言葉を捧げる彼の意思の象徴として用いている。

ハールン・ヤハウャ(Harun / Aaron)の著作はすべて1つの目標を目指している。それは、コーランのメッセージを伝えること。読む者が神の存在や統一、来世のような基本的な信仰に関連する問題について思考をめぐらせられるようにすること、そして、無宗教システムの脆弱な基礎と道を踏み外したイデオロギーを暴くことである。

ハールン・ヤハウャは、インド、アフリカ、イギリス、インドネシア、ポーランド、ボスニア、スペイン、ブラジル、マレーシア、イタリア、フランス、ブルガリア、ロシアなど多くの国々で広く読者を獲得している。著作の一部は、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ウルドゥー語、アラビア語、アルバニア語、中国語、スワヒリ語、ハウサ語、ディベヒ語(モーリシャス島で使用される言語)、ロシア語、セルボクロアチア語(ボスニア語)、ポーランド語、マレー語、ウィグル語、トルコ語、インドネシア語、ベンガリ語、デンマーク語、スウェーデン語で読むことができる。

世界で広く愛されているこれらの著書は、アラーへの信仰と信仰についての深い洞察を求める人々に有用な手段となっている。著作中に見られる彼の博識と誠実さは、独自のスタイルとあいまって理解しやすく、読む者すべてに直接効果を与えるようにできている。こういった著作を真剣に考える人たちは、もはや無神論やおかしなイデオロギーや、物質主義哲学などを主張することはなくなるだろう。なぜなら、これらの著作は効果と絶対的な結果が迅速に発揮され、明解であることが特徴であるからだ。そういった主義がさらにこれからも主張されるとしても、それはもはや感情的なものでしかない。なぜならこれらの著作がそのようなイデオロギーは根こそぎ論破してしまうからである。同時代の否定的な動きはすべて観念的に打ち負かされている。それもハールン・ヤハウャの著作のおかげである。

これもコーランの叡智と明解さによるものだということは疑う余地がない。作者は、控えめながら、神の正しい道を求める手段として彼の著書を役立ててもらうことを意図している。著書の出版による物質的な利益は何一つ目的とされていない。

人の精神と心を開き、さらに神に対して献身的となるべく道を指し示すため、これらの作品群を他の人にも読んでもらおうとする者は、非常に価値のある行動をとっていると言える。

人の精神の混乱を招き、人々を観念的な混沌の中に導き、人々の心にある疑問を取り除くような効果がない本を宣伝することが時間とエネルギーの無駄にしかならないということは経験上明らかである。人々を失われた信仰から救うという高貴な目的よりも作者の文語力が強調されているような本には、そのような効果を期待することはできない。それを疑う者も本書を読めば、ハールン・ヤハウャ(Harun Yahya)の唯一の目的が、コーランに対する不信を克服し、コーランの倫理価値を普及させることだとわかるだろう。この貢献の成功と影響は読者の確信に現れている。

1つだけ頭に入れておいていただきたいのは、多くの人が残酷行為、闘争、その他の苦行に耐え忍んでいる大きな原因は、不信仰思想の普及に他ならないということだ。

創造説とコーランの倫理観についての迷いを取り払うことで観念的に不信仰信念を打ち砕き、人々がそれにより生きる道を見つけることでのみこれを終焉させることができるのである。

暴力、崩壊、闘争の螺旋階段を落ちていくという現代の世界的状況を鑑みても、早急かつ効果的に手を打たなくてはならないことは明らかである。さもなければ手遅れとなってしまう。

こうした活動に関し、ハールン・ヤハウャ(Harun Yahya)はリーダー的役割を果たしている。神の意思により、これらの著書は21世紀の人々がコーランに約束されている平和、正義、幸福に到達するための手段となるだろう。

創造のアトラス
ハールン・ヤハウャ

目次

はじめに

150年ほど前、イギリスの博物学者、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)は旅行中に得られたさまざまな知見に基づいてひとつの理論を提唱した。しかし、この理論は後の科学的研究によって支持されることはなかった。彼の進化論は、本質的にはダーウィンが想像力をかきたてて作り上げた仮定と推測からなる、いくつかのシナリオで構成されていた。

ダーウィンの進化論のシナリオによれば、無生物物質が偶然に集まったことで、最初の生命細胞を形成した、ということになっている。この主張が非常にいいかげんであることは疑いようがなく、誰も科学的な発見を見出せないでいるのも不思議ではない。この神話によれば、生命を持つ1つの細胞はゆっくりと形成された、ともされている。さらに、この最初の生命体種は、偶然に最初の微生物へとゆっくりと変化していった。言い換えるなら“進化した”というのである。この間違いだらけの進化論によれば、バクテリアから人間にいたるまで、地球上に発生したすべての生命体は同様の架空のプロセスによってもたらされたものなのだという。

チャールズ・ダーウィン
(Charles Darwin)

ダーウィンが使用した単レンズ顕微鏡は、ダーウィンの時代には技術が決して進歩しておらず、限界があったことを明らかにしている。

ダーウィンのこの主張は、もちろん科学的証拠や物証には基づいていない。当時使うことのできた科学的証拠や技術手段は非常に原始的であり、彼の仮説のばかげた非現実的な性質の部分には光が当てられなかった。こうした経緯から、ダーウィンのシナリオは広く一般に受け入れられることとなったのである。

ダーウィンの進化論の基礎は物質主義であった。それゆえ物質主義者に彼の理論が受け入れられるのに時間はかからなかった。物質主義者は創造論を否定しているため、盲目的に進化論に飛びついた。そして進化論が自分たちの世界観での科学的根拠で支持されているかのように主張したのである。

膨大な量の研究と調査が行われ、研究所では人工的な環境を設置することで、ダーウィンの理論を確証す

進化論を無効にする大きな発見の1つに化石記録があげられる。生物の構造が何千万年物間変わっていないということを明らかにするものである。写真は、現代に生息する昆虫と5千万年前の昆虫の化石である。この主は5千万年もの時を越えて同じであり、進化論を否定する。

1億2500万年前のサンショウウオと、現代に生息する同種

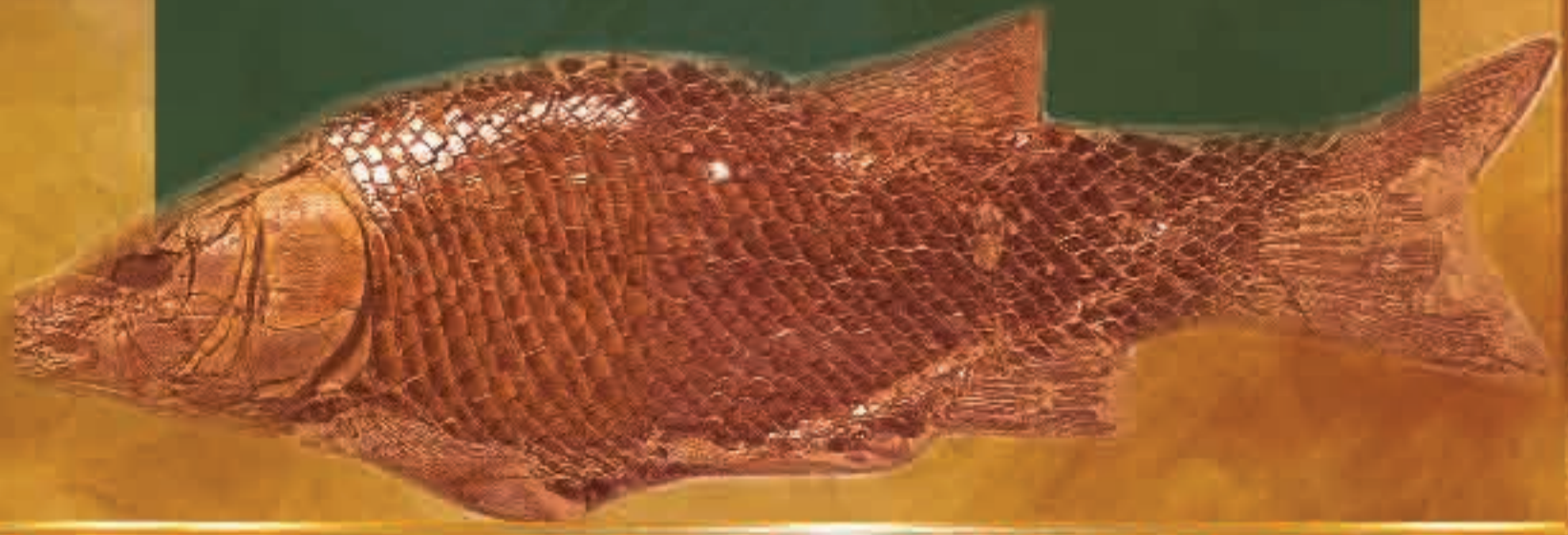
る研究結果を得ようという試みが行われた。しかし、すべての研究と、得られたすべての結果は、進化論を確証するどころかそれを否定する証拠ばかりであった。20世紀初頭から科学技術は目覚しい進歩を遂げ、進化論はついに否定されるのである。微生物学、生物数学、細胞生物学、生化学、遺伝学、解剖学、生理学、人類学、古生物学などこの主題に関連する科学分野は、進化論を完全に無用のものとする無数の証拠を明らかにしている。

化石記録は進化論の主張を打ち砕く最も重要な証拠だと言える。化石は、地球上にもたらされた生命体は細部においても変化しておらず、1つのものから別のものへと変態していないことを示す。化石記録を精査することで、生物は数億年、数百万年前と比べ今日のものと全く変わらぬ姿であるということが分かる。言い換えれば、進化などしていないのである。最も古代においても、生命体は複雑な構成を持ちながら突然出現した。その生命体は現在の体と何ら変わりのない、完全で優れた機能を持つものである。

これは議論の余地のない1つの事実に導かれる。生命体は架空の進化のプロセスなどによってもたらされたものではない。地球上に存在する、生きとし生けるものすべては、神によって創造されたという事実だ。この創造の事実は、欠点を全く持たない生命体の残した軌跡によって明らかとなるのである。

本書は、化石とは何か、以前はどうだったのか、どのように発見されたのかといった情報だけでなく“私たちは進化などしていない、創造によってもたらされたのだ”と宣言する化石たちのさまざまな年代にわたる膨大な標本を吟味するものである。この本で図解され取り上げられている化石は進化論の事実を証明する何百万の例のほんの一部にしかすぎない。進化論を立証すると言われている非常に数少ない証拠もあるにはあるが、これらはすべて科学史上最大の欺瞞であり、進化論はごまかしの理論なのである。

シダは、創造されたその日から同じ構造を有している。3億年もの年月の間同じ姿を保っているシダは、進化論が無効であることを証明する証拠の1つである。

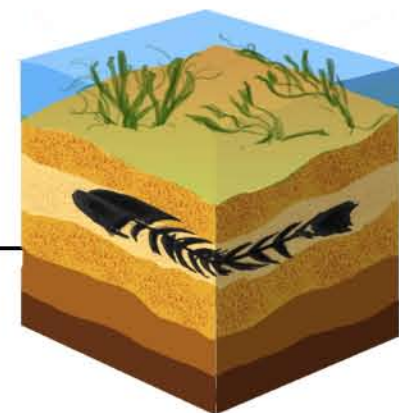
化石とは

化石とは

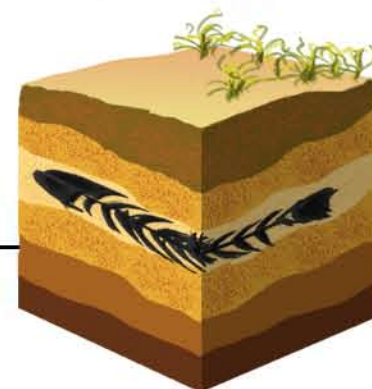
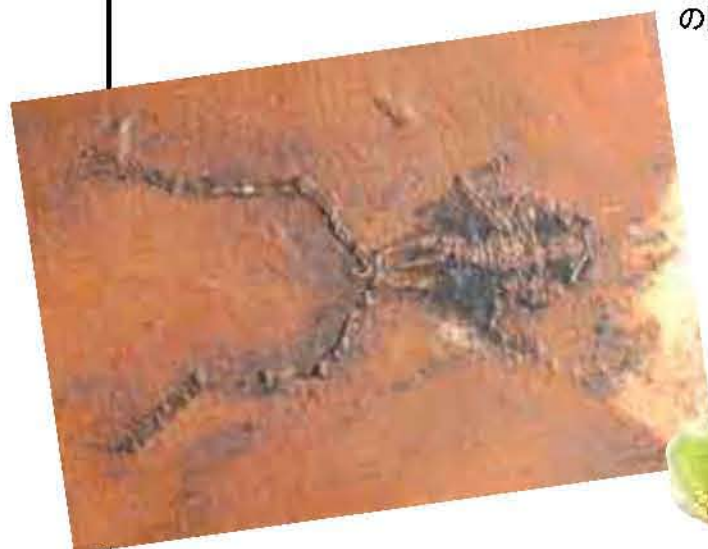
　大まかに定義するならば、化石とは太古の昔に生息していた生命体の遺骸や痕跡であり、自然の状況において現在まで保存されているものを指す。現在わたしたちが見ることのできる化石には、有機体そのもの、または生命体がまだ生きていた際に残った遺骸があげられる(後者を生痕化石という)。動植物の死骸が完全に腐食する前に保存され、地球の堆積岩の一部となったものをいう。化石化が行われるためには、動植物は通常沈泥の地層内にかなり急速に埋没されなくてはならない。埋没後、元の組織に無機的変化が起こることにより化石になるという化学的プロセスが発生する。

　化石は、有史以前の生活の細部を示す最も重要な証拠である。世界のあらゆる地域において、何百万という数の化石が発掘されており、歴史と地球の生命構造を垣間見せるのぞき窓として機能している。膨大な数の化石は、生物の種が突然、完全な形で複雑な構造を持ちながらその

通常、生命体組織が死に至ると、まず軟組織が変質し腐食する。その後骨、歯などの硬組織が保存される。骨の変質を防ぐためには、急速に埋没されなくてはならない。

モンタナ州で発見された暁新世(6550万年～5500万年前)時代の樺の木の化石は立体感がある。

長い期間を経て、骨は堆積物下部の層に埋没され、生物は化石化されていく。

上部の土地がゆっくりと侵食されていき、化石が形成される岩層は次第に地表へ移動していく。

5千万年前のカエルの化石
5千万年前に生息していたこのカエルと現代に生きるカエルとの間に、違いは全くない。

化石は地表に接近し、自然に姿を現すこともあれば、古生物学者などの発掘の際に採集されることもある。

3800万年前～2300万年前に生息していたカニの化石

4億9千万年前～4億4300万年前のヒトデは、ヒトデが何億年もの間、全く姿を変えずに、進化していないことを示すものである。

姿を現したことを示しており、種は、何億、何百万年もの長い間、全く変化することはなかったということが分かる。これは無の状態から生命がもたらされた、言い換えれば生命が創造されたということの重大な証拠である。どれ1つとして生命がゆっくりと形成された、すなわち進化したという証拠を示す化石はない。進化論者が保持している"進化の途中状態の化石"の化石標本は非常に数少なく、さらにそれらは科学的証拠としては無価値である。同様に、進化の途中状態の化石と言われた化石は実際は偽造であることが露見しており、これを見てもダーウィニストが詐欺まがいの手段に講じるほど切羽詰まっているものだということが分かる。

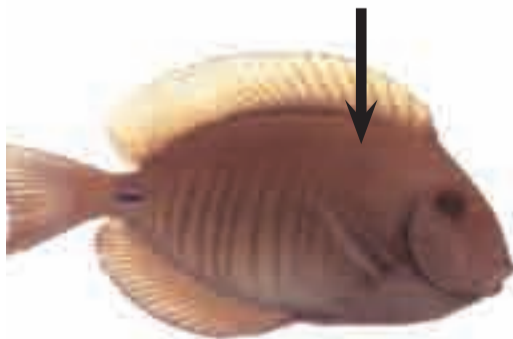
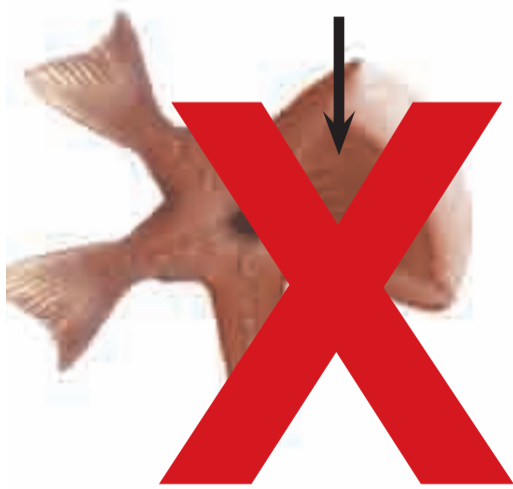
およそ過去150年間、世界各地で発掘された化石は1つ残らず、魚は常に魚であり、昆虫は常に昆虫であり、鳥は常に鳥であり、爬虫類は常に爬虫類であったということを証明している。生物種間での変態、言い換えれば、魚から両生動物へ、爬虫類から鳥へと変わったことを示す化石は1つとして発見されていない。端的に言えば、化石記録は長期間にわたり、1つの種から別の種へと進化を遂げたという進化論の基礎的主張を全く崩壊させたこととなる。

生命の形成過程についての情報を示すのと同時に、

2千万年前～1500万年前に生息していた羽アリ
樹脂が固まり琥珀に閉じ込められた化石もまた、進化論を否定する。

2億5千万年前～7千万年前のエビは、今日生息するものと同じである。エビは何百万年も同じ姿を変えておらず、これは進化が実際には発生していないことを示している。

移行型は存在しない

化石の発見は、この挿絵のような架空の生き物は全く存在していないことを示す。生物は化石記録に現されるよう、すべての特徴は全くそのままで突然この世に現れている。生物種は存在する限り、全くその形を変えていないのである。

ダーウィニストは、小さな変化を繰り返すことにより、生物は1つの種から他の種へと長い年月をかけて進化すると主張している。科学的発見によっと否定されているこの主張によれば、魚は両生類へと進化したとされており、爬虫類は鳥類へと進化したとされている。この変態のプロセスと呼ばれるものは、何千万年もの年月の中で、無数の化石記録となって現われるはずである。言い換えれば、過去数百年間における極めて熱心な研究の間、研究者は半魚、半クモ、半ハエ、半トカゲや半鳥のようなグロテスクな生物に多く発掘しているはずなのである。しかしながら、地球上のほとんどの地層が掘り返されているにも関わらず、ダーウィニストが移行型の証拠として採用できるたった1つの化石も見つかっていないのだ。

逆に、無数の化石がクモは常にクモであり、ハエは常にハエであり、魚は常に魚であり、ワニは常にワニであり、ウサギは常にウサギであり、鳥は常に鳥であったということを示している。何千何万もの化石たちは、生物が進化を遂げておらず、神によって創造されたということをはっきりと示している。無数の化石が生物は進化したのではなく創造されたのだと証明しているのだ。

大陸プレートの移動がどのように地球の表面を変化させたのか、過去の年代にどのような気候の変化があったのかなど、化石は地球の歴史についても大変多くのデータを提供している。

オーストラリアのエディアカラ生物群で作業する化石研究者

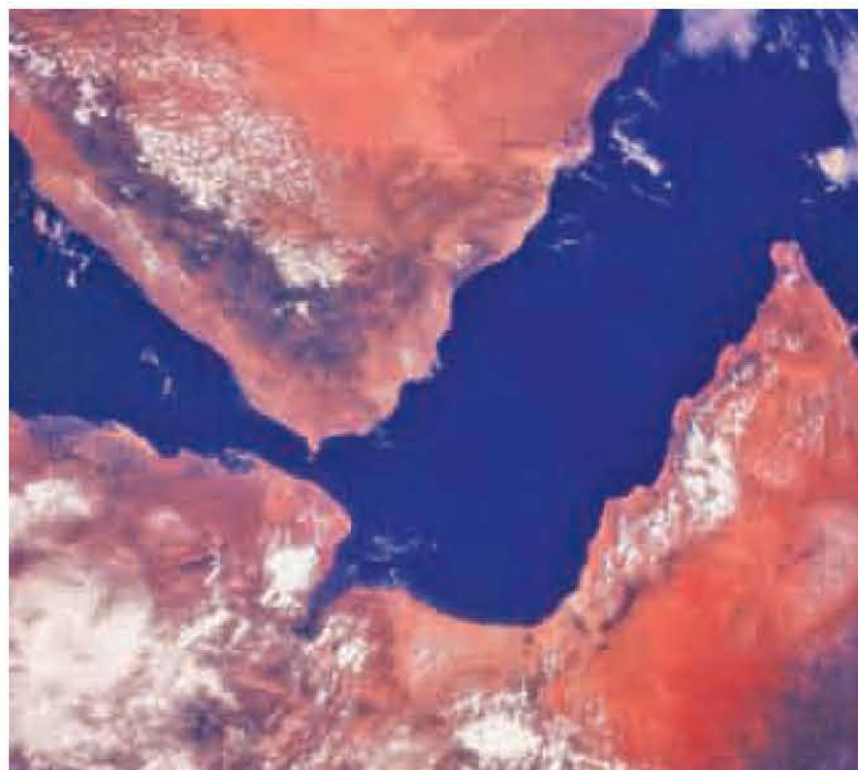
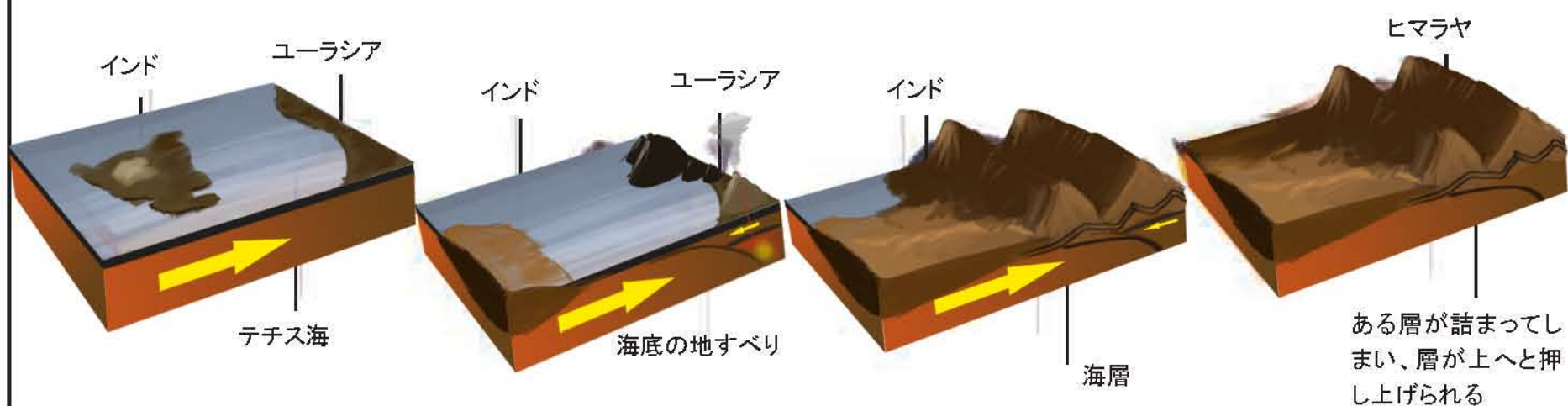
化石研究が独立した科学分野として形成されたのがほんの17世紀頃であるにも関わらず化石は、古代ギリシャの時代より研究者の興味をそそり立ててきた。そして研究者ロバート・フック(Robert Hooke) (1665年『Micrographia (邦題:顕微鏡図譜・ミクログラフィア)』1668年『Discourse of Earthquakes』の著者) およびニールス・ステンセン(Niels Stensen) (ニコライ・ステノ名の方が有名)の研究が後にそれに続く。フックとステノが調査を行っている同時代、多くの思想家は化石が古代に実際に生きていた生物の遺骸であるとは信じていなかった。化石は生物の遺骸であるか否かの議論の中核には、地理的データの観点から化石がどこで発見されたものかを説明できないという事実が存在した。化石は頻繁に山岳地帯で発見されている。当時、海面部からかなりの高度にある岩層で魚の化石化が起こるというようなことを説明するのはほとんど不可能であった。レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)が以前指摘したことを受け、ステノは長い歴史の中で海面は次第に低落したという説を支持した。一方フックは、地球内部と海洋プレートの地震による熱で山が隆起したとした。化石は実際には過去に生きて

いた生物の残骸であるというフックとステノの解釈を受け、さらに18世紀から19世紀に発達した地質学と系統だった化石の収集により、研究は科学の一分野として展開するようになったのである。

ステノが述べた原理は、後に化石の分類と解釈につながる。18世紀より、炭鉱の開発と鉄道工事の発展により、地表の下に何が横たわっているのかを探るより詳細な調査発掘が、それまでよりも大掛かりに行われるようになった。

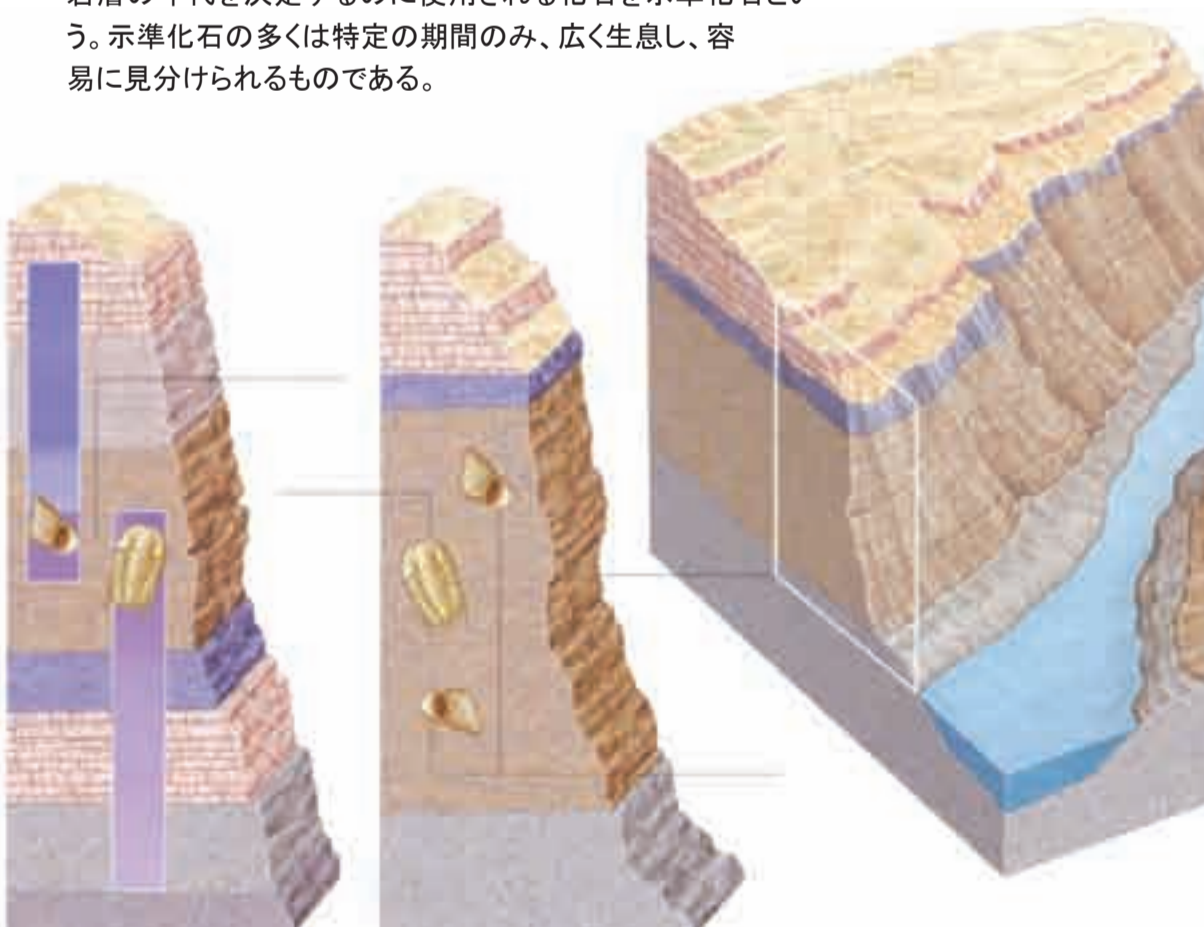
地球の衛星画像

近代の地質学では、地殻は地球の表面に縦横無尽にはりめぐらされ動く、プレートと呼ばれる巨大な層で構成されていることがわかっている。これにより、大陸を移動させ海洋を形成している。プレートの動きが大きくなればなるほど、地球の地形は大きく変わる。山脈は巨大なプレート同士がぶつかり合った結果出来たものである。かなり長期間かけて起こった地球の地形の変化と隆起は、今日山の一部を形作る地層が昔ある時期には水面下にあったということを示している。

これにより、岩層に見られる化石は、異なる年代の地球の歴史情報を得る重要手段となった。地質学情報は、生物の死亡後の遺骸が死後堆積物中に保存されたことを示している。化石は、言い換えれば、長大な時間の流れの中で岩層ごと高く隆起したものである。化石が発見された岩には、何百万年前のものと推定されるものもある。

地質学研究者は、大規模なテクトニクプレートの運動や衝突の結果として地層が動き、山が形成されたのだとしている。
上の挿絵は、ヒマラヤの歴史的形成を描いたものである。インド地域はおよそ1億4500万年前にユーラシア大陸へと移動し始め、海底はユーラシア大陸の下にすべりこんだ。
ユーラシアとインドの出現により、2つの大陸間で海底の層に詰まりが生じたために上へと押される結果となり、よって現在のヒマラヤが隆起したということである。

こういった研究の間、特定の化石の種類は特定の岩層や特定の岩にしか存在しないことが観察されてきた。連続性のある岩層には、特有の層の“痕跡”とされる独自の化石群が含まれていることが分かった。これらの“痕跡化石”は地層年代、時代、地域によってさまざまな種類に分けられる。例えば、古代湖とサンゴ礁—2つの異なる環境条件と堆積物の種類—から、同じ地質学年代に属する同じ化石を有する堆積物が発見される可能性がある。または、遠く離れた2つの岩床から同じ“痕跡”化石が見つかる可能性がある。これらの形跡から与えられた情報を通して、科学者は、今日使用されている地質学的年代を決めたのである。

挿絵はオルドビス紀(4億9千万年前～4億4300万年前)に生息していた三葉虫とシルリア紀(4億4300万年前～4億1700万年前)の巻貝である。これらの化石から、研究の対象となっている岩層が4億4800万年から4億4200万年前のものだということが推察できる。

岩層の年代を決定するのに使用される化石を示準化石という。示準化石の多くは特定の期間のみ、広く生息し、容易に見分けられるものである。

化石の形成

生物に死が訪れると、骨、歯、甲殻、爪など生物の体の一部の固い部分が残され、それらが保存されることにより化石が形成される。化石は通常植物や動物が石化したものの一部分だと考えられている。しかし、石化という過程のみでは化石はもたらされない。冷凍状態のマンモスや、琥珀に閉じ込められた爬虫類などの小動物や昆虫、脊椎動物など、一部の化石は生物の構造の損傷も腐食もなく今日まで存続してきた。

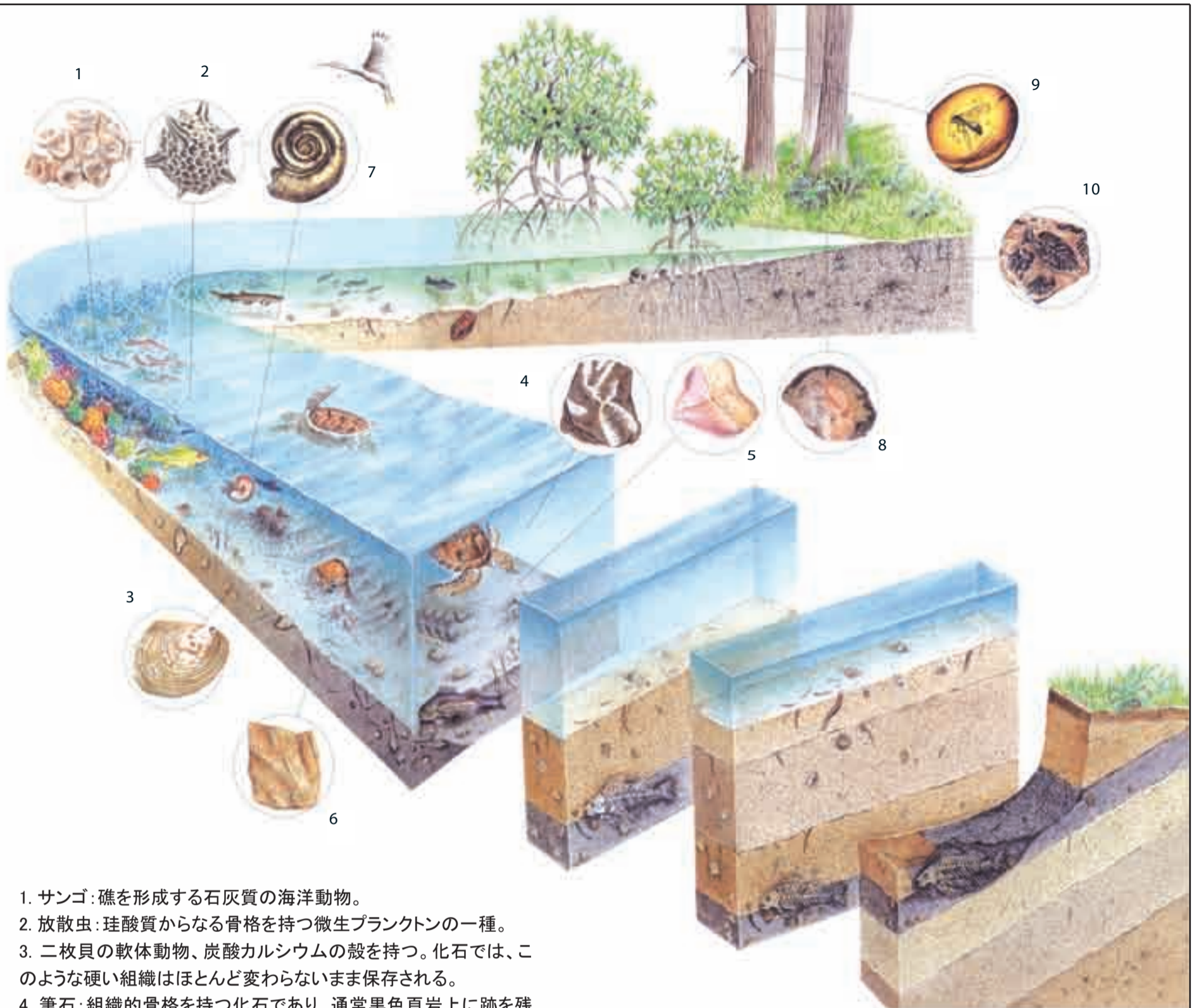
琥珀内で化石化した5400万年～2800万年前のスズメバチ

生物が死ぬと、筋肉や組織などで出来たやわらかい組織はやがてバクテリアや環境の影響により腐食していく(氷点下や砂漠の乾燥地帯などの稀な状況下では腐食は生じない)。骨や歯など、無機質を含んだ部分など、柔らかい組織よりも耐久性のある組織は、さまざまな物理的、科学的経過を経ることにより、さらに長期間存続できる。そして、これらの経過によって化石化が起こるのである。従って化石になる部分の多くは脊椎動物の骨や歯、腕足動物や軟体動物の甲殻、特定の甲殻類や三葉虫などの外骨格、サンゴや海面動物に似た組織の外 郭 、植 物の木質の部分などとなる。

組織の環境や周囲の状態も化石形成の大きな役割を果たす。組織の周囲環境によって化石化が起こるかどうかを予測できるのだ。たとえば水面下環境は、乾燥した地上でのものと比較すると化石の形成という点では、より都合が良い。

最もよく知られている広範囲に及ぶ化石化のプロセスには“パーミネラリゼーション”または“ミネラリゼーション”があげられる。この過程において、組織は体がさらされている土質の水分中の無機質に置換される。ミネラリゼーションは次のような段階で起こる。

1) まず、生物が土、泥、砂などに覆われることで死んだ組織の体はすぐに空気との接触から保護されなくてはならない。数ヶ月後には、堆積物の新しい層が埋もれた遺骸の上に積もる。これらの層は厚い防御層のような効果をもたらし、動物の体を外部物質や物理的磨耗から保護する。既存のものにさらに新たなものが積み重なり、さらに多くの層が形成され、何百年以内には、動物の遺骸は地表や海面、湖底から何メートルもの地下へともぐりこんでいく。時間とともに、動物の骨、甲殻、ウロコ、軟骨組織などの組織は化学分解されていく。地下水がこれらの組織に浸透し始めるようになり、この水に溶解する方解石、黄鉄鉱、珪土、鉄などの侵食や化学分解により抵抗力のあるミネラルはゆっくりと組織中の化学物質を変化させるのである。従って、百万年という時代を経て、これらのミネラルは生物の体内にある組織を置換することにより石のコピーを形成する。最後に、化石は、石に変化した元の生物の外観形態とぴったり同じ形を有するようになるのである。

この泥に捕らわれたトンボは、いつの日か化石化され、進化が発生したのではないという証拠として、次の世代へと受け継がれるのであろう。.

1. サンゴ：礁を形成する石灰質の海洋動物。
2. 放散虫：珪酸質からなる骨格を持つ微生プランクトンの一種。
3. 二枚貝の軟体動物、炭酸カルシウムの殻を持つ。化石では、このような硬い組織はほとんど変わらないまま保存される。
4. 筆石：組織的骨格を持つ化石であり、通常黒色頁岩上に跡を残す。この生物は群れをなして生活する。

5. サメの歯：骨や歯にはリンが大量に含まれている。そのため、軟組織よりも非常に耐久性に富むよう出来ている。
6. 生痕化石：堆積物などに見られる跡により形成される化石。
7. アンモナイト：殻は黄鉄鉱に変化し、化石化される。
8. 石化した樹木：長い時を経て、木の細胞は珪素に変わり、化石化される。
9. 琥珀：小さな組織が樹脂の中に保存される。
10. 炭化した葉：植物は炭素繊維へと変化する。

この5千万年前の化石の魚は、魚が常に魚のままであったという証拠である。

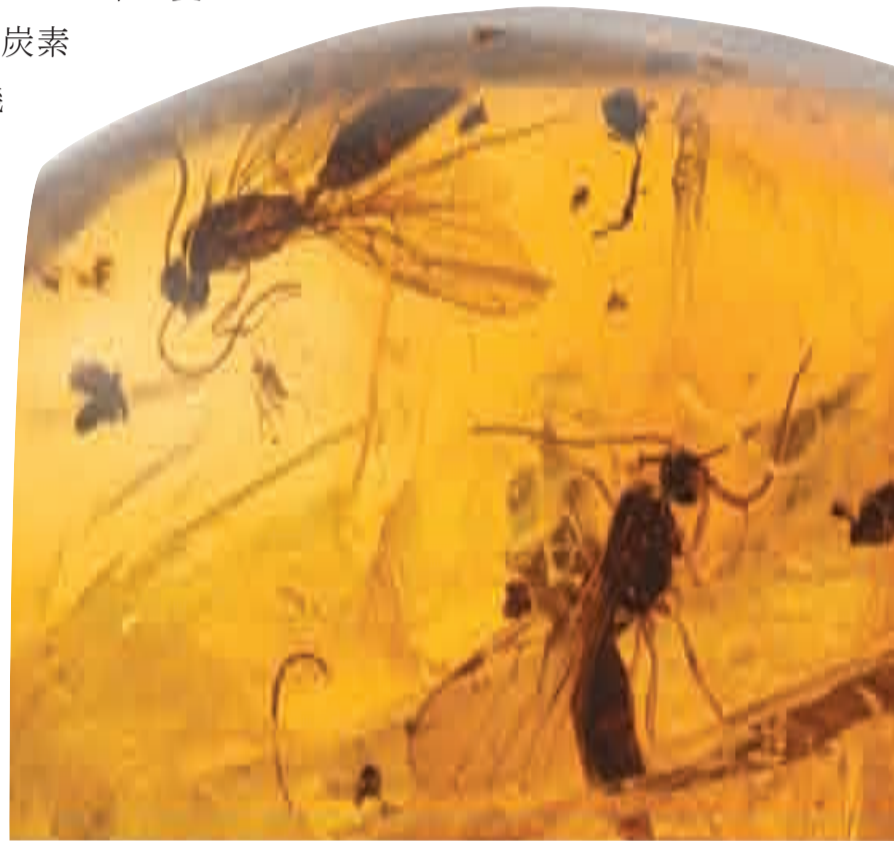
ミネラリゼーションは、次のようないくつかの状況で発生する可能性がある。

1. 骨格が完全に水溶液で満たされると、その後の段階で分解が始まる。次に内部構造が化石化する。

2. 骨格が完全に他の鉱物へと転換された場合、甲殻などの完全なコピーが出来上がる。

3. 骨格の雛形または"型"が圧力によって形成され、骨格の外部表面が残る。一方植物の化石では、バクテリアによる炭化がこれに当てはまる。炭化の過程では、酸素と窒素が炭素と水素に置換される。炭化は組織 の 分子がバクテリアにより分解され、圧力や温度、その他化学的プロセスの中で変化し、タンパク質と繊維素の化学変化を引き起こし、それにより炭素繊維のみが残る。二酸化炭素、メタン、硫酸水素その他の有機物質や蒸発水分は消滅する。このプロセスにより3億5400万年から2億9千万年前の石炭紀に存在した沼地により形成された自然の炭素層が発生した。

化石は、生物がカルシウムで豊富な水面下にされされ、湧泉沈殿物のような鉱物により覆われた際に形成される。生物が腐食するに伴い、鉱物層に自分自身の跡を残すのである。

毛、羽毛、皮膚などの生物の軟組織の完全な化石化が発生するのは稀である。先カンブリア時代(46億年から5億4300万年前)の軟組織生命体の遺骸は、一部かなり良好な形で保存されている。現代に伝わる生物の遺骸の硬組織に加え、一部の軟組織ではカンブリア紀(5億4300万年前から4億9千万年前)の生物の内部構造を調べることができるものもある。琥珀に包まれた動物の毛皮や毛の化石や、1億

琥珀に保存された2千万年前〜1500万年前の小昆虫たち

時により、特異な状況下でももろい組織も化石化する場合もある。写真はジュラ紀(2億600万年前〜1億4400万年前)のヒトデである。この化石と現代のヒトデとの間にはどんな違いも見られない。

この魚の表皮とウロコは、三畳紀(2億5千万年前～2億300万年前)のものであり、詳細にいたるまで無傷で化石化されている。この標本は、魚のウロコの構造が2億5千万年前と全く同じだということを明らかにしている。

5千年以上前の化石も、詳細な調査を行うことができるものである。シベリアの流氷に閉じ込められたマンモスや、バルト海の森林で琥珀に包まれた昆虫や爬虫類も、軟組織まで化石化している。

化石は保存された組織の種類によりその大きさは非常にさまざまなものになり得る。化石化された微生物から、グループや群れを成す生活スタイルを持つ動物の巨大な化石まで非常に異なる化石が得られている。非常に印象的な巨大化石の1つには、イタリアの海綿礁があげられる。大きな丘のようにも見える1億4500万年前に形成されたこの礁は、古代の海、後にテクトニクスプレート運動の影響により隆起するテチス海の海底に発達したスポンジ状の石灰岩である。この場所には三畳紀時代にスポンジ礁で生活していた生命体の標本が多数この場所に含まれている。カナダのバージェス頁岩や中国の澄江では、何千体ものカンブリア紀の化石が発見されている、大規模化石層の代表的存在である。ドミニカ共和国の琥珀床とバルト海西海岸沿いもまた、昆虫の化石の出所となっている。アメリカ合衆国ワイオミング州のグリーンリバー化石層、中央アメリカのホワイトリバー、ドイツのアイヒシュテット、レバノンのハジューラもまた同様である。

地上で最も偉大なる海綿層

この1億4500万年前の海綿層は、テチス海の海底の痕跡を残している。現代の海綿はこの山を形作る古代のものと全く変わりはない。これらの海綿は、進化が行われていないということを明確にするものである。

化石研究で分類されているグループの数

1. 動物界(Animalia) – 動物界の化石。現在発見されている一番古いもので6千万年前のものがある。

2. 植物界(Plantae) – 植物界の化石。現在発見されている一番古いもので5千万年前のものがある。

3. モネラ界(Monera) – 核を持たないバクテリアの化石。現在発見されている一番古いもので39億年前のものがある。

4. 原生生物界(Protoctista) – 単細胞生物の化石。現在発見されている一番古いもので17億年前のものがある。

5. 菌界(Fungi) – 多細胞生物の化石。現在発見されている一番古いもので5億5千万年前のものがある。

地質学年代と古生物学

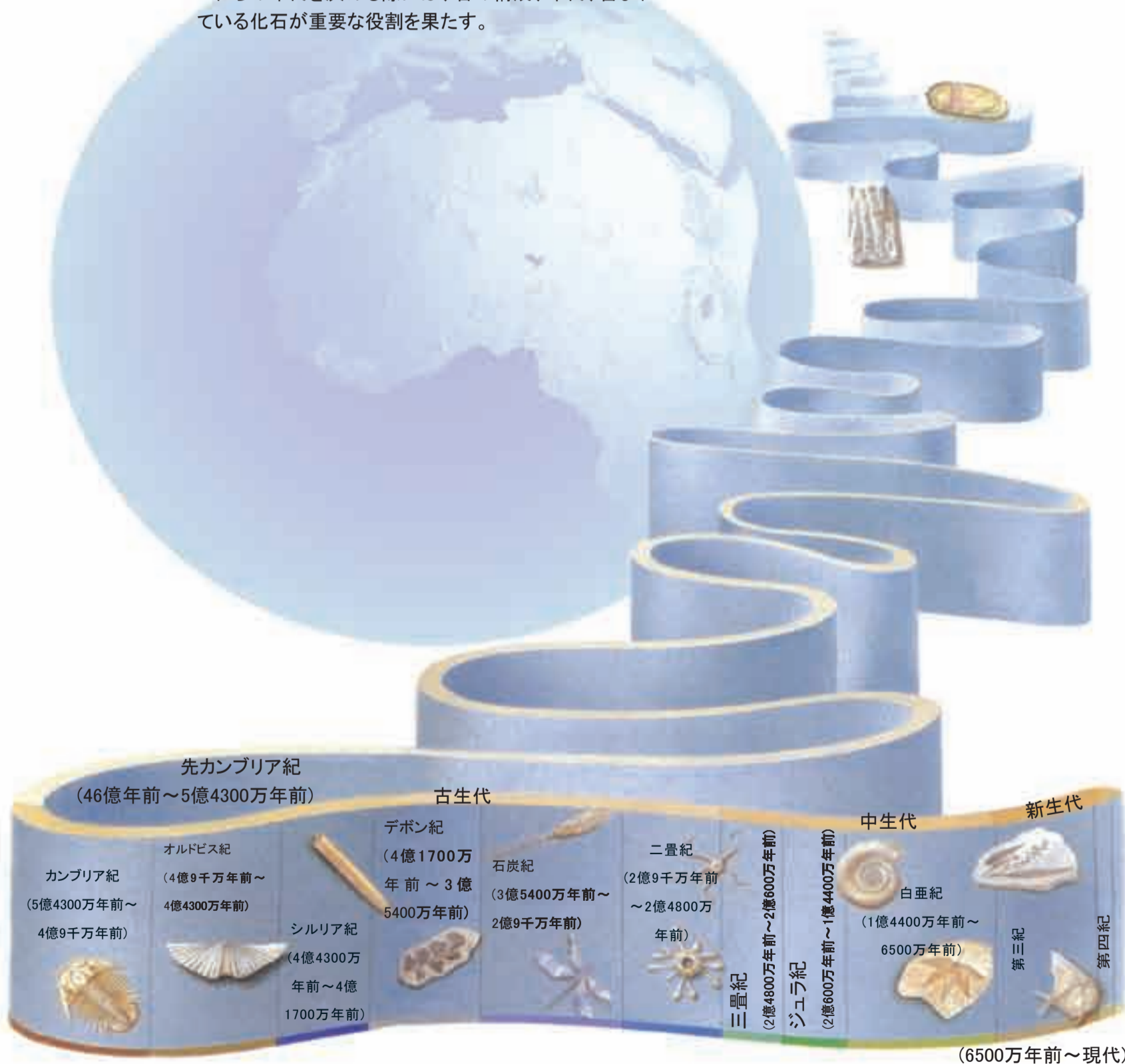
地殻についての基本情報が初めに収集されたのは、18世紀後半から19世紀の初頭にかけて、鉄道やトンネルが盛んに建設された時代であった。イギリスのトンネル建設家ウィリアム・スミス(William Smith)は、建設作業中に、北海の海岸沿いの岩に、ジュラ紀の年代(2億600万年前～1億4400万年前)にあたるサマセットの地下層と似たような層があることに気付いた。イギリス国内の北から南まで広い地域から集めた岩と化石標本を元に、スミスは世界初のイギリス国内地質学的地表地図を作成した。さらに、彼が手に入れた岩の標本に基づき、一部地域の地下地質学地図まで描いた。これは近代の地質学の発展と地球の年代を探るのに大きく貢献した。彼の地図に掲載された情報のおかげで、岩そのものは植物で覆われていたにも関わらず、地球表面からすぐ下の地層

ウィリアム・スミスによって収集された化石標本の一部

英国の地質学の基礎を築いたウィリアム・スミスによって描かれた最初の地図は、近代の地質学に大きく貢献した。

の性質と内容物(鉄の薄層、炭素層など)が分かるようになった。

化石は、彼が情報を取得する際に非常に重要な役割を果たした。化石層が示すデータを用いて先カンブリア紀から第四紀までの地質学年代表が作られ、それは現在でも尚使用されている。岩の構造調査の恩恵を受け、地球の年代の各段階の異なる年代が識別されるようになった。また、岩に含まれていた化石は、異なる年代に生息していた生物の情報を与えてくれたのである。これら2つを組み合わせ、年代表が作られた。地球の歴史は2つの累代にわけられ、その累代はさらに“代”に分かれ、そしてそれはさらに“紀”に細かく分けられる。

自然史をより分かりやすくするために、地質学者や古生物学者たちは、地球の歴史を地質学的年代に分けた。これらの年代を決める際には、岩の構成、年代、含まれている化石が重要な役割を果たす。

1. 先カンブリア累代 (46億年前～5億4300万年前)

先カンブリア紀は地球の年代でも最も古く、最も長い年代と見なされており、いくつかの“代”と“紀”に分けられる。

46億年前～38億年前の年代をハディアンという。この時代にはまだ地殻が形成されていたとされている。始生代は38億年～25億年ごろの時代をいう。

その次は原生代で、25億年～5億4300万年前の時代を指す。

化石記録によれば、これらの年代には、多くの種類の単細胞、多細胞生物がその痕跡を残している。

2. 顕生代 (5億4300万年前～現在)

顕生代は“目に見える/知られている生物”という意味である。顕生代は次の3つの区分である古生代、中生代、新生代に分割されて研究されている。

2A. 古生代 (5億4300年前～2億5100万年前)

3億年続いたこの時代は、顕生代の最初の時代であり、最も長い時代となっている。

古生代の時代全体を通じて、気候は概して多湿、温暖であったが、氷河期が何度か訪れている。

古生代は6つの区分に分割され研究されている。カンブリア紀、オルドビス紀、シルリア紀、デボン紀、石炭紀、二畳紀である。

グリーンランドにおける先カンブリア紀の岩層
(46億年前～5億4300年前)

オーストラリアのエディアカーラ・ヒルには先カンブリア紀時代の岩層が含まれる。写真の5億7千万年前～5億4300万年前のクラゲの化石もエディアカーラで発見されている。

何億年にも時代をさかのぼる、これらの化石記録は“進化のプロセス”の主張を否定するものである。進化論者たちは次のような非科学的主張を唱えている。

1- 化石記録には、多くの移行型が見られなくてはならない。

2- これらの移行はゆっくりと漸次的に行われなくてはならない。また単純なものから複雑なものへと進化しなくてはならない。

3- 最初の架空の細胞が進化した後に、新たな種が出現しなくてはならない。

また、これらの種は化石で発見されなくてはならない。

しかしながら、化石記録は進化論者の主張を立証することはできなかった。化石はある事実を露呈した。その事実とは、特殊な構造をもって、生物は識別可能な区別できる性質を備えている。この性質は、長い年月のうちに獲得されたものではない。また、跡をたどることができる進化と現在生息する生物との間のつながりは全く存在しないのである。これは、すべての生物は、神によってすべての特徴を備えた完璧な形で創造されたのだという重大な証拠となるのである。

カンブリア紀(5億4300万年～4億9千年前)

この年代は今日生存する基本的生物群または門(phyla)や、さらに急激に絶滅した種を含めばもっと多くの生物が突然出現した時代である。門(Phylum)は界に次いで最も大きな生物の分類である。門は生物の器官や組織、体の左右相称構造、内臓器官などの形状や数などを基本として決められている。現在決められている門の数は、35と考えられているが、カンブリア紀の年代にはおよそ50あったといわれている。

種の出現はあまりにも急激であり、その種類は多岐にわたるため、これを科学者たちは"カンブリア爆発"と呼んだ。進化論者であり古生物学者のステファン・ジェイ・グールド(Stephen Jay Gould)はこの現象を「生命体の歴史で最も注目すべき、謎に満ちた事象」と書いている。一方進化論者の動物学者トーマスS.レイ(Thomas S. Ray)は、多細胞動物の起源は生命の起源の重大性と匹敵するほど重大なものと記している。

古生物学者によって提起されたカンブリア紀爆発を熟考してみれば、これは明確に神の創造を支持するもので

カンブリア紀時代に生息していた生物の画

あり、進化論を否定するものだということが分かる。カンブリア紀以前の先カンブリア時代には、単細胞生物が主に生息しており、それほど特徴が多くなく、目や足といった複雑な構造を持っていない多細胞生物がほんの数種類見られるだけだった。これにより、想像から生まれたカンブリア紀の生物の進化論的変遷を支持する証拠はなく、先祖と仮定されたものの存在を示す化石は1つも発見されていない。この単細胞生物のみが棲む不毛な環境で、驚くほどの種類を持つ生物が突然出現したのである。この爆発を通して、生物は1つ1つ異なる構造的特長を持って区別されながら出現している。化石は、先カンブリア時代とカンブリア紀の生物間での複雑性と関連性については難解な溝があることを明らかにしている。驚くべきは、生物の分類の連続性を証明できる必要性のある進化論者が、理論的なレベルにおいても、これらの門の間で何の属関係も証明できずにいることである。

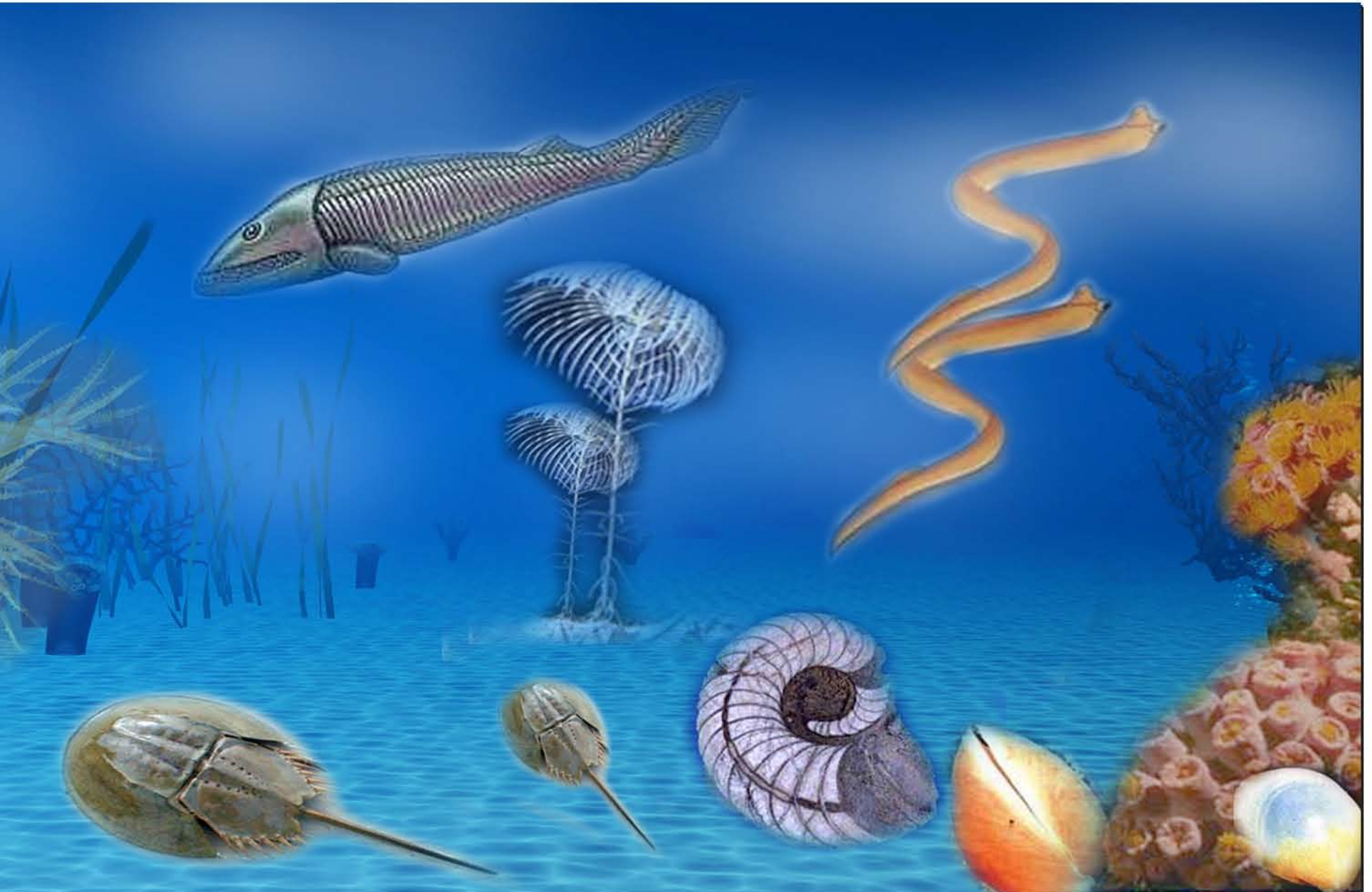
カンブリア紀は最初から生命体が複雑な構造を持ちながら非常に多くの種類が突然出現したことを示している。そして、それこそが神の創造で語られていることなのである。完全な構造を有する生物は神が創造したものである。化石記録では、偶然に基づく進化論が断言している不完全な構造や機能不全の段階という不完全さはなく、完璧な形状の完全な構造を持った生物が何の欠陥もなく現れていることを示している。

オルドビス紀(4億9千万年～4億4300万年前)

この年代には、数多くの海洋無脊椎生物が生息していた。化石記録では、オルドビス紀には、海洋生物に属する多くの生物種がいたことが明らかになっている。また、同じ年代には、陸生植物も生息していたことが分かっている。オルドビス紀には、氷河期により地球規模の気候変化が起こり、多数の生物種が絶滅に追いやられた。この状態は"オルドビス紀の絶滅"と呼ばれている。

オルドビス紀に生息した生命体の中には、現在でもその姿を見られるものもある。その1つがカブトガニだ。4億5千万年前のカブトガニの化石は、この5億年近く前の生物がその複雑な体組織のまま、同じ姿でいることを示している。最も古く、また最も完全な姿を残しているミズグモもまたオルドビス紀(4億2500万年前)のものであり、生物が長い間変わっていないということを示す重要な証拠として残されている。ダーウィニストのシナリオにおいて生物が進化したとされているこの年代に、進化がどんな形においても発生しなかったということが明らかになったのである。

ニューフォンドランド州の岩層では、カンブリア紀からオルドビス紀への変遷を見ることができる。

4億5千万年前の三葉虫の化石には、現在の三葉虫と異なる点が全くない。

オルドビス紀の生物の画

シルリア紀(4億4300万年前〜4億1700万年前)

温度が上昇するにつれ、氷河は溶けだし大陸へと注ぎ込まれた。この年代には数多くの陸上植物やウミユリなどの棘皮動物、ウミサソリなどの節足動物の化石が発見されている。また、下顎のない魚類や甲殻を持った魚類、クモに属する生物なども数多く発見されている。

デボン紀(4億1700万年前〜3億5400万年前)

この年代の化石は数え切れないほど発見されている。デボン紀には、一種の"大量消滅"が発生しており、特定の生物は絶滅している。この大量消滅によって層孔虫(stromatoporoids) (造礁生物)が死に絶えるなど、サンゴ礁に大きな影響があった。

しかしデボン紀に生息していた生物の化石の数多くは現在に生息している生物や魚類と同じものである。これもまた、生物が何百万年という年代を経ても同じであるという重要な証拠となり、段階的に進化したという説が否定されることには疑問をはさむ余地がない。

シルリア紀時代のウミユリ

石炭紀(3億5400万年前～2億9千万年前)

石炭系という名称でも知られるこの年代は、2つの世に分けられる。石炭紀下部またはミシシッピアンと、石炭紀上部またはペンシルヴァニアンである。大陸間の衝突により土地が隆起、陥没、また極氷冠に関連して海面が上下するなど、この年代は世界を形作るのに非常に大きな出来事が発生している。多くの海洋生物や陸生生物の化石は石炭紀時代のものである。ダーウィニストが長年進化途中の形態としてきたシーラカンスは現在も生息しており、この主張を退ける事実となっている。シーラカンスは何百万年もの経過においても全く変化しておらず、進化の流れをつなぐ“失われたパズルの断片”であるとしたダーウィニストの主張に反し“進化”していないということとなる。実際には、シーラカンスは進化を否定する生きた化石なのである。シーラカンスは長年進化論者たちの考察の対象になってきたが、生きた化石として出現したことにより、進化論者たちはジレンマに陥ることとなった。

4億1千万年前のシーラカンスの化石

現代に生息するシーラカンス

3億5500年前～2億9500万年前のクモの化石

二畳紀(2億9千万年前～2億4800万年前)

二畳紀の終わりごろ、またもや大量絶滅が起こり、これにより古生代が終わりを告げる。化石記録にも、この大量絶滅において90%～95%の生物が死に絶えたということが分かっている。それでもなお、一部の二畳紀の生命体には現在まで生き延びているものもある。トンボやクモなどの二畳紀時代の化石は、過去のどの年代にも進化は発生していないことを物語っているのだ。

2B.中生代(2億4800万年前～6500万年前)

中生代は大きく3つの年代に分けられる。三畳紀、ジュラ紀、白亜紀である。恐竜が繁栄を極め、やがて絶滅していったのはこの時代である。

三畳紀(2億4800万年前～2億600万年前)

中生代は三畳紀から始まる。世界中の三畳紀時代の化石には多くの海洋生物と陸生生物が発見されている。他の年代と同様、進化論者たちが望んでいるような、進化の中途段階にいるような化石は1つとして発見されていない。

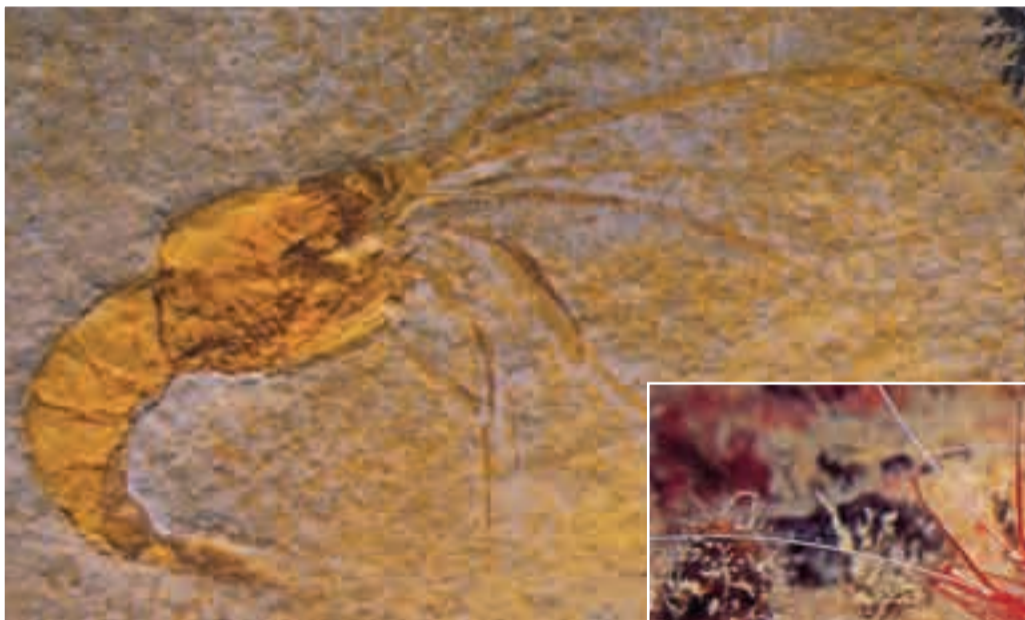
三畳紀の化石を調べる科学者たち

アリゾナ州の石化森林(化石化、オパール化した樹木)は、三畳紀の植物で有名である。この森林は、現在チリマツで知られる樹木で構成されており、植物が進化していないことを証明する場所である。2億4800万年前から2億600万年前に生息していたこれらの樹木は、現在生息しているものと異なる点がない。

ジュラ紀（2億600万年前～1億4400万年前）

中生代のこの時期には、多くの種類の恐竜がたくさん栄えていた。ジュラ紀の終わりごろ、一部のアンモナイト、海綿、牡蠣、イシガイに属する生物などは絶滅している。

しかし、多くの生物はジュラ紀から今日まで変わらぬ姿で生き延びており、言い換えれば、全く進化など経ていないのである。こうした生物は化石記録によってその存在が確認されている。最も古代のものとされているワニの化石は2億年前のものである。また、2億年以上前のムカシトカゲの標本も発見されている。エビの化石の多くジュラ紀にさかのぼり、その複雑な構造も完璧な体系はすべて、現在生息するものと全く変わらない。

2億年前のムカシトカゲと現在生息する同じ種のトカゲ

2億600万年前から1億440年前のエビの化石。今日わたしたちの時代に生きるエビと何ら変わりはない。

1億5千万年前のトンボの化石。現代のトンボと全く同じものである。

白亜紀(1億4600万年前〜6500万年前)

フランスで発掘された1億4600万年前〜6500万年前の魚とコウモリの化石

白亜紀は、中生代の最も後期の年代である。この年代は恐竜や大量の陸生生物と植物が絶滅した年代として知られている。

また一方では、ヒトデ、カニ、魚類の一部、ミズグモ、クモ、トンボ、カメ、ワニなど多くの水生生物や多くの種類の植物が現在まで生き残っている。1億3500万年前の化石標本や、1億4千年前のカブトガニ、1億2500万年前のイチョウの葉などはこれを証明するほんの一部の化石である。何億年もの経過においても、これらの生物は今でも同じ複雑な構造を有している。これは完全にダーウィニストの自然史についての主張を否定するものである。

2C.新生代(6500万年前〜現代)

私たちが生きるこの時代が含まれる新生代は白亜紀後期から始まる。つい最近まで、地質学者と古生物学者たちは新生代を同じ長さの2つの期間に分けていた。第三紀と第四紀である。第三紀は6500万年前〜180万年前の期間を指し、第四紀は現代までの最後の年代である180万年間に要約される。しかし近年では新生代を3つの期間に分けるようになってきた。この新体系を構成する要素は古第三紀、新第三紀、第四紀の3つである。

新生代の化石記録は他の年代と同様、生物は偶然により共通の祖先から進化したという進化論者の主張が真実ではないことを示している。

これらの年代の化石における際立った特徴の1つは、これらの生物が全く変化していないという点である。言い換えれば、生物が化石記録として最初に現れてから絶滅するまで、または現在に至るまで何億年も同じ姿を保持しているのである。これは生物が進化していないということの明確な証拠である。

生物の化石史は完全に、はっきりと進化論を否定している。この世の生物を全く異なる形で無から創造し、この世界を生命体に適するようにに創り上げたのは他でもない、全能の神と神の崇高な力、そして限りない知識である。

ドイツで発見された5400万年前〜3700万年前のワニの化石

最もたくさん化石が発見されている場所は?

化石は、地球上のほぼすべての地域に分散されている。一部の種類の岩石には全く化石が発見されないものもあるが、それを除けば非常にたくさんの種類の化石が発掘されている。地質学者は岩石の種類を3つの主要グループに分けている。

1. 火成岩
2. 堆積岩
3. 変成岩

世界で最古の岩はグリーンランドのものとされている。39億～38億年前のものである。

火成岩には、地球の奥深くでマグマが冷えて固まることにより形成される花崗岩や玄武岩系の岩があげられる。または、火山の噴火などにより噴出し溶け出した溶岩もこの種類に属する。堆積岩は、砂、沈泥、泥やその他の小さな粒状のものや水によって運ばれた物質が積み重なることによって構成される。変成岩は、火成岩や堆積岩が強い熱や地球深部の圧力により構造的な変化を受けたものを指す。

火成岩の層には、化石はほとんど発見されない。稀なケースには、溶けたマグマに閉じ込められた植物や生物があるが、堆積層を変成岩に変える高温や高圧状態で残ることのできる化石はほとんどない。ほぼすべての化石は堆積岩の層や堆積物から発見されている。

ほぼすべての堆積岩は、風や海水、または他の岩石の浸食などにより形成されている。石炭層など一部の層は植物や動物の遺骸で形成されているものもある。砕屑岩とは、微細な粒や粒子で形成された堆積岩のことである。砂岩や片岩などがその種類の岩にあたる。化学溶液や気化などによって運ばれた物質で溶解が発生した場合“有機的”堆積層が形成される。石灰岩や白雲石がその代表的なものである。一般的に堆積岩の層は、砕屑岩および有機層が入り混じったものである。化石は通常頁岩、片岩、砂岩、炭酸カルシウムで形成された石灰岩中に見られる。

研究者は、放射能性の鉱物の腐食から岩の年代を判断する。

化石はどのように発見され、とり出されるのか

地質学者らが化石採集のために使用する道具はいたってシンプルなものである。ハンマー、こて、さまざまな切削器具、ブラシ、ふるいなどだ。

化石は、時にやわらかい岩層の周囲が腐食することにより、表面にまで現れることがある。そのようなケースでは、化石をブラシできれいにする必要が出てくる。しかし、化石の採集は通常それほど容易なものではない。閉じ込められている岩石の内部は通常非常に固く、ごつごつした母岩を取り出すのは、非常に時間がかかる。まず、岩のどの部を削るかを決定するのが非常に重要である。岩石層自身を考慮してひびが識別される。岩石

は種類によって粉砕の仕方が異なる。例えば片岩には層があるため、そこからひびを入れることができる。一方白亜にはそのような層は存在しない。同時に、色の変化や構造の変化といったものの観察は非常に重要となる。化石が入っている場合は損傷を与えないようにしなくてはならない。

化石が岩石から取り出されたら、さらにいくつかの過程を経る。検査を実施する研究所へと運ばれるまでは、保護され守られなくてはならない。これには化学接着剤などで化石を固定する方法がある。大型の化石には石膏の型などが使用される。運搬の際に傷がつくような恐れのある化石は、ぬれた新聞紙などに包まれた上、石膏で固められる。

採集した堆積岩や石は、慎重に割られて中に入っていると見られる化石が取り出される。これらの作業は化石採取でも重要な段階である。

化石は、詳細が克明に分かるように、汚れなどを取り除く必要がある。囲まれている岩石よりも化石の方が固い場合は、汚れを取り除く作業は比較的簡単となる。しかし、化石が岩石よりもやわらかい場合は化学物質の力を借りなければならなくなる。一般に普及している母岩の汚れを取り除く方法として、酸を使うものがある。これにより、すべての化石の詳細が明らかになる。特に化石が非常にデリケートであったり、周りの岩石が化石と同様の構造であるような特定の状況では、岩石から取り出す前にX線とコンピュータスキャンなどを使って化石の構造を特定する。

移動の最中、時に化石は石膏で固めて保護しなくてはならない場合がある。写真は化石の骨を石膏で固める様子を写したものである。

酸で化石を洗浄

化石を洗浄する1つの方法は、酸を使うものである。この方法は頁岩の内部にある化石を損傷しないように洗浄するのに有効である。

1. 化石が含まれている周囲の岩を化石の一部が出現するまで酸に浸す。
2. 化石の出現した部分は洗浄され、抗酸化物質で覆われる。
3. 化石は再度酸にさらされ、何回か同じ作業が繰り返される。
4. 保護物質が露出した化石部分に塗布され、損傷から保護される。
5. 最後に、化石全体が周囲の岩から取り出される。化石は酸と保護物質でよく洗浄される。

現代まで地中深くに眠る化石の重要な機能には2つがあげられる。その両方ともに進化論の主張とは相反するものである。

1.　均衡状態：生物は地上に姿を現したときから全く姿を変えていないことを示している。最初に化石記録に表示された構造がどうあれ、絶滅するときもまた同じ構造を持ってきたはずである。形態的な(形式)変化は通常少ないものであり、特に一定の方向へ向かうものではない。

2. 突然の出現：祖先と主張されているものから変化を遂げ、段階的に出現した生物はいない。すべての生物は突然に“完全な形”で出現している。

この2つの論点の重要な点は、進化のプロセスを経ずに、進化の過渡期を通ることなく生物が創造されたという点である。生物の特徴は次第に獲得されていったのではなく、創造された時点から与えられていたのである。

ダーウィン自身は化石記録が彼の進化論を否定することを知っていたと思われるが、ダーウィニストはそれを認めることを渋っていたのである。著書『種の起源(The Origin of Species)』の一章「学説の難点」では、ダーウィンは化石記録では進化論を説明できないことを認める記述をしている。

もしも種は他の種から認知しがたい微細な暫時的変化によって生じたものであるとすれば、いたるところに無数の移行型がみられないのはなぜであろうか、ということである。なぜ種はわれわれがみるように十分明確に区別できるようになっていて、全自然が混乱におちいるようなことがないのであろうか。…ところで、この学説によれば無数の移行型が存在したはずであるのに、なぜわれわれはそれらが地殻のなかに数かぎりなく埋まっているのを発見しないのであろうか。…中間的な生活条件を呈示する中間的な地域でも、密接な連鎖をなしている中間的な諸変種が発見されないのはなぜであろうか。この難題が長いこと、私を全く当惑させてきた。(チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)『種の起源』八杉龍一訳岩波文庫)

進化の過渡期の化石が存在しないというダーウィンが提示した論拠は「現段階では進化の過渡期は発見されていないが、これから先の研究でさらに明らかになるであろう」というものであった。しかし、これは今日にはあてはまらない。現在のデータでは、化石記録は非常に豊富である。世界中の多様な地域から採取された何百万という化石標本に基づけば、約25万種についての説明がすでになされており、実に15億の種が現在の種と非常によく似通っているのである。このように化石記録が非常に豊富なのにも関わらず、進化の過渡期にある化石が全く見つからな

チャールズ・ダーウィン

5400万年～3700万年前のハチの化石

写真の最古のカタツムリの化石とされているのは、ジュラ紀(2億600万年前～1億4400万年前)のものである。この生物に属する主が最初にこの世に現われたのは、カンブリア紀(5億4300万年～4億9千万年前)だと言われている。カタツムリは何億年もの間同じ姿をしており、これは進化論の無効性を暴くものである。

すべての化石記録の生物は、完璧で何1つ傷つかない姿で出現している。例えば、ワニやリスが出現する以前に、ワニに一部が似通った不思議な生物や、一部がリスに似ている、または他の生物に似ている化石は、全く存在しない。リスは常にリスであり、ワニは常にワニであった。すべての事実は「生物は段階的に長い年月をかけて進化した」という進化論の主張は、単なる空想の産物だということを暴くものである。

いということは、新たな発掘においてもそのような過渡期の化石をこれから先にも見つけるのは不可能だということである。

進化論者が証拠として使用できるような化石記録としては、たった1つの"進化の過渡期"の化石も見つかっていないが、数え切れないほどの化石標本が進化論の無効性を立証している。これらの中で最も重要なものは"生きた化石"、つまりこの現代にもなお生きたまま残る標本である。何億年も前に異なる地質学的年代に生きていた生物の化石記録と現代に残る生きた化石には何ら違いはなく、これが神の創造の証拠となる。ダーウィニストも、この状況の前には全く無力な存在となるのである。

進化論者ナイルズ・エルドリッジ(Niles Eldredge)は、進化論が解き明かすことのできない数え切れないほどの秘密の1つである生きた化石については説明できないということを認めている。

現在生息するイチョウの枝

三畳紀(2億4800万年前～2億600万年前)の時代から、ずっと構造が同じままの植物種は数多く存在する。それらの1つはイチョウである。この写真の化石はジュラ紀(2億600万年前～1億4400万年前)のものである。

…現在生息する生物と地質学的に遠い過去の年代に化石化された祖先とを比較しても、どの部分においても全く変化が見られないようだ。生きた化石は極度な形で進化的なテーマを体言している…難問はまだ解決されていないのだ…生きた化石についての謎はまだ解き明かせないままでいるのだ。(http://www.nwcreation.net/fossilsliving.html)

ナイルズ・エルドリッジが解き明かそうとした"秘密"は、実際は完璧に明瞭な事実である。生きた化石は、種が進化したものではなく、創造によってもたらされたのだということを証明するものである。しかし、ダーウィニストは観念的な懸念の外へ追いやるようにこの事実に目を背け、あくまでも150年も前の独断的定説にしがみつこうとしているのだ。

しかし、事実はこの現代にダーウィンの時代よりもはるかに明瞭となっている。多くの人は事実が浮上していることを認め、理解しようと努めており、おとぎ話を信じ、疑問を追及しない人は少なくなってきている。事実はもはやダーウィンの時代にされていたように、横においておくことも、封じ込められたままにすることもできない。遺伝学、微生物学、古生物学、地質学、そして他の科学の学問領域においても、ダーウィンとダーウィニズムの支持者が目にしたくない事実、そして当時には想像もできなかったような事実を絶えず解き明かしている。神の創造は事実なのである。

ダーウィニストの不合理で非科学的な主張、人々を騙す詐欺行為、そして人々を誤った道に導くプロパガンダは、失望の象徴にしかすぎないのである。次世代の人々は、ダーウィニズムのおとぎ話がかつて信じられていたことに驚きを禁じえないだろう。なぜなら、科学的な研究発見では、進化は発生しておらず、神がこの世界と生きとし生けるものらを創造したという明らかな事実を示しているからである。

「天と地、そしてその間の凡てのものの主である。もしあなたがた(の信仰)が確かならば。かれの外に神はなく、生を授け死を授けられる。あなたがたの主、またあなたがたの祖先の主であられる。それなのにかれらは疑って、戯れている」(アッ・ドハーン章7〜9節)

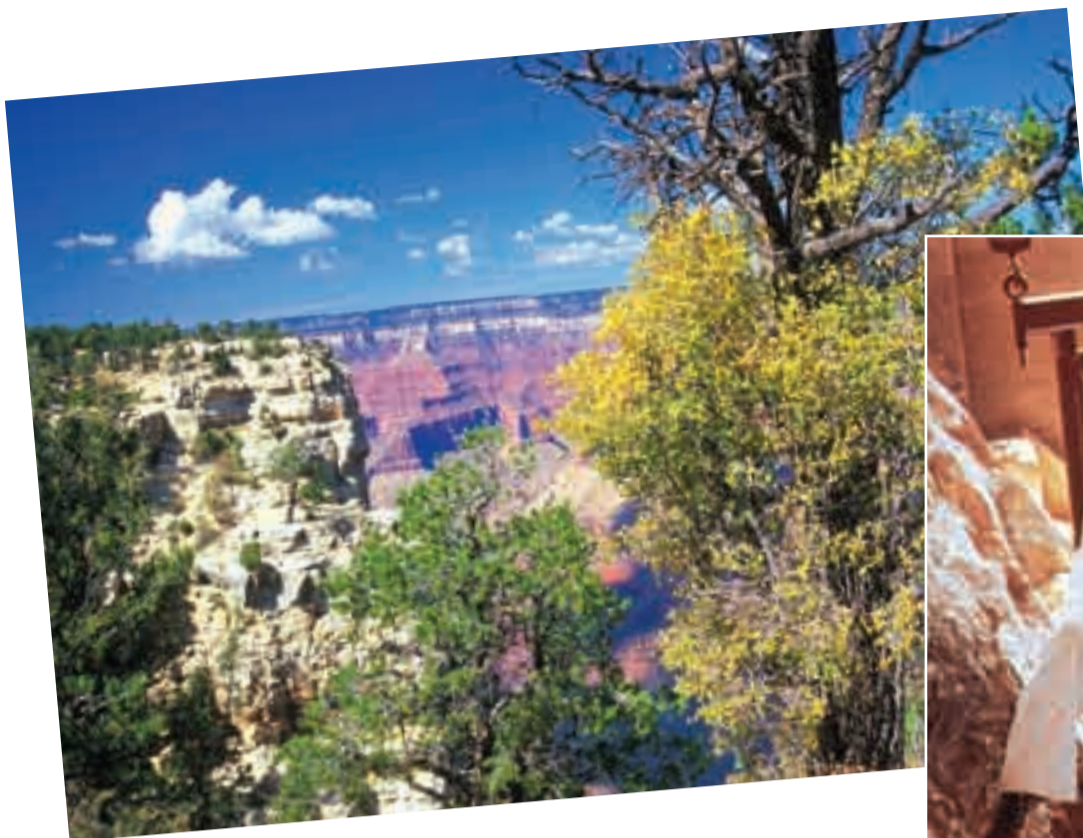
「天と地の創造と、その間に捲き散らされた生きとし生ける物は、かれの印の中にある。またかれは、御望みの時に、一斉にかれらを召集なされる権能者である」(アッ・シューラー章29節)

北米、南米
地域で発見
された化石標本

アメリカ合衆国で発見された化石標本

年代は始新世(5400万年前〜3700万年前)にさかのぼるグリーンリバーは、アメリカ合衆国で最も重要な化石層である。この地域で最初に発掘が行われたのは、1850年代のことであった。1856年、考古学者ジョーン・エバンズ博士(Dr. John Evans)は採取した魚類の化石について科学学会に告知、グリーンリバー層が初めて科学的な書物に記されることとなった。

グリーンリバーは、実際はコロラド川の支流である。グリーンリバー層自体は山様の3つの州にまたがる広大な盆地にある。その一部はコロラド北部のユインタ山に横たわっている。より広い部分はそのワイオミング州南西部に広がっている。グリーンリバー層の岩石構造は異なる岩層から構成されている。この内容は地下深くになるにつれて変化し、化石の分布もまた変化する。グリーンリバーの発掘では、今日まで60種類もの脊椎動物種に属する化石が発見され、無脊椎動物にかけては数えきれないほどの化石が発見されている。オハイオ州は化石層で有名な州である。5億1千年前に、オハイオ州はエクアドルの南に横たわっていたとする地質学的研究もある。大陸が移動するに従い北米が現在の場所に動き、オハイオは幾度となく水中に没していたようである。これは、なぜ古生代(5億4300万年前〜2億5100万年前)にさかのぼる大量の化石がオハイオ州で発見されているかという謎を説明するものである。この他の豊富な化石層はユタ州にある。この州では非常にさまざまな種類の化石が発掘されており、そのバラエティは無脊椎動物か

ワイオミング州のグリーンリバーで発見された魚類の化石

左はおよそ2億5千万年前のカイバブ石灰岩と、カイバブおよびココニノ台地の岩層表面。この層で発見される化石には、サンゴ、軟体動物、ウミユリ、ぜん虫、魚の歯などがある。
化石の運搬の様子(下)。

コロラド州、キャニオンランド国立公園

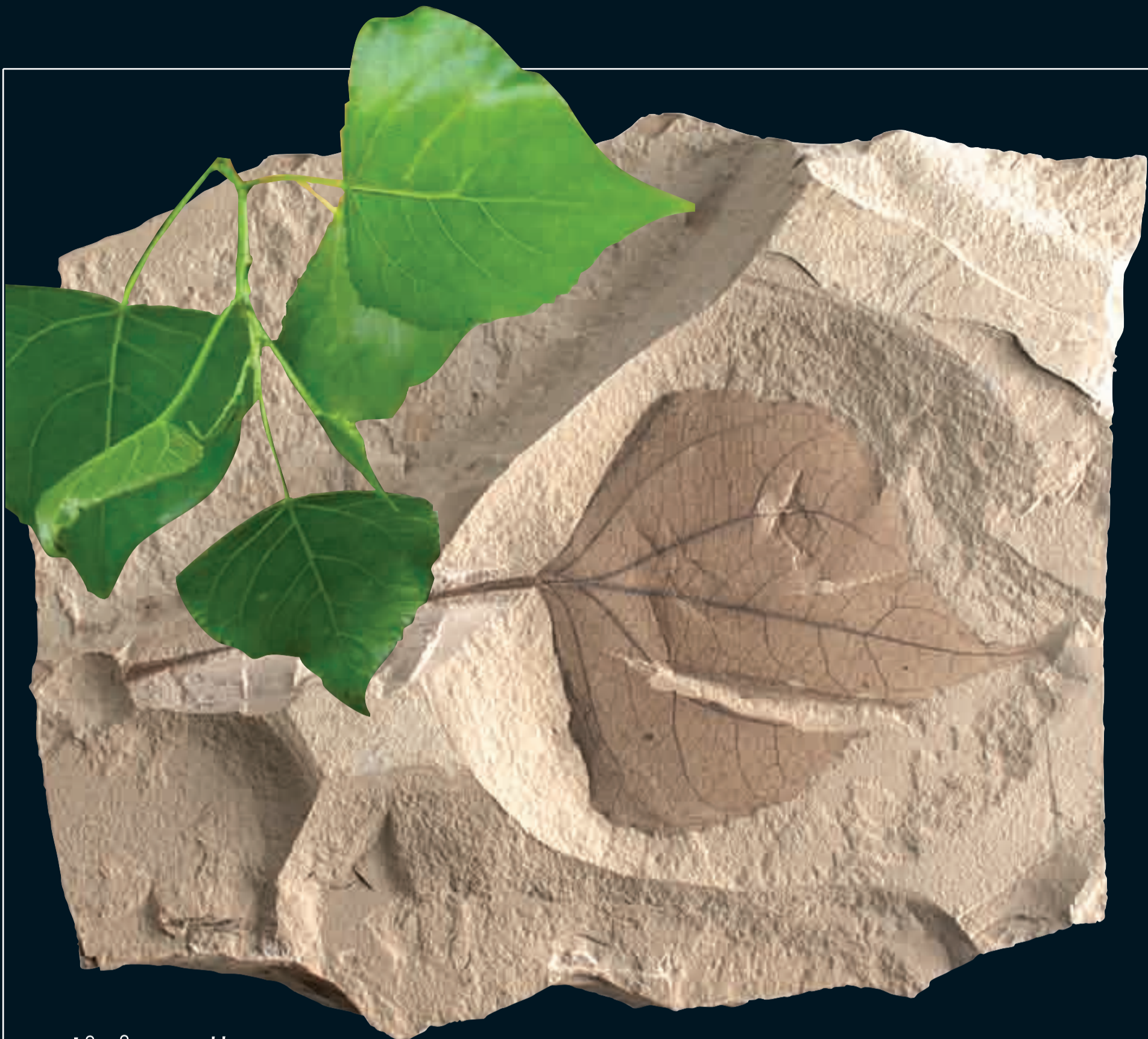
ら多様な海洋生物、爬虫類に哺乳類まで非常に多彩なものである。極微生物の化石もまた最近ユインタ山で発見されており、これによりユタ州の化石層はカンブリア紀にまでさかのぼることが分かっている。

世界の他の地域で発見された化石の例から、マス、エイ、トンボ、ハエ、クモ、カニ、カメ、その他の何億年前の類似生物とすべては現代に生息する生物の間には全く違いが見られない。生物は何億年という時の隔たりにも、その姿を変えていないのである。言い換えれば、進化をしていないということになる。化石は進化論を否定するものであり、また神の創造をしっかりと確認するものである。

ワイオミング州の化石発掘現場

サヨリ

年代：5400万年～3700万年前
寸法：全長39センチメートル（15.3インチ）
母岩：29センチメートル（11インチ） X 40センチメートル（15インチ）
地域：ワイオミング州リンカーン郡
層：グリーンリバー層
時代：始新世

数多く発見されているサヨリの化石。これは現代にも未だにみられるサヨリが何百万年前からも変化していないことを証拠付けている。このサヨリは、5400万年～3700万年前のものとされており、これらは今日海洋でみられるものと何ら変わりない。この完全な類似性は、ダーウィニストにとって解釈しがたい状況であり、この事実もまた、創造説を支持する。

ポプラの葉

年代：5400万年～3700万年前
時代：始新世
地域：米国コロラド州グリーンリバー層

ダーウィニストは、“偶然”という概念を用いて植物がどのように地上に姿を現したかを説明しようとしている。あらゆる種類の植物が時間の流れの中で偶然に発生したと主張する。単細胞植物も偶然により出現したというのだ。
すべての種類の植物独自の特徴であるにおい、構造、色ですら偶然の所産だとしている。進化論者たちは、この多様化はすべて偶然によってもたらされたものなのだと主張することで海草がイチゴやポプラの木、バラへと変化したことを説明しようとやっきになっている。しかしこの空想を支持する科学的な証拠は未だに発見されていない。
これに対して、進化論者の主張を覆すような無数の科学的データと研究結果が存在する。数え切れないほどの実例が化石のデータという形で発見されている。データによれば、何千もの種類の生命体が何百万年という年代にかけて今でも全く古代から変わらない姿で生き残っている。このおよそ5千万年前のものとされるポプラの葉の化石は、生き物が進化してきたのではなく、創造されたのだということを物語っている。

アカエイ

年代：5400万年前～3700万年前
寸法：8センチメートル(3.2インチ) X 3.8センチメートル(1.5インチ)、母岩：12.7センチメートル(5インチ) X 10センチメートル(4インチ)
地域：ワイオミング州 リンカーン郡
時代：始新世

エイは軟骨魚類である。脅威に遭遇した際、自身を尾部の毒で防御する。目は平面状の体幹部上部に位置しており、口はその下にある。サメと同じく、匂いと電気感覚により餌を見つける。一般的には、海底に沈んで生活しており、目と尾のみに感覚がある。
化石からは、魚類は進化したような形跡は認められない。5千万年前に生息していたアカエイは現在のものと何ら変わりはない。古代から生息しているにも関わらず、アカエイの構造に変化は見られない。進化が実際に起こっているとすれば、アカエイはいくつかの進化の段階を経なくてはならず、化石にもその連続的段階がはっきりと現れなくてはならないはずである。しかし、各化石は現在生息するものと過去のものとが同じであることを示している。これらはすべて進化論者の主張を否定する。

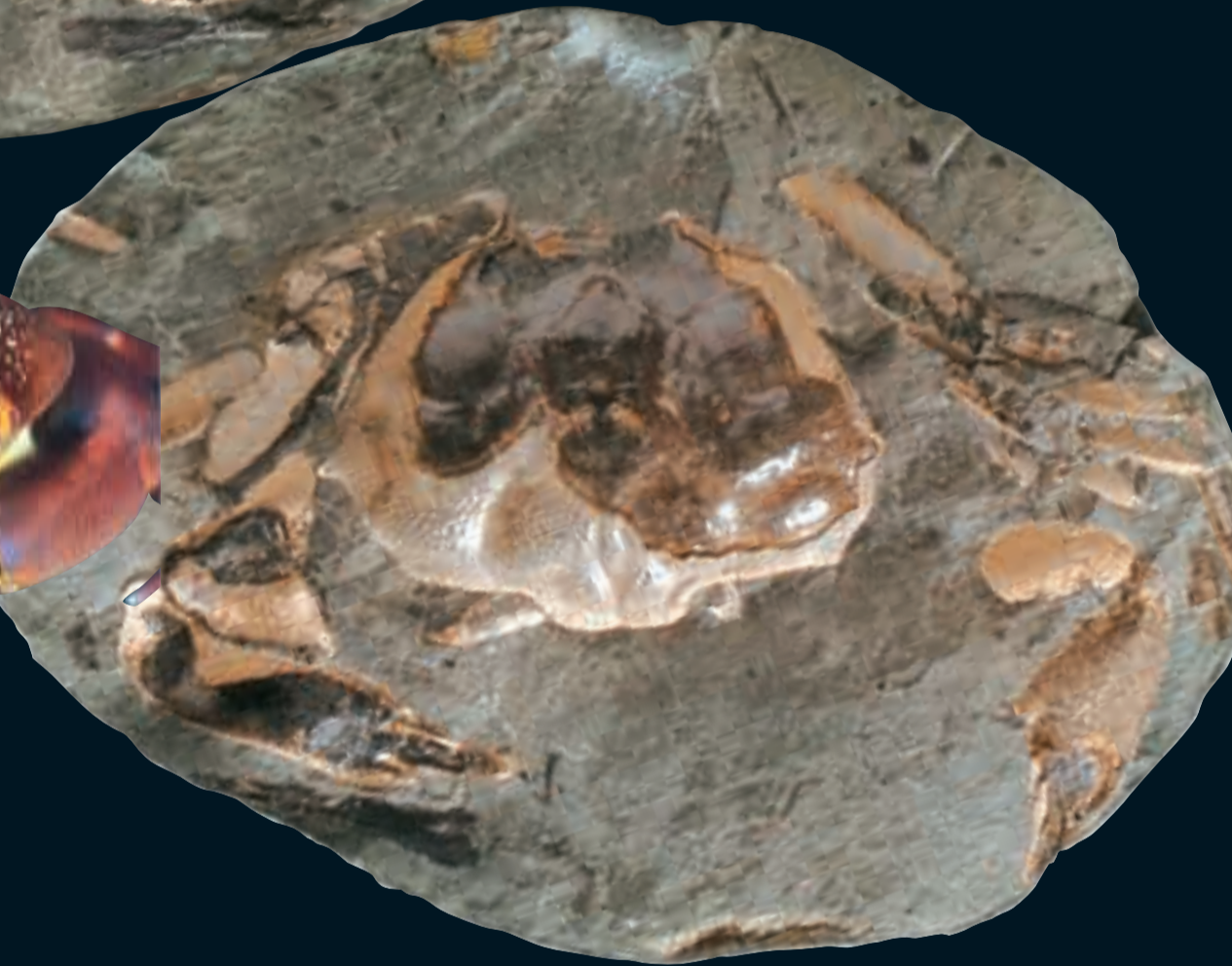
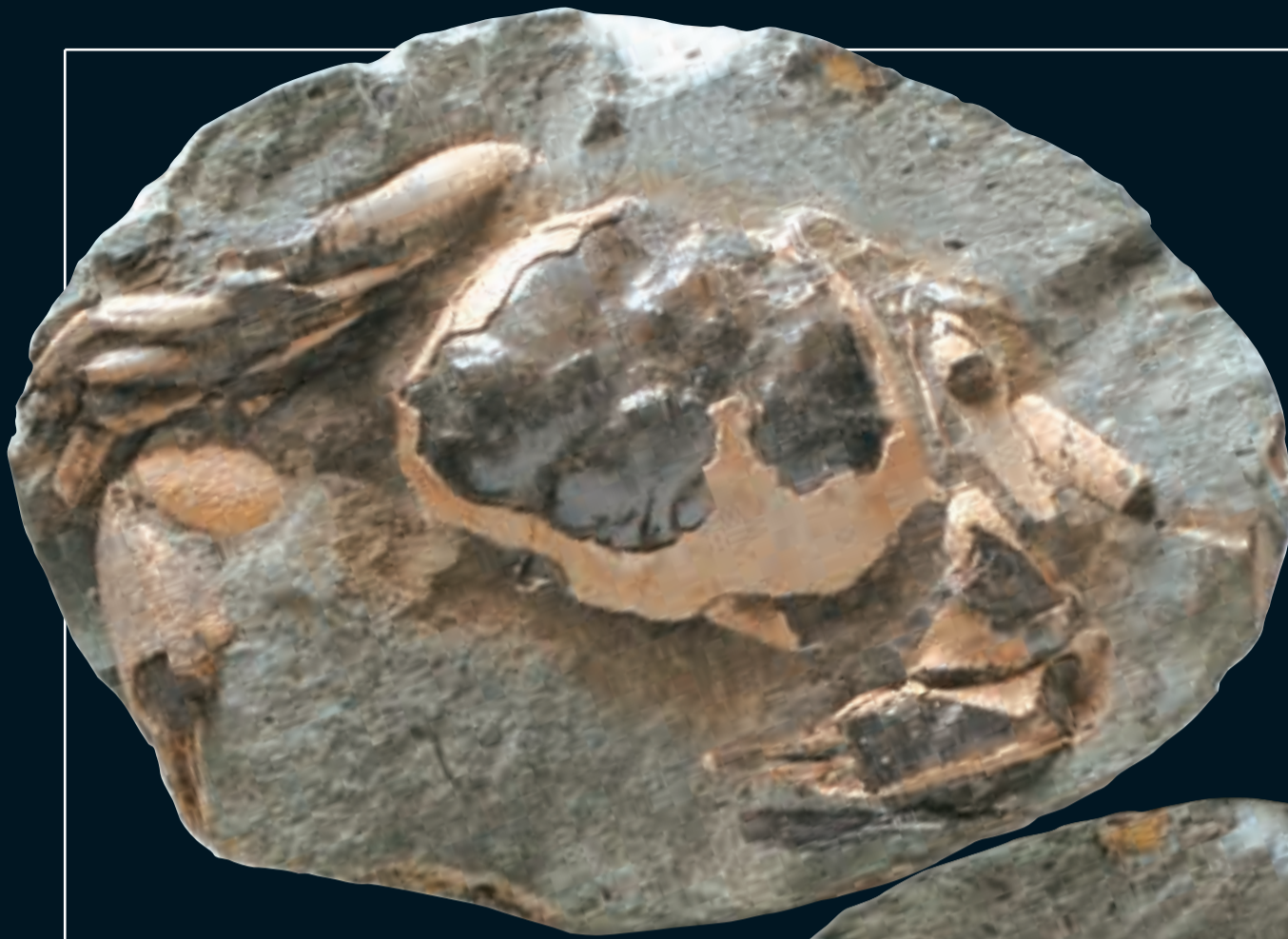
イワシ

年代：5400～3700万年前
地域：ワイオミング州、グリーンリバー層
時代：始新世

進化論が仮に真実だとしたら、発掘された化石のイワシと、現在に生きるイワシとの間には非常に大きな違いが生じることになる。いわゆる進化というもののプロセスがイワシの化石に見られるはずだ。しかしながら、そのような痕跡はまったく発見されていない。また、そのようなものはこれから先も発見されるはずがない。なぜなら、進化論者が信じているものと反対に、生物は偶然による所産などではないからである。全知全能¥lochの神によって、この生物は創造されたのである。

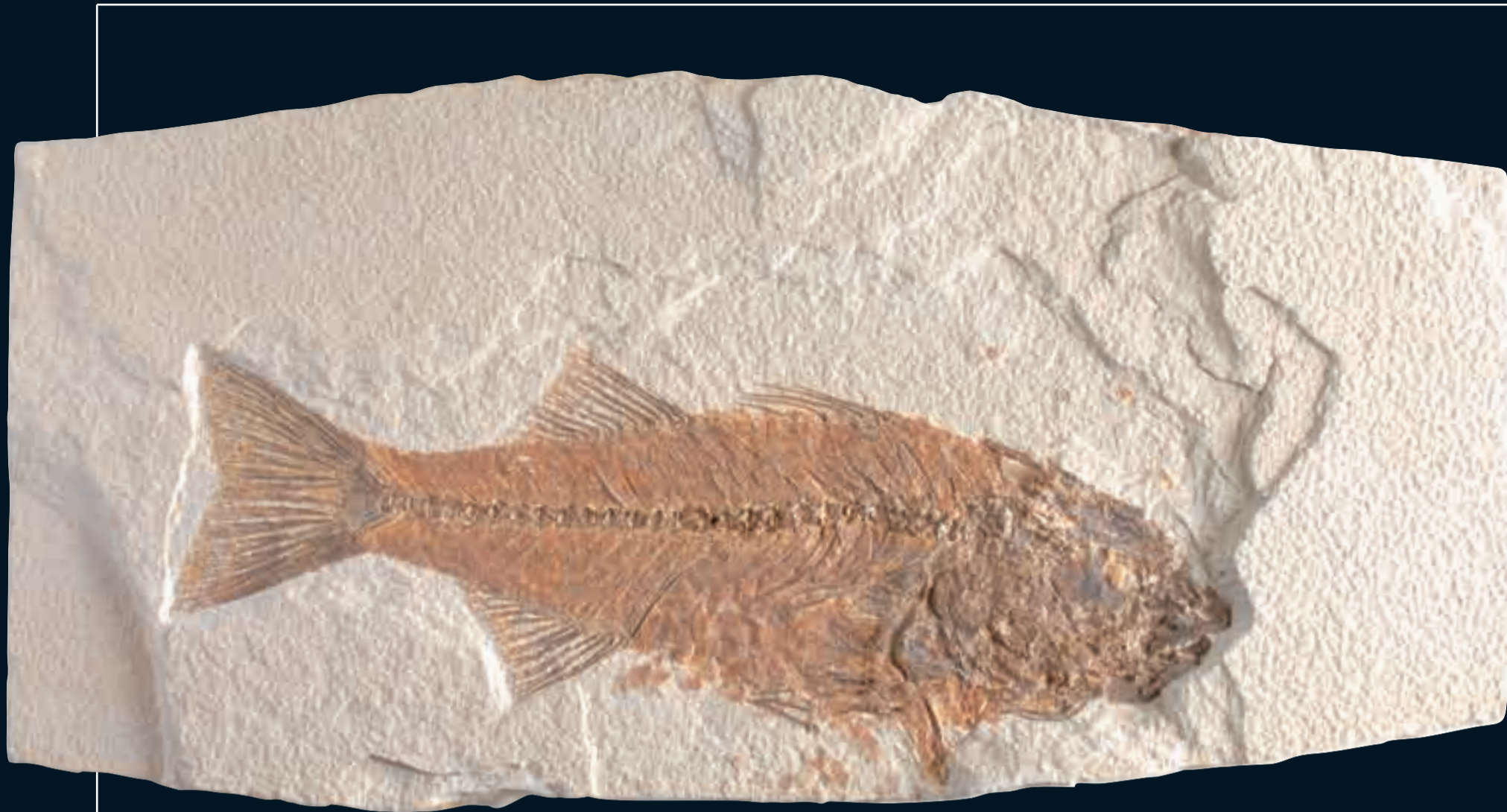
ニシン

年代：5400万年前〜3700万年前
寸法：9.3センチメートル(3.7インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

“生きた化石”は種は進化したのではなく、創造によるものであることを明らかにしている。種の現在の身体構造は進化論者が主張する偶然によるものではない。すべて全能の神によって創造されたものであり、創造された時とその姿は何ら変わるものではない。
ニシンの化石もまた、このことを物語っている。ニシンは何百万年もの間同じ姿のままであり、最初に創造された時の構造を保持している。他の化石と同様、このニシンの化石もまた、進化論が虚言だということをはっきりと示している。

カニ

年代：5千万年前
地域：オレゴン
時代：始新世

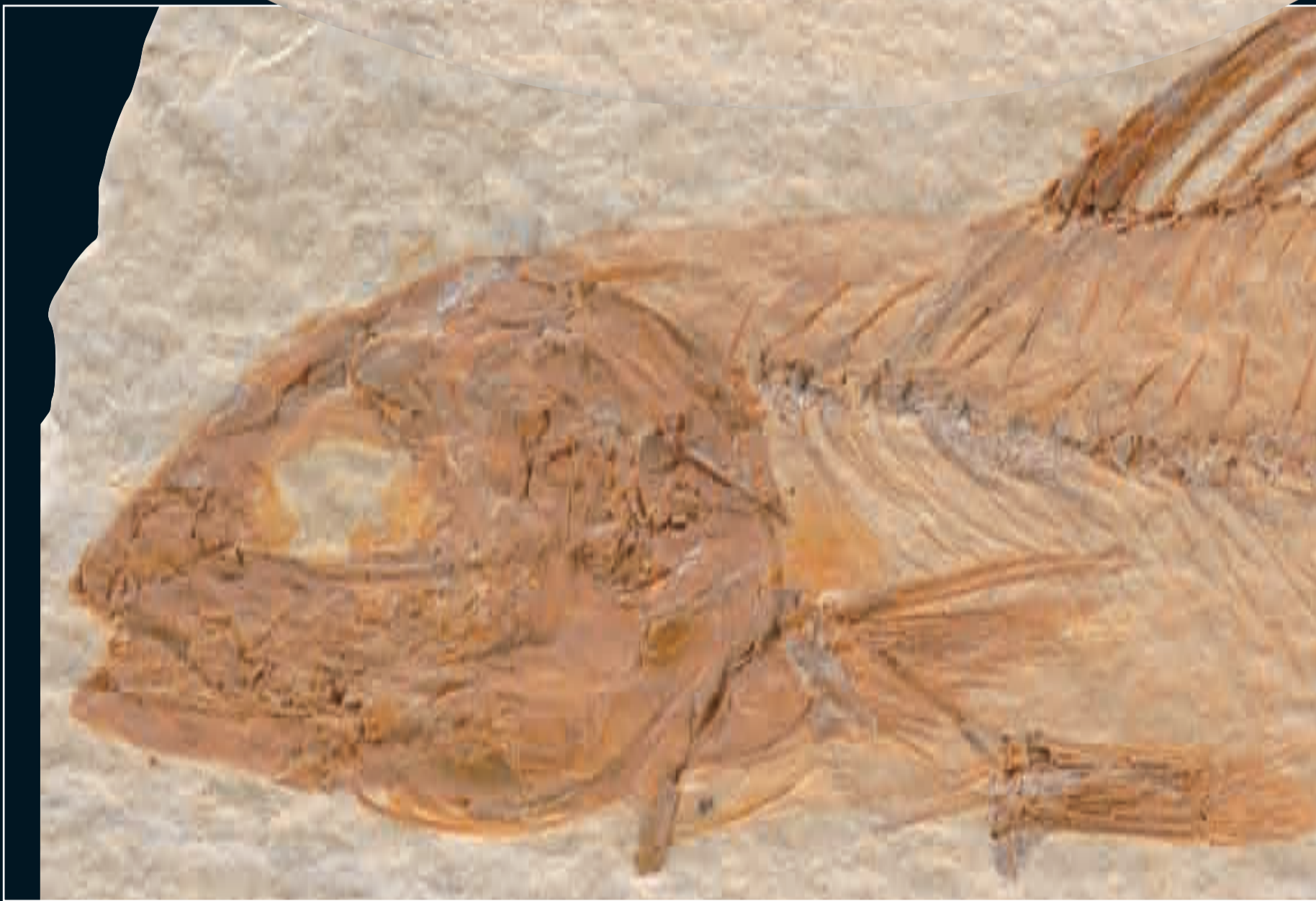
化石の記録によって分かる衝撃の事実とは、地質年代を超えて生物は全くその姿を変えていないということである。言い換えれば、数百万年、いや、数億年もの間、生物は化石に記録された古代からその姿を変えていないのである。これは、生物が進化していないことの証拠となる。
カニは5千万年前からその姿を変えておらず、これも数ある証拠のうちの1つと言える。現在生息するカニと数千万年前のカニは全く同じなのである。

スズキ

年代：5400万年前〜3700万年前
寸法：30.4センチメートル(12インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

スズキは異なる環境や水温にも適応できる淡水魚の一種である。
生物が1つの形から次第に進化したというダーウィニストの主張は、またもやスズキの化石によって反論されることになる。現在生息するスズキは、5千万年前のものと同じ構造を持っている。

ヌルデの葉

年代：5400万年前～3700万年前
寸法：25ミリメートル(0.9インチ)
地域：ユタ州ユインタ郡
層：グリーンリバー層
時代：始新世

他の生物と同様、植物種もまた完全に形成した構造体で地上に現れている。すなわち、形成された際の特徴をそのまま受け継いでいるということだ。地質岩層における何百万の植物の化石がこの点を証明している。進化論者は半分しか進化していないマツや半分の姿を持つヤナギ、半分だけ進化した形のノリ、半分だけのラン、半分だけのカーネーションなどを提示することができない。その一方で、何千万種の化石で、ヤナギはヤナギであり、マツは常にマツであり、エゾマツは常にエゾマツであり、プラタナスは常にプラタナスであり続けてきたという事実を提示している。これらの化石は、すべて何百万年前という時代をさかのぼるものであり、進化論を否定するものである。このヌルデの化石は、5400万年前～3700万年前のものであり、これもまた、ダーウィンの欺瞞を暴露するものである。

サケスズキ

年代：5400万年前〜3700万年前
寸法：10.6センチメートル(4.2インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

サケスズキは、一般的に湖に生息している。ある種の生物が現在も継続して、数千万年前と同じ姿で完全な機能を持って生きているということは、ダーウィンによる“斬新的な進化”を否定する協力な証拠となる。地球上にこのような例は少なくなく、何万例にものぼっていることは1つの事実である。このサケスズキの化石もこの数多くの証拠のうちの1つである。

2匹のニシン

年代：5400万年前〜3700万年前
寸法：母岩：34.2センチメートル(13.5インチ) X 43センチメートル(17インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

他の生物と同様、ニシンも何百万年前から変わっていない。5400万年前に生息していたニシンの構造と現在のニシンの構造は全く同じものである。これにより、生物が漸次的に1つの種から別の種へと進化してきたという進化論の主張は覆される。写真は、2匹のニシンが横に並んで石化しているものである。姿を詳細に示すこの化石は、生物が進化によるものでなく、創造によるものであるということを示す。

三葉虫

年代：3億8千万年前
寸法：60ミリメートル(2.3インチ)
地域：オハイオ州ルーカス郡シルバニア
層：珪質頁岩層
時代：デボン紀

三葉虫はカンブリア紀に生息していた重要な生物の1つである。世界中にその生息の足跡を残している。三葉虫の素晴らしい機能の1つは複眼である。たくさんのレンズが集まって1つのユニットを構成している。昆虫に見られる六辺形の"蜂の巣"構造である。1つ1つのユニットは各自レンズの役割を果たしており、各レンズは別々の画像を知覚し、脳内で全体像を作り出す構造となっている。
研究では、一部の種類の三葉虫の目は、3千個以上のレンズで出来ていることが分かっている。ということは、この甲殻類生物は一度に3千画像以上を処理していることとなる。言い換えれば、5億3千万年前の生物は、非常に複雑な脳と目を持っていたことになり、このような完全な機能は進化によってもたらされたものとは考えられない。

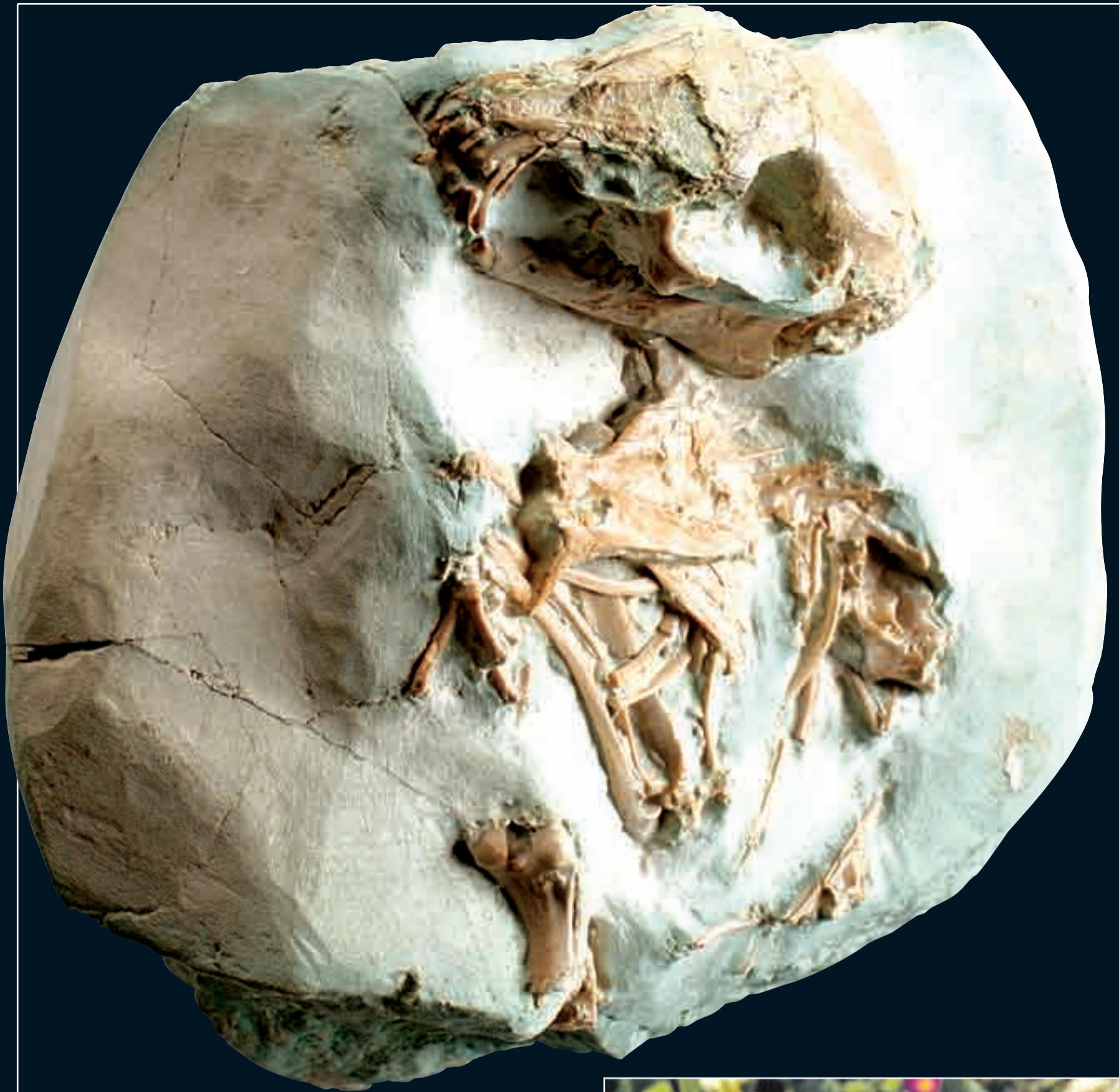
ニシン

年代：5400万年前～3700万年前
寸法：母岩：31センチメートル(12.5インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

写真は、突然の事象によって数が減ったニシンが化石となったものである。化石の尾とひれには、全く損傷がない。眼窩と骨格もまた、進化がどの地質年代部分でも発生していないことを示している。

ヤスデ

年代：3億年前
寸法：50ミリメートル(1.9インチ)；母岩：58ミリメートル(2.2インチ) X 33ミリメートル(1.2インチ)
地域：イリノイ州、モリス(マゾン川)
層：フランシス・クリーク頁岩
時代：ペンシルヴァニアン

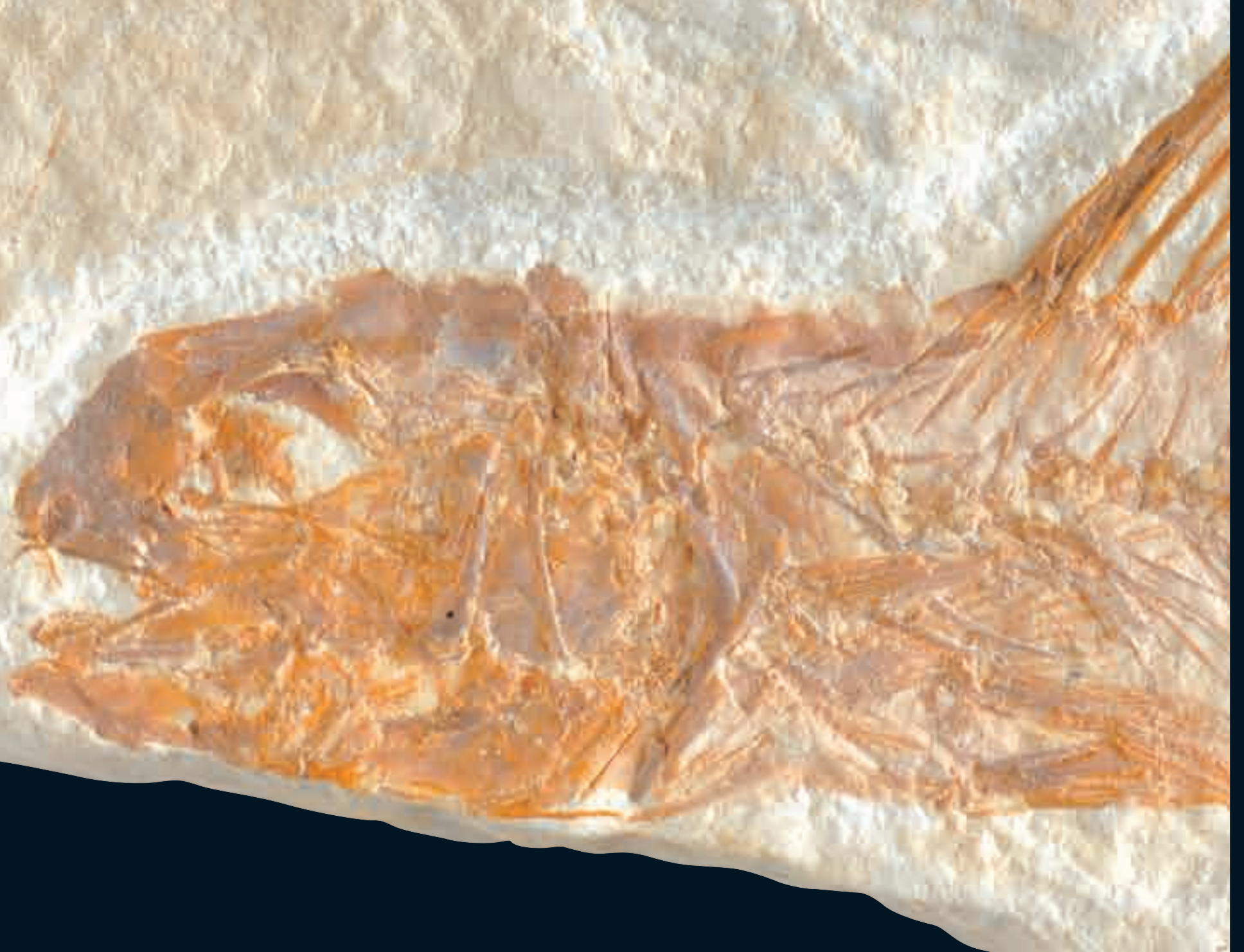
写真は、3億年前のヤスデの化石である。この2つの3億年前のヤスデは、他の生物と同じように、今日のヤスデと全く同じ姿をしている。ヤスデもまた、進化することはなく、創造によってもたらされたものであることが分かる。

ウサギの幼体

年代：3千万年前
地域:ワイオミング州、ラスク
層：ホワイトリバー層
時代：漸進世

現在の生物と全く同じ姿を持つ3千万年前の化石は、進化論を否定するものである。化石の発見によって、ウサギは古代からずっとウサギであったことが分かる。

サケスズキ

年代：5千万年前
寸法：65ミリメートル(2.5インチ)体長；母岩：90ミリメートル(3.5インチ) X 45ミリメートル(1.7インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー、化石湖
層：グリーンリバー層
時代：始新世

サケスズキにはたくさんの種類がある。ほとんどすべては化石で発見されている。これは、何百万年前から同じ姿でおり、進化していないことを示すものである。

ウニ

年代：2億9500万年前
寸法：母岩：110ミリメートル X 163ミリメートル（4.3インチ X 6.4インチ）
地域：テキサス州ブラウン郡
層：ウィンチェル層
時代：石炭紀

ペンシルヴァニアンのウニは世界中の海で見られる無脊椎動物である。3億年前にその年代をさかのぼるウニの化石は、この複雑な構造を持つ無脊椎動物が何億年も前から同じ姿でいることを証明している。この長い期間、全く構造的には変化が見られない。進化途中の段階を経たという証拠もない。
これらは進化のプロセスが存在しなかったことを証明するものであるため、これらの化石の前にはダーウィニストは絶望的となる。

イチジク

年代：5千万年前
寸法：葉の全長15センチメートル(6インチ) X 15センチメートル(6インチ)左葉から茎の末端まで；母岩：20.3センチメートル(8インチ) X 22.8センチメートル(9インチ)
地域：コロラド州、レンジリー、ダグラスパス
時代：始新世

地上に生息する植物の化石史上と構造機能を調べると、進化論の主張とは相容れない事実に遭遇する。ほとんどの生物学の書籍に登場する植物には、いわゆる進化のプロセスを確認する化石の記録は存在しない。現在の種のほとんどは化石としてその姿を記録されているが、ある1つの種か別の種へと変貌を遂げたことを証明する特徴は認められない。すべては別個の種類であり、そもそもの形態は別個のものとして形成され、主張されるような変態のいかなる関連も認められない。進化論者の古生物学者オルソン(E. C. Olson)は、多くの植物群は祖先を持たず突然出現していることを認めている。(E. C. Olson, The Evolution of Life, New York：The New American Library, 1965 p. 9)
写真の5千万年前のイチジクの葉の化石もまた、この事実を裏付けるものである。

ハタハタ

年代：5400万年前～3700万年前
地域：ワイオミング州リンカーン郡
層：グリーンリバー層
時代：始新世

写真のハタハタは5400万年前～3700万年前のものであり、この期間から何ら変化していない。この化石は現在海に生息するハタハタと全く同じものであり、進化論を否定する。

ニシン

年代：5500万年前
寸法：母岩：35センチメートル(13.7インチ) X 23センチメートル(9インチ)
地域：ワイオミング州
層：グリーンリバー層
時代：始新世

化石動物は古代に生きたものと何ら変わるところはない。種は何百万年という時を経ても全く進化していないことを示す証拠となる。写真の5500万年前のニシンは、このような化石動物の1つである。

イチョウ

年代：6500万年〜5400万年前
寸法：12センチメートル(4.8インチ)
地域：ノースダコタ州アルモント
層：センチネル・ビュート層
時代：暁新世

化石記録の植物は、現代に生息する植物の機能と同じものを備えている。これは、他の生物と同じく、植物も創造により発生したことを示す。
写真の6500万年前のイチョウの葉は、イチョウが全く進化していないことを証明する。葉の筋のだいたいの線や葉脈の構造などが化石化されている。この12 cmの化石は、イチョウが何百万年も同じ形でい続けているのを示す。現在のイチョウと古代に生息していたイチョウとでは何ら変わりは見られない。

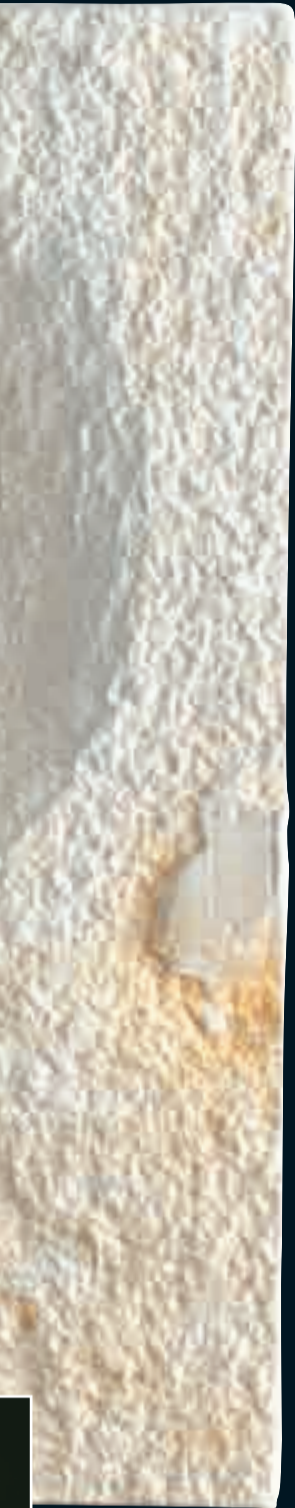
ニシン

年代：5500万年前
寸法：12センチメートル(4.8インチ)
地域：ワイオミング州
層：グリーンリバー層
時代：始新世

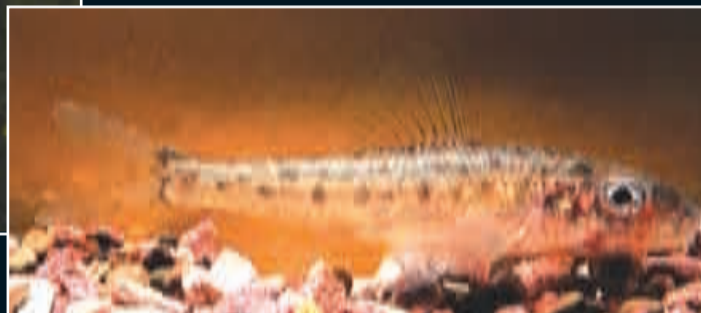
ダーウィニストは認めたくないのだが、化石記録によって示されている事実は証拠となる。世界中から集められた何百万の化石は、生物が進化したものではなく、創造されたものであることを示している。その一例が写真のニシンである。何百万年も同じ姿をし続けるニシンこそ、進化論の欺瞞を示すものである。

サンフィッシュ

年代：5400万年前～3700万年前
寸法：17.2センチメートル(6.8インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

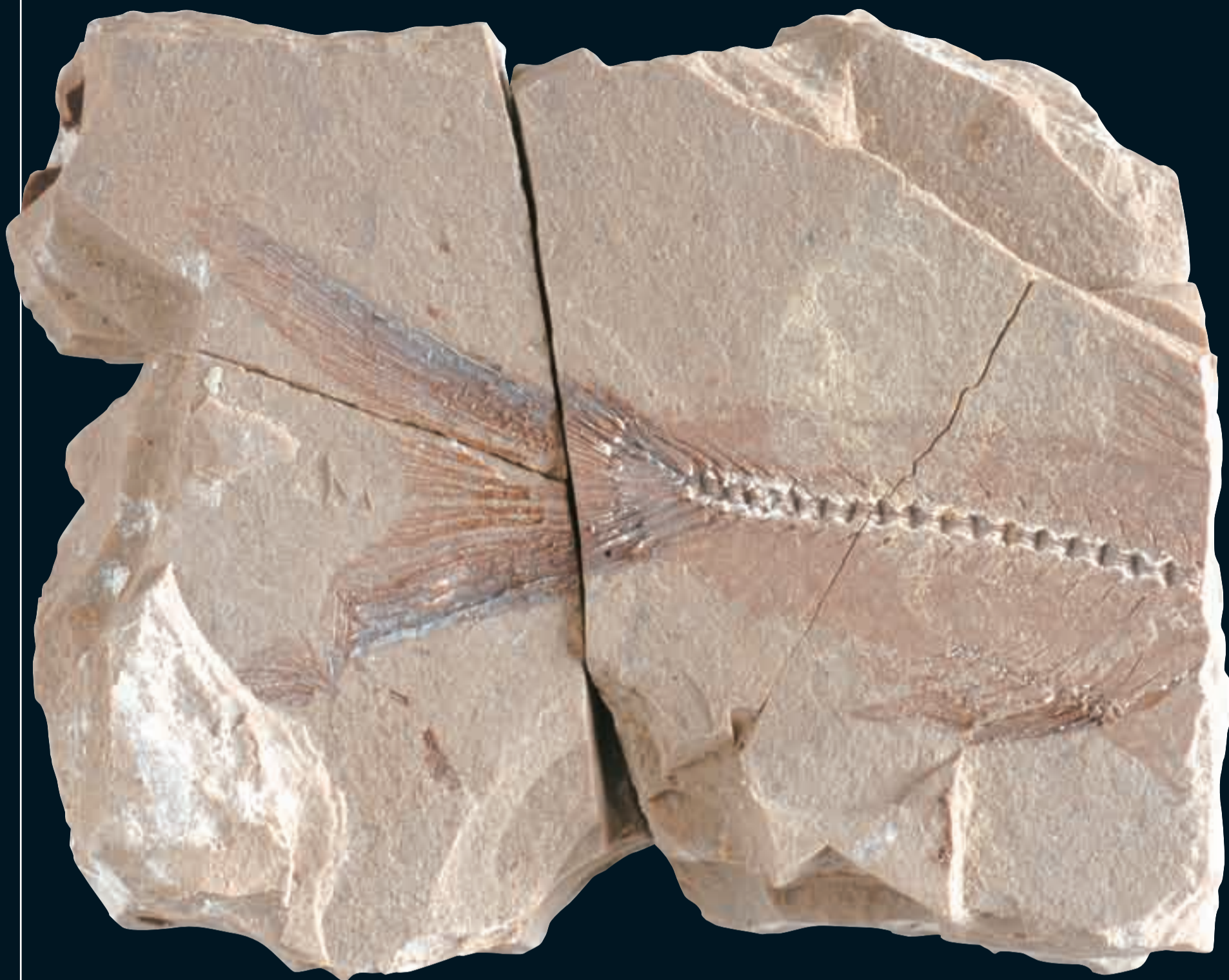
現在、海にはサンフィッシュ科の魚が多く生息している。この写真の化石は、サンフィッシュが進化していないことを示すものである。何百万年もの間、サンフィッシュは生理学的には全く同じままであり、5500万年前のサンフィッシュの外観と構造は現代のものと全く同じである。

ヤツメウナギ

年代：3億年前
寸法：一対の小結節幅43ミリメートル(1.6インチ)、73ミリメートル(2.8インチ) X 48ミリメートル(1.8インチ)
地域：イリノイ州ブレードウッド、フランシス・クリーク頁岩ピット 11

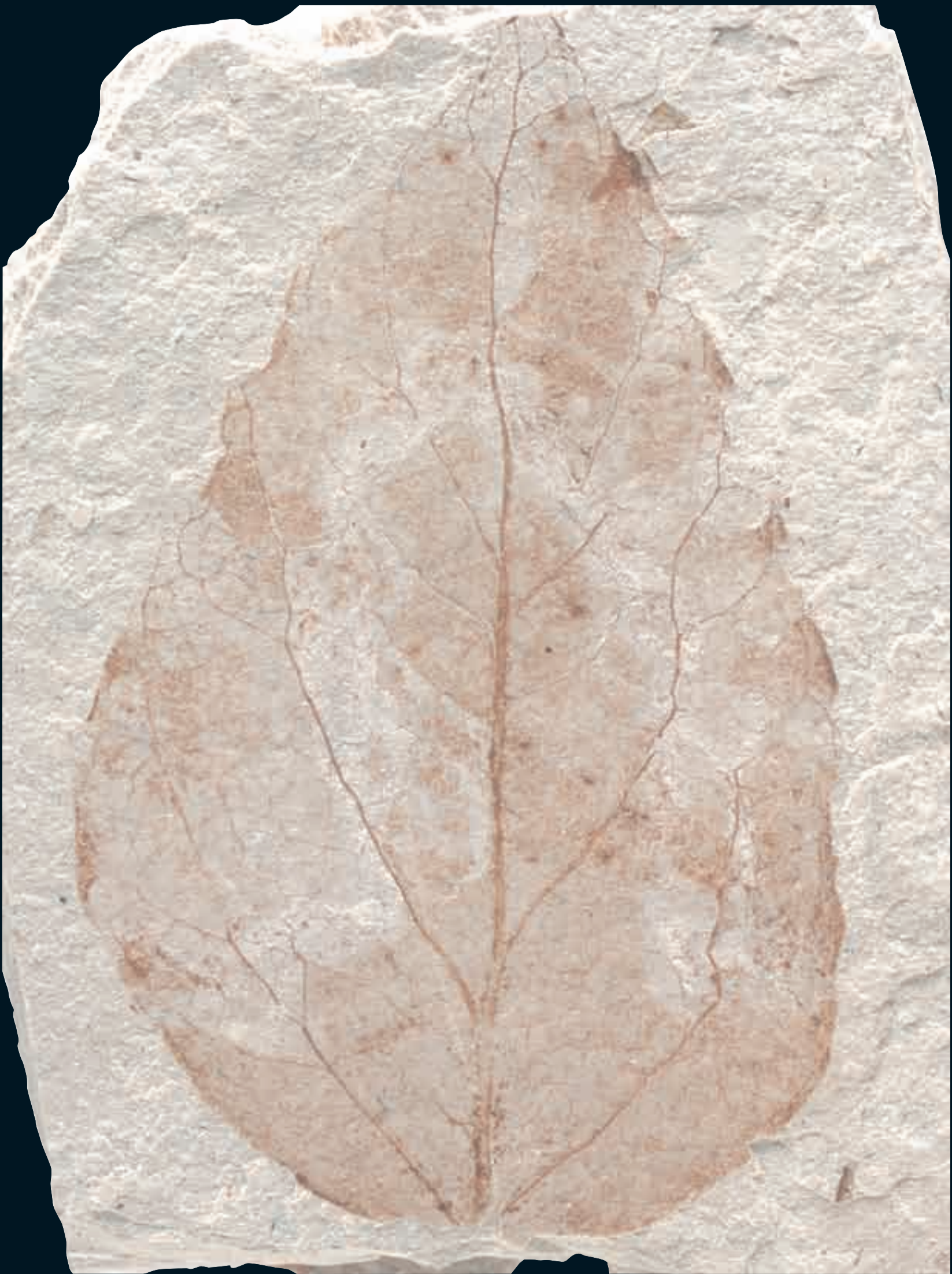
ブレードウッドの炭鉱は化石の宝庫である。写真のヤツメウナギは無顎類に属する種である。一般的には浅瀬に生息しており、一部の種類は海洋を遠く旅する。
この化石はヤツメウナギがおよそ3億年前から全く変わっていないことを示す証拠である。膨大な時間の隔たりはあれど、今日の種と何ら変わるものではない。数億年前のものと今日生息するものとの間に違いは全く存在しない。

サケスズキ

年代：5千万年前
寸法：9.4センチメートル(3.7インチ)；母岩：17.5センチメートル(6.8インチ) X 12.3センチメートル(4.8インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー化石湖
層：グリーンリバー層
時代：始新世

進化論者は、魚はピカイアのような無脊椎動物が進化したものであり、両生類と魚類は始祖魚と呼ばれているものが進化したものだと主張している。爬虫類は両生類から進化し、鳥と哺乳類は爬虫類から進化し、最後に人間と類人猿は1つの共通の祖先から進化したと主張している。この主張を証明するには、これらの過渡的な“失われたつながり”をもつ化石を提示しなくてはならないが、前述したように、このような空想上の生き物の痕跡は全く見つかっていない。

言い換えれば、何百何千という化石は進化のプロセスが発生していなかったことを示すものである。これらの化石は、魚は常に魚であり、鳥は常に鳥であり、爬虫類は常に爬虫類であり、哺乳類は常に哺乳類であり、人間は常に人間だったことを証明するものである。5千万年前のサケスズキの化石の写真は、生物が進化したのではなく、創造によってもたらされたのだということを示すものである。

マスの尾

年代：1500万年前
地域：スチュワート・スプリングス植物群 ネバダ州スチュワート渓谷
時代：中新世

化石によっては生きていたときの体のほんの一部しか保存されていないものもある。写真は1500万年前のマスの尾である。この写真で分かるように、5千万年前のものと1500万年前のもの、そして今日生息するものとの間に何ら変わりは見られない。

ポプラ

年代：1500万年前
地域：スチュワート・スプリングス植物群
ネバダ州スチュワート渓谷
時代：中新世

ポプラはヤナギ科(Salicaceae)の植物であり、何万年もその姿を変えることはない。初期のものと現在のものは器官的に構造的にも何ら違いは見られない。この1500万年前のポプラの葉の化石は、これを証明するものである。

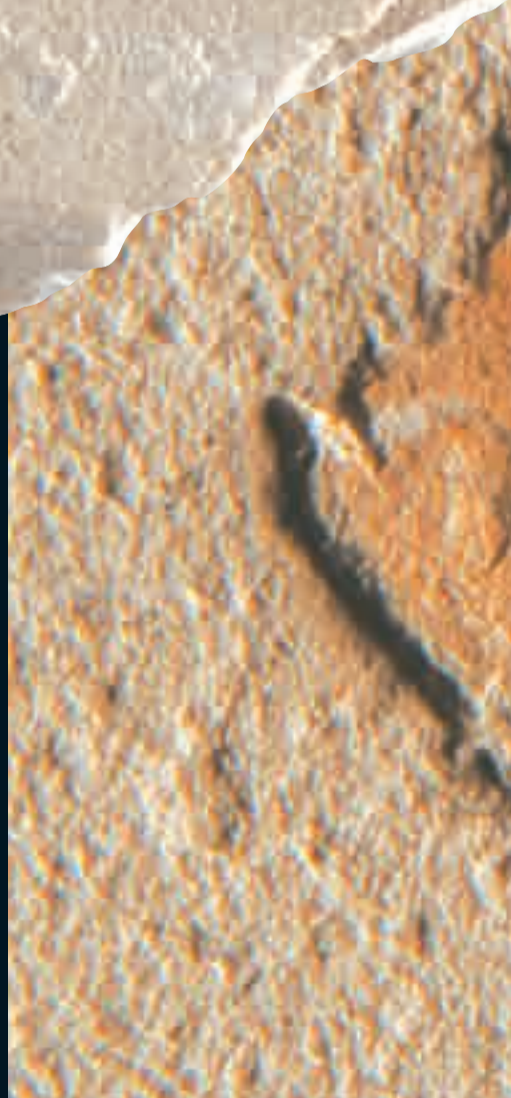
ガガンボ

時代：新生代、 始新世
年代：4800万年前～3700万年前
地域：アメリカ合衆国

他の種と同じようにガガンボが生息する時代を超えてみられる均衡状態は、進化論が間違いであったことを証明するものである。進化論は19世紀、科学的には原始的な状況で提唱されたため周囲の無知によってかろうじて受け入れられたものの、20世紀、21世紀の科学の前には崩壊している。

トウヒ

年代：1500万年前
地域：スチュワート・スプリングス植物群
ネバダ州スチュワート渓谷
時代：中新世

「トウヒ」は35種類もの異なる種に与えられた一般名であり、緑葉植物のため一年中葉は緑のままである。化石記録では、何千万年前から同じ姿をとどめており、進化した形跡のないことが示されている。写真で見られるトウヒの種子の化石はその時代を1500万年前までさかのぼる。ここに示されているように、何千万年経っても、トウヒはトウヒのまま変わっていないことが伺える。1500万年前に生息していたトウヒと現在のものとの間に違いは全く見られない。

ハダカイワシ

年代：2300万年～500万年前
寸法：3.8センチメートル(1.5インチ)
地域：アメリカ合衆国、カリフォルニア州
層：プエンテ層
時代：中新世

ハダカイワシは海底に生息し体に発光器を持っている。通常発光器は腹部についている。光の届かない深海に棲むため、発光器で周囲を照らすとともに、敵を驚かせるようにも機能している。何前万年前の古代にも光を発するという複雑な身体構造は非常に進歩したものであり、進化論者には説明できるものではない。

マス

ポンデローサマツ
年代：1500万年前
地域：スチュワート・スプリングス植物群
ネバダ州スチュワート渓谷
層：グリーンリバー層
時代：中新世

写真の松の葉は1500万年前のものである。1500万年前の松の葉と現在のものは何ら変わりがない。何千万年の時を経ても尚同じ姿をとどめているということは、ここでも、進化が行われなかったことを証明している。

スズキ

年代：5400万年前～3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー化石湖
層：グリーンリバー層
時代：始新世

進化論者の主張によれば、魚類の祖先は背骨のない無脊椎動物であるという。しかし、骨を持たない脊椎動物の祖先がどのようにして背骨を発達させたのかという問いに答えてはいない。なぜなら、これらの生物が大きな変化を迎える場合、体内に骨格が現れたときに体を包む殻は消えなくてはならないからだ。このような変態においては、2つの組織体の間に必ず過渡期の形が存在しなくてはならない。しかし、進化論者は脊椎動物と無脊椎動物の過渡期の存在を証明する化石は1つとして見つけていない。
言い換えれば、何百万の化石が魚類は常に魚類としてとどまっていたことを示している。この5400万年～3700万年前のスズキの化石もその1つである。

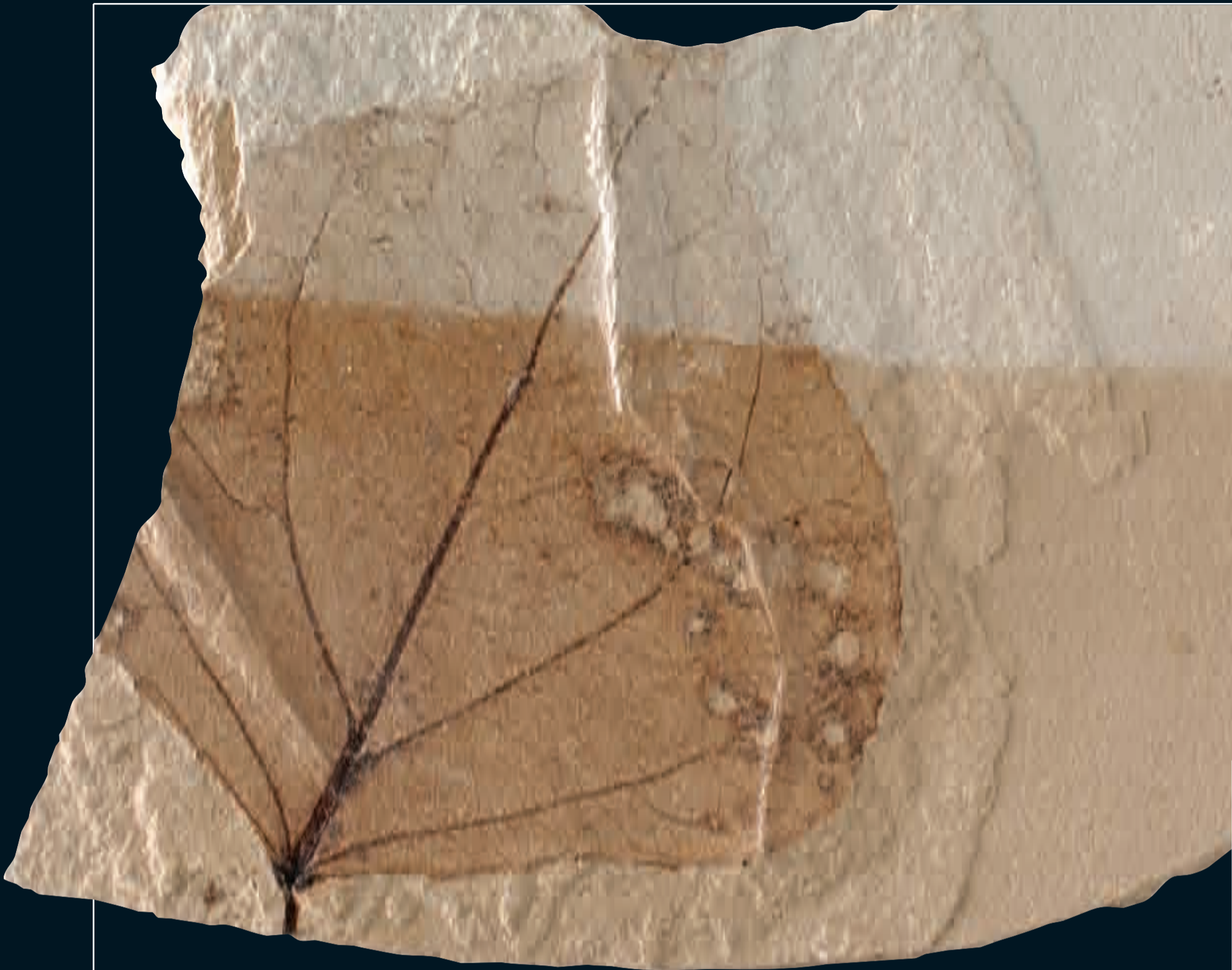
ニシン

年代：5500万年前
寸法：21 センチメートル(8.25インチ)
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：暁新世

イワシは、北大西洋とバルト海沿岸の温暖な浅瀬に生息する。イワシにはおよそ200もの種類が存在し、すべての種類はたいてい似通っている。ほとんどは銀色で、背中のひれは1つだけである。写真のイワシは、21 cmである。これはグリーンリバーの地中2200 mの水深で発見されたものである。他の化石記録と同様、このイワシの化石は生物が進化していないことを証明するものである。進化論者たちは化石記録の前には絶望的となる。化石が新たに発見されるごとに絶望にまた一歩近づくのだ。

ヤナギ

年代：5400万年前～3700万年前
地域：ユタ州ユインタ郡
層：グリーンリバー層
時代：始新世

他の生物のケースと同様、化石記録は植物が何百万年の太古の昔から変わらずにいることを証明するものである。今日の植物は何万年前のものと同じ体系とメカニズムを備えている。このヤナギの化石の写真は、ヤナギが5400万年前～3700万年前から同じ姿あることを示すものである。
世界中で発掘された何百万もの化石は、植物は進化したのではなく、創造されたのだということを示している。

ポプラの葉

時代：新生代、始新世
年代：5400万年前～3700万年前
地域：アメリカ合衆国

この化石の標本は、ポプラの木が5千万年前の古代から変わらずポプラとして存在していたことを示すものである。ポプラは5千万年前から少しも変わっていない。これは進化論が欺瞞以外の何ものでもないことを示すものであり、進化は全く発生していないことの証拠となる。生きとし生けるものを含む万物すべては、全能の神の所産によるものである。

ナラの葉

年代：4500万年前
地域：グリーンリバー層、ワイオミング州
寸法：高さ30ミリメートル(1.18インチ)；母岩：60ミリメートル(2.3インチ) X 60ミリメートル(2.3インチ)、厚さ15ミリメートル(0.59インチ)
時代：始新世

化石記録は植物が進化のプロセスなどを経ていないことを明らかにするものであり、空想の祖先などあり得ない。魚は常に魚であり、鳥は常に鳥であった。クモは常にクモであり、マツもトウヒも常にマツやトウヒであり、バラは常にバラであった。生物と同じように、この化石の写真が裏付けるように、ナラは常にナラだったのである。

スズメバチ

時代：新生代、始新世
年代：5400万年前～3700万年前
地域：アメリカ合衆国

5千万年前に生息していたスズメバチは、現代に生きるスズメバチと全く変わらない。何億、何万年もの間、生物の生体組織が変わることがないならば進化論などは取り上げる価値はない。化石記録は、進化など発生していないことを如実に物語っている。

ブドウの葉

年代：3800万年～2300万年前
寸法：6.6 センチメートル(2.6インチ)葉柄を含む
地域：モンタナ州、ビーバーヘッド郡
層：マディ・クリーク層
時代：漸進世

3800万年～2300万年前のブドウの葉の化石も、植物が進化したのではなく創造されたことを示している。何千万年の昔に存在したビティス属(Vitis)のブドウと現代のものでは、違いは全く認められない。

ニシン

サンフィッシュ

ニシンとサンフィッシュ

年代：5400万年前～3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー化石湖
層：グリーンリバー層
時代：始新世

これらのニシンとサンフィッシュの標本は、生物が進化していないことを物語っている。母岩を同じくするこの化石は、5400万年前～3700万年前のものである。これらは現代のニシンもサンフィッシュも古代のものとは何ら変わっていないことを明らかにしている。

ニシン

サンフィッシュ

ヌルデの葉

年代：5400万年前～3700万年前
寸法：葉：7センチメートル(2.8インチ) X 1.2センチメートル(0.5インチ)；母岩：24.2センチメートル(9.5インチ) X 14センチメートル(5.5インチ)
地域：コロラド州、ダグラスパス
層：グリーンリバー頁岩
時代：始新世

この5400万年前～3700万年前のヌルデは構造的にも現在のものと何ら変わりはない。何千万年という時を経ても、ヌルデは変化していないのだ。

北アメリカグマの頭蓋骨

年代：5万年前
寸法：26.6センチメートル(10.5インチ)
地域：ミシガン州
時代：更新世

クマとイヌの解剖学的類似点を挙げて、進化論者たちは両方が共通の祖先を持つと主張している。しかし化石記録ではこれが間違いであることが明らかにされている。半犬、半熊状態の化石は未だに1つとして発見されておらず、それどころか、膨大な数の化石は、クマはいつの時代もクマであり、イヌはいつの時代もイヌであったことを示している。写真のクマの頭蓋骨は、クマが進化の過程を経ていないことを証明する証拠である。

スズキ

年代：5400万年前〜3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

5400万年前〜3700万年前のスズキは現在のものと全く違いがない。進化論者が主張するようにはスズキは進化していないことからも、スズキが神の創造によってもたらされたのは明らかである。

サンフィッシュ

年代：5400万年前～3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

150年間、世界のいたるところで、ダーウィニストは魚の進化を証明する化石を探し求めてきた。しかし、これまで発掘された化石は、魚が神の創造によってもたらされており、進化の過程を経ていないことを示している。これまで、進化論者たちはいわゆる魚の祖先と思われるものや、進化の途中と推定される途中段階の化石と思われるものを発見するには至っていない。逆に、膨大な数の古代からの化石は、魚がいつの時代も魚であったことを示している。その1つが、この写真の5400万年前～3700万年前のサンフィッシュの化石である。進化論者はこのような万物創造の証拠となる化石を前に絶望を感じている。

ヒッコリーの葉

年代：6500万年～5400万年前
寸法：7.6センチメートル(3インチ)
地域：アメリカ合衆国、ノースダコタ州
時代：暁新世

写真の6500万年～5400万年前の北米産ヒッコリーの葉の化石は、木が他の植物から進化したものではないことを示すものである。何千万年も昔のヒッコリーの葉は現在生息するものと全く同じなのである。

ニシン

年代：5400万年前～3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

5400万年前～3700万年前のニシンは、現代のものと何ら異なる部分はない。これは、進化論者たちの主張を否定するものであり、生物はすべて神により創造されたのだという事実を確定するものである。

イチジクの葉

年代：6500万年～5400万年前
寸法：5.7センチメートル(2.3インチ)
地域：ノースダコタ州
時代：暁新世

800種を持つ植物、イチジク。イチジクはイチジク属(Ficus)に属する。何千万年もの昔より、いちじくの葉やその実は全く変わっていない。この写真の6500万年～5400万年前のイチジクの葉は、イチジクが進化していないことを証明する重要な証拠である。

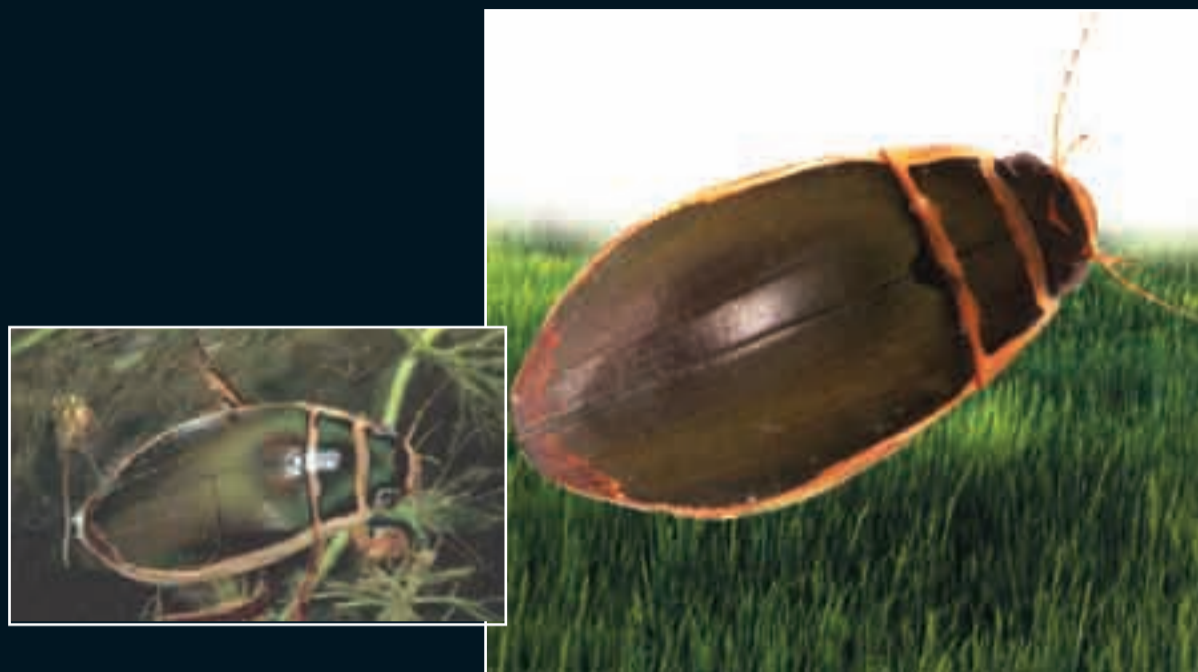
ニシン

年代：5400万年前～3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

進化論は種の自然史について書かれた空想の夢物語であるが、科学的な研究は進化論をことごとく否定するものである。進化論を崩壊させた重要な研究結果の1つは、化石である。長い年月を経ても全く変化していないイワシは、進化論が欺瞞であることを暴くものである。

水生甲虫

年代：180万年前〜1万1千年前
地域：ラ・ブレア・タールピッツ、ロサンゼルス、カリフォルニア州
時代：更新世

この昆虫は、現代に生息するものと全く違いがない。これは生物が創造されたということを裏付ける。

セイヨウトチノキの葉

年代：6500万年～5400万年前
寸法：12.7センチメートル (5インチ)
地域：ノースダコタ州
時代：暁新世

この6500万年～5400万年前のセイヨウトチノキの葉は、今日生息するセイヨウトチノキと何ら違いはない。これは、植物が進化していないことを証明する証拠のほんの1つにしか過ぎない。

シダ

年代：3億6千万年前～ 2億8600万年前
寸法：最大：10.2センチメートル(4インチ)；母岩：33センチメートル(13インチ) X 15.2センチメートル(6インチ)
地域：ペンシルバニア州、セントクレア
時代：石炭紀

現在のシダは、何億年前のシダと同じ特性を持つ。化石記録は明確にこのことを示している。写真の3億6千万年前～ 2億8600万年前のシダもこれと同様である。

ニシン

年代：5400万年〜3700万年前
地域：ワイオミング州
層：グリーンリバー層
時代：始新世

これまで発掘された多くの化石の中で、“進化途中の状態”にある、半ニシンや半メカジキ、半サメ、半サケといった形態の生物は発見されていない。化石は、ニシンは常にニシンであり、サケは常にサケであり、サメは常にサメであることを露呈している。5400万年〜3700万年前からずっと同じ姿をしているニシンもまた、これを証明するものである。

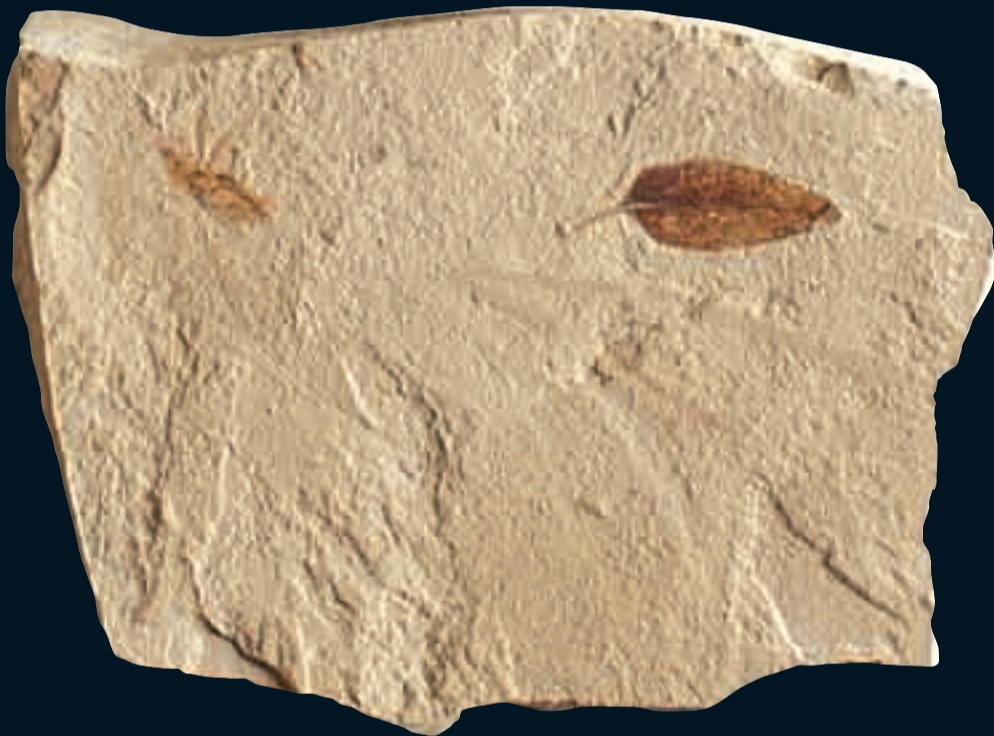
ニシン

年代：5400万年～3700万年前
寸法：23センチメートル(9インチ)
地域：ワイオミング州
層：グリーンリバー層
時代：始新世

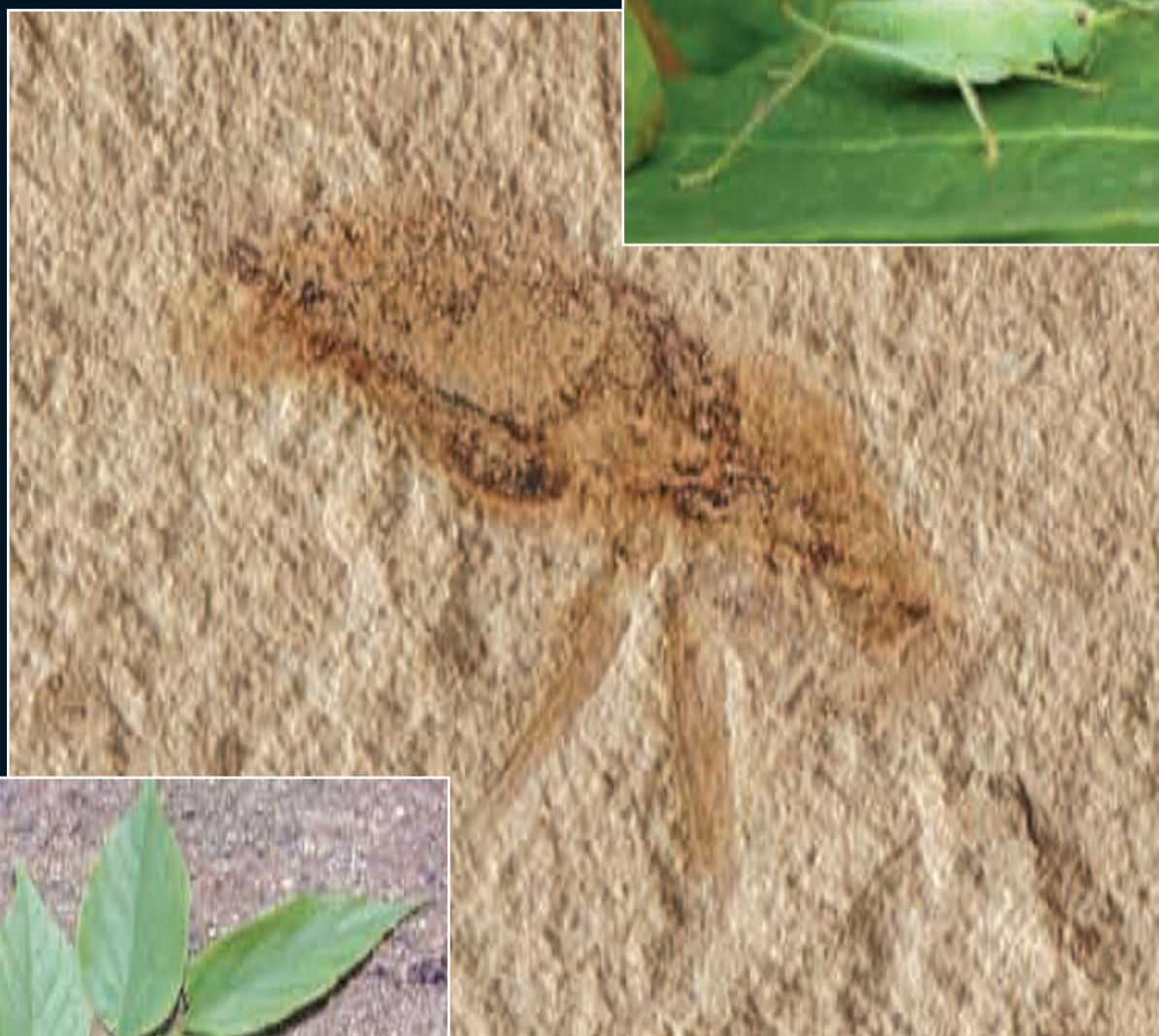
現在の地質学的データでは、化石記録が非常に豊富に存在していることを示している。しかし、この豊かな化石の中にも、進化論者の主張を裏付けるものは何1つとして発見されていない。化石記録のすべては、創造の事実を裏付け、進化論を否定するものである。写真のニシンは、進化論の無効性を提示している。

ヨウジウオ

年代：2300万年～500万年前
寸法：11.4センチメートル(4.5インチ)
地域：カリフォルニア州、サンタ・イネズバレー
層：バケーロ層
時代：中新世

ヨウジウオは、タツノオトシゴと同様、ヨウジウオ亜目(Syngathoidei)に属する小型の脊椎動物である。この2300万年～500万年前のヨウジウオの化石は、現在のヨウジウオと全く同じである。これにより、生物がゆっくりと進化していったというダーウィニストの主張は否定されるのである。

エノキの葉とコオロギ

時代：新生代、始新世
年代：5400万年〜3700万年前
地域：アメリカ合衆国

この写真では、コオロギとエノキの葉の化石が見られる。この化石では、今日見られるコオロギとエノキの葉と5千万年前のものが全く同じであることを劇的に物語っている。これは進化論者も黙らせるものであり、進化論者の空論とプロパガンダは、科学的研究結果の前には全く無意味なものと成り下がるのである。真の科学的研究は、進化論は真っ赤な嘘であり、万物創造こそが明瞭な事実だということを明かすものである。

サイの頭蓋骨

年代：3300万年前
寸法：38.1センチメートル (15インチ) X 25.4センチメートル(10ンチ) X 5.08センチメートル(2インチ)
地域：ワイオミング州、コンヴァース郡
時代：漸進世

写真の化石は、3300万年前の化石と今日のサイには何の違いも認められないという事実を物語る。古代から解剖学的に変化の認められない生物は、進化論が欺瞞であることを見せつけるものである。

ウサギ

年代：3300万年前
寸法：頭蓋骨6.3センチメートル(2.5インチ)；母岩：22.8センチメートル(9インチ) X 17.7センチメートル(7インチ) X 10.1センチメートル(4インチ)
地域：ワイオミング州、コンヴァース郡
時代：漸進世

化石記録からは、他の形態、または進化早期の形態からゆっくりと種が進化したということを示す例は見つからない。たとえば、膨大な数の化石からは、半進化状態のワニや、半進化状態のウサギ、半進化状態のヘビやウサギというような特徴を持つような痕跡は全く見つかっていない。数多くの化石は、ウサギは常にウサギであることを示している。この事実の証拠によって、生物は進化したのではなく神により創造されたということが明らかとなる。

サンフィッシュ

サンフィッシュ

年代：5400万年～3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

種がその構造を何千万年も保持していることを示す“化石動物”は、進化論に大きな打撃を与える。よく知られているように進化論は変化する環境に適応できた生物のみが生き残ると主張しており、このプロセスの中で、生物は1つの種から別の異なる種へと進化するというのである。しかし一方で化石動物を見れば、生物は年代を経ても環境によって進化しないことが明らかであり、進化論が事実無根の仮定だということが分かる。

ニシン

ヤナギ

年代：5400万年～3700万年前
寸法：葉：100ミリメートル(4インチ) X 10ミリメートル(0.4インチ)；母岩：62ミリメートル(2.4インチ) X 130ミリメートル(5インチ)
地域：ユタ州ユインタ郡
層：グリーンリバー頁岩
時代：始新世

変化することなく何千万年から存在する植物の種は、進化論にとって手痛い打撃となる。この5400万年～3700万年前のヤナギの葉の化石は、何千万年という時を経ているにも関わらず、全く変わっていない。現代のヤ

月桂樹の葉

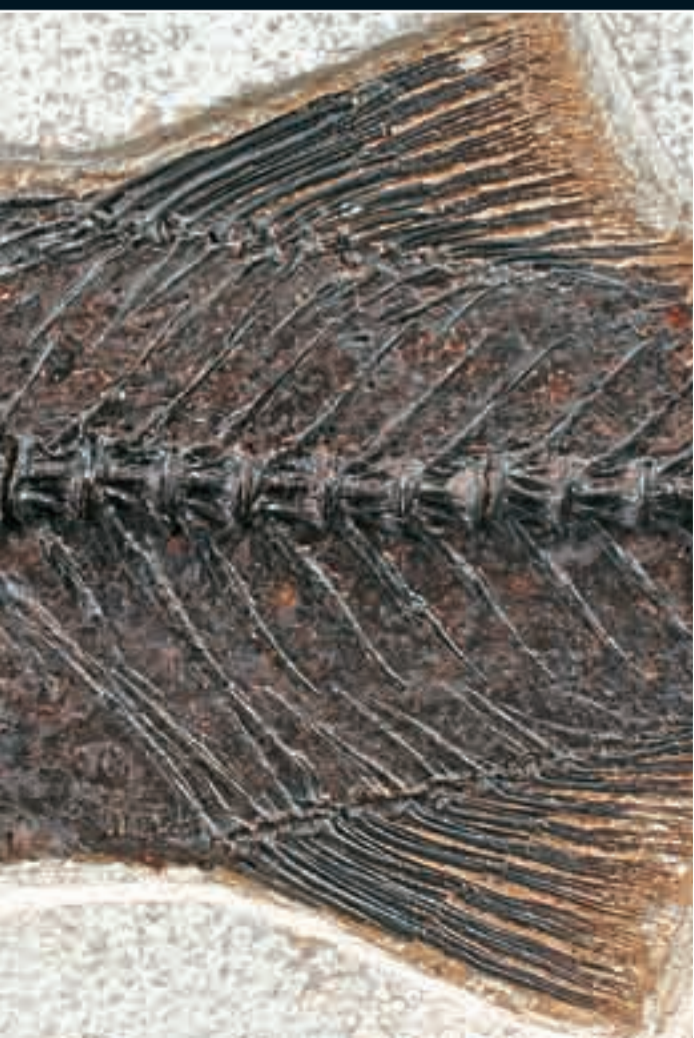
年代：5400万年～3700万年前
寸法：葉：30ミリメートル(1.2インチ) X 66ミリメートル(3インチ)；
母岩：90ミリメートル(3.5インチ)X 69ミリメートル(2.7インチ)
地域：ユタ州ユインタ郡
層：グリーンリバー頁岩
時代：始新世

クスノキ科(Lauraceae) (原産：アジア)の葉と実は、オイルの原料となる。葉は香料としても使用される。
写真の化石化した月桂樹の葉は、他の植物と同じように、月桂樹が進化などしていないことを示すものである。5400万年～3700万年前の月桂樹は、今日のものと同じ特徴を持っている。

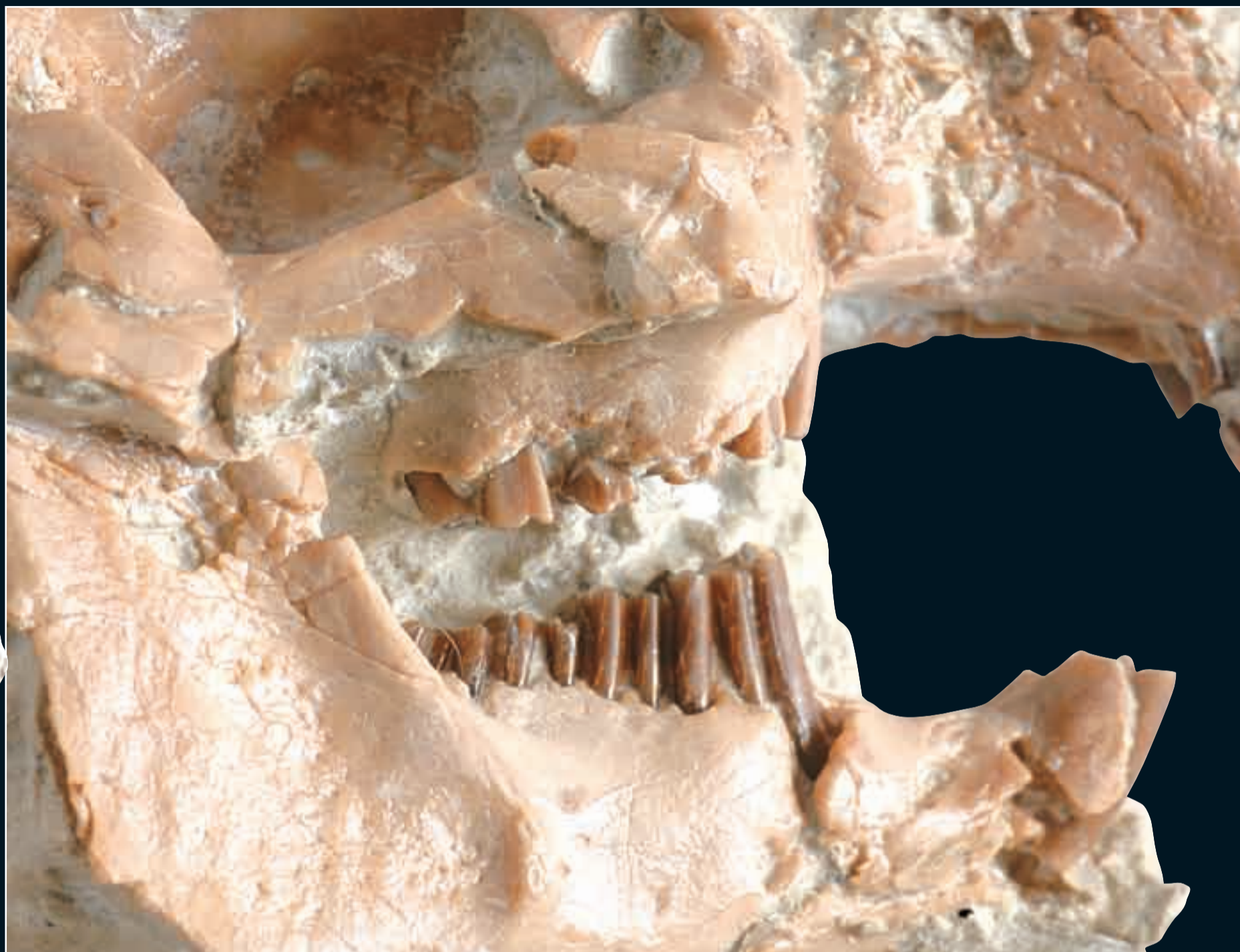
ニシンとスズキ

年代：5400万年～3700万年前
地域：ワイオミング州ケミラー
層：グリーンリバー層
時代：始新世

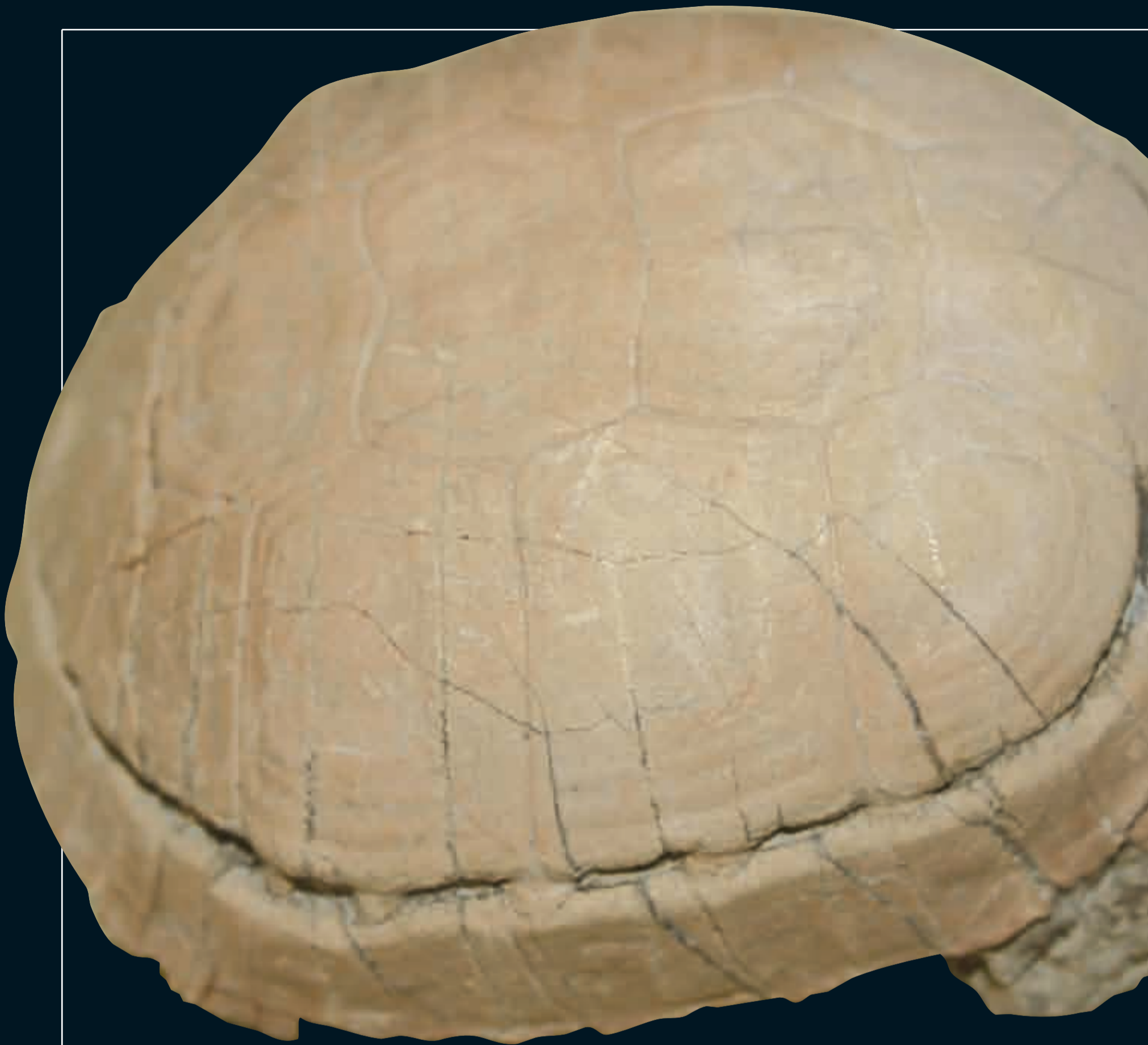
5400万年～3700万年前のニシンとスズキの化石は、何千万年もの間少しも変化していない。今日存在するニシンとスズキは数千万年前のものと何ら変わりはない。

ニシン
スズキ

ウサギ

年代：3800万年～2300万年前
層：ブリュレ層
地域：ワイオミング州、コンヴァース郡、ホワイトリバー周辺
時代：漸進世

3800万年～2300万年前に生息していたと思われるこのウサギと、現在のウサギは同じものである。ウサギは何千万年も変化しておらず、これはウサギが進化したのではなく、創造によってもたらされたということを示すものである。

シカの頭蓋骨

年代：3800万年〜2300万年前
層：ブリュレ層
地域：ネブラスカ州、スー郡、ホワイトリバー周辺
時代：漸進世

3800万年〜2300万年前のシカが今日のシカと同じだということは、哺乳類は何千万年もの間、全く変化していないことであり、従って進化してはいないということとなるのだ。

カメ

時代：新生代、始新世
年代：5400万年〜3700万年前
地域：アメリカ合衆国

他の科学分野でもそうだったように、古生物学の分野においても、ダーウィンの預言がどのくらい非科学的であったかという膨大な研究報告や知見が提示されている。その1つが、この写真の5400万年〜3700万年前のカメの化石である。何千万年の古代からカメが全く変化していないことの証明は、進化論を否定する結果の1つとなる。

二枚貝

年代：1300万年～1250万年前
寸法:10 センチメートル(4インチ)
層：カルバート層
地域：メリーランド州、カルヴァート郡
時代：中新世中期

二枚貝は、ムール貝や牡蠣に代表されるような2つの貝殻を持った軟体動物である。何千万年の昔に生息していた二枚貝と今日のものとの間では何ら違いは見られない。これはダーウィニストが提唱したゆっくりとした進化というものを否定するものである。

カメ

年代：3800万年～2300万年前
寸法:13センチメートル(5インチ) X 幅10センチメートル(4インチ) X 厚さ4.5センチメートル(1.75インチ)
層：ブリュレ層
地域：ネブラスカ州、スー郡
時代：漸進世

進化論者たちは、カメが進化したという痕跡を記録する化石記録は未だかつて1つも発見されていないことを認めている。『Vertebrate Paleontology and Evolution(脊椎動物の古生物学と進化)』という著書の中で、ロバート・キャロル(Robert Carroll)は、初期のカメはドイツの三畳紀の層に見られるといい、今日に見られるものと何ら変わりはない硬い甲羅のおかげで、これらは他の種とは簡単に見分けることができる。また、キャロルによれば、カメは非常に化石化が容易であり、小さな欠片であっても簡単に識別できるにも関わらず、これより前のものと思われるようなカメがいたという証拠は発見されていない。(Robert Carroll, Vertebrate Paleontology and Evolution, p. 207)

牡蠣とその殻

年代：4億1千万年～3億6千万年前
寸法：3.8センチメートル(1.5インチ)
層：ジェファーソン石灰岩
地域：インディアナ州、クラーク郡
時代：デボン紀

3億6千万年前から同じ姿であり続ける牡蠣は、種が1つのものから別のものへと進化するという進化論者たちの仮定に挑むものである。これらの化石化した軟体動物は、進化してはいないものの、創造されたのだということを表すものである。

ウニ

時代：古生代 石炭紀
年代：3億600万年〜2億9900万年前
地域：アメリカ合衆国

写真のウニは、棘皮動物の起源についての進化論の主張を無効にする無数の証拠の1つである。仮に進化論者の主張が正しかったとしたら、3億600万年〜2億9900万年前のウニの化石標本は今日のものと大きく異なるはずである。この化石が示すように、今日に生息するウニと何億年も以前のものとの間で違いは全く見られない。

ヒトデ

年代：3億6千万年～3億2500万年前
寸法：母岩6.2センチメートル(2.4インチ) X 6.2 センチメートル(2.4インチ)
層：エドワーズビル層
地域：インディアナ州クローフォーズビル
時代：ミシシッピアン

今日のヒトデは、何千万年前のものと同じ特徴を有している。この化石はヒトデが3億6千万年～3億2500万年前のものと同じ形をとどめていることを示しており、進化論者の主張を退ける。また、生物は今日の特徴をそのまま有する形で創造されたのだということが分かる。

カナダで発見された化石標本

カナダには、世界でも最古の地質構造が存在する。岩層の大部分は先カンブリア紀(46億年～5億4300万年前)に属するものである。またカナダは化石層が豊富な国である。

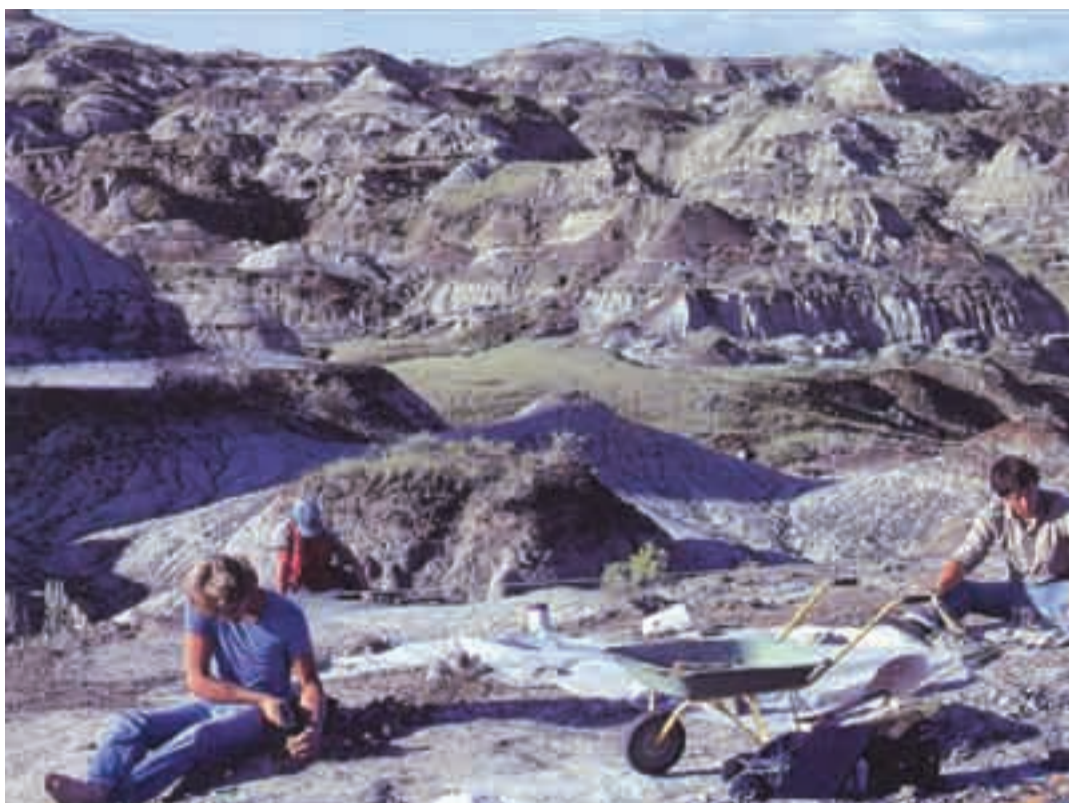
この自治領で最も重要な化石層は、世界的にも有名なバージェス頁岩層である。バージェス頁岩の化石層は現代で最も重大な先カンブリア紀の発掘場所として知られている。研究によれば、化石が採掘された堆積物が蓄積された時代には、この地域は赤道に近かったのではないかとされている。その時代、バージェス頁岩地域は北米大陸の下部に位置していたのである。

初期の化石群は、1900年前半に古生物学者チャールズ・ドリトル・ウォルコット(Charles Doolittle Walcott)により発見された多数の無脊椎動物であった。事実、バージェス頁岩は無脊椎動物の化石で有名となっている。5億年以上前のこの化石たちのおかげで、カンブリア紀に生息していたと思われる140種以上の生物が確認された。これらの化石の特徴は、数多くの異なる門に属し、それらはそれ以前の地層には祖先が存在することなく、すべて突然に発生したということを示すものである。進化論者たちが、進化論の観点からこれらの化石の発掘物を説明するのは不可能であるということを認めるものである。

カナダのその他の地域の重要な化石発掘現場はミグアシャ国立公園である。この地域はガスペ半島に位置し、化石標本が豊富である。この地域で最初に化石が見つかったのは1800年中ごろだ。地域の岩の構造はその時代を3億7500万年～3億5千年前にさかのぼるという。研究では、3億7千万年前ごろは、ガスペ沿岸は熱帯

バージェス頁岩層の化石発掘

湾だったということである。

ミグアシャの化石は微生物から脊椎動物、植物にいたるまでたくさんの種類にのぼる。ミグアシャの一部の植物や魚の化石はその種類でも最も初期のものであるという。例えば、スパーマスポシタ(Spermasposita)は地球上で最古の顕花植物といわれている。進化論者が生命体は非常に原始的だっただろうという仮定を主張するのに対し、この花の完全に形成され完璧な構造からも生物がすでに当時複雑な形をしていたことが伺える。

アルバータ州の化石発掘現場

バージェス頁岩層

ムーンアイ

年代：5千万年前
寸法：8.3センチメートル(3.25インチ) X 3.2 センチメートル(1.25インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

ムーンアイは通常大きな湖や川に棲む中型の北米産の魚である。他の生物と同様、この種の魚もまた、身体的構造は何1つ変化することなく、現代まで受け継がれている。5千万年前のムーンアイが現在の子孫と全く同じであるという事実は、進化論では説明できないものである。

セコイアの枝

年代: 5千万年前
寸法：7センチメートル(2.75インチ) X 10センチメートル(4インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州、カムループス
時代：始新世

現在では、地球上で最も大きな木として知られているセコイアは、非常に寿命が長い。多くは北米に生息している。一部では1千年の樹齢を持つものもあり、高さが150メートル(492フィート)を超えることもある。化石は、セコイアが何千万年も同じ姿を保持していた、すなわち、進化の過程は経ていないことを示している。ここに掲載されている化石は、5千万年前のセコイアの枝であり、現在繁殖しているものと全く同じものである。

ムーンアイ

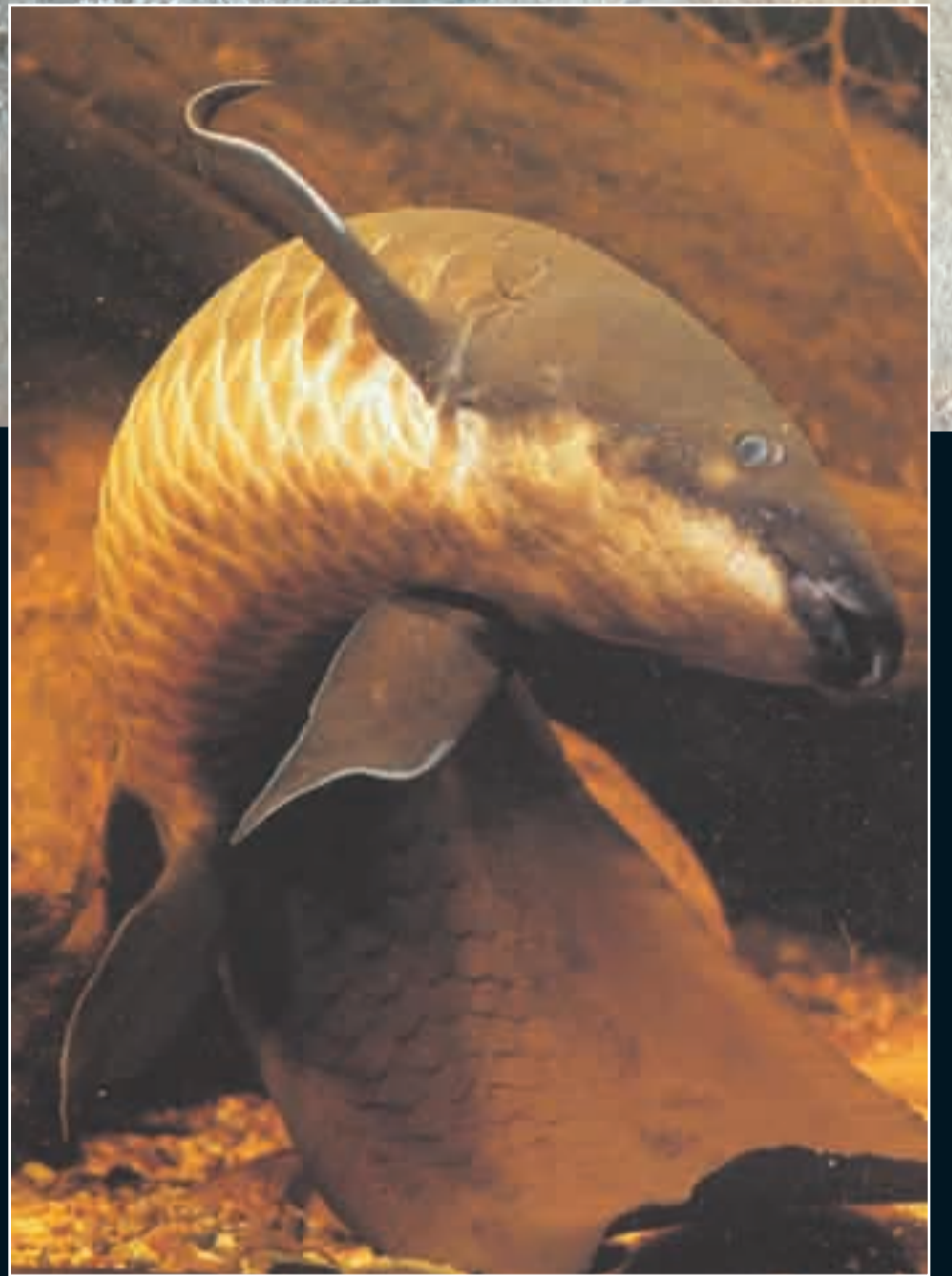
年代：5千万年前
寸法：10センチメートル(4インチ) X 1.5センチメートル(0.6インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

カナダの化石発掘現場からは、数多くのムーンアイの魚が見つかっている。これらの化石すべては、ムーンアイが何千万年も同じ姿でいることを示している。この何百万年も同じ身体構造であるという安定性は、進化は全く行われなかったということを証明する重要な証拠となる。

現在のものと対
比された5千万年
前の化石

セコイアの枝とマーチフライ

年代：5千万年前
寸法：10センチメートル(4インチ) X 12.7センチメートル(5インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州、カムループス
時代：始新世

マーチフライはケバエ科(Bibionidae)に属し、植物の花粉を主な餌としている。化石記録によれば、すべてのハエの種は同時期に出現しており、その身体構造は決して変化することなく、現代まで受け継がれている。これは、他の生物と同じようにハエが進化していないことを示すものである。進化論者によってはハエの起源が進化論では説明できないことを認めている。
動物学者ピエール・ポール・グラッセ(Pierre-Paul Grassé)は著書『昆虫の起源は暗闇の中にある(We are totally in the dark about the origin of insects)』(Evolution of Living Organisms, New York Academic Press, 1977, p. 30)でこれを指摘している。化石記録は、ハエとすべての他の昆虫は神の創造を起源とするものだということを示している。

肺魚

年代：3億5千万年前
寸法：18.5センチメートル(7.3インチ)
地域：ガスペ半島、ミグアシャ
時代：デボン紀上部

肺魚は、現在では主にアフリカや南アメリカに生息している。この魚は水面が下がり、川が干上がると自分自身で泥の中にもぐることで生き延びる。今まで見つかっている肺魚の最古の化石は、デボン紀(4億1700万年～3億5400万年前)のものであり、この写真の化石もその時代のものである。この化石は今日の肺魚と何ら変わるところはなく、よって生物は進化したのではなく、神によって創造されたということが分かる。

シデ

セコイアの枝とシデの葉

年代　：5400万年～3700万年前
寸法　：母岩：7センチメートル(2.75インチ) X 1.5センチメートル(0.6インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

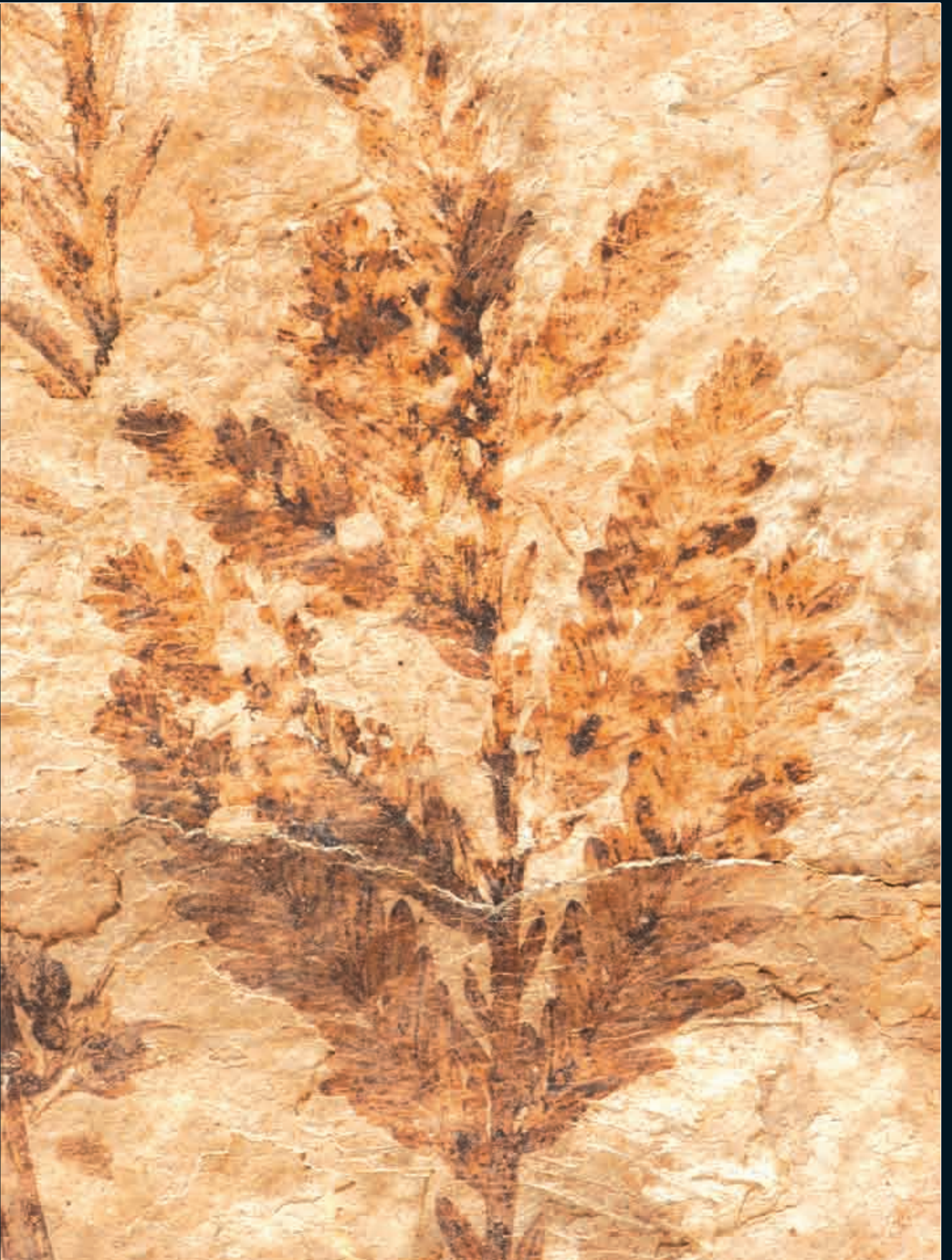
このような複雑な構造を持った植物は、進化論で言われるように、偶然によってもたらされたものなどではなく、他の種から進化したものでもない。化石記録では、植物の多くの種別がすべて同時に現れていることを示している。そしてそれには、進化の過程は全く関与していない。ここに見られるセコイアとシダの葉の化石は、進化論が間違った理論であることを劇的に表すものであり、今日に生息する植物と5400万年～3700万年前に生息していた植物の間には、何の違いも認められない。

セコイア

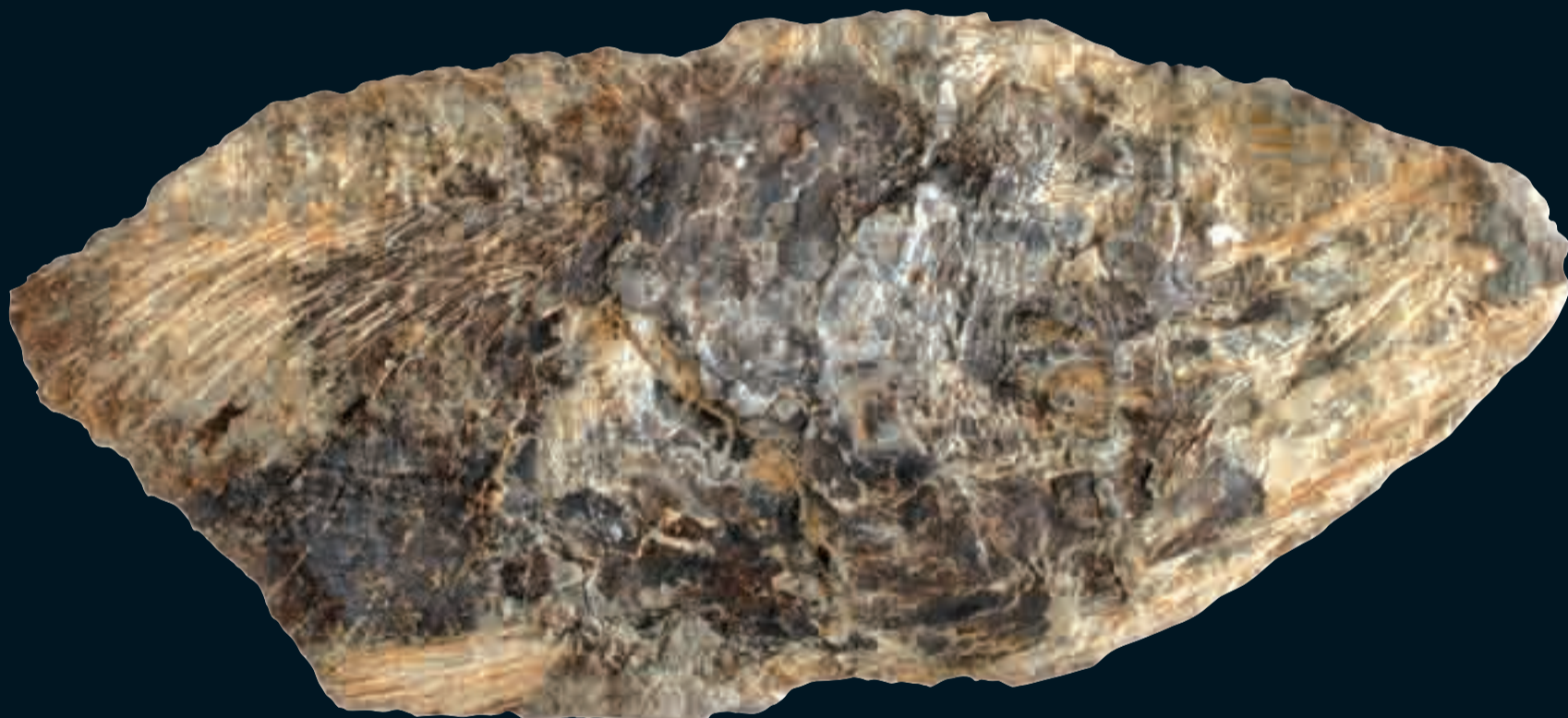
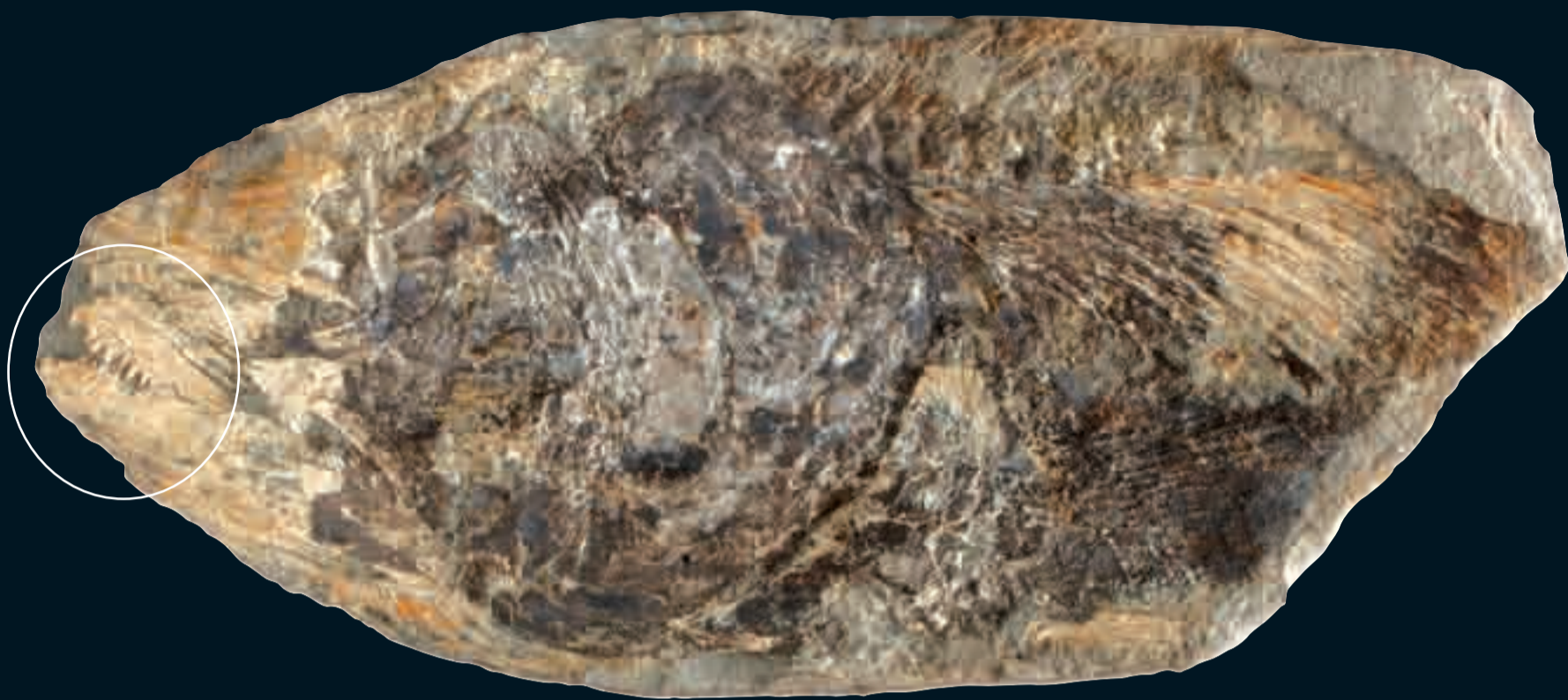
この化石は、5400万年前〜3700万年前にさかのぼる。陰画と陽画2つの部分から構成される。

セコイアの枝と莢

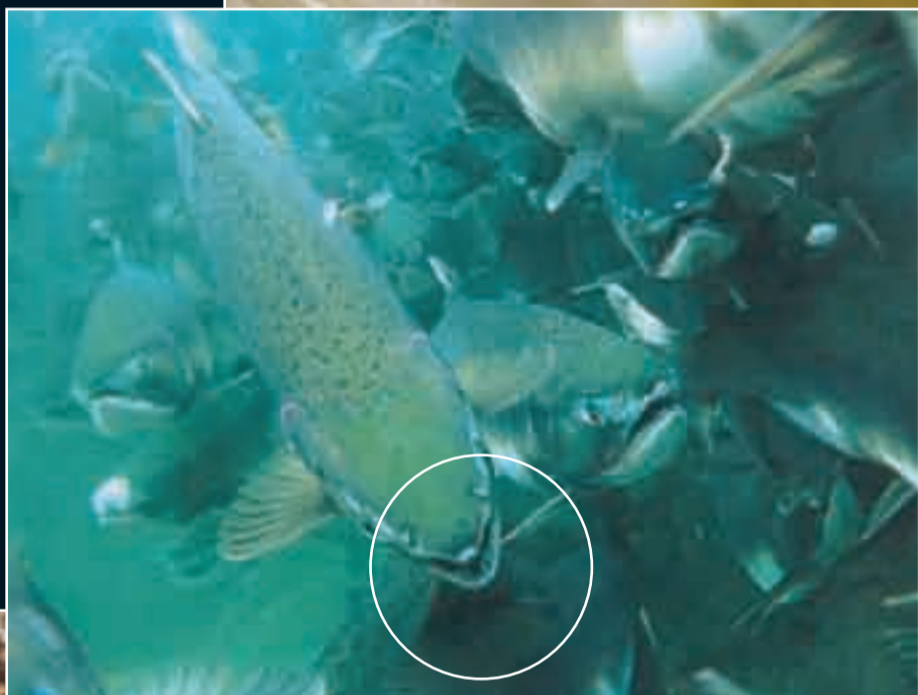
年代：5400万年〜3700万年前
寸法　：葉7センチメートル(2.7インチ) X 10.7センチメートル(4.3インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

現在生息しているセコイアの木と何千万年前に生息していたセコイアとの間に何の違いも見られない。これにより、動物と同じく植物もまた、進化の過程を経ていないことが証明される。

カバノキ

年代：5400万年～3700万年前
寸法：20.2センチメートル(8インチ) X 23センチメートル(9.3インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

カバノキはカバノキ属(Betula genus)に属し、北方気候に生息している。写真の化石は、5400万年～3700万年前に生息していたとされるものである。この葉は現在生息する木と全く異なるところはない。これにより、カバノキは他の生物と同様進化していないことが証明される。

サケの頭

年代：180万年前～1億1千年前
寸法：15.2センチメートル(6インチ) X 8. センチメートル(3.4インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州、カムループス川
時代：更新世

サケの化石は、多くの地質レベルで発見されており、そのすべては現在生息するサケと全く同じものである。発見されているすべての化石は、ダーウィニストを否定するものであり、他の生物と同様、サケが全く変化していないことを証明するものである。

セコイア

イチョウ

イチョウの葉とセコイアの枝

年代：5400万年～3700万年前
寸法：イチョウの葉5センチメートル(2インチ)、5.8センチメートル(2.3インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

このイチョウの木は、イチョウ門(Ginkgophyta)に属する化石動物である。今まで発見された中で最古のものは、2億7千万年前にさかのぼるものである。ここに掲載されているイチョウの葉の化石は、5400万年～3700万年前のもので、イチョウは何千万年前からも同じ姿をしており、これもまた進化論に挑むものである。

イチョウの葉

年代：5400万年〜3700万年前
寸法:葉:5センチメートル(2インチ) X 5.8センチメートル(2.3インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

発掘された化石は、はっきりと植物種の進化の主張を反証するものである。これらの発見の1つは、5400万年〜3700万年前のイチョウの葉の化石である。何千万年前に生息していたイチョウの木は、現在のものと全く変わらない。

ニレの葉

年代：5千万年前
寸法：母岩：11センチメートル(4.3インチ) X 5.8センチメートル(2.3インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州、カムループス
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

温帯気候に生息するニレの木は、一般に北米、ヨーロッパ、アジアでよく見られる。5千万年前のニレの木の化石は、植物の進化という主張を退けるものである。

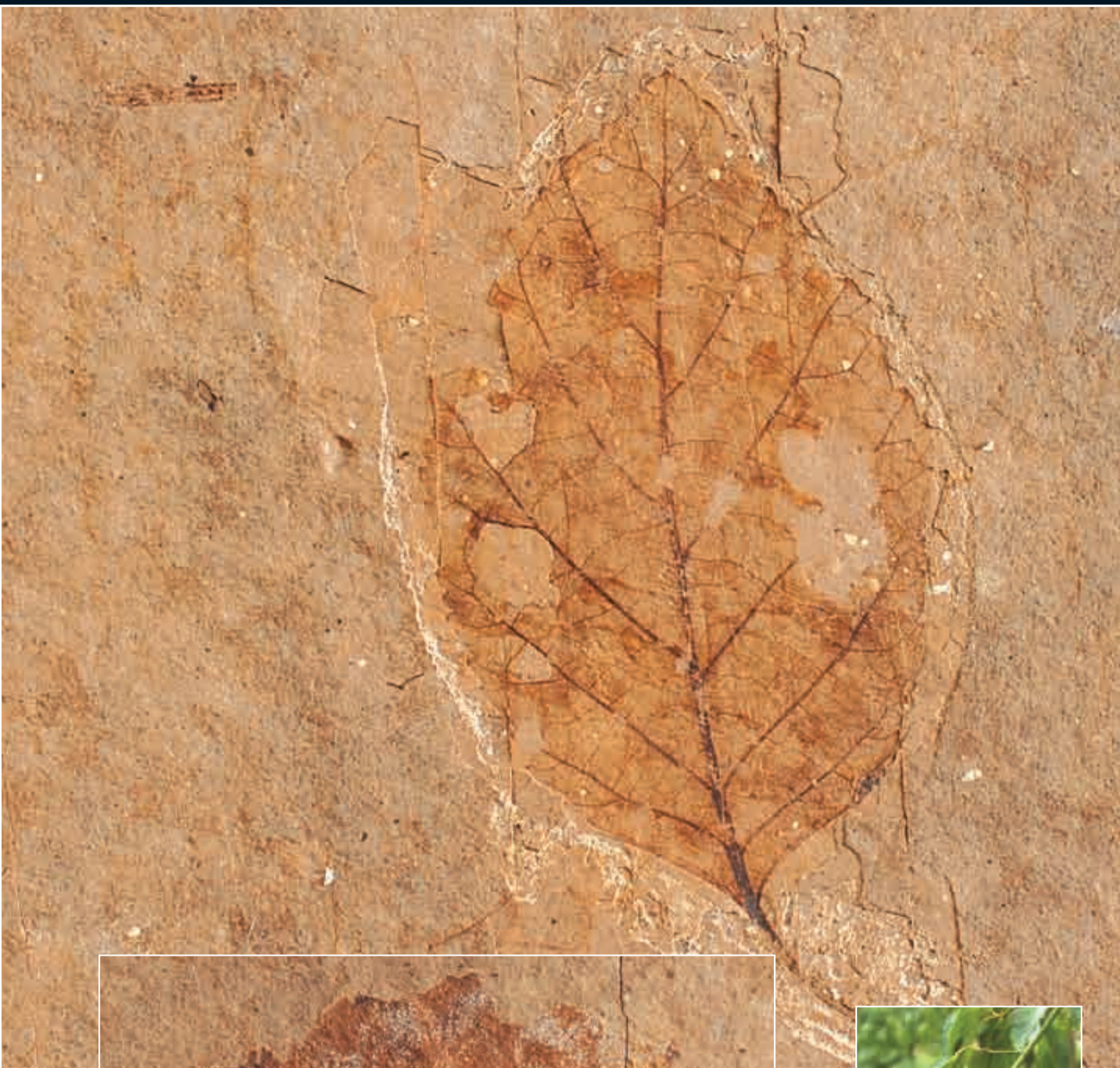
イチョウの葉

年代：5400万年～3700万年前
寸法：3センチメートル(1.2インチ) X 2.5センチメートル(1インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

植物の進化を裏付けるような化石は存在しない。その逆に、膨大な数の化石は、その主張を退けている。その1つに、この写真の5400万年～3700万年前のイチョウの葉があげられる。イチョウが何千万年を経ても変化していないという事実は、進化論が大変な欺瞞であることを示すものである。

パンの木

年代：5400万年～3700万年前
寸法：3センチメートル(1.2インチ) X 7センチメートル(2.8インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州、カムループス
時代：始新世

古代のパンの木は現在生息するパンの木と同じ構造を持っており、5400万年～3700万年前のものと現在のものでは全く違いが認められない。これは、進化が地球上で行われなかったことを示すものである。

シデとニレの葉

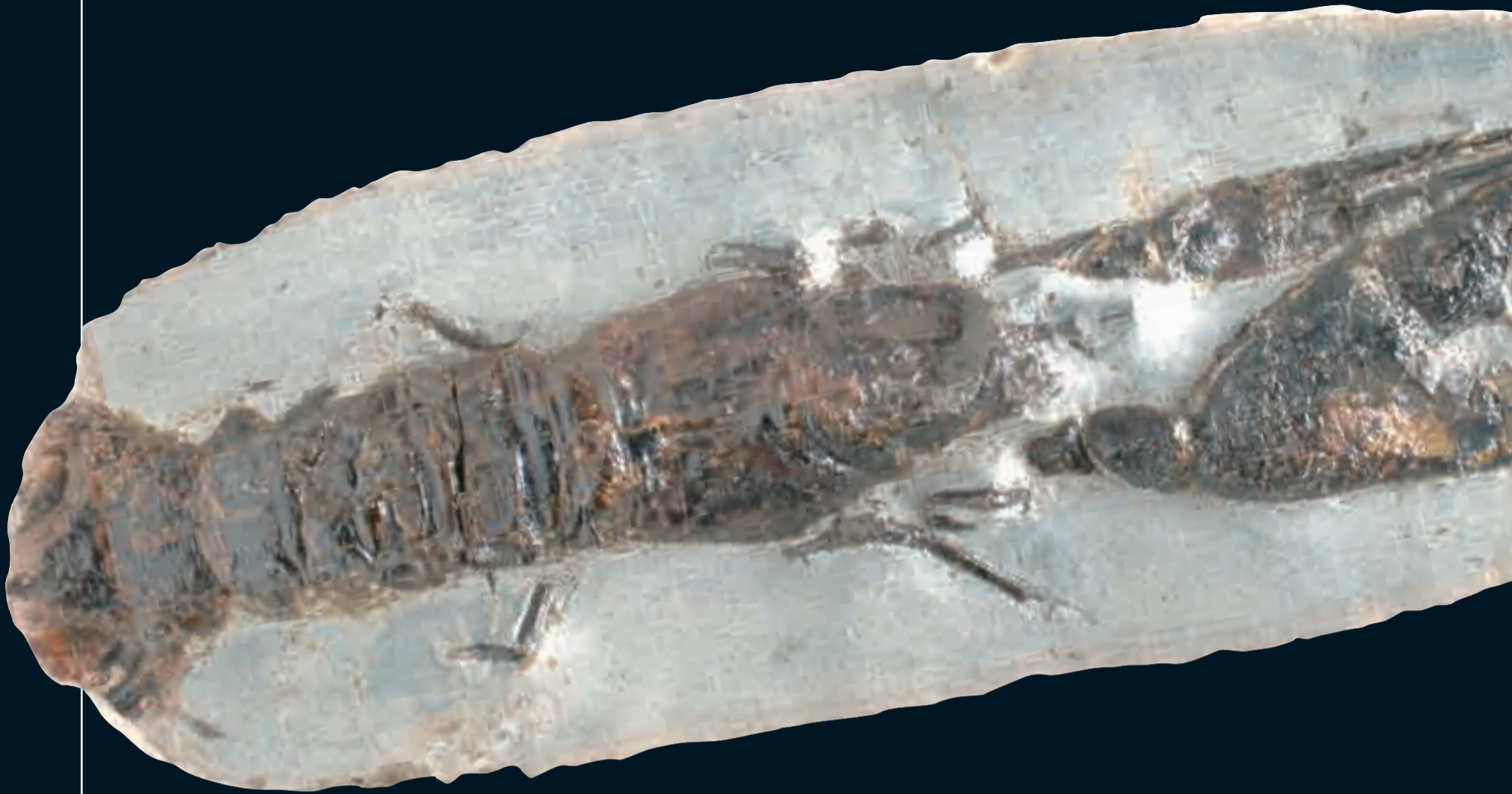
年代：5400万年～3700万年前
寸法：母岩：31センチメートル(12.2インチ) X 18センチメートル(7インチ)
地域：ブリティッシュ・コロンビア州
層：カシェ・クリーク層
時代：始新世

この化石記録は、すべての植物種が、ほんの少しの変化も見せることなく、存在初期より生き延びていることを示すものである。生物組織が同じ特徴を何千万年物間保持しているならば、それは、明らかに進化が行われず、創造が実際にあったということになる。その証拠の1つは、この写真の5400万年～3700万年前のシデとニレの葉の化石である。

ニレ
ニレ
シデ
シデ

イアの葉状体と球果

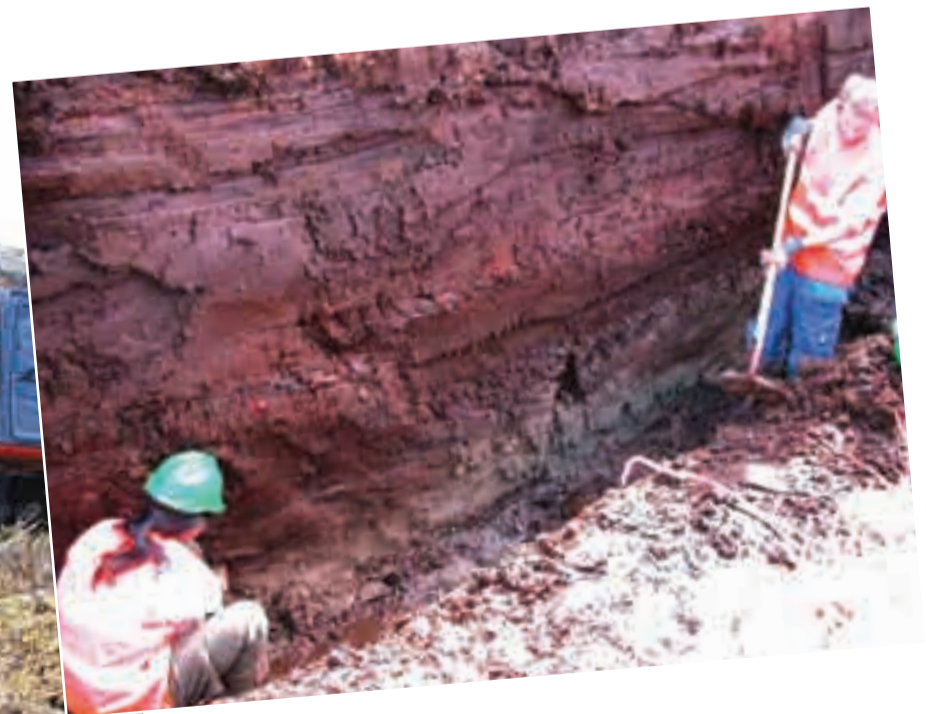
年代：5200万年～4360万年前
寸法：球果：15ミリメートル(0.6インチ)；茎：11センチメートル(4.3インチ)葉状体27ミリメートル(1インチ)；母岩：145ミリメートル(5.7インチ) X 11センチメートル(4.3インチ)
地域：トランキール頁岩、ブリティッシュ・コロンビア州、カシェ・クリーク
時代：始新世中期下部

この5億2千年～4360万年前のメタセコイアの球果は、植物が進化の過程を経ていないことを示すものである。何千万年前に生息していたメタセコイアは、今日繁殖しているものと全く同じである。これは生物が進化していないことを示すものである。

ロブスター

年代：1億4600万年～6500万年前
地域:南サスカチュワン川渓谷
層：ベアポウ層
時代：白亜紀

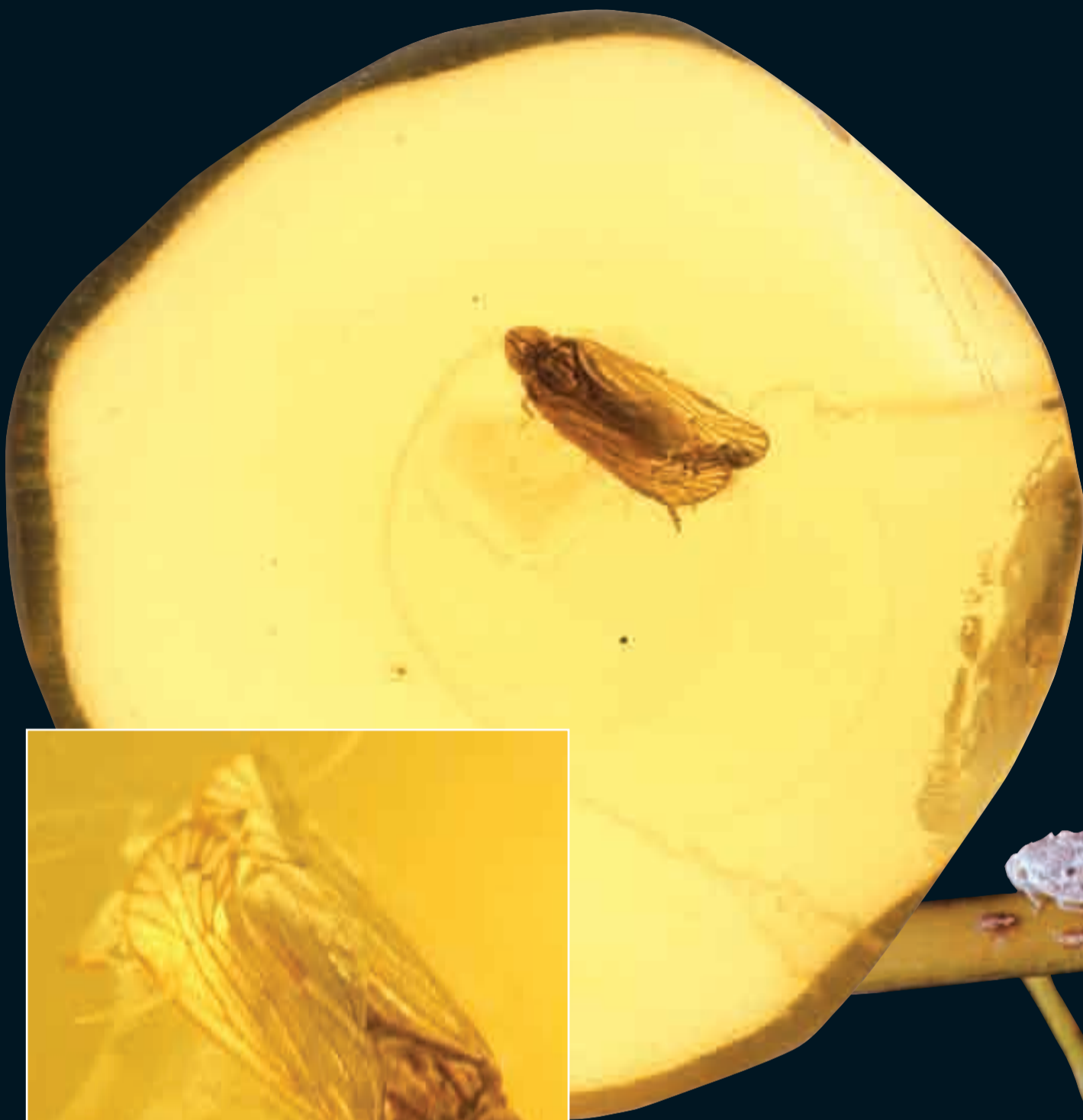
過去150年間で採集された化石は、生命が決して1つの種から別の種へと変化や進化などしていないことを証明している。この事実は、1億4600万年～6500万年前のロブスターの化石を見ても明らかである。現在に生息するものと全く変わりはない。

ドミニカ共和国で発見された化石標本

化石が形成される環境の1つに、琥珀があげられる。樹木の樹脂が生物を包み込むことで、そのままの形を捉えたものが琥珀状態で保存された化石である。樹脂は水に対して不溶性の物質であり、空気にさらされると急速に固まる。その結果、重合のプロセスが開始され(化学反応を起こしたモノマー分子は、分子量の大きな化合物を発生させる)透明な樹脂は何百万年もの間に、継続して硬くなっていく。生命体は樹脂に包まれたまま埋葬され、何百年もそのままの姿でいるのである。世界中には100ヶ所以上の琥珀床がある。現在発掘された中で最も古い琥珀はレバノンの山中から見つかったもので、時代は白亜紀時代にさかのぼる(1億300万年前〜1億200万年前)。近年の研究では、新たな琥珀床は中生代にまでさかのぼることが判明している。これらには、8千万年前から7500万年前のヨルダンの琥珀、約8千万年前のニュージャージー州の琥珀、やはり8千万年前から7500万年前のシーダー湖の琥珀、700万年前のフランスの琥珀、1億年前のピレネー山脈の琥珀などがあげられる。この他の琥珀床が採集された大部分の化石は始新世〜中新世時代のものである(5500万年〜500万年前)。

世界には約100の琥珀床があるといわれている。その1つは、バルト琥珀が産出されるノルウェーである。

ドミニカ共和国で収集された琥珀化石の多くもまた、始新世〜中新世時代のものである。ドミニカ共和国には大きく分けると2つの琥珀床がある。1つは山岳地域からサンチアゴ市北東部にかけての地域であり、もう1つはエル・バージェ市に近い炭鉱からサント・ドミンゴ市の北東にかけての地域である。ドミニカ産の琥珀は、ヘメナエア属(Hymenaea)に属する樹木から得られる樹脂である。重要な特徴の1つには、化石化された生物種の豊富さがあげられる。何百、何千種類もの昆虫に加え、小型の蛙、トカゲやサソリなどもドミニカ産琥珀では化石化されている。

ドミニカ共和国にもいくつかの琥珀床がある

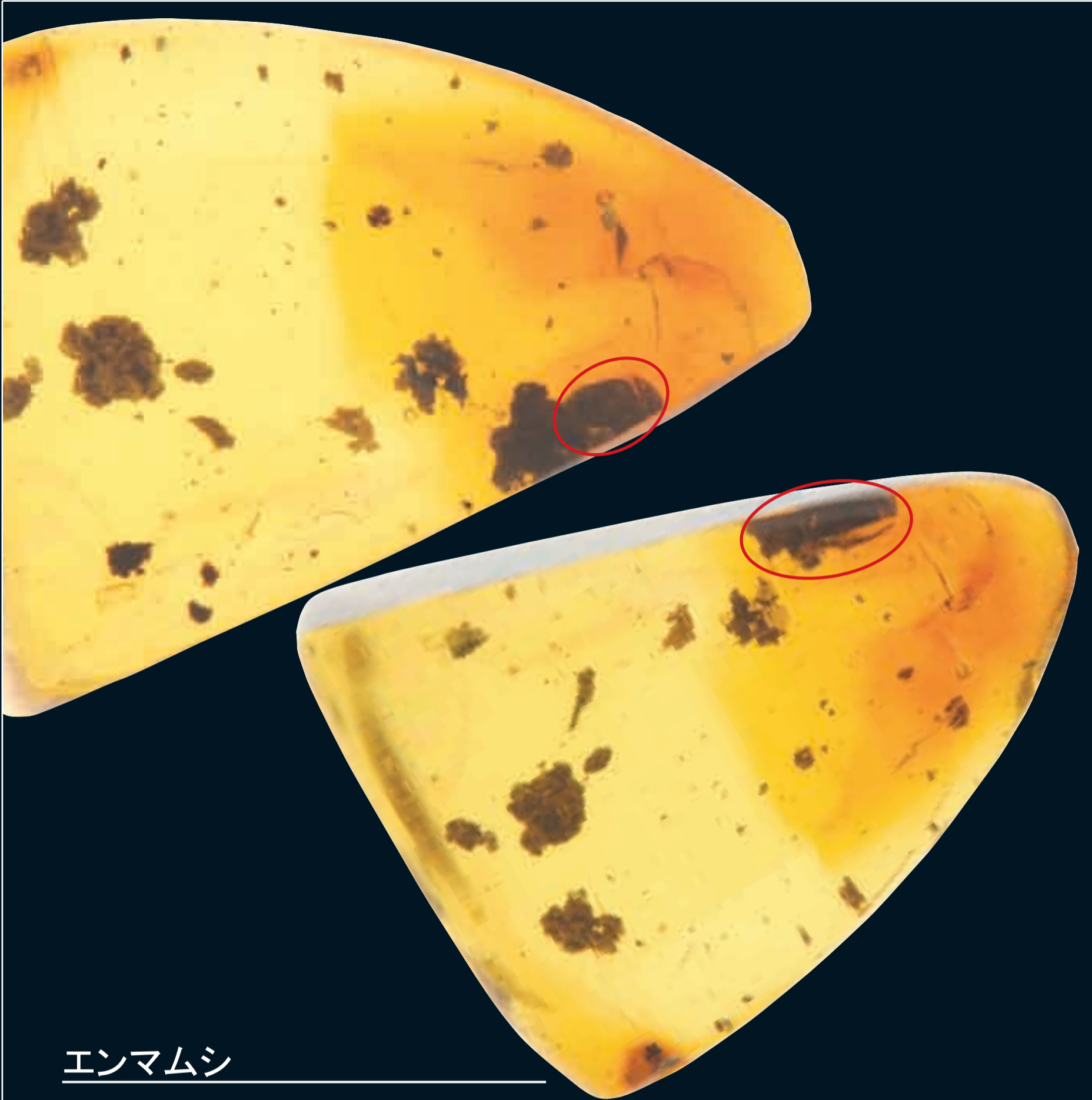
他の化石と同様、ドミニカ共和国で発見された琥珀化石もまた1つの重要な事実を提示している。生命は何千万、何百万の時を経ても変化していない、すなわち進化などしていないということだ。蚊は常に蚊として、アリはアリとして、ハチはハチとして、トンボはトンボとして、クモはクモとして存在してきている。簡単にいえば、すべての生物は世界に発生したその瞬間からの同じ機能をそのまま有しており、かつ、同じ形を保っている。琥珀に何百万年も保存されていた生命は、現在見られる同じ生命体と全く同じなのである。これは、進化論にとっては致命的な打撃であり、繰り返すが、創造が事実であったことを実証するものである。

ウンカ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

この2500万年前のウンカの写真は、現在のウンカと全く同じものである。これらの昆虫は、何百万年も経過しているにも関わらず同じ姿を保っており、これは進化論を否定するものである。

ハエトリグモ

年代：2500万年前
寸法：16ミリメートル(0.6インチ) X 10ミリメートル(0.3インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊山間
時代：斬進世

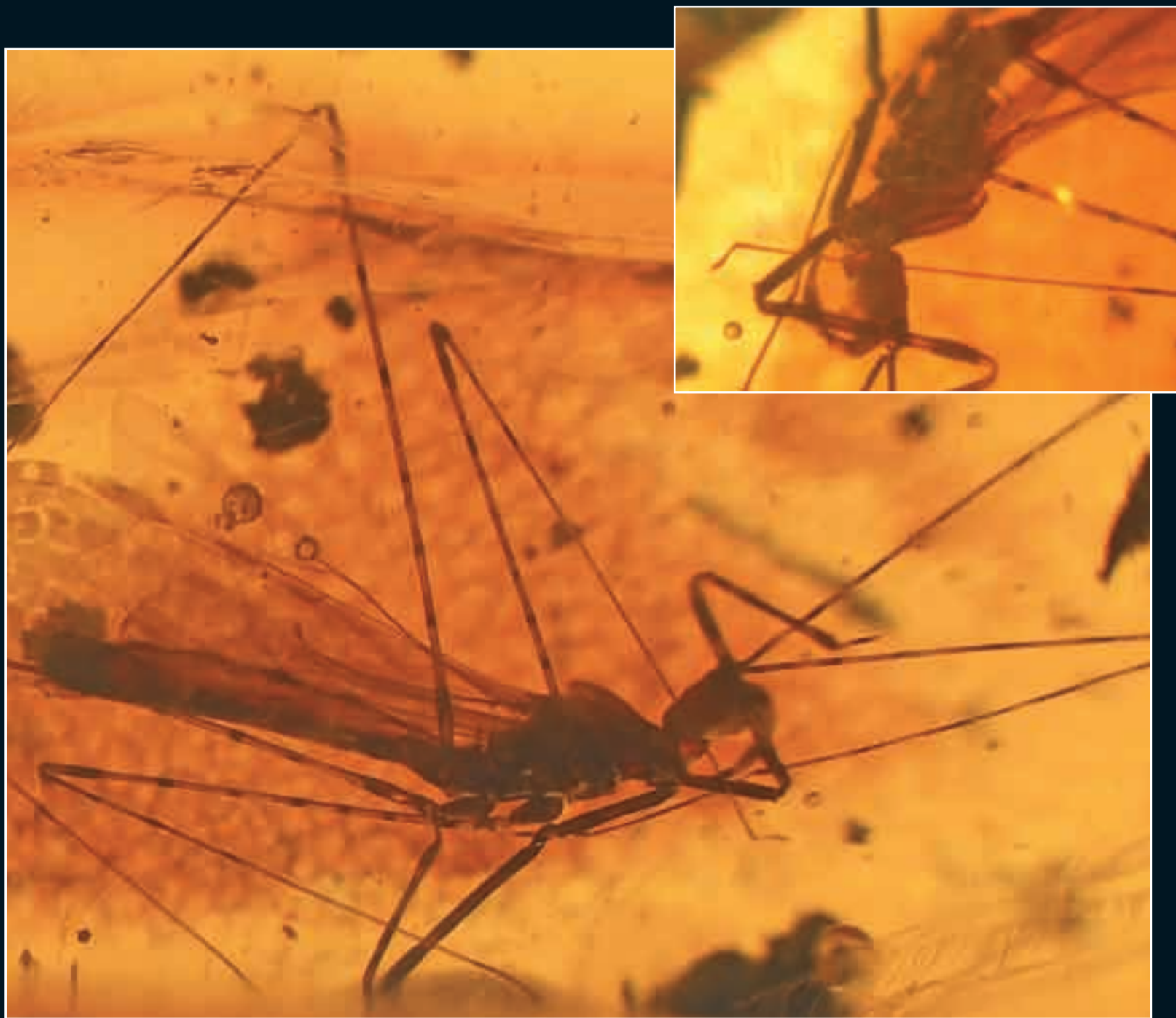
この琥珀の一片には、ハエトリグモ科(Salticidae)に属するハエトリグモが閉じ込められている。このクモの名前は獲物(ハエ)に飛びかかるところから由来され、自分の身長の50倍の高さまでジャンプすることが可能である。頭部前部にある4つの目に加え、さらに獲物を識別するために使用されている4つの小さな目が機能は完全なままその近くに並ぶ。
現在のこの種に対応するものと同様、何百万年前に生きていたハエトリグモは、完全で完璧な構造をしている。何百万年を経て、構造には何の変化も発生していない。この写真に見られる2500万年前の琥珀がそれを証明している。

エンマムシ

年代：2500万年前
寸法：11ミリメートル(0.4インチ) X 9ミリメートル(0.3インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊山間
時代：漸進世

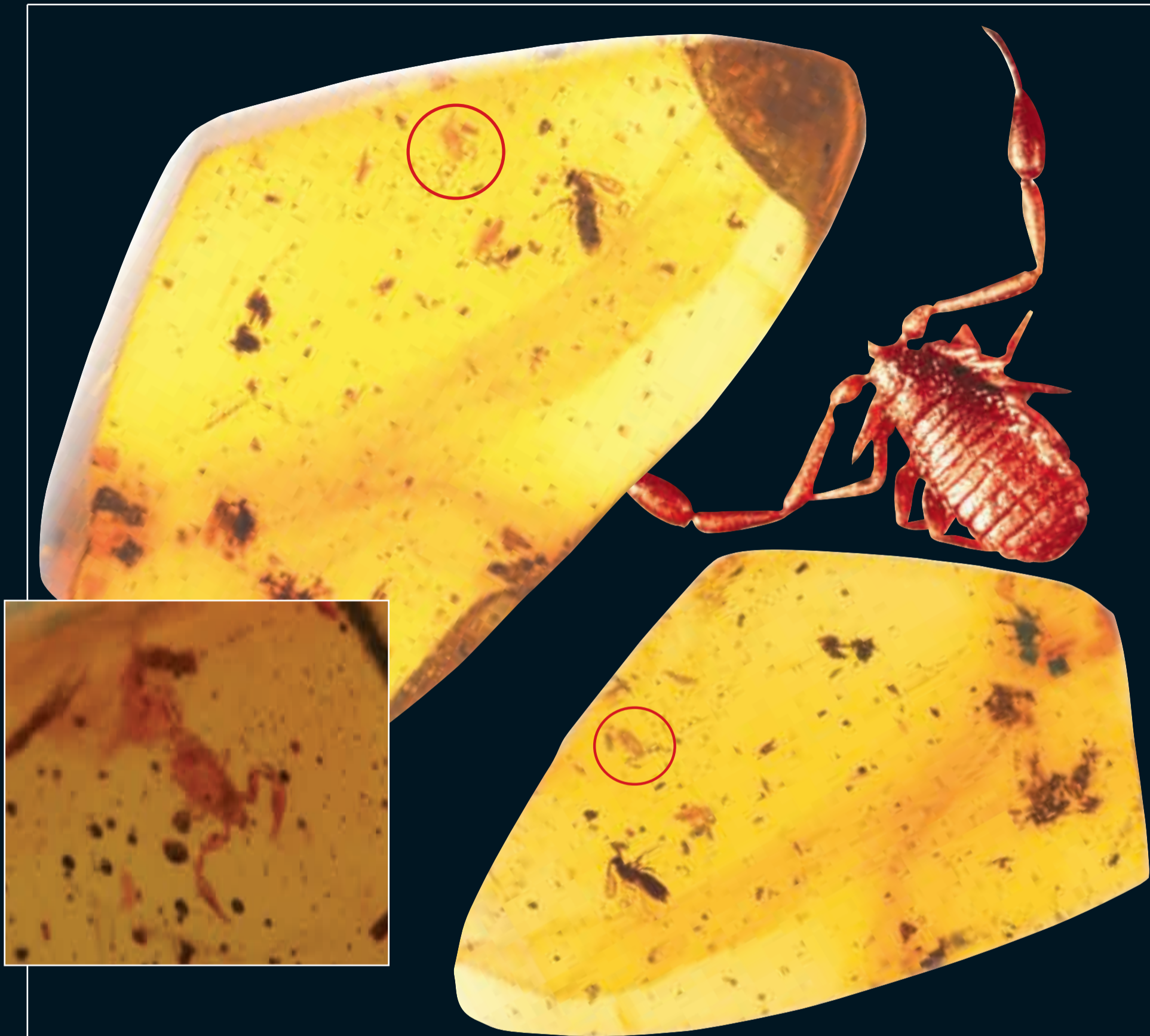
エンマムシは通常アリの巣の近くに生息している。この2500万年前の化石は、昆虫が進化の影響を受けていないことを証明するものである。この何百万年も昔のエンマムシと現在のものとでは全く違いは見られない。

クロタマゴバチ

年代：2500万年前
寸法：17ミリメートル(0.6インチ) X 10ミリメートル(0.3インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊山間
時代：斬進世

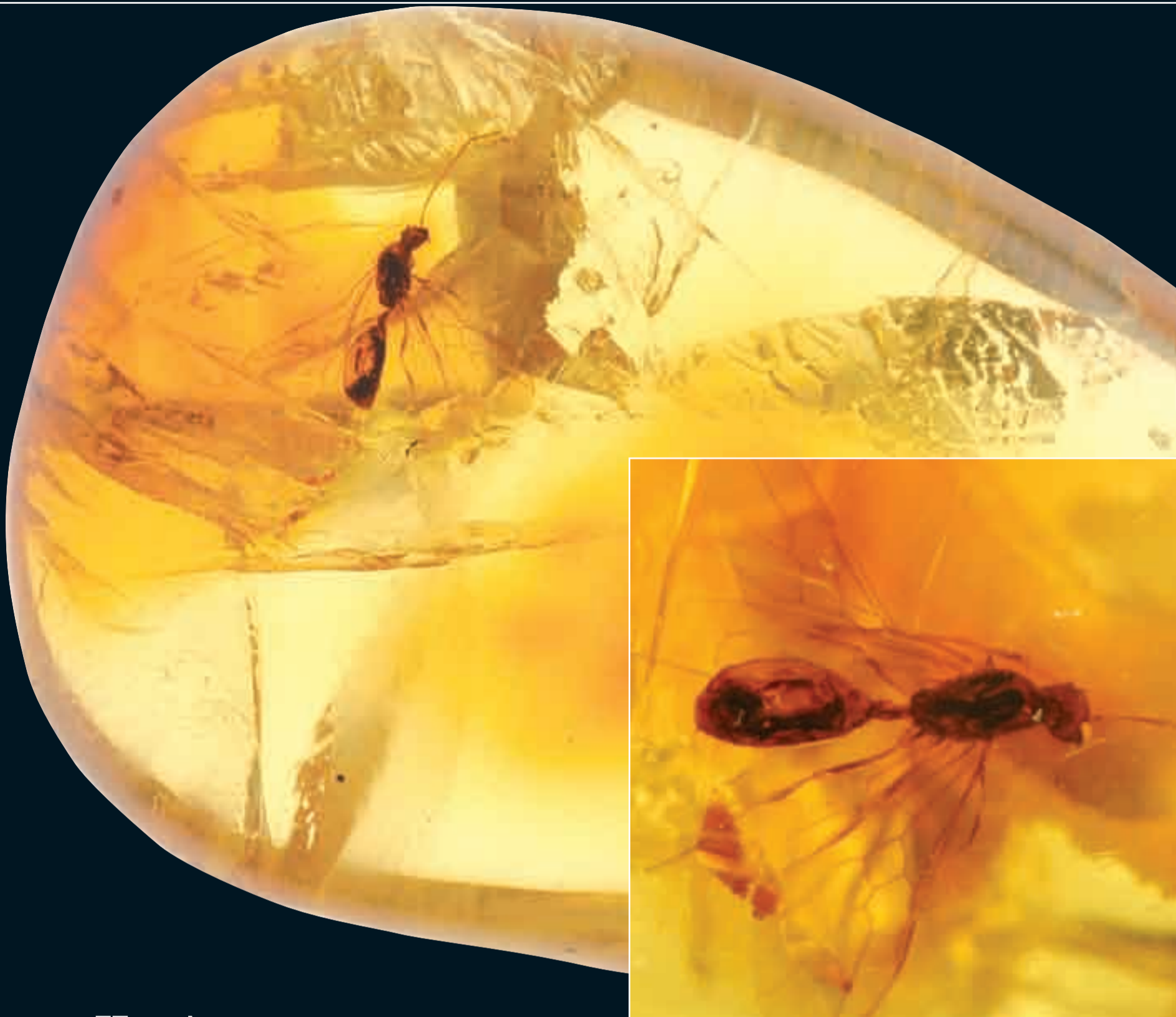
クロタマゴバチは、通常落ち葉の下に生息している。この種は他の多数の種類の昆虫に寄生し、特にタマゴを産みつけることで知られている。この写真のクロタマゴバチは、飛行中に化石化されたもので、姿は現在の種と何ら変わるところはない。
この琥珀に閉じ込められた2500万年前のクロタマゴバチは、この種類の昆虫が他の生物と同様進化しなかったことを示すものである。

サシガメ

年代：2500万年前
寸法：全長18ミリメートル(0.7インチ)、幅14ミリメートル(0.5インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊山間
時代：漸進世

この琥珀の一片には、サシガメの貴重な標本が閉じ込められている。サシガメは外部消化と言われる捕食方法を用いる。液を吸い込んだ後、獲物の組織を液化する分泌物を放出する。毒素は急速に効果を発揮し、数秒間で獲物を無力にさせる。一部のサシガメは活発に獲物を探すが、横たわって獲物を待つ種類もある。この標本の羽は、非常に良好な状態で保存されている。
現代のサシガメは2500万年前に生息していたものとすべて同じ機能を有している。この写真の化石は、サシガメが何百万年も全く同じ特徴を保持し、進化していないことを証明するものである。

ニセサソリ

年代：2500万年前
寸法：長さ17ミリメートル(0.6インチ)、幅11ミリメートル(0.4インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊山間
時代：斬進世

ニセサソリはサソリに似てはいるがクモに属し、サソリ特有の長い尾と毒針を持っておらず、ハサミを用いて獲物を捕らえる。ニセサソリは落ち葉の下や地下、岩などの下に見られる。知られているだけでも2千種類以上のニセサソリが存在する。2500万年前に生息していたニセサソリと現在のものとの間に相違は見られない。解剖学的な相違がないということは、ニセサソリは進化していないということを証明するものである。

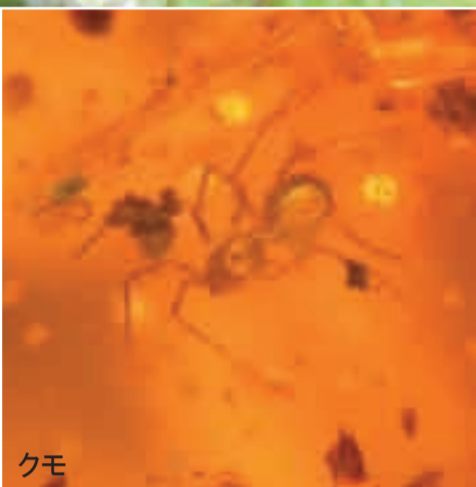
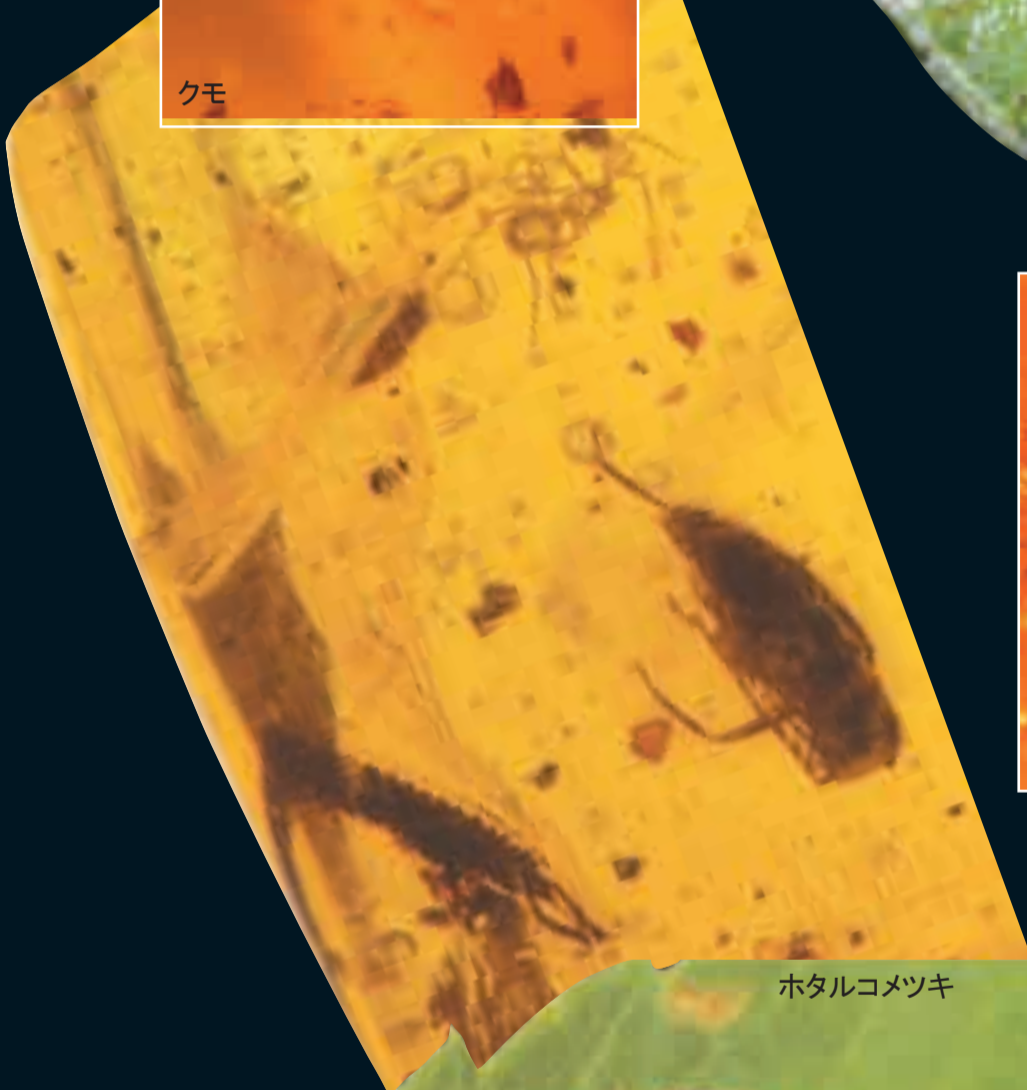
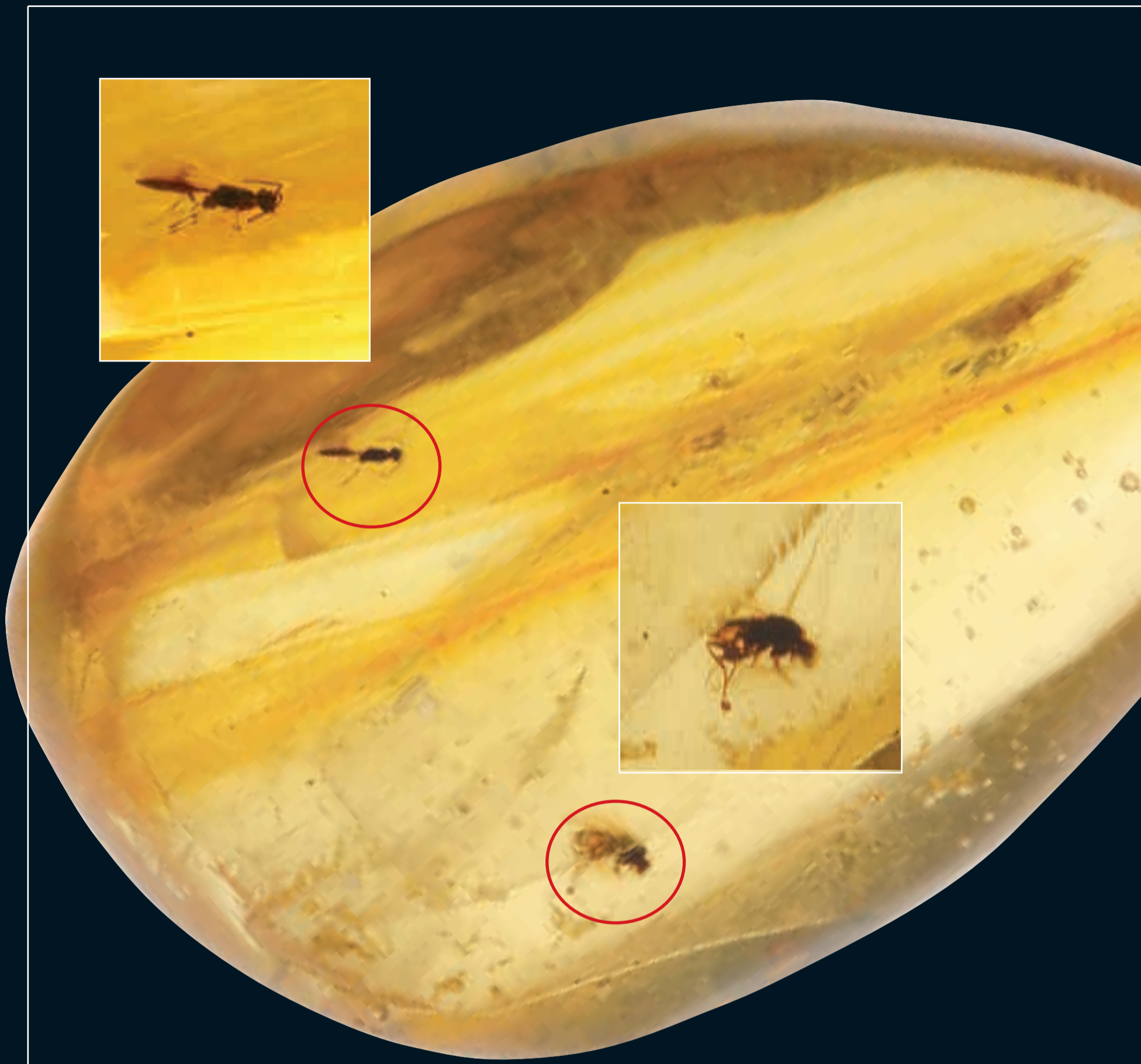
羽アリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

羽アリは、長さ5〜8ミリメートル　(1.9 〜 3.1インチ)の長い羽根を持つ。食物や水の源の近くに巣を構える。このアリもまた何百万年もの間、全く変化していない。
2500万年前の琥珀に閉じ込められた化石の羽アリは、この昆虫が何万年もの間全く変わらずにいたことを示し、言い換えれば進化を遂げていないということになる。

ホタルコメツキ、ヤスデ、クモ

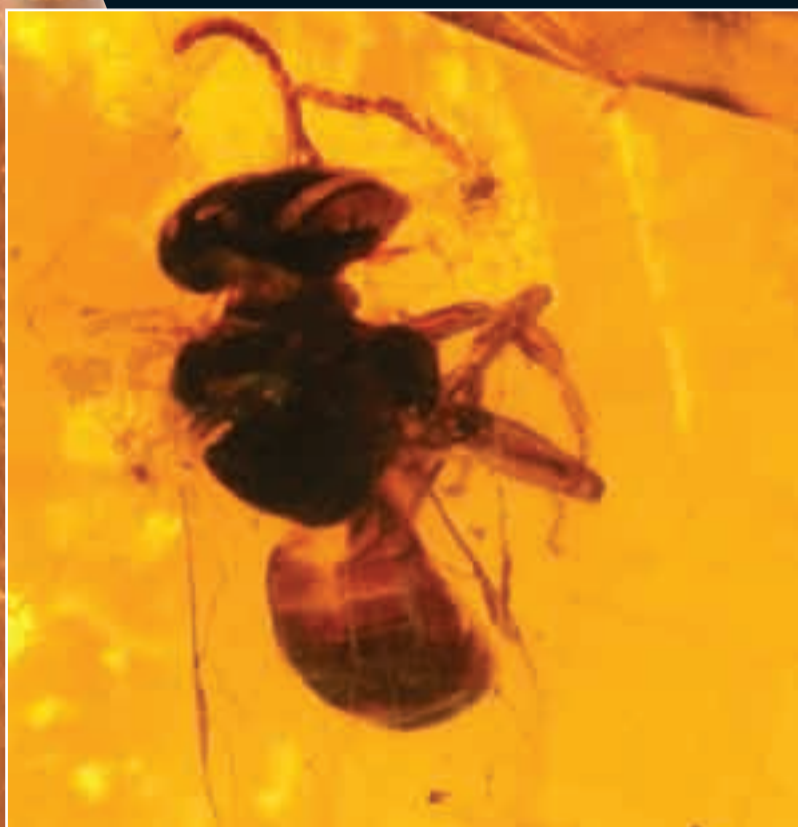
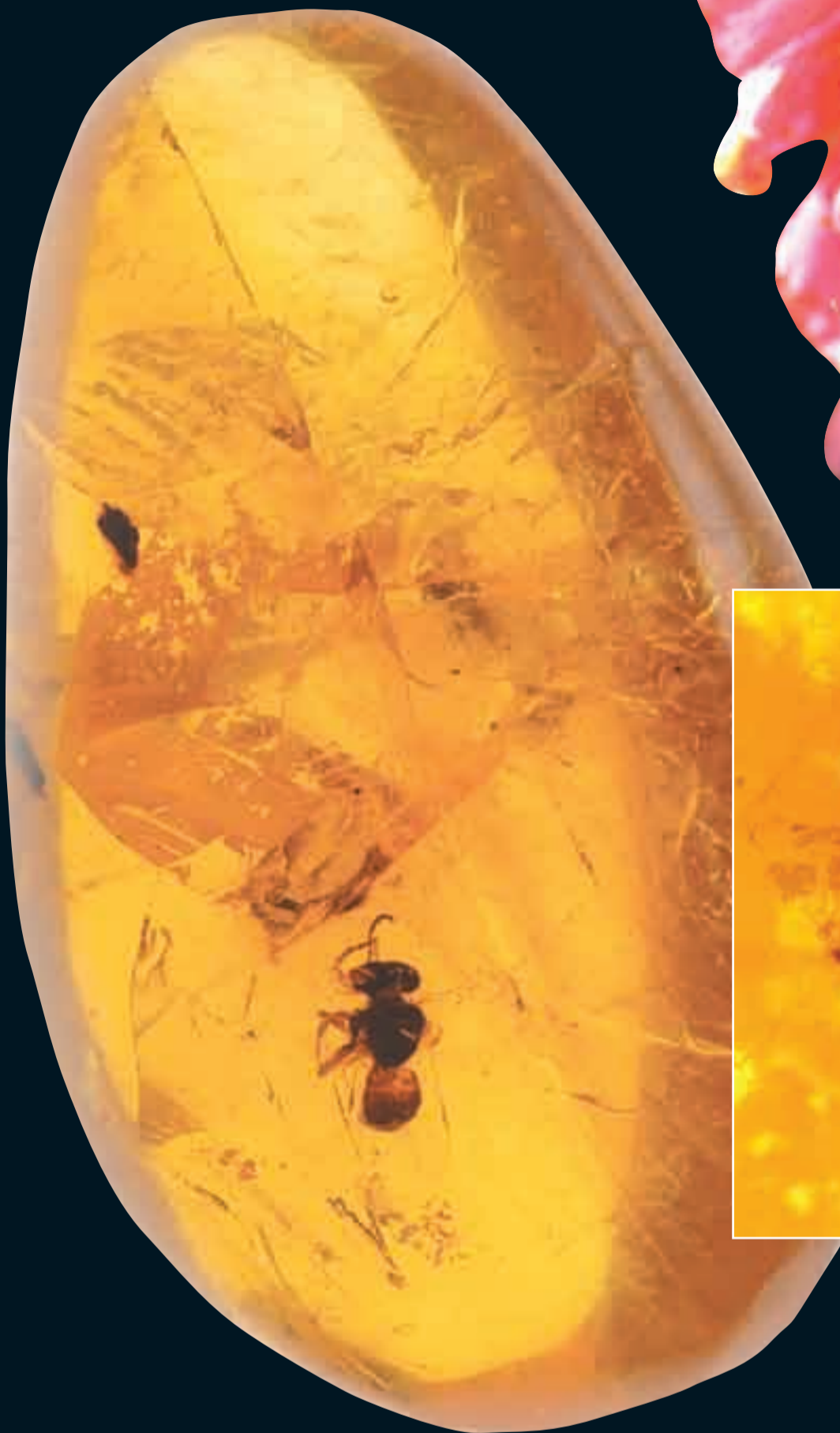
年代：2500万年前
寸法：15ミリメートル(0.5インチ) X 13ミリメートル(0.5インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊山間
時代：斬進世

この昆虫はアカハネムシ科(Pyrochroidae)に属し、一般的にはホタルコメツキまたはヒカリコメツキと呼ばれている。角ばった触覚でこの種が区別される。この琥珀の固まりには、ヤスデとクモも中に閉じ込められている。
ホタルコメツキ、ヤスデ、クモは何百万年もの間変化しておらず、これにより、生物は1つの種から次の段階へと進化していないが、一斉にその特徴を与えられ神によって創造されたことを示している。

クモ
クモ
ヤスデ
ホタルコメツキ

寄生バチとタイコバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

この2500万年前の寄生バチとタイコバチの化石は、他の生物と同様、これらの種が進化していないことを示している。これらの昆虫は何百万年も同じ姿をしており、全く変化していない。

小型寄生バチ

ハリナシバチ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

この琥珀内のハリナシバチの化石は、現在見られるものと全く同じものである。

羽アリ、タマバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

2500万年前から変わらず生息し続けている羽アリとタマバエは、進化論を崩壊させるものである。

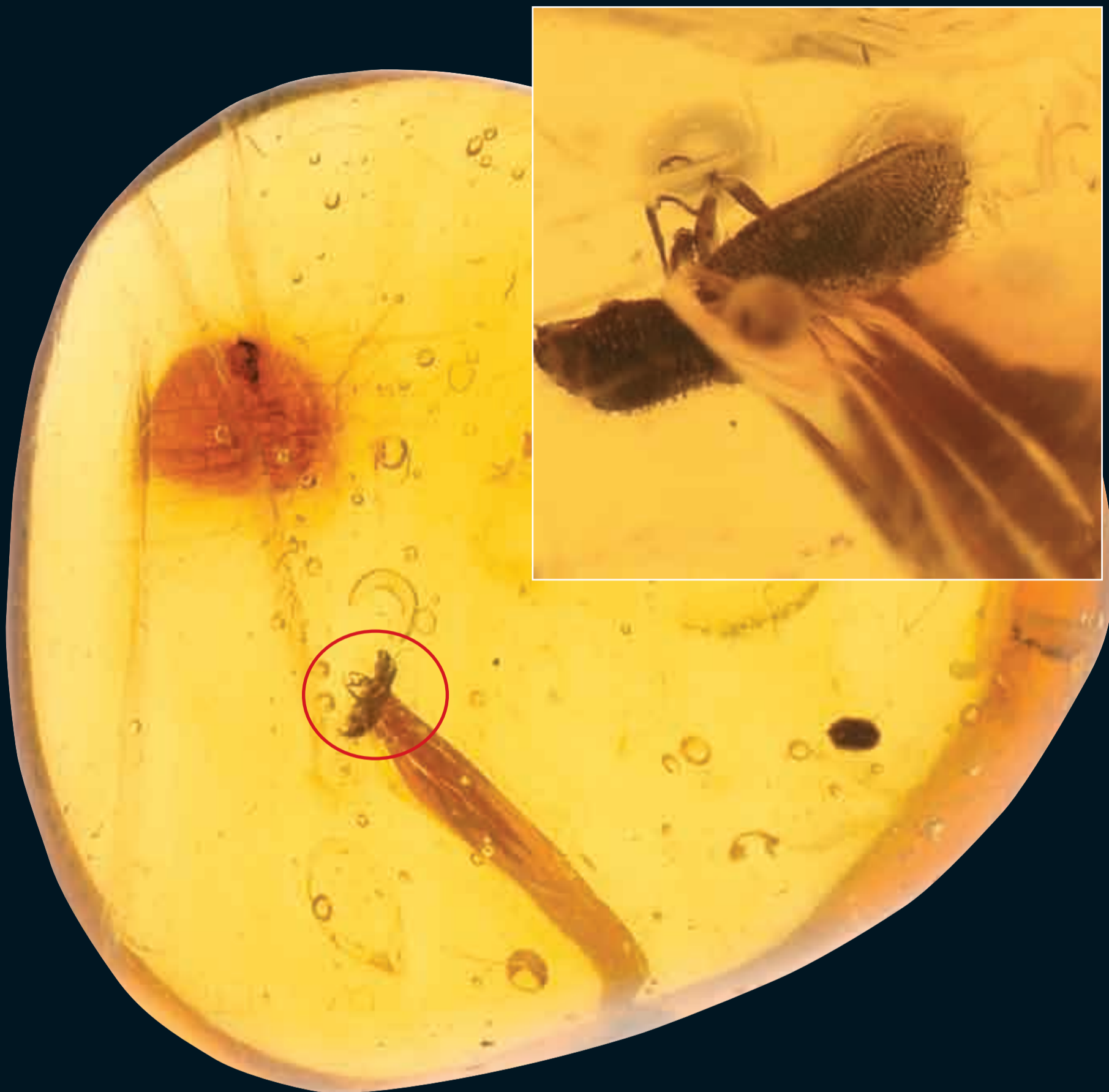
クモとクモの巣

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

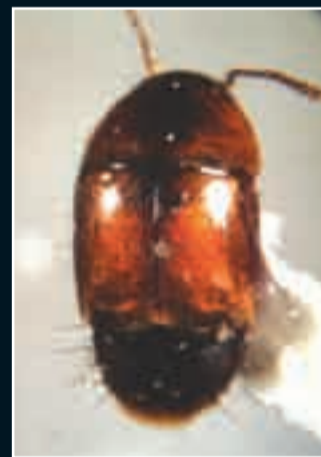
他の生物と同様、クモは何百万年も前からその構造を変えることなく生息し続けている。琥珀に保存されたこのクモとクモの巣は2500万年前のものである。今日の同種のものと全く同じである。これらは、この種が創造されたものであり、進化したものではないということを表している。

チャタテムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

何千種類にもわたる昆虫種に属する数え切れない化石標本が現在存在している。これらの化石はすべて、最初にこの地上にもたらされた時からその特徴は同じであり、決して進化していないことを示している。2500万年前の琥珀に包まれた化石の1つは、チャタテムシが何万年という時を経ても全く変化していないことを示すものである。

キクイムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

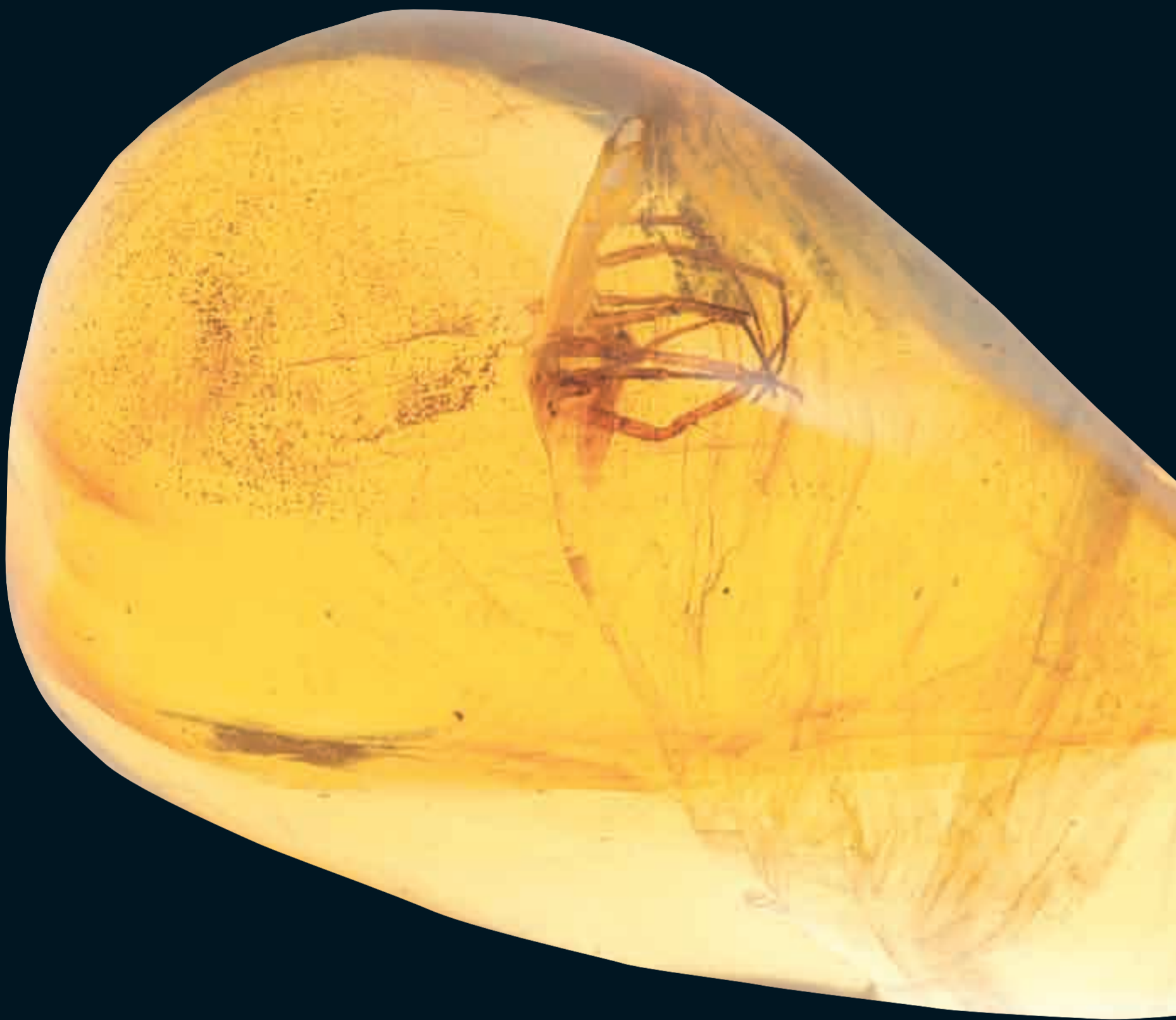
2500万年前のキクイムシは、現在のものと全く姿は変わっていない。何百万年を経ても変化していないこれらの昆虫を見ると、昆虫が進化したのではなく、創造されたのだということがよく分かる。

エンマムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

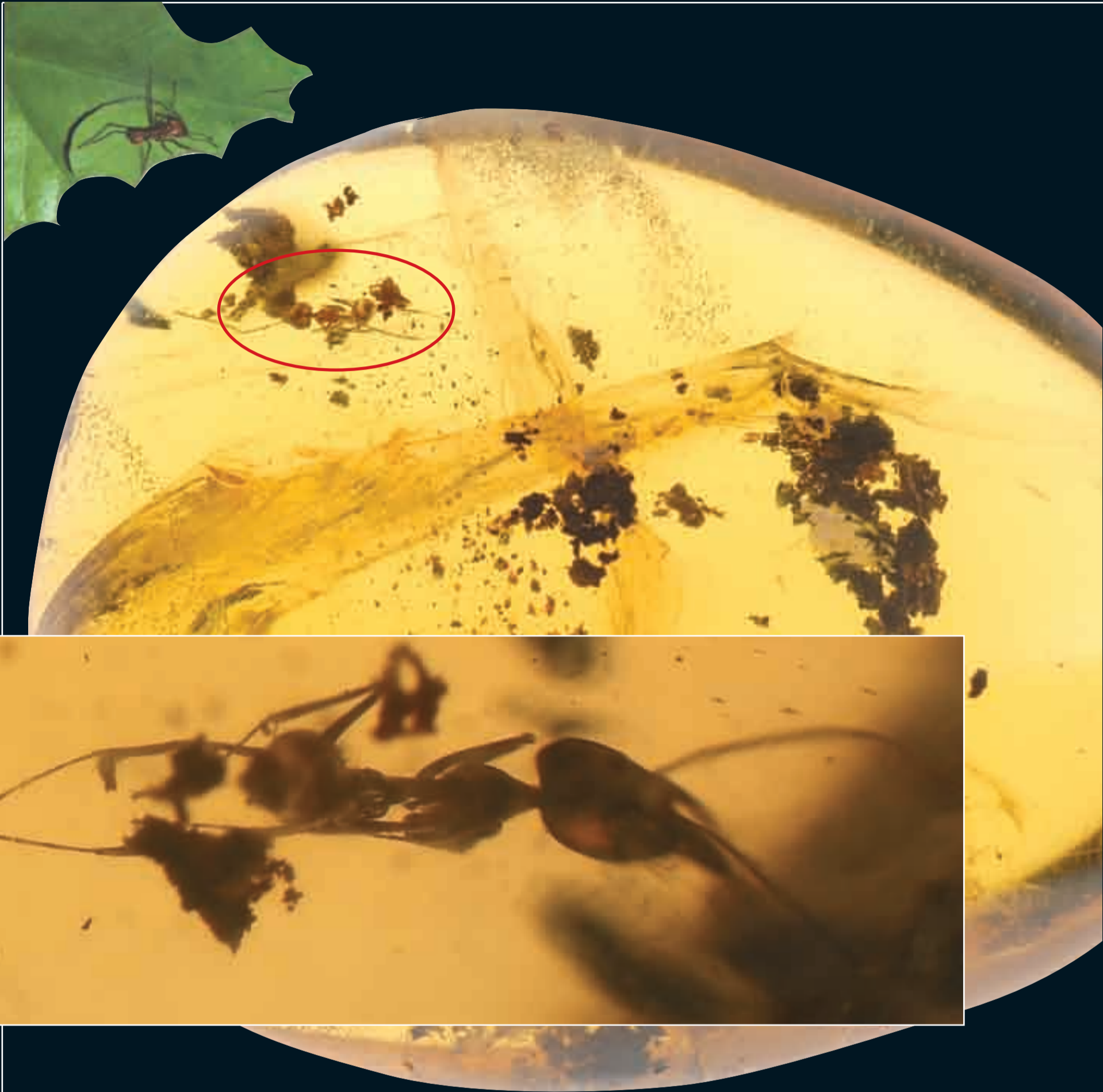
すべての化石記録は、生物が1つの種からゆっくりと伝わったというダーウィニストの主張を否定する。化石は、生物が完全で完璧な構造を持ちながら突然に出現したことを示しており、存在している間、その姿は全く変わっていないことを物語る。この明瞭な神の創造が現実のものだという証拠は、進化論では説明できない。
進化論者が説明できない標本の1つは、2500万年前に琥珀内に閉じ込められ化石化したエンマムシの化石である。このエンマムシは、進化論を否定するものである。

羽アリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

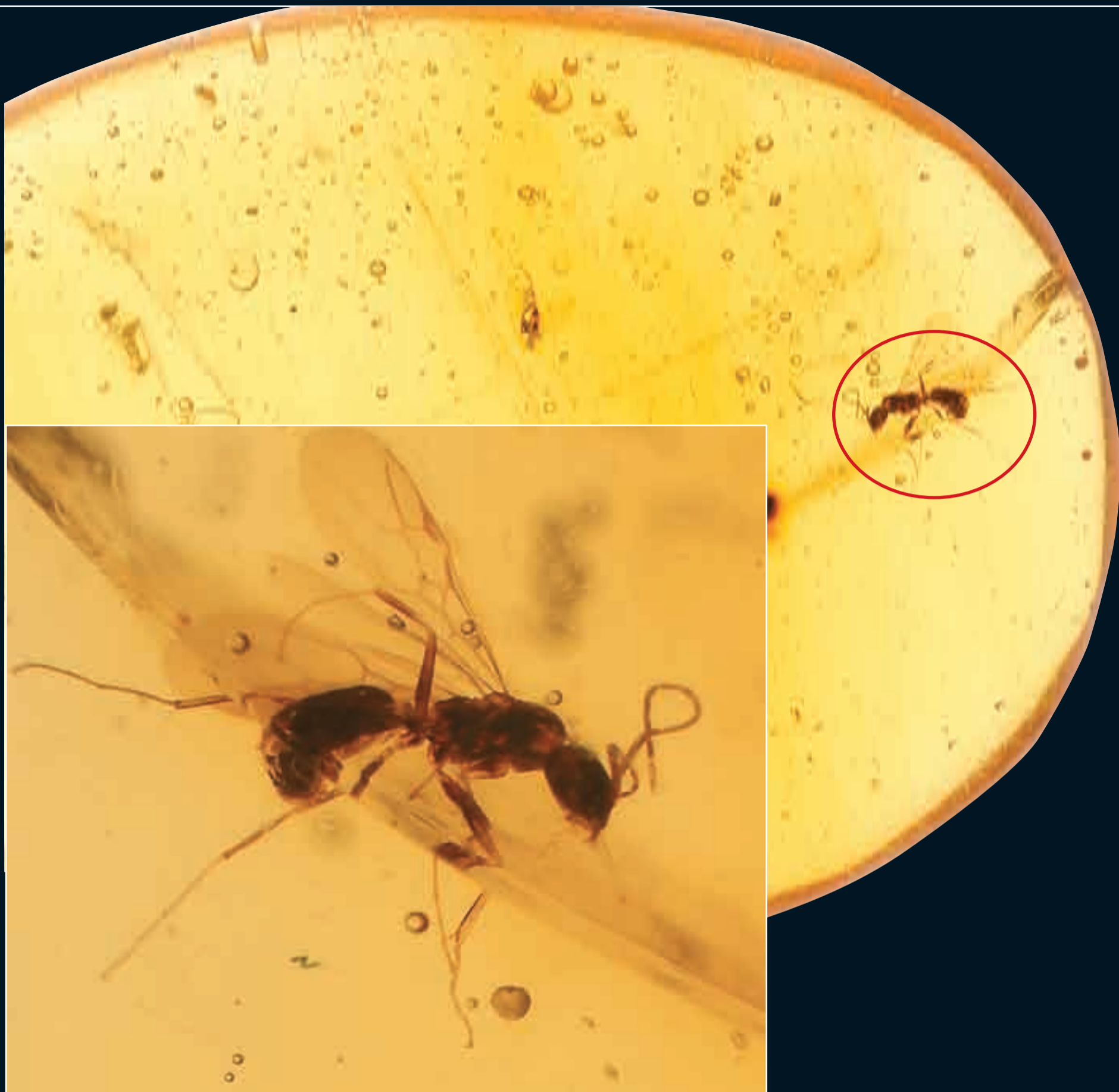
この琥珀には、内部に羽アリの化石が含まれている。今日に生息する羽アリと何百万年前に生息していた羽アリとの間に違いは全く存在しない。これは他の生物と同様、羽アリは進化しなかったことを証明するものである。

クモ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

今日のクモは何百万年前に生息していた時の特徴をそのまま有している。2500万年前に琥珀に閉じ込められ化石化したクモは、これを証明するものの1つである。

働きアリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

アリは、地球上で最も数多く存在する生物である。化石記録は、アリが何百万年もの昔から同じであり、どのような変化も経ていないことを浮き彫りにするものである。言い換えれば、全く進化していないのである。この写真の2500万年前の働きアリの化石でこの事実をしっかりと確認できる。

羽アリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

2500万年前の羽アリと今日生息するものとの間に違いは全く見られない。何百万年という時代の経過にも関わらず羽アリが同じ姿を保持しているということは、進化が発生していなかったことの証明の1つである。

チバクロバネキノコバエ

トビケラ

トビケラ、チバクロバネキノコバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

写真は、トビケラとチバクロバネキノコバエが琥珀に閉じ込められているものである。これらの生物は、構造がほんの少しも変化することなく今日まで繁栄し続けてきた。これらの昆虫が全く変化していないという事実は、昆虫が全く進化していないことの証である。

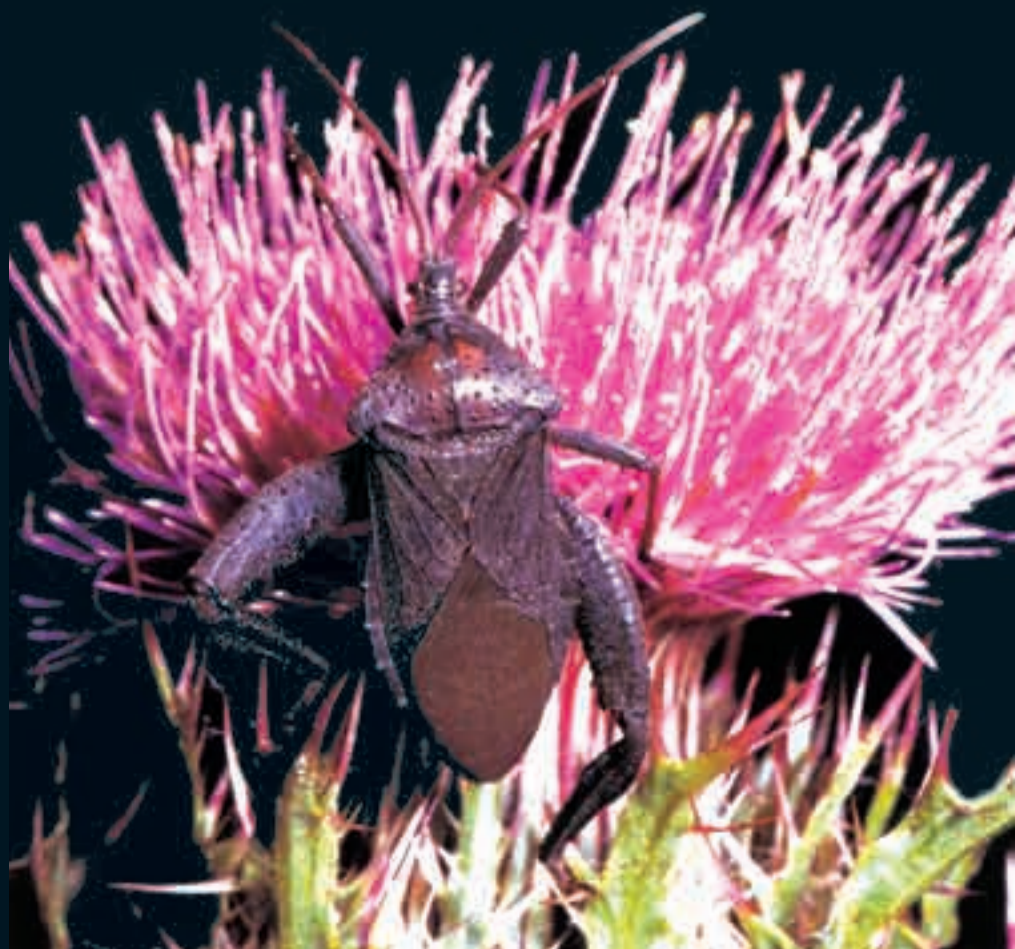
羽シロアリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

写真の2500万年前の琥珀には、羽シロアリの化石が中に入っている。これらの生物は、完璧な構造を何百万年もの間保持しており、全く構造が変化していない。

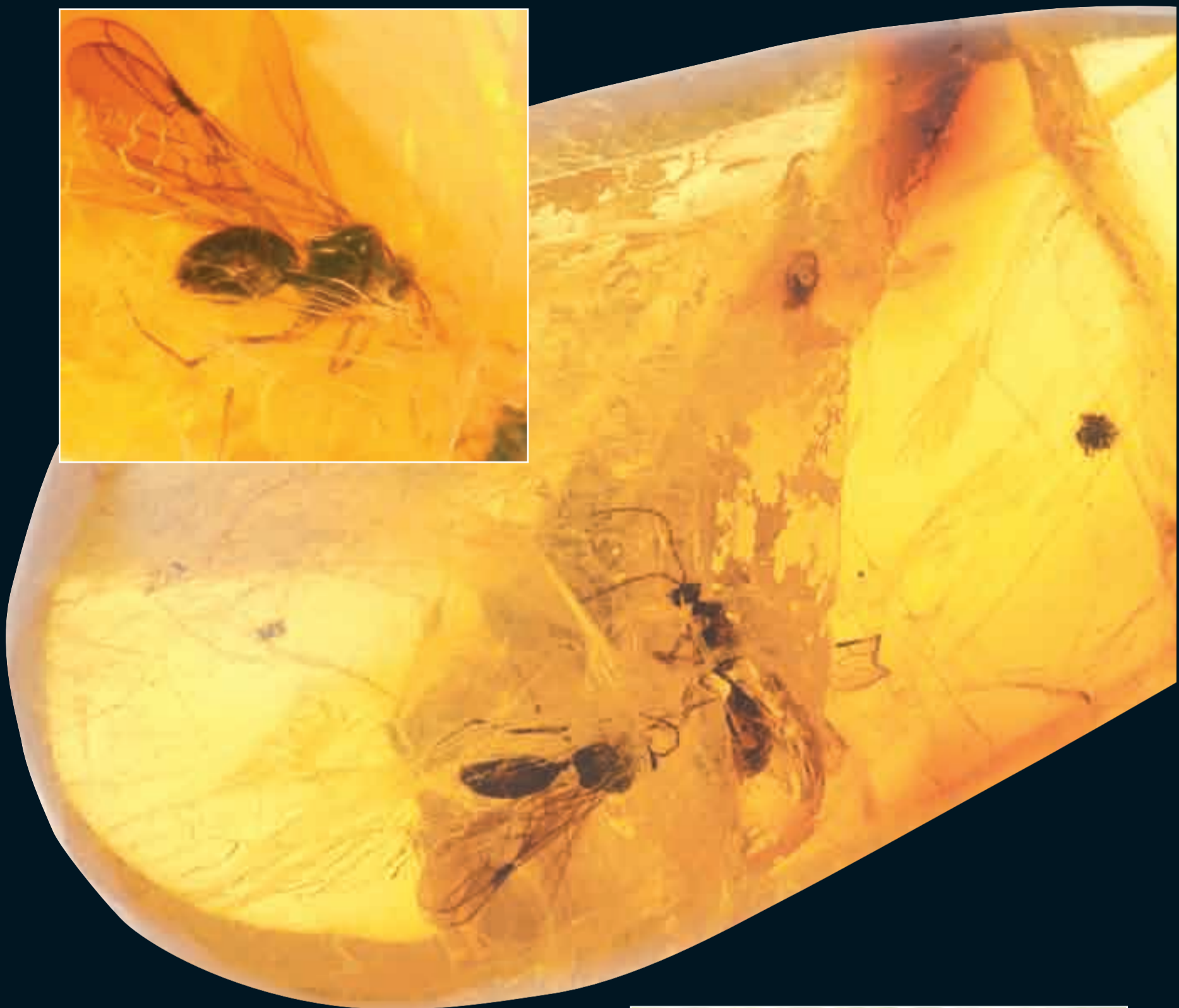
ナンキンムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

4万8千種以上も存在する半翅目(Hemiptera)に属する昆虫は、化石記録に突然姿を現し、何百万年もその姿を変えていない。他の昆虫種と同じように、この昆虫もまた進化論を否定するものである。

クモとクモの巣

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

化石化したクモとそのクモの巣は琥珀の中にも見られる。2500万年前のクモとその巣は現在のクモとクモの巣と全く同じものである。これは進化論を完全に否定するものである。

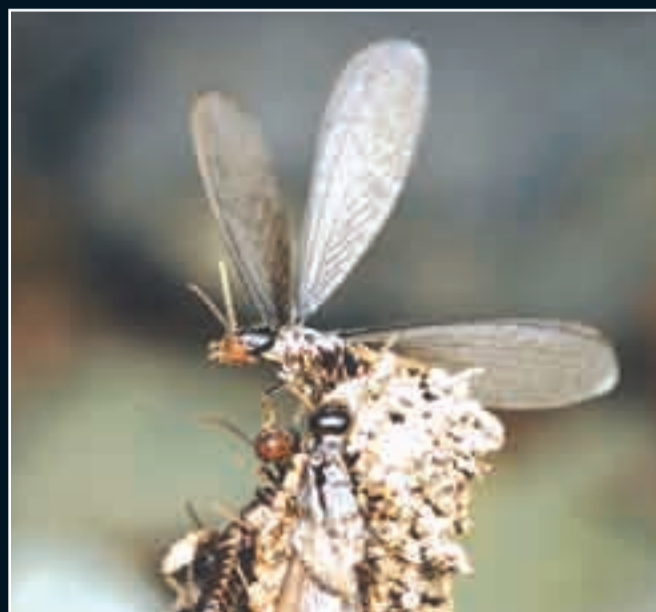
羽アリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

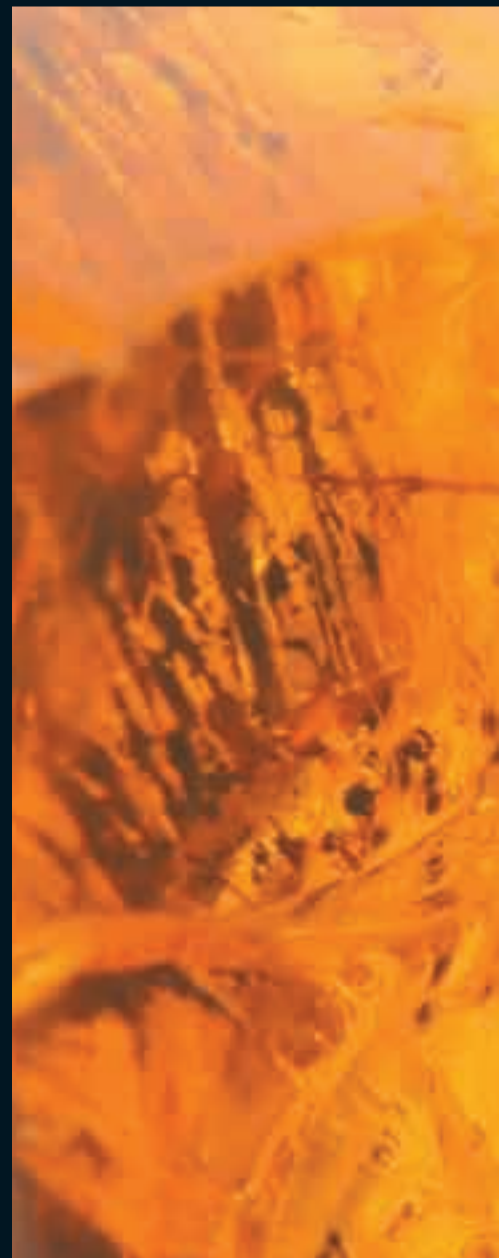
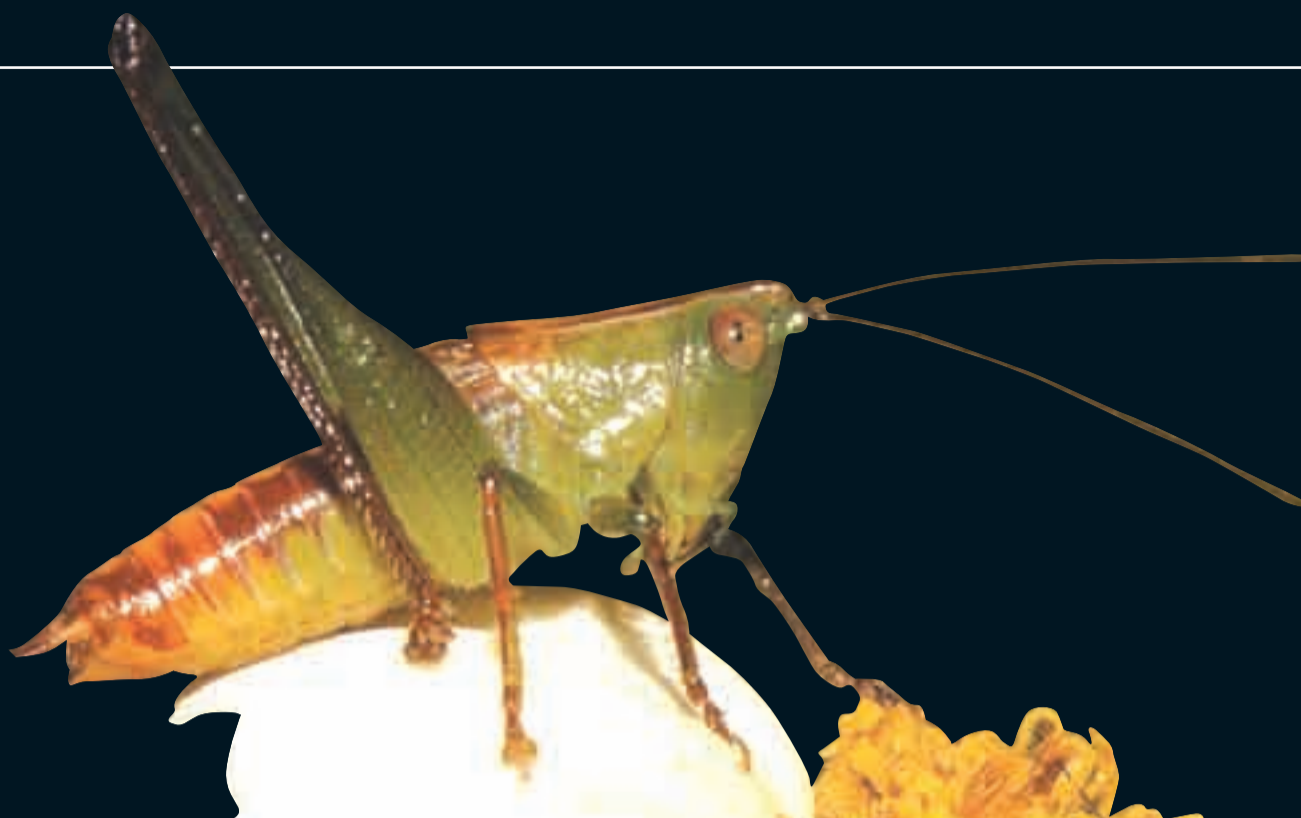
2500万年前と同じ姿を保つ羽アリの化石標本は、進化論が無効であるということを示す化石標本の1つである。生物が何百万年も同じ姿をしているということを説明できる一貫性ある科学的方法を進化論者は持っていない。

羽シロアリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

何百万年も変化せずにいる昆虫標本は進化論が行き詰まりにあることを表すものである。何百万年前もの標本と常に同じ構造をしている化石標本は、生物が進化していないことを証明するものの1つである。写真の琥珀に包まれた羽シロアリは2500万年前のものであり、現在生息しているものと全く違いがない。

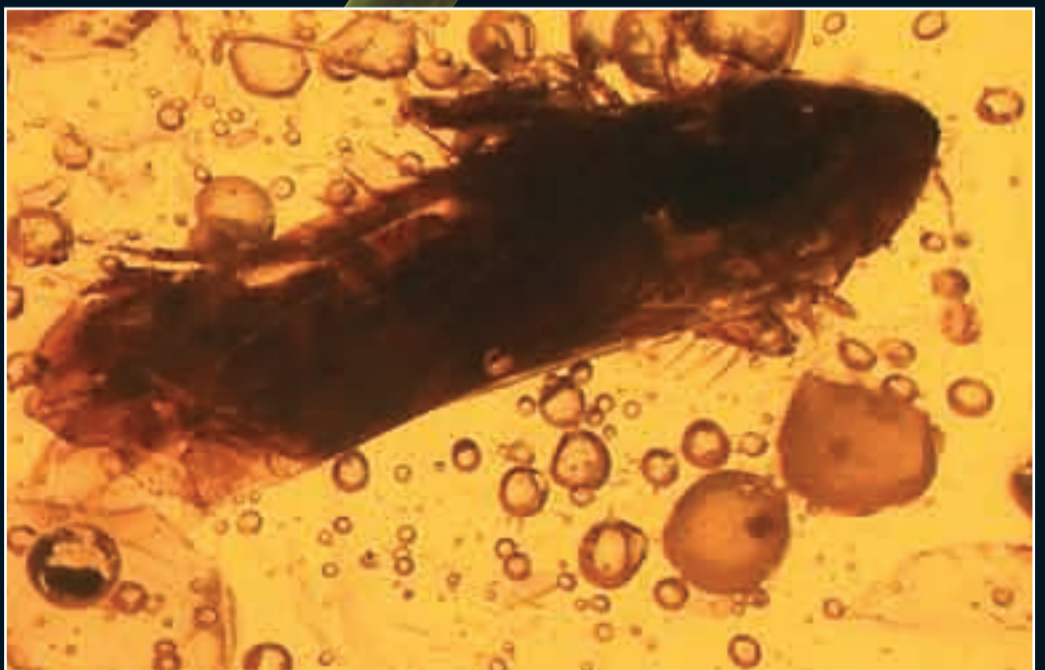
バッタ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

化石化されたバッタは、今日に生息するものと全く同じものである。2500万年前に生息していたバッタが現在のものと同じであるという事実は、進化が発生していないことを示すものである。

クロタマゴバチ

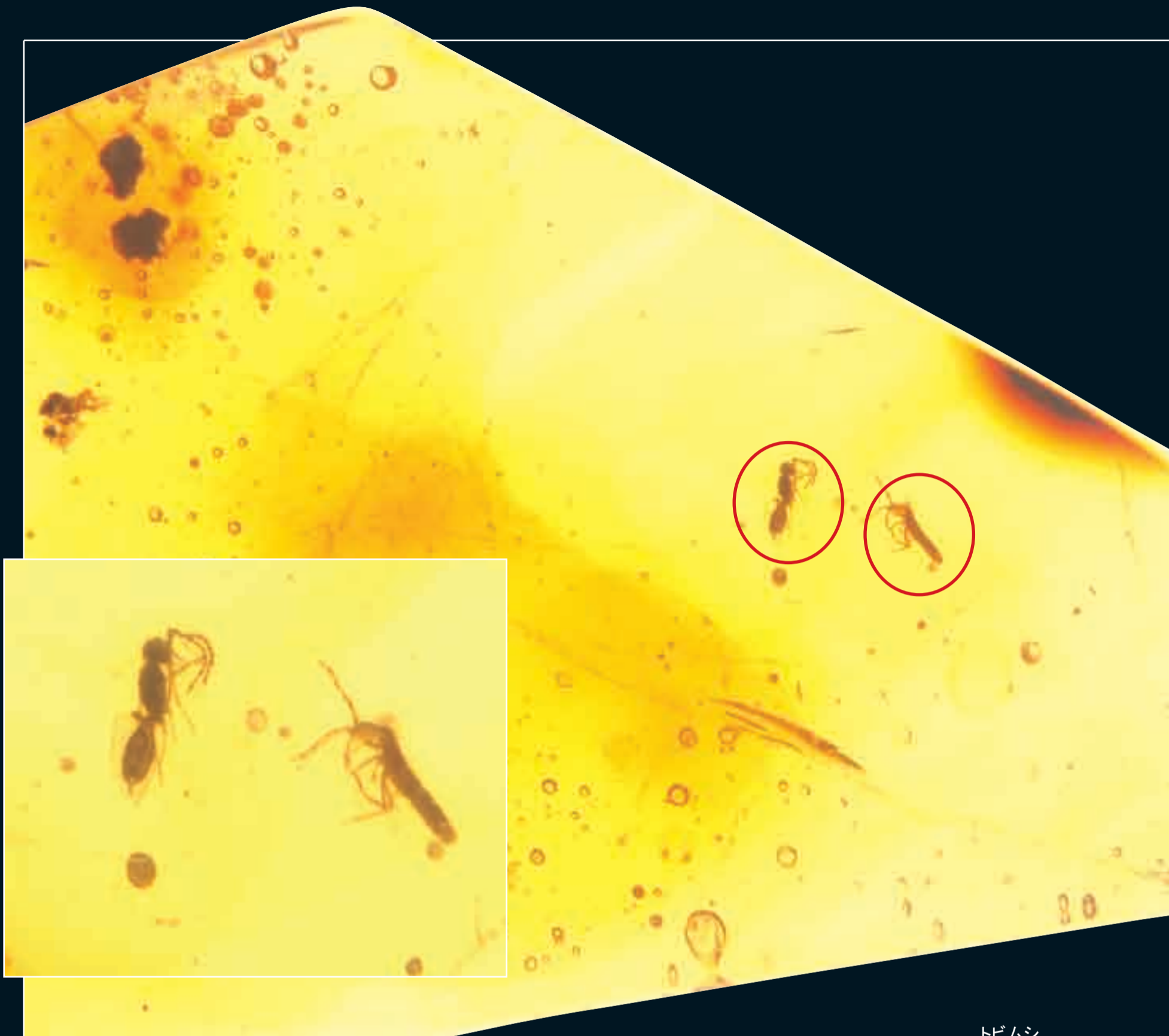
ヨコバイ

クロタマゴバチ、ヨコバイ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

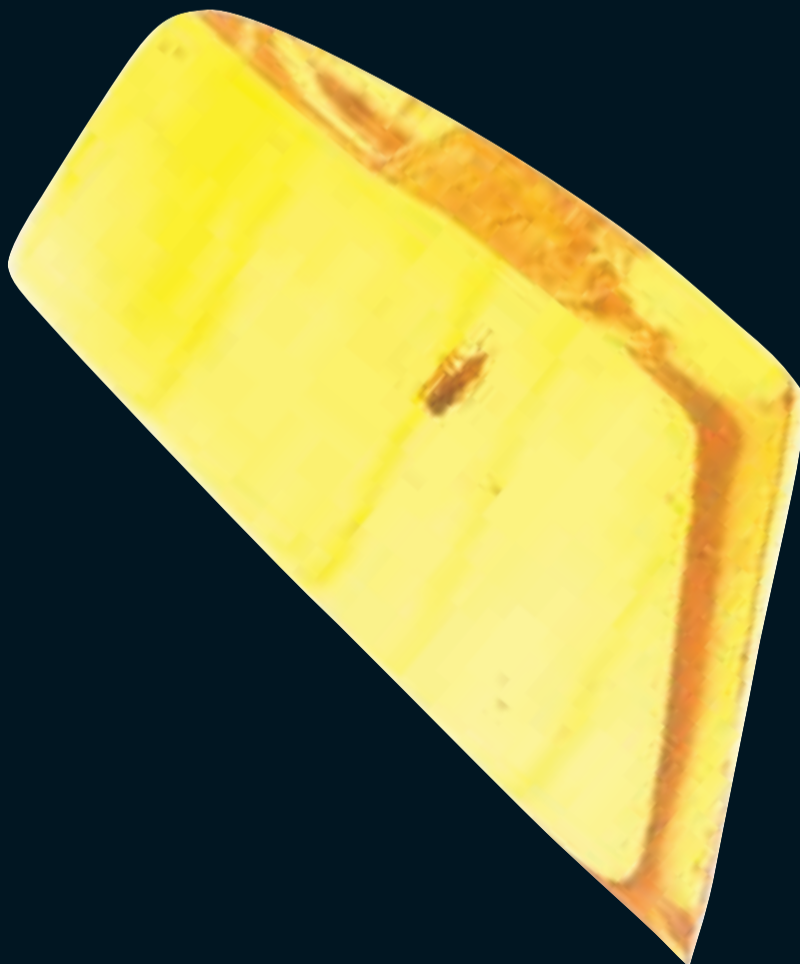
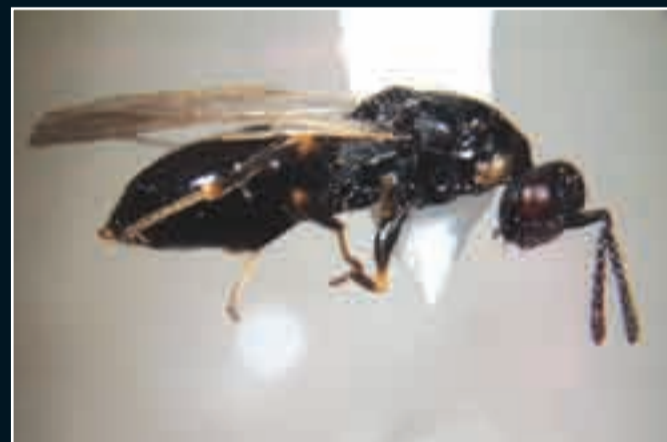
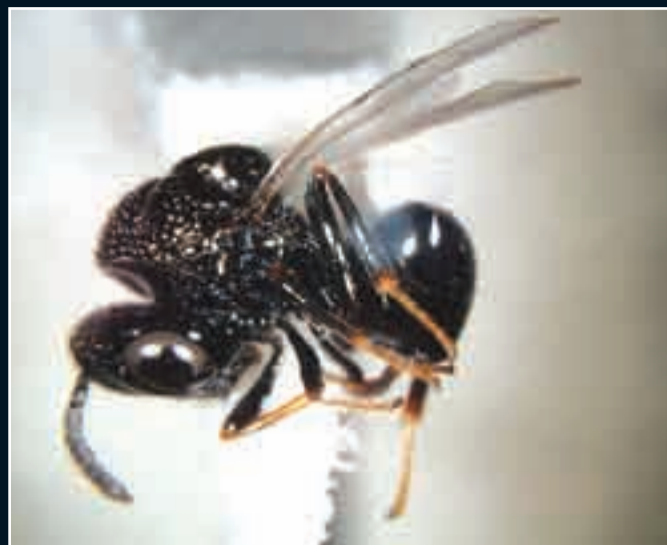
クロタマゴバチとヨコバイは2500万年前に琥珀内で化石化されている。何百万年もの間変化することなく存在してきたクロタマゴバチとヨコバイは進化論を否定するものである。

ナガキクイムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

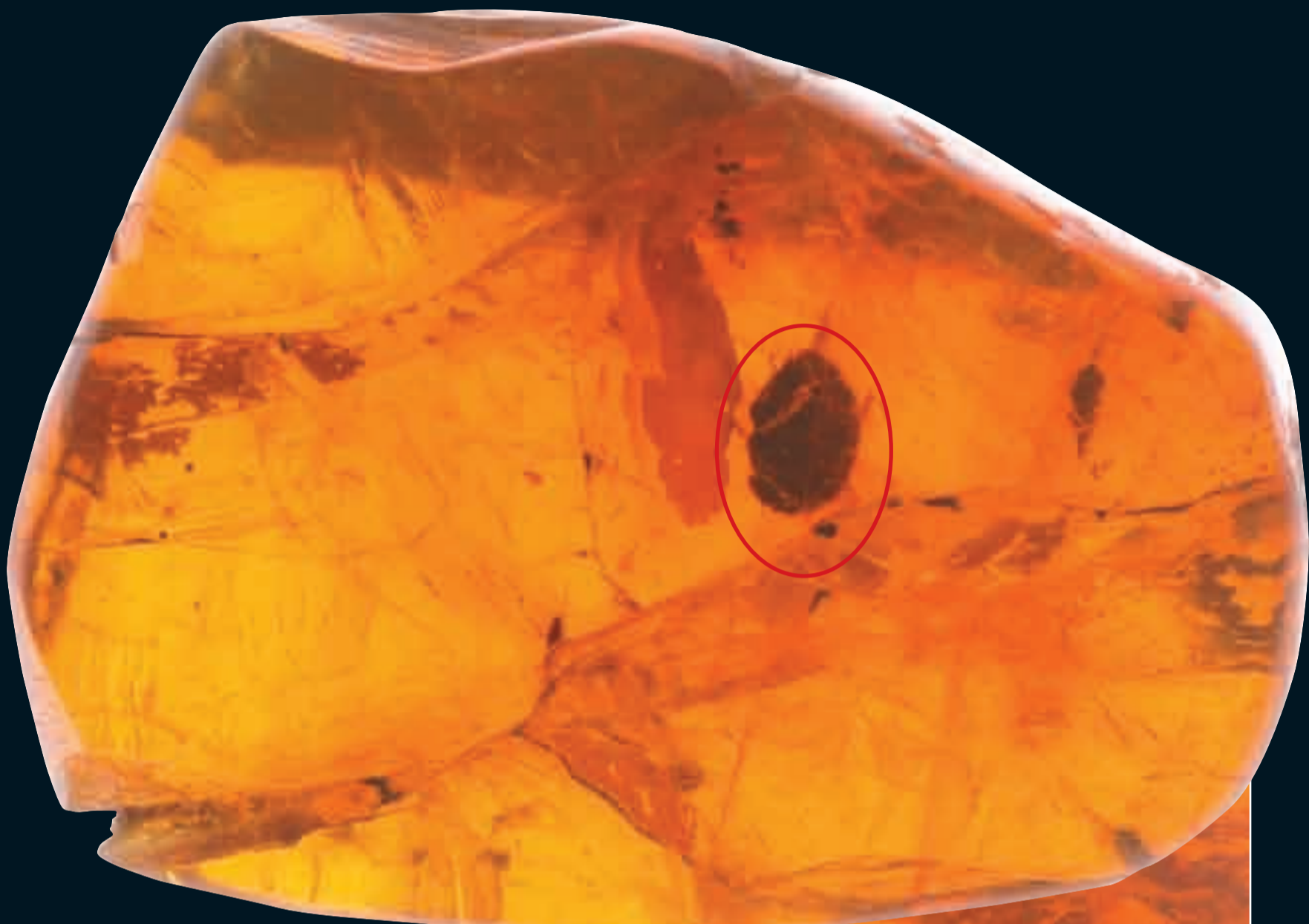
進化論者たちが、甲虫類が進化したことを示す化石をたった1つも発見できないでいる中、数えられないほどの化石は生物が進化していないのだということを証明している。他の生物と同様、昆虫はすべての特徴を持ちながら突然現れており、何百万年も同じ姿を保持している。これを証明する発見の1つに、2500万年前琥珀に閉じ込められたナガキクイムシの化石がある

トビムシ

寄生バチ、トビムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

進化論は化石の発見の前には打ち負かされ苦戦を呈している。その一例は、この写真の2500万年前の琥珀に閉じ込められた寄生バチとトビムシの化石である。現在のものと全く違いは見られず、これらの古代の節足動物は、神の創造が事実であったことを示すものである。

ハエヤドリコガネコバチ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

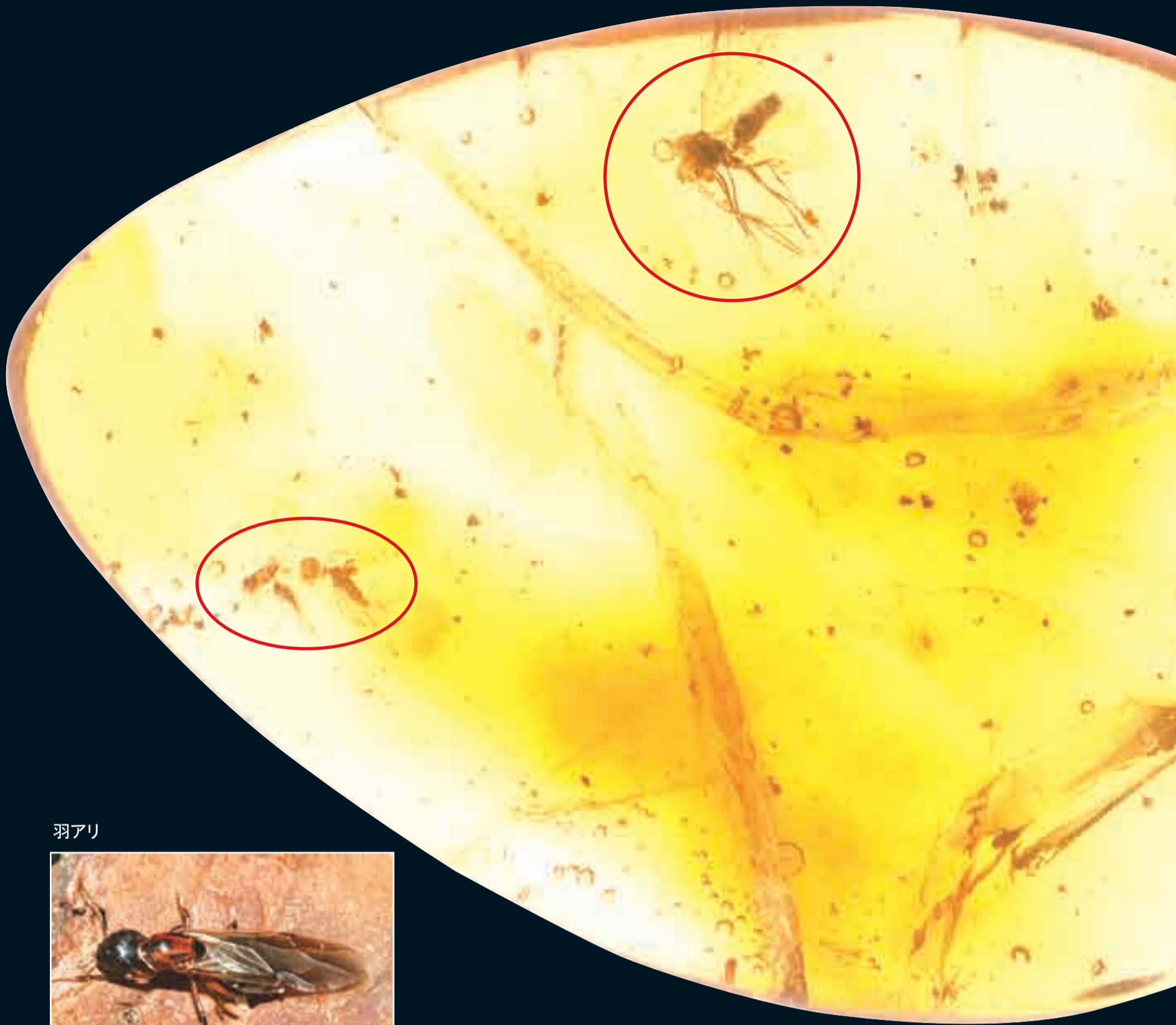
ハエヤドリコガネコバチは、何百万年前から変化していない。言い換えると、全く進化していないのだ。この議論の余地のない科学的事実は、化石記録によって明らかにされている。その一例は、この写真の2500万年前の古代の琥珀に包まれたハエヤドリコガネコバチである

ハネカクシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

ハネカクシは鞘翅目(Coleoptera)に属する。ハネカクシとともに他の小型の甲虫も琥珀に閉じ込められ化石化している。2500万年前と同じ姿を有するハネカクシは進化論者の主張を退けるものである。

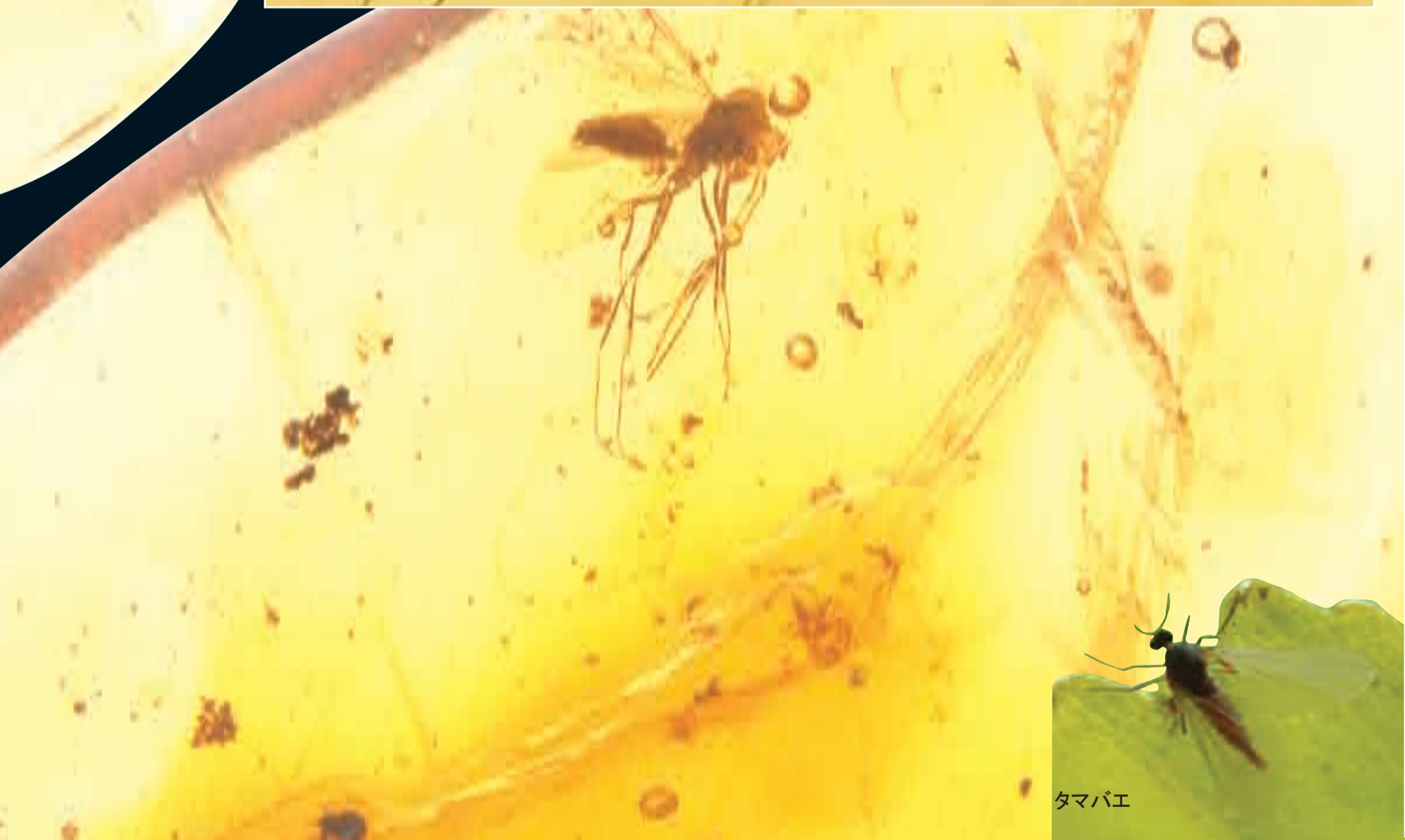
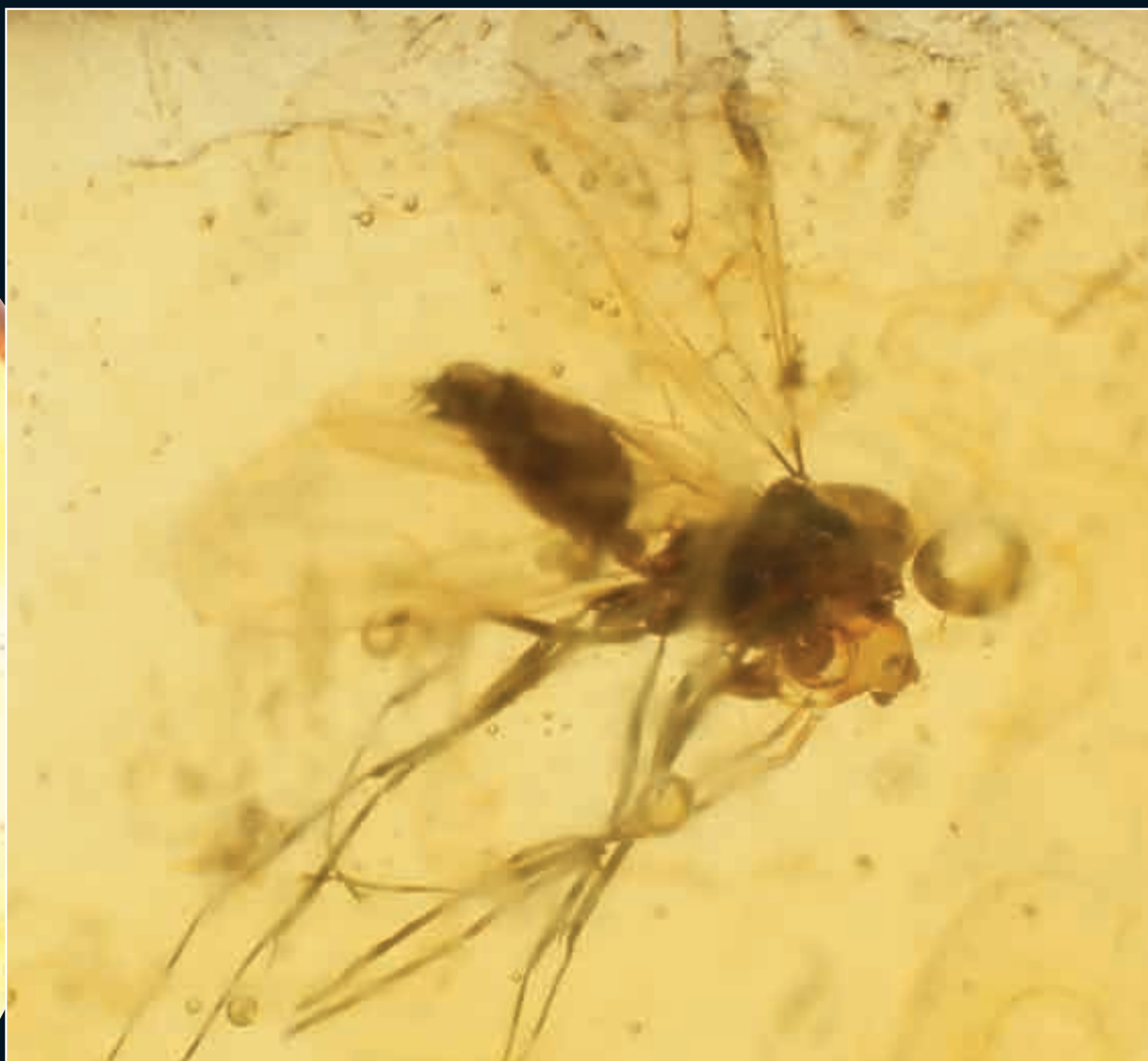
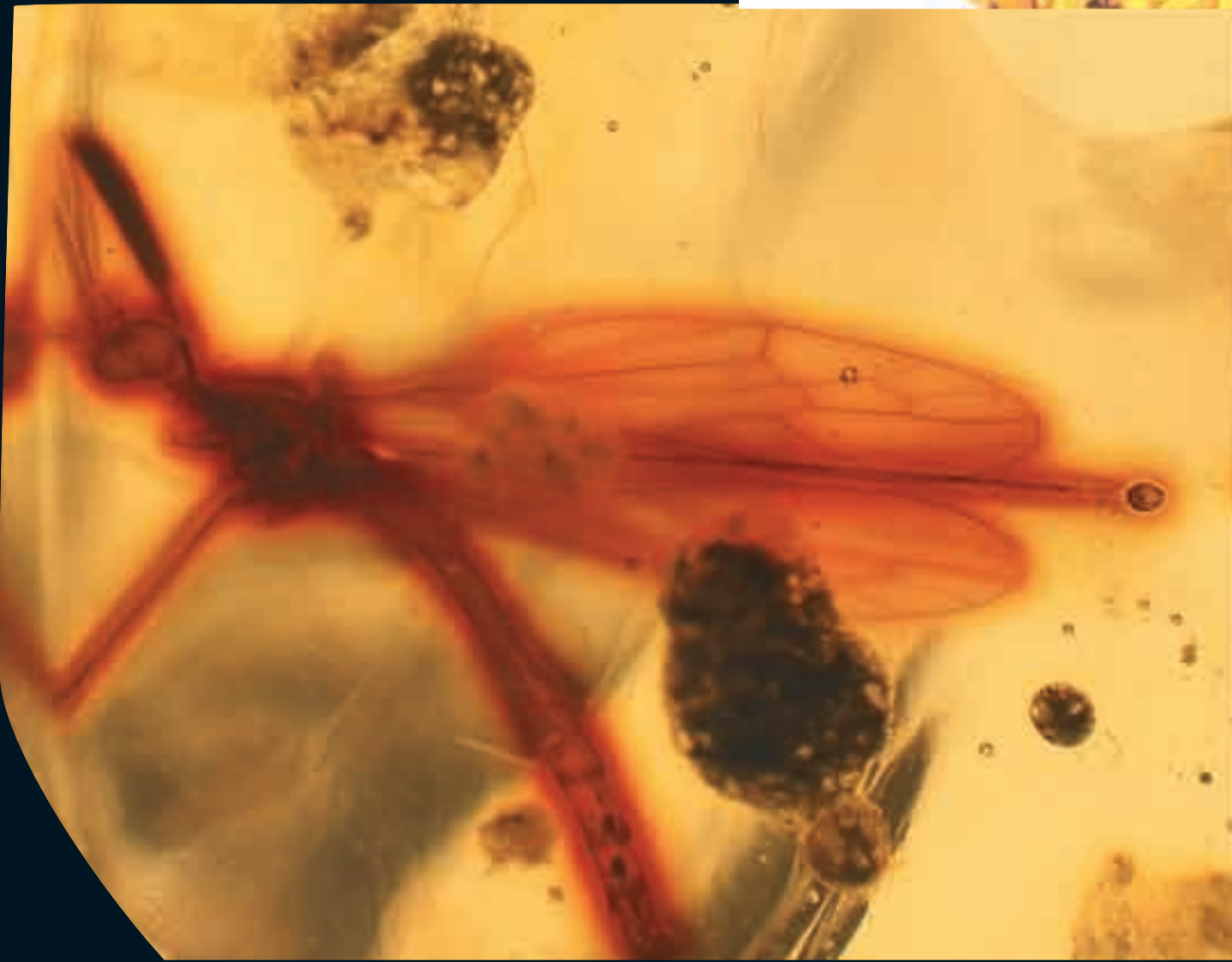
羽アリ

年代：2500万年前
寸法：琥珀：全長13ミリメートル(0.5インチ)、幅7ミリメートル(0.2インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：漸進世

羽アリは、女王アリと交配するために巣より送られる。琥珀に化石化された2500万年前の羽アリと今日の羽アリとで違いは全く見られない。

羽アリ

羽アリ、タマバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

タマバエはハエの一種であり、蚊よりも小さい生物である。化石化されたこのタマバエは2500万年前のものである。その隣には、羽アリも化石化されている。羽アリとタマバエは、何百万年間と同じ姿を保持しており、これは進化が全く発生しなかったことを示す証拠となる。

タマバエ

ガガンボ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

現代のガガンボと2500万年前に生きていたものとで違いは全く見られない。写真の琥珀内の化石は、それを示すものである。

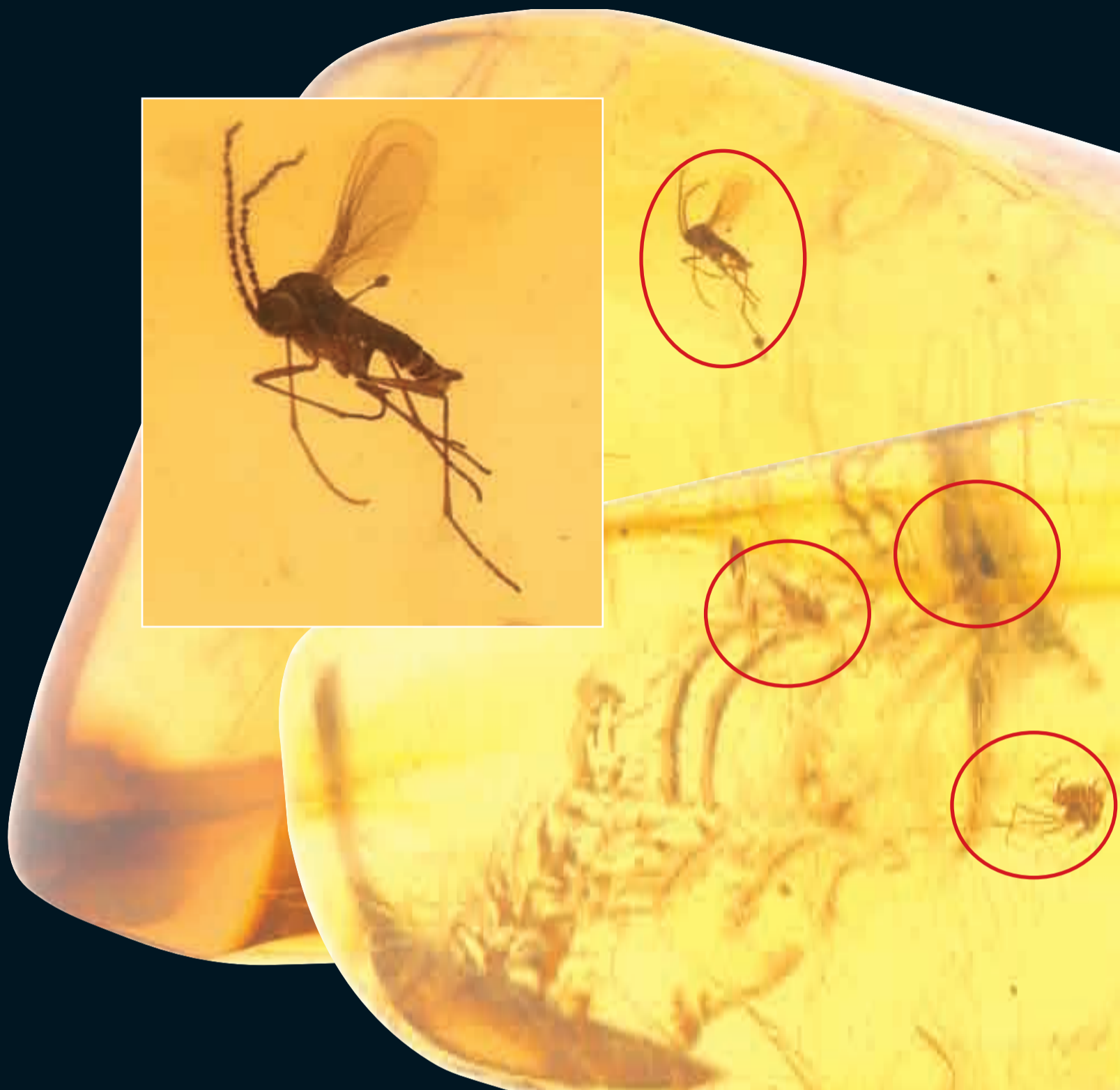
タイコバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

タイコバエは非常に小さな種で、ショウジョウバエとよく似ている。発見された化石はどれも、タイコバエが現在の姿で常に存在し続けてきたことを示している。この2500万年前のタイコバエもまた、この事実を証明するものである。

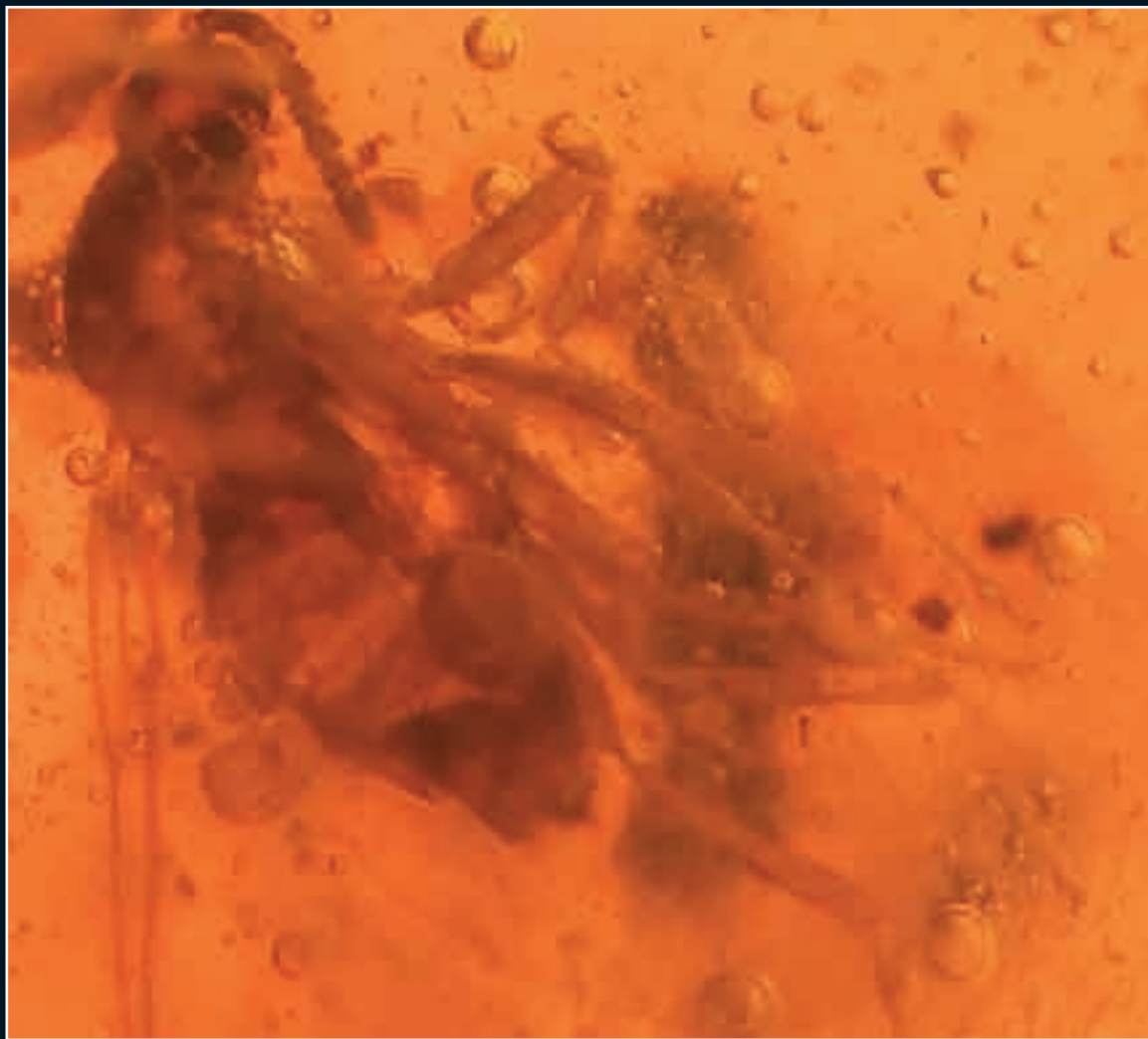
ヌカカ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

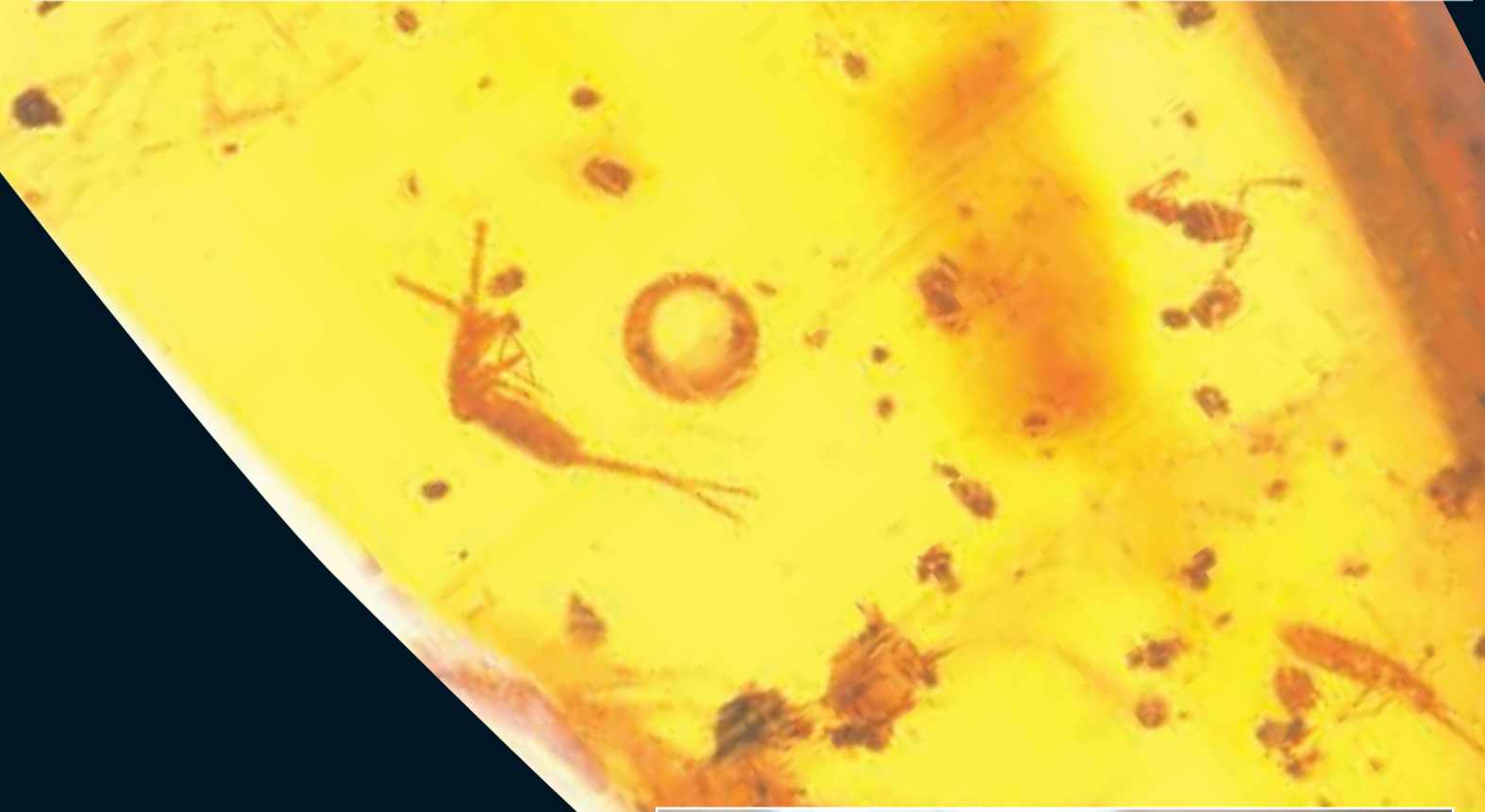
現代に生きるヌカカとこの写真の何百万年前に化石化されたヌカカには違いが見られない。

チバクロバネキノコバエ

チバクロバネキノコバエ

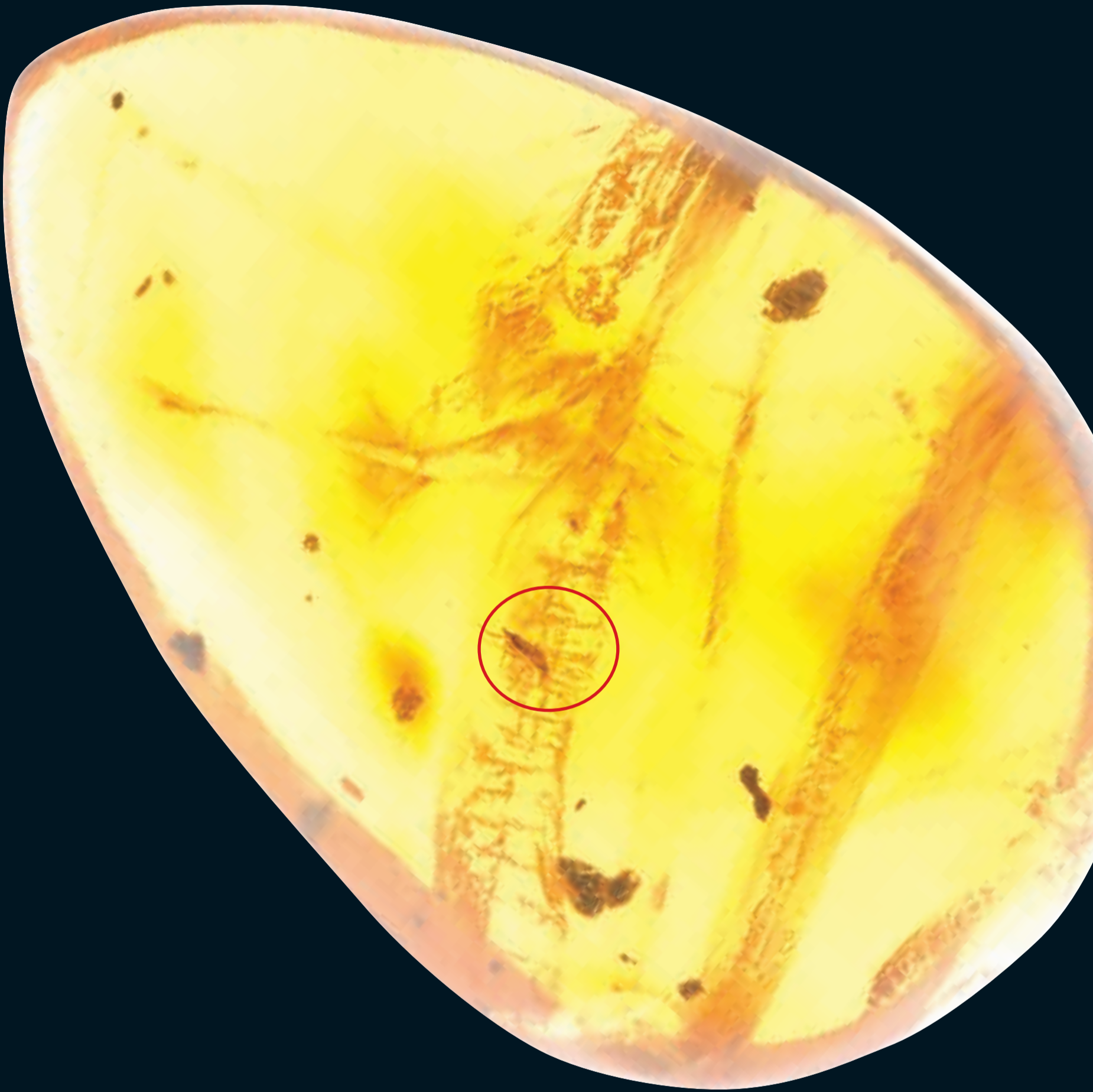
年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

この化石化されたチバクロバネキノコバエは2500万年前のものであり、進化論者の主張を否定するものである。

クモの巣、ハグロチビツヤホソバエ

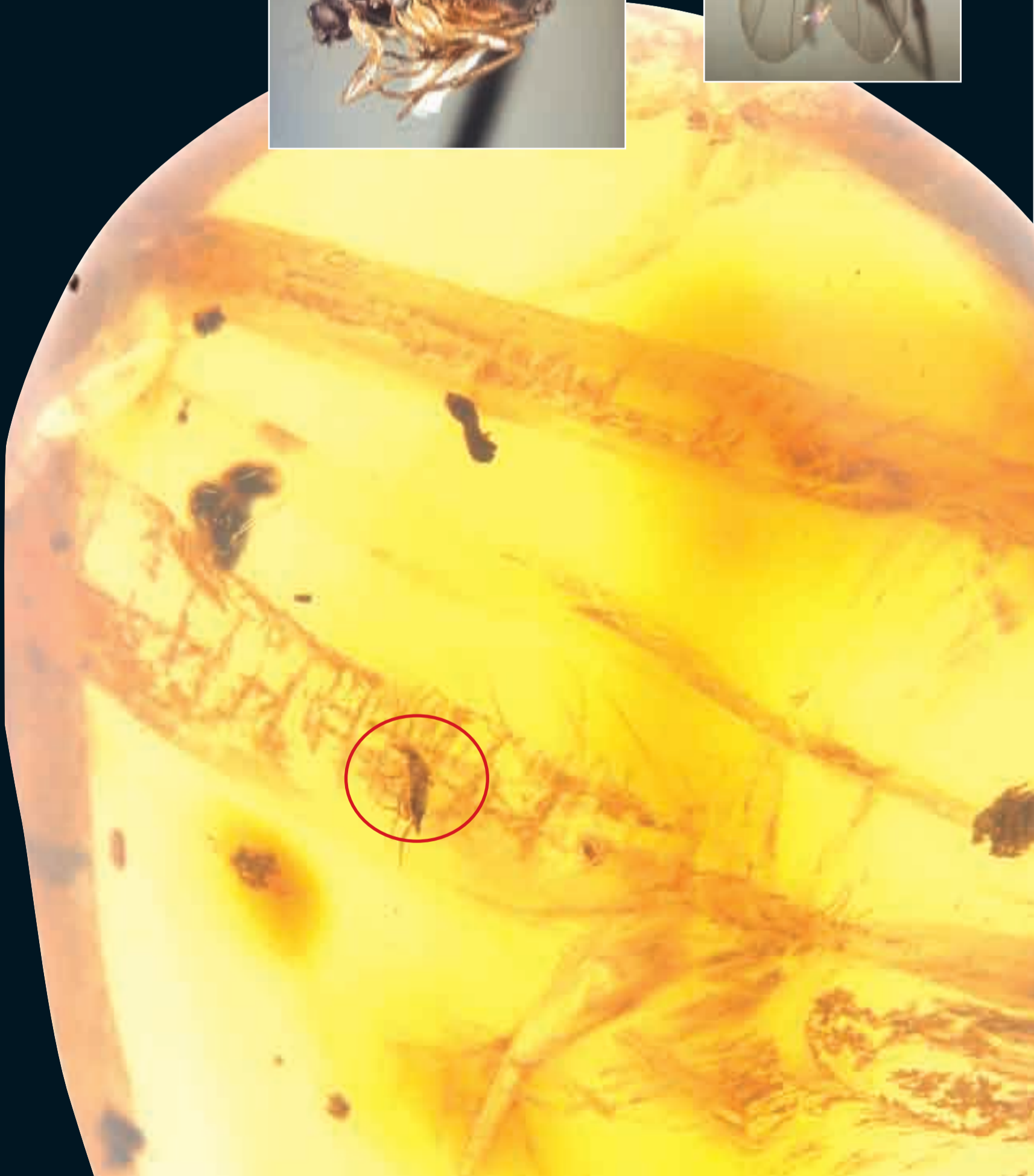
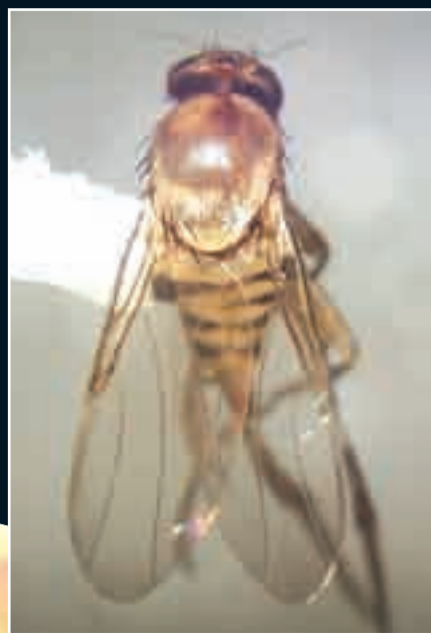
年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

昆虫が何百万年も変化することがないことを示す発見の1つは、この2500万年前のツヤホソバエの化石である。クモの巣がこの昆虫たちと時を同じくして化石化されている。何百万年も生きてきたクモのように、クモの巣もまた、その構造を全く変えていない。

トビムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

2500万年前に生きていたトビムシと、現在生息しているトビムシの間に何ら違いは見られない。

タイコバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

魚がいつの時代も魚であり、爬虫類がいつの時代も爬虫類であり、鳥がいつの自体も鳥だったように、昆虫はいつの時代も昆虫だった。2500万年前から同じ姿を保持し続けているこのタイコバエもまた、この事実を強調するものである。

ハサミムシ、働きアリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

この琥珀には、働きアリとハサミムシがとなりあわせで化石化されている。ハサミムシはハサミムシ目(DermapteraEarwig)に属する昆虫に与えられている総称である。10種類以上の科に分類される1,800種類が現在確認されている。化石標本のすべてに共通する驚くべき特徴は、他の生物においても同様であるが、構造に何の変化もみられないという点である。ハサミムシは何百万年間も変化しておらず、これは進化論を無効にする証拠の1つとなっている。

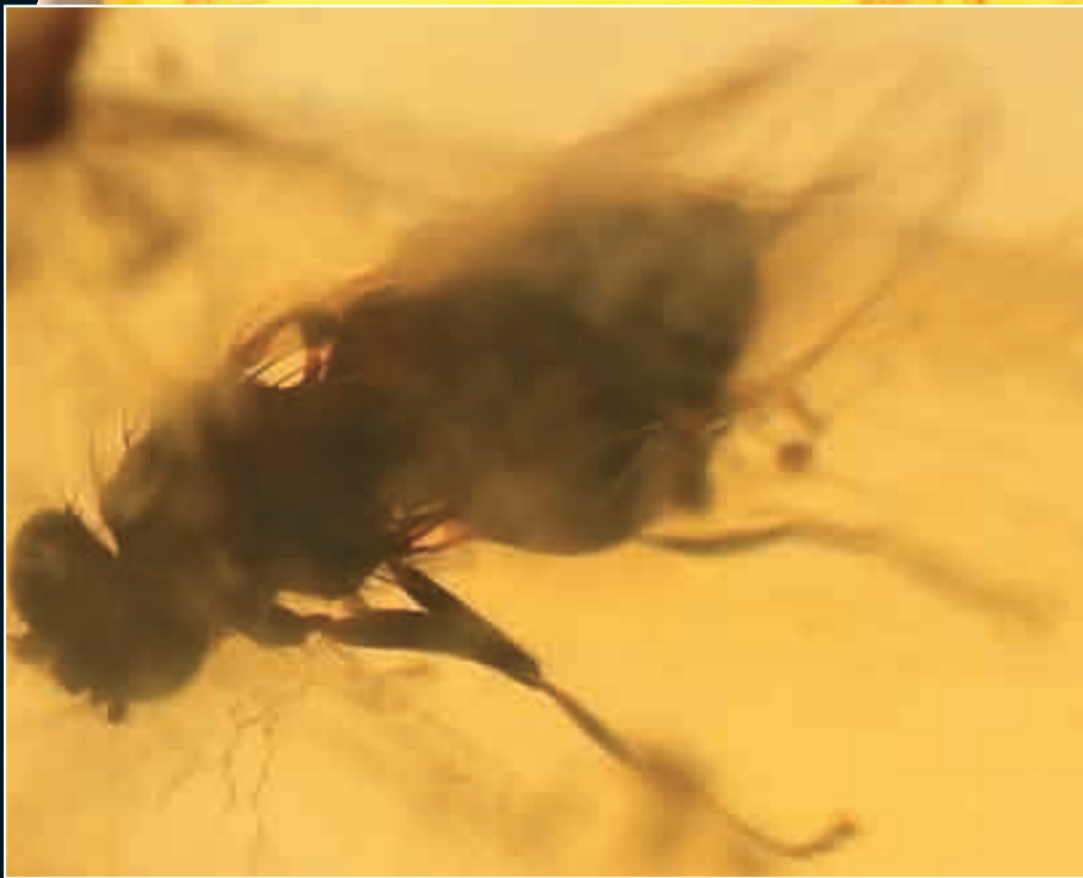
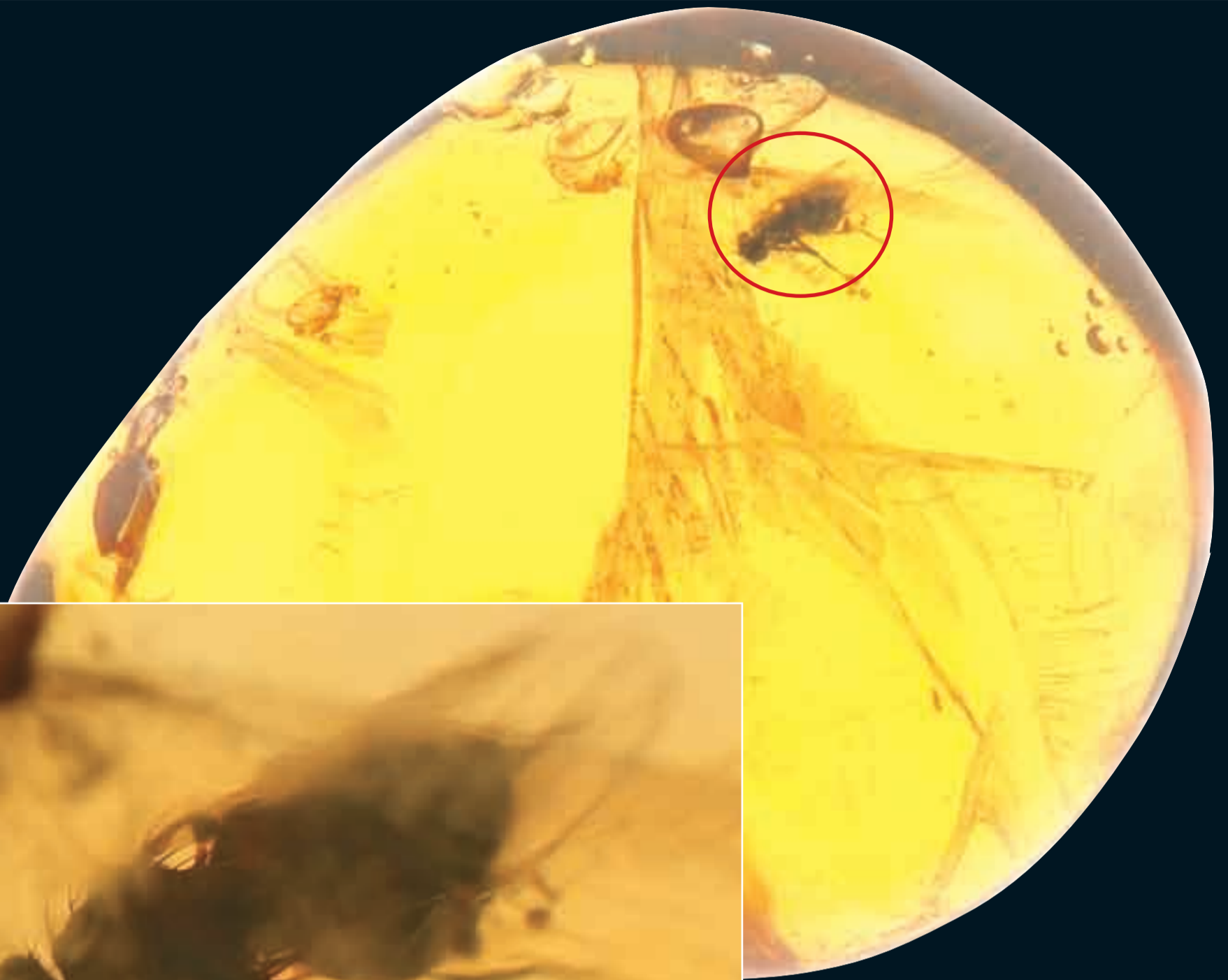
働きアリ

ハサミムシ

ウンカの若虫

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

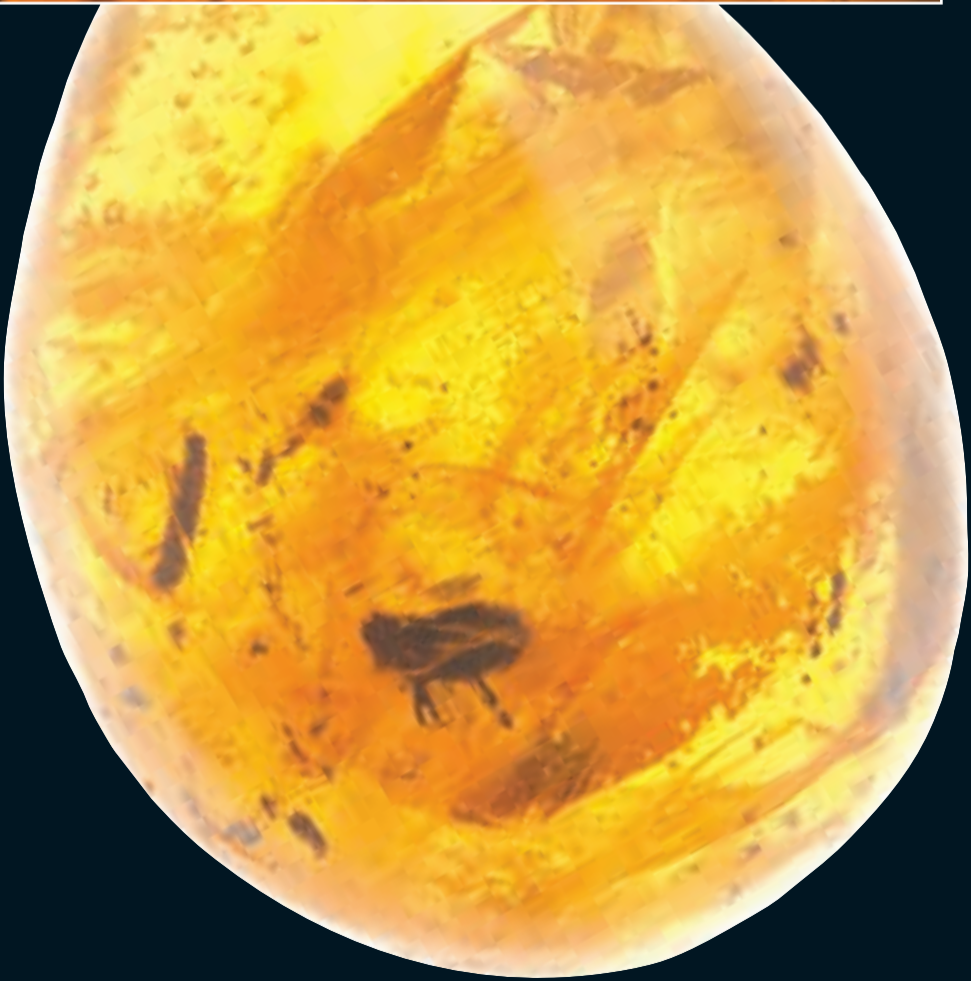
ウンカの成虫と同様、ウンカの若虫もまた、何百万年も前の特徴をそのまま現代に伝えている。この写真の2500万年前の化石標本は、現在生息する若虫が過去のものと全く同じであることを示している。

ハエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

ハエは常にハエとして存在し続けており、他の生命体に由来されるものではなく、過渡期は経ていない。それを証明するものの1つは、この写真の2500万年前の琥珀の化石である。

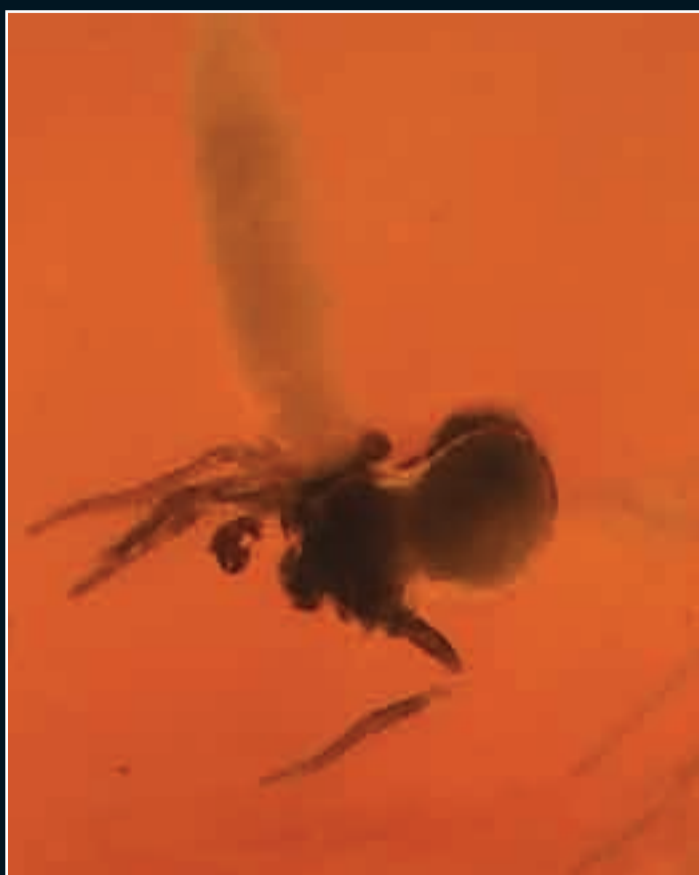
ハグロチビツヤホソバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

現在知られているすべての種類のハエの特徴は、歴史上ずっと同じままである。化石記録は、他の生物と同じく、ハエが神に創造されたことを明らかにするものである。

ゾウムシ

ゾウムシ、ナガキクイムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

2500万年前に生息していたゾウムシとナガキクイムシと、今日生息している同種との違いは全く見られない。これは、進化が発生していないことを示す証拠である。

チョウバエ

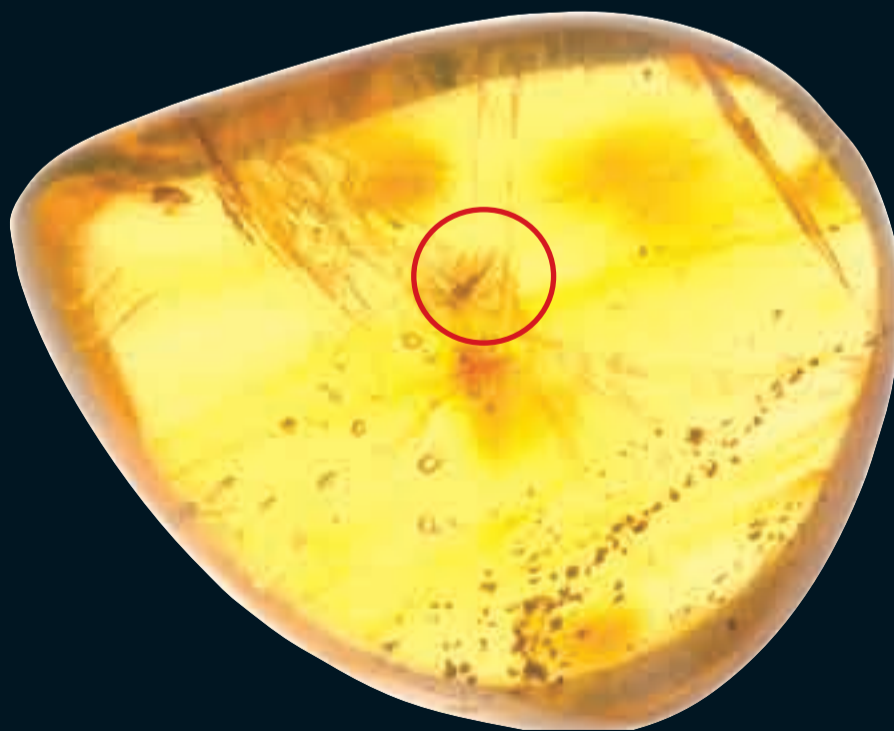
年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

チョウに似ているためにこの名がつけられたこのハエは、何百万年もその姿を変えていない。この2500万年前の琥珀の化石は、何百万年も前のこの生命体が現在のものと全く同じであることを示している。

コオロギ

コオロギ、ナンキンムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

この写真は、半翅目(Hemiptera)に属する昆虫である。共に琥珀に化石化されている。何百万年も前に生息していたコオロギと、現在生息しているものとの間に差はない。

タマバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

何百万年も変貌していないタマバエは、進化論が無効だということを証明するものである。この琥珀に包まれたタマバエの化石は2500万年前のものである。

ヌカカ、タマバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

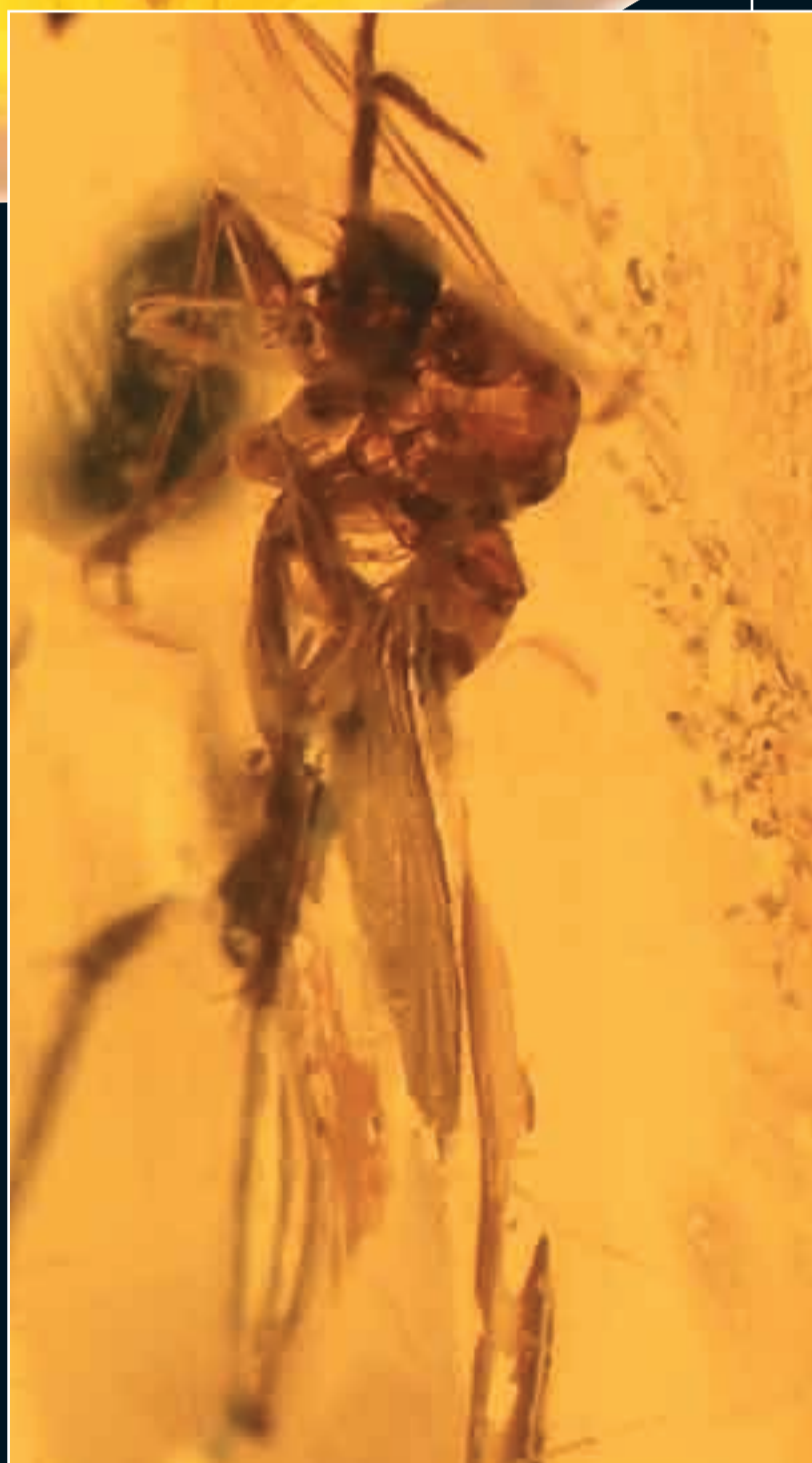
これらの2500万年前のヌカカとタマバエは、現在生息しているヌカカとタマバエと全く同じものである。これは、生命体が進化していないということを証明するものの1つである。

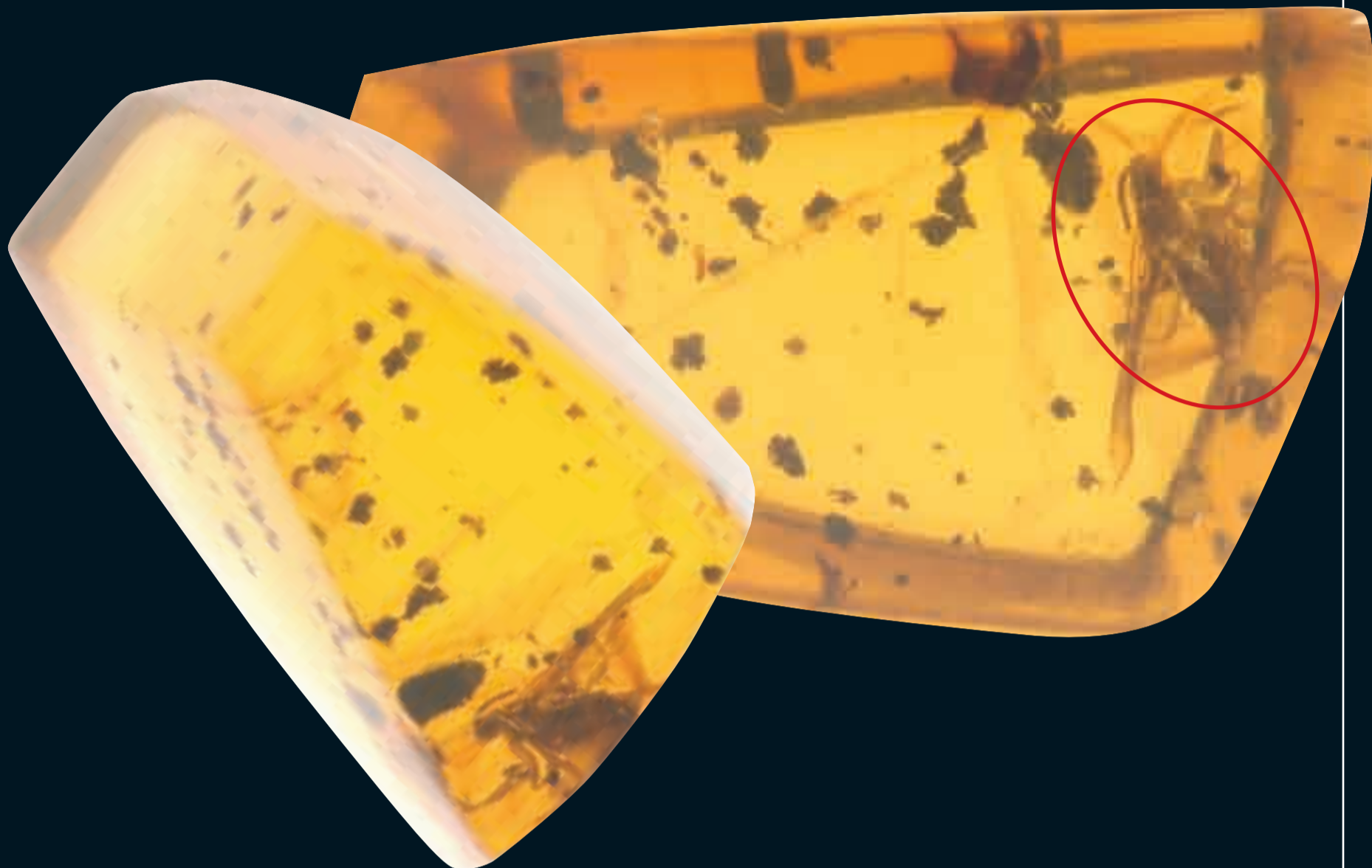
チバクロバネキノコバエ

チバクロバネキノコバエ

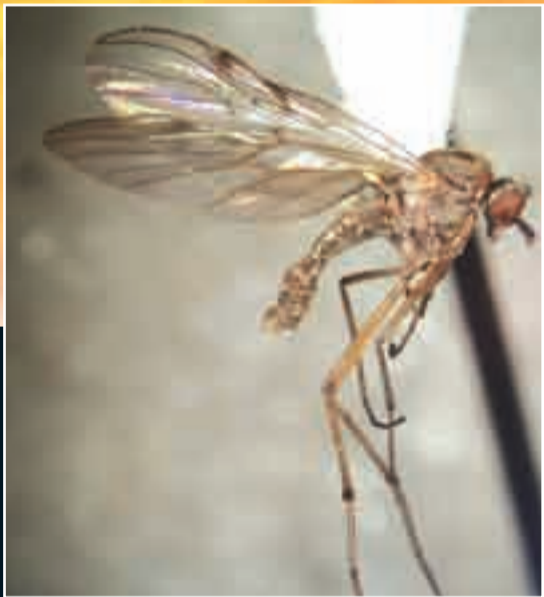
年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

写真は、琥珀内に保存されたチバクロバネキノコバエである。この昆虫は何百万年も同じ姿を保っている。長い期間、構造を変えていないというこの事実は、進化論者には説明のできない事実である

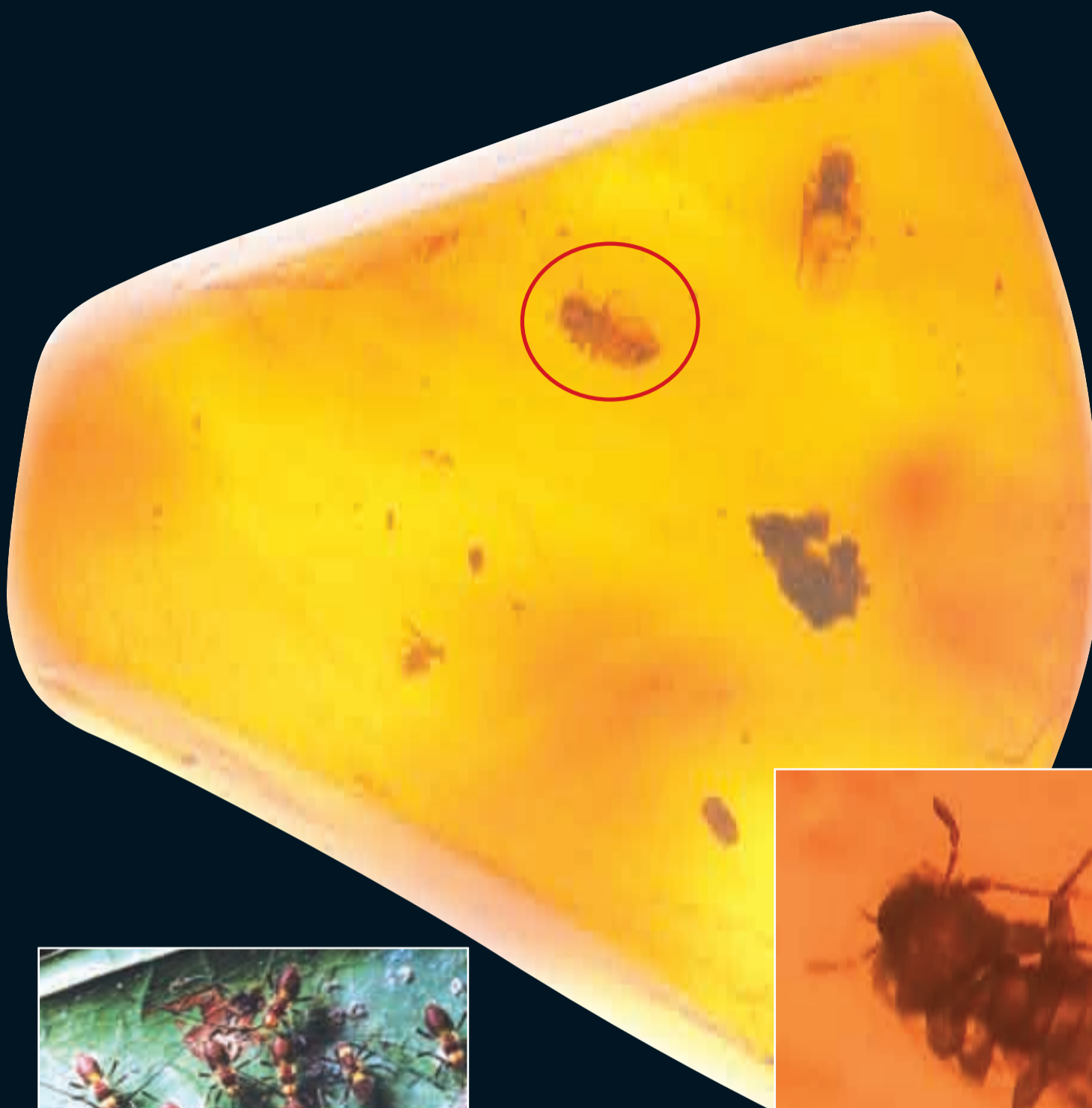
ナガキクイムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

現在に生息するナガキクイムシは、何百万年前に生息していたものと、全く同じ体系と構造を持っている。2500万年前のナガキクイムシが今日のものと全く同じという事実は、神による創造を証明する。

ハグロチビツヤホソバエ

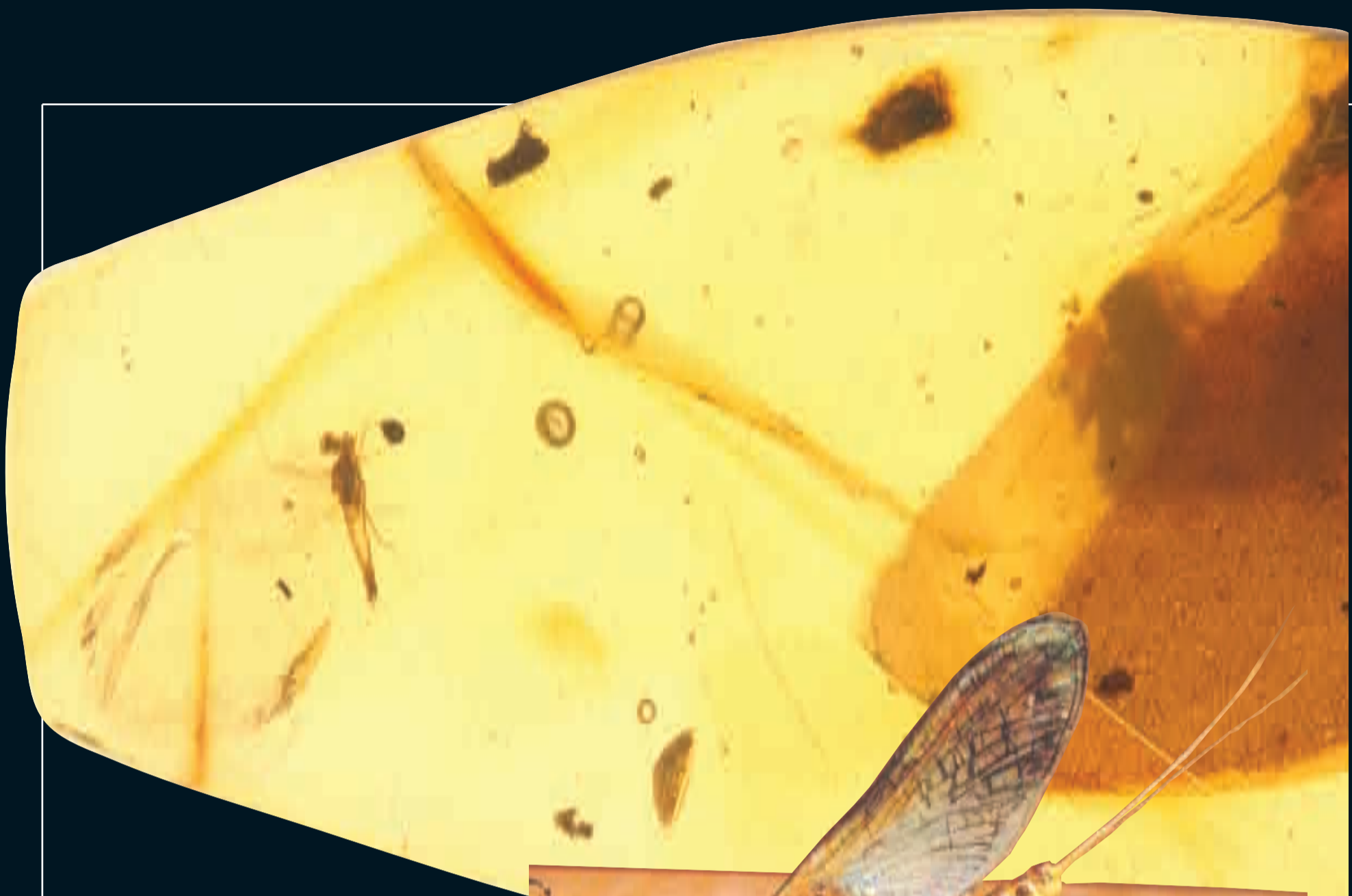
年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

この琥珀に化石化されたハグロチビツヤホソバエは、2500万年前のものである。何万年という時間の経過にも関わらず同じ姿を有するツヤホソバエは、進化論者たちを黙らせるものである。

キリバチ

年代：2500万年前
寸法：琥珀:長さ29ミリメートル(1.1インチ)、幅27ミリメートル(1インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：漸進世

ダーウィニストの主張を否定する1つの例は、この2500万年前の琥珀に包まれたキリバチの化石である。何百万年もの間変化していないキリバチは、この生物が進化していないことを裏付けるものである。

チャタテムシ

年代：2500万年前
寸法：琥珀：13ミリメートル(0.5インチ) X 12ミリメートル(0.4インチ)、含包物：2ミリメートル(0.08インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：斬進世

現在のチャタテムシと2500万年前のチャタテムシに違いは全く見られない。2500万年前から変化していないチャタテムシは、すべての進化論者の主張を転覆させるものである。

カゲロウ

年代：2500万年前
寸法：琥珀：25ミリメートル(0.9インチ) X 16ミリメートル(0.6インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：斬進世

2500種類以上のカゲロウが確認されている。成虫になってからの寿命が短いこの昆虫は、何百万年もの間その構造を変えていない。この写真の琥珀に包まれたカゲロウは2500万年前のものである。2500万年前もの間姿を変えないできた生物はすべて、生物が進化しておらず、創造されたものであることを伝えるものである。

ゾウムシ

年代：2500万年前
寸法：琥珀：12ミリメートル(0.4インチ) X 10ミリメートル(0.3インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：斬進世

6千種類に分けられるゾウムシ上科(Curculionoidea)に属するゾウムシは、穀物に被害を与える。何百年も前のゾウムシの化石は、この生物の構造が存在している限りにおいて変化していないことを示すものである。これは、進化の影響を受けていないことを意味する。

チョウバエ

年代：2500万年前
寸法：琥珀：全長10ミリメートル(0.3インチ) X 幅8ミリメートル(0.3インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：斬進世

この2500万年前のチョウバエの化石と今日に生息するものの間に違いは見られない。琥珀に包まれたこの化石は、これを例証するものである。

コオロギ

コオロギ、ガガンボ

年代：2500万年前
寸法：琥珀：全長11ミリメートル(0.4インチ) X 幅8ミリメートル(0.3インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：漸進世

コオロギとガガンボが同時に化石化されている。写真を見て分かるように、これらの生物は2500万年前から全く変わっていない。この事実は、生物は進化の過程は経ておらず、創造されたことを示すものである。

ガガンボ

ゾウムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

ゾウムシは何百万年もの間全く変化しておらず、このことは進化が発生していないことを示すものである。それを証明するものの1つに、2500万年前に化石化されたこの写真のゾウムシがあげられる。

グソクムシの幼虫

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

現代のグソクムシと2500万年前に生息していたグソクムシとの差は全くない。同様にその幼虫も同じ姿をしている。

ハジラミ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

この昆虫は、植物の樹液を餌にしており、飛び跳ねながら移動する。この写真の2500万年前の琥珀の化石が示すように、これらもまた何百万年もの間全く変わらずにいる。琥珀に閉じ込められたこの昆虫と現在生息するものとの間に何の違いも見られない。

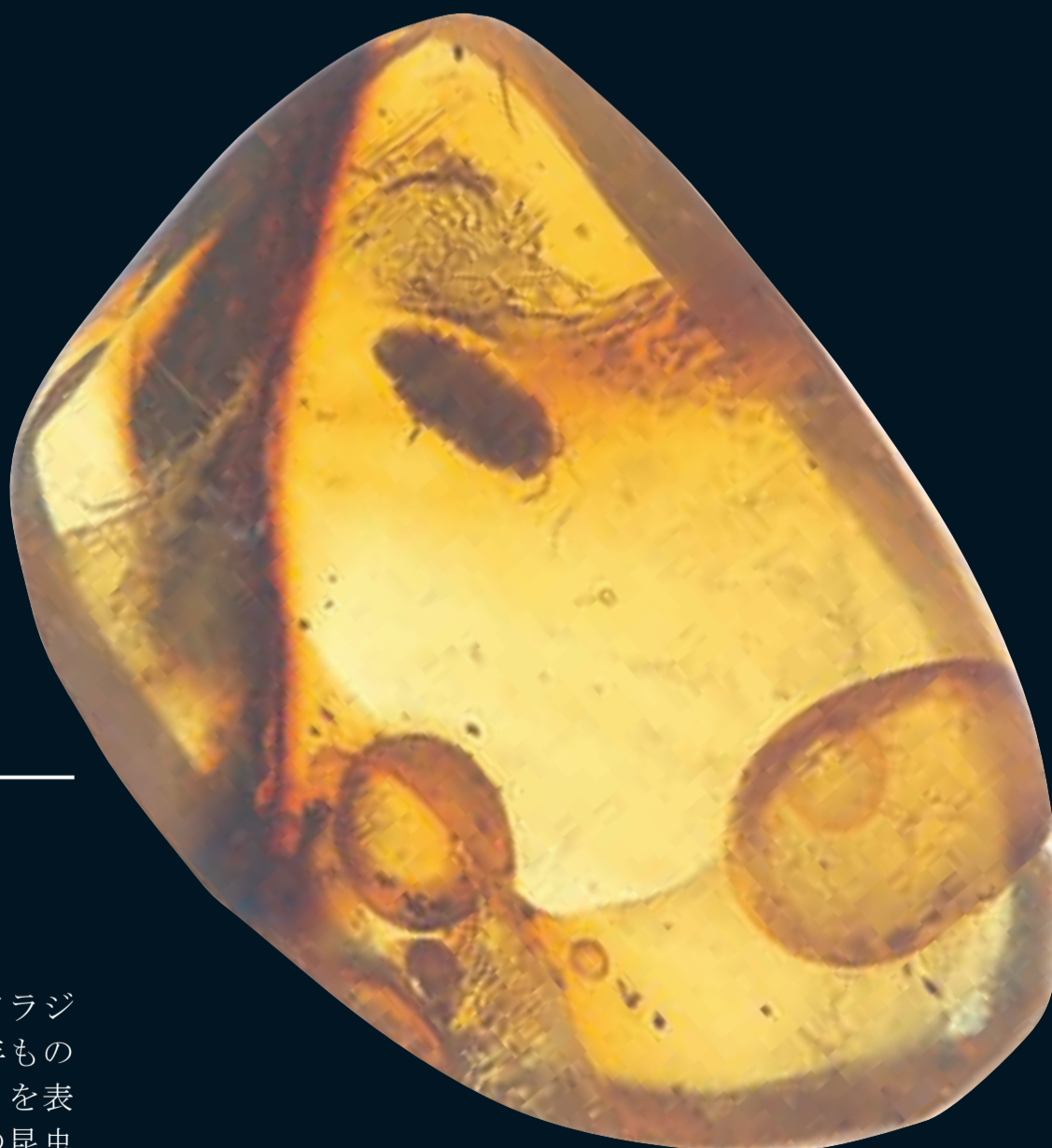
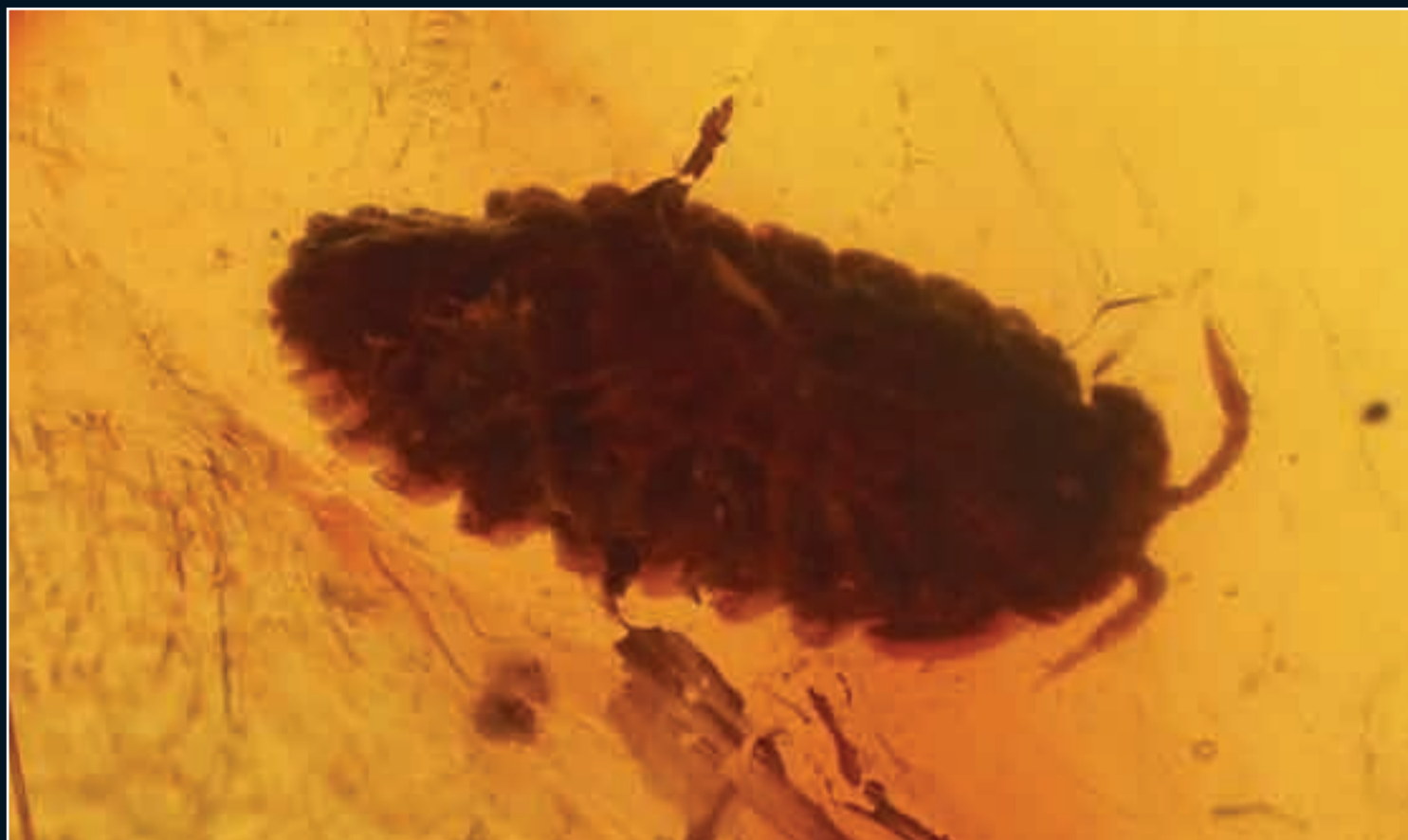
アリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

何百万年もの間その姿を変えずにいるアリたち。これらも進化論を否定する証拠なのである。

オオアリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

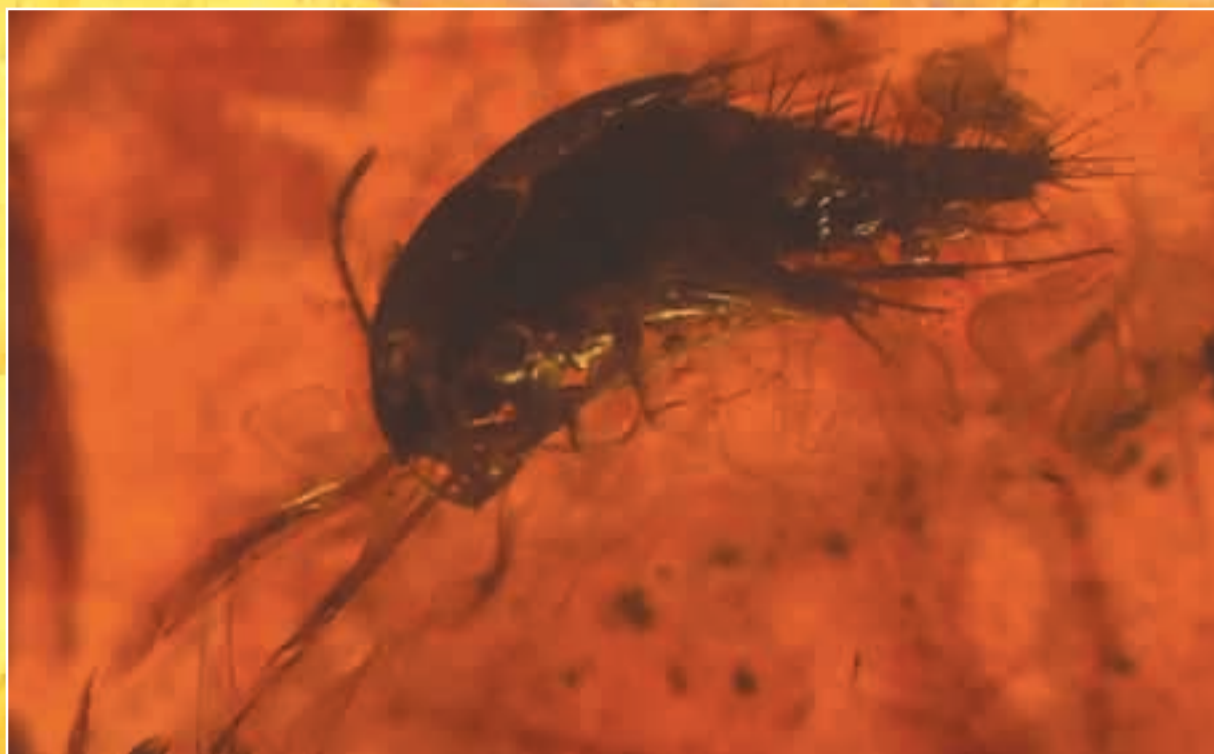
何百万年も前に生息していたオオアリと、今日生息しているものとの間に違いはない。全く違いが存在しないということは、生物が段階的に進化したという進化論者の主張を否定するものである。

ワラジムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

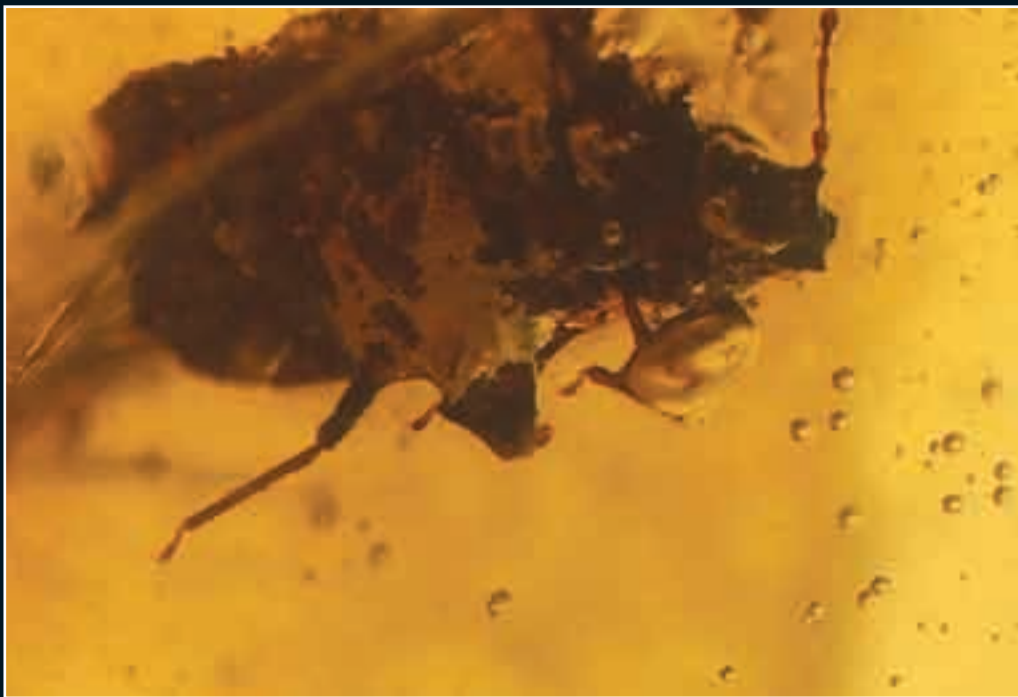
この2500万年前の琥珀に包まれたワラジムシの化石は、この昆虫が何百万年もの長い間同じ姿をしていたということを表すものである。言い換えれば、この昆虫は進化などしていないのである

ダニ、キクイムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

この琥珀には、ダニを背中にのせたキクイムシが包まれている。キクイムシとダニは何百万年もの時代の経過にも関わらず何の変化も経ていない。2500万年前もの間変化していないこの生物は、進化論を無効にする。

ハネカクシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

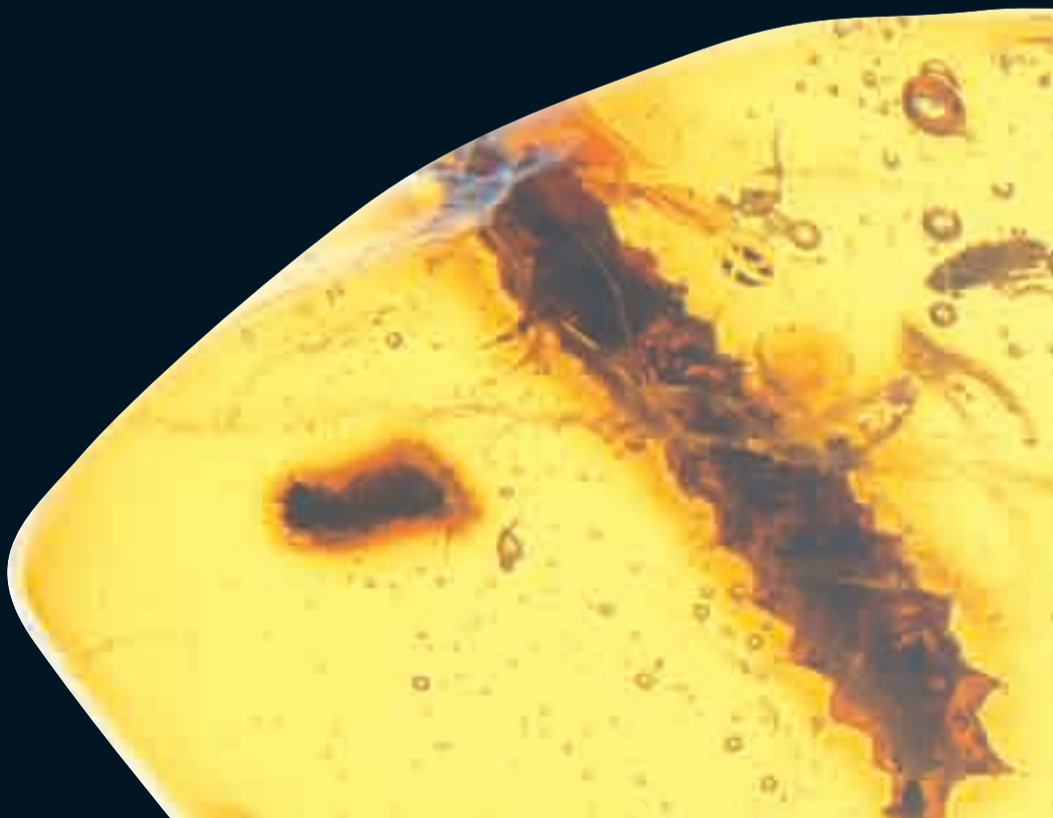
2500万年前に生息していたハネカクシと現在生息しているハネカクシとの間には何の違いもない。何百万年もの間変化していないハネカクシは、進化が現実のものではないということを証明するものである。

サシガメ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

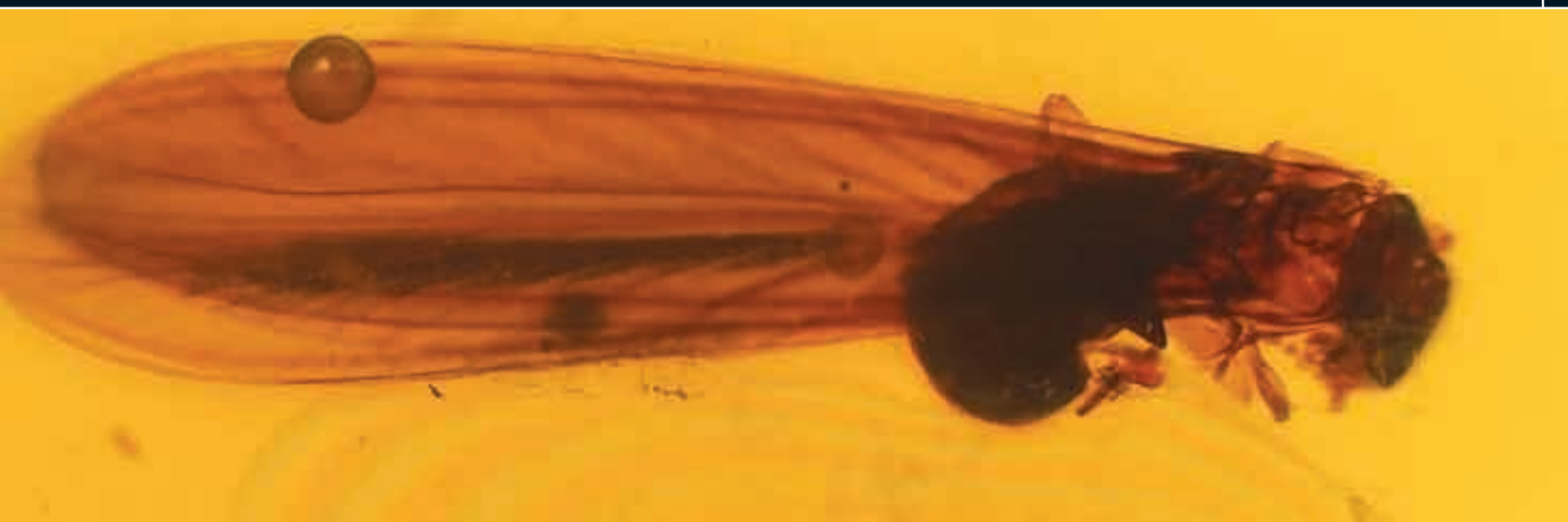
他の生物と同様、サシガメもまた古来からサシガメとして存在してきた。ダーウィニストの主張と反して、この昆虫は他の生命体から変化したものではなく、過渡期などは経ていない。2500万年前のサシガメの化石がこれを証明する。

ウスバカゲロウ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

ウスバカゲロウは羽を持ち、トンボに似た昆虫である。この写真は、琥珀に閉じ込められて化石化した2500万年前のウスバカゲロウである。その姿は今日のものと何ら変わりはない。

芋虫

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

他の化石と同様、この琥珀に閉じ込められた芋虫もまた、段階的に1つの種から他の種へと進化などはしておらず、全く同じ特徴を持っている。化石が指し示すこの事実は、芋虫が常に毛虫として存在し、進化などしていないことを証明するものである。

羽シロアリ

年代：2500万年前
寸法：全長19ミリメートル(0.7インチ)X 幅13ミリメートル(0.5インチ)
地域：ドミニカ共和国サンチアゴ近郊
時代：斬進世

この写真は、2500万年前に琥珀に閉じ込められて化石化した羽シロアリである。この生物は、2500万年という時を経ているにも関わらず、その構造を全く変えておらず、これは進化が現実のものではなく、神の崇高な創造こそが証明された真実であるということを示すものである。

チバクロバネキノコバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

この写真の化石は、何百万年もの間全く生命体が変化していないことを示しており、これもまた、進化論の主張を覆すものである。

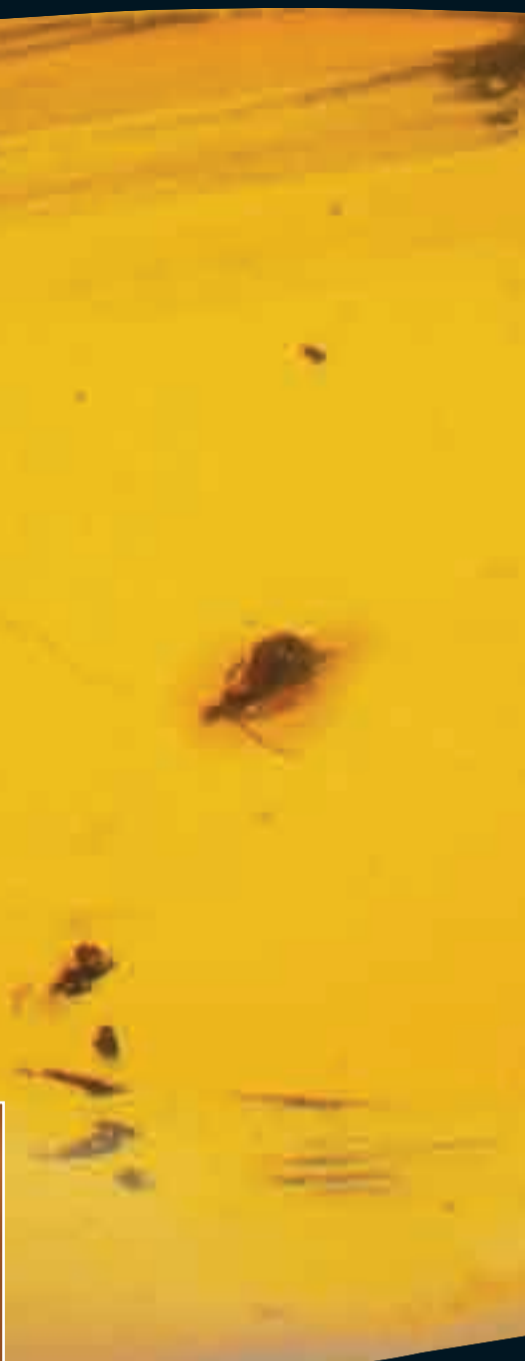
オドリバエ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

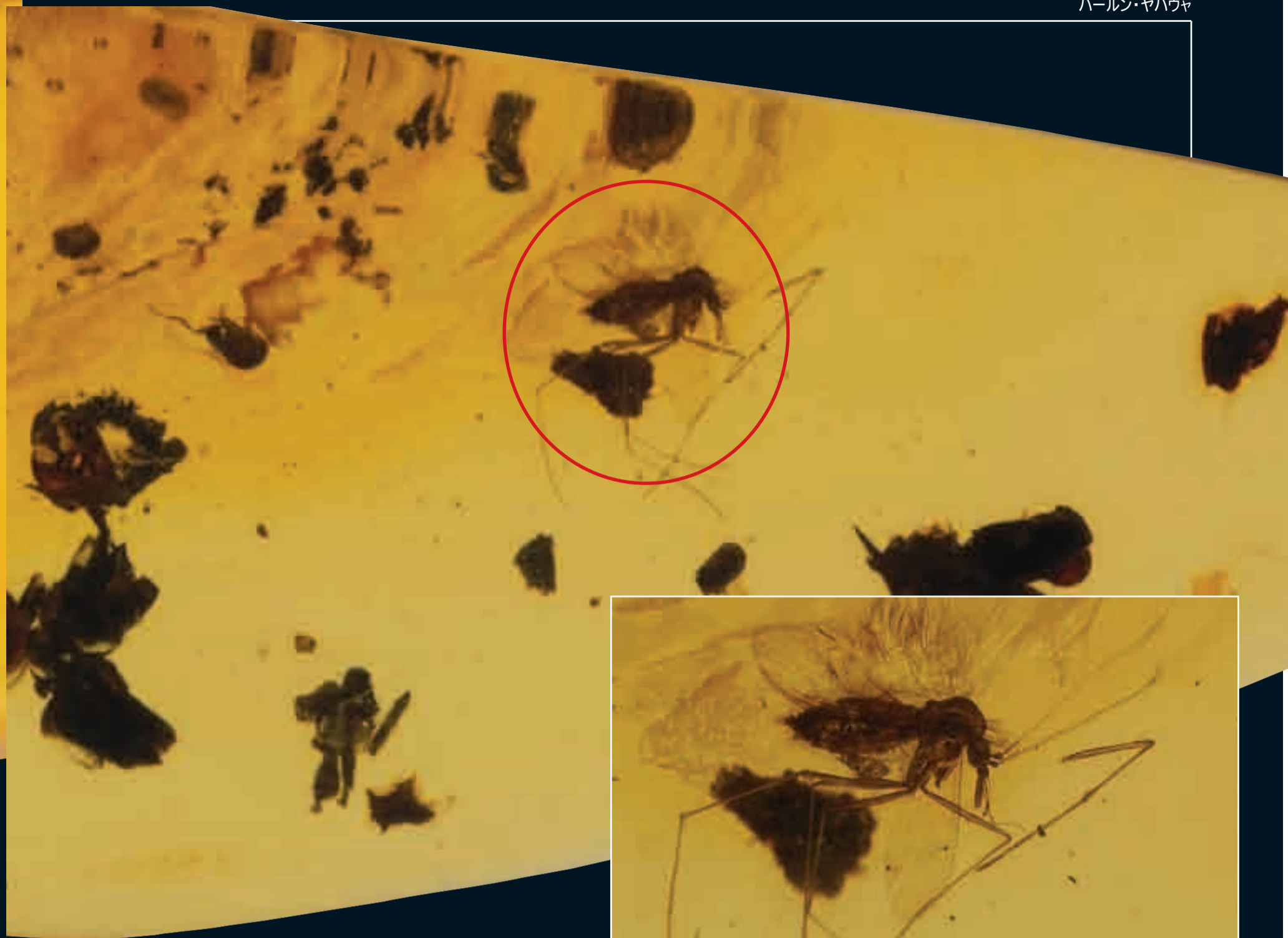
2500万年前のこの化石は、ヤリバエが常にヤリバエであり続けてきたことを証明するものである。何百万年も以前に生息していたヤリバエは、今日生息するものと全く同じものである。

ゴキブリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

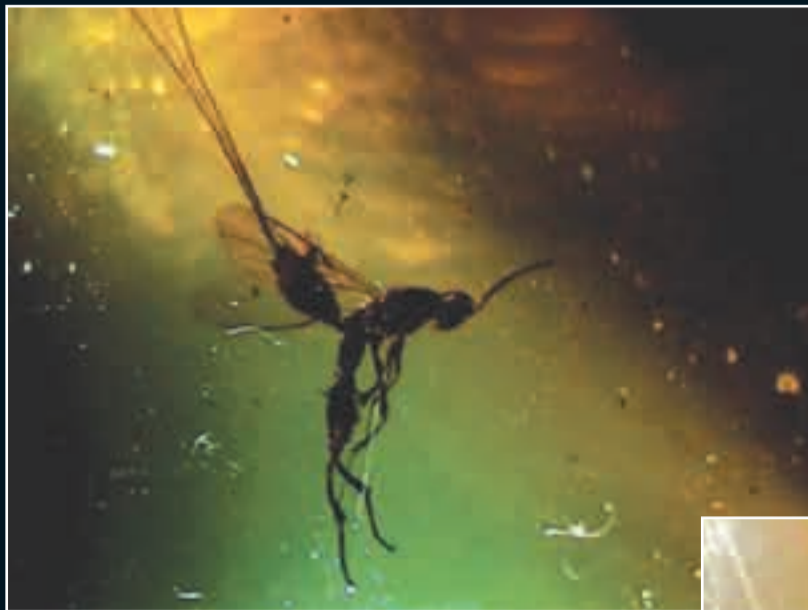
化石の発見は、ゴキブリは何百万年もの間全く変化していないことを明らかにしている。この琥珀内のゴキブリは、2500万年前のものである。この化石記録は、ゴキブリは進化したのではなく、神の手により創造されたことを示すものである。

スズメバチ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

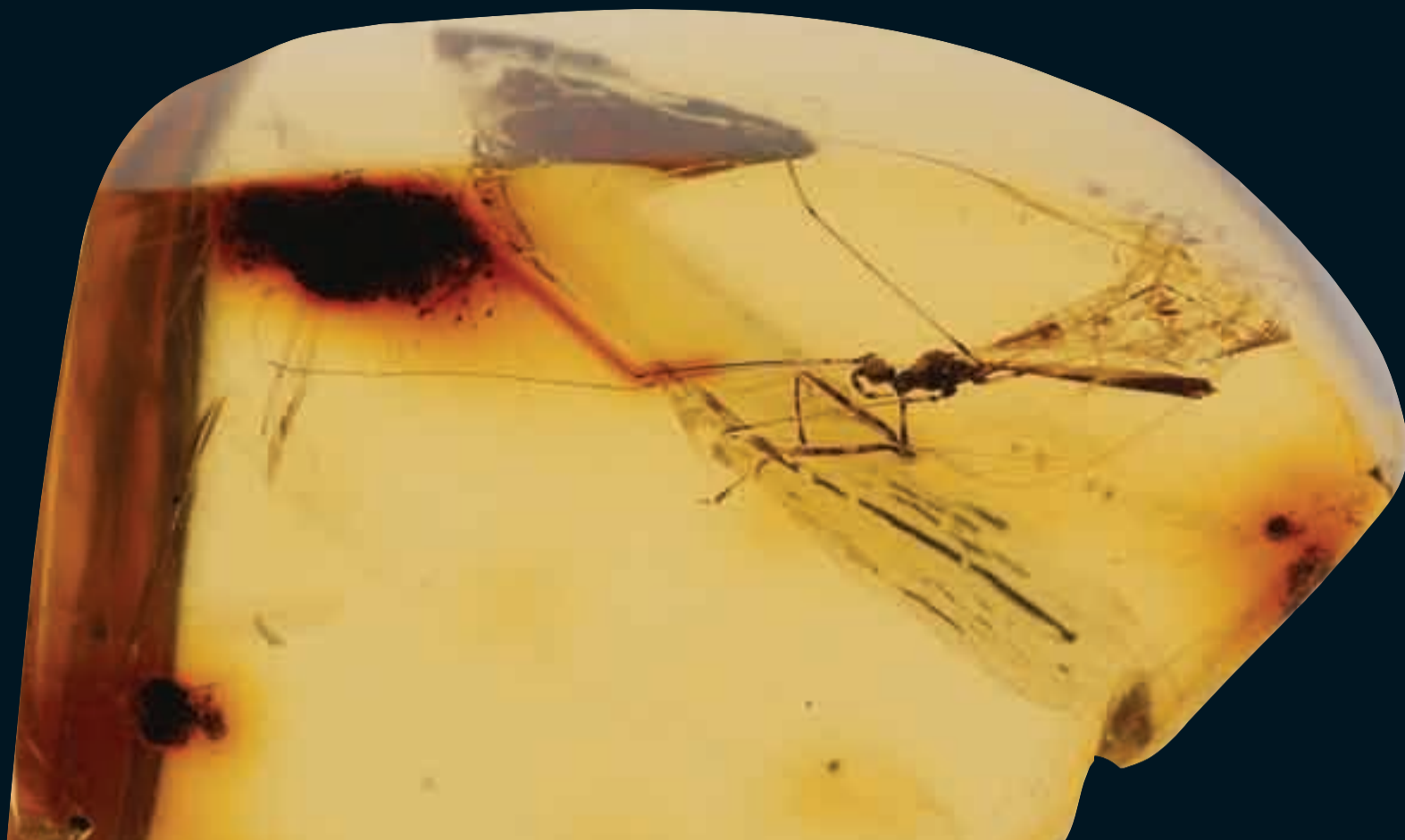
このスズメバチは琥珀に閉じ込められている。2500万年前のこの生物標本は、進化論者の主張に反駁するものである。

蚊

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

蚊がいつの時代も蚊であったことを示す何千何百の化石の1つが、この写真の2500万年前の化石である。何百万年前も同じであり続けてきた昆虫は、進化論者の主張が間違いであったことを示している。

ノミバエ

コマユバチ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
寸法：6.3センチメートル(2.5インチ) X 3.8センチメートル(1.5インチ) X 1.2センチメートル(0.5インチ)
時代：斬進世

この琥珀に包まれた寄生バチは2500万年前のものであり、今日生息しているものと全く同じものである。これは進化論が無効であることを証明する貴重な証拠である。

サシガメ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

この琥珀に包まれたサシガメは2500万年前のものである。この化石は、現在生息するものと何の差も見られず、生物が進化を遂げていないことを示すものである。

サシガメ

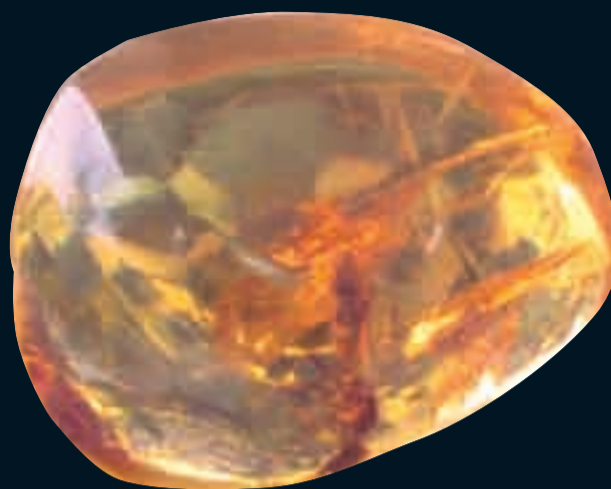
ヒメハナカメムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

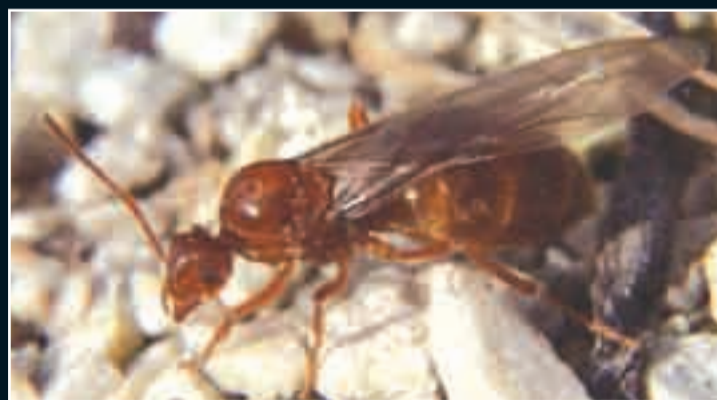
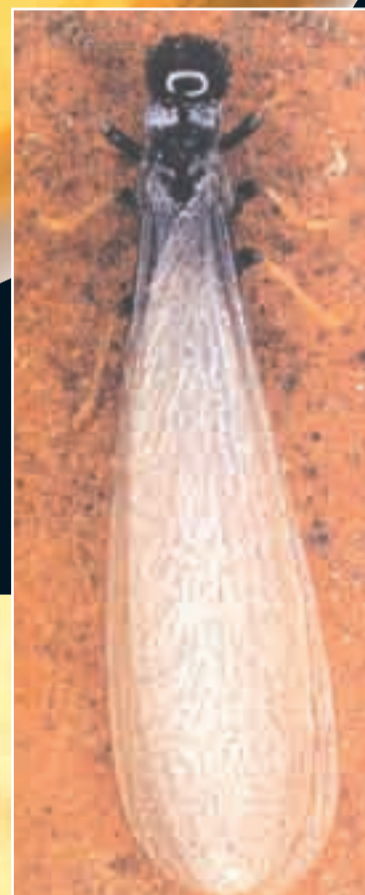
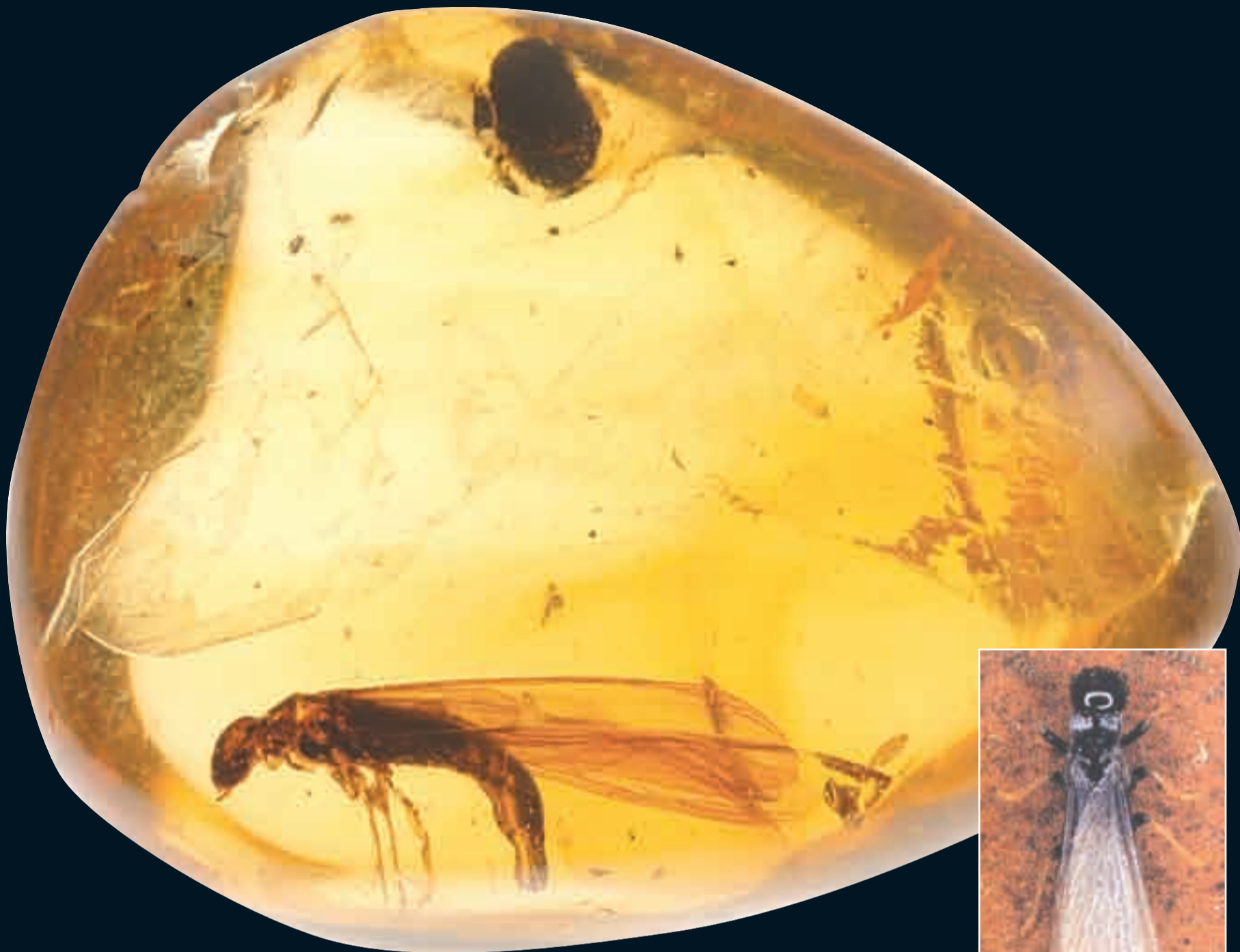
この昆虫は、通常花や葉の裏などに棲んでおり、植物の組織の内部に卵を産み付ける。2500万年前に生息していたこの昆虫と現代のものとの間に全く差はない。

ハサミムシ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：斬進世

何百万の化石は、文字通りダーウィニズムを沈黙させるものである。ダーウィニストを完全に無力にするその化石の1つは、2500万年前の琥珀に入ったこのハサミムシである。他の化石と同様、この化石もまた、進化論が無効であることを示すものである。

女王アリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

女王アリはアリの巣に棲んでおり、働きアリの仕事の1つは、女王と卵を守ることである。この写真の2500万年前の女王アリは、アリが何百万年も前から同じであることを証明するものである。これにより、進化が起こらなかったが、すべての生物は全能の神によって創造されたのだということが証明される。

羽シロアリ

年代：2500万年前
地域：ドミニカ共和国
時代：漸進世

シロアリはアリに似ているが、実際は全く異なる特徴と能力を有している。シロアリは何百万年も同じ姿をしており、同じ構成を持ちながら全く変わらぬ姿で現在も生息している。2500万年前のシロアリの化石は、これを証明するものの1つである。何百万年も前の時代に生きていたすべてのシロアリは、現在のものと何ら姿は変わらない。250万年前に生息していた働きアリと同じように、現在生息するものは同じように目は見えないものの犠牲的で幼虫を養い、女王を守り、何メートルにも広がる巣を築く行動性質を持っている。この現代のシロアリの特徴は、例外なく、今まで生息していたすべてのものに当てはまるのである。
この写真の琥珀内のシロアリの化石は、2500万年前のものである。

ブラジルで発見された化石標本

ブラジルの地理的構造は南米大陸の台地に相似している。国の岩の形成の半分以上は先カンブリア紀時代(46億年～5億4300万年前)に発生している。ブラジルの地層下部は、変成岩および火成岩で構成されており、その上部には堆積岩が横たわる。堆積岩層の一部は、先カンブリア紀時代までさかのぼる。その他の層はそれよりもずっと近年に構成されたものである。

多くの先カンブリア紀の微化石(微小生物に属する生物)ゾーンは、サンフランシスコ地域の岩ということが判明している。その他にブラジルには、2つの主要な化石発掘現場がある。サンタナ層とクラト層である。

アラリピ盆地に横たわるサンタナ層では、多くの化石が白亜紀時代(1億4600万年前～6500万年前)のものである。サンタナ層の大きな特徴は、非常に状態の良い25種類以上の魚の化石標本を含んでいることである。サンタナ層の化石もまた、何種類かの爬虫類、両生類、無脊椎動物、植物を含んでいる。

アラリピ地域で行われた発掘の際、非常に保存状態が良好な25種以上の魚類の化石が発見されている。

アラリピ地域の最も重要な化石発掘地域は、セアラ州にある。

最近まで、クラト層はサンタナ層の一部だと考えられていた。しかし、この地域の研究により地層はかなり初期の時代の昆虫の化石を含んでいることが明らかになる。この昆虫動物群はクラト層が独立した層であるという考えを導いた。昆虫動物群に加え、クモ、サソリ、カニ、多くの植物の化石がこの化石層から発見されている。

ブラジルの化石層から得られた何百万年前もの化石もまた、生物が共通の祖先から段階的に進化したという主張には科学的な基礎が存在しないことを示している。この化石も、生物の進化という概念を否定するものであり、創造の事実を確証するものである。

クラト層から発掘された化石標本を含んだ石灰岩

多くの化石が発見されているノーヴァ・オリンダ石切場

サンタナで発見されている多くの化石は、現代の生物が進化していないということを明らかにするものであった。

カネタタキ

年代：1億2800万年前
寸法：羽を含む15ミリメートル(0.5インチ)全体；母岩：110ミリメートル(4.3インチ) X 100ミリメートル(3.9インチ)
地域：ブラジル、セアラ州
層：サンタナ層
時代：下部白亜紀、上部白亜紀アプチアン

直翅目(Tettigoniidae)に属するカネタタキは、北米だけで225種類以上も存在する。しかし、この甲虫の多くは熱帯地域に生息している。
カネタタキは何百万年も変化していない。写真のこの化石はこの真実を証明するものである。

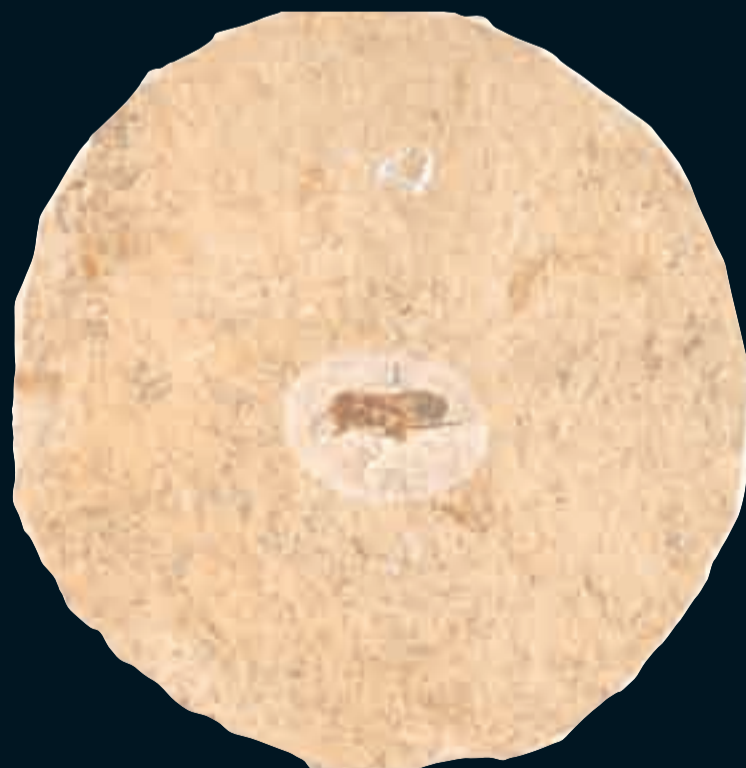
ゴキブリ

年代：1億800万年前～9200万年前
寸法：翼幅23ミリメートル (0.9インチ)；母岩：128ミリメートル (5インチ) X 128ミリメートル(5インチ)
地域：ブラジル、セアラ州、ノヴァ・オリンダ累層
層：クラト層
時代：下部白亜紀、上部白亜紀アプチアン

ブラジルのアラリピ盆地は、見事な白亜紀時代初期の化石の種類が素晴らしく豊富である。一部は立体的に保存されているものもある。このゴキブリの前胸背板(頭板)と翅脈も詳細を観察できるものである。
1億800万年前～9200万年前に生息していたゴキブリの典型となるこの化石は、現在生息しているものと同じものであり、これは進化論が無効であることを示すものである。

ハエ

年代：1億2500万年前
寸法：全長1.9 センチメートル(0.75インチ)；母岩：幅90ミリメートル(3.5インチ)厚さ5ミリメートル(0.2インチ)
地域：南米、ブラジル、アラリピ盆地
層：ノヴァ・オリンダ累層、クラト層
時代：下部白亜紀

化石記録は、羽根を持つ昆虫は羽根をもたない昆虫と同時に発生していることを示している。この事象は、羽根のない昆虫が時間を経て最終的に飛行できる生物に進化したとする主張を無効にする。この写真に見られる化石化したハエは、進化論を否定する古代の発見のほんの1つにすぎない。

ゴキブリ

年代：1億4600万年～6500万年前
寸法：8.8センチメートル(3.5インチ) X 9.1 センチメートル(3.6インチ)
層：サンタナ層
地域：ブラジル、アラリピ山間部
時代：白亜紀

写真の1億4600万年前～6500万年前のゴキブリは、現在生息するものと全く同じである。ゴキブリの構造機能は何万年も全く同じものであり、進化が起こらなかったことを示すものである。

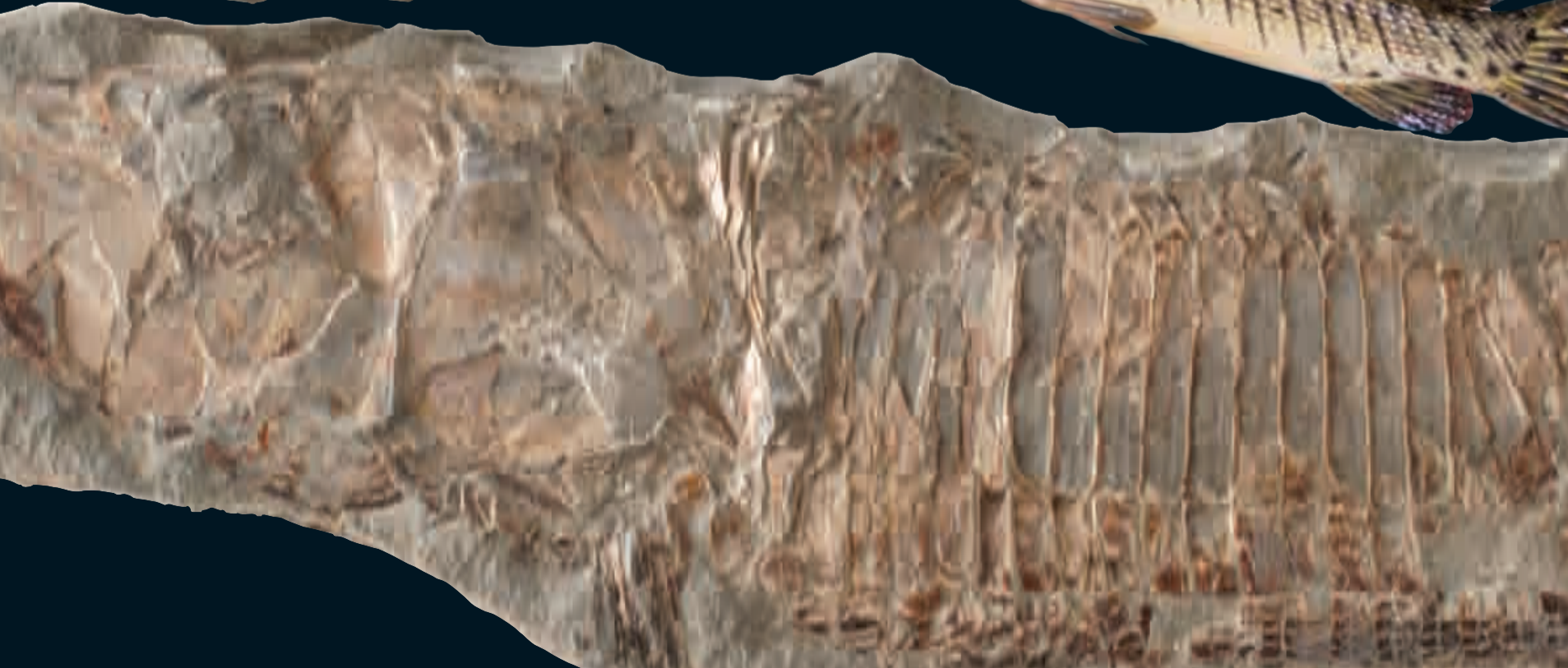
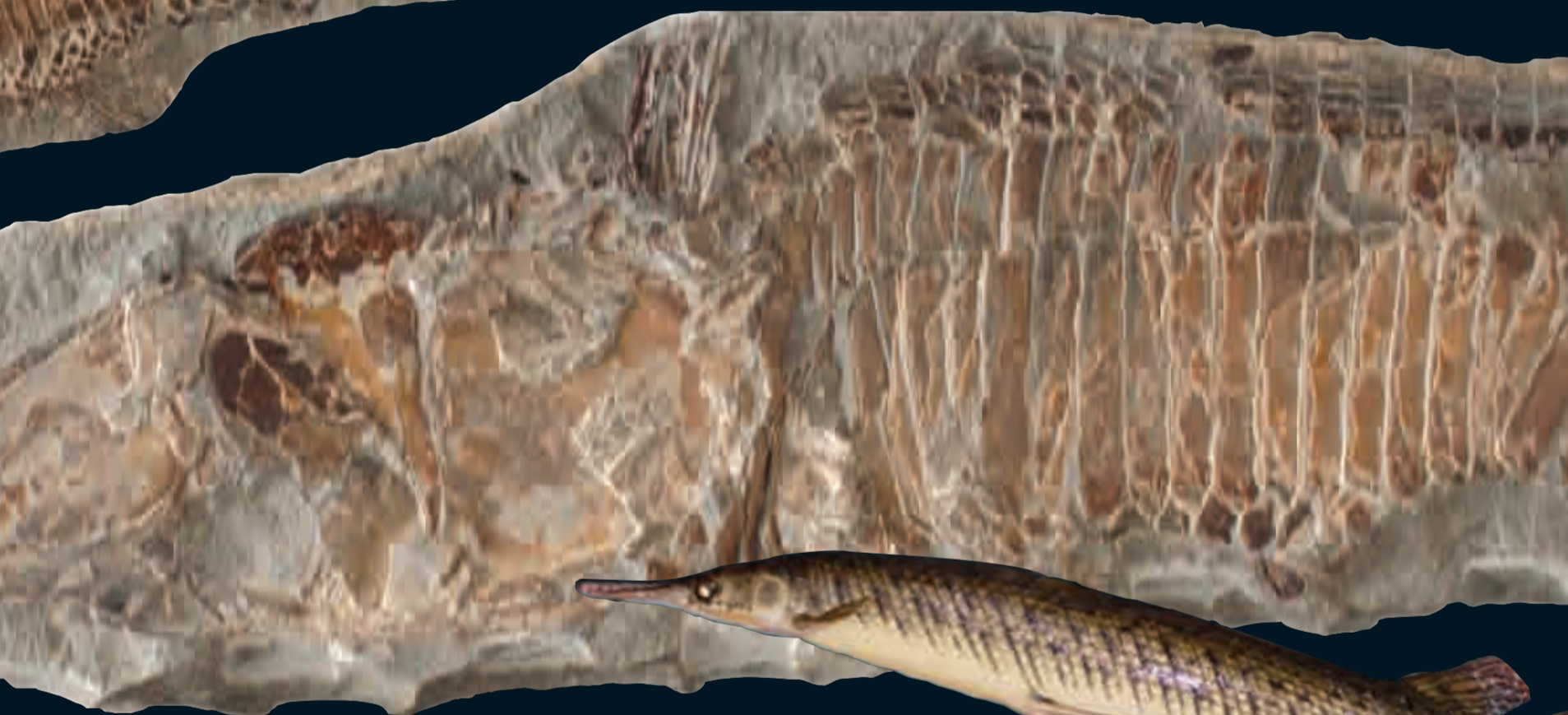
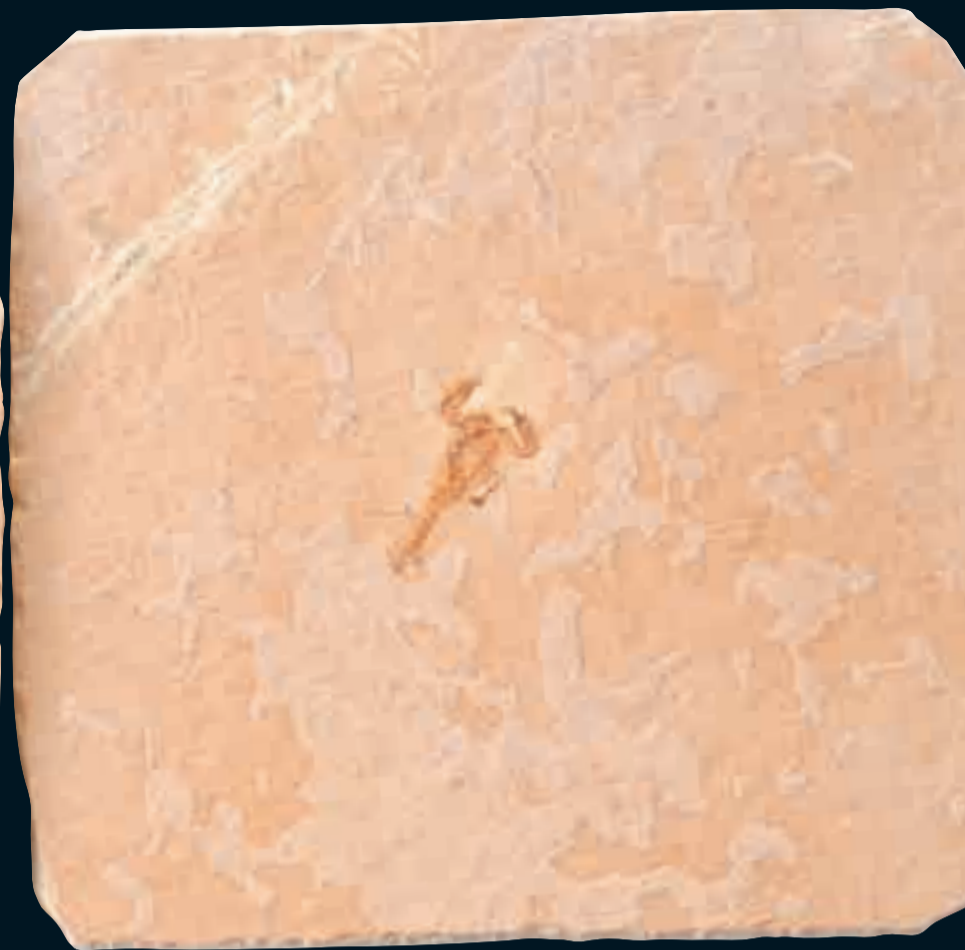
バッタ

年代：1億800万年前～9200万年前
寸法：全体30ミリメートル(1.1インチ)、触覚含む75ミリメートル(2.9インチ)；
母岩：110ミリメートル(4.3インチ) X 100ミリメートル(3.9インチ)
地域：ブラジル、セアラ州、ノヴァ・オリンダ累層
層：クラト層
時代：下部白亜紀、上部白亜紀アプチアン

この写真の1億800万年～9200万年前のバッタは、バッタが常にバッタとして存在してきたことを示すものである。バッタは生物が進化したのではなく、神によって創造されたのだということを示している。

サヨリ

年代：1億1千万年前
寸法：48センチメートル(18インチ)
地域：ブラジル
層：サンタナ層
時代：白亜紀

サヨリは、他の多くの生物と同じく、進化論が間違っていることを証明する。現在発見されている中で最も古いサヨリの標本はジュラ紀(2億600万年前〜1億4400万年前)のものであり、何億年もの間、同じ姿をしていることが見てとれる。この写真の化石は、1億1千万年前のものであり、サヨリが全く進化していないことを示している。

一部の化石は岩層が二つに割れても両方に同じように痕跡を残す。この1億1千年前のサソリの化石は、その一例である。

サソリ

年代：1億1千万年前
寸法：26ミリメートル(1インチ)
地域：ブラジル、アラリピ
層：サンタナ層
時代：白亜紀アプチアン

現在発見されている中で最も古いサソリの化石は、3億2千万年前のものである。写真は、1億1千万年前のものである。3億2千万年前のサソリと、1億1千万年前のものと、現代のものとでは膨大な時を経ているにも関わらず全く違いが見られない。これほどの時代の流れを経ても変わっていないということは、サソリは神の創造が現実のものだったということを証明する証拠なのである。

ゴキブリ

年代：1億800万年前～9200万年前
寸法：昆虫：25ミリメートル(0.9インチ)；母岩：90ミリメートル(3.5インチ) X 113ミリメートル(4.4インチ)
地域：ブラジル、セアラ州、ノヴァ・オリンダ累層
層：クラト層
時代：下部白亜紀、上部白亜紀アプチアン

ゴキブリの化石は、進化論が架空のものであることを示しており、その1つがこの写真である。1億800万年～9200万年前のものである。これは現代に生息するものと何ら変わっていない。

ゴキブリ

年代：1億2800万年前
寸法：足部を含む18ミリメートル(0.7インチ)母岩：110ミリメートル(4.3インチ) X 93ミリメートル(3.6インチ)
地域：ブラジル、セアラ州
層：サンタナ層
時代：下部白亜紀

環境が激しく変化しているにも関わらず、何百万年も全く変化せずその構造を保持している生物は、進化したものとは絶対に言えない。何千という生物に属する何百個という化石標本がその不可能性を証明している。

水生甲虫

年代：1億800万年前〜9200万年前
寸法：26ミリメートル；母岩：115ミリメートル(4.5インチ) X 102ミリメートル(4.5インチ)
地域：ブラジル、セアラ州、ノヴァ・オリンダ累層
層：クラト層
時代：下部白亜紀、上部白亜紀アプチアン

水生甲虫は、生涯のほとんどを水中で過ごす。北米では500種類の生息が確認されており、世界では5千種類がいるといわれている。水中でも水面に蓄えた泡を使って呼吸が可能である。この甲虫は非常に複雑な構造をしており、何百万年という時代、その完全な機能を保持してきた。写真の水生甲虫の化石は、現代の水生甲虫が1億800万年前〜9200万年前のものと全く同じであり、全く進化していないことの証拠となる。

バッタ

年代：1億800万年前〜9200万年前
地域：ブラジル、アラリピ盆地、セアラ州クラト層
時代：中生代、白亜紀

写真のバッタの化石は1億800万年前〜9200万年前のものである。時代を超えて全く変化していない他の生物と同様、このバッタもまた、生物が進化したというダーウィニストの主張を覆すものである。

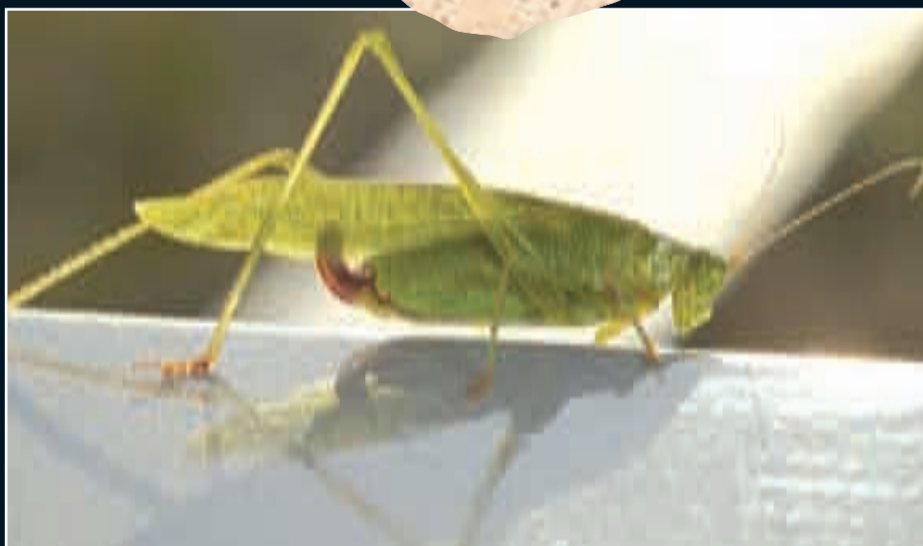
ゴキブリ

年代：1億2500万年前
寸法：全長2.5センチメートル(1インチ)；母岩：11.5センチメートル(4.5インチ) X 幅11.5センチメートル(4.5インチ)、厚さ0.7センチメートル(0.2インチ)
地域：ブラジル、アラリピ盆地
層：ノヴァ・オリンダ累層、クラト層
時代：下部白亜紀

何百万年もの間、全く変わらずにいる動物の1つにゴキブリがいる。3億2千万年前のゴキブリの化石が見つかっている。ゴキブリが進化論に与えた影響について『フォーカス」誌では、こう記している。
理論的には、変化していく環境、天敵、種の間の闘争など、たくさんの要素により自然選択に導かれるとされている。種の選択は突然変異によって有利となり、これらの生物を長い時間をかけて大きく進化させるのだと。しかし、事実はそうではない。ゴキブリについて考えてみよう。ゴキブリは繁殖が早く、寿命が短いが、2億5千万年もの間、同じ姿を保っている。

バッタ

年代：1億2500万年前
寸法：全長2センチメートル(0.8インチ)；母岩：10.5センチメートル(4インチ) X 幅7.5センチメートル(2.9インチ)、厚さ0.5センチメートル(0.2インチ)
地域：南米、ブラジル、アラリピ盆地
層：ノヴァ・オリンダ累層、クラト層
時代：下部白亜紀

直翅目に属するバッタは、何百万年も前の化石記録と全く同じ構造をしている。バッタは通常熱帯地域に生息するが、世界中のいたるところで見られる。
すべてのバッタの化石は、この種が何百万年も変わっていないことを示しており、言い換えれば、バッタは進化していないということになる。これを証明する証拠の1つは写真の1億2500万年前のバッタの化石である。

バッタ

年代：1億2500万年前
寸法：3.8センチメートル(1.5インチ)
地域：ブラジル、アラリピ盆地
層：ノヴァ・オリンダ累層、クラト層
時代：下部白亜紀

この1億2500万年前の化石は、バッタが常にバッタとして存在していたことの証拠である。これを見ると、進化論者が論理的な説明をするのはまず無理だということが分かる。

キリギリス

年代：1億2500万年前
寸法：1.5センチメートル(0.6インチ)、触覚1.8センチメートル(0.7インチ)を含めると、全長は3.4センチメートル(1.3インチ)となる。
地域：ブラジル、アラリピ盆地
層：ノヴァ・オリンダ累層、クラト層
時代：下部白亜紀

これらのバッタの特徴的な機能は、体の2倍にもなる長く細い触角である。他のバッタのように、キリギリスもまた何百万年もの間変わっていない。この写真は、1億2500万年前のバッタと現在生息するバッタとの間に何ら違いがないということを示すものである。

ペルーで発見された化石標本

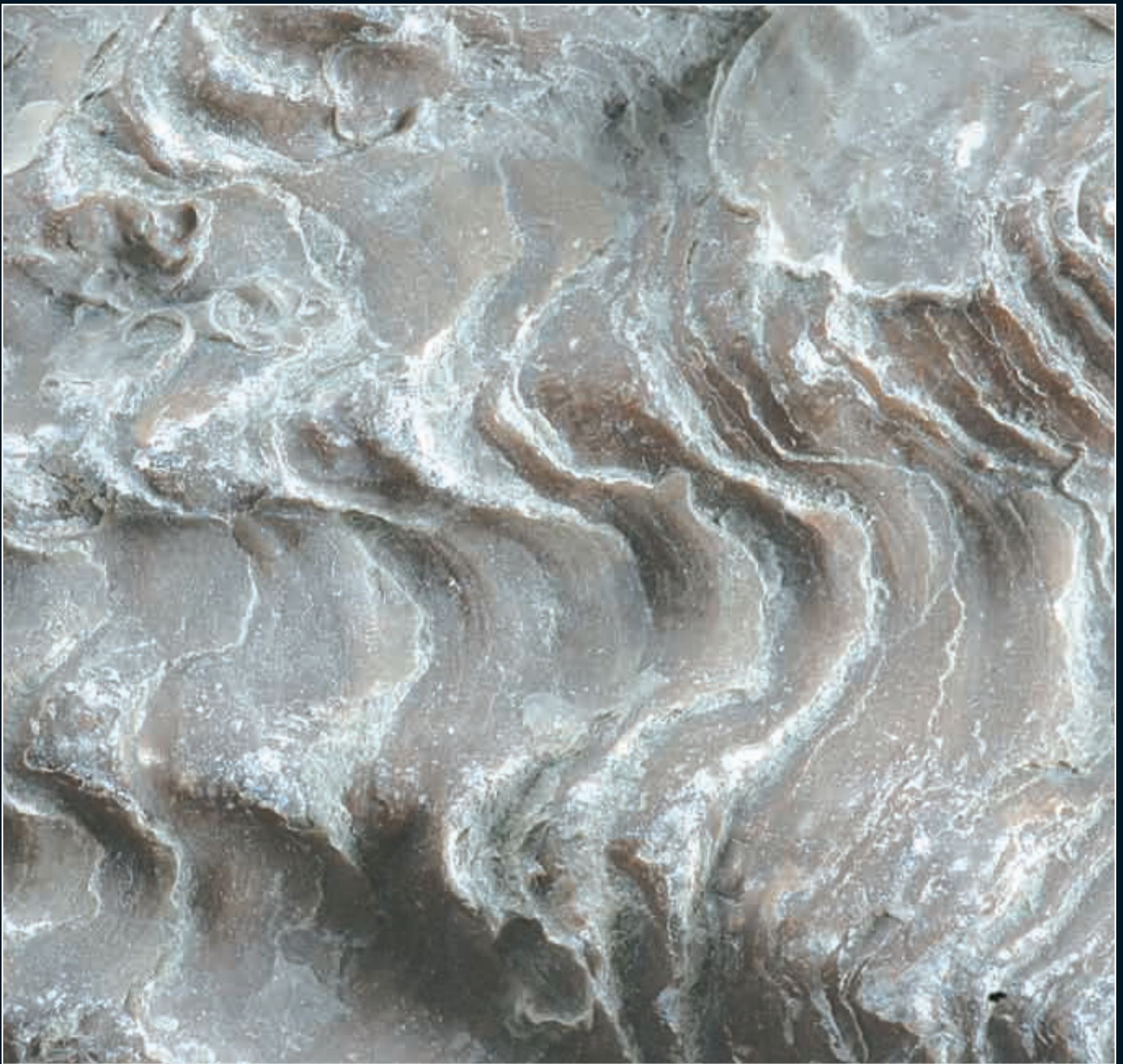
ペルーの地質学的、地理的構造では、国内のさまざまな地域で異なる化石が見つかっている。ペルーには、3つの主要地域がある。海岸地域、アンデス山脈を含む中央地域、そしてアマゾンの熱帯林を含むアマゾン盆地である。多くの化石層は、アンデスと北部を中心に横たわっている。

ペルーの最も主要な化石層は、北部のカハマルカ層である。石灰岩が岩層の主要な部分を構成している。他の重要な化石層は、魚の化石で有名なピスコ層である。この化石層は、クジラ、イルカ、アシカ、ペンギン、カメなど多くの海洋生物の化石を有している。海岸から約30kmのこの層では、大昔のペルーの地質を知るのに重要な情報を提供

南部のピスコ層は、化石層で有名である。

している。

ペルーの化石の発見における最も重大な事実は、ここでもまた進化論が否定されるということである。19世紀中ごろから、進化論者によるすべての化石研究は、進化論をサポートする化石が出ることを期待していたが、結局それは徒労に終わった。彼らの試みにも関わらず、進化論の証拠となるような化石は、1つとして発掘されなかったのである。発掘と研究によるすべての発見は、生物は突然に完全な姿で現れたという進化論が期待するものとは全く正反対のものを提示することとなった。また、それらの発見は、生物が地上に現れてから、全く変化していないことも示していた。これは、生物が進化のプロセスには左右されていないことを証明付けるものである。

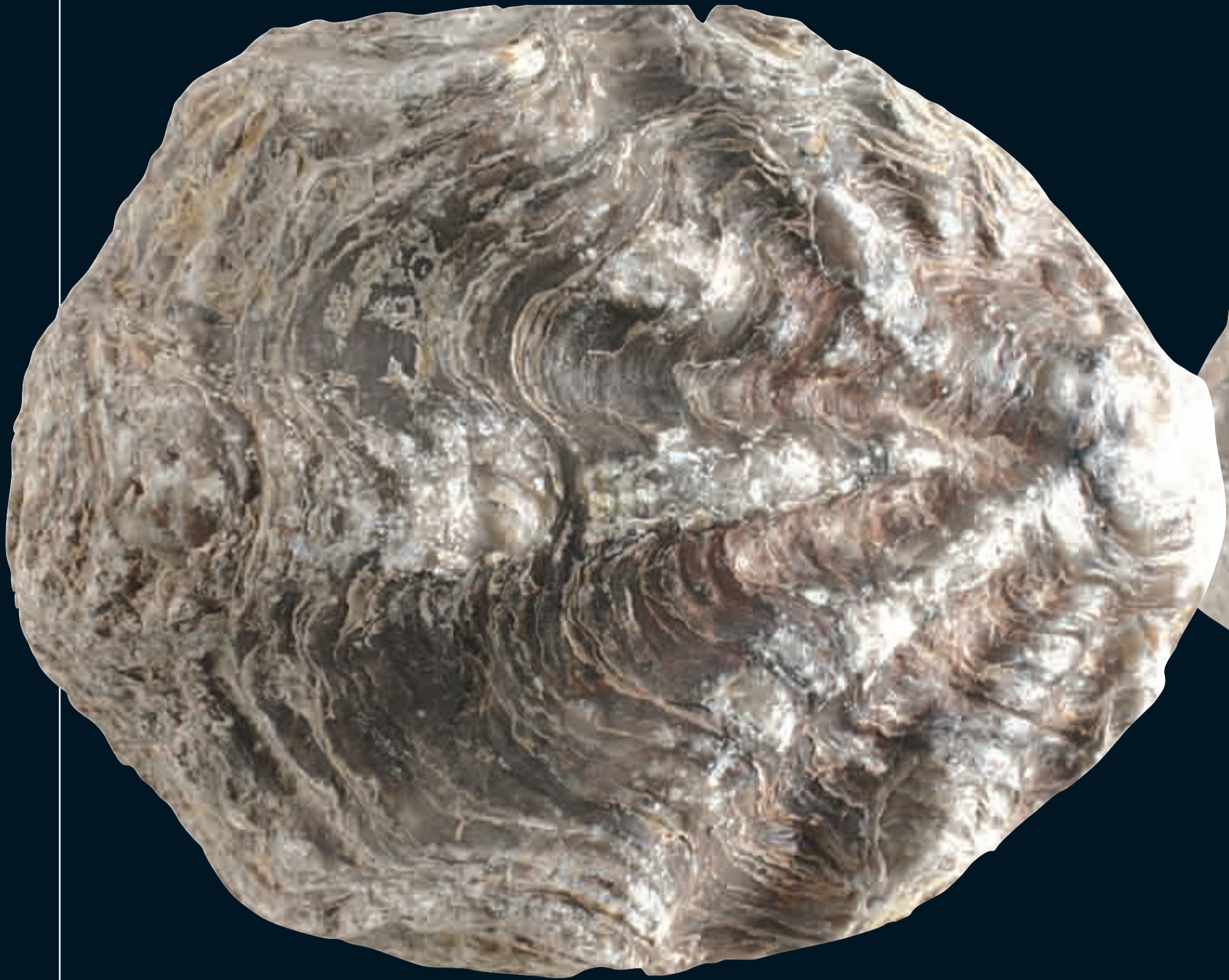
カハマルカハーバーの石灰岩には多くの化石が含まれている。他の例と同様、ピスコで採取された化石は、進化が発生しなかったという事実を解き明かすものである。

牡蠣

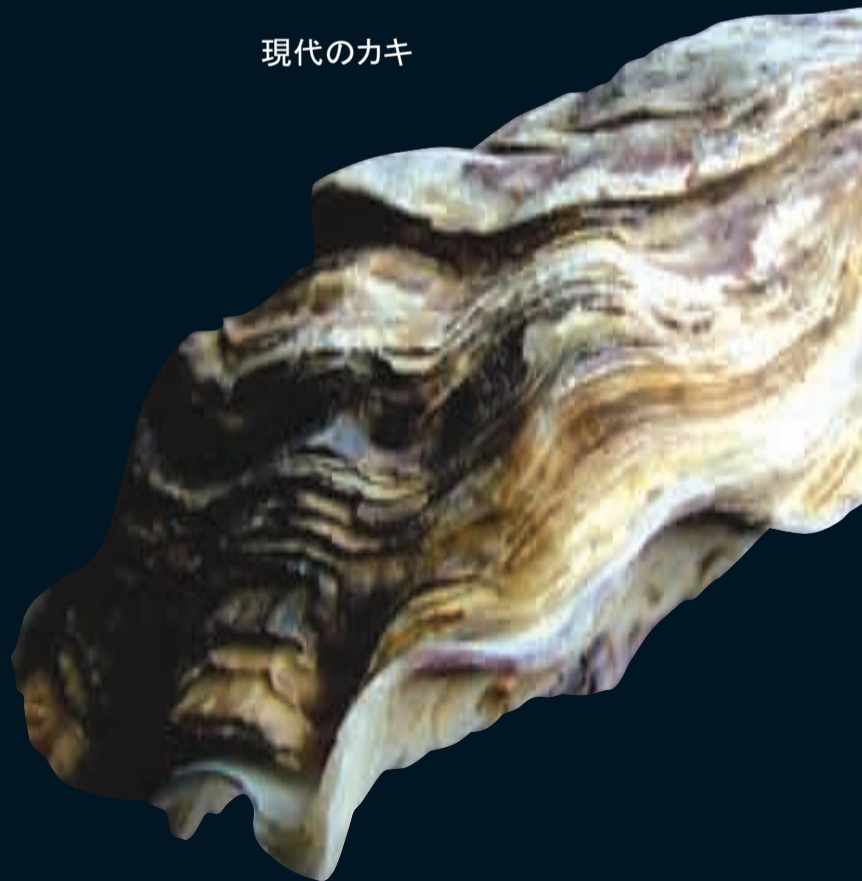
年代：2300万年～500万年前
寸法：7.6センチメートル(3インチ)
地域：ペルー、カザマルカ
時代：中新世

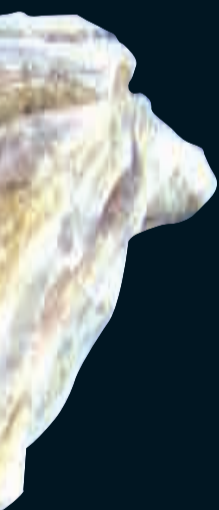
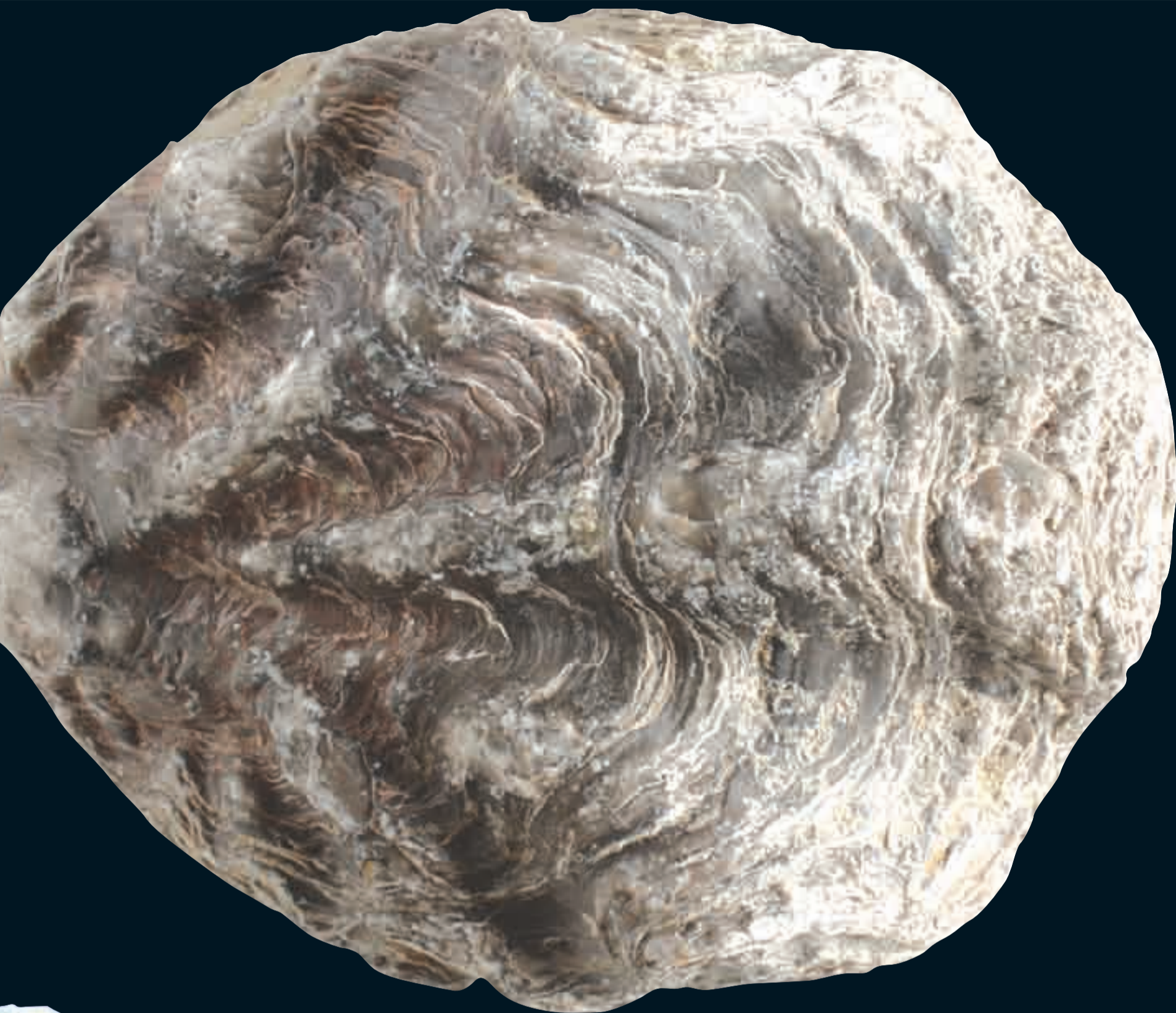
2300万年～500万年前の牡蠣は、現在見られる牡蠣と何ら変わっていない。これは進化論を否定するものである。牡蠣は進化したのではなく、この長い年月をさかのぼると神によって創造されたということがわかる。

牡蠣

年代：2億800万年～1億4600万年前
寸法：およそ8センチメートル(3.25インチ)
地域：ペルー、バンバマルカ、カジャマルカ
時代：ジュラ紀

この写真の牡蠣は2億800万年～1億4600万年前のものであり、これは牡蠣が現代に生きる牡蠣とこの何億年も経過したものとが全く同じであることを示し、これもまた、進化論を否定するものである。

現代のカキ

牡蠣

年代：2億800万年～1億4600万年前
寸法：約8センチメートル(3.25インチ)
地域：ペルー、バンバマルカ、カジャマルカ
時代：ジュラ紀

この化石記録は、何百万年間もその生物としての構造をそのままに保持している。その例の1つは、この写真の2億800万年前～1億4600万年前の牡蠣の化石である。すべての他の化石の発見と同様、これもまた進化論を否定するものである。

アルゼンチンで発見された化石標本

アルゼンチンで発見された化石のほとんどは、南米大陸、チリ共和国南部とアルゼンチンの地方名であるパタゴニア地方で出土されている。アンデスの東側は、アルゼンチンの一部でありパタゴニア地方と呼ばれている。今日、ペンギン、クジラ、アザラシ、野生のダチョウ、アシカなど、非常に異なる生物の化石がこの地域で発見されている。化石記録としては非常に内容が豊かである。

この地域の化石層の1つには、イスチグアラスト層がある。地質学的研究では2億3千万年前、季節の雨が大量に降り、活火山を有するこの地域は遊水池となっていた。この化石層は、三畳紀時代(2億4800万年前〜2億600万年前)の哺乳類と海洋生物の標本を大量に有している。1950年代、大きな発掘が行われた後、この地域の重要性がついに認識される。

アルゼンチンの化石層の1つは、サンタクルスのハラミジョ森は3億5千万年前の化石化森林を構成している。これはまた、多くの植物種もまた、進化の過程を経ずに、何百万年もの間全く変わっていないことを示す重要な標本となっている。

ハラミジョの石化した樹木の化石森林

イスチグアラストには豊富に化石が採集される。およそ2億3千万年前には、洪水が多く発生した水底であった。

アルゼンチン
ウルグアイ
大西洋
パタゴニア

チリ共和国で発見された化石標本

南米チリ北部のアタカマ砂漠以外の地域でも化石は数多く発見されている。最も化石が豊富な地域はチリ南部のパタゴニアである。アンデス山脈にもまた、化石層が横たわっているのだ。

哺乳類、海洋生物、爬虫類、植物など多くの異なる生物種の化石がチリ共和国の化石発掘現場では発見されている。最も有名な化石発掘現場はキリキナ層である。ここから出土した化石はほとんどが白亜紀のものである。これらの化石標本のおかげで、白亜紀時代の海洋生物の重要な情報が明らかになっている。チリ共和国中部の一部の化石層、特にアンデスは、哺乳類の化石で有名である。

この地域で発見された化石は、ダーウィニストを苦境に追いやる。なぜなら、地質学的年代を超えて、生物が全く変化していないことを示すからである。別の言い方をすれば、化石記録に最初に現れた生物は絶滅するまで、または現在に生き残るこの日まで何億年もその形をそのままに保っていることになる。これは、はっきりと生物が進化していないことの証拠となる。

化石記録が示すように、地球上の生物は進化のようにゆっくりと現れたのではなく、突然姿を現している。突然の出現は、神の創造があったことを示唆しているのだ。神はすべての生物を完全な形で無から作り出したのである。この化石記録もまた、この真実を物語っている。

アンデス地域からは、多数の哺乳類の化石が発掘されている。

ナンヨウスギの球果の断片

年代：1億6500万年前
寸法：5.6 センチメートル (2.2インチ) X 7 センチメートル (2.7インチ)
地域：アルゼンチン、パタゴニア、サンタクルス州、ハラミジョ
時代：ジュラ紀、カロヴィアン

この1億6500万年前のナンヨウスギの球果の断片はハラミジョの石化森林から発見されたものである。細部までよく分かるこの球果を見ても、この種も全く進化の過程を経ていないことを、この化石が物語っていることが良く分かる。現在見ることができる球果の特徴は、1億6500万年前のものと全く変わっていないのである。

カニ

年代：2300万年～500万年前
地域：アルゼンチン、パタゴニア、リオ・デ・ラ・プラタ
時代：中新世

化石記録として多く発見されている生物の1つはこのカニである。何千万年前のカニと今日に生きるカニとの間に全く違いがないことを示すのは、この写真の2300万年～500万年前の化石のカニである。このカニは現代生息しているものと全く違いがない。

ナンヨウスギの球果

年代：2億800万年～1億4600万年前
寸法：各球果半分の大きさ7.6センチメートル(3インチ)
地域：アルゼンチン、パタゴニア、クアドラド山
層：石化森林
時代：ジュラ紀

このナンヨウスギの球果の化石は、2億800万年～1億4600万年前のものであり、現在生息するものと全く同じ姿をしている。これは、進化論が虚言であり、大きな欺瞞であることを証明するものである。この完全な形の化石記録は、神による創造が疑う余地もない真実であるということを表している。

カワウの頭蓋

年代：1800万年前
寸法：12.7センチメートル(5インチ)
地域：チリ共和国
時代：中新世

写真のカワウの頭蓋は1800万年前のものであり、古代のカワウが現在生息するものと全く同じものであることを示す証拠となっている。全く違いが見られないということは、鳥が何百万年も全く変わっていないことを示している。言い換えれば、進化していないのである。

カワウの頭蓋

年代：1800万年前
寸法：15.2センチメートル(6インチ)
地域：チリ共和国
時代：中新世

カワウは、ウ科(Phalacrocoracidae)に属する海鳥の仲間であり、現在38種類が確認されている。
化石記録では、何百万年前のカワウは現在生息するカワウと全く同じ姿をしていることが分かる。これは、鳥が進化の過程を経ておらず、これもまた進化論を打ち砕く証拠となっているのである。

カニ

年代：2500万年前
寸法：15センチメートル(6インチ)
地域：南チリ共和国層
時代：漸進世

化石記録は、さまざまな面から進化論を否定していく。進化論を否定する化石記録の1つには、この2500万年前のカニの化石があげられる。何千万年も変わらぬままでいるこのカニもまた、生物が進化していないことを確認するものである。なぜならこのカニもまた、現在生息するカニと何ら違いが見られないからである。

ヨーロッパで発見された化石標本

ドイツで発見された化石標本

地理的に研究によれば、ジュラ紀の年代(2億800万年～1億4600万年前)を通じて西ヨーロッパの大部分は温かく浅い海で覆われていたことがわかっている。大量の海洋生物の化石がこの地域から発見されている。

特に、ドイツの化石層の一部には、デボン紀とジュラ紀における非常に詳細な情報が得られる化石が見つかっている。これらの化石発掘現場の最も重要なものには、メッセル層、ソルンフォーヘン層、ホルツマーデン層、フンスリュック頁岩層の動物相がある。

フンスリュック頁岩層では、古生代(5億4300万年前～2億5100万年前)時代の大量の化石が発見されており、この地域から発見されている多くの化石は、デボン紀下部、中部のものである。フンスリュック頁岩層の大きな特徴は、バージェス頁岩層のものと同様、軟組織とともに化石化されている生物があるという点だ。これにより、何百万年前もの生命体の身体的構造が分かるというだけでなく、生活スタイルや習性などについても分かるようになるのである。

これらの遺骸は生物が複雑な体系をどの年代においても保持しており、高度に発達した身体組織を享受していたことを示している。この状況において、生物が原始状態から複雑な状態へとゆっくりと進化したと言うダーウィニストたちの論理は、絶望的となるのである。なぜなら、例外なくしてすべての化石記録は、進化論を否定するものであるからだ。これもまた、神の創造を支持するものである。

ホルツマーデン層で発見された化石は、通常深海に生息する生物であった。これらの多くは完全な状態で化石化されて出土しており、組織や骨格もそのまま保存されていた。ホルツマーデンから発見された化石には軟組織のものはほとんどなかった。ソルンフォーヘンの化石は、通常浅い湾やサンゴ礁、海綿礁などに生息する生物であった。昆虫、植物、トカゲ、ワニ、鳥などの陸生成物の化石もまたソルンフォーヘンから発見されている。その中に

メッセルで行われた化石発掘

ドイツでも重要な化石発掘場であるソルンフォーヘンは、大量の化石が見つかった場

フンスリュック頁岩層と頁岩での発掘作業

は、鳥の最も古いものとされている始祖鳥も7種類発見されている。

その他のドイツの主な化石層は、メッセル層である。古代、幅700メートル、水深1千メートルほどの湖があり、ここでは多くの種類の始新世時代(5400万年前～3700万年前)の化石が発見されている。メッセルはこの年代には熱帯であったことが分かっており、植物、鳥、コウモリ、爬虫類、魚類、カメ、昆虫類など多くの異なる生命体の化石が発見されている。

シュトゥットガルト近郊のホルツマーデン化石層は、ジュラ紀早期からの生物種の化石が発掘される場所として主要な地域である。

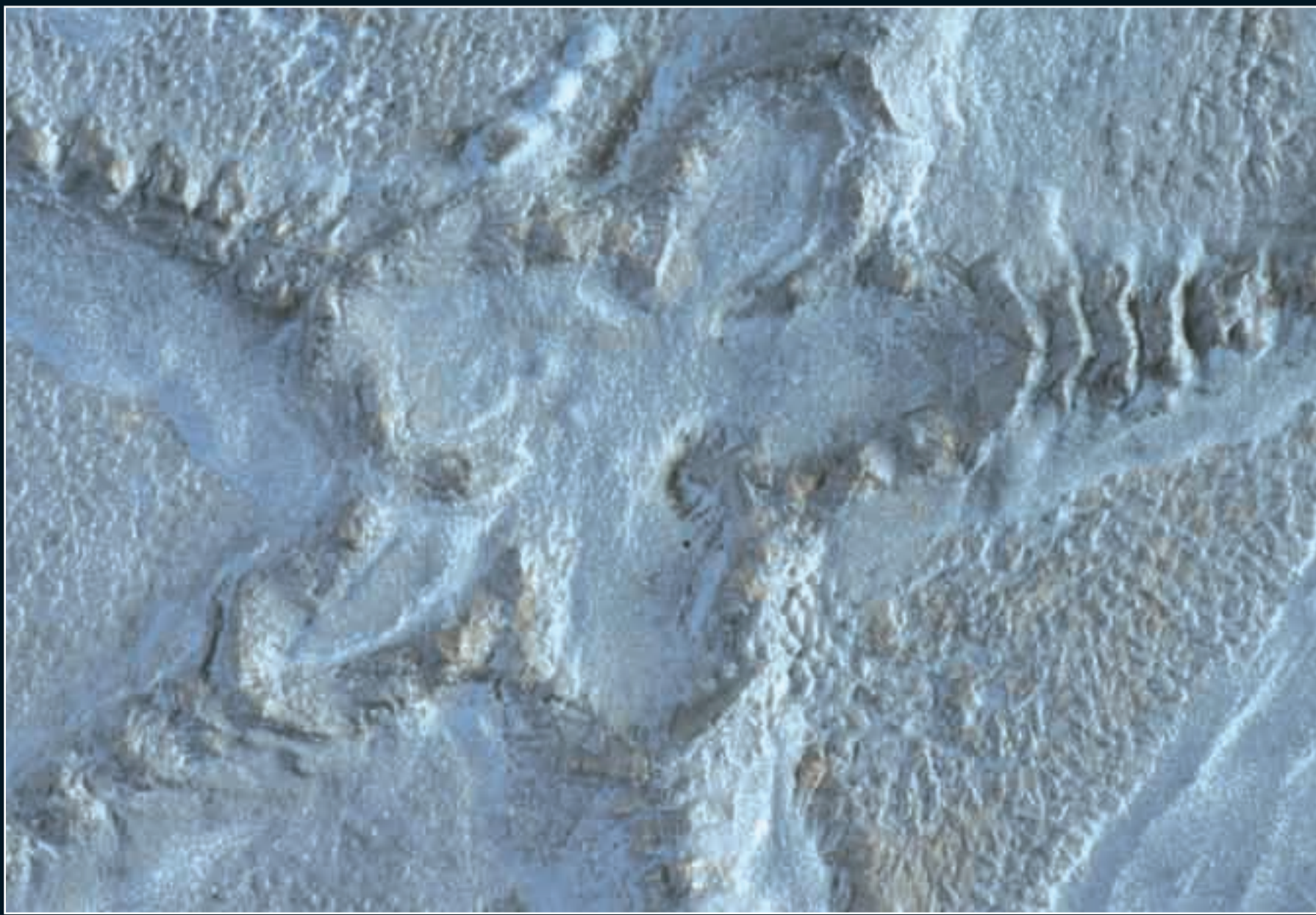
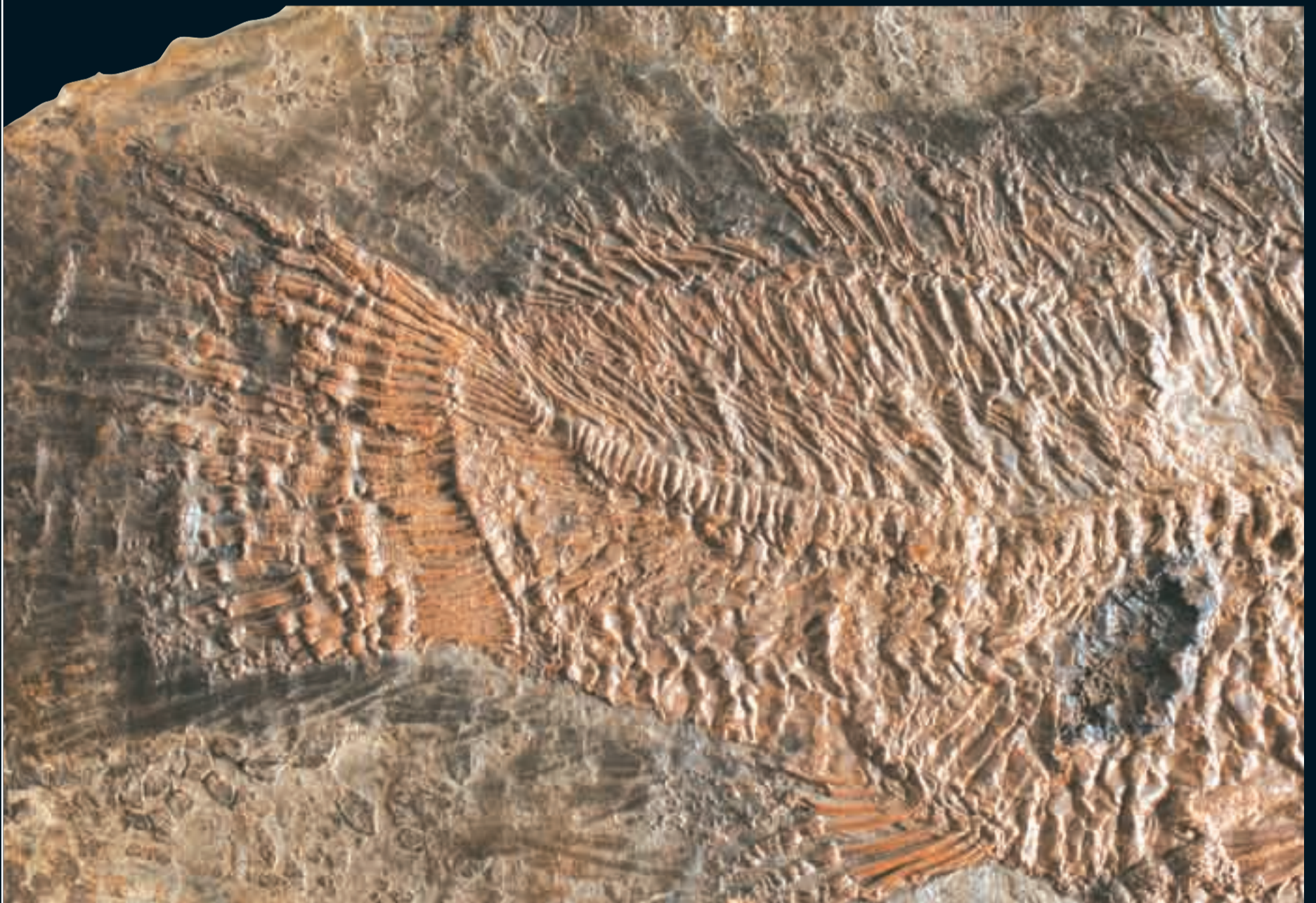
エビ

年代：1億4500万年前
地域：ドイツ連邦共和国、バイエルン州、アイヒシュテット
寸法：母岩：10.5センチメートル(4.1インチ) X 15.2センチメートル(5.9インチ)
時代：ジュラ紀、白亜土ゼータ

エビは甲殻類の亜門である節足動物に属する。その体は甲殻で覆われ、大部分を炭酸カルシウムで構成されている。数種類ものエビは淡水にも海水中にも生息している。古代の最も古い時代に生きたエビの化石は2億年前にさかのぼる。写真のエビの化石は、1億4500万年前のものである。エビは何億年もその姿を変えておらず、これは生物が進化の過程を経ていないことを示すものである。

ヒトデ

年代：3億9千万年前
地域：ドイツ連邦共和国、ブンデンバッハ、フンスリュック山地
時代：デボン紀

3億9千万年前のヒトデと今日の海に生息するヒトデの間に違いは全く見られない。何億年の時が流れても、ヒトデは変化しないままであり、過去のどの時点からも全く進化していない。

ボウフィン

年代：5千万年前
地域：ドイツ連邦共和国、ヘッセン州、ダルムシュタット、メッセル、油母頁岩
時代：始新世、ルテシアン

ボウフィンは、アミア科に属する生物である。他の魚類と同様、この種もまた奥深い歴史を持っている。最も古代のものと言われる化石標本はおよそ1億5千万年前のものである。
発掘された化石は何億年もの間ボウフィンが全く変化していないことを物語っている。5千万年前の写真のボウフィンと、現在生息しているものとの間に全く違いは見られない。

ザリガニ

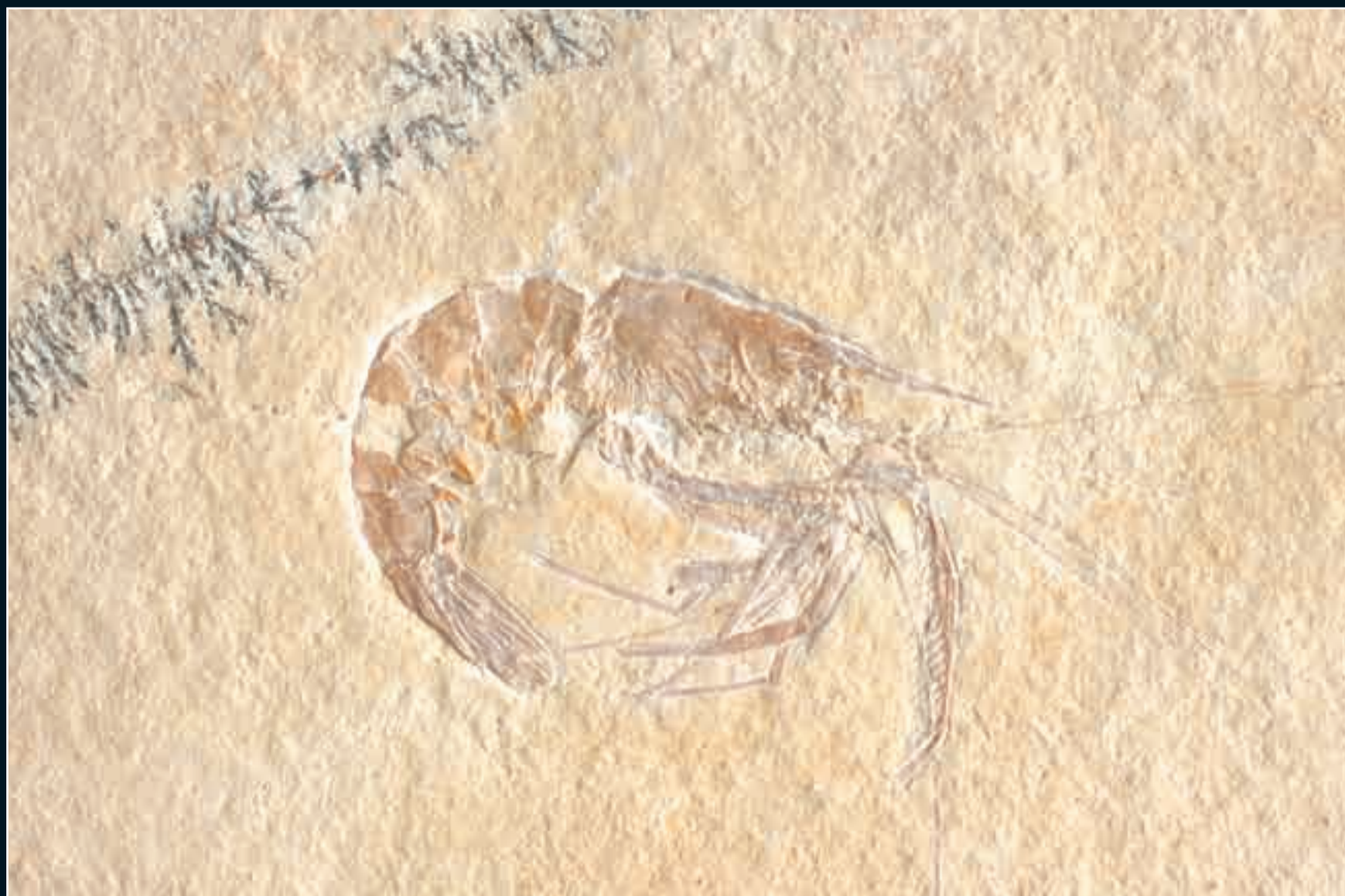
年代：1億5千万年前
地域：ドイツ連邦共和国、ソ¥u12523 ルンフォーヘン層
時代：ジュラ紀

1億5千万年前に存在していたザリガニは、現在生息しているものと何ら変りはない。この同一性は、進化が起こっていないという、ひとつの大きな証拠の断片である。ザリガニはいつの時代もザリガニとして存在していたのだ。他のあらゆる生物種と同じように、ザリガニもまた、神によって創造されたのである。

エビ

年代：1億5500万年前
寸法：長さ7.5センチメートル(2.9インチ)；母岩：20.8センチメートル(8.1インチ) X 21.6センチメートル(8.5インチ)
地域：ドイツ連邦共和国、アイヒシュテット、ソルンフォーヘン
時代：ジュラ紀

何十年もの研究の結果を経ても、ダーウィニストは進化が起こったことを示すたった1つの化石も見つけることが出来ないでいる。しかし、進化論を否定する化石は何百万と見つかっている。見つかった化石はすべて、その種が存続する長い年代を経てもその複雑な構造は全く変わっていないことを示している。また、何万年という時を経ているにも関わらず、全く変わらぬ姿を保持している。
この写真の化石は、1億5500万年前のものと現在に生息するものとの間に全く違いがないということを証明するものである。

サヨリ

年代：5400万年～3700万年前
寸法：31.75センチメートル(12.5インチ)
地域：ドイツ連邦共和国、フランクフルト
層：メッセル頁岩
時代：始新世

化石記録に残っているサヨリで最も古いものは、1億8千万年前のものである。これは、生きた化石の例である。この写真に見られる化石となったサヨリは、5400万年前～3700万年前のものである。何千万年もの間同じ姿をしているサヨリは、進化論を否定する。

コウモリ

年代：5400万年～3700万年前
寸法：体長8.2センチメートル(3.2インチ) X 幅4.5センチメートル(1.8インチ)
地域：ドイツ連邦共和国、フランクフルト
層：メッセル頁岩
時代：始新世

何千年前の化石のコウモリは、生物が進化したという主張を退けるものである。この化石に代表されるような例は、神が生物を創造したという事実を明かすものである。

クモヒトデ

年代: 1億5千万年前
地域: ドイツ連邦共和国、ソ¥u12523 ルンフォーヘン層
時代: ジュラ紀

写真の化石は1億5千万年のものであり、クモヒトデが進化していないものを示す証拠である。この化石が現在のクモヒトデとまったく同じであることを主題にすると、進化論者は、それに対して何一つとして理性的で科学的な説明をすることができない。

シーラカンス

年代：1億4500万年前
地域：ドイツ連邦共和国、バイエルン州、アイヒシュテット
時代：ジュラ紀、白亜土ゼータ

進化論者らはシーラカンスを、絶滅した半魚・半爬虫類の半進化状態の形態だと思い描いた。しかし、現在までに200もの生きた標本が捕獲されている事実は、この主張が作り上げたこの生物は欺瞞にしかすぎなかったことを明らかにするものである。シーラカンスは生物過渡期のものではなく、深海に生息する完全な体と完全な構造を有する生物である。最古に発見されているシーラカンスは4億1千万年にさかのぼり、数億年という時の経過にも関わらず変化していない。
この写真のシーラカンスの化石は1億4500万年前のものであり、「水生生物から陸生生物への変化」という進化論者の主張が欺瞞であるということを示している。

ロブスター

年代：2億800万年～1億4600万年前
寸法：母岩：12.9センチメートル(5.1インチ) X 16.2センチメートル(6.4インチ)；ロブスター部分：5.5 センチメートル(2.2インチ)
地域：ドイツ連邦共和国、ソルンフォーヘン
時代：ジュラ紀、白亜土ゼータ

ロブスターの目は、規則正しい四角い面で構成されている。これらの規則正しい四角形は、実際にはプリズムの表面として機能する。ロブスターの目の中のこれらのプリズムの内部表面は鏡面となっており、光を反射できるようになっている。この面に反射した光はさらに奥にある網膜で焦点が正確に合わせられる。これらのプリズムは光を完璧に1つの点に反射できるような角度に作られている。
この複雑な構造は、何百万年も前からずっと完璧にすべてのロブスターで機能してきたものである。今日生きるロブスターは、2億年前のものと全く同じ構造を使用している。これは、事実上、生物が段階的に進化したと主張するダーウィニストを否定するものである。

クモヒトデ

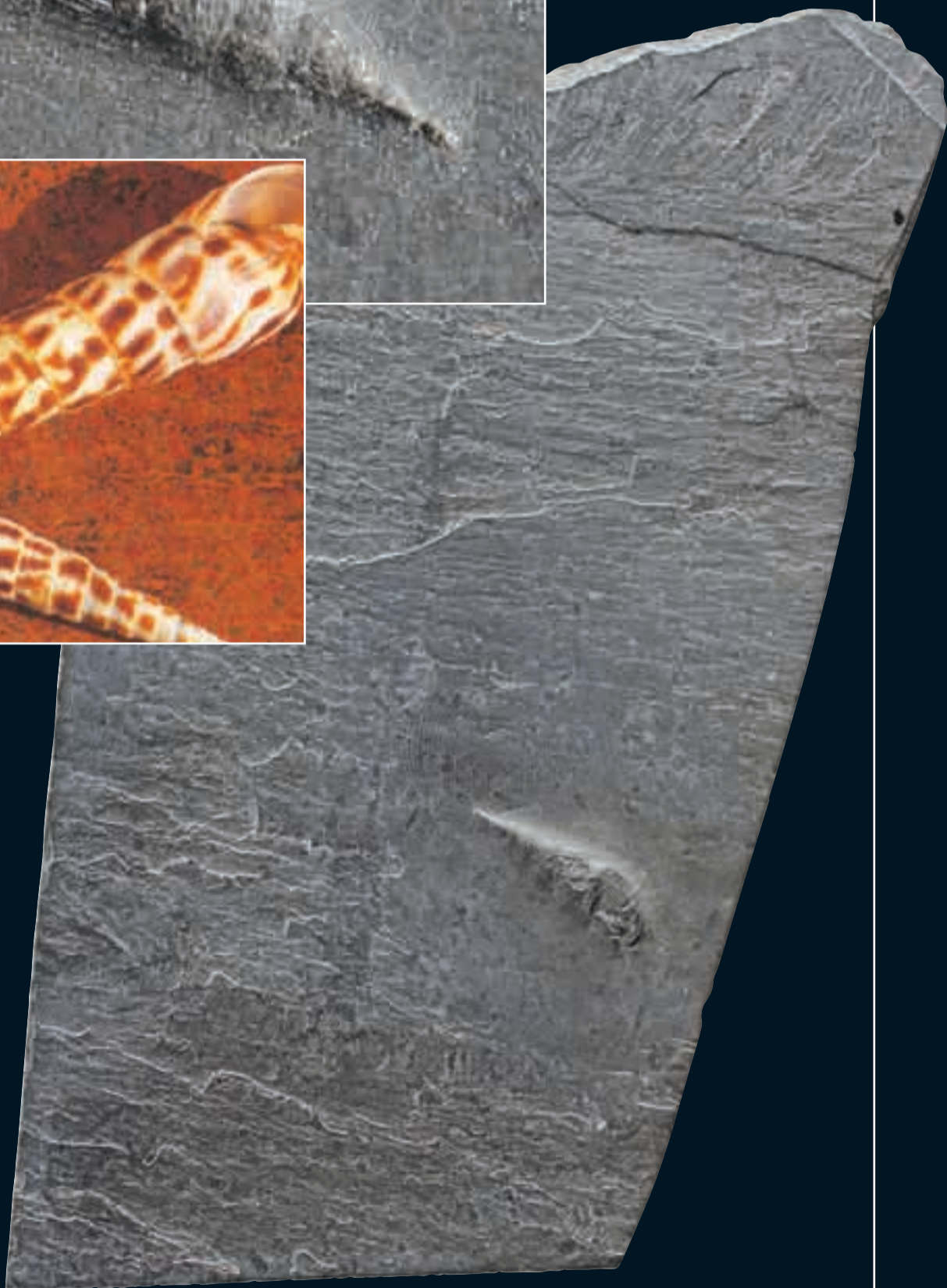
年代：1億5千万年前
寸法：幅5 センチメートル(2インチ)；母岩：95ミリメートル(3.7インチ) X 75ミリメートル(2.9インチ)最も幅広い部分、厚さ20ミリメートル(0.7インチ)
地域：ドイツ連邦共和国南部、ソルンフォーヘン
時代：ジュラ紀上部

クモヒトデは、進化論を完全に否定する生きた化石である。3億年前に生息していたクモヒトデは、2億4500万年前のものと、1億5千万年前のもの、そして今日生息するものと全く同じ姿をしている。何億年もの間変化していないクモヒトデは、進化など全くの虚言にすぎないことを私たちに教えてくれる。

巻貝

年代：4億1千万年～3億6千万年前
寸法：母岩9.3センチメートル(3.7インチ) X 13.2センチメートル(5.2インチ)
地域：ドイツ連邦共和国、ブンデンバッハ、フンスリュック頁岩
時代：デボン紀

巻貝は軟体動物門(phylum Mollusca)に属している。最古の標本は、カンブリア紀後期のものである。この写真の標本は、4億1千万年～3億6千万年前のものである。何億年も前の巻貝は、完全に進化論を論破する。

巻貝

年代：4億1千万年～3億6千万年前
寸法：母岩；7センチメートル(2.75インチ) X 9センチメートル(3.5インチ)
地域：ドイツ連邦共和国、ブンデンバッハ、フンスリュック頁岩
時代：デボン紀

4億1千万年～3億6千万年前に生息していた巻貝は、現在生息しているものと全く同じ姿をしている。長い年月の間にも全く変化を遂げていないこの生物は生物が進化のプロセスを経ていないことの証拠となる。

エビ

年代：2億800万年～1億4600万年前
寸法：全長19.5センチメートル(7.7インチ)
地域：ソルンフォーヘン石灰岩、ドイツ連邦共和国西部、アイヒサット
時代：ジュラ紀

何億年もの間全く変化せずにいるエビは、私たちにエビが進化したのではなく、神によって創造されたという事実を見せ付ける。仮に生物が何億年も前から現在まで同じ機能を持っているとしたら、それは進化によって発達したものであるとは言えない。化石記録は、進化論者の主張が間違いであることを示す証拠である。

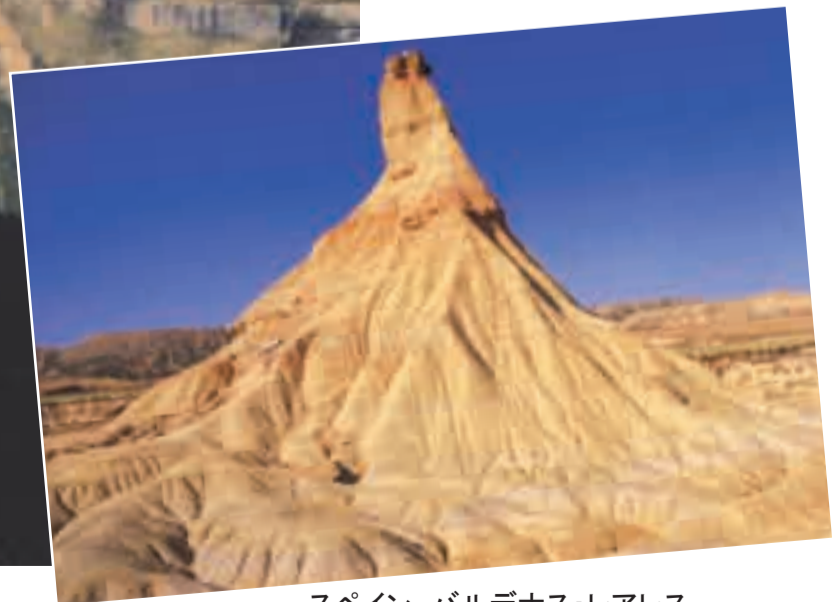
スペインで発見された化石標本

ピレネー山脈、シエラネバダ山脈など、スペインの多くの地域は山脈や丘陵地帯で覆われている。国内の24%は標高1000m以上となっている。山脈地帯の一部には重要な化石層が横たわっている。

岩石構造は2つに分けられる。イベリア半島の北部と西部は、花崗岩や片岩など主に結晶質の岩石でできている。その他の地域は頁岩を大量に含む堆積岩で構成されている。

スペインで発掘される化石はデボン紀(4億1700万年前～3億5400万年前)時代の腕足動物および多くの海洋生物、石炭紀(3億5400万年前～2億9千万年前)時代の多様な植物が多く、そして新生代(6500万年前～現代)の哺乳類、爬虫類、海洋生物、植物なども多く見つかっている。

これらの化石すべては、ダーウィニズムを苦境に追いやるものである。これらの発見の中には段階的な進化を支持する証拠が1つもないのに対し、長期間にわたる地質学的年代を超えて多くの生物が全く姿を変えていないことを明らかにしている。この重要性は明白である。生物は進化したのではない。全能の神がこれらのものを創造されたのである。

600mもの渓谷である石灰岩オルデサ・キャニオン

スペイン、バルデナス・レアレス

チェコ共和国で発見された化石標本

チェコ共和国の地理的構造を見ると、国土のほとんどをボヘミア地域の山脈が覆っている。この地域は一部海抜1000mを越え、化石が豊富に発掘される場所がある。

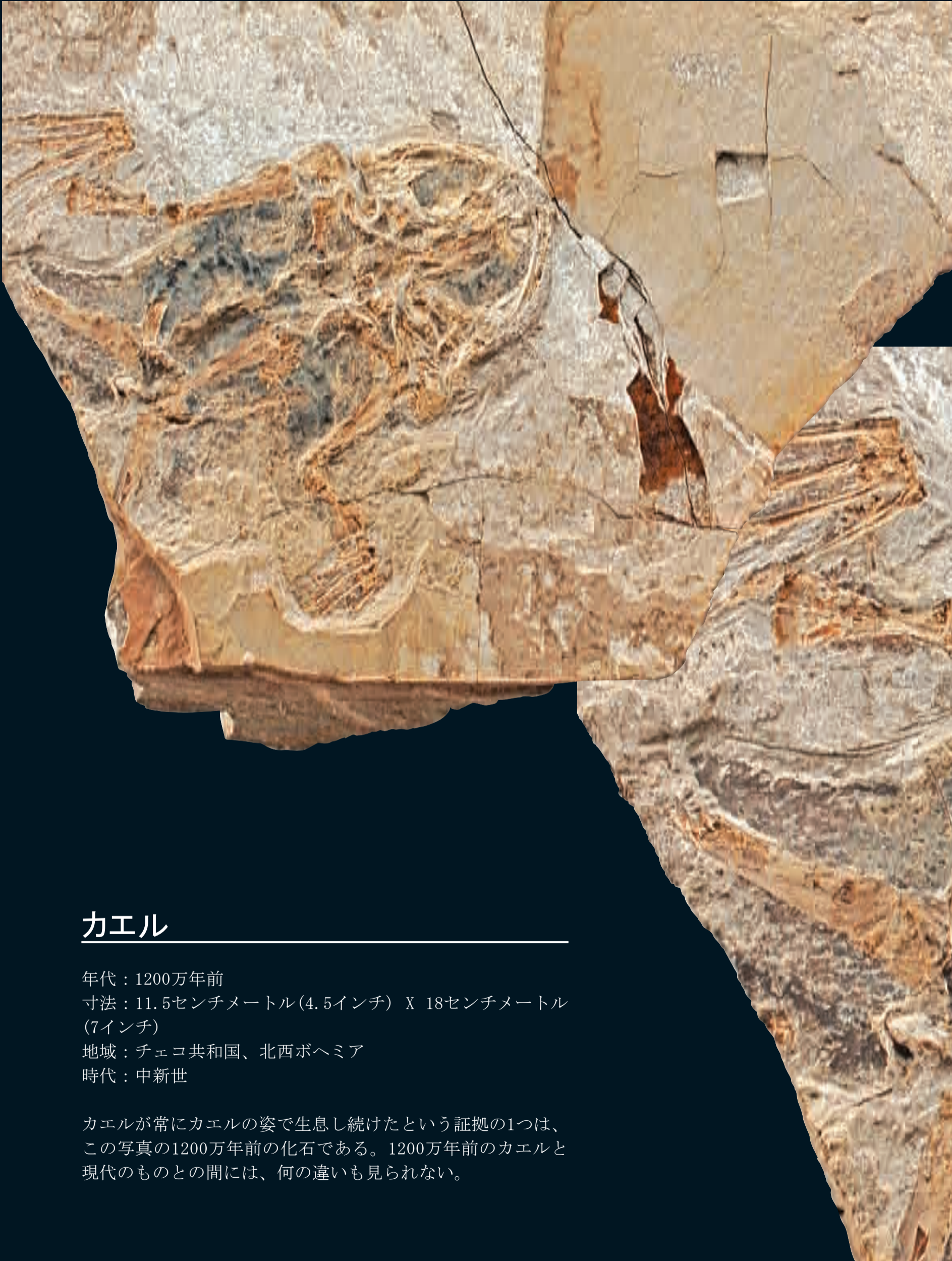
原生代(25億年前～5億4500万年前)にさかのぼる微生物に加え、カンブリア紀(5億4300万年前～4億9千万年前)の化石、またデボン紀(4億1700万年前～3億5400万年前)の化石も発掘されている。中でも目をひくものは、1300種類もの三葉虫である。300種類ほどはフランスの古生物学者ヨアヒム・バロンド(Joachim Barrende)によって名付けられているため、バロンド三葉虫という呼び名でも知られている。バロンド三葉虫が多く発掘されている地域としてはジンス層が知られている。古生代(5億4300万年前～2億5100万年前)時代の海洋生物の化石もまたジンス層からは発見されており、この層はカンブリア紀には寒い地方だったと考えられている。

チェコ共和国における豊富な化石の出土は、自然史を考える上で非常に重要である。これらの発見からダーウィニストが主張するような進化論的証拠は何1つ発見されていないことが分かっているからである。生物は進化論で言われるように共通の祖先から進化したのではなく、化石記録でも示されているように、すべての生物が個別の特徴を備えたまま突然この世に姿を現している。この事実は、神の創造を証明する重要な証拠となり、進化論を打ちのめす。

豊富な化石層で知られるボヘミアからは長い歳月を経た化石が採取されている。1つ1つの化石は、生物が進化したのではなく、神によって創造されたのだということを明らかにしている。

シダ

年代：3億6千万年～2億8600万年前
寸法：13 センチメートル(5.1インチ) X 10センチメートル(3.9インチ)
地域：スペイン、レオン、カナレス
時代：石炭紀

3億6千万年～2億8600万年前に生息していたシダは現在生息しているものと全く同じものである。これらの植物は何億年もの間全く同じ姿であり、神の創造が事実であることが疑いのない事実だということを明らかにする。

カエル

年代：1200万年前
寸法：11.5センチメートル(4.5インチ) X 18センチメートル(7インチ)
地域：チェコ共和国、北西ボヘミア
時代：中新世

カエルが常にカエルの姿で生息し続けたという証拠の1つは、この写真の1200万年前の化石である。1200万年前のカエルと現代のものとの間には、何の違いも見られない。

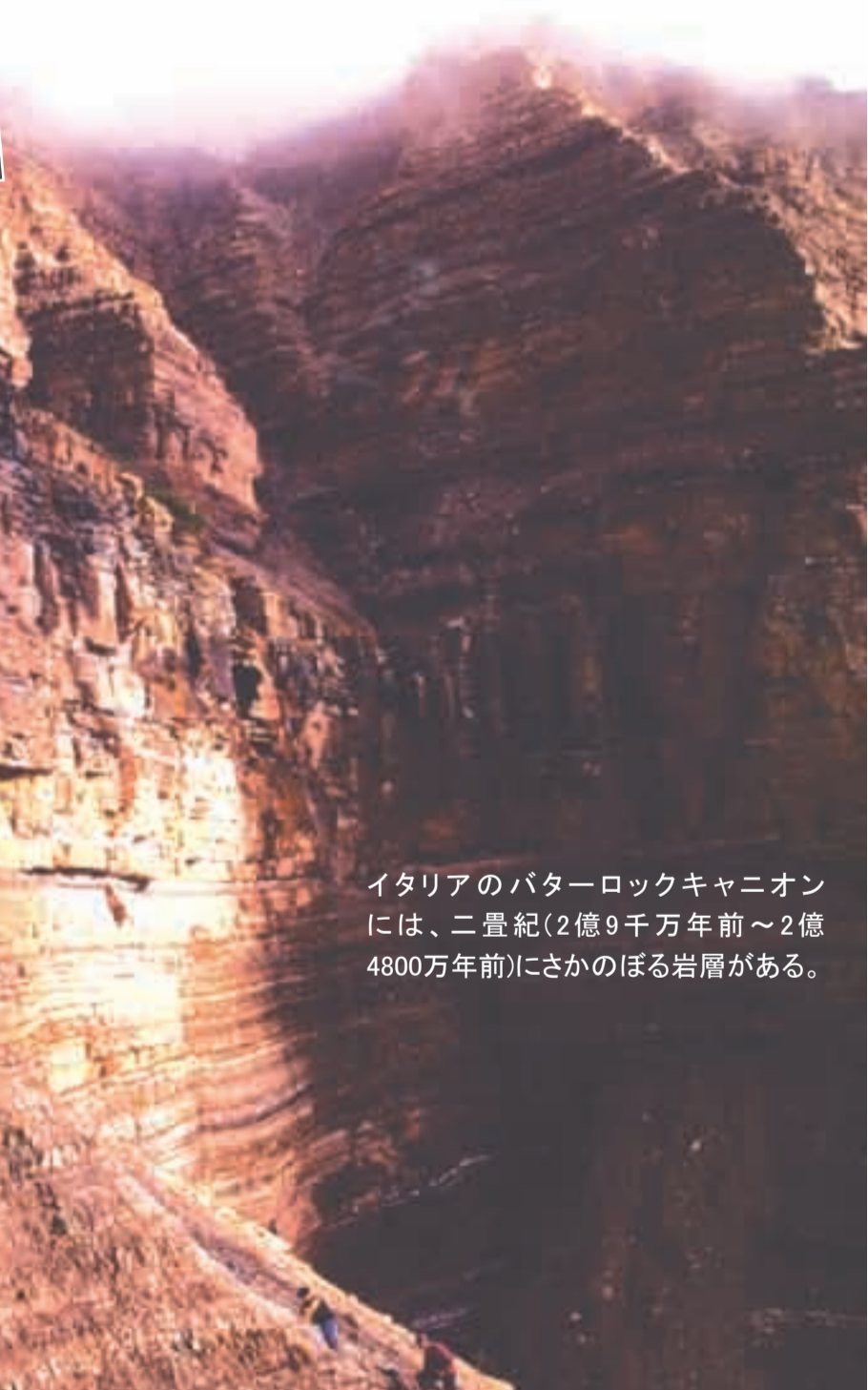
イタリア共和国で発見された化石標本

イタリアの岩石構造は、古代のヨーロッパの一部地域を覆っていた、かつてのテチス海の海底の地質構造で構成されている。地理的研究によれば、テチス海は1億6500万年前には地球上ただ1つの大陸であったパンゲア大陸が分裂することにより出現したものである。多くの地域を覆うテチス海は、当時赤道に近かったため熱帯的気候を備えていたと考えられている。地中海は6500万年前にテチス海より発生したものである。土地が隆起するにつれ、何百万年もの長期間にわたり地殻の変動により北方へと押しやられていった。

かつてテチス海の海底であったイタリアの岩石層には、大量の海洋生物の化石が見られ、すべての海洋生物は突然に複雑な構造を持って発生したことがわかる。言い換えれば、生物たちは無から創造されたのである。化石には、共通の祖先から進化を遂げたような形跡を判断できる材料や、生物が他の種から進化したようなは全くみられない。ダーウィニズムは何百、何千もの化石記録の前にはその面目を失ってしまっているのである。

大理石の堆積物は通常海底やかつてサンゴ礁だったとされる山脈のふもとに見られる。写真は、イタリアのアルプスの大理石堆積。

イタリアのモンテ・ボルカの化石採掘場で発見された魚類の化石

モンテ・ボルカで行われた化石発掘

イタリアのバターロックキャニオンには、二畳紀(2億9千万年前～2億4800万年前)にさかのぼる岩層がある。

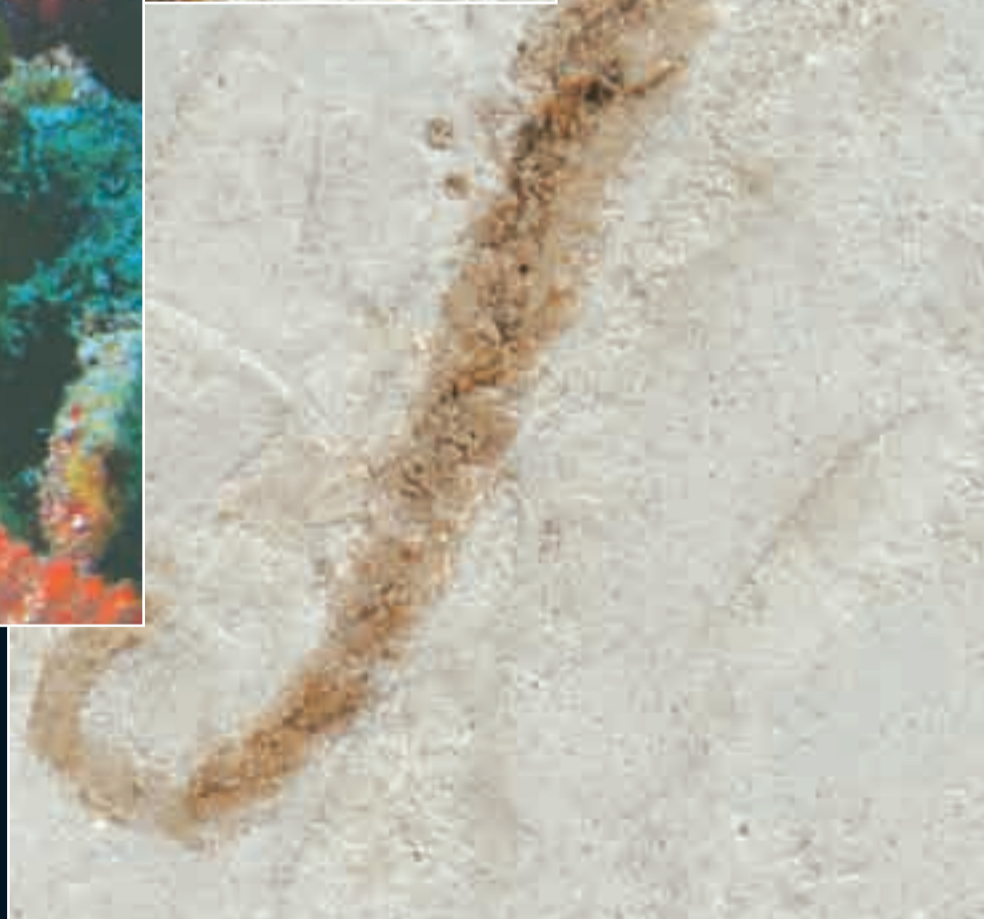
ヘコアユ

年代：600万年前
地域：イタリア共和国、フィウーメ、マレッキア川
時代：中新世上部

ヘコアユ(科：Centriscidae)は甲板に覆われた体を持ち、背びれが尖っているのが特徴である。写真のヘコアユは600万年前のものであり、現代のヘコアユと全く同じ特徴を持っている。これは、ヘコアユが何百万年もの間全く変わっていないことを示しており、そこからも進化の過渡期などは経ていないことが分かる。

タツノオトシゴ

年代：2600万年前
寸法：5センチメートル(2インチ)
地域：イタリア共和国
時代：中新世

何百万年もその構造が変化していないタツノオトシゴは、ヨウジウオ科(Syngnathidae)に属する生物である。進化論に対抗する多くの生物のうちの1つである。この写真のタツノオトシゴの化石は2600万年前のものであり、現在生息するタツノオトシゴと何ら変わるところはない。

ブリ

年代：4800万年前
寸法：19.6センチメートル(7.7インチ)
地域：イタリア共和国、ベロナ、モンテボルカ
時代：始新世

イタリアで発見された化石魚類の中の1種類がこのブリである。写真の化石は、4800万年前のものである。この4800万年前のブリは今日生息しているものと全く同じものであり、進化論が真実ではないことを示すものである。

トンボの幼虫

年代：1千万年前
寸法：42ミリメートル(1.6インチ) X 35ミリメートル(1.3インチ)
地域：イタリア共和国、ビットリア・ダルバ、クネオ地方
時代：中新世上部

成虫と同様、トンボの幼虫もまた、進化論は真実のものではないことを示す。写真の1千万年前のトンボの幼虫と現代の幼虫に違いは全く見られない。これは、進化論が単なる作り話でしかないことを如実に表している。

ヨウジウオ

年代：2300万年～500万年前
寸法：25センチメートル（10インチ）
地域：イタリア共和国、パッギオ・ベルニ、マレッキア川
時代：中新世、メッシニアン階

タツノオトシゴの亜目であるヨウジウオは体の構造が長細くなっている。この魚もまた、進化を否定する生きた化石である。写真のヨウジウオの化石は2300万年～500万年前のものであり、現在の標本と全く同じものである。

グレートブリテン島で発見された化石標本

グレートブリテン島で発見された最古の化石標本はシルリア紀およびデボン紀(4億4300万年前～4億1700万年前 / 4億1700万年前～3億5400万年前)にまでさかのぼる。異なる種類の生物の化石がブリテン島では多数発見されている。ブリテン島の地質学的歴史は6億年前にさかのぼり、過去には、熱帯気候と氷河期、海面の上昇、火山の噴火そして侵食などの事象が発生している。化石の多くは国土の南に横たわる層から発掘されている。

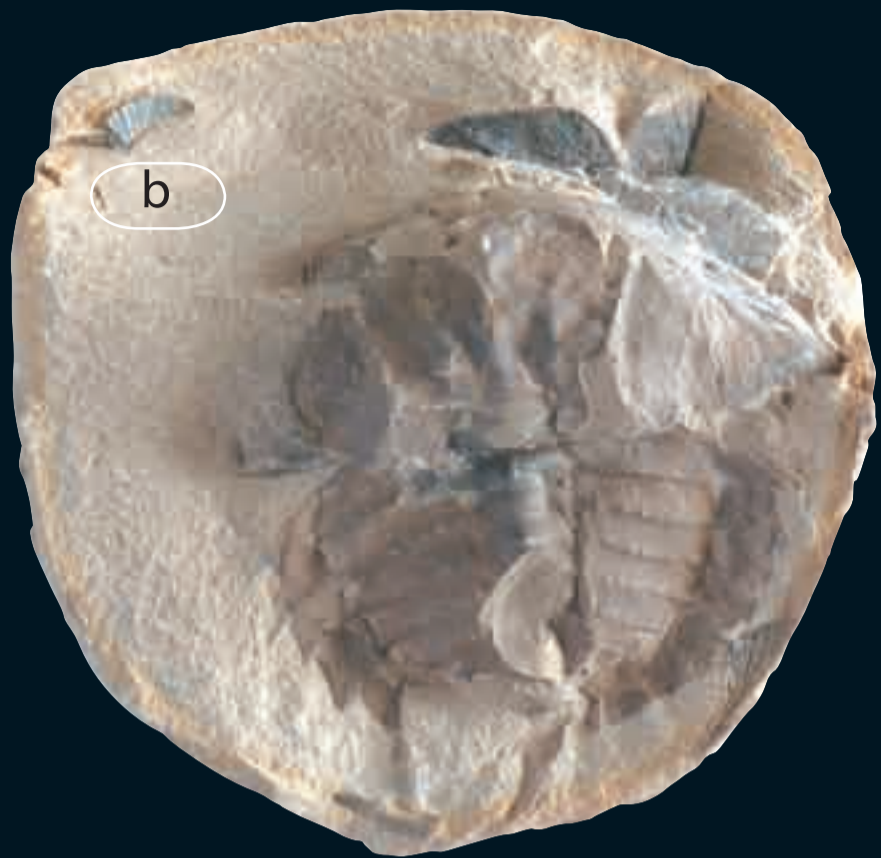
地域の岩石構造からは、さまざまな特徴が見てとれる。ドーセット州は特に"ジュラシックコースト"と呼ばれる海岸線で有名であり、ジュラ紀の岩石で構成され、多くの化石層がある。保存状態も良好で、詳細が確認できる多数の生物種の化石がこの地帯から発掘されている。これらの化石1つ1つは、生物が何百万年も変わらぬ姿であり続け、決して進化してすることはなかったということを証明している。

イギリスのクロック・ヘイ石切り場は、化石の採掘場としても有名である。この地域で発見されたすべての化石は、進化が発生していないことを示すものである。

ドルセットの海岸で採取された、ジュラ紀のアンモナイト化石の調査

ブリテン島のその他の地域の化石層にはランカシャーがある。この地域最古の化石層は石炭紀(3億5400万年前～2億9千万年前)のものである。この年代の海洋生物の化石が多く発見されていることから、3億4千万年前ごろ、この地域は温暖でそれほど深くない海の底だったと考えられている。

ブリテン島で発見された多くの生物種の化石は、またもや生物が共通の先祖から進化したものではなく、生物が段階的に進化したと主張されている進化論は、無効であるということが分かる。他の化石と同様、これらの化石もまた、生物が進化を遂げたのではなく、創造されたのだということを解き明かす。

ドルセットの海岸は、ジュラ紀の岩層から構成されている。多くの化石がこの岩層から採掘されている。

岩に陰画を残す化石

カブトガニ

年代：3億年前
寸法：30ミリメートル(1.1インチ) X 28ミリメートル；塊：37ミリメートル(1.4インチ) X 39ミリメートル(1.5インチ)
地域：グレートブリテン島、ランカシャー、ウィガン、クロックヘイ・露天石切場
時代：石炭紀、ペンシルヴァニアン、ウェストファリアンA、ダックマンシアン

カブトガニ目(Xiphosura)(カブトガニ)は、カンブリア紀の時代より生息している。写真の標本は、3億年前のものである。3億年もの間変化していないカブトガニは、生物が段階的に進化したという進化論の主張を突き崩すものである。

a
b

クモヒトデ

年代：1億8千万年前
寸法：8センチメートル(3.1インチ)；母岩：15センチメートル(5.9インチ) X 13.5センチメートル(5.3インチ)
地域：グレートブリテン島、ドルセット、アイプ
層：プリンスバッキアン、ヒトデ床
時代：ジュラ紀

この1億8千万年前の化石は、クモヒトデが2億年もの間全く同じであることを示すものである。この動物は、現在生息するものと全く違いが見られない。これもまた、進化論の無効性を明らかにするものである。

オウムガイ

年代：1億6700万年前
寸法：22ミリメートル（0.8インチ）
地域：グレートブリテン島、ドルセット、淡水
時代：ジュラ紀、インフェリア・オーライト

オウムガイは、最初にその姿を現したときからずっと形を変えていない生物の1つである。1億6700万年前の化石は生物が何億年も姿を変えていないことを示す証拠となる。

二枚貝

年代：2億年前
寸法：5.5センチメートル(2.2インチ)
地域：グレートブリテン島、スカンソープ、ハンバーサイド州、コニングスビー石切り場

時代：ジュラ紀、シネムリアン上部
現代に生息する二枚貝は、2億年前に生息していたものと全く同じものである。他の生物と同様、二枚貝もまた、創造されたときから全く同じ特徴を保持している。

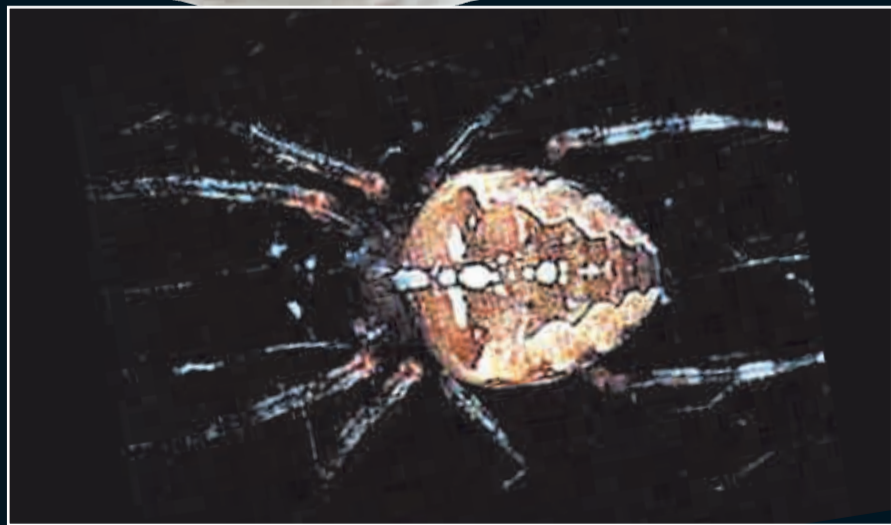
オウムガイ

年代：1億6700万年前
寸法：34ミリメートル(1.3インチ)
地域：グレートブリテン島、ドルセット、シャーバーン
時代：ジュラ紀

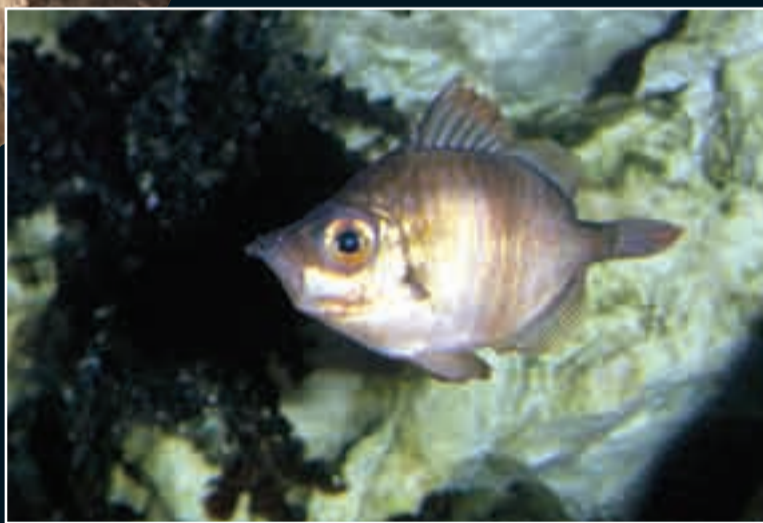
現代のオウムガイは、何億年も前のものと全く同じ特徴を有している。化石記録は、長い歳月にも関わらず、変化していないことを示している。言い換えれば、全く進化していないということになる。その標本の1つであるこの1億6700万年前のオウムガイの写真が、この事実を端的に表している。

クモ

年代：3億年前
寸法：直径5センチメートル(2インチ)
地域：グレートブリテン島、ランカシャー、ウィガン、クロックヘイ露天堀石切り場
層：ノースウィガンのルーフ頁岩4フィート石炭層
時代：石炭紀上部、ウェストファリアA、ペンシルヴァニアン

3億年もの長い間その姿を変えていないクモもまた、進化論にとって致命的な爆撃となる生命体である。進化論者の主張を突き崩すように、クモは何億年もの昔から全くその姿を変えておらず、全く変化していないのだ。

オウムガイ

年代：1億6700万年前
寸法：40ミリメートル（1.5インチ）
地域：グレートブリテン島、ドルセット、バートン・ブラッドストック
時代：ジュラ紀、インフェリア・オーライト

現代に生息するオウムガイと、何億年もの昔に生きていたものとの間に違いは見られない。違いがないということは、進化が全く起こっていないという証明になる。

ヒシダイ

年代: 3500万年前
地域: Poland
時代: 漸新世

3500万年前に生きていたヒシダイと現在に生き残っているヒシダイがまったく同じであるという事実は、進化論がまったくの嘘であるということを確証する大きな証拠となる。進化論を支持する証拠となるような化石は、過去150年の間、古生物学の発掘においてひとつも発見されていない。採掘されたすべての化石は、生物が進化していないことを示しているのだ。

ロシアで発見された化石標本

シベリアで発見された冷凍状態の動物に加え、ロシアでは琥珀内に保存された生物の化石が大量に発見されている。西はベルリンから、東はウラル山脈までの膨大な地域で発見されているバルト琥珀で知られる琥珀がそれにあたる。バルト琥珀の大部分は始新世(5400万年前～3700万年前)時代のものである。

この琥珀の多くは現在、ロシア国境にあるサムランド地方で発見されており、平均深度は地表から25mから40mにもおよぶ。琥珀が含まれている層は"ブルーアース"と呼ばれている。

1000kgの土に、約1kgの琥珀が含まれ、数百kgごとの一部地帯にしか琥珀は含まれていない。

琥珀が形成された時期、樹脂の産出された樹木の種類により琥珀の色と層、そして物理的特徴が異なってくる。最も古代の琥珀といわれる標本は石炭紀(3億5400万年前～2億9千万年前)にさかのぼる。この年代の琥珀はアメリカ合衆国およびグレートブリテンで最も頻繁に発見されているものである。

琥珀内部の包含物が現れるには、樹脂に生物が捕らわれてから2つの連続した重要なプロセスが必要となる。まず、気温の低下や乾燥などによる樹脂の硬化。次に樹脂内にとらわれた生物の腐食である。樹脂の液体と混合されることにより特殊な構造となる腐食のプロセスにより液体が排出される。生物の体は風船のような泡様の構造に保存される。樹脂が琥珀へと変化するには、非常に多くの化学的、地質学的変化が加わる必要がある。

科学者にとって、琥珀の内容物ほど動物の行動を知る重大な手がかりはない。多くの生物の標本は、巣に食物を持ち運ぼうとする瞬間や、防御の体勢をとっている瞬間、カモフラージュしている瞬間、子供を守ろうとしている瞬間、侵略者に立ち向かおうと化学物質を発生している瞬間などが捕らえられている。すべての標本は生物が有している特徴が何万年もの長い間変わっていないことを示すものである。言い換えれば、進化のプロセスは発生していないのである。

ロシアの一部地域では、琥珀化石が豊富に存在する。

ポーランド共和国で発見された化石標本

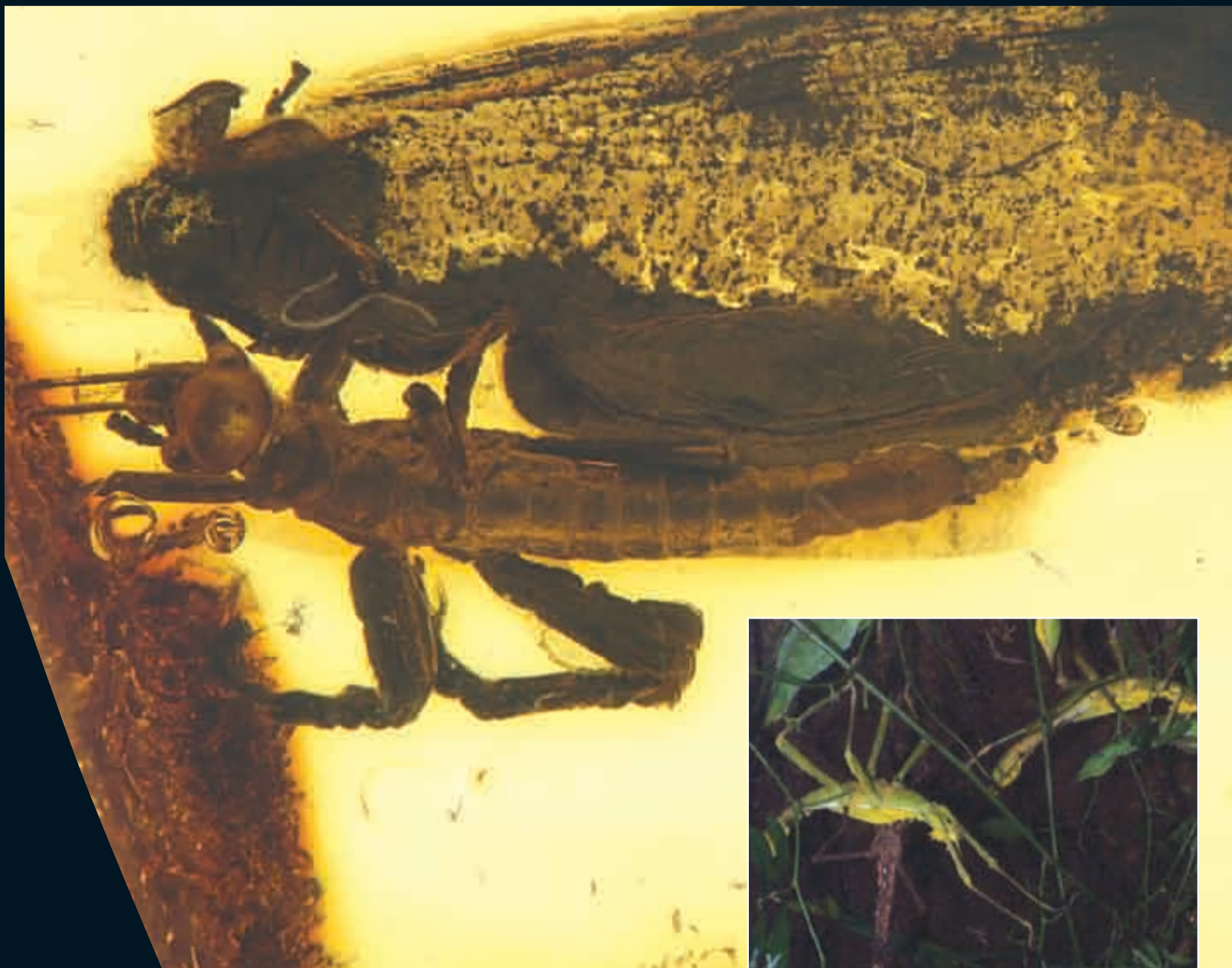
バルト琥珀が発見されている国の1つにポーランド共和国がある。採取地としては世界でも豊富な琥珀バルト地方で採取される琥珀に閉じ込められた化石は、平均で5千万年から4500万年前のものである。バルト琥珀とその他地域の琥珀との間に見られる大きな特徴の違いは、含まれている酸の種類である。琥珀酸として知られるこの酸は、始新世の時代(5400万年前〜3700万年前)に生息していたとされる樹木の樹脂内で発見されている。

バルト琥珀に含まれる生物の多くは節足動物である。ぜん虫類、軟体動物、さまざまな脊椎動物の組織化石は稀に見られる。これらの保存化石からも、ハエは常にハエであり続け、チョウは常にチョウであり、芋虫は常に芋虫であったことが示されている。言い換えれば、生物はこの長い歴史の中にも全くその姿を変えることはなかったということである。その点では、進化論に大きなジレンマを与えることとなるのである。時に獲物や幼虫と同時に捕らわれたり、時には幼虫の時代に化石となったこれらの生物は、何万年もの間、同じ世代を経ているということが分かる。進化のプロセスなど、全く経験してはいないのである。

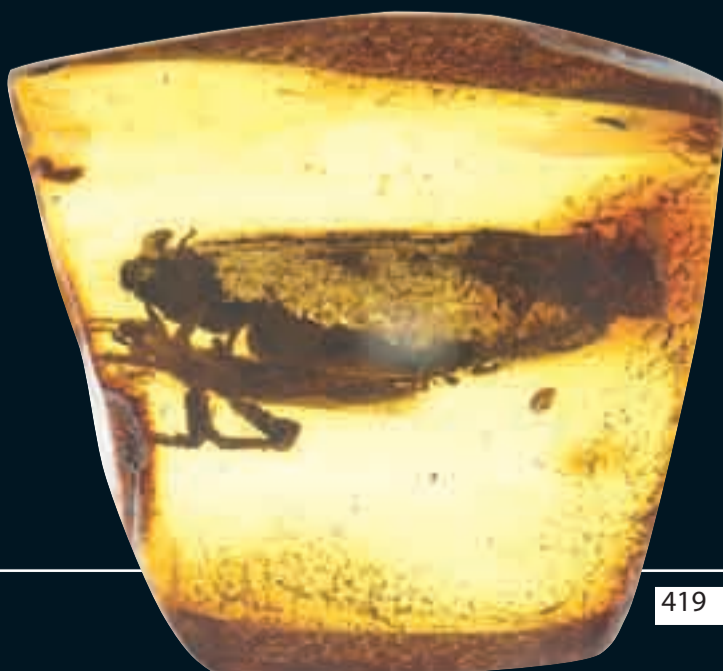
バルト琥珀は、広い区域から発掘される。この地域で行われた発掘作業。

ヌカカの群れ

年代：4500万年前
寸法：29ミリメートル(1.1インチ) X 17ミリメートル(0.6インチ)
地域：ロシア連邦、カーリニングラード地域
時代：始新世

化石記録は、生物が他の種に由来したものではなく、段階的に進化したのではないことを証明するものである。4500万年前のヌカカは、現在見られるものと同じものであり、化石はこの事実を再度明らかにする。

ファスミッド(ナナフシ)の幼虫

年代：4500万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

カモフラージュの名人、ナナフシは木の枝や葉にその姿を似せている。木の枝にとまっている姿を見分けるのは非常に困難である。4500万年前に生息していたナナフシと現在生息しているナナフシは全く同じ方法でカモフラージュをし、敵から身を守る。これらの昆虫の構造は4500万年前から全く変わっていないのだ。これは、進化が発生していないという証拠なのである。

アブラムシの幼虫

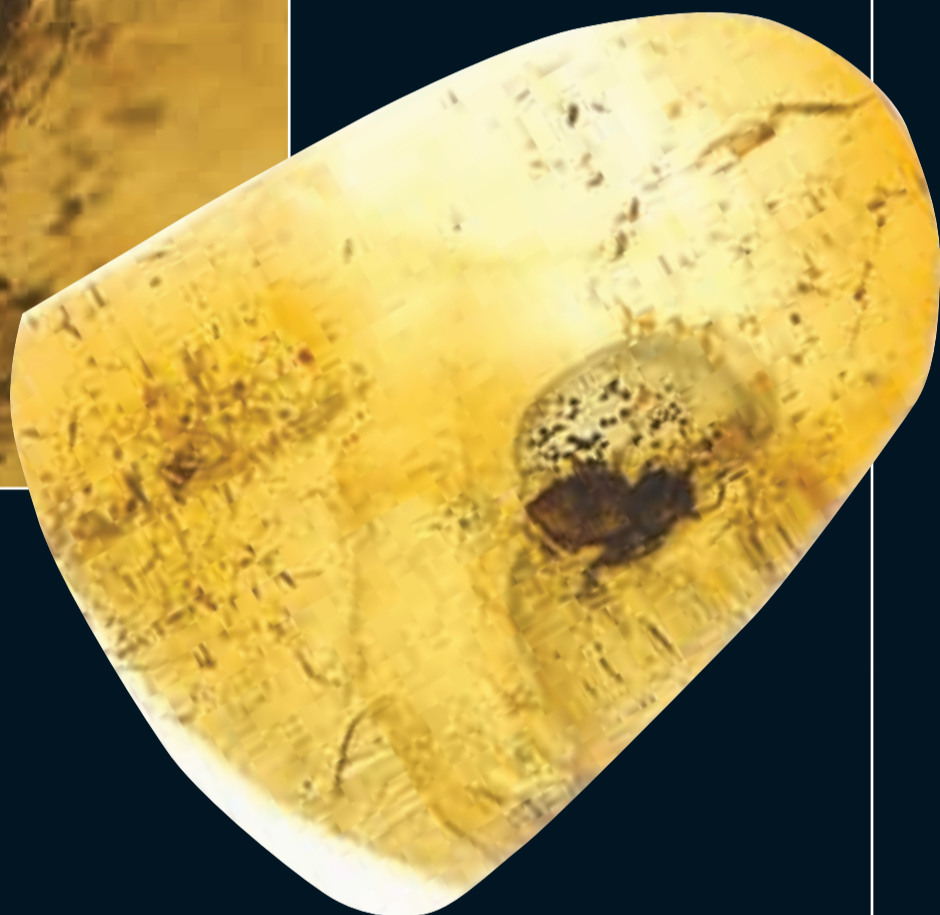
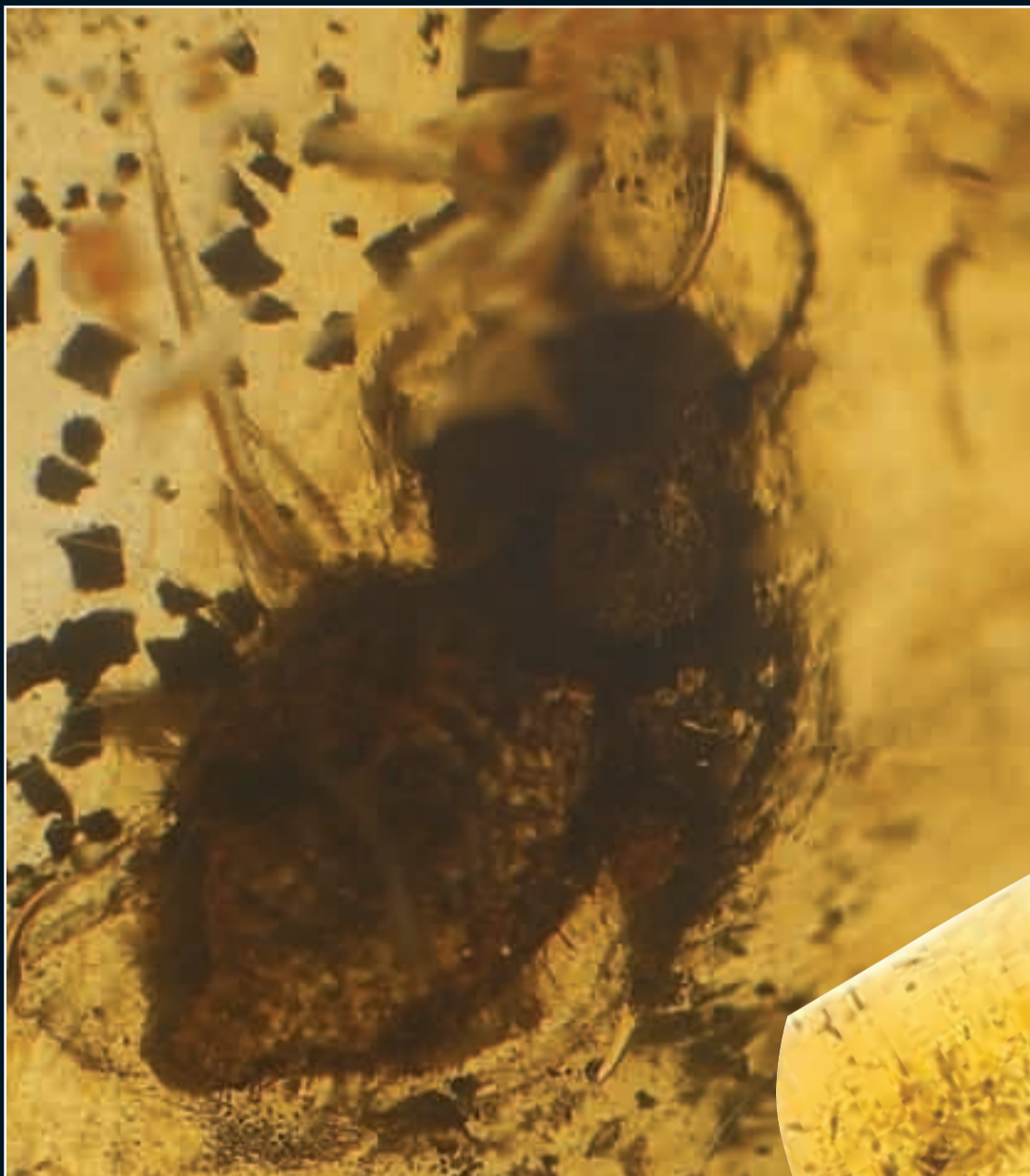
働きアリ、アブラムシの幼虫

年代：4500万年前
寸法：20ミリメートル(0.7インチ) X 12ミリメートル(0.4インチ)、内容物：2ミリメートル(0.07インチ)
地域：ロシア連邦、カーリニングラード地域
時代：始新世

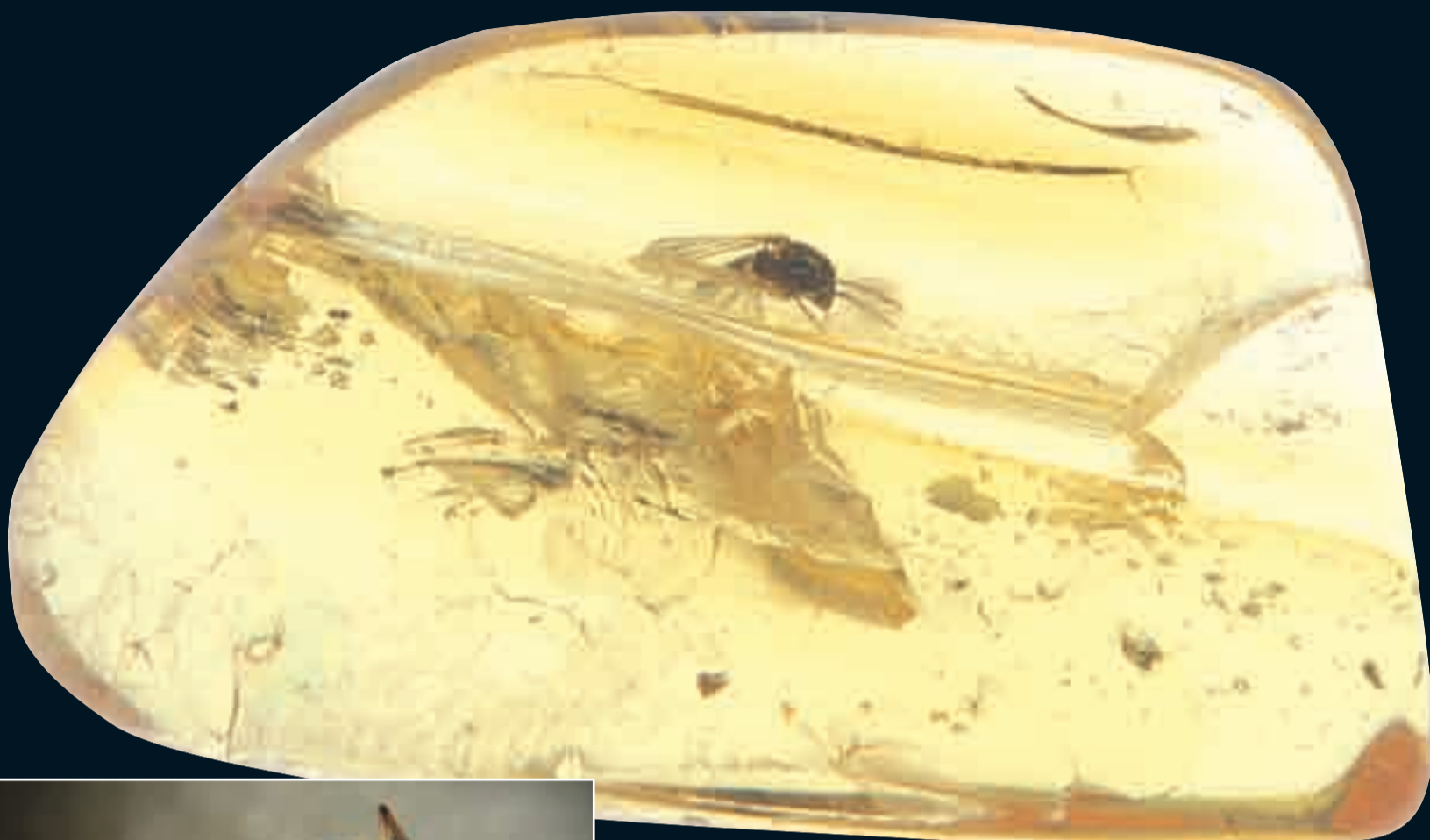
"アリ"は土の中に巣をつくり、群れでコロニーをなして生活する8千もの種類を持つ昆虫の一般的な総称である。各種類のアリは独自の特徴を備えている。この琥珀の中に含まれた成長途中のアブラムシは働きアリとともに化石化されたものである。ある種類のアブラムシには、アリの餌を提供するものがあり、アブラムシは一般的にアリと共生関係にあるとされている。
これらの4500万年前の生物は、現在生息するアリとアブラムシと何ら変わりはなく、進化論によって築かれた主張を退けるものである。

カニグモ

年代：4500万年前
寸法：琥珀：17ミリメートル(0.6インチ) X 幅8ミリメートル(0.03インチ)、クモ：5ミリメートル(0.1インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

カニにその姿を似せたクモには2千以上の種類がある。琥珀に閉じ込められたこのカニグモは、4500万年前のものであり、現代のカニグモと全く同じである。

アブラムシの幼虫

年代：4500万年前
寸法：直径7ミリメートル(0.2インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

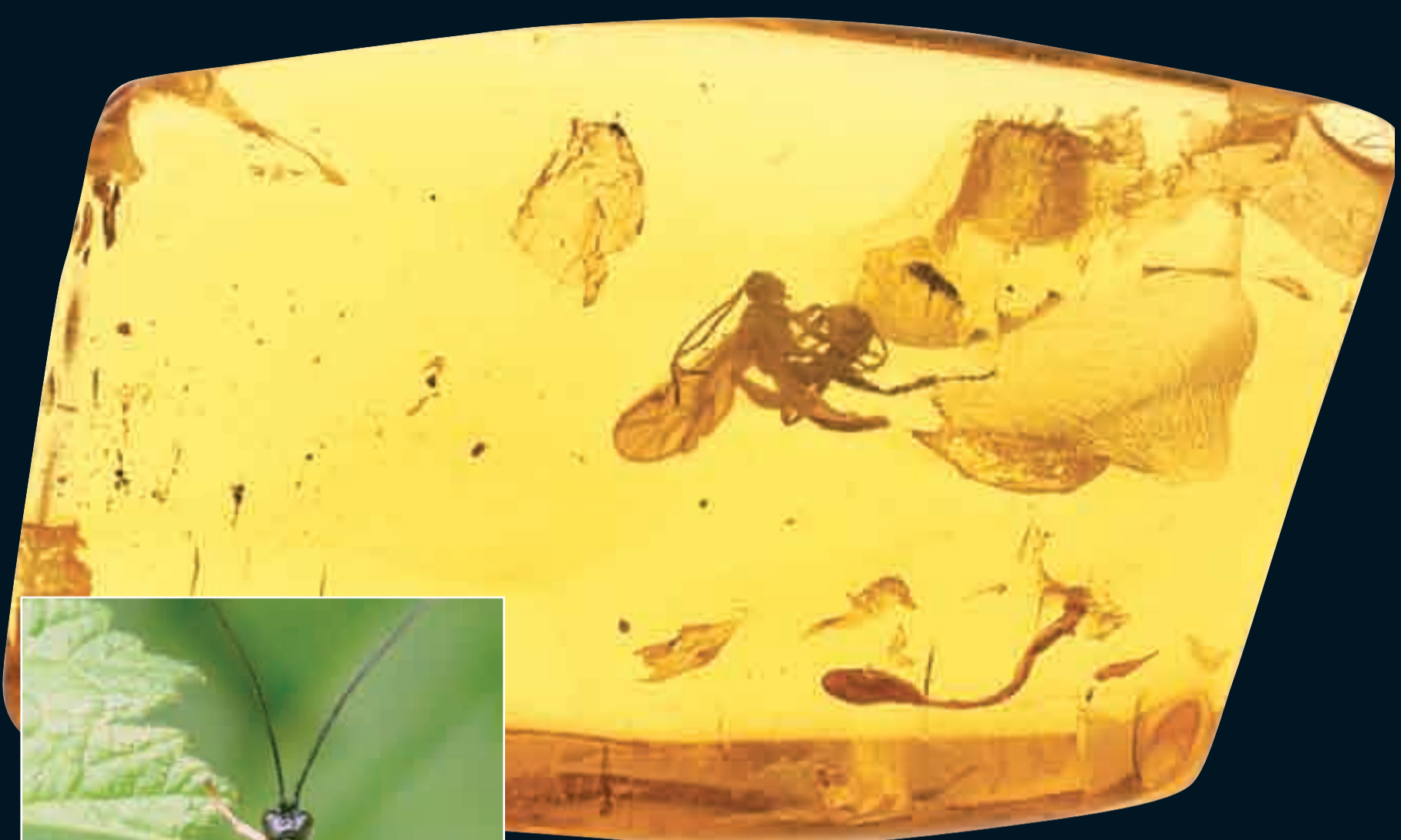
タマワタムシ科に属するアブラムシには羽根がない。アブラムシの宿主植物となるのは樹木であり、葉状植物のこともある。写真のアブラムシの幼虫は4500万年前のものである。アブラムシとその幼虫はこの期間全く変わっていない。これは進化論を崩壊させるものである。

ブヨ

年代：4500万年前
寸法：全長14ミリメートル(0.5インチ)、幅8ミリメートル(0.3インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

他の多くの主題もさることながら、こと昆虫の種の起源にあっては無力な状態に陥る進化論者たちは、琥珀内の化石について科学的に説明することができないでいる。これらの生命体は、進化が発生しなかったという確固とした証拠となる。

足長バエ

年代：4500万年前
寸法：全長15ミリメートル(0.5インチ)、幅9ミリメートル(0.3インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

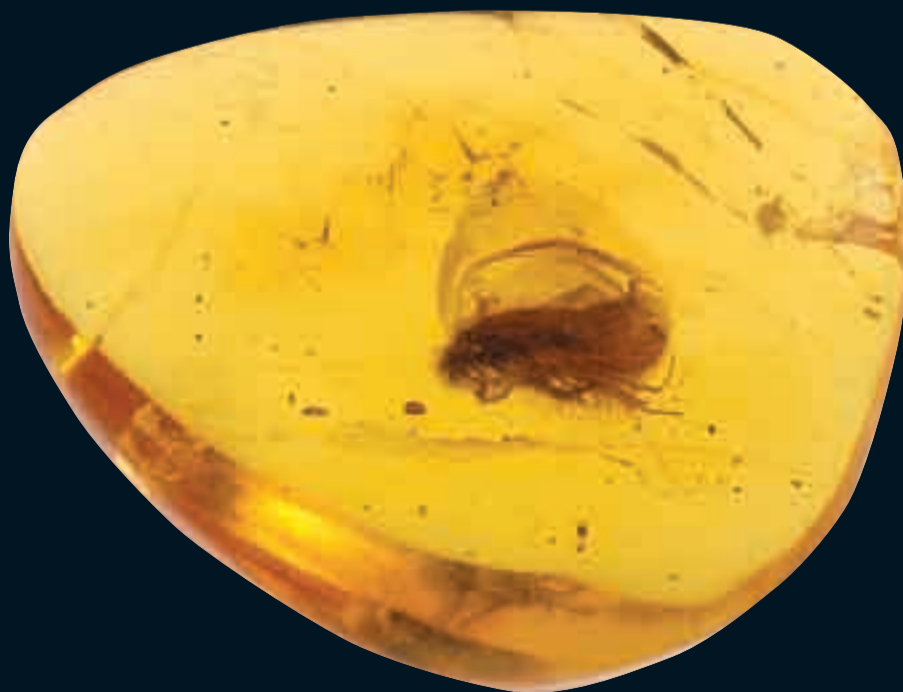
このハエは双翅目に属し、何万年という時を隔てても同じ特徴を備え、全く何の変化も発生していない。この種は4500万年という長い間を越えて変わらぬ姿を保ち続けてきたこの種もまた、進化論を否定するものである。

スズメバチ

年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

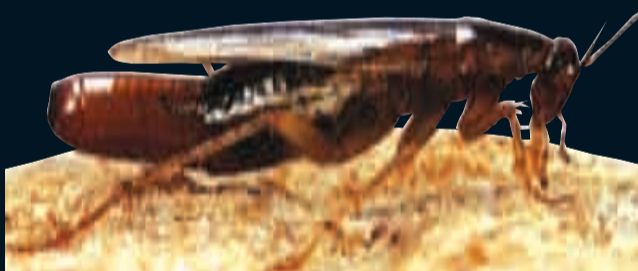
この写真は、5千万年前のバルト琥珀に保存されているスズメバチである。5千万年もの間全くその姿を変えることのなかったスズメバチもまた、進化は発生しておらず、種は神が創り給われたことを示すものである。

トビケラ

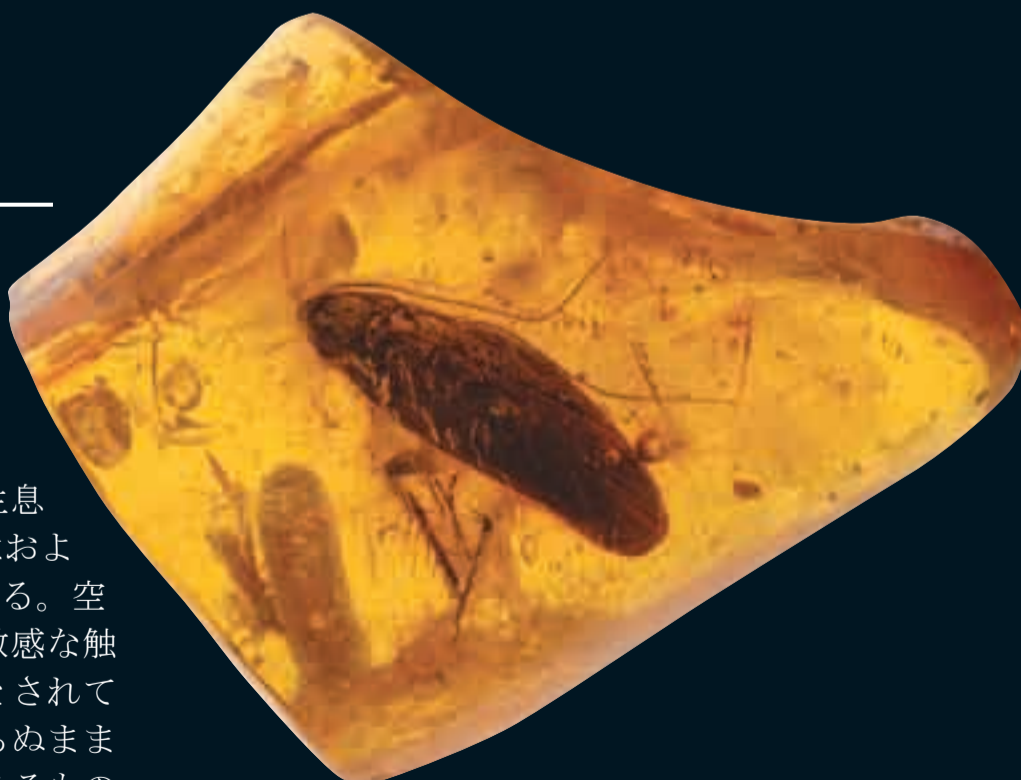
年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

トビケラの幼虫は釣り餌として使用される。トビケラは何万年前のものと同じ構造と特徴を備えており、何の変化も見受けられない。この5千万年前のトビケラの化石は、生物が全く変化していないことを示すものである。

カワゲラ

年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

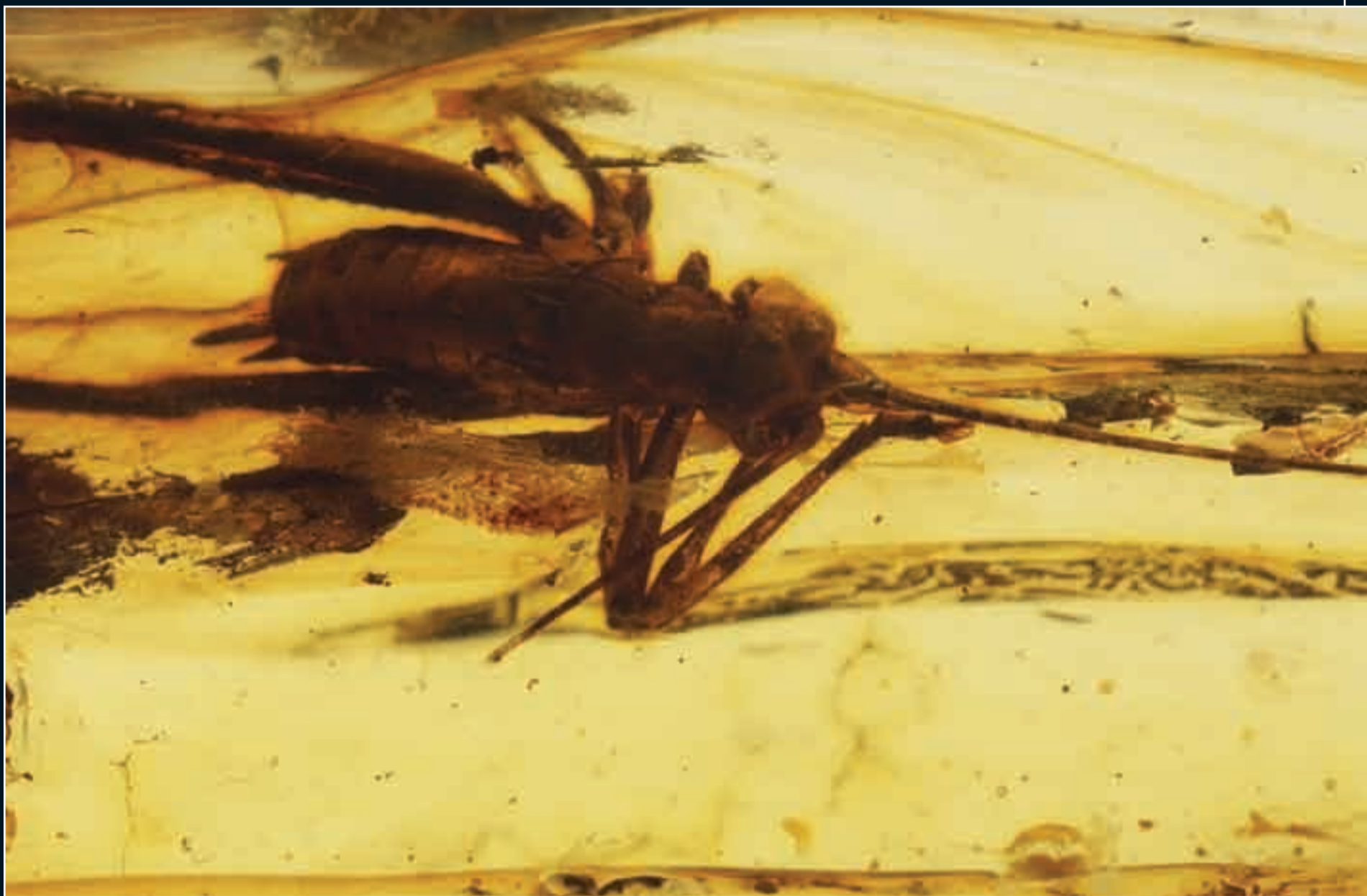
カワゲラは体長5～10ミリメートル(0.1～0.3インチ)で、2本の長い触角を有している。幼虫は釣り餌として使用される。この種の生物もまた、長い年月をかけても全く変化していない。この写真の5千万年前のカワゲラは現在生息しているカワゲラと全く同じものである。

ゴキブリ

年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

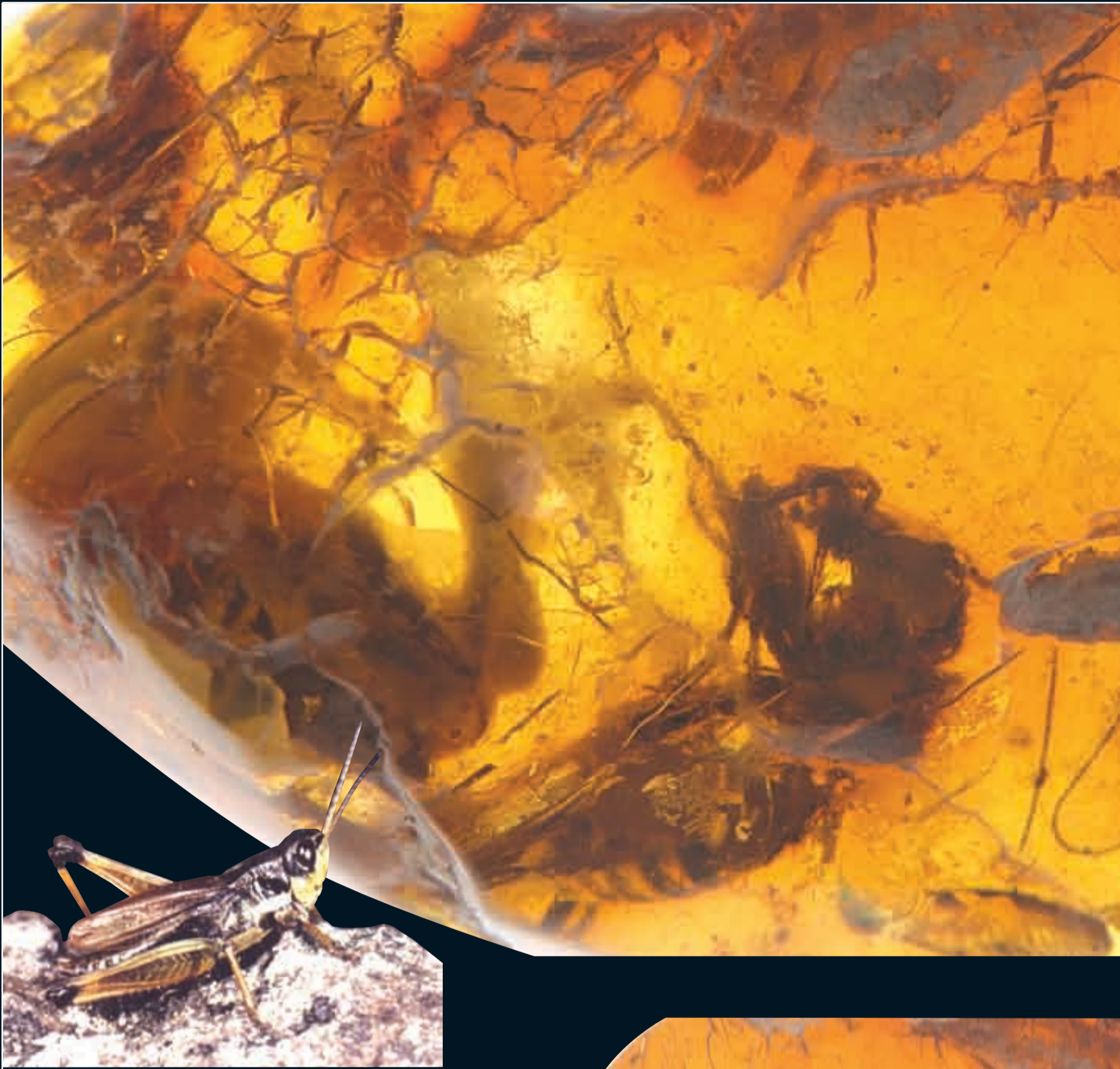
羽根の生えた昆虫としては最も古い時代から生息しているとされているゴキブリ。化石記録にはおよそ3億5千万年前の石炭紀のものが発見されている。空気の流れなど、ほんの少しの動きも感知する敏感な触角と完璧な羽根を持ち、放射線下にも耐えるとされているゴキブリは、何万年もの時を経ても変わらぬままである。この5千万年前のゴキブリは現代に生きるものと何1つ変わらない。

ガ

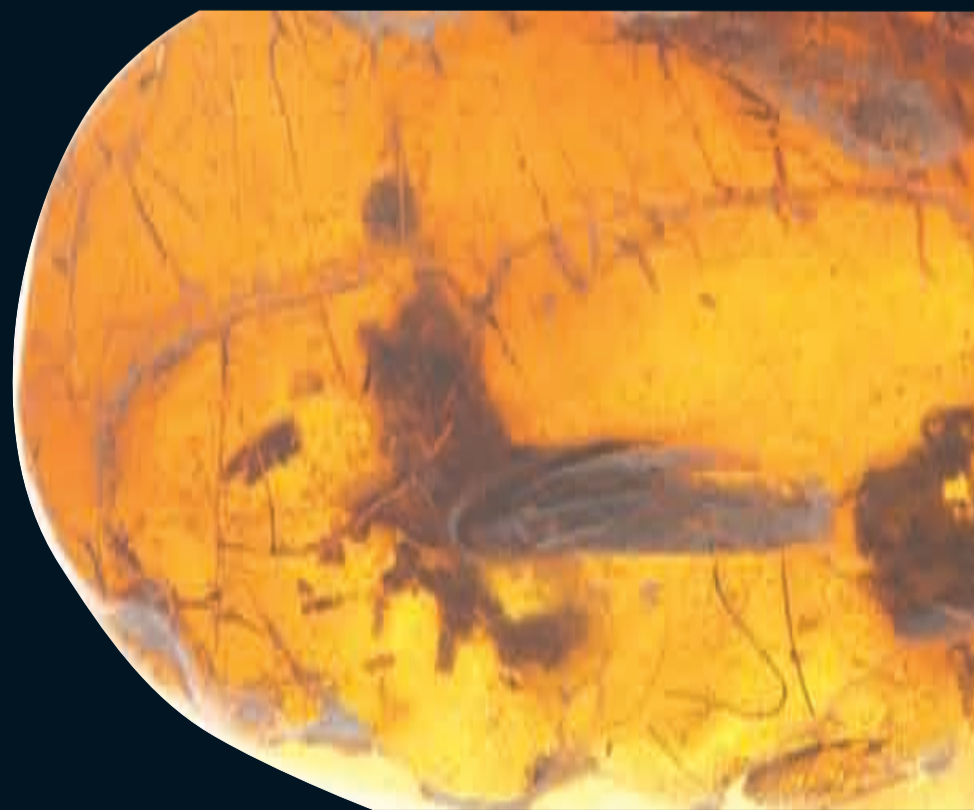
年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

ガはチョウに似た昆虫である。チョウもガも鱗翅目(Lepidoptera)に属する生物だ。写真は、5千万年前のガであるが、現在のものと全く変わりはない。これはまたしても生物が進化による影響を受けていないことを確実にする。

バッタ

年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

化石記録からは、進化論者の仮説に対して、昆虫には初期の祖先などいないことが分かる。採取された化石によれば、すべての昆虫種は忽然とすべての特徴を備えたままその姿を現しており、その時点から今まで全く特徴を変えていない。これを証明する証拠の1つに、現代まで全く変化していないこの5千万年前のバッタの化石があげられる。

バッタ

年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

このバッタは5千万年前のものであり、琥珀内に保存状態となっていたものである。これは現代の同じ種類と全く同じものである。この種の昆虫は何千万年という時を隔てても同じ姿であり続けているのである。進化したのではなく、神による創造があったということを物語る。

芋虫

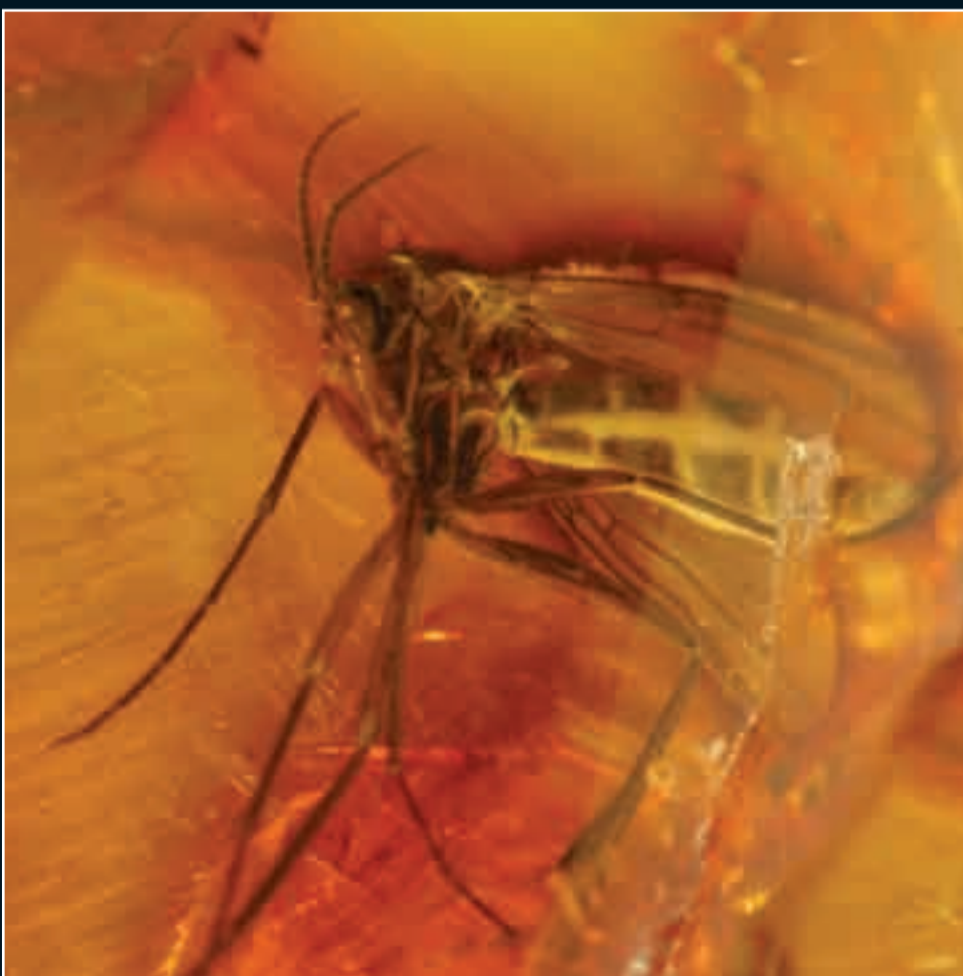
年代：5千万年前
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

琥珀に保存状態となっている5千万年前の芋虫の標本こそ、芋虫が常に芋虫であり続けたことを証明する証拠の1つである。何万年という時を経ているにも関わらず、同じ特徴を持ち続けている芋虫は、進化論が大きな欺瞞であることを示す証拠である。

ハエ

年代：5千万年前
地域：ポーランド共和国
時代：始新世

5千万年前のハエと現代に生きるハエとの間には、全く何の違いもない。この写真の琥珀に包まれた化石のハエは、その事実を証明するものである。

ハエ

年代：5千万年前
地域：ポーランド共和国
時代：始新世

ハエは、化石記録に突然のように現れている。ハエの大きな特徴の1つは非常に優れた飛行能力である。人間は1秒間に10回腕を上下させることすらできないが、ハエは1秒間に500回も羽ばたくことができる。さらに両方の羽根を同時に羽ばたかせる。ほんの少しでも羽根が食い違うだけでバランスを崩すこととなるのだ。しかしこのような食い違いは絶対に起こりえない。もちろん進化論はこのような完璧な構造を持つ生物の同時的瞬間的発現を説明することはできない。これは神の創造の明確な証拠の1つなのである。

チョウ

年代：5千万年前
地域：ポーランド共和国
時代：始新世

この5千万年前のチョウの化石は、何千万年もの長い期間を経ているにも関わらずこれらの昆虫が同じであり続けたことを示すものである。

ヨコバイ

年代：4500万年前
寸法：全長10ミリメートル(0.3インチ　、幅8ミリメートル(0.3インチ)、ヨコバイ：4ミリメートル(0.16インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

写真は、4500万年前のヨコバイである。現代に見られる標本体と何の違いも見られない。この完璧なまでの相似性は、進化論の架空のプロセスなど、全く起こっていないことを示す重要な指摘である。

ガ

年代：4500万年前
寸法：全長27ミリメートル(1インチ)、幅18ミリメートル(0.7インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

今日のガは何億年も昔から生息しているガと全く同じものである。これは、生物がこの世に発生してから全く変わっておらず、進化の過程など経ていないことを示すものである。写真の4500万年前のガの化石は、この事実を提示するものである。

ノミバエ

年代：4500万年前
寸法：琥珀：全長23ミリメートル(0.9インチ)、幅13ミリメートル(0.5インチ)、内容物：1ミリメートル(0.01インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世上部

4500万年前の化石のハエは、進化論が架空のプロセスであり、実際のものではないことを解き明かす。ダーウィンが主張するように生物は祖先とされる共通の種から進化したのではなく、進化の中間的状態など経ていないのだ。

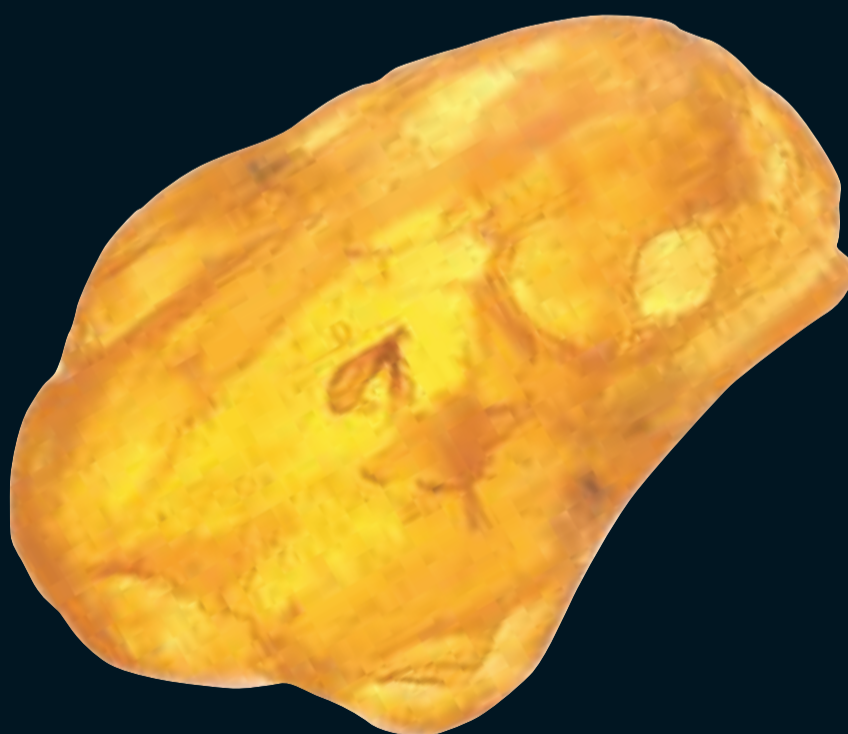
羽アリ

年代：4500万年前
寸法：琥珀：13ミリメートル(0.5インチ) X 8ミリメートル(0.3インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

写真の4500万年前の羽アリは現代の羽アリと全く同じものである。

オドリバエ

年代：4500万年前
寸法：琥珀：32ミリメートル(1.2インチ) X 23ミリメートル(0.9インチ)、内容物：2ミリメートル(0.01インチ)
地域：ロシア連邦、バルティック、カーリニングラード
時代：始新世

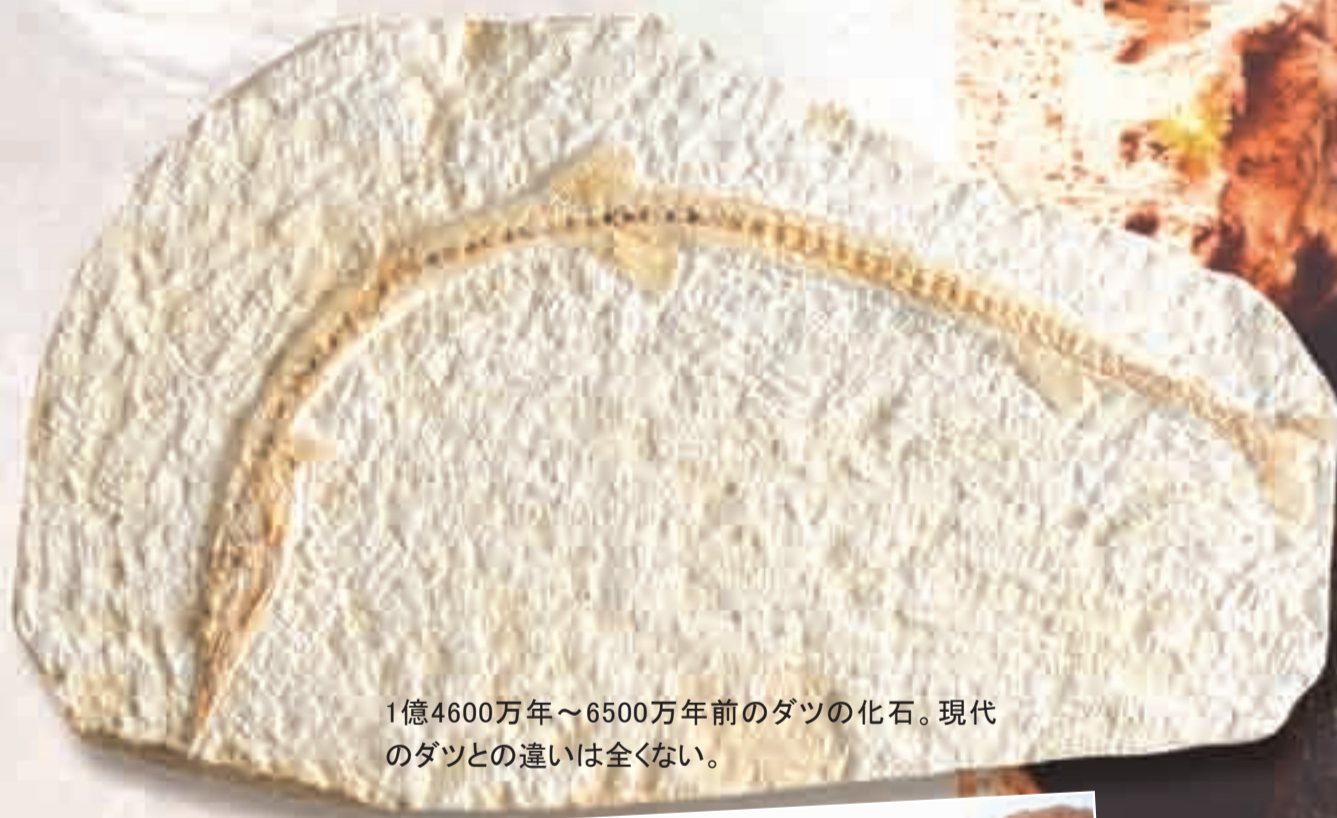
生物がどのようにして発生以来全く何の進化も経ずに同じ特徴を保持し続けているかを示す例の1つが、この4500万年前のオドリバエの化石である。現代のオドリバエと全く同一のものである

アフリ
カおよび中東で発
見された化石標本

モロッコで発見された化石標本

モロッコでは、異なる年代の大量の化石が発見されており、中でも4億年前の三葉虫の化石が有名である。アトラス山脈やその他地域で行われた発掘により、モロッコの豊富な化石層が明らかとなった。

モロッコで最もよく発見されるのは、ウニの化石である。ウニは北紫ウニの一般的総称だが、実際はたくさんの種類の海洋無脊椎動物の呼び名でもある。通常は海底に生息しているこの生物には800種類以上が見られ、化石では4500万年前のものが発見されている。ウニは5億年近くも昔から、複雑な体構造と完璧なメカニズムを持ちながら生息していたとされている。これはまたもや進化論を打ち崩すこととなる。完全に発達した構造を持つこの生物は、進化論者が生命体は非常に原始的であったと主張する時代に生息していたものである。多くの種類は現在にも生息しており、同じ体構造を有している。何千万年という時代にも関わらず、全く変化しておらず、進化の過程を経ていない。

アトラス山脈は、2400km にも及ぶ広い範囲に化石層を有している。最高峰は、標高4167mのトゥブカル山である。アトラス山脈は、何億年も前に、アメリカ大陸とアフリカ大陸が衝突した際に形成されたとされている。北米のアパラチア山脈は、同様の地質的運動によって形成されたとされている。

ハファーラで発見された4億9千万年前～
4億4300年前のヒトデの化石

1億4600万年～6500万年前のダツの化石。現代
のダツとの違いは全くない。

ウニ

年代：1億4600万年～6500万年前
寸法：5.4センチメートル(2.2インチ)
地域：モロッコ
層：ウニ床
時代：白亜紀

現代のウニと何百万年も前に生息していたウニとの間には、全く何の変わりもない。この写真の化石のウニは1億4600万年～6500万年前に生息していたものである。この化石からも、生物が進化したのではなく、神に創造されたその日から同じ特徴と構造を持ち続けながら現在まで生き続けてきたことが分かる。

三葉虫

年代：4億1千万年～3億6千万年前
寸法：5センチメートル(2インチ)
地域：モロッコ、アトラス山脈
時代：デボン紀

最古の三葉虫の化石は、5億3千万年前のデボン紀の化石記録である。複雑な構造と発達した組織を有するため、ダーウィニストはこれを説明することが難しくなっている。この生物は化石記録として5億年前ごろ複雑な目の構造を有したまま突然出現している。これは進化論では説明することが不可能である。三葉虫が、他の生物と同様、神によって創造されたということは明らかである。

カンブリア紀時代の生物を表した画

ダツ

年代：1億年前
寸法：203ミリメートル(7.9インチ)；母岩：113ミリメートル(4.4インチ) X 185ミリメートル(7.2インチ)
地域：モロッコ、ラムリア・タオーズ
時代：白亜紀

体長203ミリメートル(7.9インチ)のこの成魚は、姿がそのまま細かい部分までよく保存されている。1億年前に生息していたダツと、現在生息しているものとの間に違いはない。ダツはその姿を変えぬまま何万年という歳月を生き延びてきており、進化論が正しくないことを示している。

ヒトデ

年代：4200万年前
寸法：5.7センチメートル(2.3インチ)
地域：モロッコ、オルドビス紀メシシ
層：カタオーア層
時代：オルドビス紀

表皮にとげを持つ棘皮動物門(Echinodermata)のヒトデは、何百万年もその種を存続させてきている。4200万年前のヒトデは、今日生息しているものと同じ特徴を備えている。この事実は進化論者には決して説明することができない。生物は進化していないが、創造されたことを示しているのだ。

三葉虫

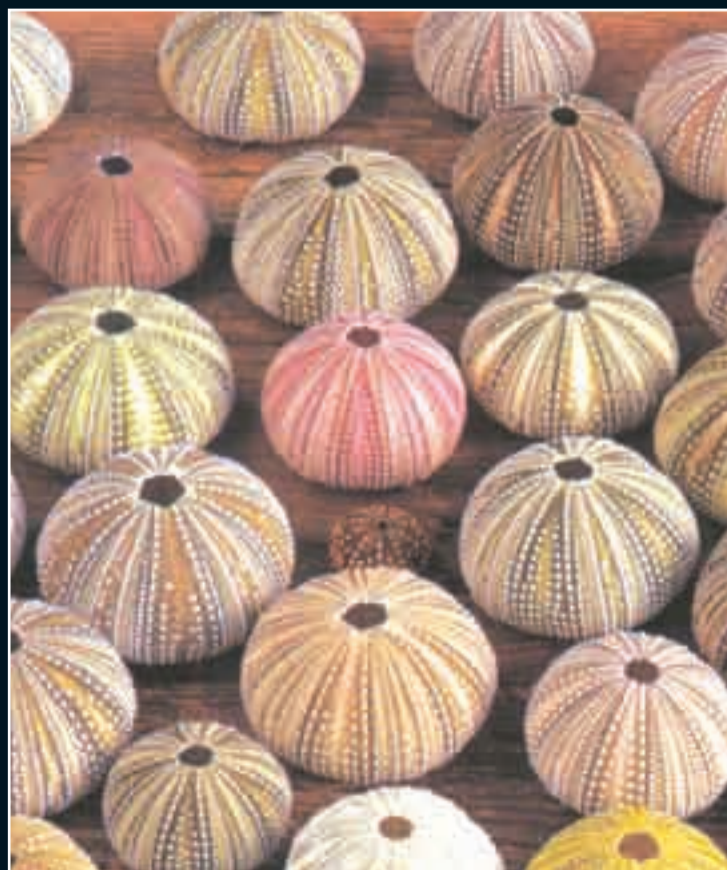
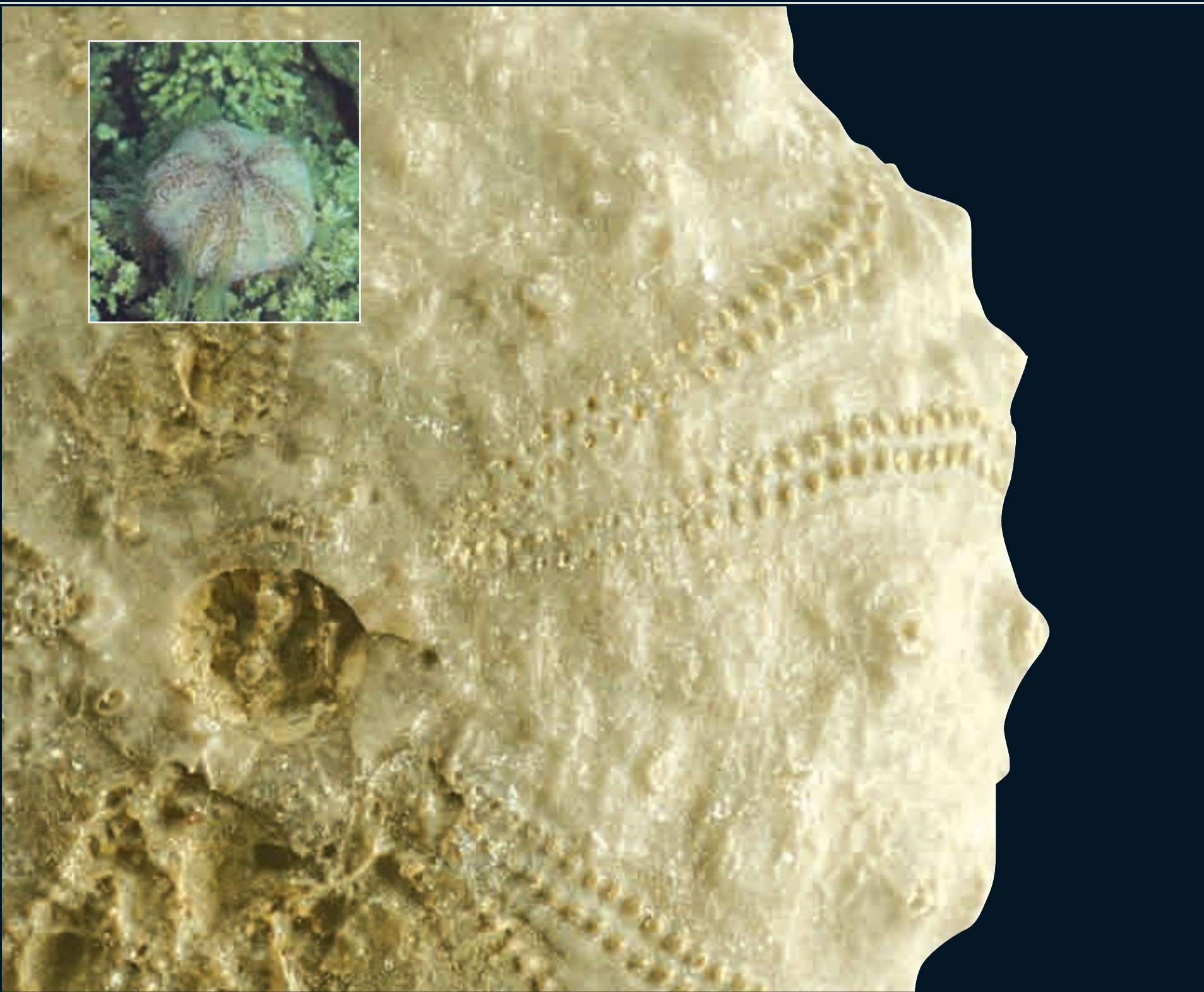
年代：4億年前
地域：モロッコ
時代：デボン紀

化石記録は、進化論を全く支持していない。それとは反対に、地層の化石記録を精査すれば、生物が急に発生したことが分かる。生物の化石が発見されている最古の層はカンブリア紀時代にさかのぼる。これはおよそ5億3千年も昔の時代である。この地層でよく発見されている化石の1つは、この三葉虫である。5億3千年前の世界では、三葉虫は多くのレンズで構成される目を有していた。これは獲物を目指して泳いだり捕獲することができる非常に便利な優れた構造である。この複雑な構造は進化論に深刻な打撃を与えることに一役買っている。

ウニ

年代：1億4600万年～6500万年前
寸法：3.5センチメートル(1.4インチ)
地域：モロッコ
層：ウニ床
時代：白亜紀

ウニの最古の標本はオルドビス紀にさかのぼる。5億年という長い年月にわたり、全く変化していない。これはウニが進化していないということを証明するものである。

ウニ

年代：9500万年前～7200万年前
寸法：2.5 センチメートル(1インチ)
地域：モロッコ、ミドレット
時代：白亜紀後期

何千万年も前に生息していたウニは、現代に生息するものと何ら変わるところはない。少なくとも7200万年もの間、構造的には全く変化していない。これは進化論が間違いであることを示すものである。

ウニ

年代：9500万年前～7200万年前
寸法：4 センチメートル(1.6インチ) X 4.5センチメートル(1.8インチ)
地域：モロッコ、タオーズ
時代：白亜紀後期

9500万年前～7200万年前に生息していたウニと現代に生息するウニとでは何の変わりも見られない。何千万年もの昔から全く姿を変えていないウニは、生物が進化しなかったことを証明するものである。

ウニ

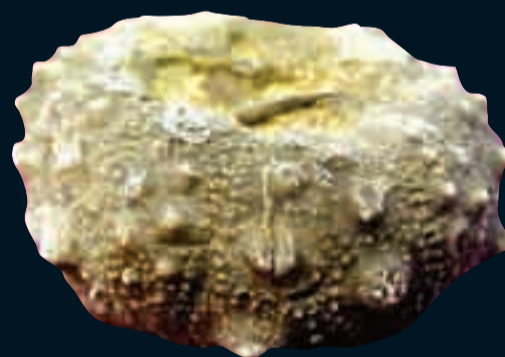
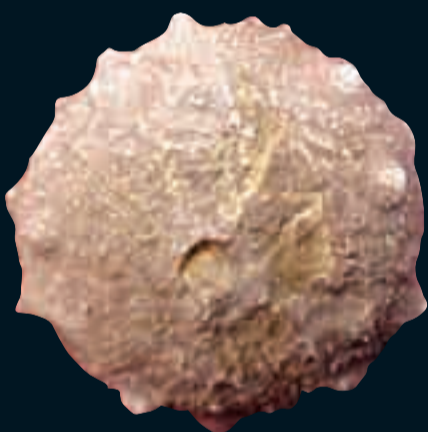
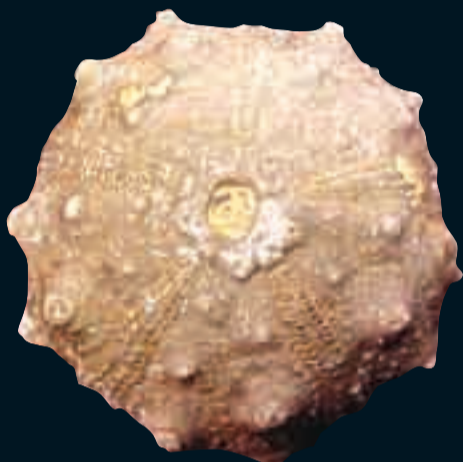
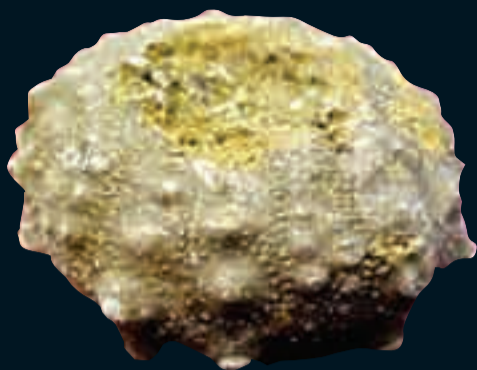
年代：1億年前
地域：モロッコ、タザ州
層：大陸砂岩堆積
時代：白亜紀

ウニ、ヒトデ、ウミユリ、ナマコなどの種はすべて棘皮動物門(phylum Echinodermata)に属する生物である。5億年という長い年月を生き延びてきたウニは、進化論に大きな打撃をもたらしている。これらの生物の構造は長い年月全く変化しておらず、生物が他の生物種から漸次的に変化したという進化論の主張を退ける。

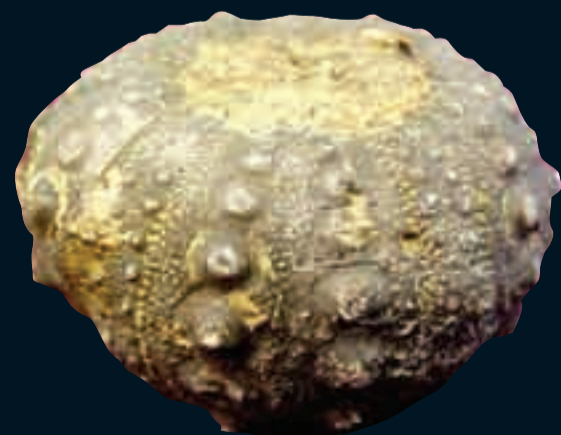
ヒトデ

年代：5億年前〜4億4千万年前
寸法：8.6センチメートル(3.4インチ)
地域：モロッコ
層：ハファーラ砂岩層
時代：オルドビス紀

このヒトデの化石は、約5億年前のものである。微細な特徴までが非常に良好な状態で保存されている珍しい標本である。ヒトデの特徴である5本の腕は、現代に至るまで全く変化していない。5億年前のヒトデと現在のヒトデの間には全く違いは見られない。他の無数の化石と同様、この生物もまた進化しておらず、何億年もの長期間変化していない。

ウニ

年代：9500万年前～7200万年前
寸法：2.5センチメートル(1インチ)
地域：モロッコ、ミドレット
時代：白亜紀後期

9500万年前～7200万年前に生息していたウニは進化が発生しなかったことを証明する無数の化石の中の1つである。これらの化石は現在のウニと全く同じであり、同時に神の創造を証明するものである。

ウニ

年代：1億4600万年～6500万年前
寸法：3.8センチメートル(1.5インチ)
地域：モロッコ
層：ウニ床
時代：白亜紀

1億4600万年～6500万年前のモロッコのウニ床で発見されたこのウニの化石は、神の創造を証明する無数の証明のうちの1つである。今日のウニと何百万年前のウニとの間に違いは全く見られない。

レバノンで発見された化石標本

レバノンの地質学的構造は白亜紀からジュラ紀(1億4600万年前～6500万年前、2億800万年前～1億4600万年前)の時代にさかのぼる。レバノンで採取される化石は、通常これらの時代のものである。特に、多くのレバノンの山々は化石の保存に適している堆積岩から成っている。地表に近い岩層は、大量のサンゴと海綿床、ジュラ紀の甲殻類から構成されている。白亜紀の海洋化石に加え、琥珀および植物の化石もまた採取される。

レバノンの化石床は、世界でも最も重要な化石の産地であり、特にハジョーラ、ハーケル、アンナムラでは化石が豊富である。250種類以上の魚類の化石がこれらの層から発見されており、そのうちの150種以上は詳細が報告されている。レバノンで発見された脊椎動物の化石は通常、新生代(6500万年前～現代)のものである。

化石層が豊富なハキールで行われた発掘は、進化論が根拠のない理論だということを見せ付けるものである。

これらの化石はすべて、生物は何千万年もの間全く変わっていないことを示しており、進化を遂げていない。化石記録は、何千万年もの間存在している生物が現代見られるものと全く同じものであり、ダーウィニストの主張を無効とする。これらの科学的発見は生物を創造したのは、進化ではなく神だということを明らかにしている。

レバノンで発見された1億4600万年前〜6500万年前のエビと魚類の化石

化石に損傷を与えないためにも、化石を含んだ岩は慎重に砕かなくてはならない。上の写真は、ハキールの発掘現場と現場で行われた調査の様子である。

サメ

年代：9500万年前
寸法：180ミリメートル(7インチ)；母岩：205ミリメートル(8インチ) X 135ミリメートル(5.3インチ)
地域：レバノン、ハキール
時代：白亜紀中期、セノマニアン中期

このサメの化石は、ひれと軟骨の骨格の大体のディテールが保存されている。これもまた生物が進化しなかったということの証拠となるものだ。今日のサメと何百万年前に生息していたサメの間に違いはみられない。

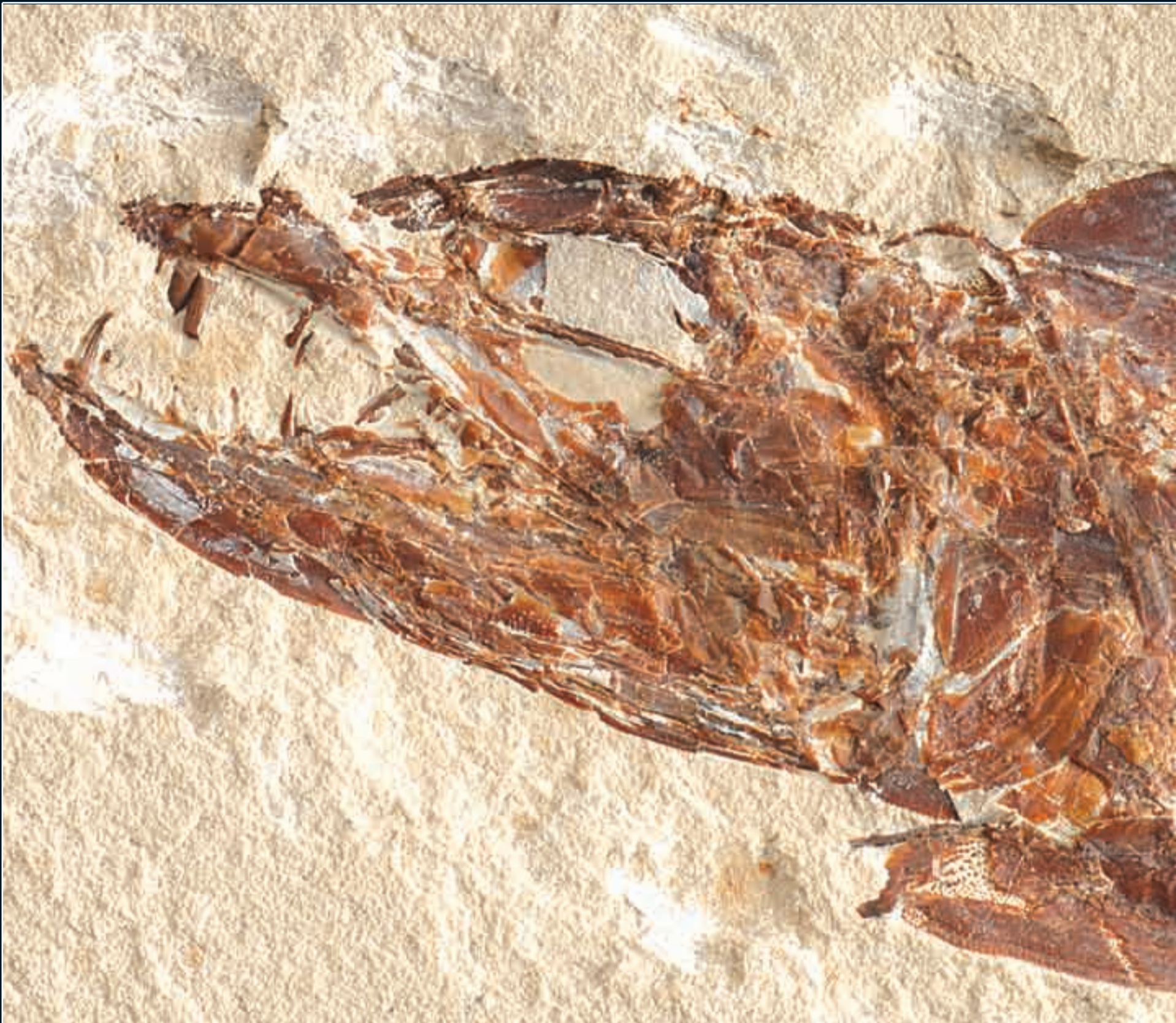
ウナギ

年代：9500万年前
寸法：58ミリメートル(2.2インチ)（直線にした場合)、母岩：56ミリメートル(2.2インチ) X 65ミリメートル(2.5インチ)
地域：レバノン、ハキール
時代：白亜紀中期、セノマニアン中期

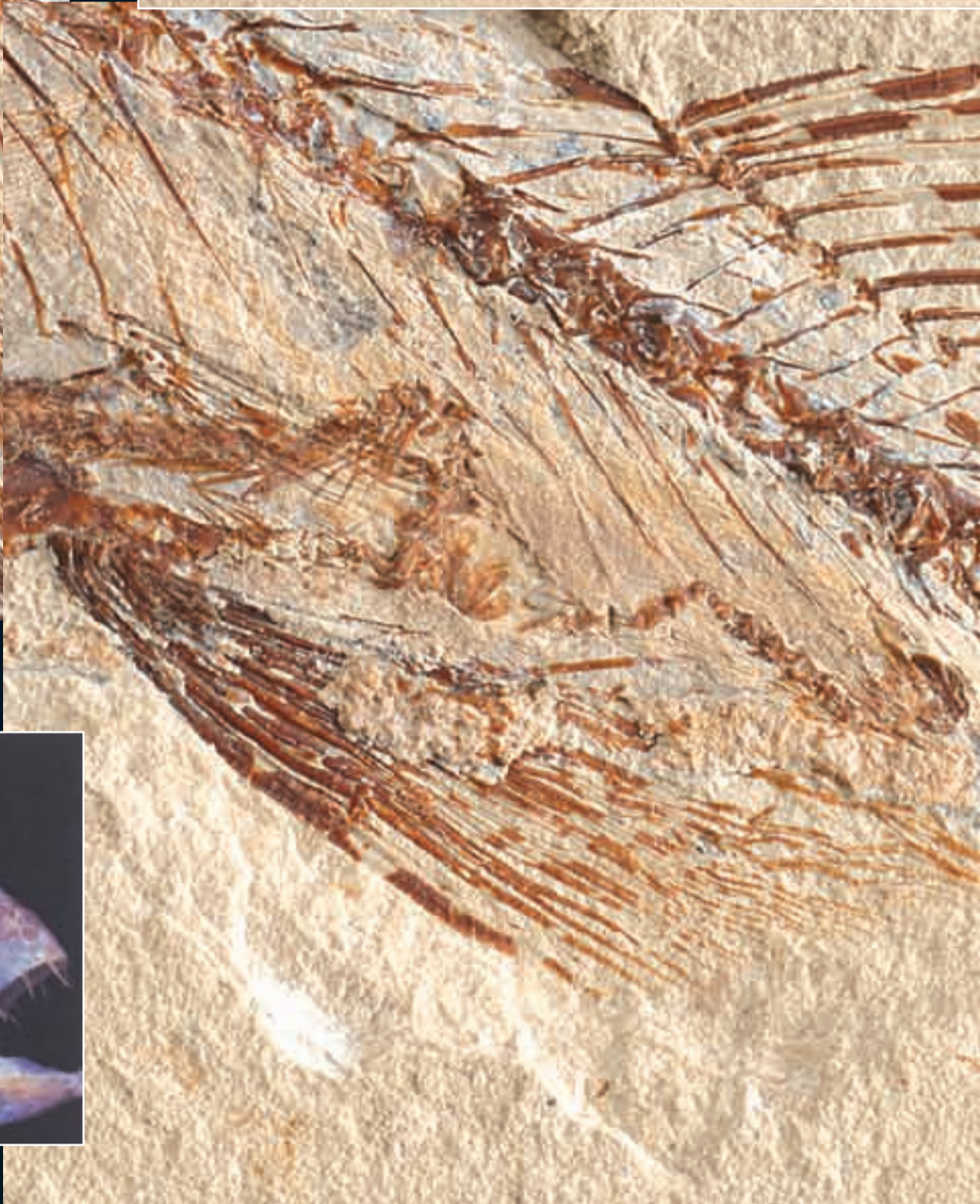
ウナギ目(Anguilliformes)に属するウナギには400以上の種類が存在する。何百万年も全く変わらずにいるその姿もまた、進化論の無効性を明らかにする。

トビウオ

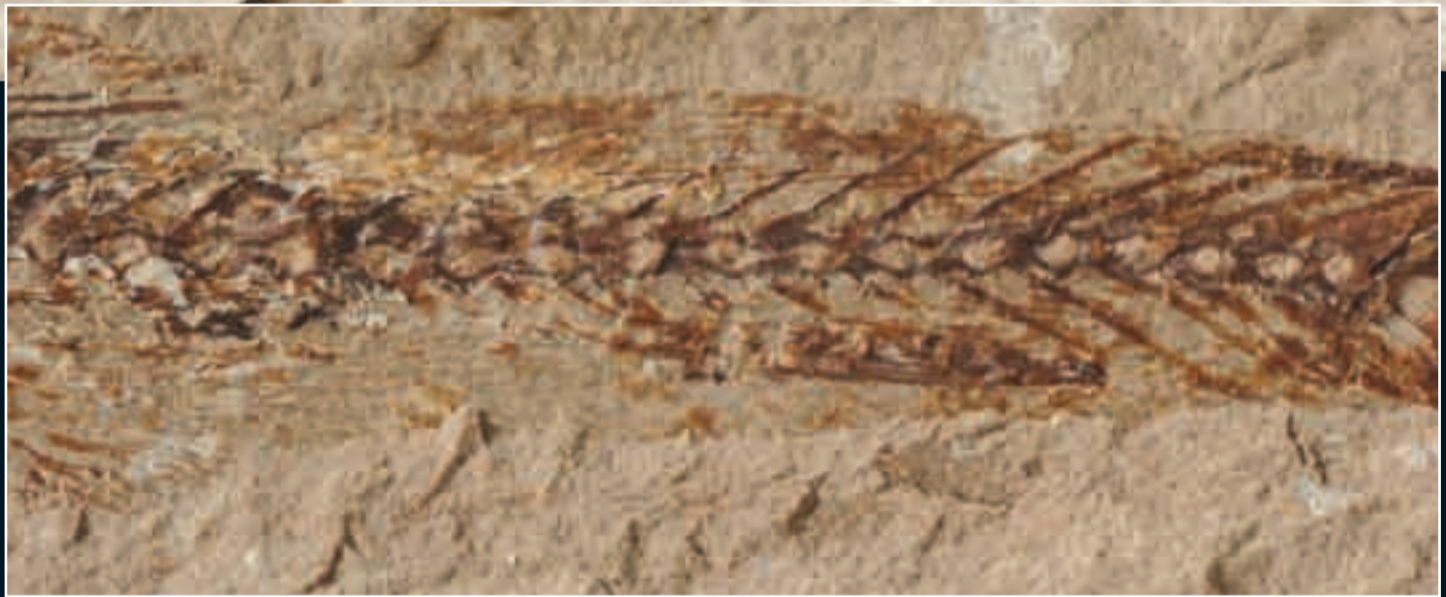
年代：9500万年前
寸法：胸ヒレ幅28ミリメートル(1.1インチ)、全長47ミリメートル(1.8インチ)、母岩：75ミリメートル(2.9インチ) X 70ミリメートル(2.7インチ)
地域：レバノン、ハキール
時代：白亜紀中期、セノマニアン中期

このトビウオの化石は、現在生息するものと全く同じものであり、生物が進化のプロセスを経ていないことを証明するものである。この脊椎動物は、全く変化せずに現代まで生き延びてきている。これはダーウィニズムの基礎である“段階的移行進化”の主張を突き崩す。

ホウライエソ

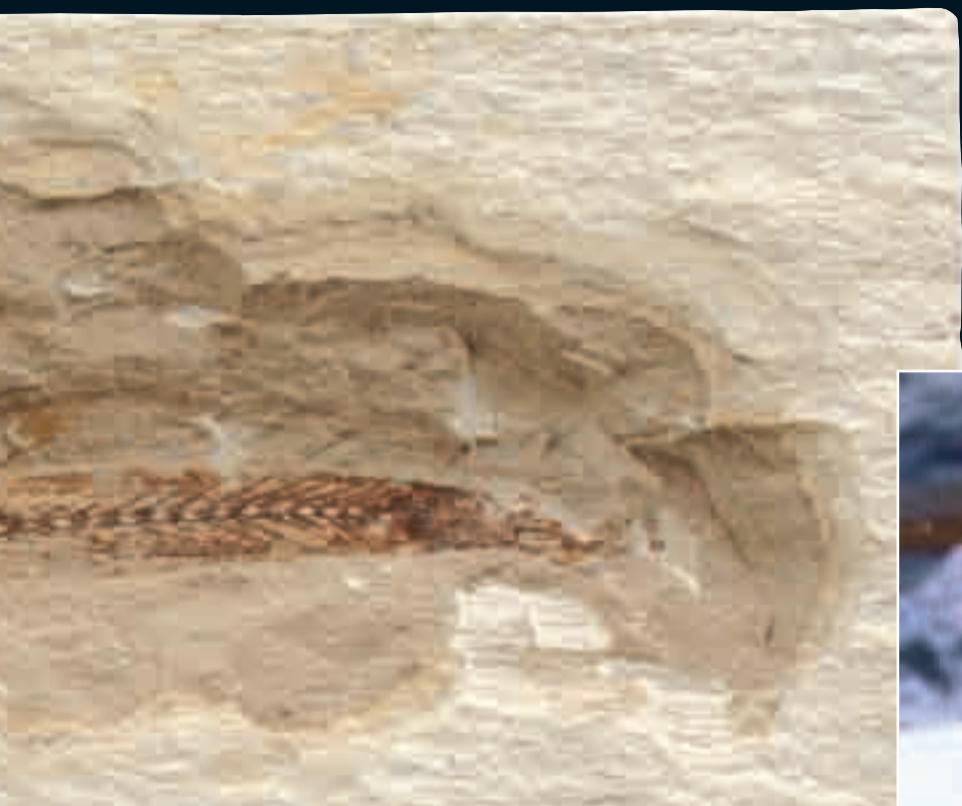
年代：9500万年前〜7200万年前
寸法：16.5センチメートル(6.5インチ)
地域：レバノン、ハキール
時代：白亜紀上部

ホウライエソは、主に熱帯の水中に棲み、何千万年もの間全くその姿を変えていない。ホウライエソの化石はすべてこの生物が何千万年も構造を変えないで生きてきたことを示している。進化論ではこれを説明できない。ホウライエソもまた、神の創造の事実を証明しているのだ。

エビ

年代：1億2700万年前～8900万年前
寸法：母岩：8.1センチメートル(3.2インチ) X 10.9センチメートル(4.3インチ)
地域：レバノン、ハジューラ
時代：白亜紀中期、セノマニアン

この標本は、化石化されたエビと2匹の化石化された魚である。魚のひれと骨の構造は良好な形で保存されている。エビは節足動物(phylum Arthropoda)に属している。最古の化石はジュラ紀(2億800万年～1億4600万年前)にさかのぼる。これらの化石は進化の中間段階を経ておらずエビが何百年も前から全く変化していないことを示している。言い換えれば、進化したのではなく、神によって創造されたのである。

トビウオ

年代：1億年前
寸法：胸びれの幅26ミリメートル(1インチ)、体長120ミリメートル(4.7インチ)；母岩：180ミリメートル(7インチ) X 90ミリメートル(3.5インチ)
地域：レバノン、ハキール
時代：白亜紀中期、セノマニアン

このトビウオの化石は、ハキールの頁岩堆積物で発見されたものである。この魚は保存状態が非常に良く、内部の特徴を詳細に観察することができる。魚の大きさは体長12 cm、ひれは26 mmの長さにもなる。何千万年も前のトビウオと現代のものとの間に違いは全く見られない。これは、この生物が進化したのではなく、創造されたのだということを示している。

トビウオ

年代：9500万年前～7200万年前
寸法：2.5センチメートル(1インチ) X 4.5センチメートル(1.7インチ)；母岩：6センチメートル(2.4インチ) X 8センチメートル(3.2インチ)
地域：レバノン、ビブロス、ハジューラ
時代：白亜紀上部

生物が漸次的に進化したのではないことを証明するものに、この写真に示されるトビウオの化石があげられる。この写真のトビウオは、9500万年前～7200万年前に生息していたものであり、現代に生息するトビウオとの間に違いは見られない。この種の魚は、羽に似た胸びれと長い尾を有し、水面上を滑るようにジャンプできる。

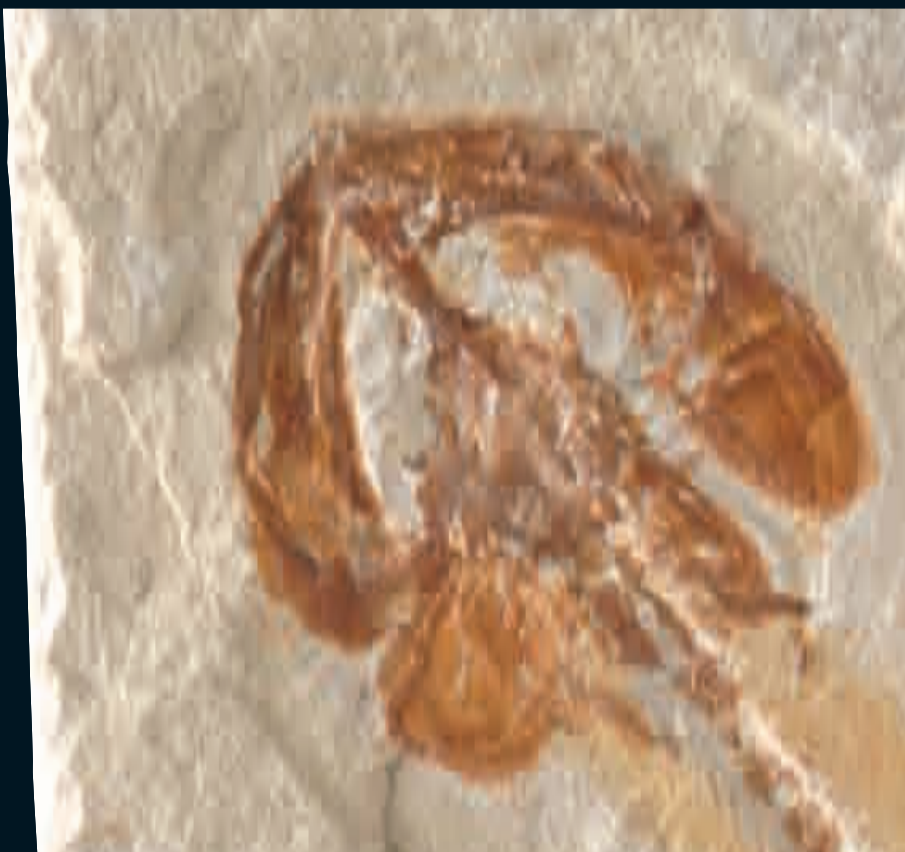
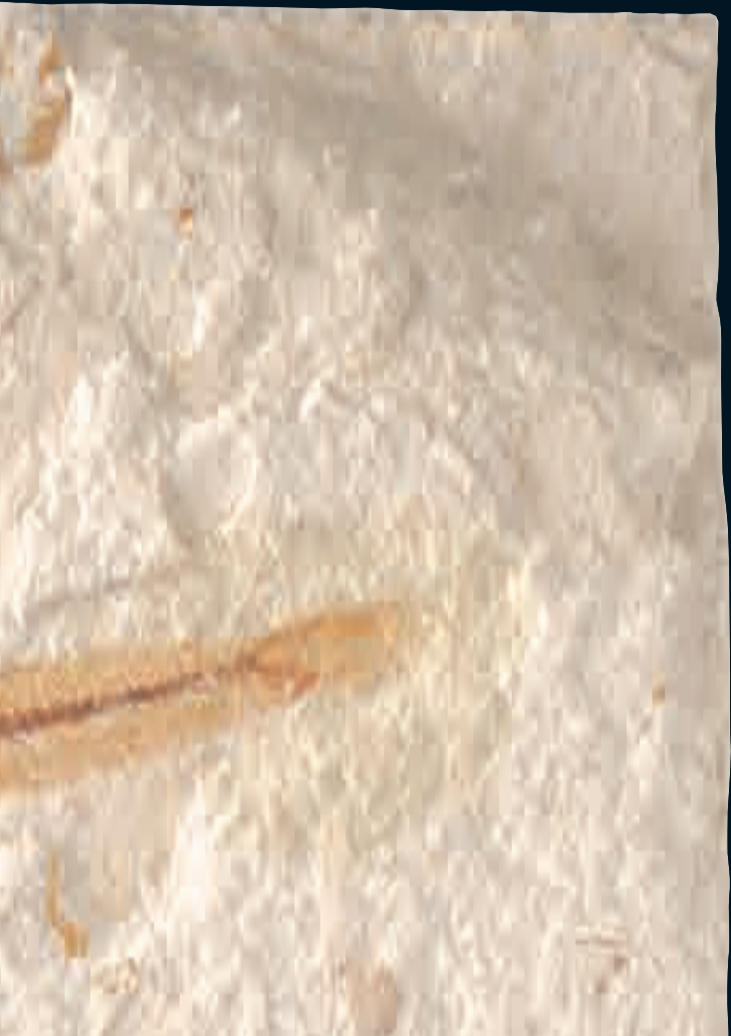
ウナギ

年代：9500万年前〜7200万年前
寸法：10.2センチメートル(4インチ)
地域：レバノン、ハキール
時代：白亜紀上部

他の魚類の化石に並ぶウナギの化石。ウナギは通常浅瀬に生息し、ウナギ目(Anguilliformes)に属する。ウナギによっては、深海(水深4千m)に棲むものもある。サイズは10cmから3mにおよぶものまでさまざまで、体重は65kgにまで達することがある。この化石化されたウナギは、現代に生息するウナギと何ら変わることはない。9500万年前〜7200万年前から、全く変化していないのである。これは、この生物が進化の過程を経ていないことを証明するものである。

ウナギ

年代：1億4600万年～6500万年前
寸法：8センチメートル(3.2インチ) X 15センチメートル(6インチ)
地域：レバノン、ハジューラ
時代：白亜紀中期、セノマニアン

このウナギは、体長8 cm X 15 cmである。この化石の頭部は非常に良好な状態で保存されており、体部にいたっても詳細に描き出されている。ウナギは何千万年もの古代から生息してきているが、現代に生息するウナギとは全く変わらない。写真の1億4600万年前～6500万年前のウナギはこれを証明するものである。

写真の陰画と陽画、対になった化石は7500万年前のものである。

サメ

年代：7500万年前
地域：レバノン、ビブロス、ハジューラ
時代：白亜紀、セノマニアン

サメの化石はレバノンの山間部で頻繁に発見されている。軟骨魚網(cartilaginous class)に属している。軟骨魚の骨格はカルシウムを含まず、軟骨組織で構成されている。カルシウムを含む部分は歯のみであるが、時に脊椎にも含まれることがある。この理由から、サメの歯の化石は骨格よりもより多く発見されているのである。
現在発見されている最古のサメの化石は、4億年前のものである。他の生物と同様、これは、サメが何億年も同じ姿でい続けていたということを示している。進化論者の主張と反して、サメは他の種から進化したものではなく、完璧な構造を持ちながら一瞬にしてこの世に現われている。言い換えれば、生物は創造されたのである。

セミエビ

年代：9800万年前
地域：レバノン
時代：白亜紀

セミエビ(セミエビ科に属する)は、ゆっくりと行動する甲殻類の生物である。体長は約40〜45cm。現代に生息するセミエビは、何百万年も前の特徴と同じものを備えている。長い期間を経ても、ほんの少しの違いも見られない。この写真に見られる9800万年前のセミエビの化石は、この事実を裏付けるものである。

マダガスカル共和国で発見された化石標本

世界で4番目に大きな島であるマダガスカル共和国は、東アフリカ沿岸から離れたインド洋に浮かぶ。この地域には、世界の動植物種の5%が生息しており、80%がマダガスカル共和国にしかいない生物である。この島の東部海岸には短く切り立った絶壁がある。北部ツアタナナには山間部があり、山々には火山性の地帯もある。

地質学研究によれば、1億6500万年前には、マダガスカル共和国はアフリカの一部だったが、後に大陸から切り離されたのだという。この地域で発掘を実施した古生物学者は、中生代(2億4800万年前～6500万年前)の鳥類、哺乳類、海洋生物の化石を大量に発見している。

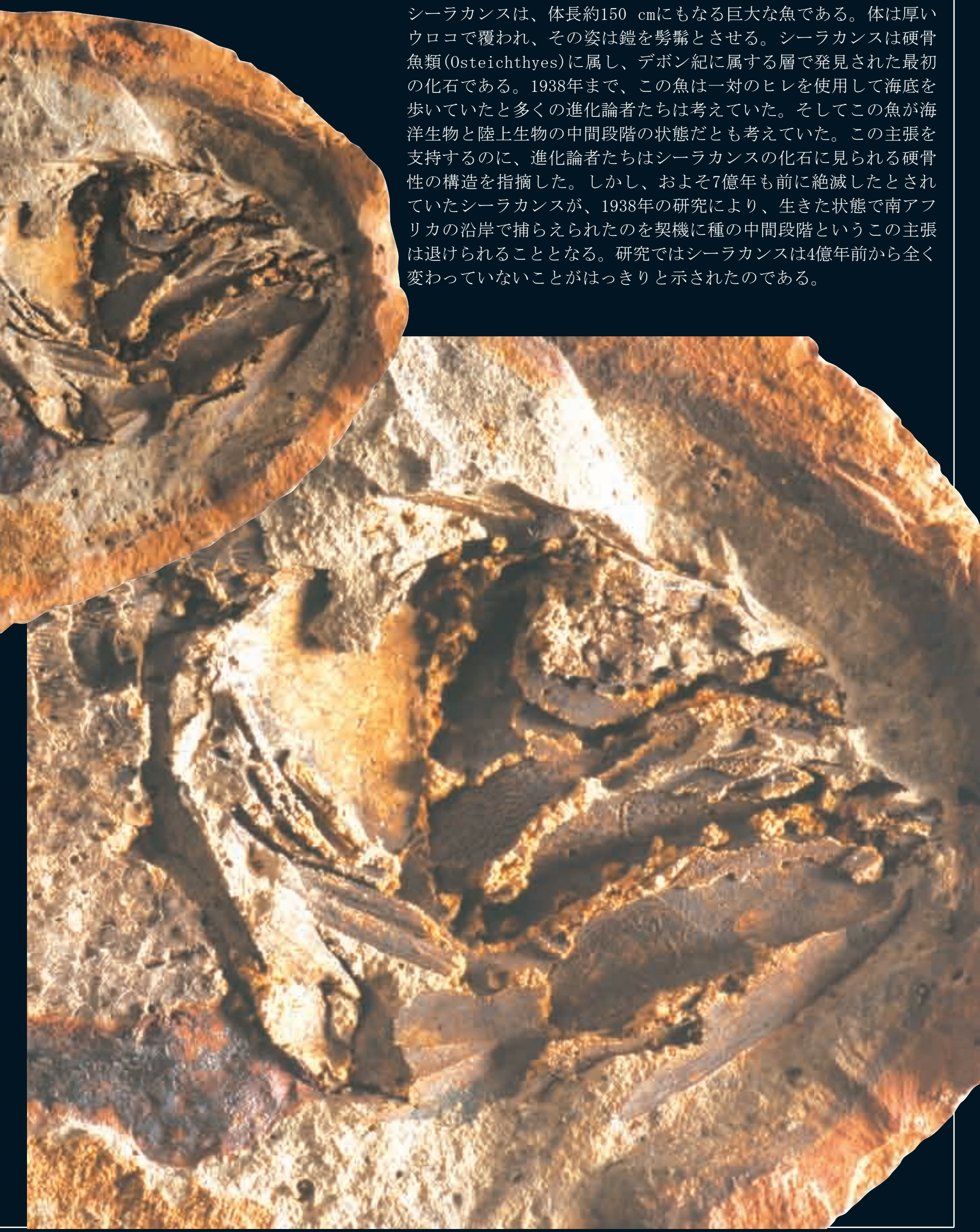
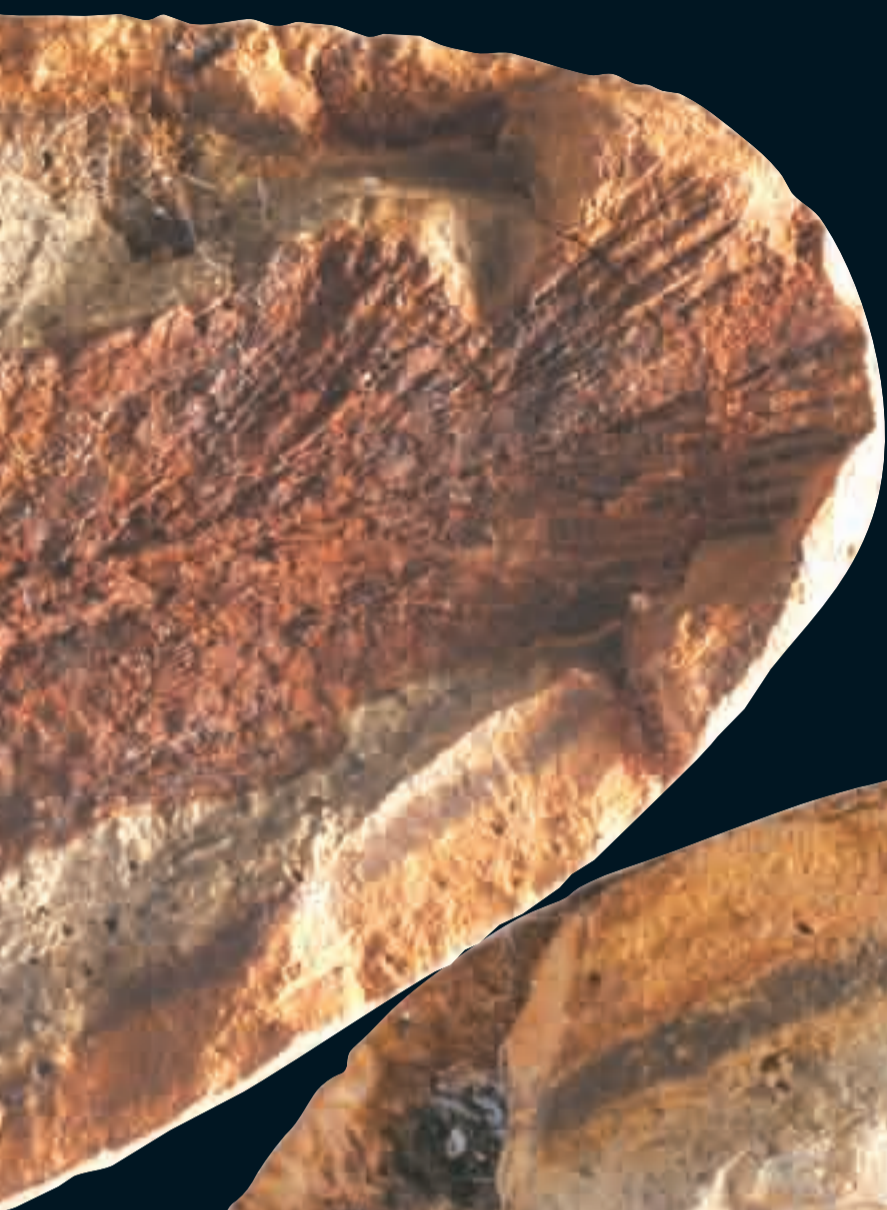
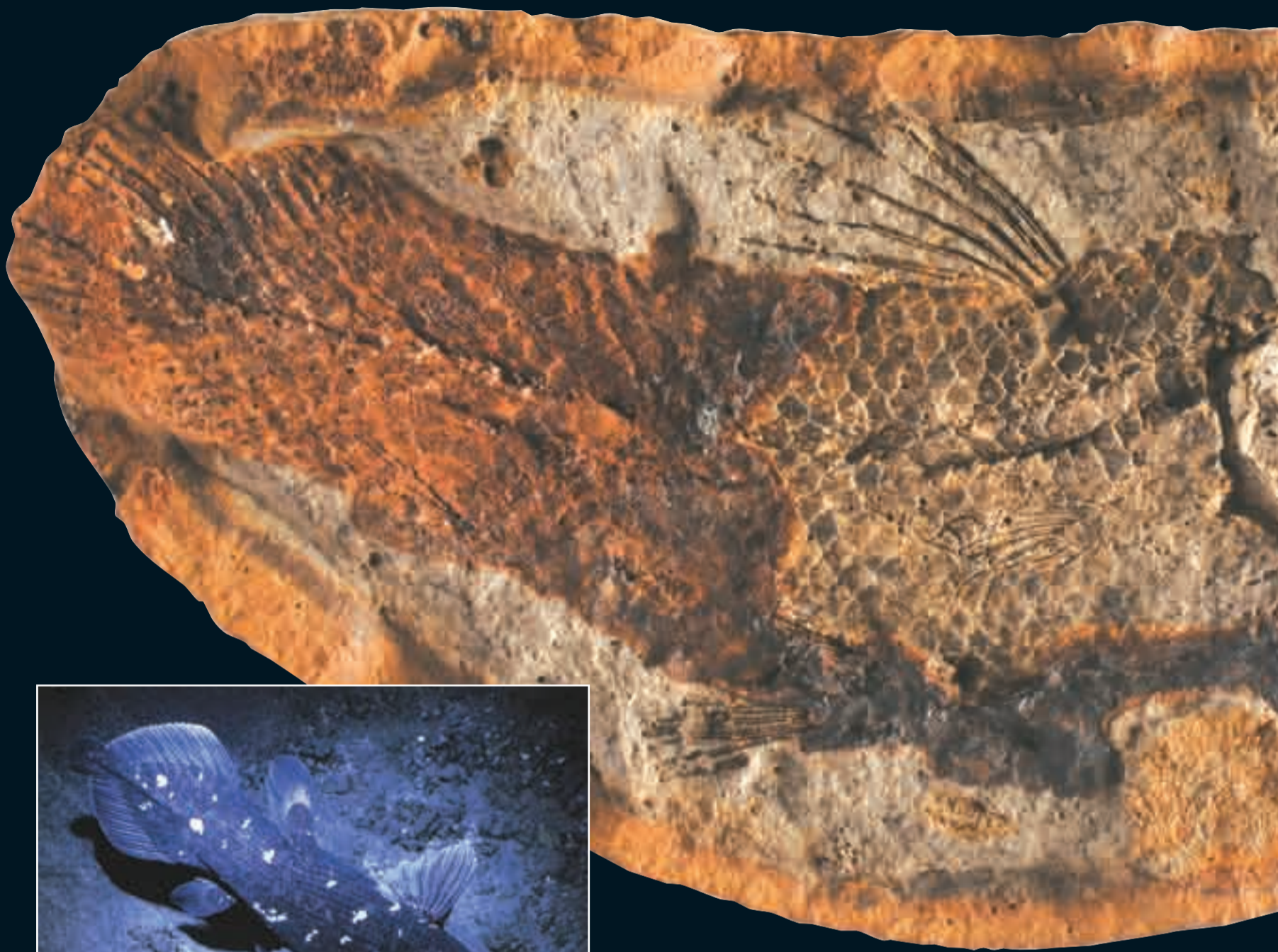
その他の化石の発掘と同様、マダガスカル共和国で採集された化石もまた、進化論と化石記録の間にある矛盾に光を当てるものであった。進化論では、種の起源を説明することがほとんど不可能であるということを、この化石は証明する。突然に地質層に出現した生物種、そして何千万年も姿を変えていないことを鑑みても、これは生物が進化したのではなく、神による創造によるものだということが分かる。

多雨林と砂漠の両方を有するマダガスカル共和国には、さまざまな地質年代からの多くの化石が発見されている。これらの化石は、生物が何億年も同じ姿でいたことを明らかにしている。

1億7200年～1億6800万年前にさかのぼるウニの化石

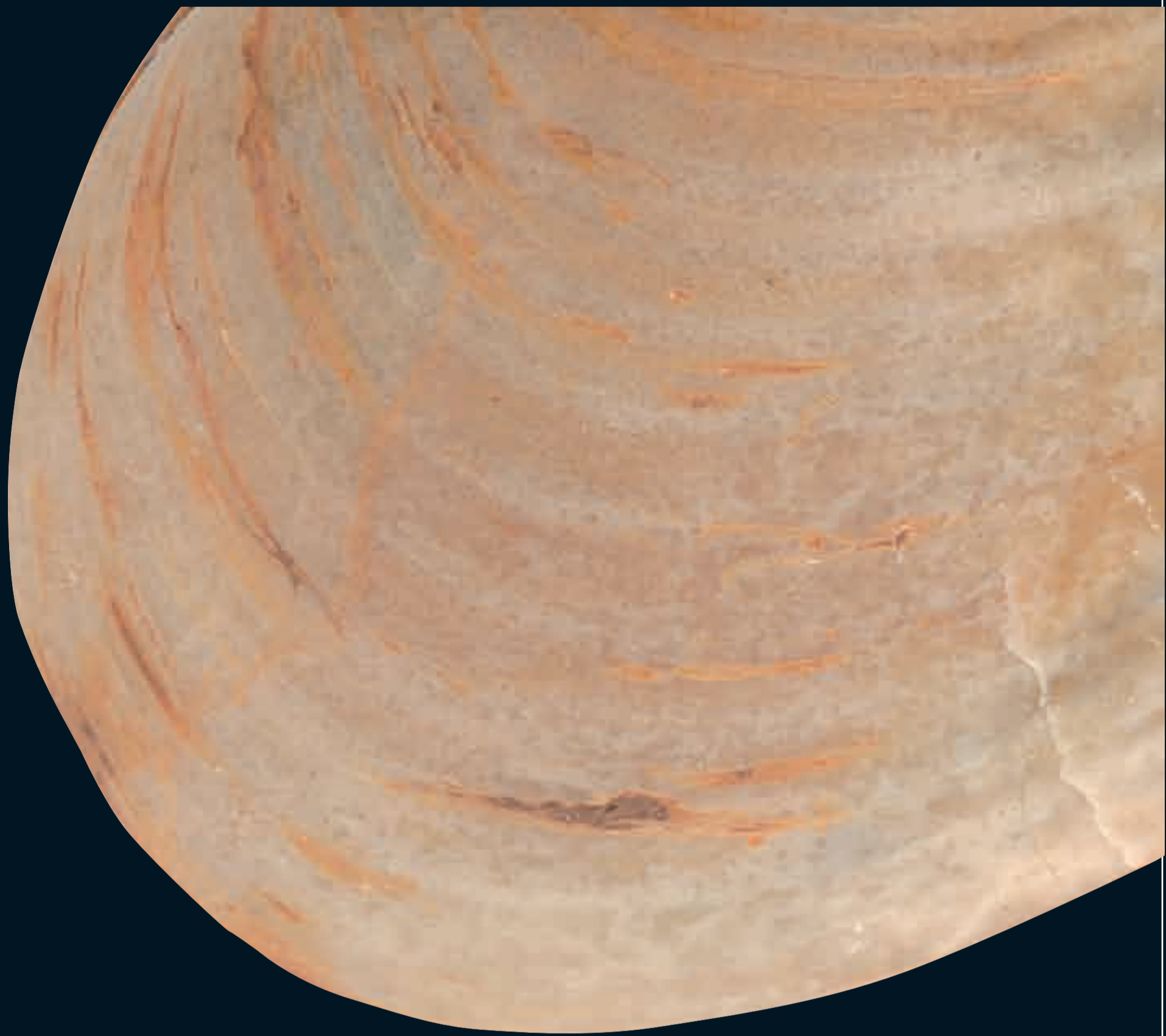
1億1400万年前のこのオウムガイは、現代に生息するものと全く違いが見られない。

シーラカンス

年代：2億4千万年前
地域：マダガスカル共和国、アンビロープ
時代：三畳紀下部

シーラカンスは約4億年前から生息している魚類である。これもまた進化論の行き詰まりを露呈する。シーラカンスは4億年もの間全く変わっていないのである。長い年月、生理学上の構造を保持していたというこの事実は（大陸の移動、気象の変化、環境の変化にも関わらず）進化論者を当惑するものである。
シーラカンスもまた生物が継続的な進化の過程を経ながら現在に至ったという進化論を否定するものである。
ここに見られるシーラカンスの化石は、2つの断面に分けられる。この種の化石では、2つに分かれた石を組み合わせることで鏡像が浮かび上がる。

シーラカンスは、体長約150 cmにもなる巨大な魚である。体は厚いウロコで覆われ、その姿は鎧を髣髴とさせる。シーラカンスは硬骨魚類(Osteichthyes)に属し、デボン紀に属する層で発見された最初の化石である。1938年まで、この魚は一対のヒレを使用して海底を歩いていたと多くの進化論者たちは考えていた。そしてこの魚が海洋生物と陸上生物の中間段階の状態だとも考えていた。この主張を支持するのに、進化論者たちはシーラカンスの化石に見られる硬骨性の構造を指摘した。しかし、およそ7億年も前に絶滅したとされていたシーラカンスが、1938年の研究により、生きた状態で南アフリカの沿岸で捕らえられたのを契機に種の中間段階というこの主張は退けられることとなる。研究ではシーラカンスは4億年前から全く変わっていないことがはっきりと示されたのである。

二枚貝

年代：2億800万年～1億4600万年前
地域：マダガスカル共和国、マジュンガ盆地
時代：ジュラ紀

2億800万年前～1億4600万年前に生息していた写真の二枚貝と、現代に生息する二枚貝との間に違いはない。これは進化のプロセスなど経なかったことを示す証拠であり、進化の中間段階ではない。

オウムガイ

年代：1億1400万年前
寸法：55ミリメートル
地域：マダガスカル共和国
時代：白亜紀、アルビアン階

3億年前のオウムガイと1億5千万年前のオウムガイ、そして今日生きるオウムガイはすべての面で同じである。ここに掲載された写真の1億1400万年前のオウムガイの化石は、この生物が何千万年も同じ姿でいることを表すものである。

オウムガイ

年代：1億1オウムガイ
年代：1億1300万年前～9700万年前
寸法：楕円の頂点全長1.9センチメートル(0.7インチ)、幅5.3センチメートル(2.1インチ)
地域：マダガスカル共和国、マハジャンガ
時代：白亜紀、アルビアン階

この化石を見ると、何万年前に生きていた生物と、現代の同じ生物とでは全く違いがないのが分かる。そのうちの1つが、このオウムガイである。この世に初めてもたらされてから、全く変化していない。この写真の1億1300万年前～9700万年前の化石もそれをはっきりと映し出している。
300万年前～9700万年前
寸法：楕円の頂点全長1.9センチメートル(0.7インチ)、幅5.3センチメートル(2.1インチ)
地域：マダガスカル共和国、マハジャンガ
時代：白亜紀、アルビアン階
この化石を見ると、何万年前に生きていた生物と、現代の同じ生物とでは全く違いがないのが分かる。そのうちの1つが、このオウムガイである。この世に初めてもたらされてから、全く変化していない。この写真の1億1300万年前～9700万年前の化石もそれをはっきりと映し出している。

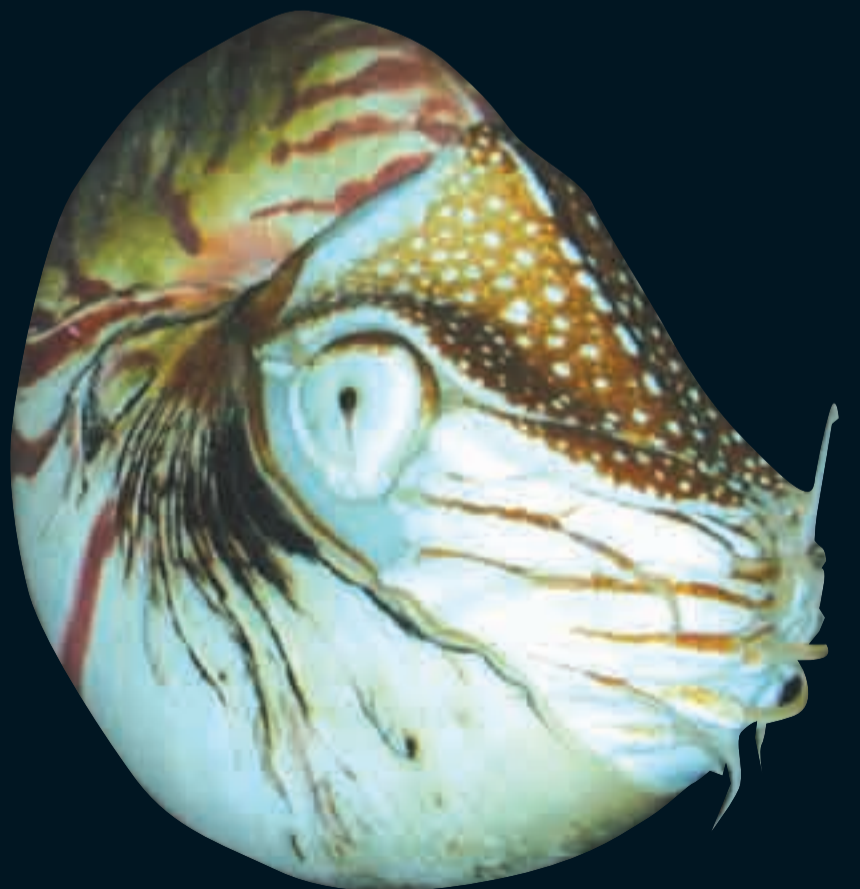
ウニ

年代：1億7200万年前～1億6800万年前
地域：マダガスカル共和国
時代：ジュラ紀、バジョシアン

この写真のウニの化石は、1億7200万年～1億6800万年前に生息していたものである。このウニと現代に生息するウニとの間に違いはない。この化石は、生物が進化したのではなく、神によって創造されたということをはっきりと示している。

オウムガイ

年代：1億1300万年前～9700万年前
寸法：楕円の頂点全長6.6センチメートル(2.6インチ) X 幅5センチメートル(2インチ)
地域：マダガスカル共和国、マハジャンガ
時代：白亜紀、アルビアン階

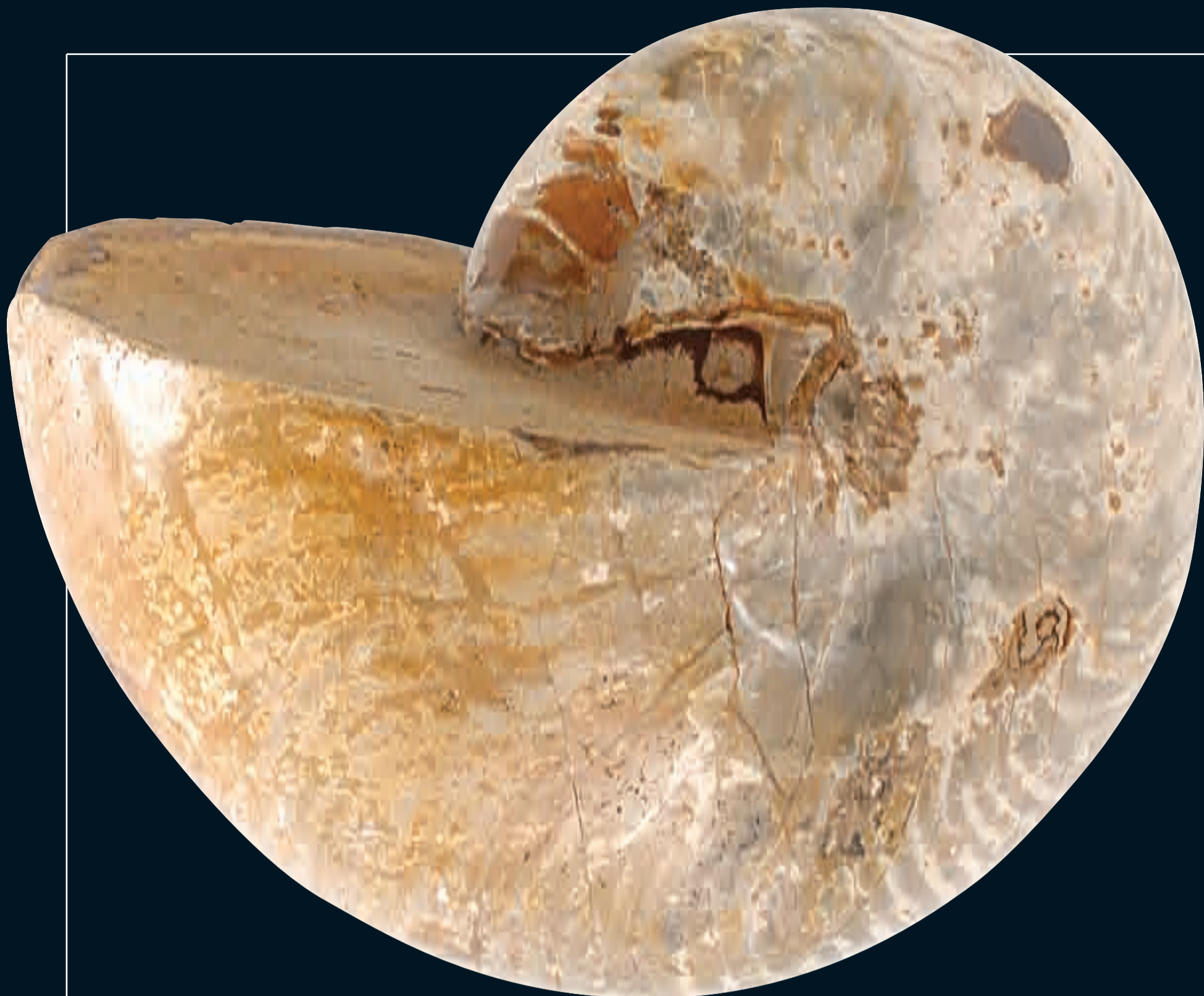
1億1300万年前～9700万年前のオウムガイと現代のオウムガイが全く同じであるということは、これもまた進化論が大きな欺瞞であるということを提示する。

オウムガイ

年代：1億1400万年前
寸法：55ミリメートル(2.1インチ)
地域：マダガスカル共和国
時代：白亜紀、アルビアン階

3億年もの間全く変化していないオウムガイは進化論に大きな打撃を与えた。この写真の1億1400万年前のオウムガイは、現代のものと全く変わりがない。

二枚貝

年代：2億800万年～1億4600万年前
地域：マダガスカル共和国、マジュンガ盆地
時代：ジュラ紀

海洋の甲殻類の生物は何億年もの長い歳月、同じ特徴を保持し続けている。その一例は、この二枚貝である。ここに掲載されているものは、2億800万年前～1億4600万年前のものである。現代のものと同じであるため、これは進化論に対立する。

オウムガイ

年代：1億1400万年前
寸法：70ミリメートル(6.7インチ)
地域：マダガスカル共和国
時代：白亜紀、アルビアン階

オウムガイは、今日の海でも頻繁に見られる無脊椎動物である。この生物もまた、ダーウィニズムの無効性を暴くものである。現代のオウムガイと1億1400万年前のオウムガイとの間には全く違いがない。

オウムガイ

年代：1億1400万年前
寸法：17 センチメートル(6.6インチ)
地域：マダガスカル共和国
時代：白亜紀、アルビアン

オウムガイは、およそ3億年もの間生き長らえており、その期間中身体的構造を保持している。ここに紹介する化石は、1億1400万年前のオウムガイである。この生物が長い歳月の間全く変わっていないという事実は進化が起こらなかったという生きた証拠である。

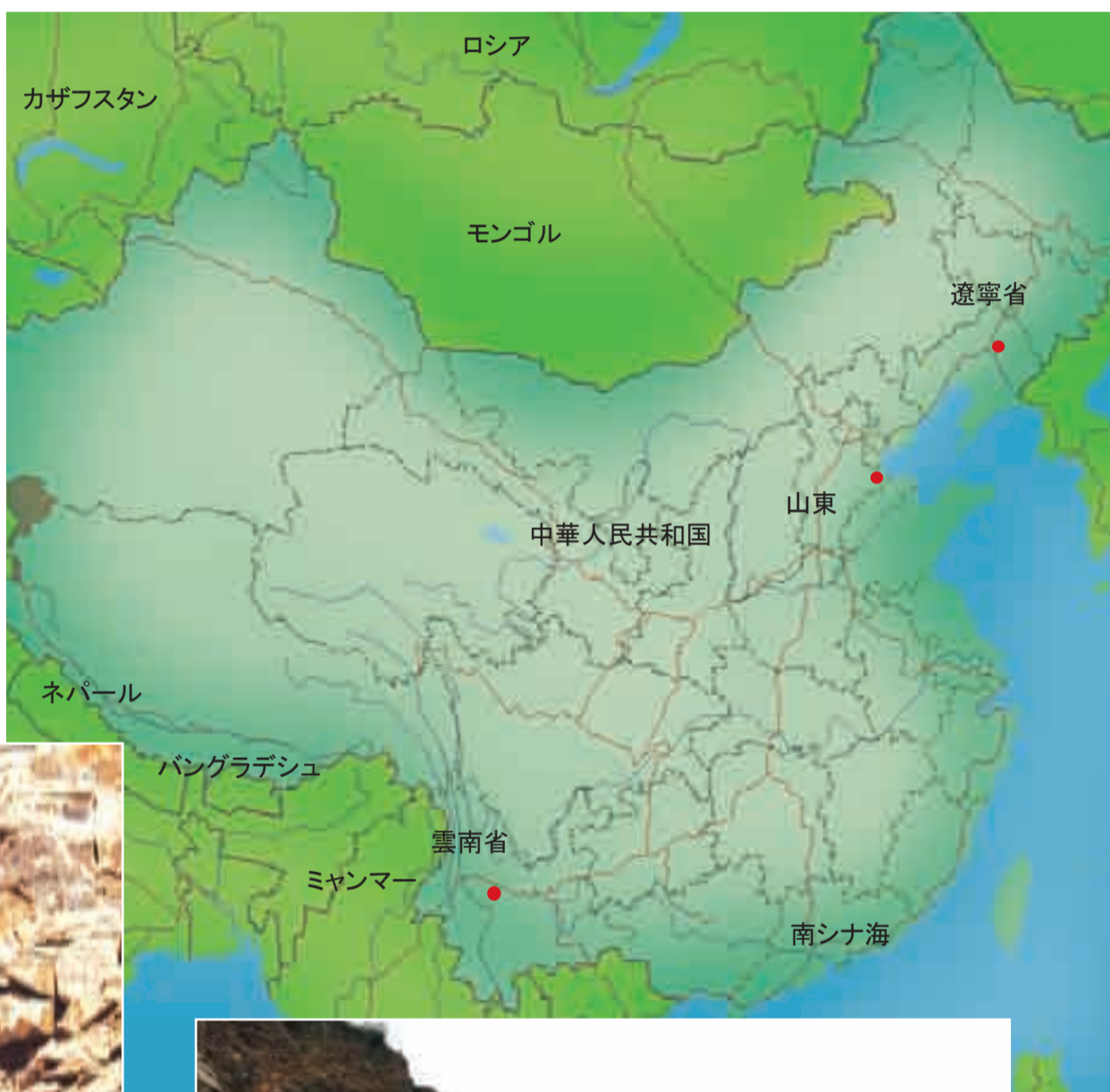
中華人民共和国、オーストラリア、ニュージーランドで発見された化石標本

中華人民共和国で発見された化石標本

さまざまな山岳地帯はアジアの地質学的歴史上重要な地位を占めている。ヒマラヤは、世界でも最も年齢が若い山岳地帯であり、大量の無脊椎海洋生物の化石がヒマラヤの山麓で発見されいる。これはかつてヒマラヤの一帯が水に覆われていたことを示唆するものである。

アジアの大陸で最も重要な化石層は、中華人民共和国に横たわっている。遼寧省、雲南省、山東省は、中華人民共和国でも化石が多く発見される地域である。大量の鳥類、哺乳類、両生類、爬虫類、魚類、昆虫、植物の化石がこれらの地域から発見されている。繰り返すが、すべての化石は、生物が進化のプロセスを経ていないことを証明するものであり、神の創造が明白な事実であることを示すものだ。

特殊な動物群(一定の地域や期間だけ存在する動物)が宜興、九仏堂、遼寧で発見されている。いずれの層にも、白亜紀

北票で行われた化石の発掘。この地域で発見された顕花植物の一部は、発見されている中で最古のものである。

上:化石が含まれている遼寧の岩層

遼寧の化石地域で行われた研究によれば、発見された多くの標本は進化論を否定する内容のものであった。その岩層の一部が撮影されている。

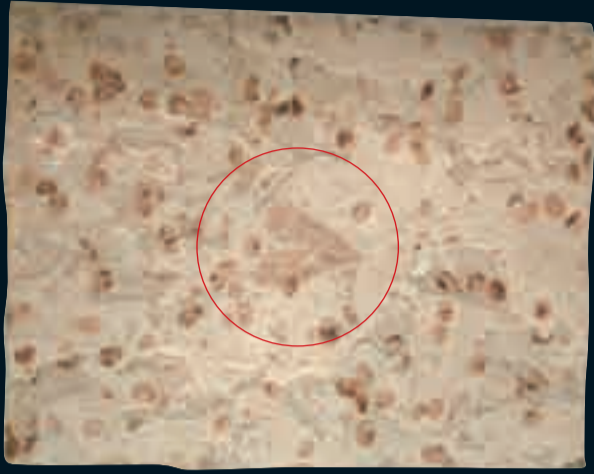
(1億4600万年前〜6500万年前)の化石が多く含まれていた。

雲南地域の澂江地帯、湖上はカンブリア紀(4億9千万年前〜4億5300万年前)の生物が発見されている重要な地域である。この地帯は、海藻類、イソギンチャク、海綿、三葉虫、三葉虫に類似した節足動物、環形動物、その他多種類のぜん虫などの多数化石が発見されており、これらは、進化論に致命的な打撃を与えるものである。これらの化石によれば、生物は、カンブリア紀時代に、複雑な機能を持ちながら、今日の生命体とほとんど同じ姿で分化した特徴を備えながら、現れたとされている。ときには古代における特権的特殊機能を持つものまでいた。これは、おそらく原始的生物から生物は進化して現在の形となったとする進化論者のでっちあげの主張に打撃を与えるものである。

雲南地域の化石層

カゲロウ

年代：1億2500万年前
寸法：20ミリメートル(0.8インチ)；
母岩：118ミリメートル(4.6インチ) X
68ミリメートル(2.7インチ)
地域：中華人民共和国遼寧省朝陽
層：宜興層
時代：下部白亜紀

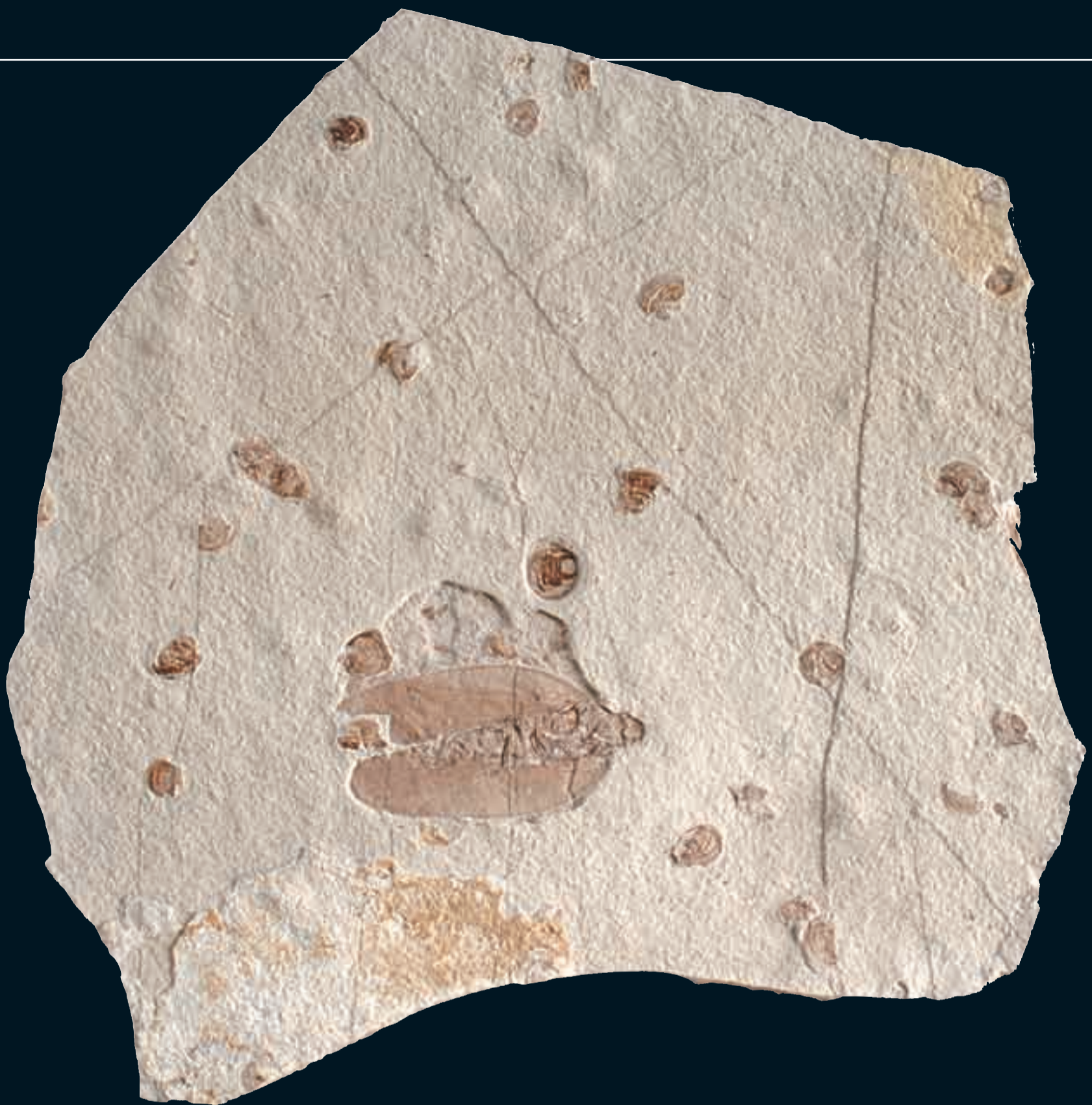
この写真のカゲロウの化石は、生きた化石の見本のようなものである。1億2500万年前の標本は、現代のカゲロウと全く同じものである。これは進化論者の主張を退けるものだ。

シリアゲムシ

年代：1億2500万年前
寸法：羽根19ミリメートル(0.8インチ)；母岩：75ミリメートル(3インチ) X 95ミリメートル(3.7インチ)
地域：中華人民共和国遼寧省朝陽
層：宜興層
時代：下部白亜紀

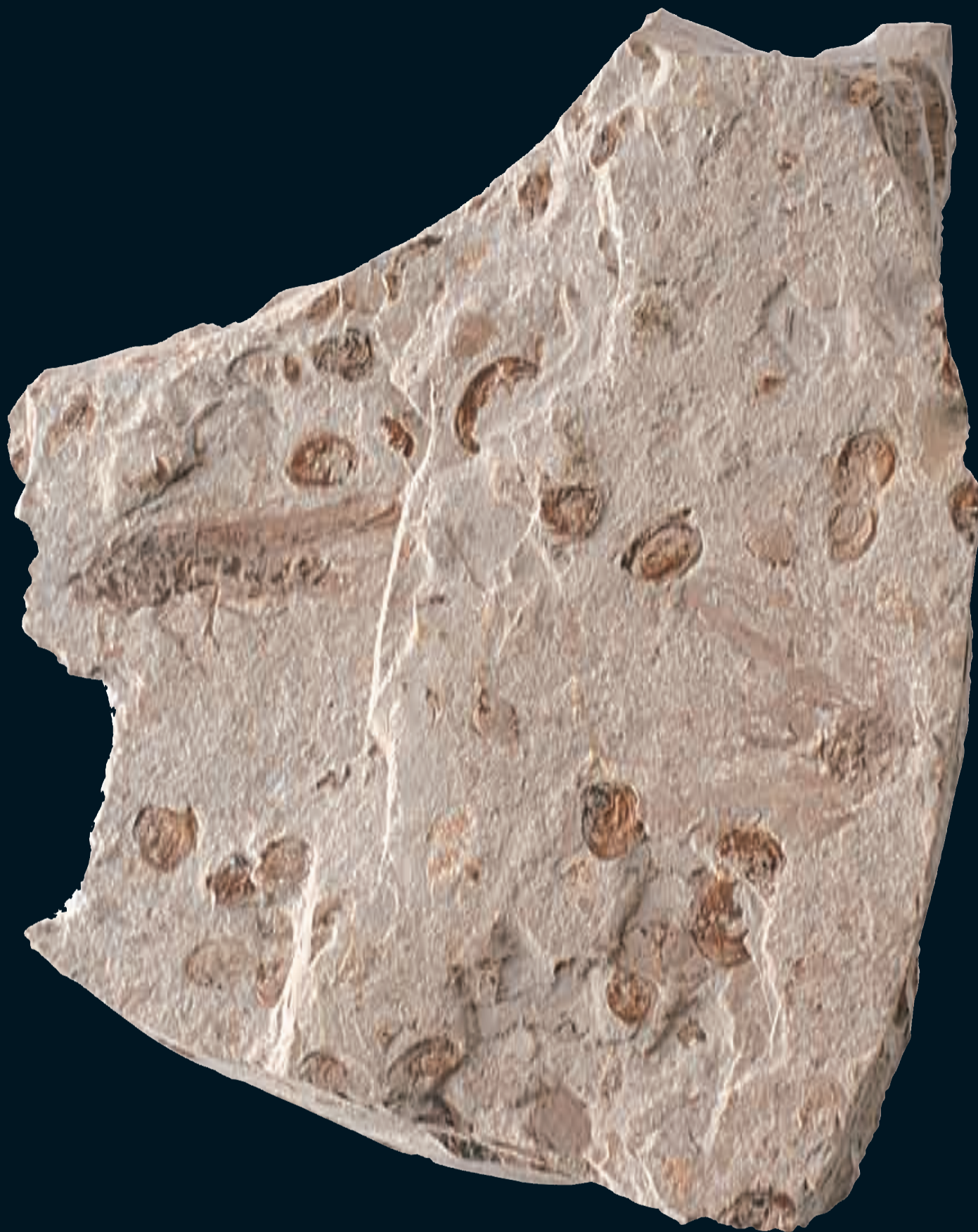
シリアゲムシは羽根の全長が平均50ミリメートル(2インチ)の小さな昆虫である。腹部がサソリの尾に似ているため、(英語では)“サソリハエ”と呼ばれている。
写真の化石は、1億2500万年前のものである。12500万年前のシリアゲムシは現在生息しているものと何ら変わりはない。これは他の生物と同様、シリアゲムシが進化していないことを示すものである。

ガガンボ

年代：1億2800万年前
寸法：12ミリメートル(0.5インチ)；羽根9ミリメートル(0.4インチ)；母岩：72ミリメートル(2.8インチ) X 48ミリメートル(1.9インチ)
地域：中華人民共和国遼寧省朝陽
層：宜興層
時代：下部白亜紀

ガガンボは巨大なブヨまたは蚊に似た昆虫であり、実際のブヨとは非常に構造が異なる。大きな特徴は長い脚部であり、通常体部の2倍ある。
他の生物と同様、ガガンボは私たちが現在生きているこの時代のものと同じ特徴を備えていることを化石から伺うことができる。何千万年も前のガガンボとなに1つ変わらないものであり、これはガガンボが進化していないことを表している。

アワフキ

年代：1億2500万年前
寸法：23ミリメートル(0.9インチ)；母岩：80ミリメートル(3.2インチ) X 80ミリメートル(3.2インチ)
地域：中華人民共和国遼寧省朝陽
層：宜興層
時代：下部白亜紀

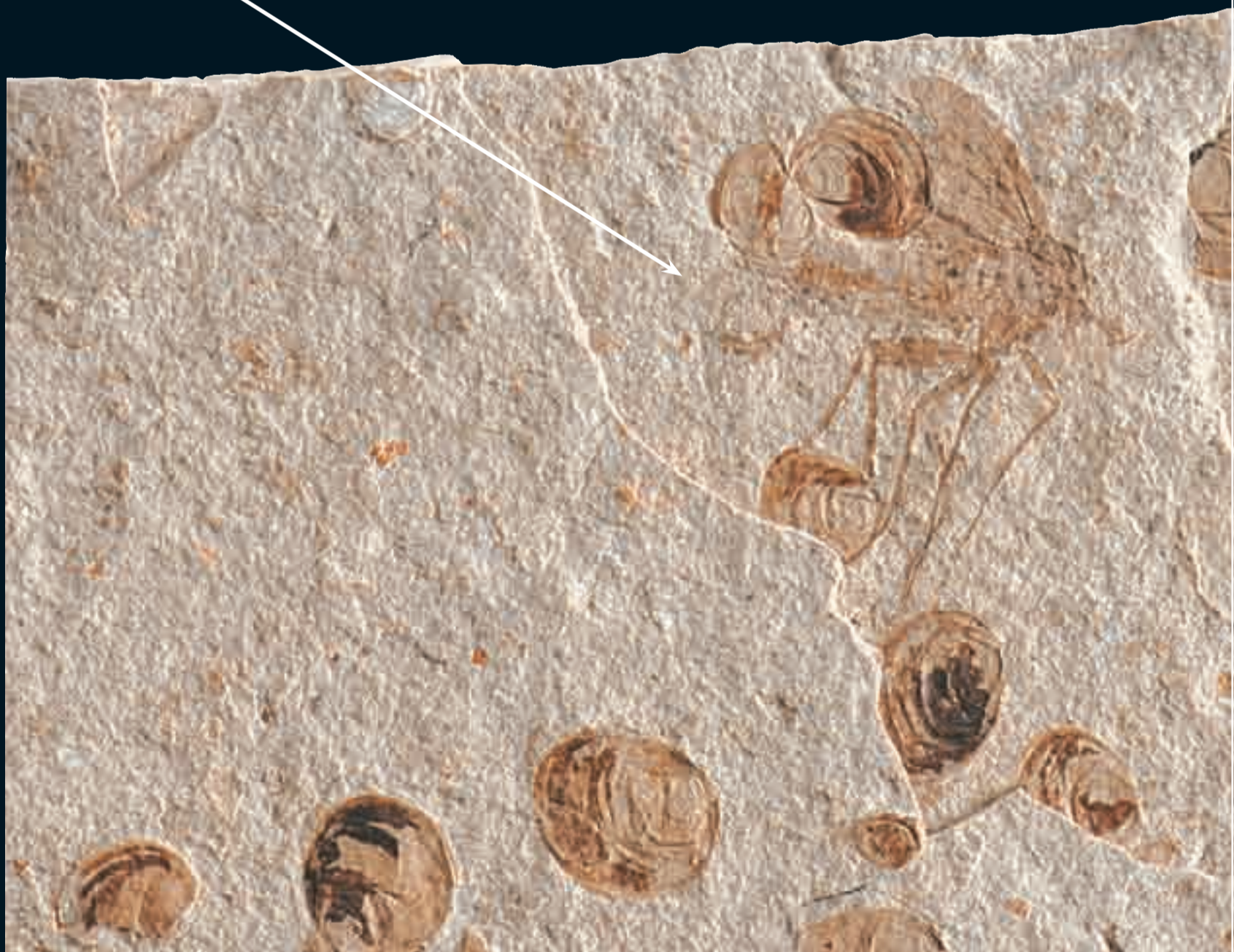
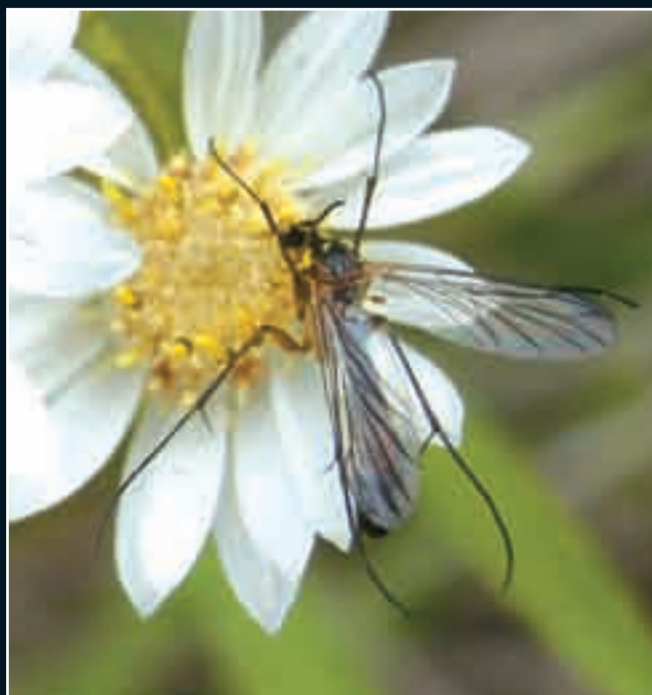
コガシラアワフキムシ科(Cercopidae)に分類されるアワフキの幼虫は、泡状の分泌物にくるまれて保護される。
現代のアワフキと何億年もの昔に生息していたものとの間に違いはない。過ぎ去った幾多の歳月にも関わらず、この種の昆虫は全く同じままである。これは生物が進化しないということを明らかにしている。

ウンカ

年代：1億2500万年前
寸法：17ミリメートル(0.7インチ)；母岩：60ミリメートル(2.4インチ) X 46ミリメートル(1.8インチ)
地域：遼寧省朝陽
層：宜興層
時代：下部白亜紀

植物を餌とするこの昆虫の成虫には2つの種類がある。1つは飛ぶことができるもので、もう一方は飛ぶことができない。これらの2つの種は何百万年という時を経ても変わっていない。昆虫のすべての複雑な構造やシステムは、数億年前のウンカにも備わっている。この膨大な時を経ても、これらの機能はそのまま同じであり、これはダーウィニストによって主張されている進化のプロセスが全く発生していないことを示すものである。

チバクロバネキノコバエ

年代：1億2800万年前
寸法：体長8ミリメートル(0.3インチ)羽根5ミリメートル(0.2インチ)；母岩：77ミリメートル(3インチ) X 50ミリメートル(2インチ)
地域：遼寧省朝陽
層：宜興層
時代：下部白亜紀

チバクロバネキノコバエは、クロバネキノコバエ科(Sciaridae)に属する生物であり、特に湿気のある場所、植物が植わっている土に近い場所を好む。
この写真のチバクロバネキノコバエの化石は1億2800万年前のものである。1億年前に生息していたチバクロバネキノコバエは、現代のものと同じである。化石記録はチバクロバネキノコバエが常に同じであり、他の種類の生物から進化したという主張を否定する。

サンショウウオ

年代：1億2500万年前
寸法：サンショウウオ：11センチメートル（4.3インチ）X 長さ6センチメートル(2.4インチ)；母岩：29.6センチメートル(11.7インチ)
地域：遼寧省葫芦島市
層：九仏堂層
時代： 下部白亜紀

中華人民共和国で発見されたサンショウウオの化石は今までに発見された中で最古のサンショウウオの化石とされている。突然の火山の噴火により、化石は灰の層に埋められ、非常に保存状態が良くなっている。時には軟組織も観察できるほどで、最後に食べた餌の内容まで分かることもある。
これらのサンショウウオの化石は、現代に生息するものと何ら変わりはない。何億年も同じ姿でいる両生類もまた、進化論が間違いであることを指摘するものである。

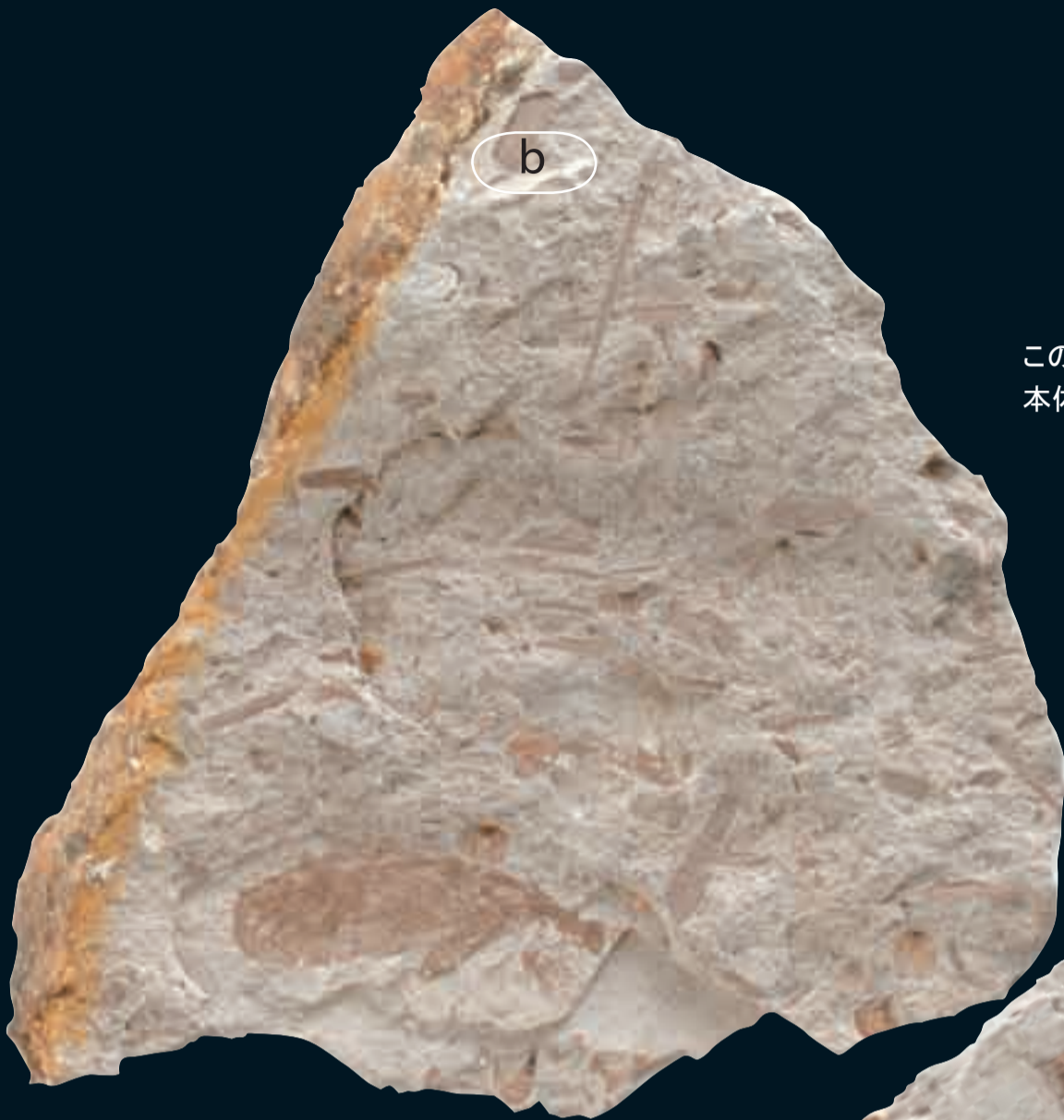
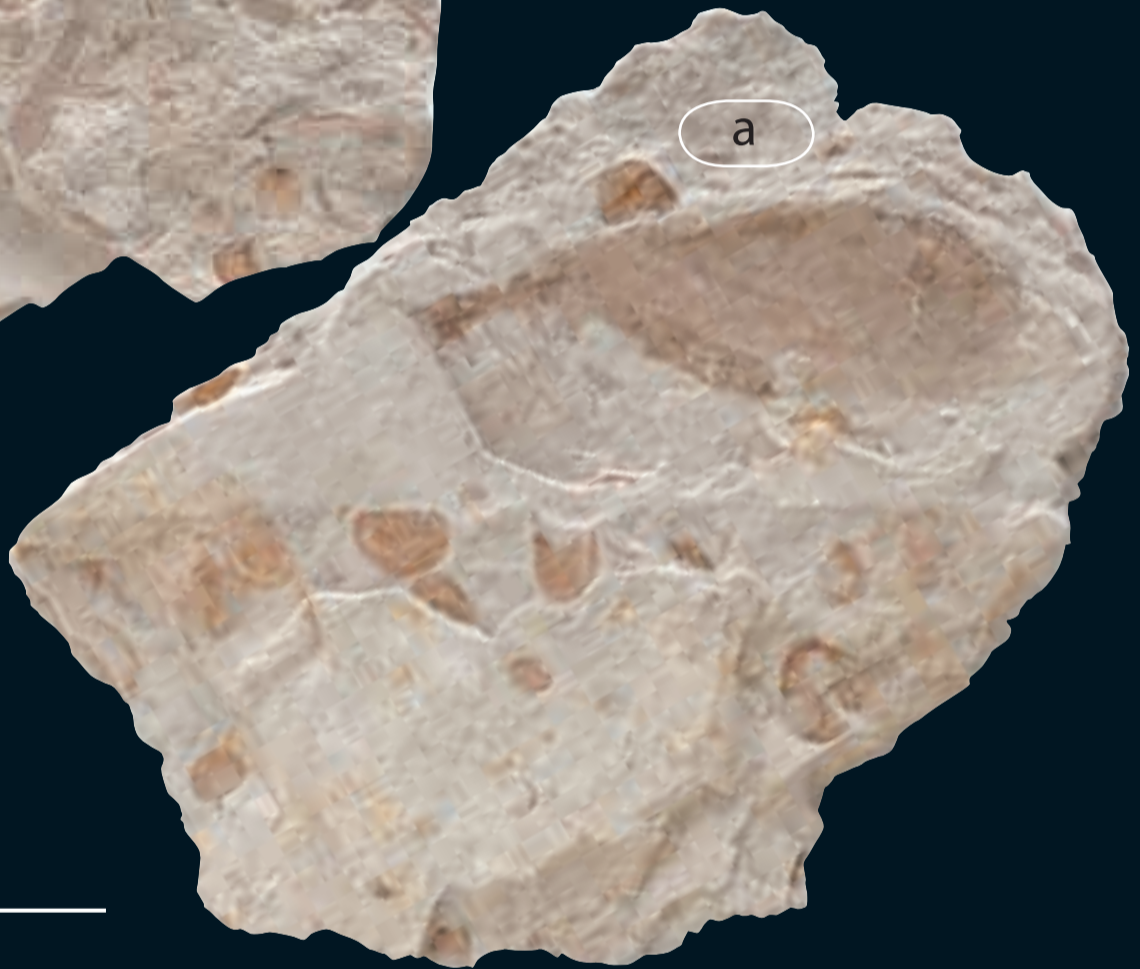
チョウザメ

年代：1億4400万年前～1億2700万年前
寸法：48センチメートル（19インチ）
地域：遼寧省北票上園鎮
層：九龍松累
并称之为層（熱河累）

これまでに、生物の進化を証明する中間の連結部分は見つかっていない。また、魚の“進化”についても同様である。すべての魚綱は、化石記録に突然のように現われており、祖先はない。無数の無脊椎動物の化石や、多くの魚類の化石が発見されているが、1つとして進化の中間段階の“連結部分”は見つかっていない。魚は常に魚だったという1つの例は、この1億4400万年前～1億2700万年前のチョウザメの化石である。

カメ

年代：1億4600万年～6500万年前
寸法：母岩：17.5センチメートル(7インチ) X 21センチメートル(8.3インチ)
地域：遼寧省凌源
層：宜興層
時代：白亜紀

科学的事実は、生物が進化したのではないことを解き明かすものだ。しかしダーウィニストはそれを無視し続けようとしている。写真の1億4600年～6500万年前のカメの化石は、現代のカメと全く同じものである。これもまた、ダーウィニストが目をそむけたくなるものの1つとして強調される。生物は何億年も変化していない。言い換えれば進化していないのである。

この化石は、2つの部分に分かれている、本体の部分と型が写った部分である。

カゲロウ

年代：1億5600万年前～1億5千万年前
寸法：体長：3.3 センチメートル(1.3インチ)；母岩：7.6センチメートル（3インチ）X 10センチメートル(4インチ)
地域：遼寧省北票
時代：ジュラ紀上部

他の昆虫と同様、カゲロウもまた、最初にこの世に登場したときからずっと同じ特徴を見せている。化石記録では、カゲロウが中間段階を通っていないことを明らかにするものである。1億5600万年前～1億5千万年前のカゲロウは、現代生息するものと全く同じである。

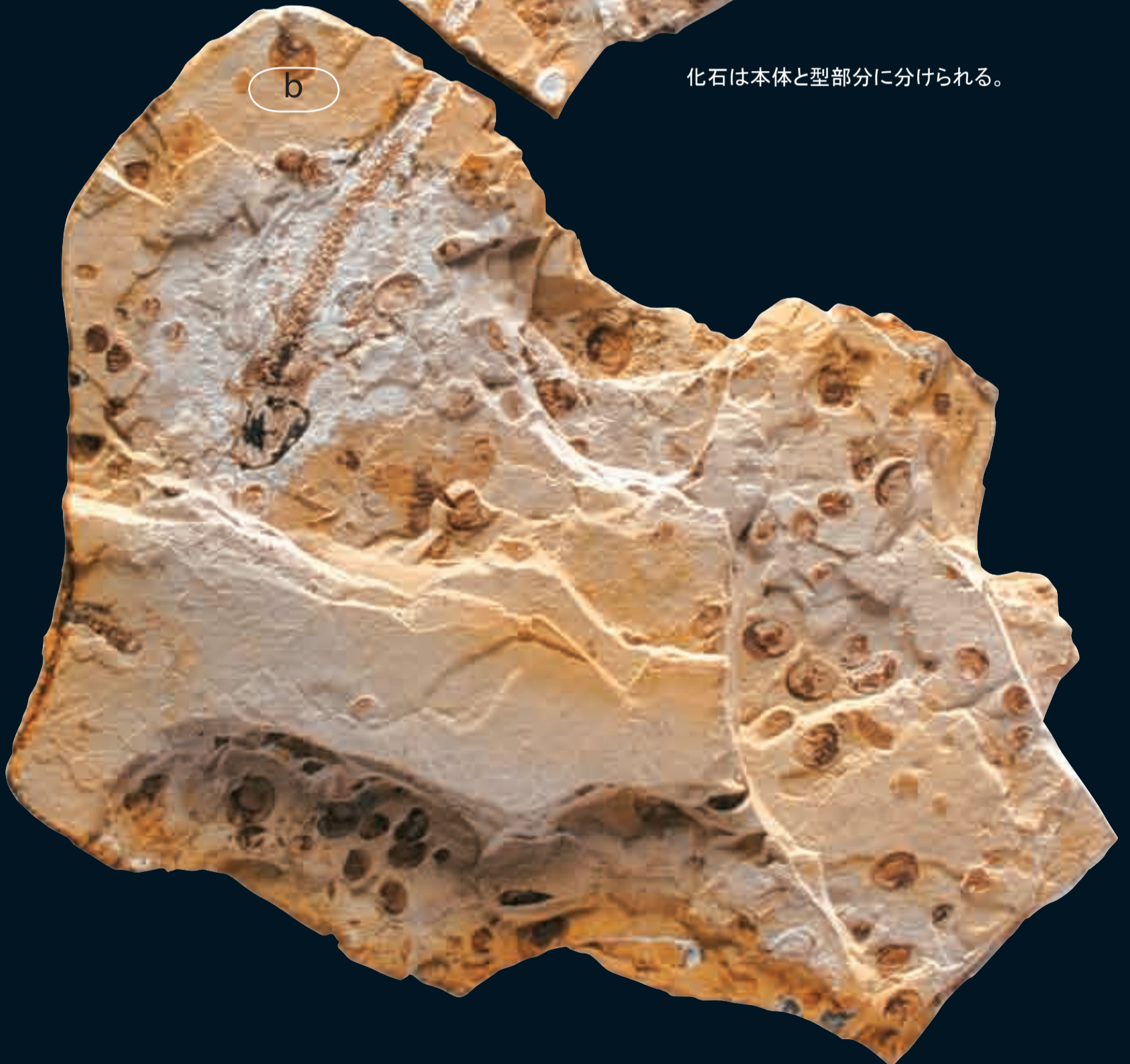
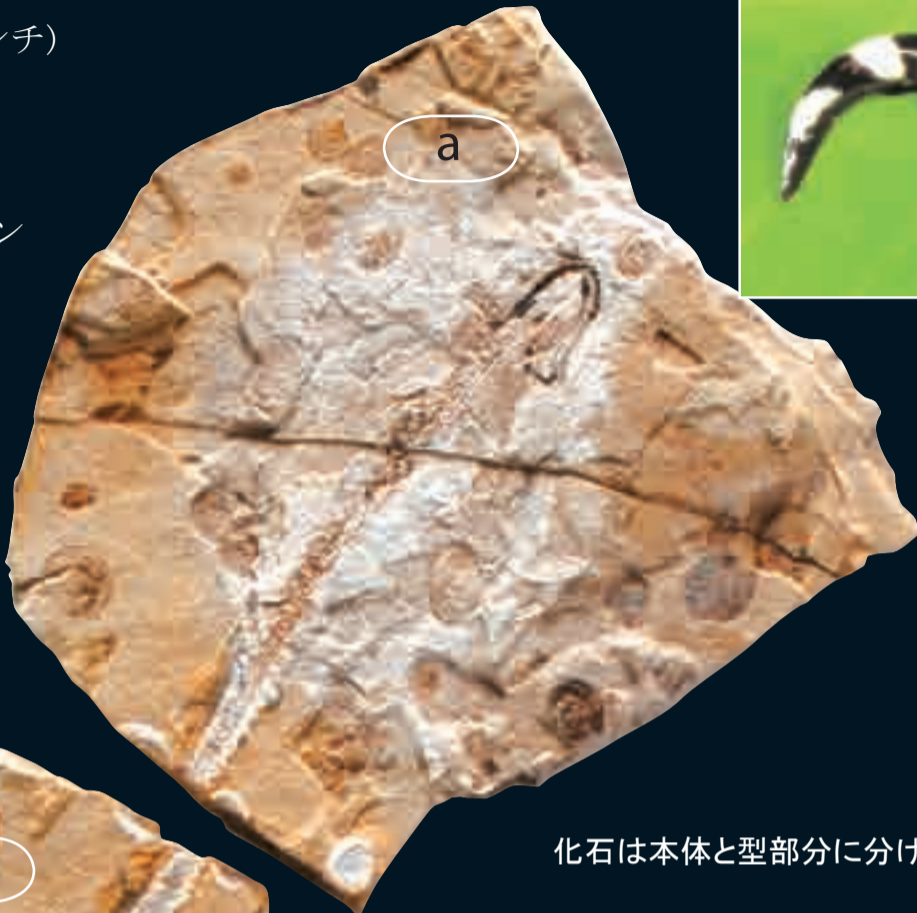
a
b

サンショウウオ

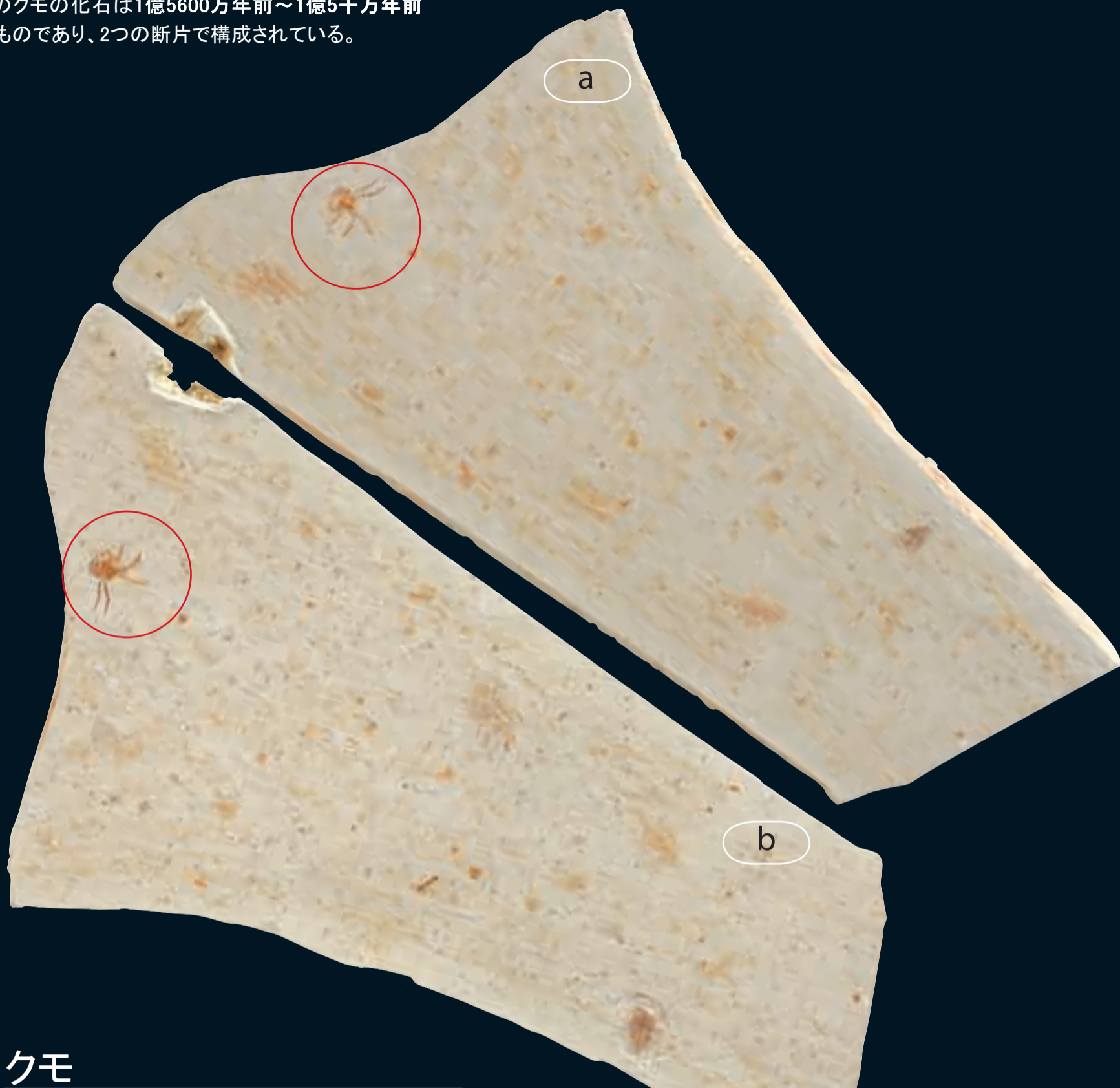
年代：2億800万年前〜6500万年前
寸法：4.5センチメートル(1.8インチ)
地域：遼寧省
時代：ジュラ紀〜白亜紀

写真の2億800年〜6500万年前のサンショウウオの化石は、サンショウウオが長い歳月にも関わらず全く変わることなしに存在していたことを示すものである。現代のサンショウウオと何ら変わらないこの化石は、ダーウィニストによって提唱されている進化のプロセスが存在しないものだという証拠となる。

化石は本体と型部分に分けられる。

a
b

このクモの化石は1億5600万年前〜1億5千万年前のものであり、2つの断片で構成されている。

a

b

クモ

年代：1億5600万年前〜1億5千万年前
寸法：1.5センチメートル(0.6インチ)（足から足まで)、0.7センチメートル(0.28インチ)（体長)
地域：中華人民共和国遼寧省北票
時代：ジュラ紀上部

最古のクモの化石として発見されているのは4億2500万年前のミズグモである。写真の化石は、1億5600万年前〜1億5千万年前のものだ。このような化石は、クモが何億年も同じであることを示しており、ダーウィニストは一貫性がなく、このような発見にも科学的な回答を提示できない。

b
a

ザリガニ

年代：1億2800万年前
寸法：1.）長さ109ミリメートル(4.3インチ)；母岩：158ミリメートル(6.2インチ) X 165ミリメートル(6.5インチ)
2.）長さ109ミリメートル(4.3インチ)；母岩：180ミリメートル(7.1インチ) X 160ミリメートル(6.3インチ)
地域：遼寧省凌源
層：宜興層
時代：下部白亜紀

ザリガニは、淡水に生息する甲殻類であり、ロブスターに似ている。長い歳月、この構造を保持している。1億2800万年前のザリガニと今日生息しているザリガニが同じであるという事実は、ダーウィニストを説明不能な窮地へと追い込むものだ。化石は、生命が神によって創造されたという真実を解き明かすものなのである。

a
b

トンボ

年代：1億5600万年前～1億5千万年前
寸法：翼幅：11.4センチメートル(4.5インチ)；体長：7.6センチメートル(3インチ)；母岩:16.5センチメートル(6.5インチ) X 13.7センチメートル(5.4インチ)
地域：遼寧省北票
時代：ジュラ紀上部

ヘリコプター製造の大企業が機体を設計する際、トンボの構造と飛行のメカニズムを分析したことがあるという。トンボの高度な飛行メカニズムは、1億5千万年前から存在する自身の羽根の構造を有効に使用するものである。何億年も前のトンボの化石は、ダーウィニストにとって説明不可能な状況であり、ダーウィニストの主張を否定するものである。

オオカミの頭蓋骨

年代：2千万年前
寸法：25 センチメートル（10インチ）
地域：アジア
時代：中新世

哺乳類の化石もまた、進化論を否定するものだ。写真のオオカミの頭蓋骨の化石は2千万年前のものである。オオカミは自らの構造を2千万年もの間保持してきている。これは進化論が無効だということを証明する。

鳥

年代：1億4千万年前
寸法：母岩：16センチメートル(6.3インチ) X 17センチメートル(6.7インチ)
地域：中華人民共和国遼寧省北票上園鎮
層：宜興層
時代：ジュラ紀上部、白亜紀下部

中華人民共和国で発見されるさまざまな鳥類の化石は、鳥類から他の生物から進化したのではなく、常に鳥類として存在してきたことを証明する貴重な証拠の1つとなっている。鳥は爬虫類から進化したというダーウィニストの主張を証明するだけの証拠はそろっていない。過去150年間で集められたすべての化石標本は、進化論者の主張を全く事実無根のものとするものである。写真の1億4千万年前の鳥類の化石もまた、この事実を証明するものである。

カメの幼体

年代：1億2千万年前
寸法：18センチメートル(7インチ)
地域：遼寧省北票上園鎮
層：宜興層下部
時代：下部白亜紀

「…脊椎動物と比べて良好な状態の化石を多く残しているにも関わらず、早期の化石が少なかったことから、非常に優れたこの生物目の起源は謎に包まれていた……カメとコチロサウルスの中間、カメが進化した(と仮定される)爬虫類は、全く発見されていない」(百科事典ブリタニカオンライン「カメ」より)

写真のカメの化石(1億2千万年前) は、カメが他の種類の生物から進化したのではないことを物語っている。進化の中間段階は経ておらず、何億年も同じままである。

チョウザメ

年代：1億5600万年前～1億5千万年前
寸法：22センチメートル(8.5インチ)
地域：遼寧省北票
層：九仏堂層
時代：ジュラ紀上部

チョウザメは、ヨーロッパ、アジア、北米に20種類存在する魚類に属する生物である。一生をほとんど海で過ごすが、川へ上ってくる季節もある。
1億5600万年前～1億5千万年前に生息していたチョウザメと、現在生息しているものとの間に全く違いは見られない。化石記録は、魚類の祖先は魚であり、鳥類の祖先は鳥であり、人類の祖先は人間であることを示すものである。言い換えれば、すべての生き物は独特で完璧な特徴を備えながらこの世に現われたことになる。全能の神が生物を創り給われたのである。

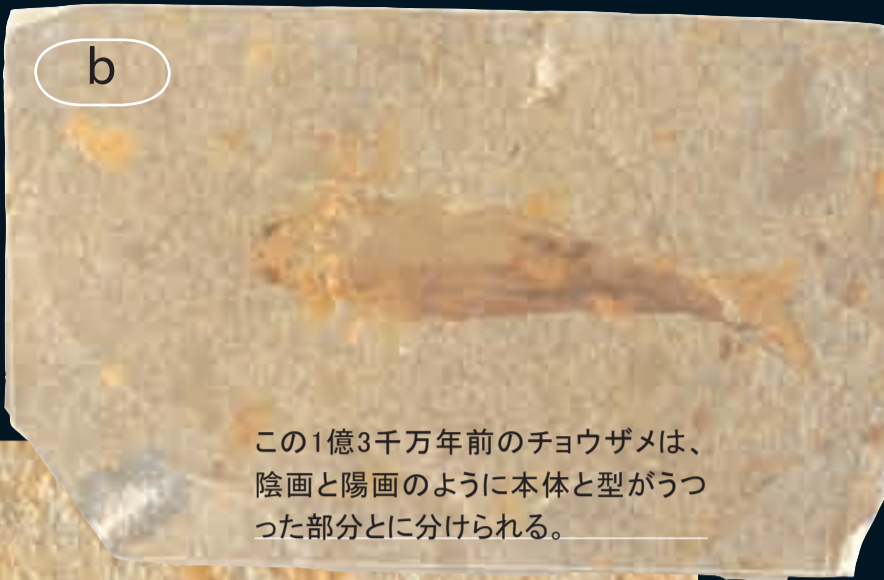
ウンカ

年代：1億5600万年前〜1億5千万年前
地域：遼寧省北票
時代：ジュラ紀上部

1億5千万年前から全く構造が変わっていない昆虫は、原始的な形態から高度なものへと進化するという主張を完全に否定するものである。ここに掲載されている1億5千万年前、1億2千万年前、そして現代のウンカは、すべて同じものである。

ワニ

年代：1億年前
寸法：76 センチメートル(30インチ)
地域：アジア
時代：白亜紀

ワニは、多くの化石を現代に残している。ワニの体は、完全な姿で突然に出現し(ワニの化石は1億4千万年前にさかのぼる)全く変化することなく、現代まで生き残っている。写真の1億年前のワニと現代のワニとの間に違いは全く存在しない。この化石はこの事実を強調している。

この1億3千万年前のチョウザメは、陰画と陽画のように本体と型がうつった部分とに分けられる。

チョウザメ

年代：1億3千万年前
寸法：11.6センチメートル(4.6インチ)
地域：遼寧省
時代：白亜紀

1億3千万年前のチョウザメは、1億4600万年前または1億2千万年前のチョウザメ、または現代のチョウザメと同じ機能を有している。何億年もの歳月にも関わらず、チョウザメは、進化の中間段階を経ていない。よって進化論の主張を退けることとなるのだ。

a
b

この一対の化石は、5400～3700万年前のものである。

a

カンダイ

年代：5400万年～3700万年前
寸法：10センチメートル(4インチ)
地域：中華人民共和国、湖北省
時代：始新世

現在でも北大西洋沿岸に生息する魚である。他の生物と同様、魚もまた何万年もの間変化していない。言い換えれば、進化していないのである。5400万年～3700万年前のカンダイは現代のカンダイと何ら違いはない。

b

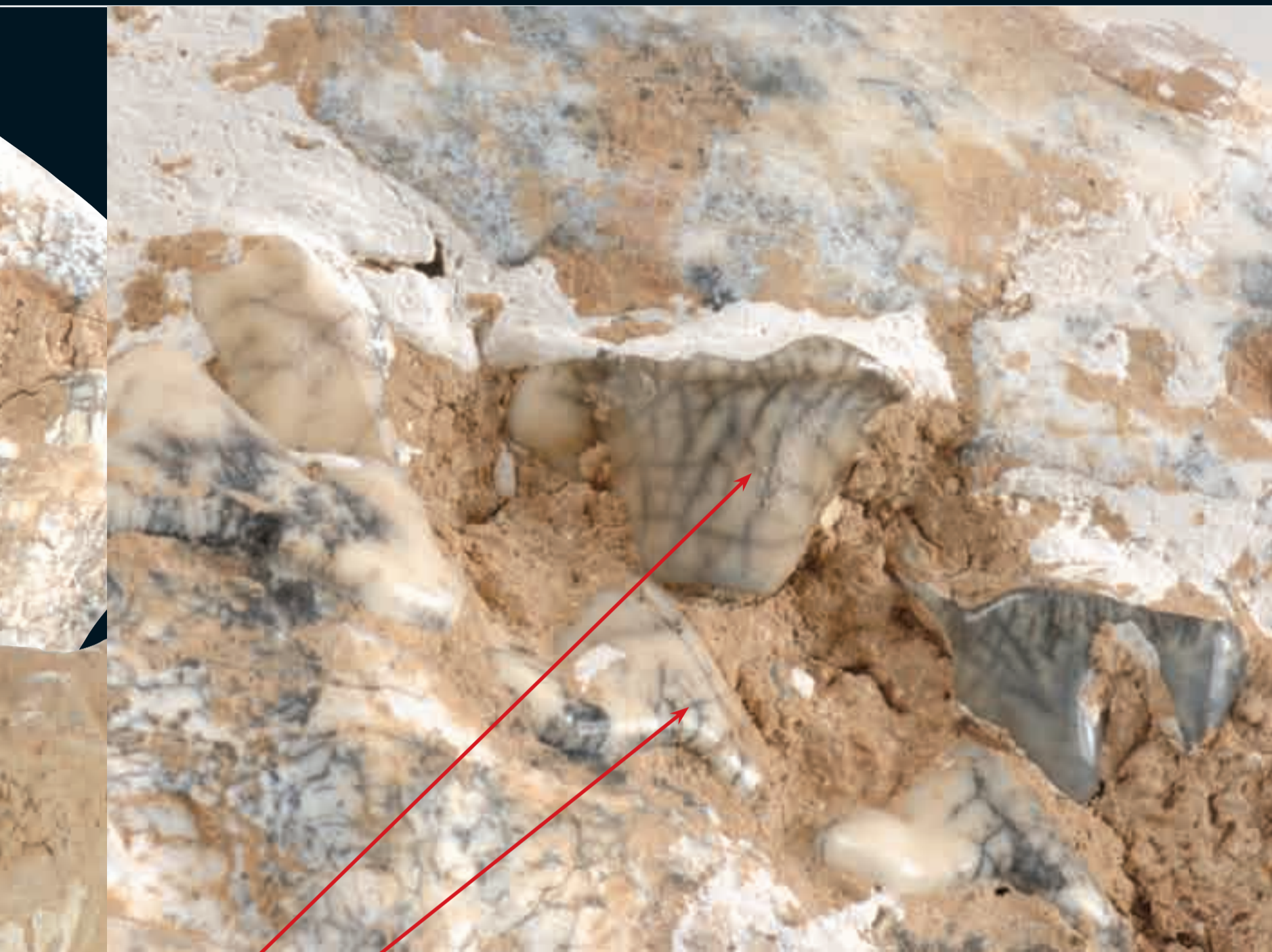
カメ

年代：1億5千万年前
地域：中華人民共和国
時代：ジュラ紀

生物が1億5千万年前の構造と同じ構造を保持できるなら、これは生物が漸次的に長い時間をかけて進化したというダーウィニストの主張は非科学的だということになる。何万年もずっとそのままの姿を保ち続けているカメは、進化したのでなく神によって創造されたのである。

ハイエナの頭蓋骨

年代：1千万年前～500万年前
寸法：20センチメートル(8インチ)
地域：中華人民共和国甘粛省
時代：中新世上部

現代のハイエナを含むハイエナ科(Hyaenidae)の動物には4つの種類がある。ハイエナは80匹ほどの群れをなして生活する。
写真のハイエナの頭蓋骨の化石は、1千万年前～500万年前のものであり、何万年もハイエナが全く変わっていないことを示している。

チョウザメ

年代：1億4600万年～6500万年前
寸法：20センチメートル(7.7インチ)；母岩：23センチメートル(9インチ) X 29センチメートル(11.5インチ)
地域：遼寧省北票上園鎮
層：九龍松累、并称之为層(熱河累)
時代：白亜紀

他の種類の生物と同様、化石は、魚が突然すべての機能を備えたまま解剖学的に完璧な姿で出現したことを示している。その一例が、この1億4600万年～6500万年前のチョウザメの化石、現代のチョウザメと全く同じものである。

ゴキブリ

年代：1億2500万年前
寸法：26ミリメートル(1インチ)；母岩：85ミリメートル(3.3インチ) X 77ミリメートル(3インチ)
地域：遼寧省朝陽
層：宜興層
時代：下部白亜紀

ゴキブリは、昆虫綱に属する節足動物である。最古の昆虫の化石は、デボン紀(4億1700万年前～3億5400万年前)にさかのぼる。しかし、それよりも早い年代の石炭紀(3億5400万年前～2億9千万年前)には、たくさんの種類の昆虫が突然出現している。例えば、ゴキブリは今日のような完璧な体構造を持ちながら突然出現している。アメリカ自然史博物館のベティ・ファーバー(Betty Faber)によれば、3億5千万年前のゴキブリの化石は、今日のゴキブリと全く同じであるという。(M. Kusinitz, Science World, 4 February 1983, p. 1.)
写真の1億2500万年前の化石は、ゴキブリが何億年も進化していないことを示すものである。

カゲロウの幼虫

年代：1億5600万年前～1億5千万年前
層：宜興層
地域：遼寧省
時代：ジュラ紀後期

寿命の短い成虫のカゲロウは、数日間しか生きることが出来ない。ほんの数時間の命しかないものもいる。写真の化石はカゲロウの幼虫である。現代のカゲロウと1億5600万年前～1億5千万年前のカゲロウとの間には全く違いがない。

トラの頭蓋骨

年代：2千万年前
寸法：29センチメートル(11.5インチ)
地域：アジア
時代：中新世

トラはネコ科(Felidae)の動物である。トラの80%はインド亜大陸に生息している。
この化石のトラの頭蓋骨は2千万年前のものであり、現代に生息するトラと同じ特徴を備えている。何千万年もの間、骨格はずっと同じままであり、これは進化論を否定するものである。

サイの頭蓋骨

年代：2千万年前
寸法：51センチメートル(20インチ)
地域：アジア
時代：中新世

サイ科(Rhinocerotidae)の動物であるサイは、主にアフリカやアジアに生息しており、何千万年もの間変化していない。写真の2千万年前のサイの頭蓋骨は、サイが何千年もの間変わらぬ形を保持しているのを示している。

カゲロウの幼虫

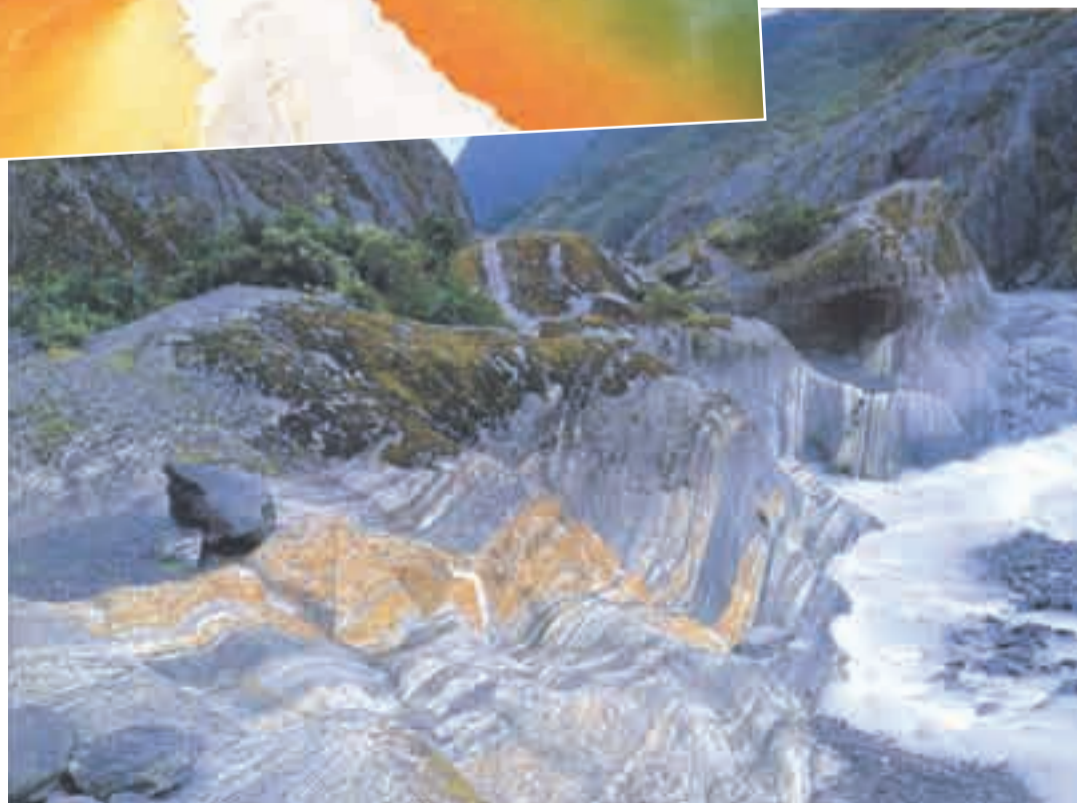
年代：1億5600万年前～1億5千万年前
層：宜興層
地域：遼寧省
時代：ジュラ紀後期

現代に生息するカゲロウの幼虫は、1億5600万年前～1億5千万年前のものと全く同じである。これは、進化論のシナリオが科学に基づいたものではないということを示すものである。

ニュージーランドで発見れた化石標本

ニュージーランドの化石の多くは、海洋生物のものである。非常に状態の良い標本の多数は海洋生物門に属する。白亜紀の化石も頻繁に発見されている。その他稀ではあるがカンブリア紀、オルドビス紀そして二畳紀のものもある。動物の化石に加え、ジュラ紀の植物の化石も多数発掘され、今日まで全く変化することなく生き延びている。

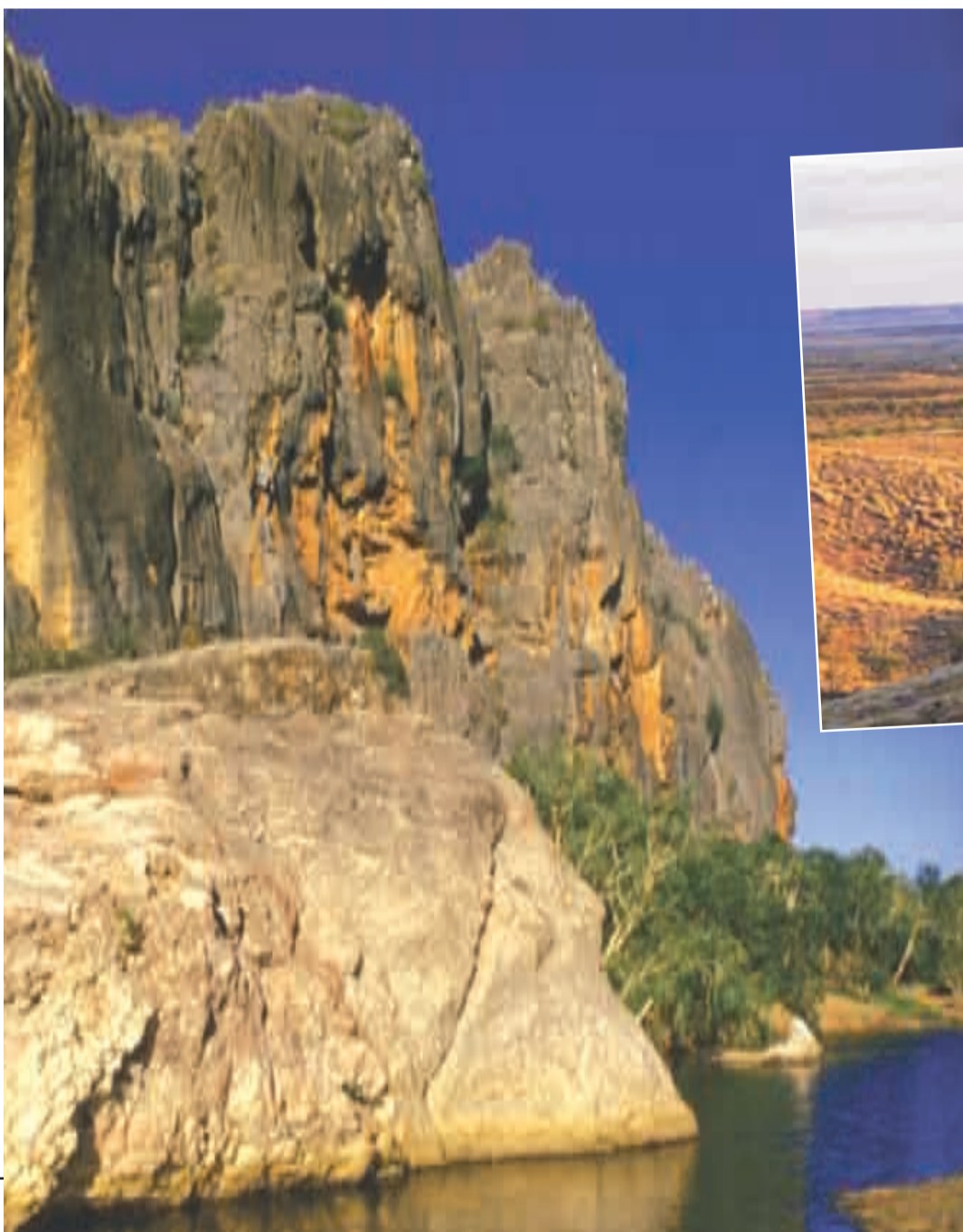
ニュージーランドの化石のバラエティは、他の化石記録が暴くものと同じことを示している。進化論を支持するような化石は1つとして発掘されていないのだ。発掘のすべては生物が複雑な構造を備えながら突然に出現していることを示すものである。言い換えれば、生物は神によって創造されたのであり、何億年という歳月にも関わらず全く変わっていない。進化などしていないのである。

ニュージーランド、ロトルアの温泉に生息しているさまざまな種類のガは、地球の歴史が始まる頃から全く変わっていない。

写真は、氷河で磨耗したニュージーランドの頁岩である。頁岩は、大陸の癒着の際に地中の奥深くで形成された変成岩である。

オーストラリアで発見された化石標本

オーストラリアには、多くの化石層があり、その1つには国連が保存地域としている場所がある。

オーストラリアと南極大陸は、巨大大陸ゴンドワナ大陸から4千万年～3千万年前に切り離されたとされている。気候の変化が長い間にたて続けに起こったことで、多くの化石の種類がオーストラリアで見つかることとなった。この国の化石層で見つかった多くの化石は、生物種の多様性を理解するために重要なものである。リバースレイ、ブラフ・ダウン、マーゴン、ライトニング・リッジ、ナラクートは、化石層で有名な土地の一部である。

新生代(6500万年前～現代)の保存状態の良好な動物の化石が多く多種類出土している。小さなカエルからカンガルーまでたくさんの種類がこの化石層で発見されている。さらに、脊椎動物の歴史に重大な情報をもたらす、古生代(5億4300万年前～2億5100万年前)の海洋生物の化石も発見されている。

オーストラリアの生物は独特である。巨大な爬虫類や有袋類が多く見られ、植物は厚くて粘着性のある葉を持ち、旱魃にも耐える構造となっている。

地質年代は3億5千万年前となるウィンドジャナ渓谷は、北オーストラリアに位置している。この層はかつて海底にあったとされており、デボン紀の化石を多く含んでいる。

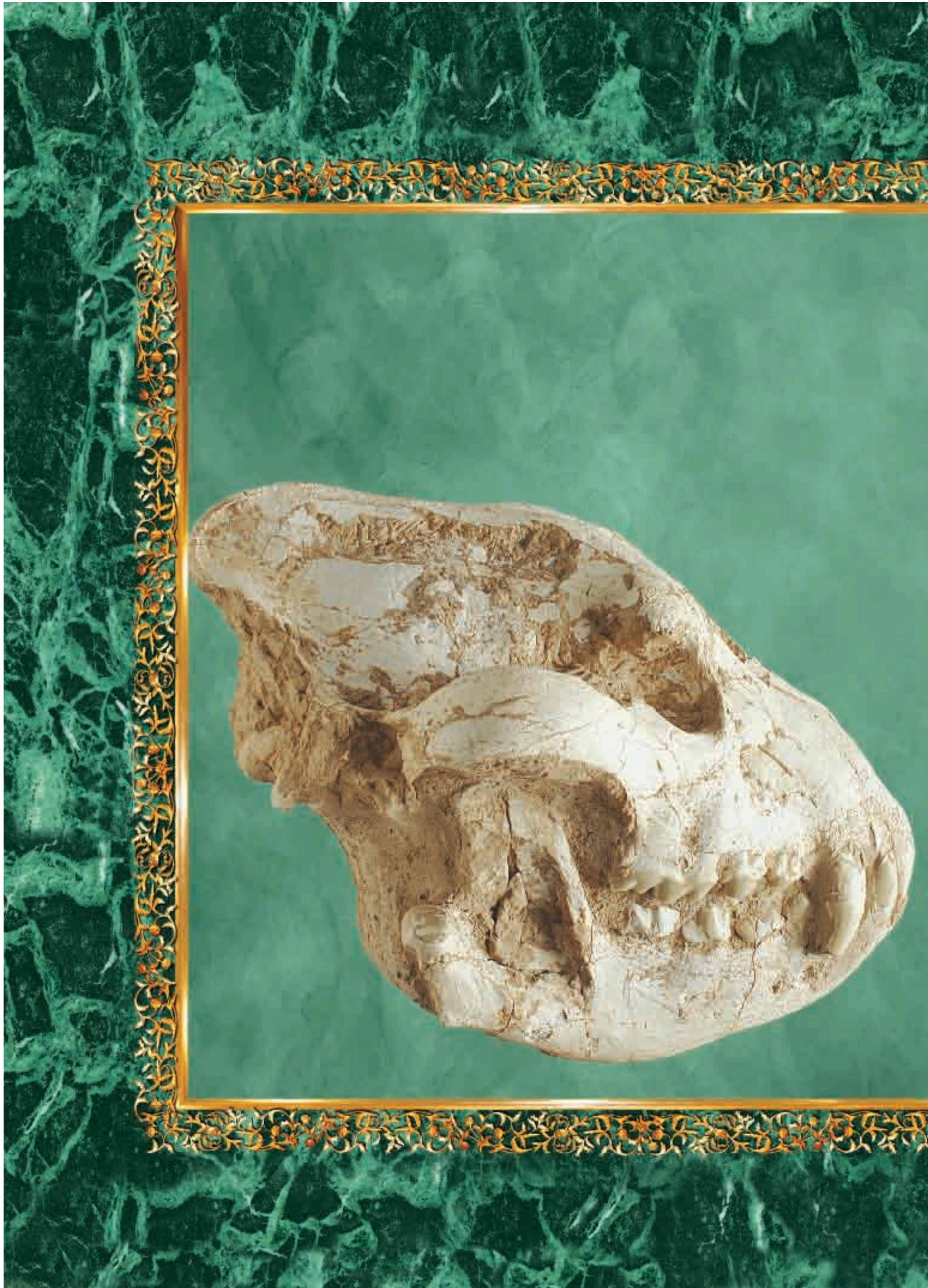
ツクシ

年代：2億4800万年〜2億600万年前
地域：オーストラリア
時代：三畳紀

2億年以上も前のツクシと、現在のものとの間には、ほんの少しの違いも見られない。仮に、生物がその全体の構¥u-28640 造を保持したまま、姿をまったく変えずに2億年も種を存続しているならば、それは進化しているなどとは口が裂けても言えない。この不可能¥u24615 性は、すべての生物種と種にあてはまる。生物の歴史を見せてくれる化石は、進化論を否定するのだ。

カニ

年代：2300万年～500万年前
地域：ニュージーランド
時代：中新世

カニが常にカニであり、進化していないという証拠は、この2300万年～500万年前の化石である。この標本と現代のカニは同じ特徴を持ち合わせている。これは生物が神によって創造されたということを示すものである。

頭蓋骨の化石

頭蓋骨の化石がダーウィニズムに与える打撃

人類と類人猿は、共通の祖先から進化しているとされているダーウィンの論文は、科学的根拠に基づいておらず、最初に提唱されたときから、19世紀中ごろから150年ほど人類の進化を支持するさまざまな努力が注がれたが、進化論は無効なことが証明された。

採取された化石はすべて、類人猿は常に類人猿であり、人類は常に人類であり、祖先はいないということを証明するものであった。

ダーウィニストの強烈なプロパガンダと学術界に対する威嚇行為にも関わらず、多くの科学者は真実を述べる勇気を持っていた。その一人は、ハーバード大学の古生物学者ディビッド・ピルビーム(David Pilbeam)である。彼は人類の進化は科学的データに欠けると述べた。

> 他の専門分野の賢い科学者を連れて来て、その人に今ある貧弱な証拠を見せたなら、彼は「とるに足る証拠がない」と間違いなく言うだろう。1

古生物学の本、『The Bone Peddlers』の著者ウィリアム・フィックス(William Fix)は、人類の進化と呼ばれるものがどんなに科学的証拠に乏しいかを語っている。

> 周知のとおり、今日多くの科学者たちと普及者たちが人類の起源は"疑いようもない"と告げているが、これも証拠がありさえすればの話である. . . . 2

化石記録によって与えられた落胆に直面し、さらに証拠の欠落から、進化論者たちは偽の頭蓋骨を何度も再建したり、偽物であると立証された頭蓋骨に対して思慮をめぐらすことしかできなかった。しかし、研究では、類人猿の頭蓋骨と同様、その他の生物と異なる過去に存在した人種の頭蓋骨も、生物がすべての特徴を持ちながら存在し、歴史を越えても変わらないことが解き明かされている。

これは、生物はいかなる進化のプロセスも経ておらず、全能の神によって創造されたということである。次のページの例でもまた、カエル、トカゲ、トンボ、

化石を研究した、ありとあらゆる進化論者たちは自論に基づいたシナリオを考えついたが、実際それは科学的価値を持たないものであった。

ハエ、ゴキブリなど、多くの生物の他の組織や四肢、頭などが全く変化していないことが明らかとなっている。鳥類や魚類の頭部もまた同じままなのである。ライオン、オオカミ、キツネ、サイ、パンダ、トラ、ヒョウ、ハイエナは創造された瞬間から、同じ頭部の構造を有し、同じ特徴を何億年という歳月の間保持してきたのである。

この変化していない生体組織は、生物の進化論の主張を否定するものである。

他の生物に共通する同一性は、人類にも当てはまる。長い歳月をかけても何千何万もの生物においても頭部の構造の変化は発生していないのだ。人間の頭蓋骨において進化的な変化は全く起こっていない。魚

2千万年前の化石化したトラの頭蓋

2千万年前の化石化したサイの頭蓋

歴史全体を通して、あらゆる生物種の頭蓋には何の変化も全く起こっていなかった

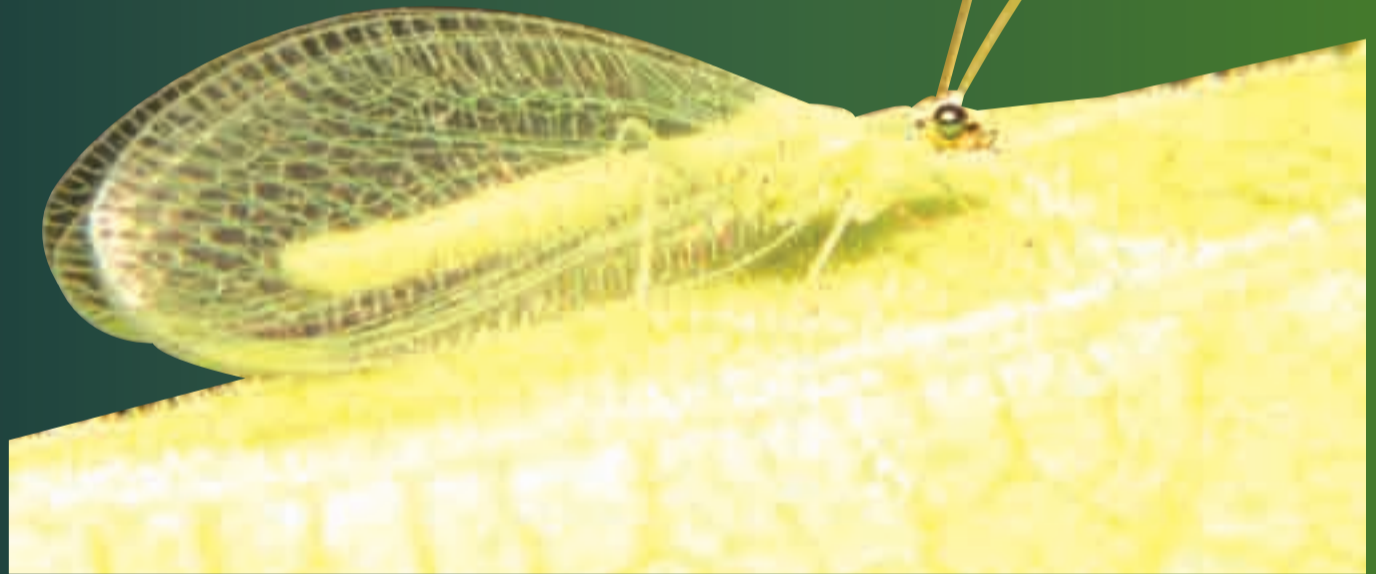
他の組織や機能と同様、数多くの生物種の頭蓋や頭部の構造は、何万年という時を経ても全く変わることはなかった。どんな生物種の頭蓋にも進化的な変化は全く見られなかった。長い年月が経っても進化的な変化なく同じ姿を有している他の種と同じように、人間も全く進化的な変化には遭遇していないのだ。同じ解剖学的特徴を備えながら、人間は常に人間であり続けてきたのだ。ここに証拠として提示されている頭蓋は、絶滅したサルのものか、現在は存在しない人間のものだとされ、進化論を支持する証拠として提出されたものだが、そのどれも、進化論の根拠としては認められなかった。

5400万年～3700万年前の
ボウフィンの化石

5千万年前のカエルの化石

1億800万年前～9200万年前の
バッタの化石

3千万年前のウサギの化石

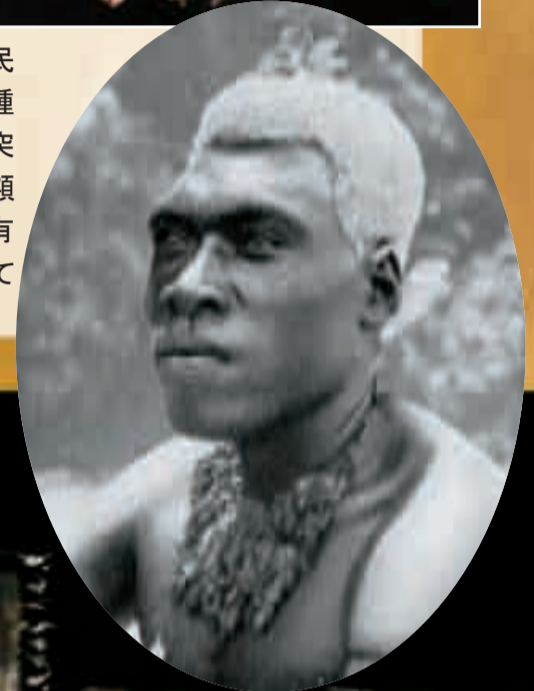
4800万年前～3700万年前のニシンの化石

1億2500万年前の
脈翅類の化石

4800万年前～3700万年前のスズメバチ

5400万年前～3700万年前
のスズキの化石

がずっと魚だったように、鳥がずっと鳥として存在してきたように、爬虫類が爬虫類として存在してきたように、人間もまた、常に人間として存在し続けてきた。進化論者が継続的に主張するところの生物の組織や生体構造が原始的なものから高度なものへと"進化"するなどということは実際には起こっていない。

進化論者は人間の進化について語ると同時に発掘した頭蓋骨の資料を基に、容積、眉の突出、頭蓋の構造などを表した独自の進化の系譜と系図を作り出してきた。しかし、これらの構造的な違いは、決して進化論の証拠とはなりえない。一部は過去に生存していた異なる人種の頭蓋骨であるが、残りのものは類人猿の絶滅種のものであるからだ。異なる人種の頭蓋骨が異なることは全く自然なことである。異なる魚類は異なる頭部を有している。たとえば、ウミマスの頭部の形はウナギとは非常に異なるが、両方とも魚類である。

写真のマレーシア原住民のような現代に生きる人種の中には、大きな眉の突出部分や後退している額など、ホモエレクタス特有の頭蓋骨の特徴を有している。

人種間での頭蓋骨の相違

黒人やイヌイット、ドイツ人の頭蓋骨と日本人の頭蓋骨が違ったとしても、それは全く自然なことである。これらの違いは1つの人種が他の人種よりも発達しているということを仮定するものではなく、進化の証拠として使用するなどはもってのほかである。この違いは単に神の創造が多様であり、優れていることを反映しているに他ならない。

ベンガルの中年男性

15世紀のペルー原住民

太平洋南西部のソロモン諸島で1893年に亡くなった男性

25歳から30歳とされるドイツ人男性

35歳から45歳とされるザイール人男性

35歳から40歳とされるイヌイットの男性

歴史の中を生き抜いた異なる人種は、進化論の証拠とはならない！

ネアンデルタール人(Homo neanderthalensis) は10万年前にヨーロッパに現われた人種であり、およそ3万5千年前まで存在した、または他の人種と混ざり合い、同化してしまったとされている。ネアンデルタール人と現在の人類の大きな違いは、骨格がより逞しく、頭蓋骨の平均的なサイズが大きいという点である。科学的な発見では、ネアンデルタール人は知識と文化をもったしっかりとした人種であり、現在のわれわれと全く変わらないとされている。クロマニョン人もまた、3万年前に存在した人種と言われている。ドーム型の頭蓋骨を有し、広い額をしている。頭蓋骨の容積1600c㎥は、現在の人類の平均よりも高くなっている。厚い眉が頭蓋骨に出っ張っており、頭蓋骨の後頭部もまた大きく出ている。これはネアンデルタール人の特徴と同じである。
クロマニョン人とネアンデルタール人にみられる身体的特徴は、現代の人類にも同じように見られる。アメリカ人とイヌイットとの違いのように、またはアフリカ人とヨーロッパ人との違いのように、どれも別の人種よりも優れているということは証明できず、絶滅した人種の身体的特性は、特に原始的でも類人猿的でもない。これらの人種は、他の人種と融合して、理由は不明だが、歴史からその姿を消した。しかし彼らは決して“原始的”や“半類人猿”などではない。彼らは、完璧な人間として存在していたのである。

同様に、異なる人種では、頭蓋骨の構造も異なってくる。ピグミー族とイギリス人、ロシア人、中国人、アボリジニ、イヌイット、黒人、日本人では、額、目のくぼみ、眉部分の突出、頭蓋骨の容積が異なる。しかし、違いがあるからといって、1つの人種が他の人種へと進化したわけではないし、ましてや、特定の人種が他の人種よりも“より原始的”または“より高度”ということにはならない。

アボリジニが他の人種と交わらない限りは、アボリジニの特徴は常に同じように残る。どんな長い歳月を経ようとも、異なる機能を習得するようには、進化しないのである。頭蓋骨が大きくなったり、解剖学的に異なる特徴が出現することはないだろう。

たとえば、現代のマレーシア原住民は、眉の突起部分が大きく額は後退している。ホモエレクトスに固有な特徴であり、進化論者はこれを“原始的”と呼んだ。仮に進化論者の示唆が真実であるなら、これらの最近類人猿から進化したばかりのマレーシア原住民は構造も姿かたちも未発達の人間となるはずである。しかし、この事例は全くこれには当てはまらない。ホモエレクトスの頭蓋骨の解剖学的特徴が今日にも見られるということは、ホモエレクトスは原始的な人種ではないということになる。また、進化論の“人間の系譜”は単なる嘘なのである。

簡単に言えば、過去に存在した一部の人種に異なる解剖学的な構造がみられることは、進化の証拠とは

なりえない。解剖学的な違いは異なる人種間の異なる年齢にも見られる。アメリカ人と日本人、ヨーロッパ人とアボリジニ、イヌイットと黒人、ピグミーの頭蓋骨は、同じものではない。さらにどの人種も他と比べて原始的でも高度でもない。

何千年後かに、科学者がそれぞれ21世紀に生息していた身長190 cmのアメリカ人と身長160 cmの日本人の頭蓋骨を比べたとしたら、違いを観察するのは明らかである。サイズが異なるのだから。

仮に、これらの違いに基づいて、空想の進化のプロセスにおいては日本人がヒト科の動物では原始的で、アメリカ人がより高度であると主張したなら、彼の解釈は事実から程遠いものとなるだろう。

さらに、頭蓋骨のサイズは人間の知能や技術の計測手段とはなりえない。十分に発達した体を有しているが、精神的な能力が制限されている人間は多く存在する。同様に、非常に知能に優れてするが、体はもちろんのこと頭蓋骨も他の人よりも小さい人も存在する。サイズだけで人種の頭蓋骨に序列をつけて進化の系譜にあてはめるのは、全く科学的な価値がない。そのような系譜は事実を反映しないからである。一般的にも知られるように、頭蓋骨の容積の違いは、知能や技術の違いとは結びつかない。

アボリジニが他の人種と異種交配しない限り、アボリジニはずっとそのままでい続けるだろう。たとえばアボリジニがヨーロッパ人に将来なるということは考えられない。どんなに長い歳月がかかったとしても、人種は全く別の特徴を得るということはできないのである。アボリジニの頭蓋骨の大きさは、今日のものよりも大きくなることはない、そして他の解剖学的特性をもつものに"進化"することはないのだ。

人生を通じて激しい精神活動に関与する人の頭蓋骨も成長することはない。精神的にさらに有能となるだけである。知能は脳の容積によって左右されることはないが、脳内の神経やシナプスの組織によって左右されるのである。[3]

類人猿は人間の真似はすれど、決して人間には進化しない

ダーウィニストは、類人猿の人まねの能力は類人猿が人間に進化する証拠だと言っているようだ。真実、類人猿は目に入ったジェスチャーや素行を真似する能力がある。訓練により、物の形や色の違いを当てたり、刺激に対して知的に反応できるようにもなる。しかし、これがすなわち長い時間がたてば類人猿が人間に進化することにはならない。そうであれば、イヌ、ネコ、ウマなどの知的だとされているすべての動物は、やがては人間へと進化するはずである。

例えば、オウムを訓練すれば、四角い形と丸い形、青と赤を区別することができ、正しい位置に物を入れ替えることができるようになる。さらに、オウムには、人間の模倣をしてしゃべる能力がある。これはサルにはできない。この場合は、ダーウィニストの非合理的な主張によれば、オウムが知的な人間に進化する可能性もあるということになる。

キツネもまた、知的な動物として知られている。ダーウィニストの非合理的で非科学的な論理によれば、知的度に応じてキツネの頭蓋骨の容量は次第に大きくなり、やがては人間のように知的で自覚的な動物になるのだという。しかし、こういった変態は実際には起こっていない。キツネは昔からずっとキツネのままである。

学問的なキャリアを持つ人がこういった非合理的な主張を科学的用語やラテン語を交えてまじめに説明しようとしているのを見るのはまことに滑稽である。どんなに類人猿の精神的な能力や手先の器用さが発達しようとも、または周囲の真似をしようとも、将来人間になることはできない。類人猿は昔からずっと類人猿であり続けてきたし、これからもずっとそうなり続けるだろう。進化論者たちがどんなに激しく議論したとしても、真実は明らかである。人類は、進化のプロセスを経て存在しているのではなく、神によって、知識と自覚性と道義心を与えられ、神により創造

されたのである。

人類は人類として創造されたのであり、創造の時点からすでに人類であった。これは学問と科学が私たちに教えてくれた真実なのである。

人類進化論のお話は、全くの欺瞞である

地質学年代を通して、6千種類以上の類人猿が生息し、その多くは絶滅してしまった。今日では、この地上にわずか120種の類人猿が残るのみである。しかし、この約6千の絶滅した類人猿は進化論者に豊富な情報源を与えてくれた。彼らは絶滅した類人猿種と人類の頭蓋骨を小さなものから大きなものへと順番に並べることで、それに意味を与えようと人類進化論のシナリオを作り上げ、偏見に満ちたコメントを主張した。

この方法を用いて、進化論者たちは長い年月をかけて進化論の支持者を得ようと試み、人を騙してきた。しかし、今、ここで彼らが取り入れてきたその方法は、もう使用できないことを自覚しなくてはならない時がやってきたようだ。

進化論者が多くの人を納得させるために使用した、人類進化のシナリオは真実だという捏造証拠の一部をご紹介しよう。

1. チャールズ・ドーソン(Charles Dawson)によって1912年に発見された、50万年前のピルトダウンマンは、人類進化の証拠として提示されたものである。しかし、その“化石”が見つかってからおよそ40年後に、科学者が再度検証した結果、驚くべき捏造が明るみに出る。ピットダウンマンの頭蓋骨は500年前の人間のものであり、その下顎の骨はつい最近の類人猿のものだったのだ。歯は特別に配列され、顎につけられていた、そしてその関節部分は人間にみせかけようと削られていた。これらの骨の断片は重クロム酸カリウムで着色され、古めかしく見せかけられていたのだった。

2. 1922年、アメリカ自然史博物館のヘンリー・フェアフィールド・オズボーン(Henry Fairfield Osborn)は、鮮新世

虚構

歴史のどんな時点でも、原始人が存在していたことはありえない

新聞・雑誌、学校の教科書などに出てくるような、この絵のような半類人猿、半人は全く存在していなかった。類人猿はいつの時代も類人猿であり、人間は常に人間であった。この絵は進化論者たちの間違った考えによって生み出されたものであり、実際の歴史には起こらなかったことである。

の臼歯の化石を西ネブラスカのスネークブルックの近くで発見した。この歯は人と猿の両方に共通の特徴を備えているとされ、新たな人種である“ネブラスカ原人”のニックネームが与えられた。このたった1つの歯を元に、ネブラスカ原人の頭部や体が推測され再構築された。さらに、ネブラスカ原人には家族までが想像され挿絵にまで描かれたのだ。しかし、1927年、骨格の別の部分が発見され、これらの新たな断片から、その歯は人のものでも猿のものでもなく、プロステノプスと呼ばれる絶滅種のアメリカ豚だということが判明した。

3. ラマピテクスは、進化論の欺瞞の中でも最も大きくて長く存在したもので知られている。この名前は約1400万年前に猿が人間へと進化する最初の分岐点であるとされた1932年にインドで発見された化石に与えられた。この化石は進化論者の根拠のある証拠として50年以上も使用されてきた。しかし、その後の分析により、ラマピテクスの歯の特徴は、現代のチンパンジーに酷似していることが明らかになった。例えば、ゲラダヒヒ(Theropithecus galada)は高山に棲むエチオピアのヒヒであり、門歯と犬歯を有していおり、他の類人猿やラマピテクスのような短い顔面をしている。そして“人類は祖先を失った”のだ。ラマピテクスはただの絶滅種のオランウータンだということが発表された。

4. 1984年7月、ほとんど完璧なほど化石化された紛れもなく人間の骨格がケニアのトゥルカナ湖で発見された。トゥルカナボーイと名づけられたこの化石は、12歳くらいの年齢であり、成長すれば183cmほどの身長にもなろうという人間であった。骨格の直立した構造は今日の人間と何ら変わるところはなかった。この骨格の背の高く細長い骨格は、完全に現在熱帯地域に生息する人類と同じものであった。リチャード・リーキー(Richard Leakey)は、この少年はこの喧騒の現代では見過ごされてしまったかもしれない存在だとしている。[4] この少年の骨格は160万年前の地層から見つかったものである。年代で分類され、新たなホモエレクタスを代表するものと考えられた。トゥルカナボーイは進化論者による偏見に満ち、宣伝的表現として使われた化石の典型的な例である。

最初のラマピテクスの化石は、不完全な2つの断片に分かれた形であった(下を参照)。しかし、進化論たちは、この1つの顎の骨からすぐにフィクションに富んだ作り話とラマピテクスの絵を描きだした。その後、1つの顎の骨から種と生息環境が再建され、この生物は実際はただの類人猿だということが分かった。ラマピテクスは静かに人類の家計図から姿を消した。(David Pilbeam, “Humans Lose an Early Ancestor,” Science, April 1982, pp. 6–7.)

虚偽

源 空想の根源 空想の根源
1つの顎の骨

5. “ルーシー”は1974年に人類学者ドナルド・ジョハンソン(Donald Johanson)が発見した化石に与えられた名前である。多くの進化論者が、ルーシーが人間とヒト科の動物の移行型であると主張した。しかし、その後のこの化石の分析において、ルーシーはアウストラロピテクスで知られる類人猿の一種にしかすぎないということが明るみにでた。アウストラロピテクスの脳のサイズはチンパンジーに似ている。頭蓋骨の細かい部分や、目が寄っている様子、鋭い臼歯、下顎の構造、長い腕、短い足、その他の多くの特徴もこのチンパンジーと現代のチンパンジーとの間には差がなかったという証拠を形成した。骨盤ですら、チンパンジーのものと類似していた。[5]

6. リチャード・リーキー(Richard Leakey)は、人類学の歴史上最も重要な発見とされる280万年前とものと主張する「KNM-ER 1470」という頭蓋骨を発表した。リーキーによれば、この生物は頭蓋容量がアウストラロピテクスに類似しており、顔貌は現代の人間に似て、アウストラロピテクスと人間との失われたつながりの部分だとされた。しかし、その後しばらくして、科学の定期刊行物や人気の科学雑誌などの表紙を頻繁に飾るようになった「KNM-ER 1470」の人間のような顔をした頭蓋骨は、頭蓋骨の断片の不正な組み立てによるものだということが分かった。この“間違い”は計画

的なものであった可能性がある。

もうお分かりのように、科学的な発見により支持するものは皆無であり、いわんや進化論を裏打ちするものは何1つなく、一部の科学者に盲目的に指示されるのみである。こういった科学者は、科学的な基礎が不足しているにも関わらず、進化の神話を信仰し、人を欺くように資料を作り上げたり、偏見にあふれた演出を使って他人にも信じさせようとしている。“人間の祖先”と呼ばれるものについてのニュースやニュース中に使用されている挿絵のすべてはでっち上げなのである。確固とした証拠が、人類の進化のおとぎ話を突き崩したのである。

次のページでは、無数の頭蓋骨の化石の例をあげて、進化論を否定してみたいと思う。これらの頭蓋骨は、どんな生物も歴史を通じて変わっておらず、どんな生物にも1つの種から異なる種へと変態したものはいない、またどの種も、元から所有している機能をそのまま保持しながら今まで存在しているという多くの証拠のすべてと共通するものである。

これらの証拠の断片に沿って、ダーウィニストの思想の行き詰まりと論理の欠如が露呈したのである。例えば、ダーウィニストは種が継続的な変化を通して発達していったと主張している。しかし、すべての生物に一様に見られる一貫性はどう説明できるのか。人間は猿から進化したという進化論の主張は、なぜ他の種が架空の1つの類人猿種が経たと過程される変態のプロセスを経なかったのかということを説明できなくてはならない。

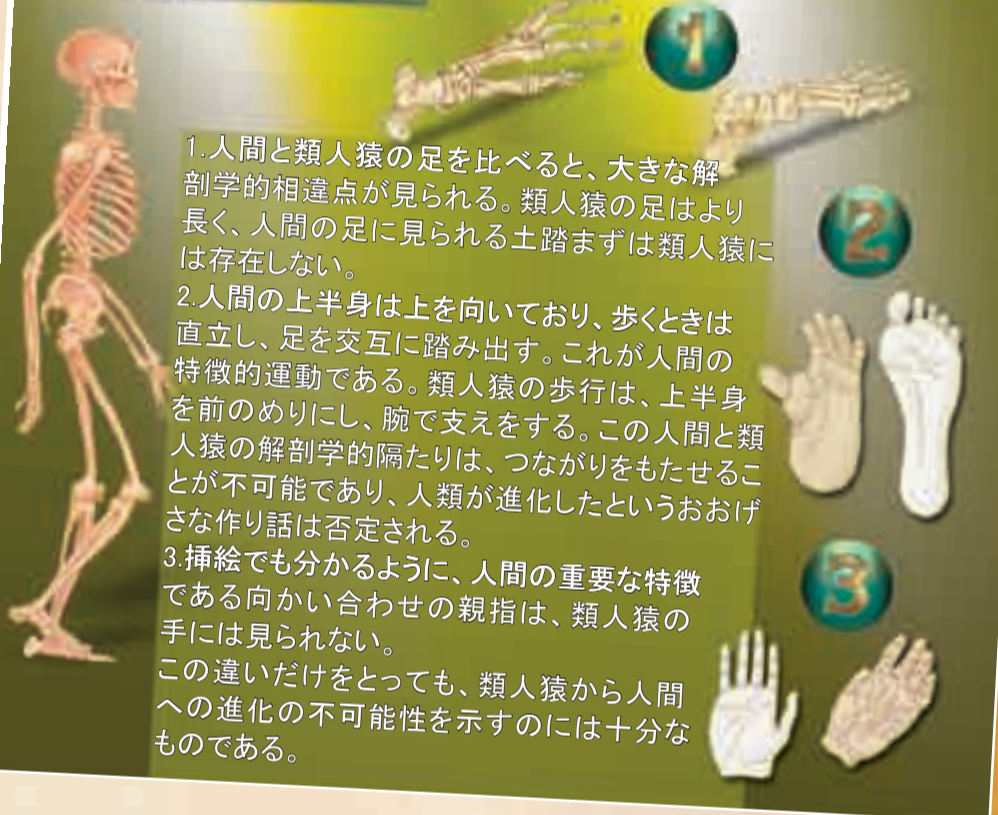
ダーウィニストは、クマがこれまでに2足歩行にならなかった理由を説明することができない。またはキツネが知性を進化させて特殊技能を持つ大学教授に進化しないのはなぜか、またパンダが印象的な作品を生み出す芸術家に進化しないのはなぜかを説明することができない。進化というテーマは、子供ですら認めないような理論や事例で描かれてきており、これは単に信じられないほどのダーウィニズムの不条理を公言しているにすぎない。ダーウィニズムはあたかも科学的理論のように提示されているが、実際はすさまじい不条理のイデオロギーにすぎないのだ。

これでお分かりのように、ダーウィニズムは嘘と虚偽で塗り固められた歴史上の巨大なスキャンダルであり、不条理で非論理的な主張なのである。この21世紀に、全世界はダーウィニズムの崩壊を見つめる目撃者となるであろう。

消えたルーシーの物語

さよならルーシー…

2人の進化論解剖学者、ソリー・ズッカーマン(Solly Zuckerman)とチャールズ・オクスナード(Charles Oxnard)は、“ルーシー”と名付けられた化石を研究した。1974年に発掘されてからすぐに二足歩行の人類の祖先と公表されたものである。かれらはその仮説を否定し、ルーシーの生体構造と歩行習慣は全く人間のものとは似ても似つかず、単なる類人猿の一種だとした。

その数年後、ルーシーは確かに類人猿の一種であると研究誌『Science et Vie』に大見出しとともに雑誌に掲載された。進化論者たちは、憶測だけの人類の祖先ルーシーと決別しなくてはならなかった。

1 Richard E. Leakey, The Making of Mankind, Michael Joseph Limited, London, 1981, s. 43
2 William R Fix,. The Bone Peddlers, Macmillan Publishing Company: New York, 1984, s. 150-153
3 Marvin Lubenow, Bones of Contention, Grand Rapids, Baker, 1992, s. 136
4 Marvin Lubenow, Bones of Contention, Grand Rapids, Baker, 1992, s. 83
5 Richard Allan & Tracey Greenwood, Primates and Human Evolution in the textbook: Year 13 Biology, 1999. Student Resource and Activity Manual, (Biozone International, printed in New Zealand.), s. 260

キツネの頭蓋骨

年代：860万年前
時代：中新世
地域：中華人民共和国

人類は猿から進化したのだという過程を示す中で、進化論者たちは、数多くの頭蓋骨を証拠として指摘している。（証拠とは自分の目から見ての証拠というだけのものだが）これらの絶滅した猿、または過去のある時代に絶滅した異なる人種に属するというこの頭蓋骨について構築されたシナリオはすべて欺瞞である。どの時代においても、どんな生物の生体組織または頭蓋骨の構造も全く変わっていない。また類人猿がそのように変化したと考える方が不自然である。

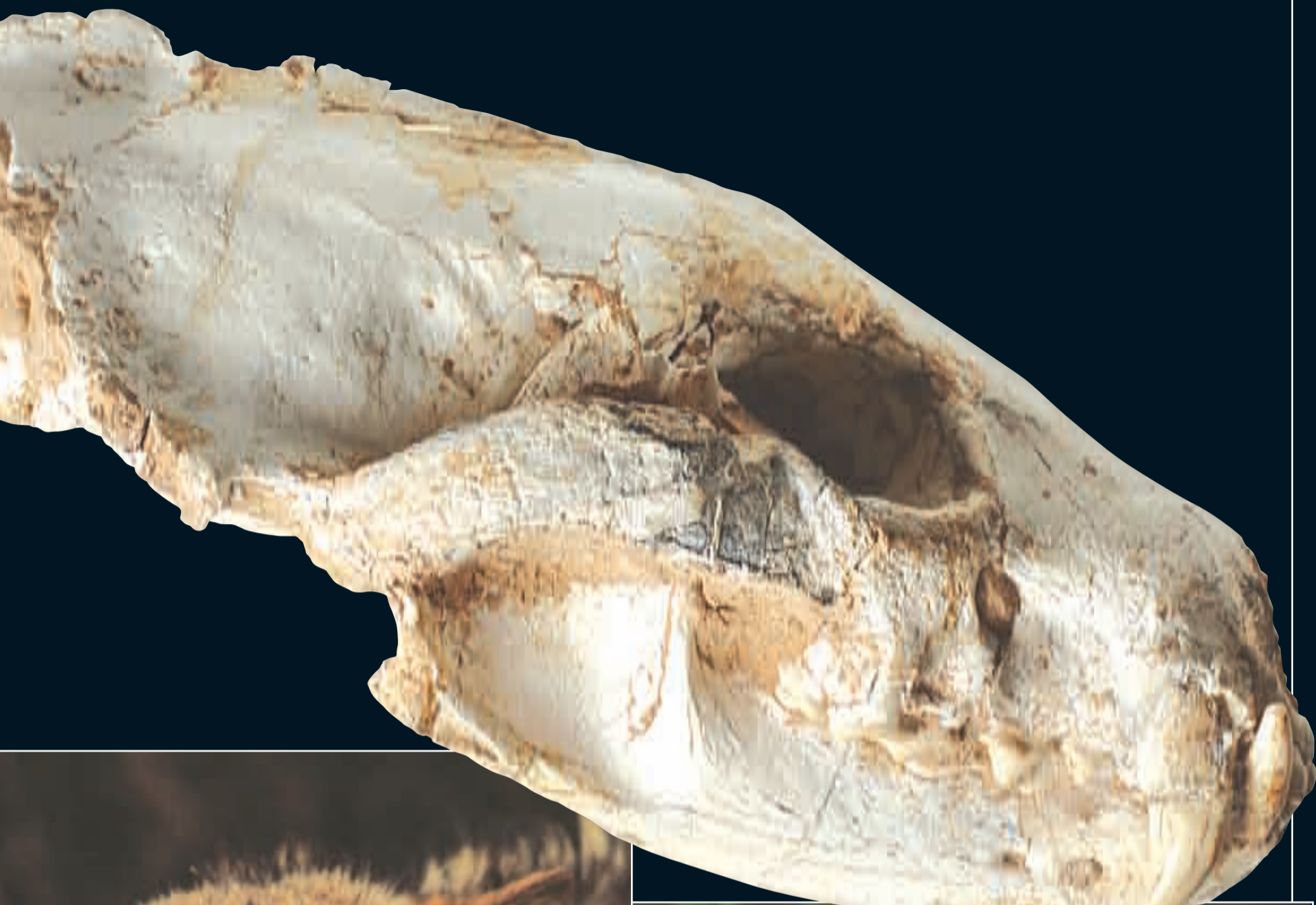
この写真の860万年前のキツネの頭蓋骨は、キツネの頭蓋骨が全く変わっていないことを見せ付けてくれる。キツネは自分の知能を急に発達させてはいないし、脳の容積を増加させたり、構造を変えて他の肉食動物に変わったりもしていない。キツネは常にキツネであり、ライオンは常にライオンとして存在してきた。そして類人猿は常に類人猿であったのである。

しっかりとした研究結果では、生物が他の種から伝わったとか、人間の祖先は類人猿であったとかいう主張は、ますます虚偽だということが明らかになっている。

オオカミの頭蓋骨

年代：950万年前
時代：中新世
地域：中華人民共和国

写真の950万年前のオオカミの頭蓋骨は、オオカミの頭蓋骨の構造が長い歳月にも関わらず全く変化していないことを示すものである。この均衡状態は他のすべての生物にも当てはまる。オオカミ、トラ、ウマ、クマ、サル、どの動物も、その頭蓋骨は全く変わっていない。つまり、サルが長い間に次第に構造を変化させて人類になったという進化論者の主張は非論理的なのである。

1800年から、ダーウィニストは、科学的偽装を下地とする数え切れない嘘で多くの人々を騙し続けてきた。科学が発展し、インターネットが広く普及した今日、この嘘を守り続けるのは不可能なことである。

東北トラの頭蓋骨

年代：7900万年前
時代：白亜紀
地域：中華人民共和国

ある日「2本足で歩いてみようかな」とすっくと立ち上がり自分の骨格構造を変化させて歩き出した東北トラは未だかつていない。

この写真の7900万年前の化石は、東北トラが何の変化も経験していないことを明らかにしている。これはすべての生物に当てはまる。すべての生物種は、すべて独特の特有な機能を持ち合わせながら出現しており、さらに地球に生き延びている歳月、その機能を持続している。原始的なものからより複雑なものへと生物が持続的に変化の状態にあり、1つの種から次の種へと伝わっていくという考えは単なる空想にすぎない。科学的根拠には全く基づいていないのだ。

ヒグマの頭蓋骨

年代：9千万年前
時代：白亜紀
地域：中華人民共和国

ヒグマ(Ursos arctos)は、クマ科(Ursidae)に属する生物であり、被毛は茶色かクリーム色のこともある。通常は森林に覆われた山岳地帯に生息している。

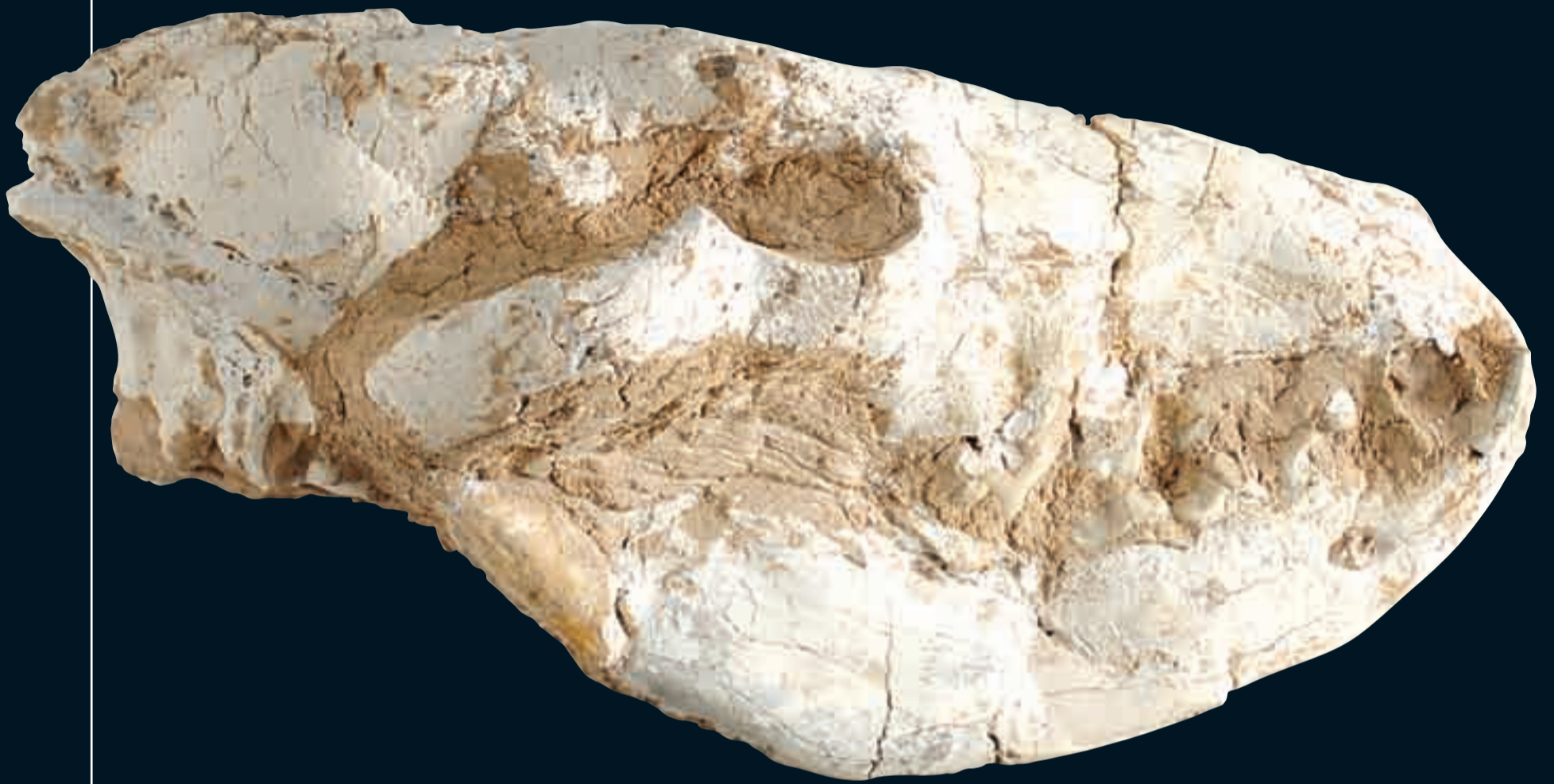
ヒグマが「知性を進化させ、頭蓋骨を変化させて文明を築こうじゃないか」と言い出して、直ちに都市を建設し、芸術を生産し、文学を創り出したり、科学的な発見をしたりしたヒグマはいない。クマはいつの時代もクマとして存在し続けてきたし、他の種に進化などしてこなかった。

すべての生物は元々有していた特徴と全く同じものを備えて生き残っている。これは極めて論理的なことであり、類人猿が人間へと発展したなどというのは不条理なことである。この主張に科学に基づいたものなど何1つないのだ。

オオカミの頭蓋骨

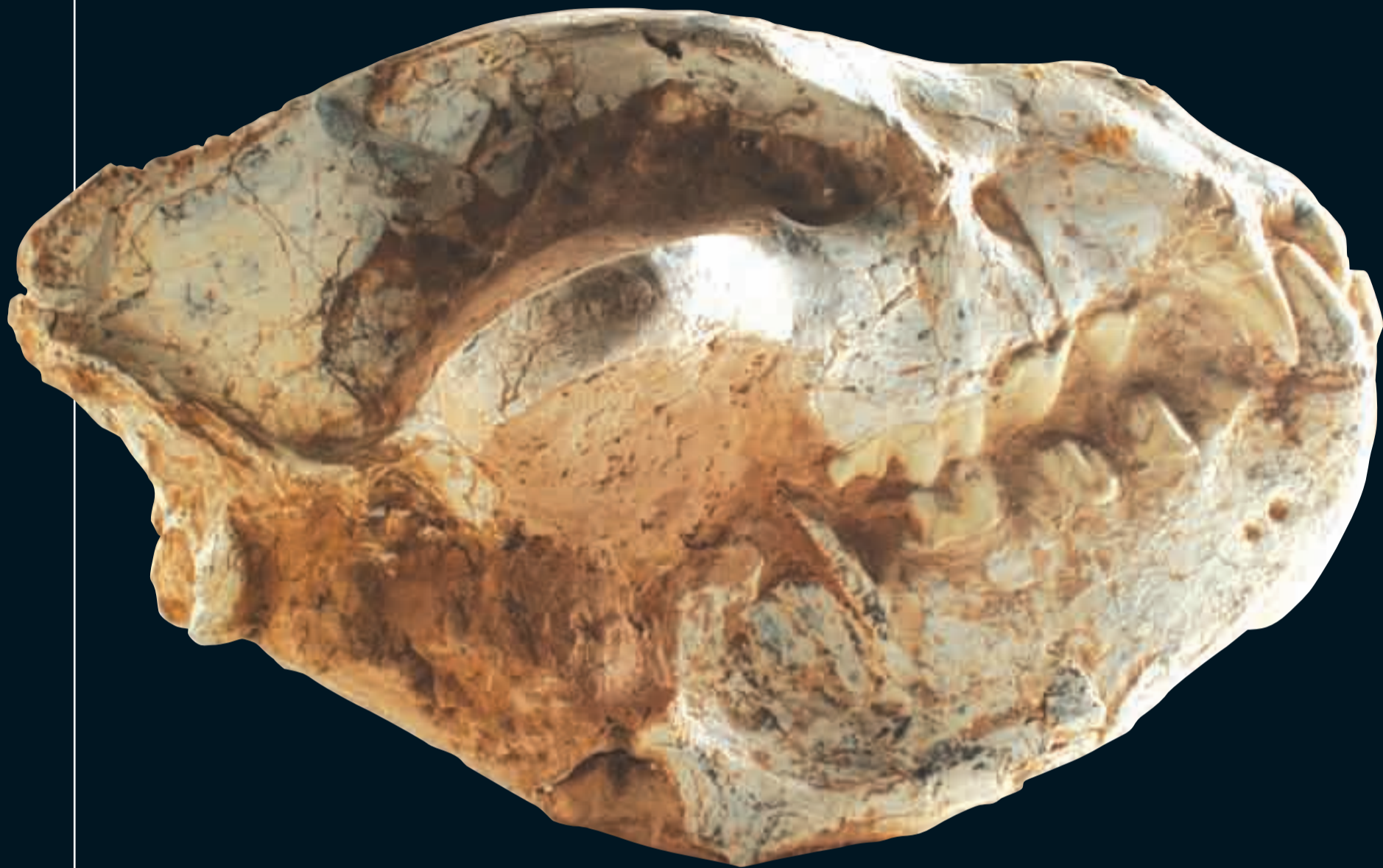
年代：9300万年前
時代：中新世
地域：中華人民共和国

仮に進化論者の主張が正しいとしたら、9300万年前のオオカミの頭蓋骨は、現代に生息しているオオカミと目に見えて違っているだろう。しかし、ここに紹介している標本の写真でお分かりのように、現代に生息するオオカミの頭蓋骨と9300万年前のものは全く同じものである。何千万年の時の流れの中で「それでは能力を進化させてオペラでも作曲してみるか」と言い出し音楽家になったり、「宮殿を設計してみよう」として建築家になろうとしたオオカミはいない。

化石記録が証明するとおり、オオカミだけでなく、他の生物種もどんな身体的変化も経ていない。別の種へと進化したような生物はいないのだ。魚類、昆虫、爬虫類、鳥類、哺乳類の身体的特徴のどこにも見られない進化的な変化を主張するダーウィニストは、類人猿でも同じことが起こり、猿が人間へと進化したと主張している。しかしすべての生物種におけるこの均衡状態は、この主張が嘘であることを証明するに足りる。

北極ギツネの頭蓋骨

年代：820万年前
時代：中新世
地域：中華人民共和国

類人猿の模倣の能力に感化され、ダーウィニストは知性を展開させて人間へと発達することができると主張した。しかし事実は、自然界の多くの生物は模倣する能力を備え、非常に知性的なことで知られている。その一例はキツネである。非常に知能が高く、ずるがしこい。しかし、「知能が高い動物だから、科学者になろうじゃないか」などとある日突然言い出して、自分を形成する細胞を電子顕微鏡で観察し始めたキツネはいない！どんなに知能が高かったとしても、キツネはキツネ以外の生物にはならないのだ。

同じように、科学的発見によっても証明されているように、類人猿は類人猿としてそして人間は常に人間として存在し続けてきた。進化論者たちは科学的証拠を無視し続けてきており、変化をしないという事実を覆い隠そうとしてきた。生命の起源は神の創造である。

パンダの頭蓋骨

年代：8800万年前
時代：白亜紀
地域：中華人民共和国

化石記録は、パンダは常にパンダとして存在してきており、進化の過程を経ていないことを示している。その証拠の1つの断片は、この写真の8800万年前の化石化したパンダの頭蓋骨である。

ある日「ときどきは2本足で歩くことができるから、これからはいつも2本足で歩こう。そして直立して暮らそう」と決めたり、頭蓋骨の構造を変えたりしたパンダはいない。長い年月の隔たりがあっても。パンダはパンダが有する同じ特徴を備えつつ常に同じ姿であり続けてきたのである。

パンダに関するこの事実は、他の生物にも当てはめることができる。進化したり、様相が変化した生物はいないのだ。

トラの頭蓋骨

年代：8800万年前
時代：白亜紀
地域：中華人民共和国

絶滅した種の類人猿の頭蓋骨を修正し、あたかも人間の進化の証拠のように見せかけるやり口は、ダーウィニストの常套手段となった。毎回彼らのでっちあげが露呈していてもなお、それをやり続けるのは絶望のあらわれなのである。なぜなら豊富に生息し、数え切れないほどの化石が現代でも見られる生物や古代に生息した生物の無数の化石の頭蓋骨標本が、進化は発生していないことを証明しているからである。

化石は、トラが常にトラであり、オオカミがオオカミで、サイがサイであり、オランウータンがオランウータンであることを実証している。

写真の8800万年前のトラの化石は、その例の1つである。8800万年前に生息していたトラと現代に生息しているトラとの間に違いは全くない。

熊の頭蓋骨

年代：8千万年前
時代：白亜紀
地域：中華人民共和国

ダーウィニズムを“論争の余地のない”科学的事実だとメディアが演出した影にはイデオロギー闘争の結果が渦巻いている。事実、ダーウィニズムが科学的発見に相反する時代遅れの理論であることは、よく知られている。化石はこのことを証明する多数の発見のうちの1つである。進化論者たちは人間と類人猿は共通の祖先から進化したと仮定しているが、頭蓋骨、頭蓋の構造、何千万年も生息している生物の骨格など、ほんの少しも変化していないことを説明できないでいる。なぜ猿がある日人間に進化したのに、他の生物種にそのような変化が発生していないのかは、まだ説明されていない。なぜ猿や熊がしゃべり始めたり、音楽を作曲したり絵を描いたり、彫刻を作ったり、建設物を建築したり、小説や詩、戯曲を書いたり、技術的な発見をしたり宇宙を探検しないのかという質問に対する理性的な回答は進化論者からは得られていない。

同じように、非常に高度な機能を取得し、他の生物に変わってしまったクマはいない。だからサルも人間には進化していないのだ。クマは常にクマであり、類人猿は常に類人猿であり、人間は常に人間だったのだ。

写真の8千万年前の熊の化石は、今日生息しているクマと何1つ変わらない。これは見る者すべてにその事実を明らかにしている。

結論

神が万物と生物を創造した

時代遅れの19世紀の概念である進化論は、現代の科学的事実を前にして完全に崩れ去ったといえよう。ダーウィニストは化石記録の前には科学的な回答をすることができなかった。そしてこれは進化論にとっては非常に大きな打撃となった。

ダーウィニストは進化が発生したということを示唆する化石を1つとして発見していない。敗北に喫したことをカモフラージュできることを願ってさまざまな手段を助け舟として講じてきた。時々、化石を偽造することで彼らは少なくとも自分たちの目から見れば進化論を証明しようと模索してきた。また一方では、完全に空想の絵で人々を欺こうとした。これらと同様に、進化論が疑いもない事実だという印象を与える努力として"失われたリンクが見つかる！"や、"祖先は微生物だった"や、"進化論を証明する新発見"など、誤解を招く見出しを採用してきた。

これらの方法は、科学と技術が現代ほど発達していない1800年代後半から1900年代初期までは成功してきた。しかし21世紀には、進化論者たちのすべての嘘が明るみに出て、ダーウィニストたちを孤立無援の場所へと追いやった。

今日、小さな子供ですら、進化論を示唆する中間段階の化石はないこと、人間はサルが進化したのではないということ、高度に発達して複雑な構造を持つ生物は進化論では説明できないということ、そしてダーウィニズムは科学史上最悪の詐欺であるということを知っている。

コーランの一節にもこう書かれている「見よ、かれらの言うことは作りごとである」(アッ・サーッファート章151節)不信心者は続けざまに次から次へと嘘を述べ立てることで信仰に背を向けると、神はコーランで教え給われている。ダーウィニストは自分たちが信仰を避け、そして他の者にも宗教的な倫理価値から遠ざかるようさまざまな欺瞞を講じて、あらゆる非科学的な主張を繰り返してきた。

もちろん、これは次の一節でも信仰心のない者は常に言い訳ばかりをすると強調されている。「また、かれら(不信心者)はいつも言っていた」(アッ・サーッファート章167節)しかし、彼らはやがてはすぐに気づくだろう、そして真実を理解するだろう。不信心者がやがては真実に気付き、理解する時が来るということは多くの一節で明らかにされ

爬虫類から鳥類への進化の寓話に使用された始祖鳥は、進化論者たちがどうやって人を騙そうとしてきたかを示す良い例である。1億5千万年前の鳥、始祖鳥はその一部に爬虫類的特徴を持つため、爬虫類と鳥類を結ぶ"失われたリンク"と主張されていた。しかしながら、すべての化学的研究では、始祖鳥は飛ぶ鳥であり、これらの主張を無効とするものであった。さらに、鳥の爬虫類的祖先といわれているテロポッド恐竜は、ずっと始祖鳥よりも年代が若い。これも、進化論者たちが無視しようしてしてきた事実の1つである。

豚の歯を"ネブラスカ原人"の化石とでっちあげ

1922年、アメリカ自然史博物館の館長ヘンリー・フェアフィールド・オズボーン(Henry Fairfield Osborn)は、スネークブルック近郊の西ネブラスカで鮮新世の年代と思われる臼歯の化石を発見したと主張した。この歯は、人間と類人猿の共通の特徴を持つものだとされたものである。この化石は"ネブラスカ原人"と呼ばれるようになった。"ネブラスカ原人"にはすぐにヘスペロピテクス・ハロルドクーキ(Hesperopithecus haroldcooki)という科学名が与えられた。このたった1つの歯に基づいて、ネブラスカ原人の頭と体の再構築が行われ、原画が描かれた。さらに、ネブラスカ原人のそばには、自然の設定の中、妻や子供の家族も描かれた。1927年、骨格の他の部分が発見される。新たに発見された断片を研究した結果、その歯は人類のものでも、類人猿のものでもないことが分かった。結局、その歯の持ち主は、プロステノプス(Prosthennops)という絶滅種の野生のアメリカ豚のものだということが明らかになった。

ている。これらのコーランの一節は、暗示的に、ダーウィニストもまた真実を見る日が来ることを示唆しているのだ。そういったいくつかの節をご紹介しよう。

「ところが(実際にクルアーンが与えられれば)それを拒否する。だが間もなくかれらは知るであろう」(アッ・サーッファート章167節)

「かれらを放任し、食べさせ楽しませて(はかない)希望に惑わせておくがいい。間もなくかれらは悟るであろう」(アル・ヒジュル章3節)

「われがかれらに授けたものを、有り難く思わず享楽に耽る。だがかれらは、今に分るであろう」(アル・アンカブート章66節)

ダーウィニスト達もまた、非論理的な頑固さを捨て、みながこれほど明白に分かっている事実を受け入れるべきである。科学に解き明かされた真実は、進化論は間違いであるということ、そして万物と生きとし生けるものは、神の創造だということである。

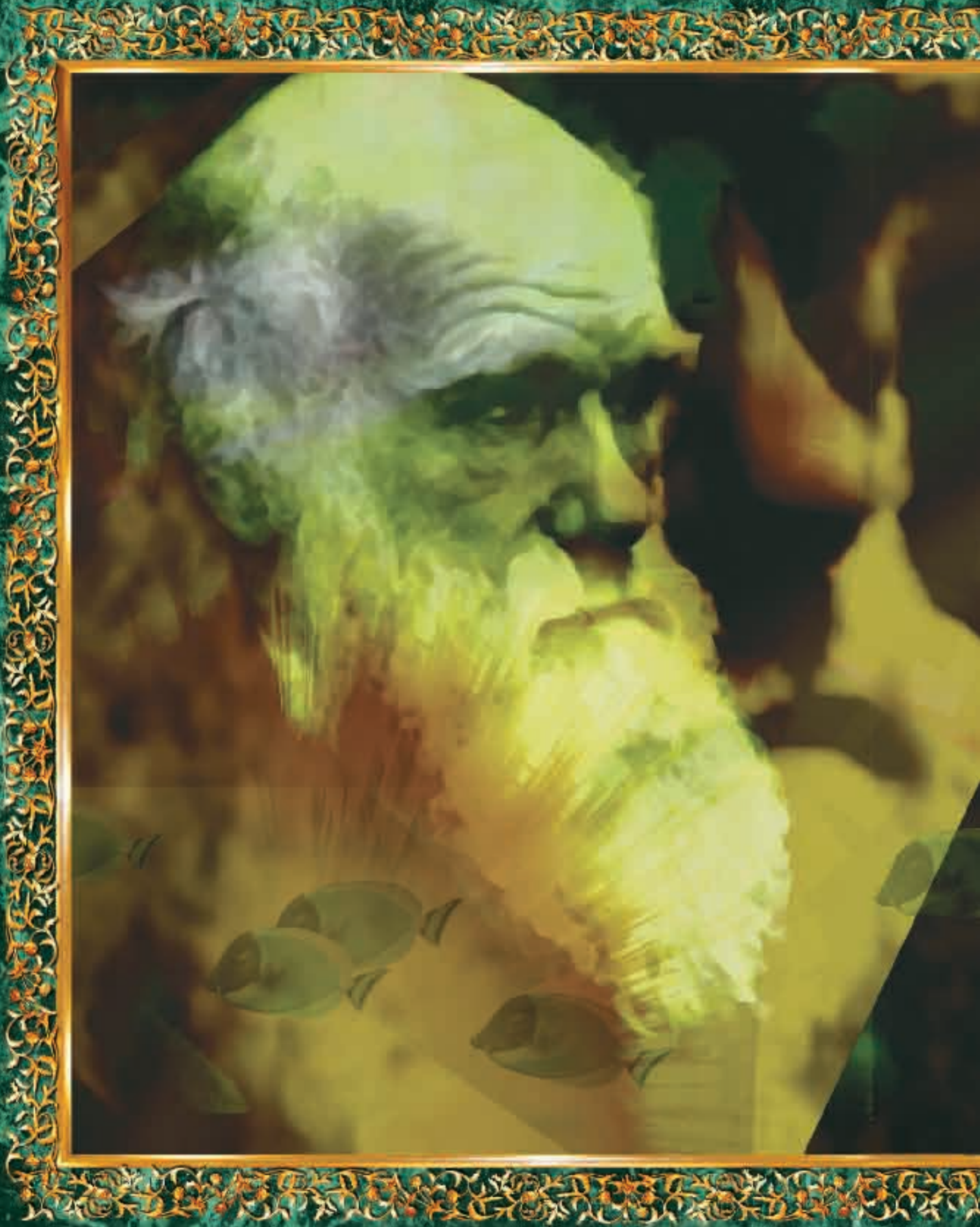
一部の例をこの本にも掲載している化石は、神の創造の重要な証拠である。コーランのいくつかの節にも、天地に神の創造が事実である証拠があるという記述がある。その一例は、アッ・サーファート章の137節である。

「あなたがたはかれらの(遺跡の)傍らを、昼夜通っている」

おそらく、この節は地底に眠り、生物の歴史を解き明かしてくれる化石記録を指しているのであろう。世界各地の地中には、生物が最初にこの世に姿を現したときから同じままで、長い年月をかけても全く変化していないことを示す無数の化石標本がある。言い換えれば、生物は進化していないのだ。これらの化石のすべては、生物が完全で非の打ち所のない形で、複雑な機能を持ちながらこの世ら出現したことを表しており、神によって創造されたということがわかる。

わが全能の神は、すべての生物を完璧なまでの形で創り出している。すべての実体は全能で偉大な神の現われなのである。この神の現われを目の前にした人の使命は、理性と道義心を身に着け、万物は、絶対的賢人によって作られたということを熟考し、神に感謝の意を表明し、神にできるかぎり身を捧げることである。

「 アッラーは、凡てのものの創造者であり、また凡てのものの管理者である。天と地の鍵はアッラーの有である。かれの印を拒否した者こそ失敗者である」

(アッ・ズマル章62～63章)

付録
進化論の崩壊

観念的なテロリズムの根底にあるものの正体:
ダーウィニズムと唯物主義

進化論はチャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)によって提起され、科学的根拠、観察、実験に基づいていると多くは考えている。しかし、事実はこうだ。ダーウィンは進化論の発案者ではなく、進化論は科学的根拠には基づいていない。進化論は、唯物論哲学の古臭い定説の性質に沿うように構成されている。科学的な発見によって裏付けられていないにも関わらず、進化論は盲目的に唯物論哲学を支持している。

この狂信はいろんな問題を引き起こした。まずダーウィニズムとそれを支える唯物論哲学が広まったことで、"人間とは何か"という問題の問いへの答えが変わった。

以前なら人はこう答えただろう。「人は神によって創造され、神の教えとするところの、素晴らしい道徳性に従って人は生きなくてはならない」それが現在「人は偶然によってこの世にもたらされ、生存競争に生き残って発達した動物なのだ」と考えるようになってきた。このひどいごまかしに支払わなくてはならない代償は大きい。暴力的イデオロギーである人種差別、ファシズム、共産主義、その他闘争に基づく野蛮な世界観は、すべてこのごまかしから発生したのである。

本稿では、ダーウィニズムが世界にもたらした災害を検証し、現代において地球を脅かす恐ろしいテロリズムとの関連性を暴いていく。

ダーウィニストの嘘:「生とは闘争である」

ダーウィンは、進化論を展開させる際、1つの前提を持ち出した。「生物の発達は生存競争に依存する。強者が闘争に勝ち残るのだ。弱者は敗者として忘却の彼方へと消し去られる」

ダーウィンによれば、生存競争には無慈悲な戦いがあり、自然界には永遠の闘争があるという。強者は弱者を常に打ち負かし、これにより発達が淘汰されるのだと。ダーウィンの著書『種の起源(The Origin of Species)』に与えられた副題『自然淘汰または適者生存による種の起源』からもその観点は読み取れる。

さらに、ダーウィンは"生存競争"を提言しているが、それは人種にもあてはまるのだとしている。その狂信によれば"適者(選ばれた人種)"は闘争に勝ち残ったものなのだという。ダーウィンの観点では、適者はヨーロッパの白色人種であった。アフリカ人種やアジア人種はこの生存競争に遅れを取っているらしい。ダーウィンはさらにこう続けている。このような人種はやがて"生存競争"に勝ち残れず、消滅するのだと。

将来的のある時期、それも百年以内とそう遠くない将来、教養ある人種はほとんど絶滅し、世界中に野蛮な人種がはびこるであろう。人間に近い類人猿などは間違いなく絶滅しているだろう。同時に、類人猿も間違いなく絶滅することになる。人間と人間に近い類人猿などとの境界はさらに広くなる。現在黒人またはオーストラリア人とゴリラの間に見られる隔たりに代わり、白色人種、またはヒヒと同様なくらいのレベルの一部の類人猿を超えて人種間が文明化することを阻むものである。[1]

インドの人類学者ラリタ・ヴィダヤールティ(Lalita Vidyarthi)は、ダーウィンの進化論がどのように社会科学の分野に人種差別を押し付けているかを説明している。

ダーウィンの適者生存の理論は当時の社会科学者たちに暖かく受け入れられた。そして人間は、さまざまな進化の段階を経て人間文明の最高潮に達したのだという説が信じられるようになったのである。19世紀の中ごろまでには大部分の西洋の科学者によって人種差別が事実として受け入れられるようになっていった。[2]

ダーウィンがインスピレーションを受けた源、マルサスの“冷酷の法則”

進化論の主題においてダーウィンがインスピレーションを受けたのは、イギリスの経済学者トーマス・マルサス(Thomas Malthus)の“人口論”である。マルサスは自分自身で人間の人口の急激な増加を計算した。この観点においてマルサスは人間の人口を制御している主な影響力は、戦争、飢饉そして疾病のような災害だとしている。いわば、この乱暴な主張によれば、一部の人々は他人が生きるために死ななければならないということになる。そしてその結果として“永遠の戦争”が導かれるのである。

19世紀、マルサスの考えは広く受け入れられた。特にヨーロッパの上流知識階級によってこの残酷な着想は支持を受ける。『ナチの“人種の浄化プログラム”の科学的背景』という論文の中で、マルサスの人口の観点に縛られた19世紀ヨーロッパの重要な身分の者は、こう記している。

9世紀のうち最初の50年で、ヨーロッパ全土において、新たに浮上した“人口問題”について協議され、貧困層の死亡率を上げるためのマルサス指令を実施する方法について思案するために支配者階級のメンバーが集まった。

トーマス・ロバート・マルサス
(Thomas Robert Malthus)

「貧困層に衛生を推奨するかわりに、正反対の習慣を奨励するべきである。町の街路はより狭くし、家にはさらに多くの人間を詰め込み、疫病に罹った者をその中へ入るように奨励する。地方においては、澱んだため池の近くに町を造成、特に住民をじめじめとして不健康そうな場所へと追いやることが必要である」云々と続く。[3]

この残酷な方針の結果として、生存競争に負けた弱者は排除され、その結果、急激な人口の増加には歯止めがかかりバランスをもたらすとしている。これは“貧困階級の弾圧”と呼ばれるもので、19世紀のイギリスで実際に施行された方針である。産業指令が発布され、8〜9歳の児童は炭鉱で16時間労働を課すように強いられており、過酷な労働条件により何千もの命が失われている。マルサスの原理によって要求された“生存競争”は、何百人ものイギリス人の命を過酷な条件にさらす結果となった。

これらの着想に影響を受けた形で、ダーウィンはこの闘争の思想を自然界すべてに当てはめた。そしてこの生存戦争では、強者と適者のみが勝者として君臨するのだと提言している。さらに彼は、この生存競争と呼ばれるものは、正当化されており変えることのできない自然の法則なのだとしている。言い換えれば、天地創造を否定することで宗教の信仰を捨てるよう人々を促し、それにより“生存競争”の残酷さの妨げになると思われる倫理価値感に害を及ぼしたのである。

残酷で無慈悲な行動を人間に導いた無感覚な展望の普及により、20世紀になって人類は大きな代償を払うこととなったのである。

“弱肉強食の法則”に導かれたもの = ファシズム

19世紀にはダーウィニズムが人種差別を助長し、それにより、20世紀に世界を血に染めたひとつのイデオロギーの土台が形成された。ナチズムである。

ナチのイデオロギーにはダーウィニストの強い影響が現れている。アドルフ・ヒットラー(Adolf Hitler)とアルフレート・ルーゼンベルグ(Alfred Rosenberg)によって形作られたこの理論を検証すると“自然淘汰・自然選択”“選択交配”“人種間における生存競争”といった思想に行き着くことに気付くだろう。これらは、ダーウィンの著作の至るところに無数に繰り返し現れる思想である。著書『Mein Kamp(わが闘争)』の中でヒットラーは、ダーウィニストの生存競争と勝利が適者にもたらされるという原理にインスピレーションを受けたとしている。

自然が定めた新しい人種階層に基づき、この歴史の中で無類の栄誉を誇る新千年帝国に最高の栄誉がもたらされるだろう。[4]

1933年のナチ党大会で、ヒットラーは「上位人種は、下位人種を支配する…これは自然に見られる権利であり、考えられるたった1つの権利だとみなしてよい」と宣言している。

ナチがダーウィニズムに影響を受けたということは事実であり、この分野を研究するほとんど全ての歴史学者がこれを支持している。歴史学者ヒックマン(Hickman)は、ダーウィニズムがヒットラーに与えた影響を次のように表現している。

ヒットラーは、進化論の熱狂的な信者であり、提唱者であった。彼の精神病の重さ、難解さ、複雑さがどうあったとしても、彼の著作『わが闘争』の中で、特に闘争、適者生存の法則、よりよい社会を作り出すために弱者を排斥するなどの、たくさんの革命的アイディアが発表されているという理由から"闘争の思想が重要だった"と言えるのは確かだ。[5]

これらの展望を掲げたヒットラーは、今までにないほど世界を暴力へと引きずり込んだ。ユダヤ人を筆頭とする多くの倫理・政治グループは、ナチの強制収容所で悲惨な残酷行為と大虐殺にさらされた。ナチの侵略で開戦した第二次世界大戦により、5500万人の命が失われた。この世界の歴史の中でも最大の悲劇となる戦争の背景には、ダーウィニズムの"生存競争"の思想があったのである。

血の同盟ダーウィニズムと共産主義

社会的なダーウィニズムの右翼にファシストが見受けられると同時に、左翼には、共産主義が陣取っている。共産主義は常にダーウィンの論理を強硬に擁護してきた。

ダーウィニズムと共産主義の関係は、この2つの"主義"の形成にさかのぼる。共産主義の提唱者マルクス(Marx)とエンゲルス(Engels)は、ダーウィンの『種の起源』が出版されるやいなや読んでいる。そしてその"弁証的唯物論者"としての姿勢にひどく感銘を受けた。マルクスとエンゲルスの往復書簡から、2人はダーウィンの原理が"共産主義のための自然な成長の土台を含んでいる"と見ていることが明らかになっている。ダーウィンに影響されて書いた著作『The Dialectics of Nature(自然弁証法)』の中で、エンゲルスはダーウィン賞賛をそこかしこにちりばめている。そして『The Part Played by Labour in the Transition from Ape to Man(サルのヒト化における労働の関与)』の章の中で進化論へと貢献しようと試みている。

マルクスとエンゲルスの足跡をたどったロシアの共産主義者、プレハーノフ(Plekhanov)、レーニン(Lenin)、トロツキー(Trotsky)、スターリン(Stalin)は、こぞってダーウィンの進化論に賛成を示している。ロシア共産主義の礎を築いたとされるプレハーノフは、マルクス主義を「社会科学にあてはめたダーウィニズムだ」と指摘している。[6]

トロツキーは、「ダーウィンの発見は生物に関わる分野における弁証のもっとも偉大な業績だ」としている。[7]

"ダーウィニストの教育"は共産構造の形成において大きな役割を担う。例えば、歴史学者は、「スターリンは若い頃信心深かったが、ダーウィンの本が主なきっかけとなって無神論者になった」という事実に言及している。[8]

中国共産支配を打ち立て、何百万という人を殺戮した毛沢東は、公然とこう述べている。「中国の社会主義は、ダーウィンと進化論の上に形成された」[9]

ハーバード大学の歴史学者ジェームス・リーヴ・ピュゼー(James Reeve Pusey)は、ダーウィニズムが毛沢東と中国共産主義に与えた影響について、研究著作『China and Charles Darwin(中国とチャールズ・ダーウィン)』において多くを語っている。[10]

つまり、進化論と共産主義には、切っても切り離せないつながりがあるのだ。進化論では、生命を持つ者は偶然の産物であり、無神論を科学的に支持するものと言われている。無神論者のイデオロギーである共産主義は、その理由で、ダーウィニズムと深く結びついている。さらに、進化論では、自然における発達は、闘争(言い換えれば"生存競争")のおかげで可能になっているのだとしている。そして共産主義の基礎となる"弁証法"の概念を支持するものである。

20世紀において"殺人機械"として1億

2千万人を死に追いやった共産主義の概念“弁証法的闘争”を考えれば、ダーウィニストが地球上にもたらした大災厄の甚大さがよく理解できるだろう。I

ダーウィニストとテロリズム

ここまでを振り返ると、ダーウィニズムとは、20世紀に人間に災厄をもたらした暴力的イデオロギーの根っこなのである。この解釈と筋道の裏にある基礎的な概念は「自分と闘争する者は敵だ」である。

これは次の方法で説明できる。世界には、異なる信仰や世界観、そして哲学が存在する。そして、これらの多様な概念がそれぞれと対立するのはごく自然なことである。しかし、これらの異なるスタンスは次の2つの方法で互いを見ることができる。

1）異なる者の存在に敬意を払い、人間的な方法を用いて会話をもとうとする。もちろんこの方法はコーランの倫理観と一致する。

2） 他の闘争する方法を選択する。一方にダメージを与えることで得られる利益を確保しようとする。言い換えれば、野生動物的に振舞うのだ。この方法は唯物主義すなわち無宗教主義に取り入れられている方法である。

どのようなイデオロギーを支持していたとしても、世界中に恐怖を与える者はすべて現実的には、ダーウィニストである。ダーウィニストは、「闘争」を奨励し、「闘争」に価値を置く哲学である。

私たちがテロリズムと呼んでいるものの恐ろしさは、2つ目の考え方と何ら違いはない。

これら2つのアプローチの違いを考える時、“戦う動物としての人間”というダーウィニズムによって潜在的に人々に押し付けられた概念が見られる。これは特に影響力を持っている。闘争方法を選択する個人やグループの中には、ダーウィニズムやそのイデオロギーの原理を聞いたこともない人たちもいるかもしれない。しかし、最後には、こういった人たちもダーウィニズムに基づく哲学的基礎を持つ人々に同意するであろう。この考え方が正しいとどうして信じることができるようになるのか。ダーウィニズムの“この世界は弱肉強食である”、“強者が弱者を駆逐する”“戦争とは徳である”“戦うことにより、人は進化する”などのというスローガンが、人々を洗脳するのである。ダーウィニズムをここから取り払ってみると、これらのスローガンには何も残るものはない。

実際、ダーウィニズムが取り払われたら、“闘争”の理念はなくなるだろう。世界のほとんどの人が信仰する、神に基づく3つの宗教であるイスラム教、キリスト教、ユダヤ教はすべて暴力に反対している。この3つの宗教すべては世界に平和と調和がもたらされるよう願うものである。そして罪なき人を殺したり、苦しみや苦難を与える者に反対している。闘争と暴力は神が人間に課せる倫理に反し、異常で望ましくない概念である。しかし、ダーウィニズムでは、闘争と暴力を自然なもの、正当なもの、正しいものであり、存在しなくてはならないものとして捉え、描写している。

こういった理由から、ある人々がイスラム教、キリスト教、ユダヤ教の概念を用いてテロリズムを行使する場合、こういった人々は正当なイスラム教、キリスト教、ユダヤ教徒とは言えない。社会的ダーウィニストと言っていいだろう。宗教の皮を被ってはいるが、真の教徒ではない。宗教に従事すると言いつつも、実際は宗教の敵なのである。その理由は、宗教で禁じられている無慈悲な犯罪を犯しており、その行為によって、宗教に汚名を着せているからだ。

このような理由から、地球を脅かすテロリズムの根底には、神の宗教があるわけではなく、無宗教だけが横たわっているのだ。そして我々が生きるこの現代の言葉で言えば、それは“ダーウィニズム”であり、“唯物主義”である。

イスラム教はテロリズムの根源ではなく隠れ蓑にすぎない

宗教の名の下に活動しているかのように言う一部の人々は、宗教を誤解しているか、間違えた宗教活動をしていると思われる。従って、こういった人を例としてその宗教の概念を形成するのは間違っている。宗教の源を研究するのが宗教を理解するのにもっとも適していると言える。

イスラムの聖なる原点はコーランである。コーラン・イスラムの倫理観のモデルは、西洋の精神の中にあるイメージからはかけ離れている。コーランは倫理、愛、同情、慈悲、謙遜、犠牲、容認、平和の概念に基づいており、真に倫理観にしたがって生きるイスラム教徒は、礼儀正しく、思慮深く、寛容で、信頼でき協調的なのである。信者は周囲に愛、尊敬、調和、そして喜びをもたらすだろう。

平和と幸福の宗教イスラム

イスラムという言葉は、アラビア語の"平和"に由来する。イスラム教は地上に平和と幸福をもたらすため神から与えられた宗教であり、神はこの世界に起こりうる物事に対しいかにして慈悲、思いやり、寛容さを持ち、平和を保つかをコーランの教えをもとに世界中の人々に説き、教えを受け入れるように促すものである。イスラムは、神の無限の哀れみと慈悲が地上に姿を現すことにより平和な生活を人間にもたらすことを目的とした宗教である。コーラン、アル・バカラ章208節では、神は信者にこう説いている。

「信じる者たちよ!完全なる平和(イスラム) の中へ入れよ。悪魔(サタン)に従うべきではない。悪魔はあなた方の公然たる敵だから」

この節に名言されているように、「平和(イスラム) の中へ入ることによってのみ、安全が確保されるのだ」、つまり、コーランの価値観によって生きるということである。

神は邪悪な行為を咎めている。不信、不道徳行為、反抗、残酷行

神は人に平和と安全を呼びかけている。それに対し、宗教に反するイデオロギーは、闘争と恐怖を奨励している。

為、攻撃性、殺人、流血を神は禁じている。この神の教えに背く者を「悪魔の道をゆく者」と表現している。そして、はっきりとこの行為を受け入れる姿勢をコーランでは罪悪としている。コーラン中のこの主題に関する節は多く存在し、その中でこう説いている。

「神との誓いを破り、神の導きによる縁を絶ち、地上に破壊を与える者、その者達にはやがて禍が降り懸るであろう。そしてついには邪悪に満ちた住処に留まることになる」(アッラアド章25節)

「神の導くまま、来世の住処を探し求めよ。そして、神があなたによくしてくれたように、あなたもよい行いをするよう心がけよ。また、悪行を慎め。神は悪行を行う者を愛しはしない」(アル・カサス章77節)

上記の2つの節からも読み取れるように、イスラムの教義の中で神はテロリズム、暴力を含むあらゆる悪行を禁止しており、そしてそれらの行動を引き起こす人間を咎めている。イスラム教は世界に美をもたらし、促進させることに貢献している。

寛容性と言論の自由を保護するイスラム教

イスラム教は自由な思考、意見を持つことや生活の自由を保障、提供する宗教である。また、人間同士の対立、闘争、中傷、猜疑、さらには他人に対して否定的な考えを持つことを禁じている。同じように、イスラム教はただ単にテロや暴力を禁じているだけではなく、他人に対してあらゆるイデオロギーへの圧力もそれを与えることも禁じている。

「宗教には強制というものは存在しない。真実の教えは、偽りの教えとは明らかに異なりそれは明確である。偽りの宗教の説く神々の存在を否定し、ただ唯一の本当の神を信じる者は誰でも真の手がかりを掴んだものである。アッラーは全聴にして全知であられる」(アル・バカラ章256節)

「従って、思い出しなさい。ただ思い出すだけだ。あなた方は他人を信仰させることを強制出来ないということを」(アル・ガーシヤ章22節)

信仰や教義の形を強制したりすることはイスラム教の精神と本質に背いている。なぜなら、真の信仰というものは自由な意思と道義心があってこそ存在できるものだからだ。無論、イスラム教信者であってもコーランの説く倫理的教義に基づいてお互いを高めあったり他人に助言を与えたりすることもできるが、それを強制することはおろか、身体的、心理的な圧力をかけることなどはありえない。いずれにせよ、特典を与えて宗教に引き入れようとすることは出来ないのだ。

さて、上記の考えとは全く逆の考えを持った人間社会があると想像してみよう。例えば、ある特定の宗教の信仰を法律で定めている社会があったとする。このような社会は完全にイスラム教の説く社会とは異なった人間社会である。なぜなら信仰と崇拝は、人間がその者自身の意思に基づいて、神を心から信じ崇拝し初めて価値のあるものとなるからである。仮に人々に信仰と礼拝を強いるような社会のシステムが存在するとすれば、そのシステムへの恐怖から宗教を信じざるを得ないから人は宗教を信仰することとなる。宗教的観点からは、神に受け入れられる信仰とは、道義心が完全に自由な環境において行われるべきなのである。

神は罪なき人の殺戮を不法としている

コーランによると、最も重い罪は罪無き人を殺すこと、となっている。

「…人を殺めるとき、それが報復または地球上に悪影響を及ぼす者に対する処罰でない限りは、その罪は全人類を殺したも同じである。また、もしも他人の命を守るために命を犠牲にしたとき―それは、全人類のために命を犠牲にしたと同じである。使徒が教えを伝えているにも関わらず、それでも多くはこの世で非道なことをしている」(アル・マーイダ章32節)

「唯一の真の神アッラーのみを崇拝する者、そして、(殺人の)権利を持つものを除き殺人を犯していない者を汚れないものとする。そして、姦淫するなかれ。悪行を犯す者には、神からの痛烈な罰が待ち受けているだろう」(アル・フルカーン章68節)

この節が示唆するとおり、理由なしに罪無き人を殺すものには痛烈な罰が与えられるとイスラム教では説いている。神は罪無き人を殺すことは全人類を殺すに匹敵する罪であるとしている。この教えを遵守する人は、絶対に他人に害を及ぼしたり、何千人もの罪無き人の命を犠牲にするような行為は出来ないはずである。たとえこの世における処罰から上手く逃げられたとしても、決して神の行う審判の日からは逃れることはできないのだ。従って、行為に対して死後に受ける罰が何であるかを承知している者は、神の法律を尊重するよう日ごろより心がけているはずである。

神は人間に情け深く、また慈悲深くあるようにと説く

コーランに詳述されたイスラム教の道徳には次のようなものがある。

「神を信じ、不動の信仰を互いに高めあい、慈愛の念を高めあう人になるべきである。これこそ正しき者の仲間である。」(アル・バラド17-18節)

この一節からも分るように、イスラム教の最も重要な道徳のひとつは「互いに同情心を高めあう」ことである。神が預言者を通じこのメッセージを人間に伝達し私達がその教えを受け入れることにより神からの救済、慈悲、ついには楽園を授かることにつながるのだ。

コーランで記述されているイスラム教は、近代的で進歩的な宗教である。イスラム教徒は誰にもまして平和的である。民主的な精神に寛容で、教養があり、見識があり、誠実で、芸術や科学に対する知識も豊かであり、そして教養がある。

コーランの倫理教義で教育されたイスラム教徒は、イスラム教徒に期待されているように全てに愛情を持って接している。また他人の思想をすべて尊重し、芸術や美学を高く評価する。さらにいかなる状況においても柔軟な態度で接し、緊張を緩和しようと努め、親睦を深める為に努力するはずである。もし、人間一人一人がこういった意識を持ち地域社会を形成したならば、現代より一層高度な文明化、社会的倫理観の向上、より一層の喜びや幸福、公正さや正義、安全、裕福さの祝福が期待でき、より一層の天恩が与えられるはずである。

神は寛大になること、許すことを説く

コーラン、アル・アアラーフ章199節で「人を許しなさい」とあるように、寛大さと寛容さがイスラムの基本的概念である。イスラム教の歴史を見ると、イスラム教徒がコーランの倫理観の特徴を解釈し地域社会へと導入してきたことは明らかである。イスラム教徒は常に自由な雰囲気をもたらし、不法行為を破壊してきた。宗教、言葉、文化が全く異なる人々が自由で平和に同じ屋根の下で共存することを可能にしてきたし、同じ仲間にも平和と調和を提供している。また、あの壮大なオスマン帝国の何世紀にも及ぶ繁栄、その生活スタイルの尊重がなされた主な理由というのもイスラムの教えである寛大さと理解の基に導かれたものだ。何世紀にもわたりイスラム教徒は寛大さと思いやりの深さでまわりに知られていた。昔からずっと慈悲深く、公明正大な人々としてその名を残してきたのだ。この多国籍地域社会構造の中で、すべての人種グループは、それぞれの持つ宗教の信仰によって生きることは自由であったのだ。コーランの教えを実行したとき、真の寛容さこそが、世界に平和と幸福をもたらすことができるのだ。

この事実についてコーランの一説ではこう説いている。

「良い行いと悪い行いは同じではない。善行で悪行を打ち負かすのだ。そうすればたとえ敵対心が間にあったとしても魂の友達のようなものとなるだろう」(アル・フッスィラ34節)

結論

これらの全ては、イスラムの教義の倫理観である平和、調和、公正を人類が世界にもたらすことを強く勧めている。世界の注目の的となっているテロリズムとして知られた暴虐な行為は、無知で頑迷な人々による行為であり、コーランの道徳的教えからは遠くかけはなれたものである。そしてイスラム教とは何の関係ももたない。宗教を隠れ蓑に凶暴な行いを犯す人々やグループに対する解決策は、イスラム教の真の道徳の教えを説くことである。言い換えれば、イスラム教とコーランの教義はテロリズムを支持するものではなく、テロリズムを咎めるための救済策なのである。

---

1. Charles Darwin, The Descent of Man, 2nd edition, New York, A L. Burt Co., 1874, p. 178
2. Lalita Prasad Vidyarthi, Racism, Science and Pseudo-Science, Unesco, France, Vendôme, 1983. p. 54
3.Theodore D. Hall, The Scientific Background of the Nazi "Race Purification" Program,http://www.trufax.org/avoid/nazi.html
4. L.H. Gann, "Adolf Hitler, The Complete Totalitarian", The Intercollegiate Review, Fall 1985, p. 24; cited in Henry M. Morris, The Long war Against God, Baker Book House, 1989, p. 78
5.R. Hickman, , Biocreation, Science Press, Worthington, OH, pp. 51-52, 1983; Jerry Bergman, "Darwinism and the Nazi Race Holocaust", Creation Ex Nihilo Technical Journal 13 (2): 101-111, 1999
6.Robert M. Young, Darwinian Evolution and Human History, Historical Studies on Science and Belief, 1980
7.Alan Woods and Ted Grant, Reason in Revolt: Marxism and Modern Science, London: 1993
8.Alex de Jonge, Stalin and The Shaping of the Soviet Uninon, William Collins Sons & Limited Co., Glasgow, 1987, p. 22
9.K. Mehnert, Kampf um Mao's Erbe, Deutsche Verlags-Anstalt, 1977
10. James Reeve Pusey, China and Charles Darwin, Cambridge, Massachusetts, 1983

はじめに

なぜ進化論か

一部の人にとって、進化論やダーウィニズムとは、単に科学的な含意にしかすぎず、外見では毎日の生活の中における直接な関わり合いはないと言われているが、これはもちろんよくある誤解である。生物科学の枠組み内での問題にはとどまらず、進化論は、多くの人に影響を与えてきた“騙しの哲学”の土台を構成しているに他ならない。騙しの哲学イコール唯物論である。

物質の存在のみを受け入れ、人間は物質の堆積物と捉える唯物論哲学では、人間は動物以上の存在ではないと主張しており、それは人間の存在という唯一のルールと“矛盾”する。科学に基づいた近代的な哲学として普及しているにも関わらず、唯物論は、実際全く科学的根拠に基づかない教義にしかすぎないのだ。古代ギリシアで発生したこの教義は、無神論哲学者によって18世紀に再発見された。そして、19世紀にカール・マルクス(Karl Marx)、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)、シグモンド・フロイト(Sigmund Freud)らといった思想家によって科学的分野へと移植されていった。

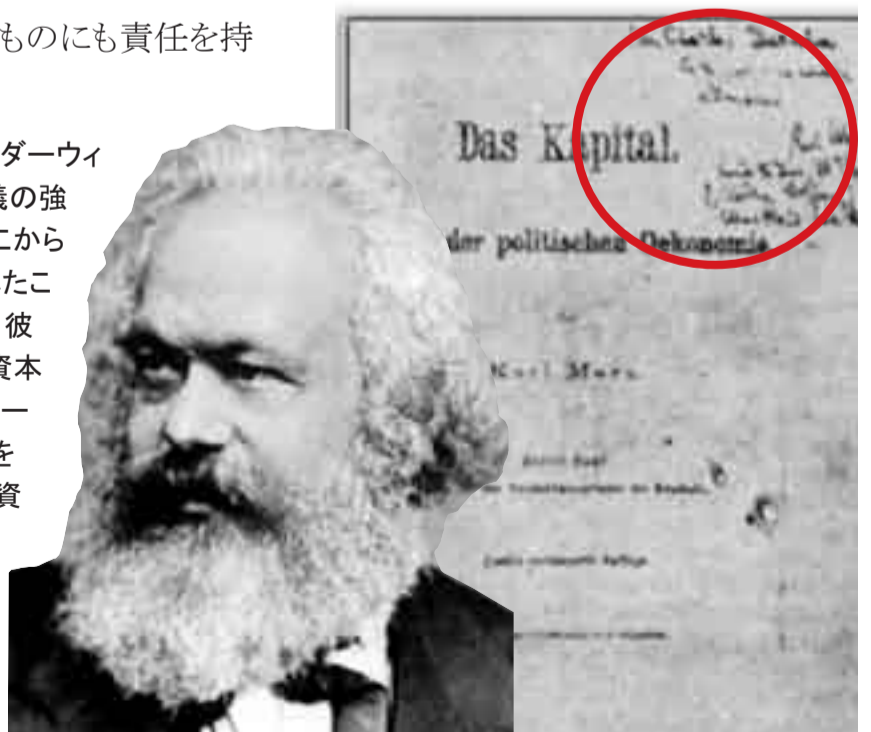
過去2世紀は、物質主義の血塗られた舞台であった。物質主義に基づいたイデオロギー(または、物質主義に対立する競合イデオロギー)は、世界に恒久的な暴力、戦争、そして混沌をもたらした。

1億2千万人の死者をもたらす原因となった共産主義は、物質主義哲学の直接的結果である。ファシズムは、物質主義的な世界観にとって代わるものとして君臨しているように見えるにも関わらず、闘争を通しての発展をコンセプトとし、圧制的な政体、大量虐殺、世界戦争、大虐殺の引き金となった物質主義の概念の基本部分を受け入れている。

この2つの血なまぐさいイデオロギーに加え、個人的、社会的倫理もまた、物質主義によって崩壊させられた。

人を偶然の産物である動物の位置にまで下げ、何ものにも責任を持たない物質主義の騙しのメッセージは、愛、慈悲、自己犠牲、慎み、誠実、正義といった道徳の柱を打ち砕いた。物質主義者の“人生とは闘争である”というモットーにより誤った道へと導かれ、人々は自らの人生が利害の衝突以上の何ものでもないということに目を向けられ、さらに人生とは弱肉強食に左右されるものなのだと信じ込まされた。

過去2世紀にもたらされた人口的な災厄の原因となったこ

カール・マルクスは、ダーウィンの理論が物質主義の強固な基礎を築き、そこから共産主義を生み出したことを明確にしている。彼はさらに彼の傑作『資本論』を捧げることでダーウィンに対する共感をあらわにしている。『資本論』のドイツ語版には「熱狂的信奉よりチャールズ・ダーウィンへ」と記述されている。

の哲学の軌跡は、人々に"闘争の理由"として理解され、さまざまなイデオロギーの中に見られる。宗教を支持すると主張する現代のテロリストもこれに含まれ、その上、罪なき人の殺戮という重罪の1つを犯しているのだ。

進化論またはダーウィニズムは、ジグソーパズルを完成するという点において非常に有効に働くのだ。これは、物質主義が科学的思想であるというおとぎ話をもたらすものである。だからこそ、共産主義と弁証的物質主義の創始者カール・マルクスは、ダーウィニズムは彼の世界観に対して"自然発達史の基礎"だとしているのだ。[1]

しかし、その基礎の部分は腐敗している。近代的な科学的発見により、多くの人が信じてきたダーウィニズムと科学との関連が誤りであることが、これまでに何度も何度も暴かれてきているのである。科学的根拠はダーウィニズムを徹底的に論破しており、我々の存在の起源が進化ではなく、創造によるものだということを露呈している。神は天地万物、そして人を創造したのである。

この著書は、この事実を人に教えるために書いたものである。トルコを始めとし、世界各地で第一版が出版されてから、何百万人の人がこの本を読み、評価してきている。トルコに加え、英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、中国語、ボスニア語、アラブ語、アルバニア語、ウルドゥー語、マレー語、インドネシア語で出版されている。(各国語によるこの本は、すべて無料で www.evolutiondeceit.com からダウンロード可能)

『The Evolution Deceit(進化論の欺瞞)』の影響は、対立者の旗手からも認められている。ハールン・ヤハウャは、『New Scientist』誌掲載の「Burning Darwin」という題名の記事に主題として取り上げられている。この有名なダーウィニストの定期刊行物2000年4月22日号では、ハールン・ヤハウャは"国際的ヒーロー"だとしており、彼の本は"イスラム世界に広く普及している"とその懸念を表明している。

一般向け科学書籍としては第一人者である定期雑誌『Science』。こちらでもハールン・ヤハウャの影響と高度な知識を強調している。『Science 』誌、2001年5月18日の記事「Creationism Takes Root Where Europe, Asia Meet(邦題:進化論の教育をめぐって、霊魂創造説は欧州と亜細亜の交差点から)」では、トルコにおいて『The Evolution Deceit』や『The Dark Face of Darwinism』といった学識ある本は、一部地域において教科書よりも影響力のある存在になりつつあるとしている。この記事の執筆者はさらに踏み込んでハールン・ヤハウャの著書を「北米以外で最も強い反進化論運動に火をつけた」と評価している。

このように、進化論者の雑誌においても『The Evolution Deceit』の影響について注目しているのだ。しかし、このような雑誌ではどれも議論に科学的に反論していない。その理由はもちろん、それが不可能であるからに他ならない。進化論は全く膠着状態にあり、次の章からを読み進んでいけばそれはさらに明らかになるであろう。この本によって、ダーウィニズムが科学的な理論ではなく、物質主義哲学の名の下に支えられた反証や反駁を全く無視した科学的根拠のない教義であることがお分かりいただけることだろう。

『The Evolution Deceit』が、19世紀から継続して人類を間違った方向へと導き続けてきた物質主義のダーウィニストに対し、できるだけ長く貢献し続けることを願う。そしてそれは私たちの生に関する重大な事実を人間に気づかせてくれることだろう。どのようにして人間が形作られたか、そして創造主に対する私たちの使命とは何かを。

知の設計、すなわち"創造"

まず、ここでは"設計"という語を正しく理解することが大切である。神が完璧な設計を創造したと言っても、まず神が最初に計画をしてそれを実行したということにはならない点を考慮していただきたい。天と地をつかさどる主であらせられる神は、創造に"設計"することなど必要ない。神はそのような欠陥を超えて高尚である。神の計画と創造は同時に行われている。

神が物事を発生させる時は「そこに有れ！」と言うだけで事が足りるのだ。

コーランの一説にはこうある

「神が何かを望まれる時、かれが「有れ」と御命じになれば、即ち有るのである」(ヤー・スィーン章82節)

「(かれこそは)天と地の創造者である。かれが一事を決められ、そこに「有れ」と仰せになれば、即ち有るのである」(アル・バカラ章117節)

序文

現代の驚くべき奇跡:
騙しの進化論の信仰

地球上に何百と存在する生きとし生ける者は、奇跡的な機能、一意の行動パターンと完璧な身体的構造を持っている。生命を持つ者すべては例外なく、その細部と美しさはその生き物独自のものを持っている。植物、動物、そしてとりわけ人間は、その外観から人間の裸眼では見ることのできない体内の細胞にいたるまで、全て素晴らしい知識と芸術性をもって創造されている。今日、科学は多岐にわたり細分化されている。そして何万何千人もの科学者たちが各自の分野で、ディテールまで、その奇跡的な性質を暴こうと生命を持つものの細部にわたる研究を続けている。そして生けるものがどうやって存在するようになったのかという問いに答えを見出そうとしている。

これらの一部の科学者たちは、研究において奇跡的な構造を見出しては驚嘆し、知能がこの世に現れたことに驚嘆してきた。そして神の智と聡明がそこに関わっているのを目の当たりにしているのだ。しかしもう一方では、驚くべきことに、これらの奇跡的な機能はすべて、全くの偶然によるものだと主張している。こういった科学者は進化論を信じている者たちである。彼らの観点からは、生命体を形作っているタンパク質、細胞、そして組織は、すべて一縷の偶然から発生したのだとされている。裸眼ではとても見ることができないような細胞内の小器官の奇跡的機能について長年研究を続け著書を出版しているような人間が、並外れたこの構造が偶然によってもたらされたのだなどと信じているとはなんと驚くべきことであろうか。

高名な教授らがそれほどまでに信じるこのような偶然の連鎖は、それを彼らが信じることで外からの観察者がそれを驚愕するままにしておく理由とは矛盾する。この教授たちによれば、いくつかの単純な化学物質がまず組み合わさり、タンパク質を合成したと言う。これは、無作為に散りばめられた言葉の集合体を集めて詩を作ることよりも、さらに可能性の低いものである。また、その他の偶然が、その他のタンパク質の出現に導かれたのだと言う。そしてそれらは偶然にも組織的に合成されたのだと。タンパク質だけではない。DNA、RNA、酵素、ホルモン、細胞小器官、細胞内のこれらすべては非常に複雑な構造を持っており、全ては偶然に発生し組み合わされたのだと言うのが彼らの主張である。その何億もの偶然が重なった結果、最初の細胞が人間になった。奇跡の偶然の能力はそこにとどまらない。これらの細胞はまたまた偶然にも繁殖したのである。問題の主張によれば、他の偶然によってこれらの細胞は組織化され、そこから最初の生物が生み出されたのである。

生物の目玉1つが形作られるのには、何十億という不可能な出来事が一斉に重ならなければならない。ここにも、偶然という盲目のプロセスの方程式がある。まず、頭蓋骨のもっとも適切な箇所に、2つの非常に適切な穴があいた。そして、偶然にも細胞はその穴の中で目を構成し始めた。

周知のとおり、偶然は生み出したかったものの知識に作用したのである。その当時、そのような例は1つも見られなかったため、最初から"偶然"は、見る器官、聞く器官、息する器官を知っていたということになる。思想が強く影響する高名な教授らや科学者たちが献身してきたものにしては、全く不合理なシナリオである。今ですら、子供っぽい頑固さをもって、このようなお伽話を信じるのを拒絶する者を排除しており、非科学的で偏屈であるとして非難している。これ

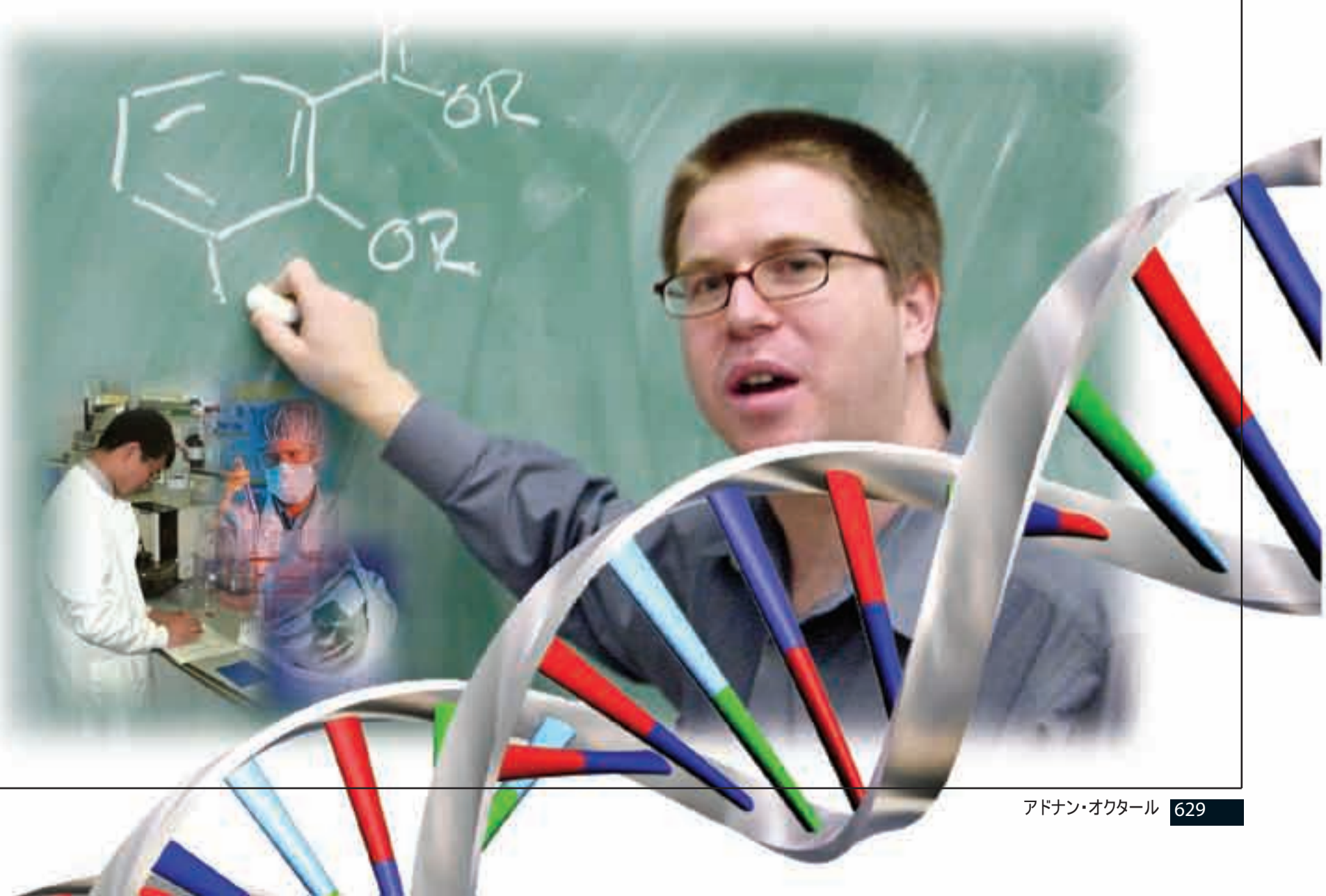
は、地球は平面ではないと主張した者を処罰したような偏屈で狂信的で、無知な時代遅れの精神状態と何ら変わりはないのである。

その上、そういった輩の一部は、自らをイスラム教徒と名乗り、神を信じていると言うのである。彼らは“神がすべての命を作り給われた”という言葉を“非科学的”だと感じるため、その代わりに「生命は、無意識のプロセスのうちに、何百万もの奇跡的な偶然が重なって発生したのである」と信じている。

仮に、彫刻が施された石や木の偶像を彼らの目の前に置き「この偶像がこの部屋とこの部屋にいるものたちを作りだしたのだ」と言ったなら、彼らはそんな馬鹿なことはあるはずがないと言い、信じることを拒否するだろう。それにも関わらず、「偶然という無意識的なプロセスがゆっくりとこの世界と素晴らしい生命体をもたらし、壮大な計画によって生き物が生まれたのだ」ということが偉大な科学的説明だというナンセンスを宣言するのである。

端的に言えば、こういった人々は偶然を神と見なしており、それを智、意識、生命、この森羅万象すべての感覚のバランスを創造するに十分なほどパワフルなものであると主張している。生命体を神が創造したと言われたとき、限りない知恵を備えた教授たちは、進化論を教える教授たちはその事実を受け入れることを拒絶した。そして無意識で無知で、力のない、自分自身の意思を持たない何億もの偶然が、創造の力なのだと言い放った。

呪いにかけられているかのように、教養、知性、知識ある人々がこんなにも大勢このような分別なく非論理的な主張を受け入れるという事実こそが奇跡的なことである。同じように、神は並外れた組織と特質を備えた細胞のような奇跡的なものを創造したのである。進化論者たちは奇跡的に盲目であり、すぐ目の前に見えているものを見ようとしないように理解しようとしていないのである。幼い子供ですら分かるのに、進化論者たちが見ることのできないこの事実は、神が起こした奇跡のひとつであり、何度言われてもそれを受け入れることはできないようである。

この本を読み進めるにあたり、その奇跡に何度も遭遇することであろう。また、進化論は科学的事実の前に完全に崩壊していくこともお分かりいただけると思う。ダーウィニズムは偽りであり、理性や理論とは全く相容れず、ただ進化論を擁護する者たちの価値を下げるものなのである。

第一章

偏見からの解放

多くの人は、科学者の言うことを、まるごと真実だと鵜呑みにしている。科学者だって哲学的、思想的偏見を持っている場合もあるのだとは考えにも及ばないようである。だが事実は、進化論者たちは自分たちの偏見と哲学的観点を、科学を口実に人々に押し付けているのだ。例えば、無作為に発生する出来事は、不規則性と混乱しかもたらさないと気付いていたとしても、それでもこの万物と生命体組織で見られる驚くべき計画と設計は偶然の産物によるものだと主張するだろう。

生物学者であれば、タンパク質の分子、生命の基盤には驚くべき調和があり、そしてこれが偶然によってもたらされたものであるはずがないということを簡単に把握できることだろう。それにも関わらず、彼らは、このタンパク質の出現は古代の地球環境において何十億年前に偶然によってもたらされたのだと主張している。さらに主張はよどみなく続く。1つだけでなく、何百万のタンパク質が偶然によってもたらされ、そして驚くべきことに、それらは一体化して最初の生命を持つ細胞を形成したのだと言うのだ。さらに、彼の盲目的頑固さを持った見解を弁護する。彼らが"進化論者"的科学者である。

同じ科学者が、例えば道路を散歩中に3つのレンガが重なり合っているのを見つけたとしても、決してそれレンガが偶然によって3つ重なり合ったとは言わないだろう。もちろん、そのように主張するような人は頭がおかしいと思われてしまう。

それでは、普通の出来事を理論的に評価できるような人が、なぜ、自分自身の存在については無分別に振舞うのであろうか。科学の名の下にこういう姿勢をとるということを主張することは不可能である。なぜなら科学的アプローチには、選択肢すべてを考慮に入れることが必要であるからだ。ある特定のケースに関して2つの可能性あった場合には、両方の選択肢を考慮にいれなくてはならないのだ。

2つの選択肢のうちのひとつがもう一方に比べ、その可能性が大幅に低い場合、理性的、かつ科学的な行動は、可能性が99%のもう一方の選択肢について、それが有効なものかどうかを考えることである。

この科学的基礎を頭に入れ、さらに続けよう。どうやって生命体が地球にもたらされたかについて、2つの見識が述べられている。1つは、神が生命あるものを現在の複雑な構造に創造したというもの。2つ目は、生命は無意識のうちに、無作為の偶然によって形成されたというもの。後者は進化論によって主張されているものである。

たとえば分子生物学など科学的なデータを参照すれば、進化論者が主張するように生きた細胞のたった1つでも、または現在認められる何百万のタンパク質の1つでも、偶然によってもたらされたというようなチャンスはないのだということが分かる。次の章で説明するように、蓋然性の計算によっても何度も証明されている。進化論者の観点から見る生命の出現が正しいという可能性はゼロである。

これは、まず最初の観点が"100%"正しいという可能性があるということを意味する。すなわち、生命は意識的にもたらされたのだと。他の言い方をすれば、"創造された"のである。全ての生命体は優れたパワーと、智と、知識に称えられた創造者の設計によりもたらされたのである。この現実は、単に説得力の問題ではない。智、論理、科学を1つにした結果もたらされる当然の結果なのである。

この状況下で、"進化論"科学者は、彼らの主張を引っ込めなくてはならず、明確で証明されているという事実を受け入れなくてはならないのだ。そうしないということは、真の科学者であるというよりは、彼らの信じる哲学、思想、教義のために科学を流用しているのだということを提示しているも同じなのである。

“科学者様”の怒り、頑固さ、偏見は、現実に向き合うたびに、さらに強くなっていく。彼の姿勢は“信仰”の一言で説明できるのではないだろうか。しかし、これは“迷信の信仰”である。なぜなら、全ての事実を無視しているということの説明に他ならないからである。または彼の想像の中で構築した不合理なシナリオへ生涯献身するための行動なのであろう。

らされたのだと。他の言い方をすれば、“創造された”のである。全ての生命体は優れたパワーと、智と、知識に称えられた創造者の設計によりもたらされたのである。この現実は、単に説得力の問題ではない。智、論理、科学を1つにした結果もたらされる当然の結果なのである。

この状況下で、“進化論”科学者は、彼らの主張を引っ込めなくてはならず、明確で証明されているという事実を受け入れなくてはならないのだ。そうしないということは、真の科学者であるというよりは、彼らの信じる哲学、思想、教義のために科学を流用しているのだということを提示しているも同じなのである。

“科学者様”の怒り、頑固さ、偏見は、現実に向き合うたびに、さらに強くなっていく。彼の姿勢は“信仰”の一言で説明できるのではないだろうか。しかし、これは“迷信の信仰”である。なぜなら、全ての事実を無視しているということの説明に他ならないからである。または彼の想像の中で構築した不合理なシナリオへ生涯献身するための行動なのであろう。

物質主義の盲目

ここで語る偽の信仰とは、“物質主義哲学”のことである。物質は無限に存在してきており、物質以外のものは有り得ないと主張するものである。この物質主義哲学では、進化論は“科学の基礎”と呼ばれており、この哲学を支えるために進化論は盲目的に擁護されている。20世紀の終わり頃に科学が進化の主張に反証したとき、それは歪められ、物質主義を生かしておくために進化論を支持する位置に置かれた。

トルコの最も著名な進化論生物学者の一人が記した数行には、盲目的な信仰によって導かれ判断力と分別がどのように歪められているかがよく分かるような好例が示されている。この科学者は、生命にとって欠かせない酵素のひとつであるシトクロムCの偶然における形成の蓋然性について次のように論じている。

ミカエル・ベーエ(Michael Behe):「細胞の完全なまでの複雑さを、当惑の混じりいった沈黙で取り囲む」

シトクロムC塩基配列形成の蓋然性は、ほとんどゼロに等しい。ということは、生命に特定の塩基配列が必要だとすれば、これが実現する可能性というのは全宇宙においても、ただの1度だけということとなる。そうでなければ、説明できない何か超自然的な力がこの形成に作用したとしか考えられないのだ。後者を受け入れるのは科学の目標としては適切ではない。従って、前者の仮説を受け入れるしかないのだ。[2]

この科学者は、創造説よりも“限りなくゼロに等しい”可能性を受け入れる方が“より科学的”だとしている。科学の規則によれば、もしある出来事に2つの選択試となる事実があったとして、仮に一方の実現の可能性が“限りなくゼロに近い”としたら、もう一方が正しい選択となる。物質主義のアプローチでは、優れた創造主の受け入れを禁じている。この禁忌は、科学者と、全く理由と反する主張を受け入れるために同じ物質主義の教義を信じる者の多くを駆動する。

こういった科学者を信じる人々は、同時に物質主義の呪いによって盲目にされ、憑りつかれてしまい、彼らの本や記事を読む際に、同じく重要でないものを受け入れてしまうのだ。

この独断的な物質主義の考え方こそ、科学界で多くの著名な人々が無心論者である理由なのだ。偏見のない心を持ち、この呪いの隷属状態から解き放たれた者は、創造主の存在を認めることを躊躇するはずがない。創造説が最近非常に受け入れられているという事実を擁護する運動をサポートする高名な米国の生化学者、ミカエル・J.ベーエ(Michael J. Behe)博士は、生命組織の創造説を信じることを拒否する科学者をこう表現している。

過去40年以上にわたり、近代の生化学分野は細胞の秘密を紐解いてきた。何万人もの人々が研究所の退屈な作業

に身をささげることを余儀なくされてきた…細胞を探ることで命を分子レベルで探るこれらの努力の累積によって得られた結果は、"デザイン"の一言であった。結果はあまりにも曖昧で、あまりにも重大なため、科学史上で最も重大な業績として位置づけるべきである…。細胞の完全なまでの複雑さを、好奇と当惑の混じりいった沈黙で取り囲む代わりに、科学界はなぜこの驚くべき発見を貪欲に擁護しないのか。なぜ、知的デザインについての研究は知性ある研究者の手によって行わないのか。"問題"の一面が知的デザインとしてラベル付けされているのなら、もう一方には"神"のラベルがついている。ここにジレンマがあるのだ。[3]

進化論の宣伝にいそしむリチャード・ドーキンス(Richard Dawkins)

これは、一冊は著書を読んだことのあるような、雑誌やテレビで見られる無神論者であり進化論者である科学者の苦境である。こういった人々によって行われる科学的研究すべては、創造主の存在を提示するのである。しかし、彼らは独断的な物質主義的教育漬けにされてきたことによりあまりにも機知に欠け、盲目になっており、(創造説の)否定をいまだに押し通しているのである。

創造主の証拠や兆候といったものを全く無視してきた人々は、感覚がすっかり鈍くなってしまっている。無感覚が原因の愚かな自惚れに囚われてしまっているため、非論理的なものさえも徳として指示するようになっているのである。好例は、著名な進化論者リチャード・ドーキンス(Richard　Dawkins)である。彼は、人が聖マリア像が手を振るのをその目で見たとしても、奇跡を目撃したとは思わないようにと要求している。ドーキンスはこう記述している。「もしかしたら、可能性は低いとしても像のすべての原子が同じ方向に一度に動くようになるということは、全く起こりえないことではない」[4]

歴史上、いつの時代にも、懐疑論者の心理学は存在してきた。コーランにも次のような記述がある。

「もし、われわれが、かれらの天使たちを遣し、また死者がかれらに語りかけ、また凡てのものをかれらの前に集めても、アッラーの意図でない限り、かれらはきっと信じないであろう。全くかれらの多くは(真実を)無視するのである」(アル・アンナーム章111節)

この言葉で明らかになっているように、進化論者の独断的な考えは、今に始まったものではないし、彼らにとってそれは特別なものでさえある。事実、進化論科学者が維持するのは、近代的科学的考えではなく、野蛮な異教徒の地域社会から支えられてきた無知なのである。

コーランの別の一節では、これと同じ心理が定義されている。

「仮にわれわれがかれらのために天の門を開いて、(一日)かれらを登らせようとしても、かれらは必ず"わたしたちの目は本当に眩んでしまった。いやわたしたちは魔法にかけられている"と言うであろう」(アル・ヒジュル章14-15節)

進化論者の大量洗脳

先に引用のあった一節にあったとおり、なぜ人が自分自身の存在についての現実を見ることができないかという理由のひとつは、彼らの理論を阻止する"呪い"のようなものである。これは、進化論の世界的な受容の根底に横たわっている"呪い"であり、この"呪い"とは、洗脳によって得られた条件付けである。人々は、進化論の正当性強烈な洗脳にさらされているため、歪みが存在することすら気づかない。

この洗脳によって、脳の知識と判断の機能を不能にしてしまうという否定的な効果がもたらされる。よって継続的な洗脳による結果、脳は自らによる知覚でなく、洗脳された結果により事実を知覚し始める。この現象は他の例にも見られる。例えば、もし誰かが催眠術をかけ、今寝ているのがベッドではなく車だと洗脳したとすれば、催眠術後ベッドは車として知覚されることになる。彼は心からそのように見ているので、自分が正しいと疑うことなく、非常に論理的で理性的であると考える。洗脳のメカニズムのパワーと効果を示すこのような例は、科学文献で報告されている数限りない実験により証明されている科学的事実であり、心理学と精神医学の教科書では日常茶飯事となっている。

これに依存する進化論と物質主義世界観は、このような洗脳方法で大衆を騙したのである。継続してメディア、学術文献、そして"科学"的土台において進化論の洗脳にさらされてきた人々は、この理論を受け入れることが実際は最も基本的な理由の法則と相反していることに気づくことができない。同じような洗脳は、科学者をも捕らえている。昇進

していく科学的キャリアにその名を連ねる若者たちは物質主義者の世界観を時間が絶つごとに受け入れている。この呪いにかけられて、多くの進化論科学者たちは19世紀の不合理で時代遅れの、科学的根拠によって論破されて以来久しい進化論者の主張を科学的に立証しようとしてきた。

また、科学者を進化論者、物質主義者にと扇動してきた別のメカニズムがある。西洋の国では、科学者は、学術的に認知されるため、または科学雑誌に論文を載せるためには、もしくは昇進するためには一定の標準となる研究を行わなくてはならない。進化論をすんなりと受け入れることは、まず第一の基準といえる。このシステムは、科学者を独断的な信仰のために科学的キャリアや生涯をささげるように突き動かしてしまう。米国の分子生物学者ジョナサン・ウェルズ(Jonathan Wells)は、この圧力の構造を彼の2000年に出版された著書『進化のイコン』で記している。

ジョナサン・ウェルズ(Jonathan Wells)作『進化のイコン』

> **...独断的なダーウィニストは狭い解釈に始まり、これが科学のたった1つの方法であるかのように強要する。それに対する批評は非科学的というレッテルが貼られ、批評記事は、独断家によって支配される編集委員を持つ主流となる学術文献から拒絶される。その批評は否定され、独断家たちに"仲間"の批判記事のための資金提案を送る政府機関から資金面での支援を拒絶され、結果的には、その批判は科学界すべてから追放されてしまうのだ。いつの間にか、まるでギャング団の悪事の目撃者のように、ダーウィン説信奉者に対立する文献証拠は消えてなくなることとなる。または、証拠は特化した出版書の中に埋もれてしまい、専心する研究者にしか発見されることはなくなってしまう。批判がいったん沈黙の中にたたされ、反対証拠が闇に葬り去られると、独断家たちは、自分たちの理論には科学的なデータベースがあると発表し、それに対立する証拠はなくなってしまうのだ。**[5]

これが"進化論は、未だに科学の世界で受け入れられている"という主張の裏に隠れている事実である。進化論は生きているが、それは科学的価値があるという理由からではなく、思想的な義務があるという理由によるものである。この事実に気づいている非常に少数の科学者は、裸の王様を指差すという危険をおかす可能性があるのである。

この本の残りの章では、今まで進化論者に無視されてきた、または"特化した出版書の中に埋もれてきた"進化論に対立する近代科学の発見を振り返り、神の存在の明確な証拠を提示したい。読者には、進化論が実際は科学によって裏切られたペテンであり、創造説の事実のベールを剥ぎ取るものであるということをその目で確認していただけるであろう。読者には、人々の心を縛り判断能力を奪う呪いから目を覚まし、この本に相関していることを真剣に反映していただきたい。

もし読者がこの呪いから解き放たれ、偏見のない明瞭で自由な思考ができるようになったら、すぐにはっきりとした真実を発見することだろう。この避けることのできない事実は、あらゆる面で近代科学により証明されており、生命組織は単なる偶然によってもたらされたのではなく、創造によってもたらされたのであるということだ。人は自分自身がどうやって一滴の水からもたらされたのかということ、また他の生命体の完全性を考えた時、その創造の事実を簡単に見出すことができるだろう。

第2章

進化論の歴史概要

進化論者の思考ルーツは、神の創造を否定しようとする非教理的信念を持っていた古代にまで遡る。古代ギリシャの反宗教的哲学者の多くは、進化論を支持した。哲学史を振り返ると、進化論が多くの反宗教的哲学者の基礎概念だったことが読み取れる。

しかし、近代科学の誕生と発展に大きく貢献をしたのは、古代反宗教的哲学ではなく、神への信仰精神である。近代科学を築き上げた者の多くは神の存在を信じており、科学を研究しながら神が創った宇宙の発見、神の掟や神の創造の詳細を発見することに努めた。コペルニクス(Copernics)、ケプラー(Keppler)、ガリレオ(Galileo)などの天文学者、古生物学の開拓者であるキュビエ(Cuvier)、植物学と動物学の開拓者リンネ(Linnaeus)、そして最高の生物学者と謳われているアイザック・ニュートン(Issac　Newton)。彼らは皆、神の存在のみならず、全宇宙を神の創造と信じ、科学を学んだ。[6] 我々の世代きっての天才と言われている敬けんな科学者アルバート・アインシュタイン(Albert　Einstein)も神を信じ、「本物の科学者であれば誰もが深い信仰を持つはずだ。宗教を信じない科学者は不完全である」と綴っている。[7]

物理学の創始者の一人であるドイツ人物理学者のマック・スプランク(Max　Plank)は、「科学に強く関係したことのある人間であれば、科学の神殿の入り口には『信仰を持て』と書かれていることに気付く。信仰は、科学者になくてはならないものである」と述べている。[8]

進化論は、古代の唯物論的哲学を再び呼びさますことで浮上した唯物論的哲学から誕生し、19世紀に広く知られるようになった。前に述べたように、唯物論は完全な物質的要素で自然を説明しようとする。最初から創造を否定することで、有生・無生に関わらず、全てが創造という行為とは全く関係のない偶然の結果であり、後に細胞の配列などが生まれたと捉える。

人間は、秩序を見るといつでも神の意志の存在を意識するようにできているが、この基本的な人間の思考の特徴とは反対に、唯物論的哲学は19世紀の中ごろに"進化論"を生み出した。

ダーウィンの想像

今日知られている進化論を提唱したのは、イギリスの素人自然科学者、チャールズ・ロバート・ダーウィン(Charles Robert Darwin)である。

ダーウィンには物理学を勉強した経験はなく、ただ素人感覚で自然と生命体に興味を持っていた。そしてその彼の好奇心が、彼をH.M.Sビーグル号で行く探険旅行に乗船させた。1832年にイギリスを出たビーグル号は、世界の異なる地域を5年間に渡って周った。多くの生物に圧倒されながらも、ダーウィンを一番驚かせたのは、ガラパゴス諸島に生息する鳥類だった。彼は鳥の口ばしに見受けられる相違は、生息環境への適合性が関係していると考えた。また、この推測を元に、生命と生命体の起源には生息環境への適合性という概念があると考えた。ダーウィンは、神が多種にわたる生命体を個別に創造した考えに反論し、全生命体の祖先は同一で、生息自然環境への適合結果として異なる生命が誕生していったのではないか、と主張した。

チャールズ・ダーウィン
(Charles Darwin)

ダーウィンの仮説は科学的な発見や実験に基づいて立てられたものではなかったが、その時代の唯物論主義生物学者の支援と激励に支えられながら、その仮説を大きな理論に育ていった。進化論の骨格は、最高の形で生息環境に適合した生物が次の世代に同形を引き継いでいったという考えだ。これらの有利な特性が時と共に強化され、結果的に各生物を祖先とは全く異なる生き物に進化させたのではないかと。(これらの有利な特性の誕生の秘密は、その時代にはまだ明らかになっていなかった。)ダーウィンによると、この想像上のメカニズムで最も発達した結果が人類である。

ダーウィンはこの過程を"自然選択による進化"と呼んだ。彼は、1つの生命体の起源は別の生命体だという"生命体の起源"を発見したと信じ、1859年にそれに関する著書『origin of species By Means of Natural Selection(種の起源)』を出版した。

ダーウィンは彼の理論に多くの問題が存在した事実を承知していた。そしてそれを著書内の「学説の難点(Difficulties on Theory)」で明らかにしている。問題の多くは、化石記録、偶然の進化では説明しきれないほどに複雑な生命体の器官(目など)、そして生命体の本能に起因するものだった。ダーウィンはこれらの問題が、新たな発見によって解決されることを願い、そして彼自身もこれらの問題解決に全くでたらめな説明を提案し続けた。アメリカ人物理学者のリプソン(Lipson)は、ダーウィンの"困難"を次のようにに語っている。

種の起源を読み、実際にはダーウィンは、我々が思うよりも、自身の論理に確信を持てていなかったのだと思った。例えば、「学説の難点」では、進化論に対するダーウィン自身の疑念が読み取れる。私自身、物理学者として、目の突出経緯に関するダーウィンのコメントには特に興味を持った。[9]

進化論立案の過程で、ダーウィンは多くの先輩進化論生物学者に感銘を受けた。その主となる人物はフランス人生物学者のラマルク(Lamarck)[10]である。ラマルクによると、生物は、生涯で得た特性を次の世代に引き継いでいくことで、有利な進化を繰り返した。例えば、キリンはより高い場所にある食べ物を食べる為に何世代にも渡り首を少しずつ長く伸ばし、アンテロープのような動物から進化した。ダーウィンは、ラマルクの提唱した習得特性の引継ぎ理論を生物の進化要素として取り入れた。

しかし、その時代には十分な技術が存在しなかったため、ダーウィンやラマルクの主張には誤りがあった。当時は遺伝子や生物化学などの科学分野は名前すら存在せず、彼らの理論は100％彼らの想像力に頼ったものであった。

遺伝子の法則を発見した司祭グレゴール・メンデル(Gregor Mendel)は、進化論は行き止まりにあると位置づけている。

ダーウィンの本の影響が波紋を呼ぶ中、1865年にオーストラリア人植物学者のグレガー・メンデル(Gregor Mendel)が遺伝的形質の法則を発見した。この法則は、実際には1800年代後半まで余り耳にされることはなかったが、1900年初期から重要視されるようになった。これが、遺伝子科学の誕生である。その後、遺伝子と染色体の構成が発見され、そして1950年代に発見された遺伝情報を取り込むDNA分子構造の発見が進化論に危機を及ぼした。なぜならば、生命のとてつもない複雑性と、ダーウィンの提唱した進化メカニズムの無効性が暴かれてしまったからである。

これらの発見はダーウィンの進化論を歴史のゴミにするはずであった。しかし、進化論を科学的な土壌に戻すべく、ダーウィンの理論の改訂・見直しを行うことを主張した人物もいたため、進化論が完全に破棄されることはなかった。彼らの努力は、科学的懸念ではなくイデオロギー的概念に基づいており、進化論擁護の背景を理解していないものにとっては不可思議でしかない行動である。

ダーウィン時代における、化学と技術レベル

ダーウィンの仮説を提唱した頃には、遺伝子分野、細菌学、生物学などの分野はまだ存在していなかった。もしその仮説が提唱される前にこれらの分野が誕生していれば、ダーウィンも、彼の理論が非科学的であることに簡単に気付かされ、その無意味な主張を押し通さなかったかもしれない。種を判別する情報は既に遺伝子の中に存在し、自然選択が遺伝子を操作し、新種を誕生させることはできない。

同様に、当時の科学界は、細胞の機能や構造に関する知識が浅く、荒削りであった。もしダーウィンが電子顕微鏡を使って細胞を見る機会を与えられたら、細胞小器官の複雑性と、その驚くべき構造を目の当たりにしただろう。そしてもし彼が生物数学の概念を知っていれば、たった1つの細胞はおろか、タンパク質分子ですら偶然からは生まれないことに気付いただろう。

細胞の詳細研究は電子顕微鏡の発明があってやっと可能になった。初期の顕微鏡しかなかったダーウィンの時代では、細胞の外観を見ることが精一杯だった。

生体細胞とは、科学者を圧倒させる絶世の創造である。電子顕微鏡で観察すると、細胞内には、ハチの巣を思い出させるような、高活性構造を見ることができる。毎日何百万もの細胞が体内で死に、新たな細胞に取り替えられる。人間の体を殺さないために、何億もの細胞が団結、一致して働いている。

こうした細胞がこのような組織的活動を勝手に身に着けたとまとめるのは、論理的に馬鹿げている。電子顕微鏡の助けを借りないと内部が見られない細胞を、神が完全化しそれに秩序をもたらしたのだ。全生命に、神の比類のない創造と無限の知識が存在することは、誰もが認めざるを得ないほど明確である。

新ダーウィニズムの必死の努力

20世紀初頭に発見された遺伝子の法則により、ダーウィンの理論は大きな危機を迎えた。しかし、ダーウィンへの忠誠心が固かった科学者グループは、解決法を生み出すことを試みた。彼らは1941年地質学会が開催した集合に揃って参加した。長い議論の末、G・レッドヤード・ステベンス(G. Ledyard Stebbins)、セオドシウス・ドブジァンスキー(Theodosius Dobzhansky)などの遺伝学者、アースト・マイヤー(Ernst Mayr)、ジュリアン・ハックスレー(Julian Huxley)などの動物学者、ジョージ・ゲイロード・シンプソン(George Gaylord Simpson)、グレン・L・ジェプセン(GlennL. Jepsen)などの古生物学者、ロナルド・フィッシャー(Ronald Fisher)やシーウェル・ライト(Sewall Right)などの数学的遺伝学者は、ダーウィン説をどのように"修正"するか決定した。

このグループは、ダーウィン自身も説明することができず、ラマルクの考えにただ依存した進化論の問題の1つ、生命体の進化に関係したと推測される有利な変異の起源に注目した。そして、"無作為な突然変異"案を生み出した。彼らは、ダーウィンの自然選択論に突然変異の概念を加えたこの理論を、"現代進化論"と名付けた。直後、この理論はネオダーウィニズムとして知られるようになり、理論提唱に力を注いだ人物はネオダーウィニストと呼ばれるようになった。

その後の年月は、必死にネオダーウィニズムの実証を試みる時となった。生命体の遺伝子に起こった突然変異ないしは偶然が、遺伝子にとって有害であるという事実は既に明かになっていたが、ネオダーウィニストは、有利な突然変異の例を挙げるために、何千にも及ぶ突然変異の実験を行った。結局、全ての実験が、完全な失敗に終わったのだが。

彼らは最初の生命体が、何かを気に原始地球から誕生したことを証明しようとしたが、これもまた同様に失敗に終わり、偶然から生命を誕生させる実験は一度も成功しなかった。確率論は、生命体の構成成分であるタンパク質1つすら偶然からは生まれないと証明している。また、20世紀の研究設備を持ってしても、進化論が原始の無制御状態の地球上で偶然に生まれたと仮定する細胞のたった1つですら復元することができていない。

ネオダーウィニズムは、化石記録によっても論破された。ネオダーウィニズムが主張した生命体の原種から完了形への段階的進化の証拠となるべき"移行形"は、世界中のどこにも見つかっていない。また、2つの身体構造上の特徴が比較解剖学的にも全く異なることから、そこに祖先、子孫関係があるはずがないのである。

いずれにしてもネオダーウィニズムは科学的理論ではなく、"偽りの宗教"または空論の教義に過ぎない。カナダ人の科学哲学者で、彼自身も忠実な進化論者であるマイケル・ルーセ(Michael Ruse)は、1993年の会議で以下のスピーチをした。

勿論、過去にも、そして現在にも、進化論は進化論者にとって、非宗教的な宗教のような役割を果たしてきた。進化論を科学的に問う場合、そこには自然主義に似た主義への忠誠心が必要である。[11]

進化論の中心となっている人物は、この忠誠心のために実際の証拠とは異なるこの理論を未だに擁護するのである。しかし彼ら自身も、さまざまな進化解釈モデルの内のどれが"正しい"ものであるかに関しては同意に至っていない。これらのモデルの中でも最も重要なモデルが、"断続平衡"として知られている素晴らしいシナリオだ。

試行錯誤:断続平衡

進化論を信じる科学者の大半が、ゆっくりとした、段階的な進化を提唱するネオダーウィニズム受け入れている。しかし近年、"断続平衡"と呼ばれる新しいモデルが提唱された。このモデルもダーウィンの理論同様に、種が変化を経て誕生することには同意をしている。ただし、この変化が小さな変化ではなく突然の大規模な変化であり、その結果として新たな生物が生まれるのだと提唱した。

この理論を大きく支持した人物は1970年代に現れた。二人のアメリカ人古生物学者ナイル・スエルドリッジ(Niles Eldredge)とスティーブン・ジェイ・グールド(Stephen Jay Gould)は、ネオダーウィニストの理論が化石記録によって論破されたことを十分に承知していた。生命体が段階的な進化を経て誕生したのではなく、突然完全体で誕生した事実を化石が証明した。ネオダーウィニストは、過去でも現在でも、姿を消した移行形がいつの日か見つかると信じているが、これが空しい夢だと気付いていたエルドリッジとグールドも、彼らの進化論教義を忘れることができず、ゆえ

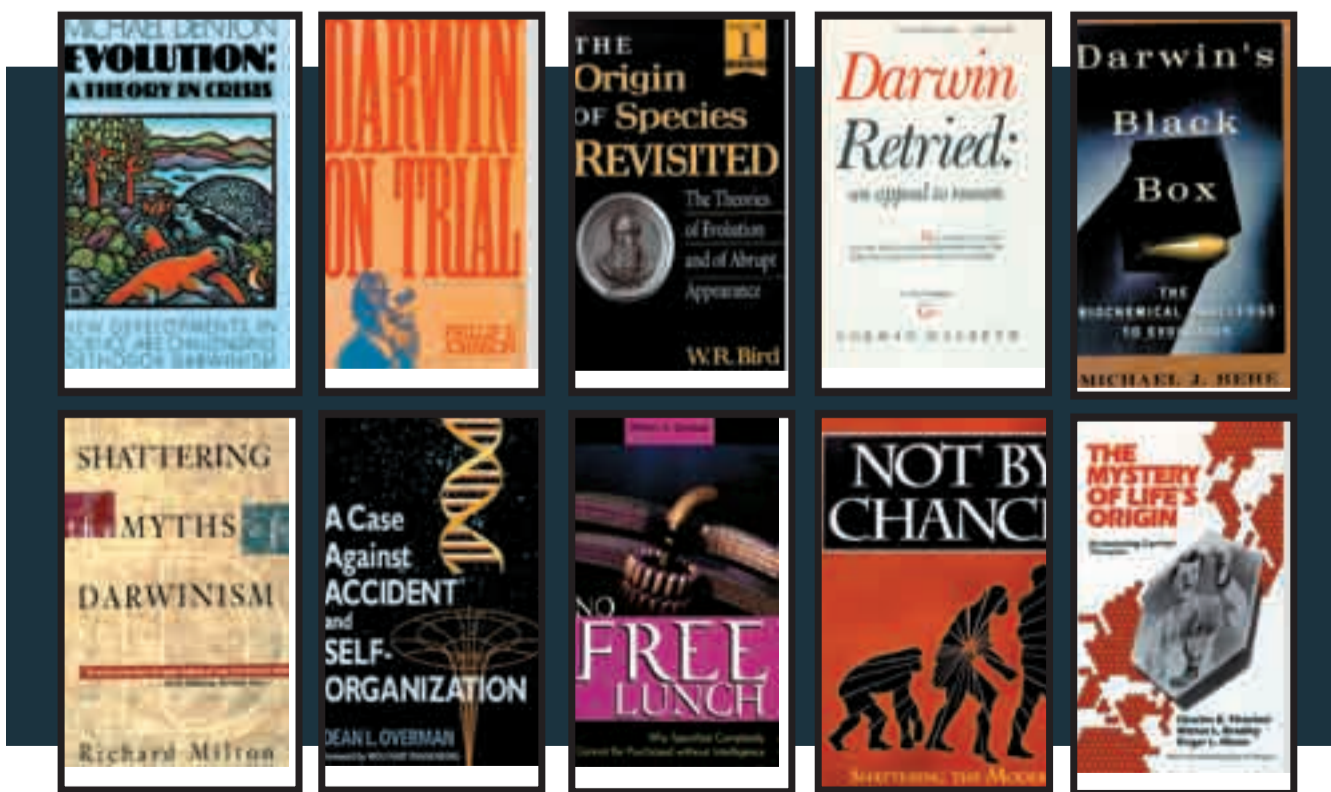
に彼らは新しいモデル、断続平衡を提唱した。これが、変化は小さな変化を重ねた結果起こったのではなく、突然の大きな変化により起こったのだという主張である。

このモデルもまた空想以外の何でもなかった。例えば、エルドリッジとグールドを援護した欧州人古生物学者のO・H・シンデウォルフ(O.H. Shindewolf)は、爬虫類卵の遺伝子構造に偶然に起きた"著しい突然変異"の結果、鳥が生まれたと述べた。[12] また、同理論によれば、突然の大きな変化により、陸上動物が巨大なクジラになることが可能らしい。これら主張は、遺伝子学、生物物理学、生物化学の全ての規則に反し、蛙がお姫様になる童話と同じぐらい非科学的である。しかし、ネオダーウィニズムの危機に苦しんだ何人かの古生物学者は、ネオダーウィニズムより更に馬鹿げているこの理論を受け入れた。

このモデルの唯一の目的は、ネオダーウィ二ストモデルが失敗した、化石記録との相違点に対する解答を提供することだった。しかし「鳥は、突然爬虫類の卵から突然誕生しました」という一言で化石記録との相違点を説明することは全く合理的でない。なぜなら、進化論者自身も認めているように、種の進化では、遺伝子情報に、莫大かつ有利な変化が起きなければならない。しかし、現実にはどのような突然変異も、遺伝情報を良質にすることや新情報を加えることはできず、断続平衡モデルから推測される"著しい突然変異"は、"著しい"遺伝情報の減少と障害の原因となるだけである。

更に"断続平衡モデル"は、ネオダーウィニストモデルに対する疑問でもあった、生命の起源への解答を持たないことから、はなから崩壊しているモデルと言える。たった1つのタンパク質すら偶然で生み出せないのであれば、無数のタンパク質が断続的に、または段階的に進化したという主張は意味を成さない。

これにも関わらず、今日でも、"進化"が議題になると必ず脳裏をよぎるのがネオダーウィニズムだ。次の章では、ダーウィニズムにおける2つの架空構造を調べ、その上でそのモデルを検証するために化石記録を参照する。そして最後に、ネオダーウィニズムや"飛躍による進化"などのさまざまな進化論者モデルを無効にした生命の起源の謎について追求する。

しかしその前に、今後全ての局面において、進化シナリオがおとぎ話に過ぎない、現実とはかけ離れた巨大な偽りだという事実を読者の皆様に忠告しておきたい。進化論は140年もの間世界を騙すために使われてきたシナリオだが、最新の科学的発見のお陰でついにこれ以上の弁護が不可能となっている。

現在では、アメリカとヨーロッパを中心に、世界各国の科学者が進化論に反論し、その理論の無効性を問う本が数多く出版されている。上記はその一例である。

移行型は存在しない

進化論によれば、生命体は突然変異をへて、他の種に進化する。しかし、近代科学は、これが虚偽の事実であることを証明した。

…もし、ある種が、気付かないほど細い漸次的変化を経て他種へと進化したのであれば、何故自然は混乱状態になく、完全体の生物に溢れているのだろう？…この理論に則れば無数の移行型が存在したはずだが、何故地球に刻まれているはずの存在の証を目にしないのだろう？地球上の地層がそれらの化石に溢れていないのだろう？地質学は、このような見事に段階的な器質的連鎖の存在を実証しない；そしてもしかするとこの問題が最も大きく、明快な私の理論に対する反論だろう。
Charles Darwin, The Origin of Species, Oxford University Press, NewYork, 1998, pp.140, 141, 227

一般的な人間の身体構造

初めに、ある種が全く異なる種に進化したのであれば、進化の過程で無数の中間段階が存在したはずである。

生命体を発達させる起因として進化論者が提唱した突然変異は、3つの脳、4つの目、水かきの付いた手などを持つ移行型、またはそれ以上に奇妙な生物を生み出したはずである。

進化論によれば、生命体は突然変異を経て他の種に進化する。しかし、近代科学は、これが虚偽の事実であることを証明した。
初めに、生物が別の全く異なる生物に進化したのであれば、進化過程において、無数の中間段階が存在したはずである。そして、地質記録は移行型化石に溢れているはずだ(例えば、進化途中の生物の化石)。しかし、現在までに発掘された約100万個の化石は全て完全体で、その全てが把握可能な種である。もし進化が起きたのであれば、地球は何億にも及ぶ移行型の化石で溢れているはずだ。更に、突然変異が起こったとするのであれば、これらの生物の多くが奇形だったりなんらかの異常を持っていたはずだ。
進化論者の主張によれば、全肉体組織は無作為な突然変異の結果に現れたという。器官機能を発達させる途中で、異常な器官は幾度も突然変異を経験し、その異常構造をまた違う異常構造に変化させたのだと。この理論は、地球が多くの移行型の痕跡を持ち、その1つ1つが異なる段階で異なる異常性を見せることを必須としている。この理論の

観点からすると、2頭、3頭、4頭、ならぬ、5頭の人間、複眼の人間、2～3メートルもある複数の手足を持つ人間、またはそれ同等に奇妙な形の人間が見つかるはずである。そしてそれと同様に、奇妙な動物や植物などが存在したはずだ。しかし、そのような生き物が存在した形跡は今までに1つも見つかっていない。発掘された何百万もの化石は、全て正常生物のものである。

この事実自体が、進化論の破綻を明確に証明している。過去140年間に発掘された全ての化石が進化の痕跡を持たないのに、いずれは"中間型"化石が発見されるだろうという望みでこの理論を弁護することは正当だとはいえない。140年の歳月で、発掘されていない化石層は無くなった。調査には、何億ドルもの資金が使われたが、ダーウィンの推測した中間型の化石は発見されていない。ダーウィニストが進化の可能性として提供できる中間型の化石は、未だに1つも見つかっていない。反対に、何百万もの"生きた化石"が創造の事実の確固たる証拠を提供している。

一般的な人間の身体構造

第3章

進化における架空構造

今日の進化論の中核となっているネオダーウィニストモデルは、生命は“自然選択”と“突然変異”という2つの自然のメカニズムによって進化したと論じた。基本的にこの理論では、自然選択と突然変異は相補的構造であり、進化的修正は生命体の遺伝子構造に起きる無作為な突然変異によるもので、この突然変異によってもたらされた形質が自然選択構造によって選別され、その結果生命体は進化するという。

この理論を更に追求すると、我々はそのような進化構造が実在しないことに気付く。自然選択と突然変異のどちらも、種から種への形質変化には寄与せず、進化論者の主張は完全に事実無根である。

自然選択

“滅ぼすことなく種を不変に維持する構造”とダーウィンによって定義された自然選択は、ダーウィン以前から生物学者に馴染みのあることだった。ダーウィンが初めてこの過程には進化する力があると主張し、彼のその後全ての理論は、この主張を元に組み立てられた。彼の著書名『The Origin of Species, by means of Natural Selection(種の起源)』を見ても、自然選択がダーウィンの理論の基本だったことがわかる。

しかしダーウィンの時代から現代に至るまで、自然選択が生命体の進化を促すことを裏付ける証拠は1つも見つかっていない。ロンドンにある大英自然史博物館のシニア古生物学者で、著名な進化論者でもあるコリン・パターソン(Colin Patterson)は、自然選択が生命進化を促す力を保持する事実は未だかつて観測されていないことを次のように述べている。

今までに、自然選択構造を用いて種を生み出せた人物はいない。それどころかそれに近づけた人者すらおらず、現在のネオダーウィニズムの議論はこの問題に関したものばかりである。[13]

自然選択では、生息地帯の自然環境により適合している生命体はその環境で存続しうる子孫を残して生き残り、そうでない生命体は消えていく。例えば、当たり前のことだが、肉食動物が鹿の群れを襲おうとしている場面では、当然ながら速く走れる鹿が生き残る。しかし、どれだけこのプロセスが繰り返されようと、鹿は他の種に変化することはない。鹿はずっと鹿のままである。

進化論者のあげた自然選択の観測例を見るとき、そこには人を騙そうという意思しか感じられない。

“工業暗化”

1986年に出版されたダグラス・フツイマ(Douglas Futuyma)の著書『The Biology of Evolution』は、自然選択による進化を最もわかりやすく説明する作品だと言われている。中でも最も有名な例は、英国産業革命下で黒化した蛾の集団に関する例だ。フツイマの著書だけではなく、進化論者によって書かれた生物学の本では、この工業暗化の事例を頻繁に目にする。イギリスの物理学者であり生物学者でもあったベルナルド・ケトルウェル(Bernard Kettlewell)が1950年代に実施した研究に基づいたこの事例は、以下のように要約できる。

新種の蛾を生み出さない工業暗化は、明らかに進化の証拠にはならない。横の教科書の写真(偽りのない写真として扱われている)は、実際には進化論者によって、意図的に幹につけられたすでに絶滅している種でしかない。

報告によると、英国産業革命の初期、マンチェスター付近の樹皮は明色だったといわれている。その結果、これらの木にとまっていた暗色の蛾は鳥に容易に見つけられ、その生存率を落とした。50年後、工業汚染で地衣類が死滅した林では、樹色が変わり、今度は明色の蛾が最も発見しやすい標的となった。そして、暗色の蛾に対する明色の蛾の比率は下がった。進化論者はこの事例が彼らの理論を大きく支える証明になると信じて疑わない。まやかしの中に避難し、自らを慰めながら、どのように明色の蛾が暗色の蛾に"進化"したのかを説明したのだ。

しかし、仮にこの推測が正しかったとしても、その結果として新たな種が誕生したわけではないことから、これが進化論の証拠として使用される材料ではないことは明確だ。暗色の蛾は産業革命以前から存在している。生存している蛾の種類比率が変わっただけなのだ。"スペシエーション(種形成)"をもたらす形質や臓器が蛾に加わったわけではない。蛾の一種が鳥のような異なる生命体に変化するには、その遺伝子に新たな要素が加わらなければならない。それは、鳥の身体的特徴までも含む、全く異なる遺伝子プログラムが加えられるということだ。

これが進化論者によって打ち出された工業暗化論の限界だ。しかし、この話には、解釈だけでなくはなくそれ自体に欠点があるという興味深いもう1つの側面がある。分子生物学者であるジョナサン・ウェルズ(Johnathan Wells)は彼の著書『Icons of Evolution』において、今やこの話の"象徴"のように扱われ、全ての進化論者の生物本に出現するオオシモフリエダシャクの事例が、実際には真実と反することを明かした。ウェルズは、工業暗化の"実証"となったベルナルド・ケトルウェルの実験は、実際には科学的不祥事だと述べた。この不祥事の要素をまとめてみよう。

- ケトルウェル以降に行われた実験によると、それらの蛾の内、木の幹で休む蛾は一種類のみで、その他の蛾の多くは小さく水平な枝下で休むことが明らかになった。そして1980年に初めて、オオシモフリエダシャクが木の幹では休まない事実が明らかになった。25年もの野外研究を経て、シリル・クラーク(Cyril Clarke)、ローリー・ハウレット(Rory Howlett)、マイケル・マジェラス(Michael Majerus)、トニー・リーバート(Tony Liebert)、ポール・ブレークフィールド(Paul Brakefield)らの科学者は、「ケトルウェルの研究では、蛾は自然体でいないことを強いられた。従って、これが科学的研究結果だとは言えない」と結論付けた。
- ケトルウェルの研究を再検証した科学者らは、更に興味深い結果を得た。汚染の少ない場所では、明色の蛾の数が暗色より多いと推測されるが、同じ場所での暗色の蛾の数が四倍にも上ることが判明したのだ。これは、ケトルウェルやその他殆どの進化論者が主張したような蛾の数と木の幹の関係が全く存在しないことを示す。
- 調査域が深くなるにつれて、この不祥事の規模は更に大きくなる。ケトルウェルによって撮影された"木の幹にとまる蛾"は実際は死んだ蛾だったというのだ。つまり、死んだ蛾を使い、それを木の幹につけて写真を撮影していたことが暴露された。実際には、本来葉の下にとまる蛾が木の幹にとまっている状態を写真に納められる確率は非常に低い。[14]

この事実は1990年代後半にやっと、科学界によって暴かれた。長年に渡り大学の"進化論序章"科目で重宝されていたこの工業暗化の破綻は、進化論者を大きく失望させた。その内の一人である、ジェリー・コイン(Jerry Coyne)はこのように語っている。

6歳の時、クリスマスイブにプレゼントを届けてくれているのが、サンタではなく父だということに気付いた時と同様の失望を感じる。[15]

この科学的不祥事により、"最も有名な自然選択の一例"は、当然のように歴史のゴミに格下げされた。なぜなら、自然選択とは、進化論者が主張するような進化メカニズムではないからだ。

自然選択は、生体に新たな臓器を追加することも、既にある臓器を取り除くことも、生物の種を変化させることもできないのである。

なぜ自然選択は複雑性を説明できないのか

自然選択は、生物の遺伝子情報を増加、改良させることができないため、この考えが進化論に役立つことはない。自然選択は、ヒトデを魚へ、魚を蛙へ、蛙をクロコダイルへ、またはクロコダイルを鳥へのように、ある種を別の種に変化させることもできない。断続平衡の最大支持者であるステファン・グールド(Stephen Gould)は自然選択の行き詰まりをこのように語った。

ダーウィニズムの本質は、自然選択が進化的変化における創造力であるという1つの局面にある。自然選択が負の役割を果たし、不適正生物を排除することには誰も反論しないが、同時にダーウィニズムは、自然選択がどのように適性生物を生み出すのか証明する必要がある。[16]

進化論者が自然選択について用いるもう1つの誤った考え方は、この構造を意識的だと主張するところだ。自然のメカニズムに意識はない。自然選択は、生命体にとっての善悪を判断する意思は持たない。従って、誰一人として、自然選択による"非還元複雑性"特徴を持つ生体系や生体器官を説明することはできない。これらの生体系や生体器官は、協力しあう無数の器官によって形成されていて、この器官が1つでも足りないと機能しない。(例えば、全ての機能が正常に働かない限り、人間の眼は機能しない。)従って、全器官を統一する意志は、未来を予測する力を持ち、同時

自然選択は種内の弱者を排除していくメカニズムである。更にそれは、現存する種の退化を防ぐための保守的な力である。ある種を別の種に進化させることはできない。

に、最終段階で何が必要なのかわかっていなければならない。しかし、自然選択には意識も意志もないため、それはありえない。ダーウィンは進化論を打ち下すこの事実に悩まされ「仮に、無数の連続的小変化ではない結果から生まれた複合器官が存在したと証明されれば、私の理論は崩壊する」と述べていた。[17]

自然選択下では、醜く、弱い、不適合な生物だけが選び出され、新種、新遺伝子情報、新器官が生まれることはない。それは、生命体が自然選択を通じては進化できないことを意味する。ダーウィンはこの真実を「自然選択は有利な変異が偶然に起きない限り、力不足である」と受け止めている。[18]このことからネオダーウィニズムは、"有利な変異のきっかけ"として自然選択の次に突然変異を持ち上げた。しかし、その突然変異が"有害な変異のみを導く"ということをこれから説明しよう。

突然変異

突然変異は、生命体の細胞核内で全遺伝子情報を司るDNA分子に起きる分裂、または置換と定義される。これらの分裂または置換は、放射能や化学反応などの外的要因が原因で引き起こされる。全ての突然変異は"偶然"であり、DNAを構成するヌクレオチドを損傷させるか、その配置を変えてしまう。突然変異は多くの場合、細胞が修復不可能なほどに大きな破損と遺伝子組換えを引き起こす。

進化論者が盾にとった突然変異は、生命体をより優れた完全体に変化できる魔法ではない。突然変異の直接的な影響は有害である。突然変異によって起こる変化は、広島、長崎、チェルノブイリにおける被爆者が経験した、死や身体障害、病気等の変化と変わらない。

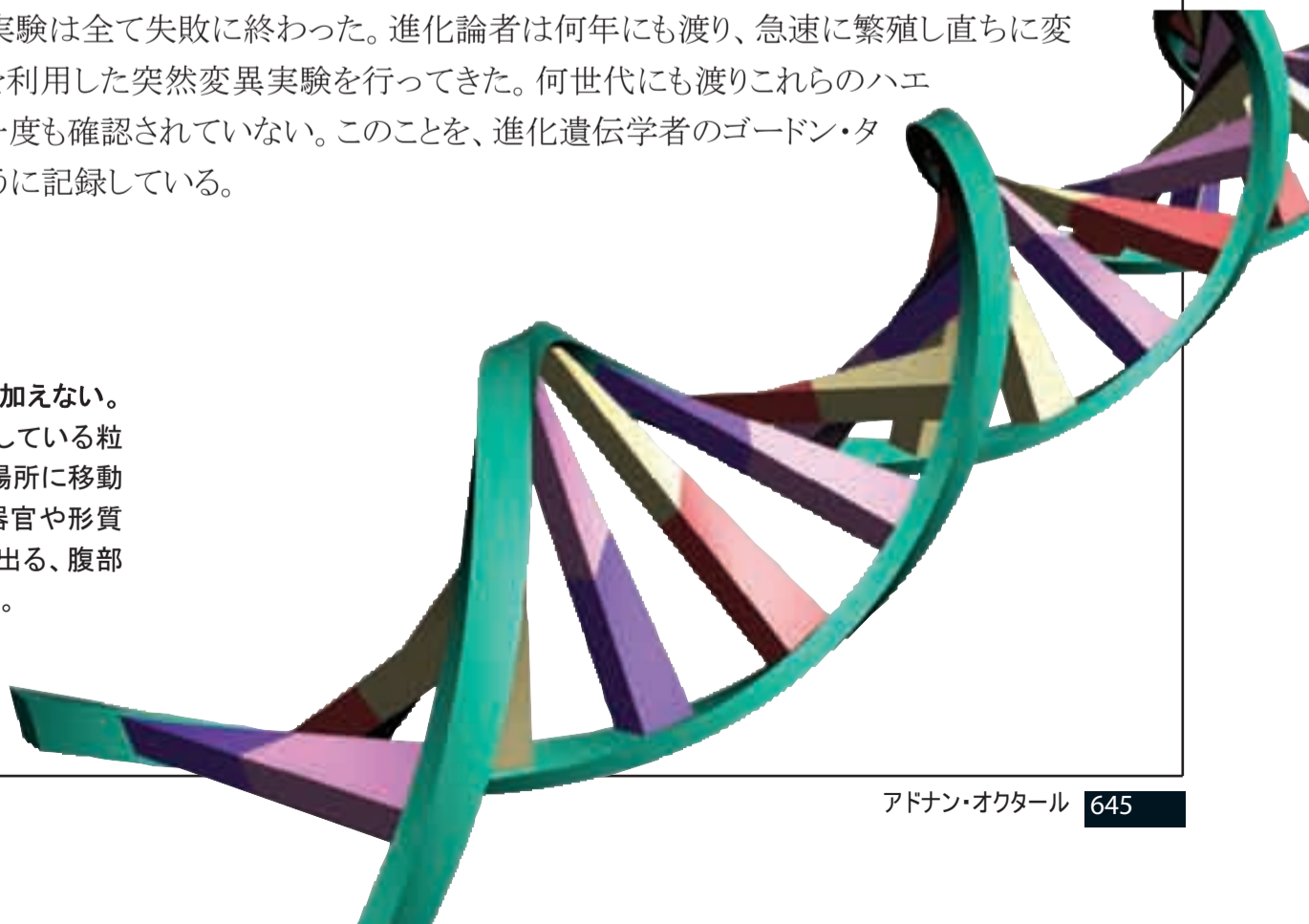
理由は簡単である。DNA構造は大変複雑で、突然の作用は生命体に危害を与えることしかできないのだ。B・G・ランガネーサン(B.G. Ranganathan)はこのように述べている。

まず、純粋な突然変異は自然界においてはとても希なことである。次に、多くの突然変異は無作為に起きるため、遺伝子構造に秩序ある変化はもたらさず、反対に害をもたらす。完全な配列システム内でおきる無作為な変化は全て、良い結果ではなく、悪い結果を出す。例えば、高層ビルのもつ完全な配列構造を地震が襲うとする。その際に骨組みに起きる無作為な変化は、十中八九、ビルを改善する変化ではない。[19]

当然、好結果な突然変異は今までに観測されたことがなく、全ての突然変異が有害であることが証明されている。第二次世界大戦下で使用された核兵器が原因で引き起こったと想定される突然変異を調査すべく設立された、核放射能による遺伝的影響調査委員会で発表された調査結果について、進化科学者であるウォーレン・ウィーバー(Warren Weaver)は以下のように述べている。

大多数の人が、事実上は全ての既知突然変異遺伝子が有害であるという供述に困惑するだろう。なぜなら、突然変異は進化の過程で不可欠な要素だからである。事実上全て有害な突然変異の結果から、どうすれば「よい影響ーより優れた生命体への進化ー」が生まれるというのだろうか。[20]

"有利な突然変異を誘発する"実験は全て失敗に終わった。進化論者は何年にも渡り、急速に繁殖し直ちに変化が見受けられるショウジョウバエを利用した突然変異実験を行ってきた。何世代にも渡りこれらのハエは変化したが、有利な突然変異は一度も確認されていない。このことを、進化遺伝学者のゴードン・タイラー(Gordon Taylor)は、以下のように記録している。

突然変異は生命体のDNAに新たな情報を加えない。突然変異が起こると、遺伝子情報を構成している粒子は、切り裂かれるか、壊されるか、別の場所に移動させられる。突然変異は生命体に新たな器官や形質を与えることはできず、背部から足が突き出る、腹部から耳がでるなどの異常のみを引き起こす。

明るみに出てはいないが、11日毎に繁殖するハエショウジョウバエが、世界中で60年以上もの間、遺伝学者によって研究されてきたにも関わらず、新種の誕生はおろか、新酵素すら確認されていないのは衝撃的である。[21]

別の研究者、マイケル・ピットマン(Michael Pitman)は同じ件について以下のように述べている。

モルガン、ゴールドシュミット、ミューラー、またその他遺伝学者は、何世代にも渡るショウジョウバエを、さまざまな明るさや温度、化学や放射線処理で極限状態にさらし、ささいなものから明白に有害と分類される全ての突然変異の形は確認された。これは人為的進化だろうか?いや、そうではない。遺伝学者によって生み出されたいくつかの怪物は、育成環境以外でも生き残ることができた。いずれにせよ突然変異体は、死ぬか、無精子になるか、凶暴化するかのいずれかになる。[22]

同じことが人間にも言える。人間に起こった全ての突然変異は負の結果を出した。進化論者はこの事実をもうやむやにし、これらの有害な結果ですら"進化の証"だと主張している。人間に起こる全ての突然変異は、肉体的奇形と、マンゴリズム、ダウン症、色素欠乏症、小人症、癌などの病気を生み出す。進化論者の教科書内では、これらの突然変異が"作動中の進化メカニズム"の事例として使われている。人々に身体障害や異常を来たすプロセスが"進化メカニズム"とは言えないことは言うまでもない。進化とは、生残のために、より適合性の高い形への変化を意味するはずである。

まとめると、突然変異が進化論者の主張を裏付けられない理由は大きく3つある。

1) 突然変異の直接的作用は害である:突然変異は無作為に起きるため、必ず生命体を傷つける。総合的に考えてみると、完全で複雑な構造に無意識的に介入することは、その構造の改善ではなく、危害を及ぼすことに繋がる。そして、これまでに有益な突然変異が確認されたことはない。

2) 突然変異が生命体のDNAに新情報を付加するわけではない:突然変異が起こると、遺伝情報を形成する粒子は、その場所から引き裂かれるか、破壊されるか、別の場所に流されるかである。突然変異は生命体に新たな器官や特性を与えることはできない。それは、背部から足が突き出る、腹部から耳がでるなどの異常のみを引き起こす。

3) 突然変異が次世代に移行されるには、その生命体の生殖細胞の中でそれが起きなければならない:体内の細胞、または器官で無作為に起きる変化は、次世代には移行できない。例えば、放射能、またはそれ以外の要因によって変形した人間の目は、次の世代には引き継がれない。

自然界に進化を誘発させるメカニズムがないため、生命体は進化しえない。更に、この結論は進化プロセスとは異なる記録を実証した化石記録とも合致している。

進化生物学者は20世紀の初頭から、変種のハエを作り出すことにより、有益な突然変異事例を生み出そうと試みてきた。しかしこれらの努力も無念に、病的で変形した生物を生みだすに過ぎなかった。左上の写真は正常なショウジョウバエの頭の写真である。一方で、右下の写真は頭から足が突き出たショウジョウバエの写真である。右上の写真は翼が変形した写真で、これらは全て突然変異の結果である。

第4章

化石記録による進化論論破

進化論によると、全ての生命体は1つの祖先から誕生した。先に存在したある種が時を経て他の種に変化し、全ての生命体が今日の形を持つようになった。更に、この理論によると、この変化は何百年もの歳月と共に、段階的に行われていった。

もしこれが本当ならば、この変形が起きたと仮定される素晴らしい時代には、無数の中間体が存在したことになる。例えば、既に備え持っていた魚の特性に新たな爬虫類の特性が加わった、半魚・半爬虫類のような生き物が存在したことになる。更には、爬虫類の特性をもち、後に鳥類の特性を獲得した半爬虫類・半鳥類といった生き物も考えられる。進化論者は、過去に生息したと信じて疑わないこれらの架空生物を"移行型"と呼んだ。

仮にこの様な移行型が実在したのであれば、それは何百万、何千万にも及んだはずである。そして、その形跡が、化石記録に残るはずである。移行型の数は現在の動物種の数を数段上回っていたはずであり、世界中の至るところで見つかるべきである。ダーウィンは、『Origin of Species(種の起源)』の『Difficulties on Theory』でこれに関して以下のように説明している。

もし私の理論が正しいのなら、同グループに属する種をより強く結んだ無数の中間体が存在したはずである…そして、必然的にそれらの化石が見つかるはずである。[23]

ダーウィン自身もそのような移行型が欠如していることを認識していたが、彼はその証拠が将来的に見つかることを信じた。しかし、楽観視していたにも関わらず、彼は移行型の行方が彼の理論の最も大きな壁となっていることに気付いていたため、『Origin of Species(種の起源)』に『Difficulties on Theory』を設け、次のように書いたのだ。

もし生命体が他種から段階的に変化したのであれば、我々はなぜ、無数の移行型動物を目にしないのだろう?なぜ自然は中間体で混乱した状態になく、完全体の生物に溢れているのだろう?そして、もし移行型が実在したのならば、なぜそれらを地層から発見出来ないのだろう?なぜ、全ての地形や地層がそれらで溢れていないのだろう?地質学は、このような見事に段階的な器質的連鎖の存在を実証せず、そしてもしかするとこの問題は、私の理論への最も明快で大きな欠点になるだろう。[24]

この問題に対してダーウィンが唯一用意できた説明が、当時発掘された化石記録が不十分であるということだった。彼は、化石記録がより詳細に研究されれば全ての点が結ばれると考えた。ダーウィンの予言を信じた世界中の進化古生物学者は、19世紀半ば以来、移行型を見つける化石発掘に力を注いでいる。しかしその努力にも関わらず移行型はまだ1つも発見されていない。そして進化論者の信念とは反対に、発掘された全ての化石が、生命体が突然、完全体で地球上に現れたことを証明している。証明を試みる努力のあまり、進化論者は無意識に、自らその理論を破綻させてしまったのだ。

イギリス人古生物学者のデーリック・V・エーガー(Derek V. Ager)は、自身が進化論者であるにも関わらず、この事実を次のように認めている。

我々がもし生命体の詳細進化過程を化石記録で調べた場合、何度調べてもそこには段階的な進化ではなく、突然の進化しか見つからないだろう。[25]

また、別の進化古生物学者、マーク・ゼナッキー(Mark Czarnecki)はこのように述べている。

進化論の証明における一番の障壁は、絶滅した種が地球の地形に残す痕跡、化石である。ダーウィンの仮説で提唱された中間体は化石記録によって証明されたことはなく、反対に、生命体が突然のように現れ、姿を消すことが証明された。そしてこの変則が神による創造という霊魂創造論を生み出したのだ。[26]

化石記録が持ち出す矛盾は、今までに発掘された化石の数が不十分でいずれは見つかるということでは説明しきれない。1991年に出版されたアメリカ人学者のロバート・ウェッソン(Robert Wesson)の『Beyond Natural Selection』の中で、彼は、「化石記録の矛盾は真実で有益なものである」と記述している。そして彼はこの主張を以下のように説明した。

何があろうと、化石記録における矛盾は事実である。しかし、種が枝分かれした形跡がないことは非常に不思議だ。通常、生命体は長期間に渡り不変であり、種や属は絶対に、他の種や属に進化せず、変異は大抵の場合突然起こる。[27]

生命体は突如複雑体で地球に現れた

地球上の地層と化石を検証すると、全生命体が同時に地球上に現れたことがわかる。生命体の化石が発見された地球上で最も古い地層は、5億～5億5百万年前あたりのカンブリア紀のものである。カンブリア紀の地層から見つかった生命体は、化石として突然姿を現し、それ以前のいかなる祖先の化石も発見されていない。その時期の化石からは、カタツムリ、三葉虫、海綿動物、ミミズ、ヒトデ、ウニやその他複雑な無脊椎動物が見つかった。これら複雑生物が幅広く寄せ集められた生命体は、突如として現れ、地理学において"カンブリア紀爆発"と呼ばれるようになった。地層に見られた生物の多くは、複雑な組織と、目、エラ、循環系などの今日存在する生物と同様に発達した構造を持っている。そして三葉虫に見られる二重水晶構造の突出した目がどのように形成されたのかは謎のままである。ハーバード、ロチェスター、シカゴ大学の地理学教授であるデービッド・ラウプ(David Raup)は、「4億5千万年前の三葉虫が持っていた光学設計を今日再現するには、経験のある、創造的な光学技術者が必要だ」[28]と言っている。

これらの複雑な無脊椎動物が、彼ら以前に唯一存在した生物である単細胞生物から進化した形跡はない。そう、これらは、突然、完全体で現れたのだ。

進化論者の出版物の中でも人気高い『Scientific News』の科学ジャーナリスト、リチャード・モナステルスキー(Richard Monasterky)は、進化論に致命的打撃を与えた"カンブリア紀爆発"についてこのように述べている。

5億年前、我々が今日も目にすることができる非常に複雑な生命体は、突然現れた。およそ5億5千万年前のカンブリア紀初期、海が地球上初の複雑生命体で覆われる進化起爆が起きた。カンブリア紀初期には今日の動物門は既に存在しており、それらは今日同様に、全て区別可能な生命体であった。カンブリア紀爆発を更に深く調査してみると、これが進化論に突き出した問題の難しさが読み取れる。[29]

最近の発見によれば、最も基本的な動物類全てがカンブリア紀に突如現れたと示している。2001年に出版された雑誌『Science』には、「約5億4500万年前のカンブリア紀初頭、今日も生物相を支配するほぼ全ての動物分類が突如現れた」と書かれている。[30]また、同雑誌では、そのように複雑、かつ、異なる生命群を進化論で説明するには、段階的進化を証明する多くの化石が地層に発見されるはずだが、それは未だ確認されていない、とも述べている。

この矛盾に満ちた進化と分散も、化石記録には見られない種の痕跡を必要としたに違いない。[31]

どのようにして突然無数の動物が地球上に現れ、そしてどのようにして異なる先祖を持つ異種生命体が現れたのかは、進化論者が解明していない問題の1つである。世界中でも最も名高い進化論者の権威で、オックスフォード大学の動物学者リチャード・ドーキンス(Richard Dawkins)は、彼が支持する理論を揺さぶるこの真実に対して、このように述べている。

カンブリア地層で発見された化石は、カタツムリ、三葉虫、海面動物、寄生虫、クラゲ、ヒトデ、海水甲殻類、ウミユリなどの無脊椎動物のものだった。最も注目すべきは、これらの無脊椎動物が全て突然現れたということである。地質学用語でこの奇跡的な現象は“カンブリア紀爆発”と呼ばれている。

進化を破滅させる創造の奇跡

三葉虫の目

カンブリア紀に突然現れた三葉虫は大変複雑な眼構造を持っている。大量のハチノス型微粒子と二重レンズ構造を持ち、地質学教授のデービット・ラウプの言葉を借りて言えば、この目は"今日再現するのであれば、技術が高く創造力豊な光学技術者が必要なほど優れた設計である"

この目は5億3千万年前に完全体で現れた。このように不思議に満ちた設計が突然現れたという事実は、当然進化論では説明不可能であり、これが創造の現実性を物語っている。

更に、三葉虫のハチノス型眼構造は1つの変化もなく今日まで存続している。ハチや蛍などの昆虫は三葉虫と同じ眼構造を持っている。*この状況が、原始から複雑な生物に革新的に進化したと提唱する進化論が誤りであることを証明している。

(*)R.L.Gregory, Eye and Brain: The Physiology of Seeing, Oxford University Press, 1995, p.31

例えば、カンブリア紀の地層を見てみよう…ここは、主なる無脊椎動物群がほぼ全て見つかった最古の地層である。そして我々はその多くが、出現時には既に進化の最終ステージ間近であったことに気付く。進化した歴史もなく、あたかもそこに植えられていたかのように。[32]

ドーキンスは、カンブリア紀爆発が天地創造の確固たる証拠だという事実を認めざるを得なかった。なぜなら、地

球上に完全体で現れた生物を説明できるのは天地創造だけだからである。著名な進化生物学者のダグラス・フツイマ(Douglas Futuyma)も「生命体は完全体で地球に現れたか否かである。もし完全体で出現したのでなければ、既生の種から変化プロセスを経て発達したのだろう。もし完全体で現れたのであれば、確かに、何か霊的なものに創造されたのだろう」[33]と認めている。ダーウィン自身も「もし同属に属する無数の種が一斉に生命体として出現したのならば、自然選択を通して段階的に変異することを論ずる進化論には致命傷となるだろう」[34]と示唆していた。カンブリア紀はダーウィンへの致命的一撃だ。カンブリア紀における移行型生物の欠如を認めるスウェーデン人進化古生物学者のステファン・ベングストン(Stefan Bengtson)は「ダーウィンを当惑さたこの事件は、今でも我々を驚嘆させている」[35]と述べている。

生命体が未熟形から発達形に進化したのではなく、突然完全体で出現したという事実は、言うまでもなく化石記録が証明している。即ち生命体は、進化の結果誕生したのではなく創造されたということになる。

分子比較が進化論の面するカンブリア紀問題を深刻化する

カンブリア紀爆発によってもう1つ明らかになった事実であり、進化論者を更に悩ませたのが、生命分類群間の比較結果だ。比較の結果、進化論者によってごく最近まで“近親”と考えられてきた動物分類が、遺伝学的には全く異なることが判明した。その結果、“中間型”仮説は理論的に存在しないことが証明されたのだ。2000年に出版された論文『Proceedings of the National Academy of Sciences』は、DNA分析が、過去に“中間体”とみなされていた分類を除外したことを以下のように報告している。

系統樹に関する新たな解釈がDNA配列分析によって定められた。後生動物系図の基部で複雑な交配のもととなると考えられていた分類群が、実は系図内の高い位置に存在することがわかったのだ。この過程では進化的“中間体”は誕生せず、逆に我々は、複雑な進化の起源を模索しなおす必要性に迫られる。[36]

また、同論文内で、ある進化論者は、遺伝子構造の発見により、海綿動物、刺胞動物、有櫛動物など中間体分類されていた類は、中間体としては分類できないことを示唆し、そのような進化系図を立証する“望み”を失ったと述べている。

分子に基づく系統学は、いくつかの重要な点を含んでいる。中でも最重要なのは、海綿動物、刺胞動物、有櫛動物と最後の共通祖先である左右対称生物、または“ウルバイラテリア”を結ぶ中間体の消滅である。要約すると、ウルバイラテリアへの導線に矛盾が生じたのだ。過去にも多々あったように、我々は希望を失った。初期形から連続的段階で複雑性を増すというシナリオで体腔動物の祖先の形態を推測することができなくなったのだ。[37]

興味深い脊椎。カンブリア紀に突如として現れた生物の1つがハルキゲニア(左上)である。ハルキゲニアを含む多くのカンブリア紀化石は、攻撃から身を守るために、硬く、尖った脊椎を持っている。進化論者が説明できないことの1つが、捕食者がいない状況で、なぜこれらの生物がこのように効率的な防衛体制を保持していたかということだ。捕食者がいない状態でこれらの脊椎を保持している事実は、自然選択では説明ができない。

第5章

海中生物から陸上生物へ変化した物語

進化論者は、カンブリア地層で発見された海中無脊椎動物が、長年の歳月を経て魚に進化したと推測している。しかし、カンブリアの無脊椎動物に祖先が見つからないように、これらの無脊椎動物が魚に進化したという証拠も1つもない。無脊椎動物と魚の構造に大きな違いがあることは、忘れてはならない。無脊椎動物の細胞は体外にあるが、魚のそれは体内にある。その違いを埋めるほどの大きな“進化”に至るまでには無数のステップが必要であり、それを証明する移行型も無数に発見されるはずである。

それらの仮説上の進化の形を発見するために、進化論者は140年もの間化石地層を掘り続けてきた。彼らは、無数の無脊椎動物と魚の化石を発掘したが、未だかつて誰も、たった1つの中間型生物も発見したことはない。

進化古生物学者のジェラルド・T・トッド(GerardT. Todd)は、これと類似した事実を彼の論文『Evolution of the Lungand the Origin of Bony Fishes』で次のように認めている。

> **これら3つの硬骨魚類の化石は、ほぼ同時期に、初めて化石記録に現れた。しかしその時には既に、それぞれが形態学的に大きく異なり、特長は固定されている状態だった。彼らはどのように生まれたのか？何が彼らを変えたのか？そしてどのように特長が強化されたのか？そしてなぜ、中間型生物の形跡が全くないのか？** [38]

更に進化論シナリオは、無脊椎動物から進化した魚が、次は両生類に進化したと主張した。しかしこのシナリオにも証拠は存在しない。半魚・半両性生物が存在したことを実証できる証拠は1つもないのだ。進化古生物学者で脊椎動物古生物学の権威者であるロバート・L・キャロル(Robert L. Carroll)もこの事実を認めざるを得ない。彼は著書である『Vertebrate Paleontology and Evolution』において、「初期爬虫類は両生類とは全く異なり、その祖先もまだ発見されていない」と述べている。後の1997年に出版された著書『Patterns and Processes of Vertebrate Evolution』においても、「扇鰭と初期両生類間に存在した中間型の化石は見つかっていない」と認めている。[39]二人の進化論古生物学者、コルバート(Colbert)とモラレス(Morales)は、カエル、サンショウウオ、アシナシイモリという3つの主な両生類について、以下のようにコメントした。

> **共通祖先の特徴を持つ古生代両生類が存在した証拠はない。最古のカエル、サンショウウオ、アシナシイモリは、現代に実在するその子孫にとても良く似ている。** [40]

50年ほど前まで、進化論者はこのような生物が実際に存在すると信じていた。およそ4億1千万年前に生息したと推測されるシーラカンスという魚は、陸地でも機能する肺、発達した脳、消化機能、循環器などを持ち、更には歩行メカニズムまでをも持った移行型だと提案された。科学界では1930年代に至るまで、この生態学的解釈が事実として認められていた。シーラカンスは海中から陸地へと進化した真の移行型とされていたのだ。

しかし、1938年12月22日、インド洋沖で何とも興味深い発見があった。7千万年前に絶滅したと考えられていた中間型のシーラカンスの一種が見つかったのだ！言うまでもなく、シーラカンスの生きている原型は進化論者を震撼させた。進化古生物学者のJ・L・B・スミス(J.L.B. Smith)は「仮に私が道端で恐竜に遭遇したとしても、これ以上には驚かない」[41]と述べた。その後数年間に渡って、200匹ものシーラカンスが世界中で確保された。

生きているシーラカンスは進化論者の架空シナリオに限界を見せた。今までの主張に反して、シーラカンスには原始肺もなければ、大きな脳もなかった。そして、進化研究者が提唱した原始肺は、脂質袋に過ぎないこともわかった。[42]海中から陸上に移動した爬虫類予備軍だと言われていたシーラカンスは、実際には水深180メートル以下に生息する深海魚に過ぎなかった。[43]

“海中から陸上へ”の仮説シナリオによると、ある魚が食べ物を得るために陸へ移る必要性を感じた。この主張は推測描画によって裏付けられている。

4億1千万年歳のシーラカンスの化石。進化論者はこれが、海面から陸地への移行を証明する移行型だと主張した。

1938年以降、この魚の生きた証拠がいくつも見つかり、進化論者の過剰な推測を物語っている。

進化論を論破する一例

カメ

今日の亀と変わらない1億年前の亀の化石。(The Dawn of Life, Orbis Pub., London 1972)

横に見られるのは、ドイツで発見された4500万年前の淡水亀の化石である。左に見られるのが、ブラジルで発見された最古の海亀の化石。この1億1千万年前の亀の化石は、今日の亀と全く同質である。

進化論が魚類や爬虫類の基本分類を説明できないように、これらの分類の初期系列を説明することもできない。例えば、爬虫類系列である亀は突然そのユニークな甲羅を持った状態で現れた。進化論文献から引用すると"亀は他の脊椎動物より多くの良質な化石を残しているが、これらの良好な系列の起源は、早期の化石が欠如していることから不明瞭である。…亀とコティロザウルスの中間体と、亀の先祖と思われる爬虫類は完全に欠如している。"(Encyclopedia Britannica Online, "Turtle")

早期の亀の化石と今日の亀には何の違いも見受けられない。つまり、亀は"進化していない"。亀は亀として創造されたため、昔も今も変わらずに亀である。

海中から陸への移動が不可能な理由

進化論者は、海中に生息していた生物がある日突然陸上に上がり、陸上生物に変化したと主張している。

そのような変化が不可能であることを証明する明確な事実は多く存在する。

1. 体重負荷：海中生物が、自身の体重を海中で支えることには問題がない。

しかし多くの陸上生物はエネルギーの40%を自身の体重を支えることに使っている。海中生物から陸上生物に変化した生物は、この必要エネルギーに対応するために、新たな筋系と骨格構造を同時に身につけなければならない！そして、これは突然変異の結果起きたとは言えない。

2. 保温：陸上は、温度の変化が激しく、その温度幅も大きい。陸上生物はそのような大きな温度変化にも耐えられる身体構造を持っている。しかし、海中では水温はゆっくりと変化し、その温度幅も小さい。一定の海中水温によって安定している体組織を持つ生物は、陸上で起こる温度変化に最小限の影響に抑えるための保護組織を身につける必要がある。陸に上がった瞬間に魚類が突然変異によってそのような特性を身につけたという主張は全く不合理である。

3. 水：新陳代謝に欠かせない水は、陸上では十分に得られないため、経済的に使われる必要がある。例えば、皮膚は過度の水分蒸発を防ぐ一方で、一定量の水分不足に耐えられなければいけない。従って、陸上生物は海中生物には起きない口渇を経験する。この理由から、海中動物は水のない生息環境には適さない。

4. 腎臓：海中生物は水中環境を利用して、アンモニアなどの汚物を分泌する。陸上では、水は経済的に利用されなければならない。この理由から陸上生物は腎臓を持つ。腎臓により、アンモニアは尿に変わり体内に蓄えられ、排泄の際には最小限の水が使われる。それに加え、腎臓機能を補助する新組織が必要となる。要するに、海中から陸上への移動を可能にするためには、腎臓を持たない生物が、一気に腎臓機能を発達させる必要があるのだ。

5.呼吸器系：魚類は水に含まれる酸素を、鰓を通して吸収することで“呼吸”をする。水なしでは数分しか生きることができない。陸上で生き延びるためには、完全な肺組織を一気に取得しなければならない。

1つの生命体の中で偶然、一気にこれらの劇的な身体的変化が起きることは、絶対に不可能である。

第6章

鳥類と哺乳類の架空進化論

進化論によると、まず、生命は海で誕生、進化し、両生類によって陸地に運ばれた。つまり、この進化論のシナリオでは、両生類が、陸地のみで生活する爬虫類に進化したとされている。しかし、これらの2種類には膨大な構造差が存在することから、このシナリオには無理があると言える。例えば、両生類の卵が水中で成長するようにできているのに対して、爬虫類の羊膜卵は陸上で成長するようにできている。種が存続するためには、完全かつ完璧な構造の卵が不可欠であるため、両生類が"段階的に"進化したという論理は成り立たない。更に、例によって、両生類と爬虫類を結び付ける中間形態(移行型)の証拠が存在しない。従って、進化論者、古生物学者、そして古脊椎動物学の権威であるロバート・L・キャロルは、「初期爬虫類は、両生類とは大きく異なり、彼らの原種は未だ発見されていない」[44]という事実を認めざるを得ない。

このように絶望的ともいえる進化論の矛盾点はこれだけでは終わらない。生物が空を飛ぶようになった過程がまだ解明されていないではないか！鳥類も何らかの進化の道を辿ってきたと考えている進化論者は、鳥類は爬虫類から移行したのだと主張する。しかし、陸上生物とは全く異なる鳥類独特の構造のどれもが、漸進進化では説明しきれず、鳥類特有の特長である翼は、進化論者の大きな壁となっている。現に、進化論者の一人であるトルコのエンギン・コルール(Engin Korur)は、翼の進化の不可能性を認めている。

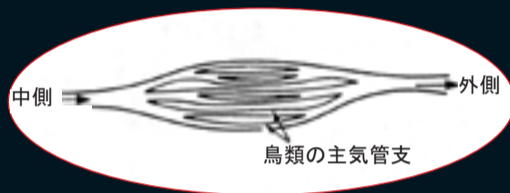
眼や翼は共通して、完全に発達してでないと機能しない。言い換えれば、発達の不十分な眼では何も見ることができず、半分しか形成されていない翼では飛べないということである。これらの器官がどのように形成されたのかは、今後解き明かされるべき自然の謎の1つである。[45]

完全構造の翼が連続的な偶然の突然変異の結果としてどのように起こったのかという謎は、未だ解かれていない。爬虫類の前腕が、遺伝子の変形(突然変異)により、完全に機能する翼へと変化と裏付ける証拠はない。

さらに、翼があるだけでは陸上生物は空を飛べない。陸上生物は、空を飛ぶために鳥類に備わったその他多くの構造を欠いている。例えば、鳥類の骨は、陸上生物の骨と比べるととても軽く、その肺は、陸上生物の肺とは異なった機能を持つ。筋系や骨格系も陸上生物とは異なり、また、非常に特殊な心臓の循環系を持つ。翼同様、これら全ての特長が空を飛ぶためには欠かせない。こうした構造が、段階的に形成されていったのではなく、全て同時に存在しなければ生物は空を飛べなかった。これが、陸上生物が空中生物へ進化したという論理が完全に誤りである理由である。

そしてこれらは我々にもう1つの疑問をなげかける。仮にこの不可能な理論が正しいものだとしたところで、ではなぜ進化論者は、彼らの主張を裏付ける"半翼"や"片翼"の化石を見つけることができないのだろうか？

鳥の持つ特別な肺

鳥類の身体構造は、その先祖といわれている爬虫類の身体構造と大きく異なる。鳥類の肺は陸上動物のそれとは全く異なる働きをする。陸上動物は同じ空砲から息を吸って吐き出す。鳥類は、肺の前方から息が入り、後方から息が抜けていく。神は飛行中に大量の酸素を要するこの独特な体系を鳥だけに特別に創った。このような肺構造が爬虫類の肺から進化することは不可能である。

鳥類の翼：進化では説明できない設計

鳥類が爬虫類から進化したと主張する進化論は、この2つの種の間に存在する膨大な違いを説明することができない。翼を持つ骨格構造、肺構造、温血新陳代謝などからも、鳥類は爬虫類とは大きく異なる。鳥類と爬虫類の間に存在するもう1つの克服できない形質は、鳥類特有のその羽毛である。

爬虫類の体が鱗に覆われているのに対し、鳥類の体は羽毛で覆われている。進化論者は鳥類の祖先が爬虫類だと考えているため、彼らは鳥類の羽毛が爬虫類の鱗から進化したといわざるを得ない。しかし、鱗と羽毛には何の共通点もない。

コネチカット州立大学の生理学と神経化学の教授であるA・H・ブラッシュ(A. H. Brush)は、進化論者にも関わらずこの事実を認め、"遺伝子構造と遺伝子組成、発達方法、形態形成と組織構造。その全ての特徴が異なる(翼と鱗における)。"と述べている。[1]更にブラッシュ教授は鳥類の翼のタンパク質構造を研究し"脊椎動物の中でもユニークだ"と述べている。[2]鳥類の羽毛が爬虫類の鱗から進化した証拠は見つかっていない。反対に"翼は突然、鳥類を他と差別化する紛れもなくユニークな特徴として化石記録に現れた"とブラッシュ教授は述べている。[3]もちろん、鳥類の羽毛の原型と断定できる表皮構造は爬虫類には見つかっていない。[4]

1996年、古人類学者はシノサウロプテリクスと呼ばれる翼を持つ恐竜の化石が見つかったと騒ぎ立てた。しかし、1997年にはこれらの化石が今日の鳥類の翼とは異なる翼をもち、鳥類とは無関係の生物だということが明らかになった。[5]

一方で、鳥類の翼を詳細に観察してみると、進化では説明しきれない複雑な設計がそこに存在することに気付かされる。著名な鳥類学者アラン・フェドゥーチャ(Alan Feduccia)は"全ての翼は空力構造を持つ。翼はとても軽く、低速下上昇する持ち上げる機能、簡単に元の場所に戻ることができる能力を持つ"と述べている。そして更に"飛行用に完全設計された翼が、他の目的のために形成されたということは、理解し難い"とも続けた。[6]

翼の構造もまた、ダーウィンを悩ませた。更に、完全に審美的な孔雀の翼が彼に"吐き気"(彼の言葉の引用)を催させた。1860年4月3日にアサ・グレイ(Asa Gray)宛に彼が書いた手紙には"目の構造が私を凍りつかせた瞬間を覚えている"と書き、"...そして構造の些細な特徴が私を度々悩ませる。孔雀の翼を見るだけで、吐き気を催す！"と続けた。[7]

鳥類の翼を綿密に調べると、翼がホックによって互いを結び付けている何千もの細かい巻き毛で構成されていることがわかる。このユニークなデザインが結果的に優れた空力性能を引き出す。

1-A.H.Brush, "On the Origin of Feathers". Journal of Evolutionary Biology, Vol.9, 1996, p.132
2-A.H.Brush, On the Origin of Feathers, p.131
3-Ibid.
4-Ibid.
5-"Plucking theF eathered Dinosaur", Science, Vol.278, 14N ovember 1997, p.1229
6-DouglasP almer, "Learning to Fly" (Review of The Origin of and Evolution of Birds by Alan Feduccia, Yale University Press, 1996), New Scientist, Vol.153, March, 1 1997, p.44
7-Norman Macbeth, Darwin Retried: An Appeal to Reason, Boston, Gambit, 1971, p.101

次なる証明不可能な移行型：アルカエオプテクリス

そこで進化論者は打開案を挙げた。それは、アルカエオプテクリスと呼ばれる鳥類の化石であり、現在でも、進化論者が擁護する中間体の中で最も有名な例の1つである。進化論者によると、現在の鳥類の祖先であるこのアルカエオプテクリスは、約1億五千万年前に生息していた。この理論は、ベラキラプトルやドロメザウルスのような小型恐竜が翼を得て、飛べるように進化したと提唱している。そして、アルカエオプテクリスが祖先である恐竜から枝分かれし、初の移行型の飛行動物となったというのだ。

しかしアルカエオプテクリスにまつわる最新研究結果によって、この化石が移行型ではなく、今日生息する鳥類とさほど変わらない特徴を持つ絶滅した鳥の一種であることが明らかになった。

アルカエオプテクリスが飛べない半鳥類であったというこの仮説は、ごく最近まで進化論者に好評の仮説であり、胸骨が欠如している事実がこの鳥が正常に飛べないことを裏付ける重要証拠とされていた。（胸骨は胸腔の下にあり、飛行に欠かせない筋肉が付随している部分。今日では、飛べる、飛べないに関わらず、全ての鳥類や全く異なる種である飛行哺乳類のコウモリですらも胸骨を持つことが知られている。）

しかし、1992年に発見された7つ目のアルカエオプテクリスの化石が多くの進化論者を震撼させた。長年進化論者によって欠如していると考えられていたアルカエオプテクリスの胸骨が実際には存在することがわかったのだ。この化石は雑誌『Nature』で以下のように取り上げられた。

最近発見された7つ目のアルカエオプテクリスの化石に、ある程度予想はされていたが今まで発見されなかった部分的な長方形の胸骨が見つかった。そしてこの胸骨の存在が、アルカエオプテクリスに頑丈な飛行筋肉があったことを証明している。[46]

この発見は、アルカエオプテクリスが半鳥類で、正常には飛べなかったという主張を無効にした。

更に、鳥の翼構造自体が、アルカエオプテクリスが実際には飛行鳥だったことを裏付ける最も重要な証拠として提唱された。アルカエオプテクリスの非対称の翼構造と、現代の鳥の翼構造が同等であることが、アルカエオプテクリスが正常に飛べた鳥であることを示唆している。著名な古生物学者であるカール・O・ダンバー(Carl O. Dunbar)は、「その翼を持つアルカエオプテクリスは、間違いなく鳥類と分類されるべきだ」と述べている[47]。

アルカエオプテクリスの翼構造により明らかになったもう1つの事実が、その新陳代謝だ。前で述べたように、爬虫類と恐竜は恒常的規則性を持つ動物ではなく、生息環境の温度によってその体温が変動する冷知動物である。翼が持つ最も重要な機能は、体温を一定に維持することだ。アルカエオプテクリスに翼があった事実が、それが恐竜などとは異なる、体温を一定に保つ温血鳥類だったことを示した。

進化論者によれば、ヴェロキラプトル、ドロメオザウルスなどの小型恐竜の一部は、翼を得ることで進化をし、飛行を始めたという。従って、アルカエオプテクリスは祖先である恐竜から進化した移行型、飛行を始めた始祖鳥であると推測されていきる。この架空の話はほぼ全ての進化論者文献に登場している。

進化論者の見解：アルカエオプテクリスの歯と爪

進化生物学者がアルカエオプテクリスが移行型であると主張するとき、彼らはアルカエオプテクリスの翼にある爪と歯を根拠にしている。

アルカエオプテクリスが翼に爪を持ち、歯が生えていたのは事実である。しかし、だからと言ってそれがアルカエオプテクリスと爬虫類の関係性を意味するものにはならない。現代に生息するエボシドリとツメバケイも爪を持ち、それを利用して枝に止まることができる。これらの生物は爬虫類の特性を持たない完全な鳥類である。従って、翼にある爪を理由にアルカエオプテクリスが移行型であったという主張は事実無根なのだ。

アルカエオプテクリスの口ばしにある歯も同様、それが移行型だったことの裏付けにはならない。歯が爬虫類の一般的な特徴ではないのに、進化論者は、歯が生えているアルカエオプテクリスは爬虫類と関係すると話を誇張する。現代では、歯の生えた爬虫類もいれば、生えていない爬虫類も存在することがわかっている。更に、アルカエオプテクリス以外にも歯を持つ鳥類がいたことも明らかになった。確かに、現代には歯の生えている鳥類はいない。しかし、化石記録を見れば、アルカエオプテクリスと同時期、また、最近に至るまでも、歯の生えた鳥類と思われる種が存在したことがわかっている。

ここで最も重要な事実は、アルカエオプテクリスや歯のある他の鳥類の歯構造が、彼らの祖先と推測されている恐竜とは全く異なることである。著名な鳥類学者のL・D・マーティン(L.D. Martin)、J・D・スチュワート(J.D. Steward)、K・N・ウェットストーン(K.N. Whetstone)は、アルカエオプテクリスとそれに類似した鳥類が、上部が平らな表面と大きな歯茎を持つことを明らかにした。しかし祖先と考えられている獣脚亜目恐竜の歯は、鋸の様に尖っていて歯茎も細い。[48]

また、同研究者らがアルカエオプテクリスと恐竜の手首の骨を比較したところ、そこには1つも共通点が見つからなかった。[49]

解剖学者のS・タルシターノ(S. Tarsitano)、M・K・ヘッチ(M.K. Hecht)、A・D・ウォーカー(A.D. Walker)らは、ジョン・オストロム(John Ostrom)を含む研究者が伝えたアルカエオプテクリスと恐竜の共通点が、実際には誤りだということを明かした。[50]

こうした発見の全てが、アルカエオプテクリスが移行型ではなく、"歯の生えた鳥"類に属する鳥類であることを示している。

アルカエオプテクリスとその他鳥類の化石

進化論者は長年に渡り、アルカエオプテクリスが彼らが提唱した鳥類の進化シナリオの最重要証拠だと主張してきた。しかしそのような中で、近年発見された化石が今までとは異なる視点からその主張の無効性を指摘した。中国脊椎動物古生物学研究所の古生物学者である侯連海(Lianhai Hou)と周忠和(Zhonghe Zhou)は、1995年に新たな鳥類の化石を発見し、それをコンフウシウソルニスと名付けた。アルカエオプテクリスと同様の約1億4千万年前に生息したと考えられるが、歯は生えていなく、その口ばしと翼は、現代の鳥と同じ特徴を持つことが明らかになった。骨格構造も現代の鳥類と同じだが、アルカエオプテクリス同様に、翼に爪が生えている。更に、コンフウシウソルニスは鳥類に特有なもう1つの特徴である、尾翼を支える尻尾という機能を持っていた。その直後、当初初期鳥類と仮定されていたアルカエオプテクリスと同世代のこの化石は、爬虫類とは類似しているものの、実際は現代の鳥類と変わらない生物だったと受け入れられるようになった。そしてこの事実が、アルカエオプテクリスが鳥類の祖先だという進化論者の主張を無効にした。[51]

コンフウシウソルニスはアルカエオプテクリスと同世代の鳥である。

アルカエオプテクリスは完全な鳥類の特徴を持つ

1. 空を飛べる温血動物だったことを証明している。

2. 骨は今日の鳥のものと同様に中空である。

3. その歯は、爬虫類から進化した痕跡を持たない。歯のある鳥類の多くは過去に生息していた。

4. 翼にある爪と同様の爪を持つ鳥が今日にも存在する。

5. 最近発掘された7つ目のアルカエオプテクリスの化石には胸骨が見られた。この胸骨の存在が、アルカエオプテクリスも今日の鳥同様に強力な飛翔筋を持っていたことを示している。

中国で発見されたもう1つの化石が更なる混乱を招いた。1996年11月、侯連海(L. Hou)、L・D・マーティン(L.D. Martin)、アラン・フェドゥーチャ(Alan Feduccia)が雑誌『Science』で、リャンニンゴロニスという1億3千万年前の鳥の存在を報告したのだ。リャンニンゴロニスの胸骨には、今日の鳥と同様に飛行に不可欠な筋肉が付随しており、その他にも現代の鳥と同様の特長がいくつか見つかった。唯一の違いは口内の歯であった。この事実が、歯の生えた鳥は、進化論者が主張するような初期構造を経ていないことを裏付けた。[52]雑誌『Discover』も「いつ鳥は生まれたのだろう？化石を見ればそれが恐竜から進化したものではないことは明らかだ」と取り上げた。[53]

アルカエオプテクリスに関する進化論者の主張を覆すもう1つの化石が、アルカエオプテクリスより2,500から3,000万年若く、低速飛行鳥類と同じ特徴を持つユールラヴィス(Eoalulavis)だ。この鳥の存在が、1億2千万年前には既に、今日の鳥のように空を飛ぶ存在したことを証明している。[54]

繰り返しになるが、これらの事実の全てが、アルカエオプテクリスやそれに類似した初期鳥類が移行型でなかったことを示している。化石記録によれば鳥類は順を追って進化したことではなく、今日の鳥類とアルカエオプテクリスのような古代鳥類が同時期に存在したことを証明している。その内の数種が現代まで生き残ることに成功したが、アルカエオプテクリスやコンフウシウソルニスは絶滅した。

まとめると、アルカエオプテクリスの数々の特長はそれが移行型でないことを示している。アルカエオプテクリスの生態は総合的に、進化ではなく停滞を表している。この事実を古生物学者のロバート・キャロル(Robert Carroll)は以下のように認めた。

アルカエオプテクリスの翼構造は、無飛行鳥の対称的な翼構造とは異なり、今日存在する飛行鳥類と同様の構造で、翼根の配置も現代の鳥と同じである。ヴァン・タイン(Van Tyne)とバーガー(Berger)によると、アルカエオプテクリスの翼の大きさや形は、キジ、ハト、ヤマシギ、キツツキ、そしてスズメのような鳥の翼に類似している。少なくとも1億5千万年は、鳥の翼は進化していないということだ。[55]

一方で、"時間的矛盾"が進化論者のアルカエオプテクリスに関する主張を大きく揺らがしている。ジョナサン・ウェルズ(Johnathan Wells)は彼の著書『Icons of Evolution』で、アルカエオプテクリスが鳥類の祖先ではない証明として進化論の象徴として扱われるようになった、と述べている。祖先ではない証拠の1つとして、ウェルズは、アルカエオプテクリスの祖先と言われている獣脚亜目恐竜が実際にはアルカエオプテクリスより後に存在した生物だと述べている。

陸上を二足歩行し、他にもアルカエオプテクリスの祖先が持ったと考えられる特徴を持った爬虫類が後に現れた。[56]

架空の鳥類ー恐竜関係

進化論者は、恐竜から鳥に進化する移行型の一種として、アルカエオプテクリスを持ち出した。しかし、世界中で最も有名な鳥類学者の一人である北カリフォルニア大学のアラン・フェドゥーチャ(Alan Feduccia)は彼自身が進化論者でありながらも、鳥と恐竜の関連性について反論した。

私は25年にわたり鳥の頭蓋骨を調べてきたが、今までに恐竜との類似点を発見したことはない。私には、関連性があるとは思えない…。獣脚亜目が鳥の起源だという意見は、20世紀の古生物学の中で最も大きな恥となりかねない。[57]

更に、カンザス州立大学で初期鳥類を専門に扱うラリー・マーティン(Larry Martin)も恐竜からの進化説には反論している。この件について彼は以下のように述べている。

正直に言うと、もし私が鳥類の起源が恐竜だという説の支持を余儀なくされたら、この件について話す度に恥じらいを覚えるだろう。[58]

結論から述べると、"鳥類の進化"シナリオはアルカエオプテクリスのみに基づくことであり、進化論者の偏見と切望に満ちた考えでしかない。

アラン・フェドゥーチャ
(Alan Feduccia)教授

ハエの原型は何か？

写真で見られるように、進化論者は、恐竜が鳥に進化したという主張の中で、恐竜の一部がハエを捕獲するために前足を羽ばたかせ“翼を持って飛んだ”と述べている。科学的根拠が全く存在しない、想像に過ぎないこの推測は、簡単な論理的矛盾を引き起こした。飛行の起源を説明するために進化論者が起用したハエには、既に完全な飛行能力があるのである。人間は1秒間のうちに10回も瞬きすることはできないが、平均的なハエは1秒間に500回も羽ばたきもする。更に、ハエは両羽を同時に動かすことができる。羽の震動に起きるほんの些細な不調和がバランスを崩す原因となるが、そのようなことは絶対に起きない。

進化論者はまず、ハエがどのようにこの完璧な飛行能力を取得したかを説明するべきである。その代わりに彼らは、爬虫類のような不格好な生物が飛行能力を得たという架空のシナリオを作り上げる。

完全に創られたイエバエの存在ですら、進化論を無効にする。イギリス人生物学者のロビン・ウートン(Robin Wooton)は、「The Mechanical Design of Fly Wings」という論文の中で以下のように述べている。

昆虫の羽の機能を知れば知るほど、繊細で美しいデザインが明らかになる。構造は伝統的に最小限の変形ですむようにできており、メカニズムも予測可能な動きで構成成分を操るようにできている。昆虫は、適切な力に対して適切な変形を可能にする、優雅で広範囲に及ぶ弾性特性と、空気を最大限活用するという2つの要素を持っている。その2つには技術的類似点は殆どない。[1]

その一方で、ハエの架空進化論を裏付ける証拠は1つも見つかっていない。著名なフランス人動物学者であるピエール・グラッセ(Pierre Grasse)が“昆虫の起源には見当もついていない”と発言した時、彼はその事実を指摘していた。[2]

1-Robin J. Wootton, "The Mechanical Design of Insect Wings", Scientific American, v.263, November 1990, p.120

2-Pierre-PGrassé, Evolution of Living Organisms, New York, Academic Press, 1977, p.30

進化論者シナリオからの一例：恐竜がハエを確保しようとして、突然翼を手に取った！

哺乳類の起源

前にも述べた通り、進化論によれば、海中に生息した架空生物が爬虫類と化し、更には、爬虫類が鳥類に進化した。このシナリオに基づくと、爬虫類は鳥類だけでなく、哺乳類の祖先にもあたることになる。しかし、爬虫類と哺乳類には無数の莫大な違いが存在する。哺乳類は温血動物(自分自身で熱を発し、一定のレベルでそれを保持できる)で、子を産み、授乳させ、その体は毛で覆われている。一方、爬虫類は冷血動物(熱を生み出すことができず、生息地の温度によって体温が変動する)で、彼らは卵を産み、授乳をせず、体は鱗に覆われている。

爬虫類と哺乳類の間に存在する身体構造の相違の1つが、顎の構造である。哺乳類の顎には歯の生えた下顎骨が1つしかない。しかし爬虫類には両顎に3つずつの小さな骨が生えている。その他の一般的な違いに耳がある。哺乳類には耳の中に3つの骨(槌骨、きぬた骨、あぶみ骨)があるが、爬虫類の耳には1つしか骨がない。進化論者は、爬虫類の耳と顎が徐々に哺乳類の耳と顎に進化したと主張している。1つの耳の骨がどのようにして3つに進化したのかは、大きな疑問であり、進化の過程でその耳がどのように機能し続けたかは説明ができない。案の定、爬虫類と哺乳類を結ぶ化石は1つも見つかっていない。進化論者であり科学ライターのロジャー・ルーウィン(Roger Lewin)は「1つの種から、または多くても最大2つの種からどのように初の哺乳類が生まれたかは、今でも謎に満ち溢れている」とまとめることを余儀なくされた。[59]

ネオダーウィニズムを提唱した進化論権威者のジョージ・ゲイロード・シンプソン(George Gaylord Simpson)は進化論者に降りかかったこの難題について以下のようにコメントしている。

地球上の歴史の中で最も不可解なのが、爬虫類時代の中生代から哺乳類時代への変化である。それはまるで全出演者が恐竜などの爬虫類の芝居中に一旦ステージカーテンが下り、再度カーテンが上がると、恐竜は消え、その他の爬虫類が脇役となり、全てのキャストが前章では全く予告されなかった哺乳類に入れ替えられたかのようだ。[60]

更に、哺乳類が姿を現した時、各動物は既に互いに異なる構造を持っていた。それらは、コウモリ、ウマ、ネズミ、クジラなどの哺乳類で、これら全てが同じ地質年代から誕生した。この説明にあたって進化論を持ち出すのは、どのように柔らかい頭をもってしても不可能なのだ。進化動物学者であるR.・エリック・ロンバード(R. Eric Lombard)は、雑誌『Evolution』で「哺乳類の分類系統発生を説明することのできる情報を求めている研究者は落胆するだろう」[61]と書いている。

全ての事実が、地球上の生物が全て、進化の結果ではなく突然完全体で誕生したことを示している。そしてそれは同時に、生物が創造されたものであることを証明している。それでも進化論者は生命体が特定の順序を元に誕生したと説明し、進化論を擁護している。

進化論が破綻していく中、生命体がどの順序で生まれたかは"創造の秩序"でしか説明できない。素晴らしく完璧な創造を経て、海と陸は生命体に溢れ始め、最終的に人類が誕生した。膨大なメディア戦略と共に作り上げられた猿人説とは異なり、人間もまた、突然、完全な状態で地球上に誕生したのである。

コウモリ

進化論者によると、全哺乳類は共通する祖先から進化した。しかし、クマ、クジラ、ネズミ、コウモリなどを含むさまざまな哺乳類は、1つ1つに大きな違いが存在する。哺乳類の全てが、その動物に特有な構造を持つ。例えば、闇の中でも方向感覚を保てるように、コウモリはコウモリ特有の音波探知システムを持っている。近代技術をもってしてやっと再現できるこれらの複雑なシステムは、偶然の結果形成されたとは考えられない。化石記録によってもコウモリが現代のコウモリ同様の完全体で突然現れ、進化プロセスを経ていないことが証明されている。

5000万年前のコウモリの化石：現代のコウモリと変わらない。(Science, Vol.154)

馬の進化の謎

最近まで、進化論の証拠となる重要な化石として、進化の痕跡を示す架空の配列が用いられていた。しかし、今日では、進化論者の多くが進化シナリオの破綻を認めている。シカゴにあるフィールド自然史博物館で1980年に行われた四日間に及ぶシンポジウムでは、150名の進化論者が、段階的な進化論の問題について議論した。そのシンポジウムで、進化論者のボイス・レンズバーガー(Boyse Rensburger)は、ウマの進化シナリオを支える化石記録はひとつもなく、その段階的進化を裏付ける進化プロセスも観察されていない、と述べた。ウマの進化論でよく伝えられる事例は、およそ5000万年前に生息し、狐ほどの四本指の足を持つ動物が、段階的な変化を経て、現代のウマのような1つ指の足を持つ馬になった事例だが、これは長い間不当解釈だと思われてきた。段階的変化ではなく、中間型生物は完全体で存在し、不変で存続し、絶滅していった。移行型は見つかっていない。[1]

ナイルズ・エルドリッジ博士(Dr. Niles Eldredge)は"ウマの進化"ダイアグラムについて以下のように述べている。

創作幅に違いはあるものの、生命の歴史の実態に関する行き過ぎた作り話は今までに沢山あった。中でも最も有名で現在も展示されている事例は、およそ50年前に作られたウマの進化の展示である。これは事実として沢山の教科書に載せられてきた。しかし私はそれが残念でならない。なぜなら、ウマの進化を提唱している人物ですら、それが持つ投機性に気付いているからである。[2]

ウマの進化シナリオの根拠はなんだろう？このシナリオは、インド、南アフリカ、北アメリカ、ヨーロッパの異なる時代に生息したさまざまな種の化石を、進化論者の豊かな想像力に頼って順番に並べた、詐欺的なチャートによって構成されている。ウマの進化を表す20以上にも及ぶ全く異なるチャートが、多くの研究者によって提唱されてきた。従って、ウマの系図に関しては、進化論者の間でも共通合意が得られていないのだ。これらのチャートの中で唯一共通しているのが、5500万年前の始新世代に生息し、ウマ(ウマ属)の祖先と考えられている"アケボノウマ"と呼ばれる犬サイズの動物である。しかし、アケボノウマからウマ属への想像上の進化過程は完全に矛盾している。進化論科学著述者のゴードン・R・テイラー(Gordon R. Taylor)は自身の著書『The Great Evolution Mystery』の中で、この余り知られていない事実に関して次のように説明している。

ダーウィニズムにおける最も深刻な弱点は、古人類学者が説得力のある系統発生、または、大規模な変化を示す生命体の順列を見つけることができないことかもしれない。ウマは唯一完全な順列を持つ事例なのだ。アケボノウマからウマ族への進化は、とても一貫性のない主張である。チャートでは、大きさに連続的拡大を見せるように作られているが、実際にはある種がアケボノウマより小さかった場合もあった。出所の違う標本は、掛け合わせることでとても説得力のある順列を生み出す。しかし、過去にこれらがその順列で並んでいたことを証明する証拠は見つかっていない。[3]

これらの事実全てが、ダーウィニズムの確固たる証拠の1つとして挙げられているウマの進化論チャートが、幻想的で信じがたい物語に過ぎないことを証明する有力な証拠である。

1-Boyce Rensberger, Houston Chronicle, November 5, 1980, p.15

2-Niles Eldredge, quoted in Darwin's Enigma by Luther D. Sunderland, Santee, CA, Master Books, 1988, p.78

3-Gordon Rattray Taylor, The Great Evolution Mystery, Abacus, Sphere Books, London, 1984, p.230

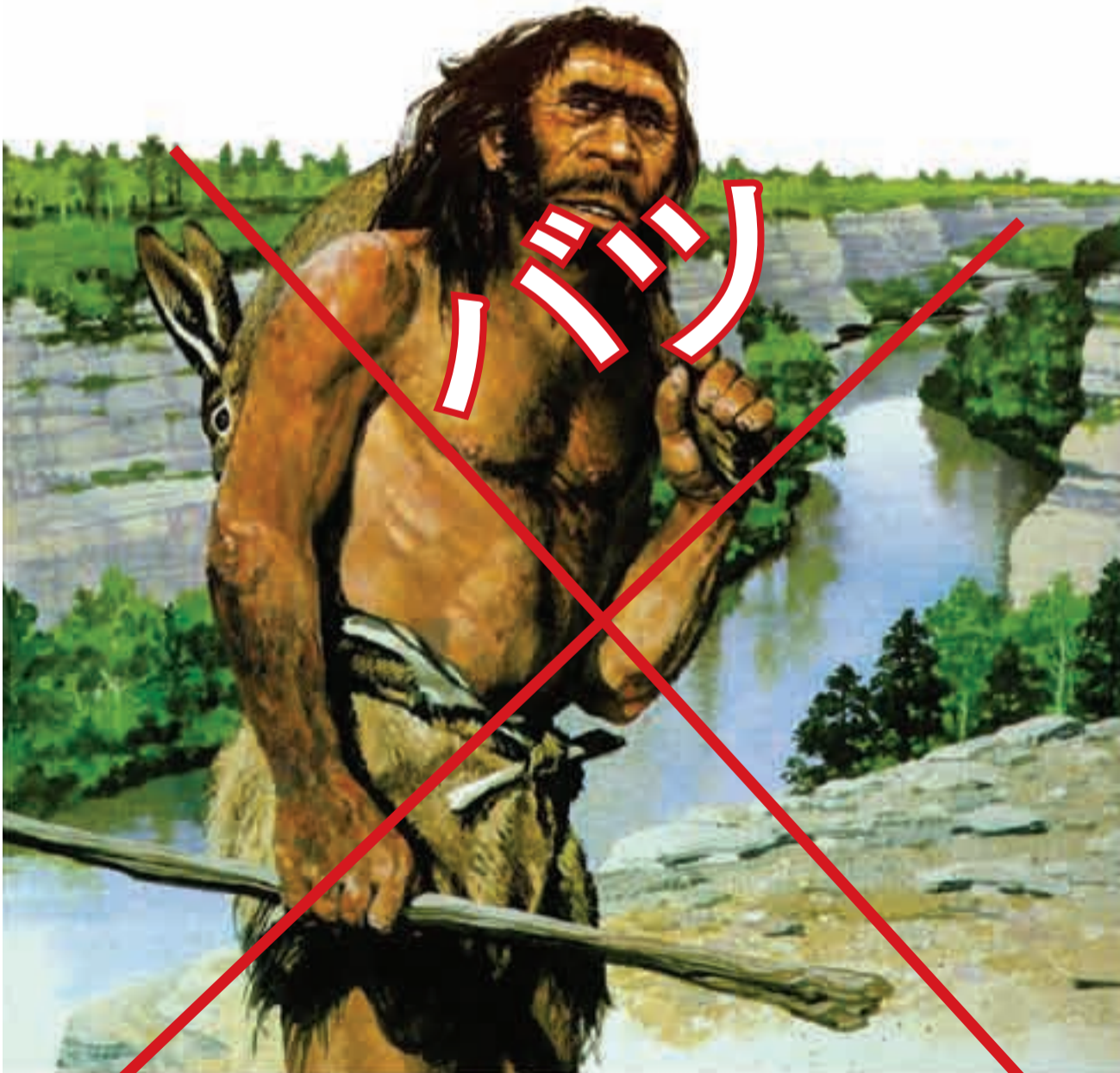
博物館に展示されているこのウマ系統は、多種にわたる、異なる時代と地理的位置に生息した動物によって構成されている。そしてそれは先入観を元に、線形的順序を暗示するように独断的に配置された。このウマの"進化"シナリオを裏付ける化石は見つかっていない。

第7章

進化論者の偏見と偽りに満ちた化石解釈

人類進化の謎の詳細に迫る前に、半人間・半猿生物が存在したという概念を一般社会に普及させた宣伝方法について話しておこう。この宣伝方法には、化石の復元が利用された。復元は、ごく一部しか発見されていない化石を元に、残部を描画して補充、または、モデルを作って補充することを意味する。我々が新聞、雑誌、映画などで目にする“猿人”は全て、この復元なのである。

発見される化石の殆どは、分裂していたり、不完全であったりすることから、その化石から想像される完全体は架空に過ぎない場合が多い。実際に、進化論者が化石に基づいて作る復元(描画やモデル構築)は、確実に進化論を立証できるようなものに仕上がる。ハーバード大学に勤める強い人類学者のデービッド・R・ピルビーム(David R. Pilbeam)はこの事実に対する不満を「少なくとも人類学では、データはまだ希薄であり、理論が解釈に与える影響は大きい。過去に作られた理論が、実際のデータを差し置いて現在の我々の観念に影響を与えた。[62]人々が視覚的情報に左右されやすいことから、化石の復元は進化論者の思う壺となり、復元された生物があたかも実在したかのように人々の脳裏に焼き付けていった」と述べている。

この時点で、我々

1つの頭蓋骨に基づいた3つの復元

“ばかげた話”を作り上げてしまう進化論者は、1つの頭蓋骨からいくつもの異なる顔すらも作り出してしまう。例えば、アウストラロピテクス・ロブストゥス(ジンジャントロプス)と名づけられた1つの化石に対して、3つの異なる描画が作られた。これは、捏造を表す良き一例である。下から順に:1964年4月5月モーリス・ウィルソンの作の描画、Sunday Times版;1960年9月N・パーカー作の描画、National Geographic版。

は1つの重要な事実に焦点をあてなければならない。発見された骨を元に作られた復元は、その生物の一般的な特性しか示すことができない。なぜなら、全ての生物において、一番異なる生態学上の特性はその生物の死後すぐに腐敗してしまう軟組織だからだ。この軟組織の解釈が不確かであることから、復元描写やモデルは完全にその製作者の想像に頼ったものとなる。ハーバード大学のアーストA.・ホーテン(Ernst A. Hooten)はこの状況を以下のように説明する。

軟部を復元する試みは危険な作業だ。唇、目、耳、鼻などはその骨の下にある組織を導き出すヒントにはならない。ネアンダーサルの頭蓋骨を使って、チンパンジーの特性や哲学者の顔つきも復元することが可能だ。計算された人類の祖先の復元は、ほんの小さな科学的意味しか持たず、大衆に誤認を与える可能性が高い。復元は信頼できるものではない。[63]

実際に、進化論者がそのような“希望的観測”を作り上げることから、1つの頭蓋骨から異なるいくつもの解釈が生まれることがある。アウストラロピテクス・ロブスタス(ジンジャントロプス)という化石復元のために作られた3つの描画が、そのような捏造事例の1つである。

先入観に捉われた化石の解釈と、多くの想像上の復元が、進化論者がいかほど頻繁に人を欺くかを象徴している。しかしこの事実ですら、進化史の中で行われてきた計画的な捏造に比べれば、可愛いものなのだが。

この完全に異なるジャワ原人を表す2つの絵は、進化論者の化石解釈がどれだけ飛躍したものかを表す良い一例だ。

左:モーリス・ウィルソンの絵(From Apeto Adam: The Search for the Ancestry of Man, Herbert Wendth)

右:スティーブン・スタンリーの絵(Human Origins)

第8章

進化の捏造

メディアと進化論学会で公開され続けてきた“猿人”像を証明できる化石は発見されていない。筆を片手に架空の生物を作り上げてきたにも関わらず、進化論者にとって、これらの描画と一致する化石を見つけられていない事実は深刻な問題である。この問題を乗り越えるために進化論者が持ち出した興味深い手法がこれらの化石の“製造”である。科学史の中で一番大きなスキャンダルと言われかねないピルトダウン人のケースは、その典型的な一例だ。

ピルトダウン人：オラウータンの顎と人間の頭！

1912年、有名な医師でアマチュア古人類学者であったチャールズ・ドーソン(Charles Dawson)が、英国ピルトダウンにあった穴で、顎骨と頭蓋の欠片が見つかったと表明した。顎骨がサルのものに似ていたにも関わらず、歯と頭蓋骨は人間のものに見受けられた。この種はピルトダウン人と呼ばれるようになった。およそ50万年前のものと主張され、数箇所の博物館で人類の進化の証拠として展示された。ピルトダウン人のケースは40年以上もの間多くの科学誌で取り上げられ、多くの解釈と描画が作られ、その化石は人類進化における重要な証拠として扱われた。少なくとも500の博士号論文がこの議題で書かれた。[64]1921年に英国美術館を訪問したアメリカ人古人類学者のヘンリー・フェアフィールド・オズボーン(Henry Fairfield Osborn)は、「我々は自然界が謎に満ち溢れていることを忘れてはならない」と述べ、ピルトダウン人の発見は“人類の歴史に関わる子孫移行の発見”と主張した。[65]

1949年、英国美術館の古生物学部門のケニス・オークレー(Kenneth Oakley)が化石年齢を調べる新たなテスト方法の“フッ素テスト”をピルトダウン人の化石を使って試みた。その結果は驚くべきものであった。テストの最中に、ピルトダウン人の顎骨がフッ素を含まないことがわかった。それは、この化石がわずか数年しか地中に埋まっていなかったことを意味したのだ。わずかなフッ素しか含んでいなかったその頭蓋骨は、数千年前のものと断定された。

その化石は、オラウータンの顎骨に付随していた歯が人工的に磨滅されものだった。更には、化石と一緒に発見された原始的な道具は鉄鋼用具で作られた模造品だということも判明した。[66]この捏造は、後にジョセフ・ウェイナー(Joseph Weiner)によってまとめられた詳細な研究結果を元に、1953年に一般に知らされた。頭蓋骨は500歳の男性のものであり、顎骨は最近死んだサルのものだったのだ！歯は特別に調整された上で顎に装着され、臼歯の表面は人間のものと見せるために磨かれていたのだ！その上で重クロム酸カリウムに漬け、古さの演出が加えられた。実際にこのシミは酸につけると消えていった。この捏造を暴いたメンバーの一人であるウィルフレッド・レグロス・クラーク(Sir Wilfred LeGros Clark)はこの事実に驚きを隠せず「この人工的な磨り減りの証拠は直ぐに目についた。明白すぎて、何故今まで気づかれなかったのか理解できない」[67]と述べた。この結果ピルトダウン人は、40年以上もの間展示されていた大英博物館から即座に姿を消した。

でっち上げの話

1

その化石はチャールズ・ドーソンによって発掘され、アーサー・スミス・ウッドワードに贈られた。

2

それらは有名な頭蓋骨に復元されるために使われた。

3

その復元された頭蓋骨を元に、多くの描画や彫刻が作られ、数多くの論文や評論解説が書かれた。元の頭蓋骨は大英博物館に展示されている。

4

発見から40年たった今、調査チームはピルトダウン化石がでっち上げの話だと示唆している。

ネブラスカ人：豚の歯

アメリカ自然史博物館官長のヘンリー・フェアフィールド・オズボーン(Henry Fairfield Osborn)は、1992年に、西ネブラスカにあるスネークブルック付近で、鮮新世時代のものと思われる臼歯の化石を発見したと表明した。それは、人間とサルの両方の特性を持ち合わせていた。科学的論争では、これはジャワ原人のものと言う研究者もいれば、人間のものという研究者もいた。このため、最終的にこの歯の持ち主は"ネブラスカ人"と命名され、後に、Hesperopithecusharoldcookiという学名も与えられた。

上の写真はたった1つの歯を元に描かれ、1922年7月24日発行の『Illustrated London News』に掲載された絵である。しかし、実際にはこの歯が、猿人のものでも人間のものでもない、絶滅した豚の一種のものだと判明したため、その事実は進化論者を大きく失望させた。

多くの権威者がオズボーンを支持した。このたった1つの歯を元に、ネブラスカ人の頭と体は復元され、描かれた。それに加えて、自然の中にいるネブラスカ人とその妻子の絵も描かれた。

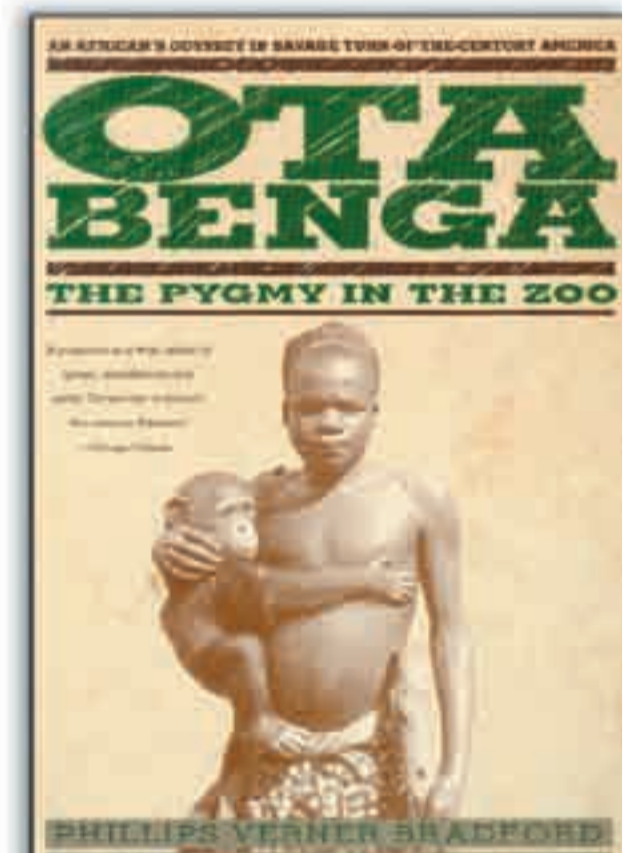
これら全てのシナリオが、たった1つの歯から作り上げられたのだ。進化論界はこの"架空人間"に多大な期待を抱き過ぎていたため、研究者のウィリアム・ブライアンはネブラスカ人は偏見に満ちていると厳しく批判した。

1927年、新たな頭蓋骨の欠片が見つかった。そしてその発掘化石によって、ネブラスカ人の歯とされていたものが、実は既に絶滅したプロステノプスという野生アメリカ豚のものであることがわかった。[68]ウィリアム・グレゴリーは雑誌『Science』の記事に「Hesperopithecusは明らかに人間でもサルでもない」と発表し、Hesperopithecusharoldcookiとその"家族は"即座に進化論文献から姿を消した。

オタ・ベンガ：檻に入れられたアフリカ人

ダーウィンは、著書『The Descent of Man』で人間はサルから進化したという仮説提唱をした後、この考えの証拠となる化石を探し始めた。しかし、一部の進化論者は"半人間・半猿"生物が、化石だけではなく、現在も世界のどこかに存在していると考えた。20世紀初頭、"生きた移行型への手がかり"を望む思いは、不幸な事件を招く結果となった。その1つの代表事例が、ピグミー族のオタ・ベンガの話である。

オタ・ベンガはコンゴ人の進化研究者によって1904年に捕獲された。彼の名前は彼の国の言葉で"友達"を意味した。彼には妻と二人の子供もいた。彼は、動物同様に、檻の中で鎖に繋がれた状態で米国に輸送され、進化論科学者よってセントルイスワールドフェアーに他のサルと並んで展示され、"人間に最も近い移行型"として紹介された。二年後、オタ・ベンガはニューヨークにあるブロンクス動物園に移され、数匹のチンパンジー、ダイナという名のゴリラ、ドーフンという名のオラウータンと同じ並びに、"人間の古代祖先"という名称の下、展示された。進化論者であり、動物園の官長であったウィリアム・T・ホルナンデー(William T. Hornanday)は、この素晴らしい"移行型"を彼の動物園に迎え入れられたことがどれだけ誇らしいことかを述べ、檻の中にいるオタ・ベンガをあたかも通常の動物のように扱った。その屈辱に耐えられなくなったオタ・ベンガは、後に自らの命を絶った。[69]

ピルトダウン人、ネブラスカ人、オタ・ベンガ…これらのスキャンダルを見れば、進化論科学者が理論証明のためなら、どのように非科学的なことも行うことがわかる。これを念頭に置いて提示されている"人類進化"の証拠を見ると、似たような疑惑ばかりが目に付く。至るところに架空の話が転がっていて、その実証に向けて働く人物が山のようにいるのである。

第9章

人類の進化シナリオ

前章では、生命体が誕生するしうる進化の過程が自然界には存在しないこと、そして、生命体は現在の姿をもって突然地上に出現したことを説明した。つまり、生命体は、それぞれ、独特の特徴を備えて創られたということである。"人類の進化"などというものが存在しないことは言うまでもない。

では進化論者が次に挙げる根拠は何だろう？

基本となる材料は、進化論者が自由自在に想像を膨らませる化石記録の存在だろう。歴史を通じて存在したサルの種は6,000種以上にも登るが、現在ではほぼ絶滅し約120種のみが存在する。これらの6,000種のサルは進化論者にとって欠かすことができない頼みの綱となっている。

進化論者は都合の良い頭蓋骨を小さい順に並べ、それらに絶滅した人間の祖先の頭蓋骨を割り当て、人類の進化シナリオを作り上げた。

このシナリオによると、人間と今日生息するサルは同じ祖先を持つという。この祖先が時と共に進化し、一部は現在のサルに、その他は現在の人間になったというのだ。

しかし、古生物学、解剖学、生物学の研究全てが、この進化論の考えが想像の域を越えないことを示唆している。そして、捏造や誤解を招く描画やコメント以外に、人間とサルの関係性に関する証拠は1つも見つかっていない。

化石記録を見れば、歴史上、人間は人間であり、サルはサルであったことが明らかである。進化論者が人間の祖先だと主張する化石の一部は、現在は死に絶えた1万年前後まで存在していた人間の化石だ。更に、現代に存在する人間の部族の多くは、進化論者が過去に絶滅したと推測する人間の祖先と類似した外見と特徴を持っている。これら全てが、人間が過去に一度も進化の過程を経ていないことを証明している。

人間もサルも進化を通じて誕生したのではないことを裏付ける最も重要な証拠が、人間とサルの間に存在する解剖学的相違である。"二足歩行(バイペダリズム)"もその証拠の1つだ。後に詳細を説明するが、二足歩行は人間に特有な特性であり、人間と他の動物を区別するのに最も重要な要素である。

架空の人類系図

ダーウィンの進化論によると、人間はサルに似た生物から進化した。400万年前から500万年前に始まったと推定されるこの架空進化論プロセスは、今日の人間とその祖先の間に"移行型"生物が存在したと述べている。この完全に架空のシナリオによると、そこには大きく分けて4つのカテゴリーが存在する。

1.アウストラロピテクス(アウストラロピテクスに属する全ての種)
2.ホモハビリス
3.ホモエレクトゥス
4.ホモセピアン

進化論者によると、サルに似た人間の祖先は“南東のサル”という意味を持つ“アウストラロピテクス”に属する。この古代猿種であるアウストラロピテクスは既に絶滅しており、大きく丈夫な骨格を持つものから小さく虚弱なものまで、さまざまな形で発見されている。

進化論者は猿人から人間への進化段階である生物を、“人間”を意味するホモ属と名付けた。彼らによると、ホモ属に属する生命体はアウストラロピテクスより発達していて、今日の人間とさほど変わらない。現在の人間はホモセピアンに属し、ホモ属の末期段階で形成されたと考えられている。

メディアにも頻繁に取り上げられ、進化論者の出版物や教材にも用いられている“ジャワ原人”、“ペキン原人”、“ルーシー”などの化石は上記四段階に含まれる。また、これらが枝分かれし、他の種や亜種になる可能性もあることが推測されている。

一部の進化論者は、ラマピテクスが一般的なサルだと発表された後、それをこの架空人類系図から外すことを勧めた。[70]

アウストラロピテクス＞ホモハブリス＞ホモエレクトゥス＞ホモセピアンの順番を明確化することで、進化論者はそれぞれが、次の世代の祖先に当たると主張した。しかし最近の古人類学者による最近の研究結果によると、アウストラロピテクス、ホモハブリス、ホモエレクトゥスは同時期に地球上の異なる場所に存在したことがわかった。更に、ホモエレクトゥスと分類された人間の中にはごく最近まで生存していた種もあることが明かされた。

“最新のジャワ島のホモエレクトゥス:東南アジアに生息したホモセピアンと同年代に生息した可能性”と科学誌の中で発表された論文では、ジャワ島で発見されたホモエレクトゥスの化石は“平均的に27±2から53.3±4千年前のもの”で、この事実は“ホモエレクトゥスが東南アジアに存在し、解剖学的に現代の人間と認めらるホモセピアンと同年代に存在した可能性を高める”と報告した。[71]

更に、ホモセピアンネアンダーサルとホモセピアンセピアン(今日の人間)も明らかに同時期に存在したことが判明した。これが1つの段階が次の祖先であるという系図の矛盾を暴いた。

発掘された初のラマピテクスの化石:二つの部分により構成される、なくなった顎(右)。進化論者はこれらの顎に基づいて、大胆にも、ラマピテクス、その家族、そしてその生息環境を描写した。1つの顎骨を元に復元されたこの生物の家族や生息環境など全てに反し、この生物が単なるサルに過ぎなかったことが判明すると、ラマピテクスは即座に架空の人類系図から外された。
(David Pilbeam, ″Humans Losean Early Ancestor,″ Science, April 1982, pp.6-7)

左にある二つの挿絵はアウストラロピテクスアフェレンシスを描いたもので、下にある絵は、アウストラロピテクスボイセイである。これらは完全な推測に過ぎない。アウストラロピテクスは実際には絶滅したサルの一種である。

本質的には全ての結論と科学研究が、化石記録が進化論者の提唱した進化過程と反することを明らかにしている。人間の祖先と言われた化石は、実際には他の人種か、サル科に属する化石にすぎない。

では、どれが人間の化石でどれがサルの化石なのだろう？これらのどれかを移行型として認めることは可能なのだろうか？この質問に答えるためにも、各段階の詳細を見ていくことにしよう。

アウストラロピテクス：サルの一種

まず初めの段階は、前で述べた通り、"東南のサル"という意味を持つアウストラロピテクスである。これらの生物は約400万年前のアフリカに現れ、およそ100万年前まで存在したと推測される。アウストラロピテクスには多くの種が存在する。進化論者によれば、最古のアウストラロピテクスはアファール猿人である。その次にアフリカヌス猿人、続いて比較的大きな骨を持つロブストゥス猿人と続く。ボイセイ猿人については、何人かの研究者は異種だと主張しているが、一方では、ロブストゥス猿人の亜種だという意見もある。

全てのアウストラロピテクスは今日のサルを象徴する、既に絶滅しているサルである。彼らの頭蓋容量は今日のチンパンジーのものと同等か、それより小さい。手足にも、今日のチンパンジー同様に木登りのための突出部分があり、彼らの足は枝を握られるようにできている。背は小さく(最大130センチ(51インチ))、現在同様、雄は雌より大きい。この他にも、頭蓋骨の詳細構造、目の間隔、尖った臼歯、下顎構造、長い腕、短い足などの全てが、今日のサルと全く同じであることを証明している。

しかし、アウストラロピテクスの生態構造がどれだけサルものに類似していても、進化論者は、彼らが人間のように二足歩行をしたという主張を曲げない。

このアウストラロピテクスが二足歩行をしたという見解は、長年に渡り、古人類学者のリチャード・リーキー(Richard Leakey)、ドナルド・C・ジョアンソン(Donald C. Joanson)らに守られてきた。しかし、アウストラロピテクスの骨格構造を入念に研究した科学者たちが、この議論の無効性を証明した。イギリスとアメリカ出身の名高い二人の解剖学者ソリー・ズッカーマン(Solly Zuckerman)とチャールズ・オックスナード(Charles Oxnard)が、幾つものアウストラロピテクスサンプルを研究した結果、アウストラロピテクスが人間同様の直立歩行をしなかったことが判明したのである。イギリス政府の援助を元に15年にも及び化石の研究が進められた結果、ズッカーマンと彼の率いる5人の専門家チームは、ズッカーマン自身が進化論者でありながらも、アウストラロピテクスが二足歩行をしない、ただのサルの一種であることを結論づけたのだ。[72]それに合わせるかのように、進化論者としてその研究が名高いチャールズ・オックスナードもアウストラロピテクスの骨格構造が現在のオラウータンのものと類似していると明かした。[73]

簡潔に言えば、アウストラロピテクスは人間とは全く関係のない絶滅したサルの種に過ぎないということである。

アウストラロピテクスアファレンシス：絶滅したサル

上に示されているのがアウストラロピテクスアファレンシスの頭蓋骨化石AL444-2で、下が今日のサルの頭蓋骨である。この明らかな類似が、アウストラロピテクスアファレンシスが“人間のような”特徴を一切持たない一般的なサルだと実証している。

アウストラロピテクスアフェレンシ：絶滅しているサル

エチオピアのハダールで始めて発掘された、アウストラロピテクスアフェレンシスに属すると推測された化石：AL288-1または“ルーシー”。長い間進化論者は、ルーシーが直立歩行できることを証明するために必死だった；しかし最新の研究によって、この動物が背を曲げて歩く、一般的なサルと同じだったということが明らかになった。

下に見られるアウストラロピテクスアフェレンシスの化石AL333-105はまだ子供のものである。従って、この頭蓋骨はまだ突出していないのである。

ホモハビリス：人間として紹介されたサル

アウストラロピテクスとチンパンジーにおける骨格と頭蓋構造の最大類似点と、これらの生物が二足方向生物ではなかったという反論は、進化論古人類学者に大きな困難を与えた。

架空の進化構想によると、アウストラロピテクスに次いでホモエレクトゥスが誕生するからである。ホモ("ヒト"を意味する)という名が示す通り、ホモエレクトゥスは人間の一種であり、その骨格は垂直である。また、頭蓋容量はアウストラロピテクスの二倍はある。チンパンジー似のサルから今日の人間と同じ骨格を持つホモエレクトゥスへの進化は、進化論者の理論に乗っ取っても矛盾が生じる。その結果、二つの生物に関係性を生み出す"移行型"が必要になり、ホモハブリスの概念が持ち上がったのである。

ホモハブリスのという分類は、1960年代に"化石ハンター"のリーキース(Leakeys)一家によって提唱された。リーキースによれば、ホモハブリスと名づけられたこの分類は、比較的大きな頭蓋容量を持ち、垂直歩行をし、石器と木器を使うことができた。そしてこれらの事実から、ホモハブリスが人間の祖先の可能性があると伝えられた。

しかし1980年代に発掘された同類の化石がこの見解を大きく変えた。この化石に希望を託していたベルナード・ウッド(Bernard Wood)やC・ローリング・ブレース(C. Loring Brace)などの研究者は、ホモハブリス(器具を使える人間を意味する"能力に溢れた人間")はアウストラロピテクスハブリス、または"能力のある東南のサル"と分類されるべきだと主張した。なぜなら、多くのホモハブリスの特性が、アウストラロピテクスと類似していたからだ。ホモハブリスはアウストラロピテクス同様に、長腕、短足でサルに似た骨格構造を持ち、その指と足指は木登りに適したものだった。更に、彼らの顎は今日のサルと大変似ていた。平均600ccの頭蓋容量も彼らがサルであった証拠である。要するに、進化論者によって、異なる分類だと提唱されたホモハブリスは、実際にはアウストラロピテクスに似たサルの一種に過ぎなかったのである。

ウッドとブレース以降に行われた研究の末、ホモハブリスは正式にアウストラロピテクスと変わらないことが証明された。ティム・ホワイト(Tim　White)によって発掘された頭蓋と骨格化石OH62によって、ホモハブリスは今日のサル同様、木登りのために小さな頭蓋容量、長腕、短足を持っていたことがわかった。

アメリカの人類学者ホリー・スミス(Holly Smith)によって実施された更なる詳しい分析によると、ホモハブリスはホモ、つまり人間ではなく、むしろ"サル"だと明らかになった。アウストラロピテクス、ホモハブリス、ホモエレクトゥス、ホモネアンデルターレンシスの歯の研究結果について、彼女はこのように述べている。

これらの要素を満たす化石のみを分析した結果、虚弱なアウストラロピテクスとホモハブリスの歯の発育パターンは、已然としてアフリカサルと同様である。そして、ホモエレクトゥスとネアンダーサルの歯は人間のものとは異なる。[74]

同年、解剖学の専門学者である、フレッド・スプール(Fred Spoor)、ベルナルド・ウッド(Bernard Wood)、フランス・ゾネベルド(Frans Zonneveld)が異なる手法を使って同様の結論を得た。用いられた手法は、バランス制御を担う、人間とサルの三半規管を比較分析する手法だ。スプールらは以下のように結論付けた。

ヒト属の化石において、一番初めに現代の人間と同じ形態を表した種はホモエレクトゥスだ。一方、南アフリカで発見された頭蓋化石の三半規管大きさはアウストラロピテクスに帰属し、パラントロプス属のそれは、実在する大型サルのものと似ている。[75]

スプールらは、Stw53と名付けられたホモハブリスも研究し、それが"アウストラロピテクスより二足歩行をした可能性が低い"ことも明らかにした。これはホモハブリスがアウストラロピテクスよりもサルに近かったことを証明したことになる。従って、彼らは「Stw53はアウストラロピテクスとホモエレクトゥスの間に生まれた予期せぬ生態だ」とまとめた。

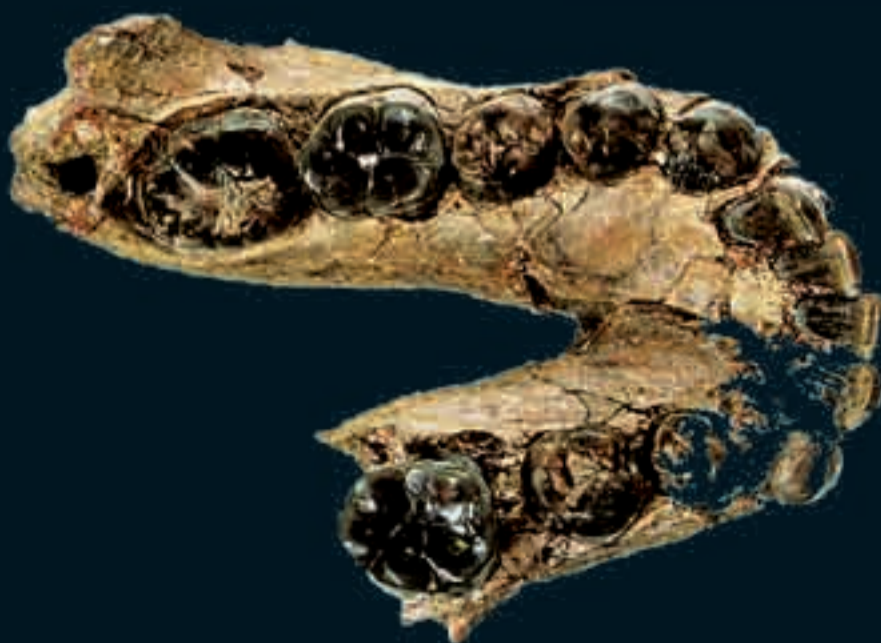
この研究結果は次の2つの大きな事実を打ち出した。

1. ホモハブリスと分類された化石は実際にはヒト属には属さず、アウストラロピテクス同様のサル科に属した

2.　ホモハブリスとアウストラロピテクスは、どちらも、前かがみに歩く生物で、サルの骨格を持っていた。彼らと人間の間には何の関係性もない。

ホモハブリス：もう1つの絶滅しているサル

長い間、進化論者は彼らがホモハブリスと名付けた生物が直立歩行できると述べてきた。彼らはサルと人間への関連性を見つけたと思ったのだ。しかし、1986年にティム・ホワイト(Tim White)が発掘し、OH62と名づけられたホモハブリスの化石がこの推測を反証した。これらの化石の欠片はホモハブリスが今日のサル同様に、長い腕と短い足を持っていたことを明らかにした。この化石が、ホモハブリスが二足歩行生物だという推測に終止符を打ったのだ。実際に、ホモハブリスはサルの一種以外の何者でもなかったのだ。

右に見られる"OH7ホモハブリス"の化石は、ホモハブリス種の下顎の特徴を最もわかりやすく示している化石である。この下顎化石は大きな切断用の歯を持ち、臼歯は小さい。また、顎の形は四角い。これらの全ての要素によって、この下顎と今日のサルの下顎は大変類似しているように見える。言い換えると、ホモハブリスの下顎が、これが実際にはサルだということを証明しているのだ。

ホモルドルフェンシス：誤って合わせられた顔

ホモルドルフェンシスとは1972年に発掘された数個の化石の欠片である。ケニアのルドルフ湖付近で発掘されたことから、それから想像される種がホモルドルフェンシスと名付けられた。古人類学者の多くはこの化石が絶滅した種に属したものではなく、ホモハブリスとは異なるホモルドルフェンシスという生物だと考えている。

これらの化石を発掘したリチャード・リーキー(Richard Leakey)は、人類学史上最大の発見として、約280万年前のものと推定される"KNM-ER1470"と呼ばれる頭蓋骨を披露した。リーキーによると、この種は、アウストラロピテクス同様に少ない頭蓋容量を持つが、現代の人間と類似した顔を持つという。そして彼は、この種がアウストラロピテクスと人間を関連付ける生物だと表明した。しかしその直後、科学新聞や雑誌の表紙に頻繁に登場するようになっていたKNM-ER1470の頭蓋骨は、意図的ともいえる、不正な頭蓋骨欠片の組立てで作られたことが判明した。この事実は、1992年に人間の顔の形態学を専門とするティム・ボロマージュ(Tim Bromage)教授によって行なわれたコンピューターシミュレーションにより陽の目を浴びることとなったたった。

[KNM-ER1470]が復元された時、その顔は、現代の人間にも見られる平らな顔の様に、頭蓋骨に対してほぼ水平に仕立てられた。しかし近年の解剖学的関係性よれば、実際の顔は、大きく突出し、アウストラロピテクスのようなサルに類似した顔だったとわかっている。[76]

進化論古人類学者のJ・E・クローニン(J. E. Cronin)はこの事実について以下のように述べている。

…その比較的しっかりとした顔の作り、鼻前庭斜台(アウストラロピテクスを想起させるくぼんだ顔)、小さな最大頭蓋幅(側頭部の)、強力な犬歯槽と大きな臼歯(歯根にて確認されている)。これらの全てはアフリカヌス猿人分類群の種に通ずる、比較的初期の形質である。[77]

ミシガン州立大学のC・ローリング・ブレース(C. Loring Brace)も同様の結論を出した。1470の顎と歯の構造分析における報告書で、彼は「口蓋の大きさと大臼歯に割かれた面積からも、ER1470はアウストラロピテクス同等の顔と歯を持ったと推測される」とまとめている。[78]

ブレース同様にKNM-ER1470の研究に力を注いだジョンホプキンス大学の古人類学者、アラン・ウォーカー(Alan Walker)教授もまた、この生物をヒト属と分類すべきではなく、アウストラロピテクスと分類すべきだと述べている。[79]

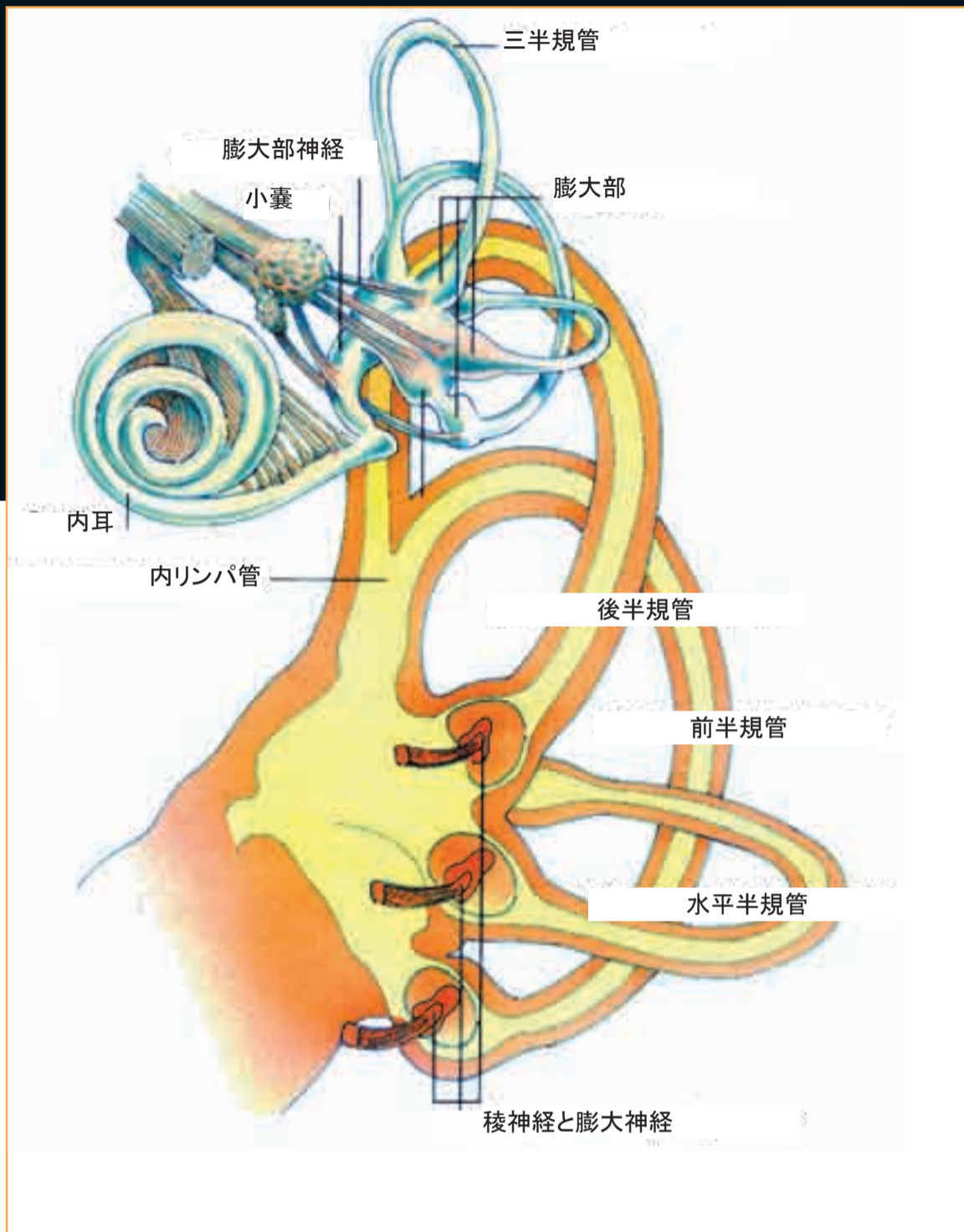
要約すれば、アウストラロピテクスとホモエレクトゥスの間に存在したと想定されたホモハブリスやホモルドルフェンシスは完全なる架空の種である。これらがアウストラロピテクスの一種であることは多くの研究者によって確認され、彼らがサル科の一種であることが証明された。

この事実は、1999年の『Science』にて報告された進化論古生物学者のベルナルド・ウッド(Bernard Wood)とマーク・コラード(Mark Collard)の行なった研究結果によって更に強化された。ウッドとコラードは、ホモハブリスとホモルドルフェンシス(Skull1470)の種は架空であり、この種に属すると定められた化石は全てアウストラロピテクス種に移行されるべきであると述べた。

近年では、脳の大きさ、推測される言語能力、手の機能、石器製造能力に基づいて、発掘された化石がヒト属か否かが決められていたが、人類進化におけるヒト分類の定義や使用方法は、その基準には基づかない一部の例外として扱われてきた。…最新の記録、実在する証拠の新たな解釈、古人類学的記録の限界は、ヒト属分類に必要な基準を変えた。

…実際、類人化石は、4つの内の1つでも基準を満たしていればヒト属に分類された。…しかし今となれば、これらの基準が不十分であることは明白である。絶対頭蓋容量の生物学的重要性が不確かな限り、サルと人間の脳判別境界には問題がある。更に、脳の形から言語機能を完全に推測することは不可能であり、先行研究が示したように、言語機能を司る脳機能は、脳内でも局部的に密集していないことを証明する証拠もある。

…言い換えれば、ホモハブリスとホモルドルフェンシスのハイポジムが配属されるヒト属は、良質な属とは言えない。従って、ホモハブリスとホモルドルフェンシス("初期ヒト属"分類の一部という定義に同意しない者には、広い意味でのホモハブリス)はヒト属から除外されるべきである。最低一度以上の変化を経て現存の初期類人属に変化したことが明らかになれば分類的に問題はない。しかし当分の間は、ホモハブリスとホモルドルフェンシをアウストラロピテクスに移動させることを勧める。[80]

内耳分析の結果：サルから人間への移行型は存在しない

サルと人間の内耳内にある三半規管の比較分析の結果、人間の先人として描かれてきた化石は、実際にはただのサルであったことが証明された。ホモエレクトゥスには人間の内耳道が確認されたが、アウストラロピテクスやホモハブリスには、サルの内耳道が確認された。

ベルナード・ウッドとマーク・コラードの導き出した結論は、"類人の初期原人祖先"は歴史上存在しないという我々の一貫した主張と同じである。人間の祖先として分類された生物は、実際にはアウストラロピテクスに属するサルなのだ。これらの既絶滅のサルとヒトを結ぶ進化的関係は、化石記録によっても確認されていない。人類は突如として、化石記録に現れたのである。

ホモエレクトゥスとそれ以降：

進化論者の提案した素晴らしい構想によると、ヒト属内での進化は、まず、ホモエレクトゥス、次に"原始的"と呼ばれるホモセピアンとネアンデルタール人(ホモサピエンスネアンデルターレンシス)、そして最後に、クロマニオン人(ホモサピエンスサピエンス)という段階を踏んだ。しかしこれら分類は、ただのバリエーションや1つの種以外の何でもない。差異は、イヌイット族とアフリカ人、またはピグミー族と西欧人の違いほどでしかないのだ。

ではまず人類の原種と考えられているホモエレクトゥスから検証してみよう。その名前の通り"ホモエレクトゥス"は"直立歩行をする人間"である。進化論者は"直立"の要素を加えることで、ホモ属と他の化石を差別化した。なぜなら、発見されているホモエレクトゥスの化石は全て、アウストラロピテクス、またはホモハブリスより若干直立型だからだ。しかし、今日の人間とホモエレクトゥスに頭蓋容量以外の違いは見られない。

進化論者がホモエレクトゥスを"初期"と定義した主なる理由は、今日の人間より小さなその頭蓋容量(900〜1,100cc)と太い眉部分の突起にある。しかし、ホモエレクトゥスと同容量の頭蓋容量を持つ人間は現在にも存在し

(例えば、ピグミー属)、他種には大きく眉が突き出ているものもいる(例えば、オーストラリアの先住民)。

頭蓋容量の差異が、知力や能力の差異とは無関係であることは、一般的に認められている事実である。知力はその大きさには起因せず、脳内組織に関係している。[81]

ホモエレクトゥスを世界中で一躍有名にした化石が、アジアで発見されたペキン原人とジャワ原人の化石である。しかし、その二つの化石は、時と共に、信頼性の低いサンプルであることが理解された。ペキン原人は現物が見つからないために一部が石こうで復元されていて、ジャワ原人は遠く離れた場所で見つかった、実際の関係性すら定かでない頭蓋骨の欠片と骨盤骨で“構成”されている。よってアフリカで発見されたホモエレクトゥスの化石が大変に重要視された。(進化論者の中には、一部のホモエレクトゥスの化石を、“ホモエレガスタ”という別の種に分類する場合がある。そこには専門家の間での意見相違が存在する。ここでは、これら全ての化石をホモエレクトゥスと扱うこととする。)

アフリカで発見されたホモエレクトゥスの最も有名な化石は、ケニアにあるトゥルカナ湖で発見された“ナリオコトメホモエレクトゥス”、または、“トゥルカナ・ボーイ”である。その化石は12歳の男子のもので、思春期には身長が1メートル83センチ程になるものだと確認された。その化石の直立骨格構造も、今日の人間と全く変わらない形であった。アメリカ人古人類学者のアラン・ウォーカー(Alan Walker)は、「平均的な人類学者であれば人間とそれの骨格の違いがわかったはずだ」と懸念した。[82]ウォーカーは“それはネアンダール人のものとそっくり”[83]だったために、それを見た時に笑いを隠せなかったと残している。次の章で明らかになるが、ネアンダール人は人類である。従って、ホモエレクトゥスも同様に人類なのである。

進化論者のリチャード・リーキー(Richard Leekey)さえも、ホモエレクトゥスと今日の人間の違いは、人種差でしかないと述べている。

> **頭蓋骨の形、顔の突起傾度、眉部分の突起などの違いも目につくだろう。これらの差異はおそらく、現代の人間にある地理的人種と変わらない。これらの生物学的差異は、長期間、地理的に人口が分離されることで発生する。**[84]

コネチカット州立大学のウィリアム・ラフリン(William Laguhlin)教授はイヌイット族とアウレット族における広大な身体

70万年前の水夫

THIS WEEK

Ancient mariners

Early humans were much smarter than we suspected

OUR ancestors made organised sea journeys more than 700 000 years earlier than previously thought—and they probably used language to coordinate their efforts.

This surprising new theory comes from palaeoanthropologist Mike Morwood and his colleagues at the University of New England in northern New South Wales. It is the result of an intriguing find during their exploration of an ancient lake bed at Mata Menge on the island of [illegible]

[illegible] ash surrounding the tools were between 800 000 and 880 000 years old. Fossil plants and animals found near the tools dated from the same period.

The researchers believe the tools were used by the ancestral human species *Homo*

“初期人類は我々の想像より賢明だった…”

1998年5月14日に発行された『New Scientist』は、進化論者にホモエレクトゥスと分類された人間が、70万年前に船舶操縦術の訓練をしていたと伝えている。船舶を造る能力と技術を持ち、海上輸送を利用する文化を持っていたこれらの人間は、“初期人類”とは呼べない。

ホモエレクトゥス：真の人類

ホモエレクトゥスとは“直立人間”を意味する。この種に含まれる化石は、独特な人類の一種だと断定されている。ホモエレクトゥスの化石が共通の特徴を持たないことから、頭蓋骨によって彼らを分類するのは難しい。これが理由で、進化論者研究者は多くの分類や称号を作ったのである。左上は1975年にアフリカのコービ・フォラで発見され、一般的にホモエレクトゥスを意味する頭蓋骨である。右上は妥当性を問われるホモエルガステルの頭蓋骨KNM-ER3733である。

ホモエレクトゥス化石の頭蓋容量は900～1100ccといわれている。この数字は、今日の人間の頭蓋容量の範囲内である。

右にあるKNM-WT15000、またはトゥルカナ・ボーイ骸骨は、今までに発掘された化石の中で最も古く、最も完全に近い人間の化石である。この160万年前のものと推測される化石の研究によると、これは思春期を迎えれば背が180cmにもなると想定される12歳男子のものだった。ネアンダーサル人に大変よく似ているこの化石は、人類進化説を無効にする最も重要な証拠の1つである。

進化論者のドナルド・ジョンソンはこの化石を以下のように説明している。“彼は長身で痩せていた。彼の体形や手足の長さは現代のアフリカ人のものと同じだった。彼の手足の長さは、現代の成人した白色北米人のものと全く同じである”

(Donald C. Johanson & M. A. Edey, Lucy: The Beginnings of Humankind, New York: Simon & Schuster, 1981)

構造調査を行ない、それらがとてもホモエレクトゥスに類似していることに気付いた。その結果、ラフリンはこれらの異なる種は、実際にはホモサピエンス(今日の人間)内の人種に過ぎないという結論を下した。

エスキモー族とブッシュマン族のように互いに大きな違いを持つ、遠く離れた二つの部族でもホモサピエンスの一種ならば、シナントロプス[エレクトゥスの一例]もまた、その多様性のある種の1つといえるだろう。[85]

現在の科学界では、ホモエレクトゥスが不必要な分類群であり、ホモエレクトゥスに分類された化石が実際にはホモサピエンスと差ほど変わらないことは周知の事実である。この問題に関する議論と、2000年に行なわれた会議の結果は雑誌『American Scientist』において以下のように要約されている。

ゼンケンベルグ議会の参加者の多くは、ミシガン州立大学出身のミルフォード・ウォルポフ(Milford Wolpoff)、キャンベラ大学のアラン・ソーン(Alan Thorne)とその同僚が先導を切ったホモエレクトゥスの分類学的位置づけに関する熱弁討論に引き込まれた。彼らはホモエレクトゥスは種としての妥当性に欠け、削除されるべきであると強く主張した。200万年前から現在までにヒト属に属した人類は全て、自然的断絶や枝分かれのない、1つの大きく異なるホモサピエンスに過ぎずない。この会議の主題であるホモエレクトゥスは存在しないのだ。[86]

上記の見解を擁護する科学者が下した結論は、"ホモエレクトゥスはホモサピエンスと異なる種ではなく、ホモサピエンス内の種なのである"と要約することができる。その一方で、人類としてのホモエレクトゥスと、"人類進化論"シナリオにおけるホモエレクトゥスの先祖であるサル(アウストラロピテクス、ホモハブリス、ホモルドルフェンシス)には大きなギャップがある。これは化石記録に発見されたヒトの化石は突然、事前進化形跡なしに現れたことを意味する。そしてそれは、人類が創造された事実を明白に物語っている。

しかし、この事実を認めることは、進化論者の独断的な哲学と観念に完全に反論することとなる。その結果彼らは、真の人類であるホモエレクトゥスを半猿生物と仕立て上げようとした。ホモエレクトゥスの復元にあたっては、故意に類人猿の特徴を描いた。そしてその一方で、アウストラロピテクスやホモハブリスなどのサルは、人に近くなるように心がけた。彼らはこの手法を使い、サルと人間を"近似"させ、種間に存在する溝を埋めようとしたのである。

ネアンデルタール人

ネアンデルタール人は10万年前の欧州に突然姿を現し、3万5千年前までには消失、または、他種と同化した人間である。今日の人間との唯一の相違点は彼らの持つ頑丈な骨格と、やや大きい頭蓋容量だけだ。

ネアンデルタール人が人類だということは、今日ではほぼ誰もが認める事実である。進化論者は彼らを"原始種"にまくしあげようと必死に試みたが、全研究結果が、ネアンデルタール人は、現代で言う"がたいの良い"人間に過ぎないと示唆した。この問題に関して有名な権威であるニューメキシコ州立大学のエリック・トリンカス(Erik Trinkaus)はこのように残している。

ネアンダータル人と現代の人間のさまざまな骨格比較は、ネアンダータル人の運動神経、操作能力、知的能力、言語能力などの全の身体構

誤

偽者のマスク：今日の人間と変わらないにも関わらず、進化論者は未だにネアンダーサル人は猿人だと主張している。

ネアンダーサル人：強健な人間

左に見られるのはイスラエルで発見されたホモサピエンスネアンデルターレンシスの化石、Amud1である。ネアンダーサルの男は一般的に強健で、背が小さいと言われていた。しかし、この化石の持ち主の身長は180センチあったと推測された。彼の頭蓋容量は今までのもので一番大きかった1740cc。これらのことから、この化石はネアンダーサル人が原始種であったという主張を完全に打ち下す重要証拠の1つとなったのである。

造が、現代の人間に劣らないことを証明した。[87]

現代の研究者の多くは、ネアンデルタール人を現代の人間の一種、"ホモサピエンスネアンデルタール人"として定義している。研究結果により、ネアンデルタール人が死者を埋葬し、楽器も作り、同時期に存在したホモサピエンスサピエンスと文化的類似点があったことが判明した。正確に言えば、ネアンデルタール人は、時と共に絶滅した"がたいの良い"人間に過ぎないのである。

ホモサピエンスアーケイック、ホモハイルデルベルジェネシス、とクロマニオン人

架空進化論構想によると、現代の人間の直前形がアーケイックホモサピエンスである。進化論者がこれらの化石について言及できることは限られている。なぜならこれらの化石と現代の人間には微差しかないからである。研究者の中にはこの種の典型は現代にも存在すると主張し、その例としてオーストラリア先住民を挙げている。ホモサピエンス(アーケイック)同様、オーストラリア先住民も、厚く突出した眉骨と若干小さな頭蓋容量を持っている。

進化論者の文献でホモハイルデルベルジェネシスと分類される種は、実際にはアーケイックホモサピエンスと同類である。同じ人種に、2つの異なる専門名称が付けられたのは、進化論者内の意見の相違に起因する。ホモハイルデルベルジェネシスと分類された化石を見ると、今日のヨーロッパ人の身体構造に非常に類似した人間が、50万年から74万年前に存在したことが読み取れる。またそれは、まずはイギリスに生息し、次にスペインへと移っていった。

クロマニオン人は3万年前に生息したと想定され、円蓋上の頭蓋と、広い額を持っている。その頭蓋容量は1,600ccであり、現代の人間の平均頭蓋容量を越える。頭蓋骨には、ネアンダータル人とホモエレクトゥス同様に、厚い眉骨と骨張った突出が見られる。

クロマニオン人はイギリス人系統だと考察されているが、その頭蓋構成と容量は、アフリカや熱帯地方に住む人種のものと類似している。この類似を信じれば、クロマニオン人はアーケイックアフリカ人だった可能性が生まれる。他の古人類学研究結果では、クロマニオン人とネアンダータル人は今日の人種の土台となる混合種であったと報告するものもある。

まとめると、これらのどれもが"原始種"ではないのである。彼らは昔を生きた異なる人種に過ぎず、他の種と同化か混合、または絶滅して歴史から消えたと考えられる。

祖先と同時代を生きる種

ここまでに我々が行った調査によって"人類進化"シナリオは完全なフィクションであるという事実が鮮明化した。そのような系図が存在するには、サルから人間への段階的変化が起きたはずだが、そのような事実は化石記録には存在せず、実際にサルと人間の間には大きな違いがある。身体構造、頭蓋容量、直立歩行や直角な前傾姿勢などの要素がヒトとサルを区別する。(1994年に行われた内耳研究によって、アウストラロピテクスとホモハブリスがサルに、ホモエレクトゥスが人類に分類しなおされたことについては既に言及した。)

祖先と子孫の関係にある異なる種が実際には同時代に生息したことから、この系図関係が事実ではない事も証明された。進化論者が主張するように、仮にアウストラロピテクスがホモハブリスに進化し、その後ホモエレクトゥスになったと推測するには、互いの生息時期が順を追うことが前提である。しかし、そのような順列は化石記録には見つかっていない。

進化論者の予想によるとアウストラロピテクスは400万年前から100万年前に存在した。ホモハブリスと呼ばれてる生物は、170万年前から190万年前まで存在したと考えらている。ホモハブリスより"発達している"と推測されたホモルドルフェンシスは、250万年前から280万年前に存在したのだ！これは、ホモハブリスを"祖先"にもつホモルドルフェンシスが、実際にはホモハブリスより100万年も前に存在したことを示している。一方で、ホモエレクトゥスの時代は160〜180万年前であり、それは、"祖先"といわれているホモハブリスとホモエレクトゥスが同時期に存在していたことを示している。

アラン・ウォーカー(Allan　Walker)は、"東アフリカには、アウストラロピテクスの一部が、ホモハブリスとホモエレク

2万6千年前の針：

ネアンダーサルに服飾能力があったことを示唆する興味深い化石：2万6千年前の針。(D. Johanson, B. Edgar, From Lucy to Language, p.99)

トゥスと同時期に存在していた証拠がある"と述べ、その事実を認めた。[88]ルイス・リーキー(Louis Leekey)は、タンザニア、オルドゥヴァイ峡谷地域にあるBedII地層で、ほぼ隣同士に並ぶアウストラロピテクス、ホモハブリス、ホモエレクトゥスの化石を発見した。[89]

これは人類系図にあてはまらない。ハーバード大学の人類学者で、同時に進化論者でもあるステファン・ジェイ・グールド(Stephen Jay Gould)は、この危機をこのように説明した。

仮に、明らかに異なる3つのヒト科の種族(アフリカンヌス、がたいの良いアウストラロピテクス、ホモハブリス)が共存していて、互いからの進化形跡がないのであれば、我々の理論はどこへ行ってしまうのだろう。[90]

ホモエレクトゥスから次のホモサピエンスに目を向けても、そこにもまた、系図が存在しないことに気付かされる。ホモエレクトゥスとアーケイックホモサピエンスの両方が、2万7千年前から1万年前あたりまで存在していた証拠があるのだ。オーストラリアにあるカウスワンプでは、約1万3千年前のホモエレクトゥスの頭蓋骨と思われるものが発見されている。そしてジャワ島では、2万7千年前のホモエレクトゥスの遺骨が発見されているのだ。[91]

ホモサピエンスの隠れた歴史

進化論における人類系図の根本を覆す、最も興味深く重大な事実は、現代の人間が持つ、予想外な歴史である。古人類学の研究によると、我々にそっくりなホモサピエンスは100万年前当たりまで存在した。

第一発見者は、著名な進化論古人類学者のルイス・リーキー(Louis Leekey)だった。リーキーは、ケニアのヴィクトリア湖付近のカンジェラ地区において、今日の人間に酷似し、中期更新世時代に属することが推測される化石を発見した。[92]しかし中期更新世は今から100万年も前であり、この発見が人類系図を根本的に破綻させることから、進化論古人類学者の中には目を瞑る者もいた。しかしリーキーは、この推測の妥当性を主張し続けた。

この議論が忘れ去れかけた頃の1995年、スペインにおいて、ホモサピエンスが推測年齢より大分昔のものであることを異例の形で証明する化石が発見された。この問題の化石は、スペイン、アタプルカ地域にあるグランドリーナという洞窟で発掘された。現代の人間にそっくりな11歳男子の顔面化石だったが、死後80万年も経っているものだったのだ。この件は、1997年12月発刊の雑誌『Discover』で特集された。

化石は、グランドリーナ発掘を主導したホアン・ルイス・アルスアガ・フェレラス(Juan Luis Arsuaga Ferreras)の信念をも震撼させた。

我々は大きく、巨大で、想像を絶する原始的な発見を求めていた。80万歳の男子への期待は、トゥルカナボーイへの期待と似ていた。しかし、我々が目にしたものは、近代的な顔つきだったのだ…これは私にとってみれば願ってもみないことだった。全く予想だにしないもの発見すれば誰でも震撼する。化石発掘のことを言っているのではない。勿論化石発掘も未知数だと言える。現代にしか存在しないと信じていたものを、過去に見つけることこそ、華々しいことはない。それは…テープレコーダーをグランドリーナで見つけるような感覚だ。そんなことがあったら誰でも驚愕するだ

進化論文献の中での人気のある雑誌『Discover』の表紙を80万年前の人間の顔が飾り、"この顔は我々の祖先か？"と疑問が書かれていた。

ろう。更新世末期にカセットやテープが存在したとは予想しない。80万年前に存在した近代的な顔を見つけるのも、同じ感覚だ。それを見た時、我々は驚きを隠せなかった。[93]

この化石の発掘は、ホモサピエンスの歴史が80万年前にさかのぼらなければいけない事実を強調した。初期ショックからの回復後、化石を発掘した進化論者たちは、進化系図上は80万年前には存在しないホモサピエンスを肯定すべく、それが異種に属すると判断した。その結果彼らは、"ホモアンテセッサー"という架空の新種を作り上げ、その分類の中にアタプルカ頭蓋骨を含んだ。

17万年前の小屋

ホモサピエンスが80万年前以前から存在したという発見は沢山見つかっている。その1つが1970年代にルイス・リーキー(Louis Leakey)によって発見されたオルドゥヴァイ峡谷の例である。そのBedII地層の中にはアウストラロピテクス、ホモハブリス、ホモエレクトゥスの全てが共存した形跡が見つかった。更に興味深いのはリーキーが同じ地層で見つけた建築物である。彼は、石小屋の残骸を見つけたのだ。注目すべきは、現在でもアフリカの一部で見られるこの建築物が、ホモサピエンスにしか作られないということだ！従って、リーキーの発見をまとめると、アウストラロピテクス、ホモハブリス、ホモエレクトゥスと今日の人間は、約170万年前から共存していることになる。[94]この発見が、人類がアウストラロピテクスなどの猿人から進化したという理論を完全に打ち下すはずだ。

360万年前に存在した、今日の人間の足跡！

いくつかの発見により、今日の人間の起源が170万年前に遡ることが明らかになっている。これらの1つには、1997年にメリー・リーキー(Mary Leakey)がタンザニアのレトリイで発見した足跡がある。これらの足跡は、360万年前のものと推定される地層の中から発見され、更に注目すべきは、この足跡が現代の人間と全く同じ形をしていたということである。

メリー・リーキーが発見した足跡は、後に、ドナルド・ジョンソン(Donald Johnson)やティム・ホワイト(Tim White)を含む多くの古人類学者権威によって検証された。結果は勿論同じであり、ホワイトはこのように記録した。

紛れもない事実だ…これらは現代の人間の足跡と類似している。カリフォルニアにあるビーチに同じ足跡をつけ、4歳児にそれを何かと問えば、その子供は迷わずに誰かの足跡だというだろう。その子が、この足跡と他のいくつもの足跡との区別がつかないように、君にもきっと見分けがつかないだろう。[95]

足跡の検証後、ノースキャロライナ州立大学のルイス・ロビンズ(Louis Robbins)は以下のコメントを残した。

土踏まずは大きいー私より小さな人間の土踏まずは、私のものより大きかったー親指は人差し指と並び…足指は人間の足指のように地を歩くーこの形は他の動物には見られない。[96]

170万年前の小屋も科学界を震撼させた。その小屋は現在のアフリカ人が使うものに似ていた。

足跡の形態学的形の検証は生息時期を証明すると同時に、それらが現代の人間(ホモセピアン)の足跡だと認めざるを得ない結果を出した。検証を行った一人のラッセル・タトル(Russel Tuttle)はこのように記述してた。

小さな裸足のホモセピアンが作ったとも考えられる…しかし確認可能な形態的特長を見る限り、その足跡を残した者は現代の人間と同じだといえるだろう。[97]

公平な検証がその足跡の真の持ち主を明らかにしたのだ。実際には、化石化された10歳児の足跡が20個と、27個のより若い子供の足跡が見つかっていた。彼らは明らかに我

レトリイ足跡は今日の人間の足跡と同じだったが、何百万年も前のものだった。

230万年前の人間の下顎骨

進化論者によって提唱された架空の系図を無効にするもう1つの一例：230万年前の人間の下顎骨。A.L.666-1と名づけられたこの下顎骨はエチオピアのハダールで発掘された。

進化論者の文献では、これを“衝撃的な発見”として言い逃れをしている。

(D. Johanson, B. Edgar, From Lucy to Language, p.169)

々と同様の人間だったのだ。

この結果から、レトリイ足跡は何年にも渡って議論の的になった。進化論古人類学者は、まるで彼らが現代の人間が360万年前に存在した事実を受け入れられないかのように必死に説明を試みた。そして1990年代に次の“説明”が形を帯び始めた。360万年前にヒト科は生存し得なかったため、これらはアウストラロピテクスの足跡であると。しかし、ラッセル・H・タトル(Russel H. Tuttle)は1990年の論文に次のように残した。

レトリイのGサイトで発見された350年万年前の足跡は、習慣的に裸足を好む、現代の人間のものであることを示している。足跡の特徴のどれもが、彼らが我々に劣らない二足歩行能力を持ったヒト科であることを物語っている。もしG足跡が昔の物だといわれなかったら、我々は当然の如くこの足跡が私たちの種であるヒト科(homo)につけられたものだと言うだろう。いずれにしても、この足跡がルーシーのようなアウストラロピテクスアファレンシスのものだという信憑性のない仮説は捨てたほうがいい。[98]

簡単に言えば、これらの足跡は360万年前のもので、アウストラロピテクスに属するものではないのだ。この足跡がアウストラロピテクスの一種だと考えられた唯一の理由は、この足跡が発見された火山層が、360万年前のものだったからだ。これがアウストラロピテクスのものであるという推測は、その時代に人間が生息したはずがないという信念から生まれたものに過ぎない。

これらのレトリイ足跡に関する解釈は重要な事実を意味している。進化論者は科学的所見を無視して、自身の理論を支持する。進化論は、その理論の存在を無視、または、ゆがめる危険性を持つ研究結果を全て無視し、何が起ころうとも無条件に弁護されてきた理論なのである。

まとめると、進化論は科学ではなく、科学を無視しながら掲げられている定説に過ぎない。

進化における二足歩行の難局

今までに扱ってきた化石記録だけではなく、サルと人間の歴然とした身体構造差もまた、人類進化理論を無効にする。歩行習慣もその内の1つである。

人間は二足の直立状態で歩く。この形は他の哺乳類には見られない特別な移動方法である。一部の動物には後ろ足を使って立てる動物もいるが、その場合は、限られた運動力しか持たない。クマやサルは、餌に手の伸ばす場合などのごく限られた状況下で、ほんの一瞬この形を見せるが、通常、彼らの骨格は前かがみで四足歩行である。

では、進化論者の論じるように、二足歩行は、サルの四足歩行から進化した結果なのだろうか？

とんでもない。二足歩行が進化の結果ではないこと、またそのようなことは不可能であることは調査によって明ら

かになっている。まず初めに、二足歩行は有利な進化ではない。人間の二足歩行より、サルの移動方法の方が、より簡単で、速く、効率的に動ける。人間は、チンパンジーのように落ちることなく木から木へ飛ぶこともできないし、チーターのように、時速125キロで走ることもできない。反対に、二足方向で歩く人間は、ゆっくりと地面を歩く。従って、人間は、動きと防御という面では、自然界において一番無防備の動物である。有利に進化を遂げるという進化論の論理に従えば、サルが二足歩行へ進化したはずはなく、逆に、人間が四足歩行動物に進化したはずではないか。

進化論におけるもう1つの難局は、二足歩行がダーウィニズムの主張する"段階的発達"モデルを満たさないことだ。進化論の土台となっているこのモデルは、二足歩行と四足歩行の間に"複合型"を必要とする。しかし、1996年に行なわれた電子調査を元に、そのような"複合型"は存在しえないとイギリス古人類学者のロビン・クロンプトン(Robin Crompton)が明かした。彼は、生物は直立歩行か四足歩行でしか歩けないという結論に達した。[99]半二足歩行には莫大なエネルギーが必要となり、進化論の言う移行型となるこの歩行方法は存在しえない。

人間とサルに存在する膨大な差は二足歩行だけではない。脳容量、言語能力など、未だに解明されない問題は沢山残っている。進化論古人類学者のエレイン・モルガン(Elaine Morgan)は、次のように告白をしている。

人間の持つ4つの大きな謎は、なぜ二足歩行をするのか?なぜ毛を失ったのか?なぜこのように大きく脳が発達したのか?そしてなぜ話せるようになったのか?である。

これら全ての疑問に対する一般的な回答はまだない。そしてわからないままの謎ばかりの中で、こうした謎がより一層増えていくかもしれない。[100]

最近の調査の結果によって、四足歩行のために曲がった骨格構造が二足歩行の人間の骨格構造に進化することは不可能だということが明らかになった。

進化:非科学的信念

ソリー・ズッカーマン(Solly Zuckeman)は英国で最も有名で評価の高い科学者の一人である。彼は、長年に渡り化石を研究し、多くの詳細な調査を行なってきた。科学への貢献を称されて爵位も与えられた進化論者である。これだけ認められている彼の進化に関する意見は、無知や偏見とみなすべきではない。長年に渡り、人類進化シナリオに基づいて化石研究をしてきたにも関わらず、彼は人類系図は存在しないという結論にいたったのだ。

また、ズッカーマンは、科学的なものから非科学的ものまでを幅広く扱う新たな"科学の領域"という興味深い概念を提案した。ズッカーマンによると、具体的なデータに基づく最も"科学的"な領域は、化学と物理学である。その後に、生物化学、社会科学と続く。領域の一番端で、最も"非科学的"に相当するのがテレパシー、"第六感"などにあたる"超能力"であり、"人類の進化"もそこに含まれる。ズッカーマンは彼の推論を以下のように説明している。

完全に予測不可能な客観的事実を、超感覚的知覚、人類の化石歴史解釈のような推定される生物化学領域として扱えば、何事も解釈可能である。熱狂信者が幾つもの相反する考えを同時に信じてしまうことと同じである。[101]

人類の起源に関する重要な文献『Discovering Archeology』の編集者であるロバート・ロック(Robert Locke)は、その中で"人類の祖先の調査は、希望ではなく絶望を生む"と述べ、著名進化古人類学者であるティム・ホワイト(Tim White)の告白を引用した。

我々は皆"未解決な問題に対する"苛立ちの気持ちを隠せない。[102]

ロックの論文は、人類の起源に関する進化論の行き詰まりと、それに関する事実無根な主張について次のよう

に書評している。

科学界の中で人類の起源ほどに異論の多い調査はないかもしれない。優秀な古人類学者は人類系図の基本概要にすら反対している。新たな発掘化石によって消滅するだけなのに想定された新種が意気揚々と誕生する。[103]

この事実は名の知れた雑誌『Nature』の編集者であるヘンリー・ジー(Henry Gee)によっても認められた。1999年発刊の彼の著書『In Search of Deep Time』で彼は、"何千世代もの生命体が存在した1000万年～500万年は小さな箱に入れることができる"と述べた。人類の起源と発達に関する従来の理論は、"事実を元に、人間の偏見に合わせて作られた完全な創案に過ぎない"とまとめ、以下のように付け加えた。

化石を一列に並べ、それが種族を意味するという主張は検証可能な科学的仮説ではない。しかし、話を盛り上げることはできる。それは、教育的かもしれないが、科学的ではない。[104]

ではこの定説の何が、科学者たちをそこまでも魅了するのだろう？無数の論争と彼らの発見した証拠を放棄することになってまで、彼らは何故進化論を存続させようとするのだろう？

それは、進化論を断念する局面が訪れた際に彼らが直面する真実を恐れているからでしかない。彼らの持つ前提と彼らの信じる唯物論的哲学から考えると進化論者には創造は受け入れられない概念なのである。

その考えが理由となり、彼らは自身を騙し、メディアの協力を経て、世界をも騙す。妥当な化石が見つからない場合には、彼らは架空描画、または偽りのモデルなどを"捏造"し、進化を裏付ける化石があたかも存在するかのような印象を与えようとする。その世間的見地に共感するマスメディアの一部も、大衆を騙し、人々の潜在意識に進化論を植えつけようとしている。

しかし、彼らがどれだけ一生懸命に努力しても、真実は変わらない。人間は進化プロセスを経て誕生したのではなく、神の創造として誕生したのだ。従って、責任の所存は、神にある。

人類進化の謎に科学的根拠は存在しない。これらの説明は、進化論者の架空で希望に満ちた考えの表明以外には、何の意味も持たない。

第10章

分子進化の袋小路

本書前章では、化石記録がなぜ進化論の説得力を弱めるのかを説明した。実際は、化石を証拠として反論するずっと前に進化論は崩壊していたため、わざわざ化石記録と進化論を関連付ける必要はないのだが、地球上に生命体がどのように誕生したのかという質問は、進化論を根本から無意味なものにする。

この質問に対し進化論は、生命体は偶然形成された細胞からはじまったとしている。進化論のシナリオでは400万年前に生命を持たないさまざまな化合物が、雷電や大気圧が影響を与える地球上の原始大気にて何らかの反応を起こし、最初の生命体を形成したとされている。

まず第一に、無生物が混ざり合って生命体に成るという主張は、過去のどのような経験や観察でも一度も確認されたことのない非科学的なものである。生命体は生命体からのみ生まれる。1つの生体細胞は、他の生体細胞の複製により形成される。現代の高度技術を持ってしても、無生物を混合し生体細胞の形成に成功した者は世界中に1人もいない。

それでもなお進化論は、人間の思考力、知識、そして技術の全てを持ってしても作り出すことのできない生命体が地球の原始状況下で偶然形成されたと主張する。次のページでは、なぜこの主張が科学の一番の基本原理に反しているのか、およびその理由について説明しよう。

“偶然生まれた細胞”の話

もしあなたが生命体が偶然誕生したと信じるのであれば、次に紹介するこれに似たような話も無理なく信じられるだろう。それは、ある街の話である。

ある日、不毛の土地で、岩々に押しつぶされた粘土の塊が雨で濡れている。濡れた粘土は、太陽が昇ると乾いて強度を増し、硬くて耐久性のある構造になる。その後、粘土の型の役割も果たしていた周辺の岩々が何らかの形で粉々に砕かれ、その拍子にきちんとした、形も良く、強いレンガが現れる。レンガは、同じ環境下で他のレンガが造られるのを何年間も待つ。何百、何千のレンガがそこにできるまで待つのだが、その間、最初に出現したレンガに

ある日、不毛の土地で、岩々に押しつぶされた粘土の塊が、雨で濡れる。濡れた粘土は、太陽が昇ると乾いて強度を増し、硬くて耐久性のある構造になる。その後、粘土の型の役割も果たしていた周辺の岩々が何らかの形で粉々に砕かれ、その拍子にきちんとした、形も良く、強いレンガが現れる。レンガは、同じ環境下で他のレンガが造られるのを何年間も待つ。そして偶然により、最初に出現したレンガは傷んだり壊れたりすることがない。

ある程度のレンガが造られると、雨や嵐、または竜巻などの自然条件の助けを借り、不規則に横向きに互いに重なり合って建物となる。その一方で、セメントや土壌が「自然の状況」下で絶妙なタイミングで造られ、重なり合ったレンガの間を埋め、レンガを固定する。これらが起こっている間、鉄鉱石が「自然の状況」下で地面下に生まれ、レンガの建物を支える建物の基礎となる。そして最後に、全ての資材、大工工事、接続工事が完全に行われた完全な建物が出来上がる。生命体が偶然により生まれたと主張する進化論は、全ての運用システム、通信、交通、管理システムが自然に発生したというこの話同様にばかげている。細胞は建物よりも複雑なのだから。

は傷ひとつつかない。何千年にもわたり、嵐、雨、風、灼熱の太陽、いてつく寒さにさらされても、レンガには亀裂も入らず、壊れもせず、誰かに持ち去られることもなく、同じ場所で同じように他のレンガが造られるのをただひたすらに待つ。

ある程度のレンガが造られると、雨や嵐、または竜巻などの自然災害に耐えられるよう、レンガが勝手に横向きに互いに重なり合って建物となる。その一方で、セメントや土壌が"自然の状況"下で絶妙なタイミングで生まれ、重なり合ったレンガの間を埋め、レンガを固定する。また、同時に鉄鉱石が"自然の状況"下で地面下に生まれ、レンガの建物を支える建物の基礎となる。こうして建物が生まれ、そして最後に、全ての資材、大工工事、接続工事が完全に行われた完全な建物が出来上がる。

もちろん、この建物は基礎、レンガ、そしてセメントだけで出来ているのではない。では、建物に必要なその他の資材はどのように得られたのか？答えは簡単である。建物に必要な全ての資材は、地球に存在した何らかの物体から自然に生まれた。そして建物が完成した時点で、ガラス用のシリコン、電気ケーブル用の銅、柱・はり・水道管用の鉄など、全てが既に地下に大量に存在した。これらを建物の中に入れるには"自然の状況"が必要なだけであり、運び入れ、大工作業、接続作業などは、風、雨、または地震の助けを借りてレンガの中で勝手に行われる。全ては完璧に進み、レンガは、まるで後から自然状況によって窓ガラスと呼ばれる物体が入るであろうスペースや、さらに、後から偶然形成される予定の水道、電気、暖房機器などのスペースも残して積み重なる。全てが"偶然"と"自然状況"により適切に行われ、ここにこうして1つの完璧な建物が生まれる。

ここまでの話を問題なく信じることが出来るのであれば、街、その他の建物、工場、高速道路、歩道、橋脚、通信システム、および交通システムがどのように生まれたのも簡単に推測できるであろう。そして、あなたがこの題材に関する技術知識を持ち、内容に精通していれば、『下水道の不変的構造とその進化の過程』という少々厚めの非常に"科学的"な本を書くことも可能である。その賢い研究にてアカデミー賞を受賞し、自分を天才だと思い込み、人類の本質に光を当てるであろう。

偶然によって生命体が誕生したと唱える進化論は、全ての運用、通信、交通、管理システムが自然に発生したという先ほどの街の話同様に馬鹿げている。細胞は街よりもずっと複雑なのだから。

細胞の奇跡と進化の終焉

ダーウィンの時代には、生体細胞の複雑な構造は知られておらず、当時進化論者たちが考えた、生命体の起源は"偶然と自然状況"によるという説は人々を納得させるのに十分であった。

20世紀の技術は、どんなに小さな生命体の小片をも徹底的に調べ、細胞は、人類が直面した一番複雑なシステムだと解明した。今日、我々は、細胞には細胞が利用するエネルギーを作り出す発電装置、生きるために欠かせない酵素やホルモンを作り出す工場、細胞が作る全ての物に必要な情報が保存されているデータバンク、細胞内で原材料や生産物を運搬するための運搬システムや輸送路、原材料を使用可能な素材に分解する研究所や精製所、および出入りする物質を管理する特別な細胞膜タンパク質などの機能があることを知っている。そしてこれらは、極めて複雑なシステムのほんの一部の構成要素でしかない。

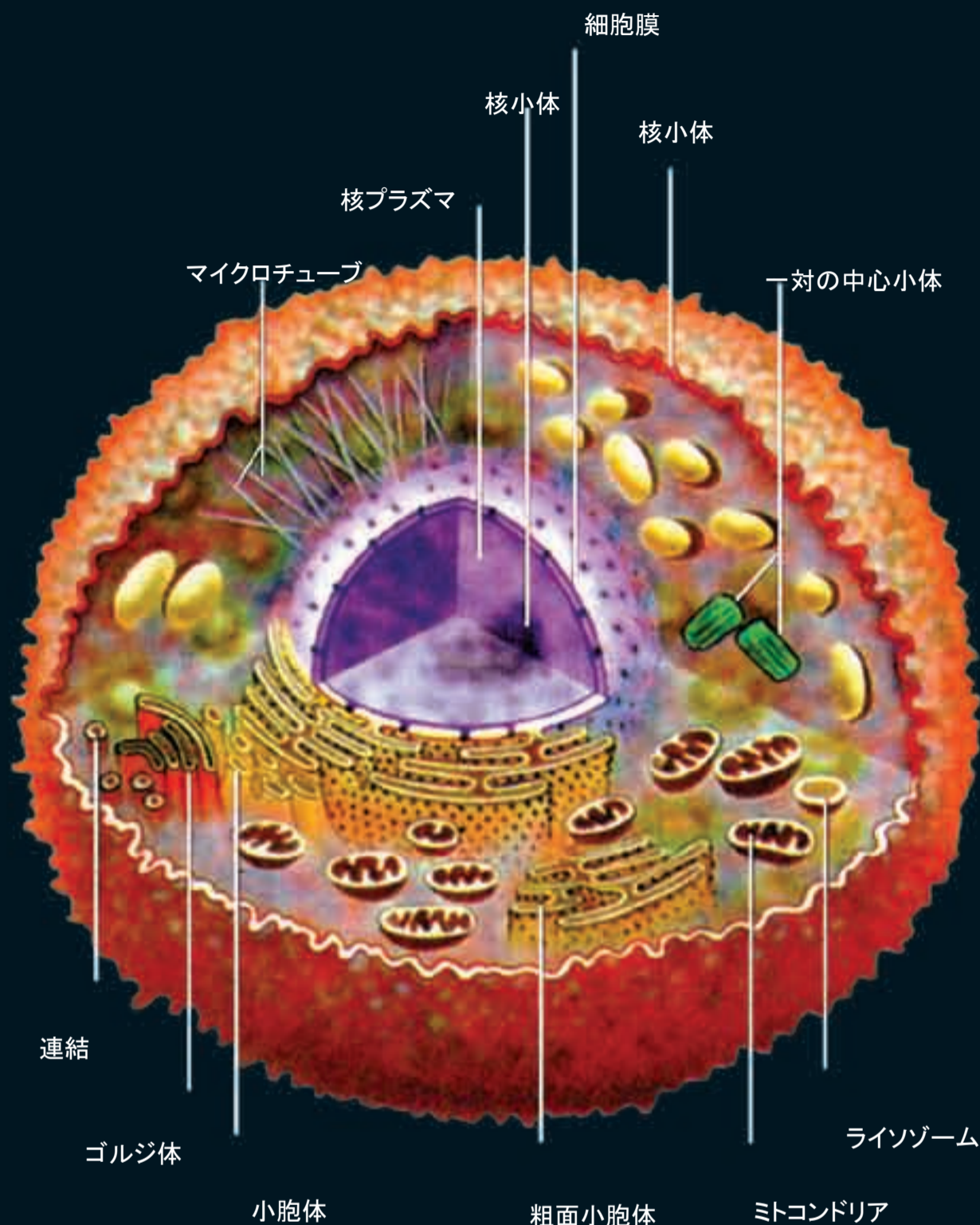
進化論者であり科学者でもあるW. H. ソープ(W. H. Thorpe)は、「一番単純な細胞でも、人間が考えだし、作り出したいかなる機械よりもはるかに複雑な『メカニズム』を持っている」[105]と認めている。

細胞は非常に複雑であり、現在ある高度なレベルの技術を持ってしても作ることができない。人工細胞を作るという試みは、いまだかつて成功したことがないどころか、全ての試みが失敗に終わっているのが現状だ。

進化論は、人類が全ての思考力、知識、そして技術を自由に使っても生み出すことのできない細胞システムが、原始地球の状況下で"偶然"発生したと主張する。この確率を他の例で説明する場合、これは印刷工場が爆発した後すぐに本を完全に複製することと同じと言える。

数学者であり天文学者でもある英国のフレッド・ホイル(Sir Fred Hoyle)は、1981年11月12日発行の雑誌『Nature』のインタビューにて似たような比較を行っている。彼自身も進化論者であるが、ホイルは、「進化論の唱えるように生命体が誕生した確率は、竜巻がガラクタ置き場を通り抜け、そこにあった資材でボーイング747が偶然出来上がっている確率と変わらない。[106]つまり、生命体が偶然によって生まれたというのは不可能であり、よって、生命体は"創られた"ものであると言える」と言った。

進化論がなぜ細胞が生まれたのかを説明できない理由の1つは、細胞が持つその"単純化できない複雑性"であろう。生命体は、多くの細胞小器官の調和と連携により保たれている。たった1つの細胞小器官が機能しなくなっただけで細胞は死んでしまう。細胞は、自然選択や突然変異などの無意識のメカニズムによって失った機能が再び形成されるのを待つことはできない。従って、地球上に誕生した最初の細胞は、生きるために必要な全ての細胞小器官や機能を有していなければならず、これはつまり、細胞が創られたものであることを意味する。

細胞の複雑性

細胞は最も複雑かつ繊細に設計されたシステムである。生物学の教授マイケル・デントン(Michael Denton)は、自身の著書『A Theory in Crisis』で次のように述べている。

「分子生物学によって明かされた生命体の真実を理解するには、細胞を10億倍、つまり直径20キロメートルのロンドンやニューヨークのような大きな街を覆うほどの大きな飛行船ほどの大きさに拡大しなければならない。するとそこには比類なき複雑性と適応設計を備えた物体を見ることができる。細胞の表面には、物質の出入りを管理する宇宙船の端子穴のような無数の開口部がある。この開口部に入ると、その技術の素晴らしさと信じられない複雑性が我々には到底作り出せないということ、それが偶然などではなく神の創造にしかなせないものだということがわかるだろう」

進化論者の告白

進化論は、生命の出現を説明する点において、難局に直面している。なぜなら、有機分子は非常に複雑で、偶然形成されることは不可能である。

進化論者は、20世紀後半に生命の起源の問題に直面した。分子進化論の権威であるロシアの進化論者アレキサンダー・I・オパーリン(Alexander I. Oparin)は、1936年に発行された自身の著書『The Origin of Life』で次のように述べている。

残念なことに、進化論を完全なものにするために必要な、生命の起源という謎は解かれていない。[1]

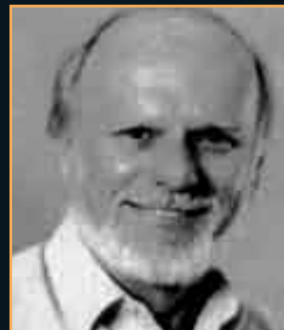
オパーリンの後も、進化論者はさまざまな実験、研究、観察を行い、生命体が偶然形成される証明を試みた。しかし、どの試みも細胞の複雑さを明確にし、進化論者の仮定を論破してしまった。Johannes Gutenberg大学のInstitute of Biochemistryのクラウス・ドーズ(Klaus Dose)教授は、次のように述べている。

化学進化や分子進化の分野にて30年以上も行われてきた生命の起源に関する実験は、その答えを出すどころか、地球上の生命の誕生が無限大に複雑であるという認識を導いた。現時点でまでの進化論の根本や実験は、全てが行き詰まりか無知の告白で終わっている。[2]

San Diego Scripps Instituteの地球科学学者ジェフリー・ベーダ(Jeffrey Bada)の次の発言は、進化論者のこの行き詰まり状態を明確にしている。

20世紀も終えようとしている今、生命が地球上でどのように生まれたのか？という20世紀に入った頃の疑問を、我々は未だ解けずにいる。[3]

アレキサンダー・オパーリン(Alexander Oparin)：

「細胞の起源は、依然として謎である」

ジェフリー・ベーダ(Jeffrey Bada)：

「世の中で一番の未解決の謎は…地球上でどのように生命体が生まれたのか？である」

1- Alexander I. Oparin, Origin of Life, (1936) NewYork: Dover Publications, 1953 (Reprint), p.196.

2- Klaus Dose, "The Origin of Life: More Questions Than Answers", Interdisciplinary Science Reviews, Vol 13, No. 4, 1988, p. 348

3- Jeffrey Bada, Earth, February 1998, p. 40

タンパク質の挑戦のチャンス

細胞に関してはそれぐらいにしておくが、進化論は細胞の構造単位の形成すら証明できていない。自然状況下では、細胞を構成するたった1つのタンパク質の形成すら不可能である。

タンパク質は、特定の量と構造で特定の列を成す"アミノ酸"と呼ばれる小さな個体が集まった大きな分子である。アミノ酸は、生命体の構成要素である。一番シンプルなタンパク質は、50個のアミノ酸からできており、中には何千ものアミノ酸により構成されているタンパク質もある。

ここで重要なのは、タンパク質の構造においてたった1つのアミノ酸が欠けたり、増えたり、または置き換えられたりするたけでも、そのタンパク質は使い物にならないただの分子の魂となってしまうことである。全てのアミノ酸が、正しい順序で正しい位置になければならないが、これは偶然起こったというにはあまりにも複雑であり、生命が偶然の結果生まれたとする進化論は、この問題に直面すると無力である。(さらに、後の章で説明するが、進化論ではタンパク質が偶然形成されたという主張を実証できていない)

タンパク質の偶然発生がほぼ不可能だという事実は、誰にでもわかる簡単な計算で見ることができる。

例えば、12種類、228個のアミノ酸から成る平均サイズのタンパク分子は、10^{300}もの配列の組み合わせを持つ。(これは、1のあとに0が300個も並ぶ天文学的な数字である)これら全ての配列から、たった1つが目的とするタンパク分子を形成する。その他全ての配列は、生命体にとって完全に役に立たない、あるいは潜在的に有害なアミノ酸鎖である。

言い換えると、1つのタンパク分子が形成される確立は"10^{300}分の1"であり、この"1"が起こる確率はほとんど皆無である。(実際、数学の世界では10^{50}の1より小さな確率は"確率0"と考えられている)

しかもこの228個のアミノ酸から成るタンパク分子は、何千ものアミノ酸から成る巨大タンパク分子と比べるととても小さい。巨大タンパク分子に先ほどの確率計算を行った場合、その実状を表すには"不可能"という言葉ですら不十分である。

もう一歩踏み込んで生命体の進化の仕組みに取り組むと、1つのタンパク質だけでは、何も意味しないことがわかる。今までに発見された一番小さなバクテリア、"Mycoplasma hominis H39"は、600"種類"のタンパク質で構成されている。この場合、先ほどの確率の計算を、600種類のタンパク質1つ1つに行わなければならない。その結果は、不可能という概念すら無力にする。

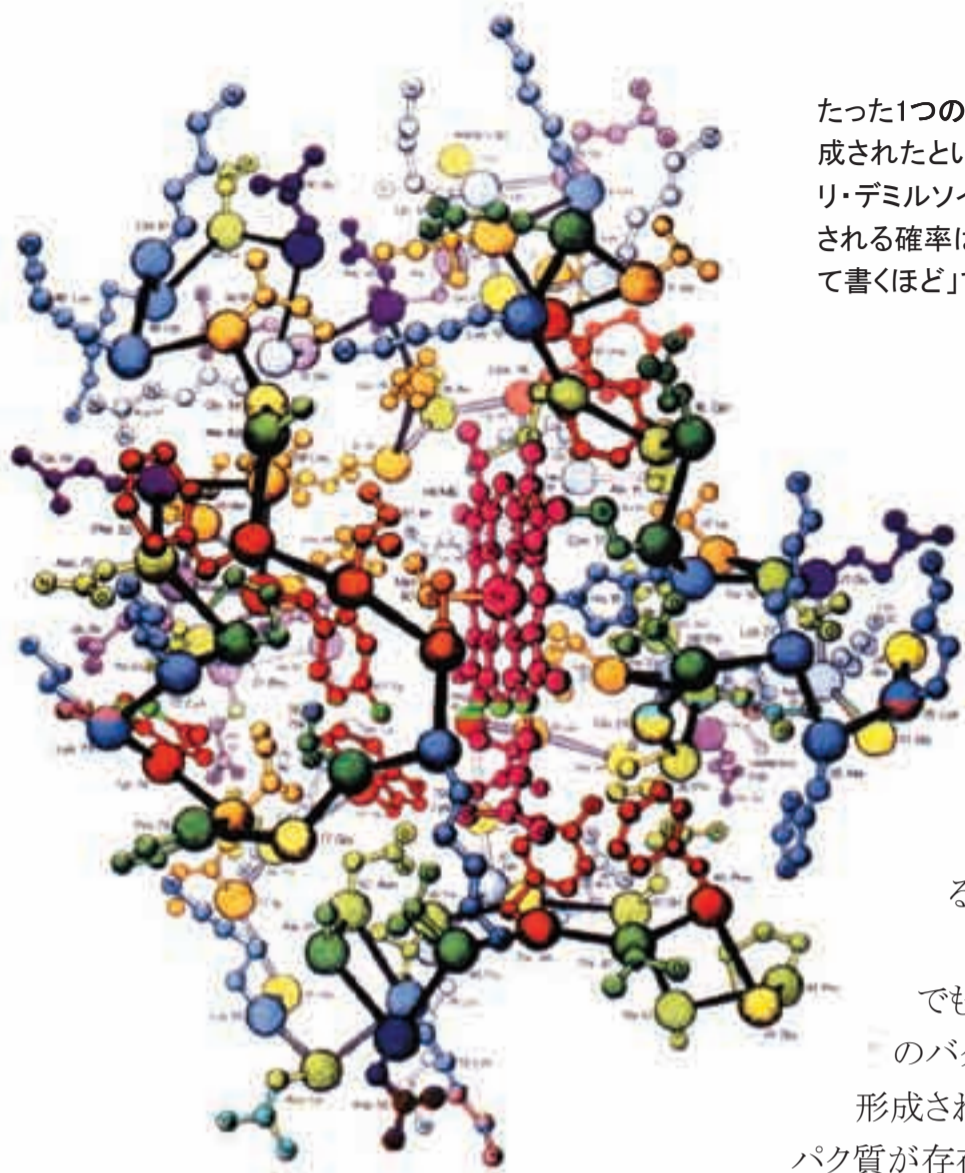
これまで進化論を科学的説明として受け入れてきた人で、本書をここまで読み進んだ人たちは、こうした数字は誇張されており、事実を反映していないと思うかもしれない。しかし、これらの数字は事実であり誇張ではなく、一人の進化論者もこの数字に抗議することはできない。彼らは、1つのタンパク質が偶然形成された確率は"猿が人類史を間違いを1つもなくタイプライターで書き上げるような可能性と等しい"[107]ことを認める必要がある。しかし、彼らはこうした事実を受け入れず、不可能の擁護を続けている。

この話は、実際、多くの進化論者に認められている。例えば、有名な進化論者であり科学者でもあるヘラルド・F・ブルーム(Harold F. Blum)は、「既知のタンパク質の一番小さな大きさのポリペプチドが自然に形成される確率は無いに等しい」[108]と述べている。

進化論者は、分子進化は非常に長い年月をかけて起こったため、不可能が可能になったと主張する。いずれにせよ、どれだけ長い年月をかけたとしても、アミノ酸が偶然タンパク質を形成するのは不可能である。アメリカの地質学者ウィリアム・ストークス(William Stokes)は、彼の著書『Essentials of Earth History』にて、確率は「アミノ酸に必要な高濃度の湿った溶液で満たされている何億個もの惑星で、何億年待ったところで起こりえない」[109]ほど低いという事実を認めている。

これは何を意味するのか？化学教授のペリー・リーブス(Perry Reeves)がそれに答えている。

ある科学者が、蒸発する原始池から発生する可能性のあるシンプルで無作為な組み合わせのアミノ酸構造がどれだけあるかを分析した。結果、生命体がこの方法で発生したとは信じがたいものになった。これらを成すには、マスタープランを持った偉大な創造者がいたと考えるほうがもっともらしい。[110]

たった1つのタンパク質ですら偶然に形成されることが不可能だとしたら、何百万個のタンパク質が同時に適切に発生し、完全な細胞を形成することはその何億倍も"不可能"である。その上、細胞は決してただのタンパク質の

たった1つのタンパク質シトクロムCの化学構造ですら偶然の一致で形成されたというには複雑すぎ、実際、トルコの有名な進化論提唱者アリ・デミルソイ(Ali Demirsoy)教授は、シトクロムCが偶然の一致で形成される確率は「サルが人類の歴史を間違えなしにタイプライターを使って書くほど」であると言っている。

塊ではない。タンパク質に加え、細胞には、核酸、炭水化物、脂質、ビタミン、その他にも、電解質などの化学物質(しかもこれらは構造と機能に関して特定の比率、平衡、設計で配置されていなければならない)が存在する。これらの要素1つ1つが、さまざまな細胞小器官にて構成要素または共同分子のように機能するのである。

ニューヨーク大学の化学教授であり、DNA専門家でもあるロバート・シャピーロ(Robert Shapiro)は、1つのバクテリアに存在する2000種類のタンパク質が同時に形成される確率を計算し(人間の細胞には20万種類のタンパク質が存在する)、その結果、10^{40000}分の1^{111}という数値を得た。(これは、1の後に4万個のゼロが続く驚異的な数字である)

ウェールズのカーディフ大学の応用数学および応用天文学の教授チャンドラ・ウィックラマシンゲ(Chandra Wickramasinghe)は、以下のコメントを残している。

生命体が無生物から自然形成された可能性を確率で表すと、1の後にゼロが4万個つく。この数字は、ダーウィンや進化論そのものを葬り去ることができる数値である。地球のみならず、どのような惑星にも原始スープなどというものは存在せず、もし生命体の始まりが偶然でないとすれば、生命体は目的を持った誰かが創り出したものだとしか言えない。[112]

また、フレッド・ホイルはこの信じ難い数字に次のコメントをよせた。

(生命体が情報により組み立てられたという)この論理がなぜ広く受け入れられないのかは誰の目にも明らかだ。これは科学的にではなく科学者の心理的に受け入れられないのだ。[113]

ホイルが“心理的”という言葉を使ったのは、進化論者である彼自身が、生命体が創られたものであると受け入れ難かったからであろう。神の存在の否定が、進化論者の一番の目的である。この理由のためだけに、彼らは自分でも進化論の不可能性がわかっていながらもこの不合理な論理を擁護し続ける。

左利きのタンパク質

では、タンパク質形成における進化論者のシナリオがなぜ不可能なのかを詳しく説明しよう。

右利きのアミノ酸が正しく配列されただけでは、機能的なタンパク分子は形成されない。正しい配列に加え、タンパク質を構成する既存の20種類のアミノ酸は左利きでなければならない。アミノ酸には、その他全ての有機分子同様“左利き”と“右利き”の2種類がある。この2種類の違いは、人間の右利きと左利きの人の違いに似ており、3次元で見たときに鏡面対称になっている。

この2種類のアミノ酸は、お互いに非常に結びつきやすい。しかし、調査によって驚くべき事実が明らかになった。この惑星上に存在する植物と動物に見られる全てのタンパク質は、一番シンプルなものから最も複雑なものまで、左利きのアミノ酸のみで作られている。たった1つの右利きのアミノ酸がタンパク質構成要素に入ってしまったらこのタンパク質は役に立たない。また、一連の実験では、右利きのアミノ酸にさらされたバクテリアはそのアミノ酸を即座に破壊する

という驚くべき結果も出た。他の実験では、破砕した成分を利用し、使いものになる左利きのアミノ酸を生み出したバクテリアもいた。

ここで仮に、生命体が進化論者の言うように偶然発生したとしよう。この場合、偶然発生した右利きと左利きのアミノ酸は、自然界においてほぼ同じ割合で存在するはずである。右利きと左利きのアミノ酸はお互いに科学的に結びつくことができるのだから、全ての生命体構造には右利きと左利きのアミノ酸が含まれるはずである。しかし、既知の通り、現実世界の全ての生命体は左利きのアミノ酸でのみ形成されている。

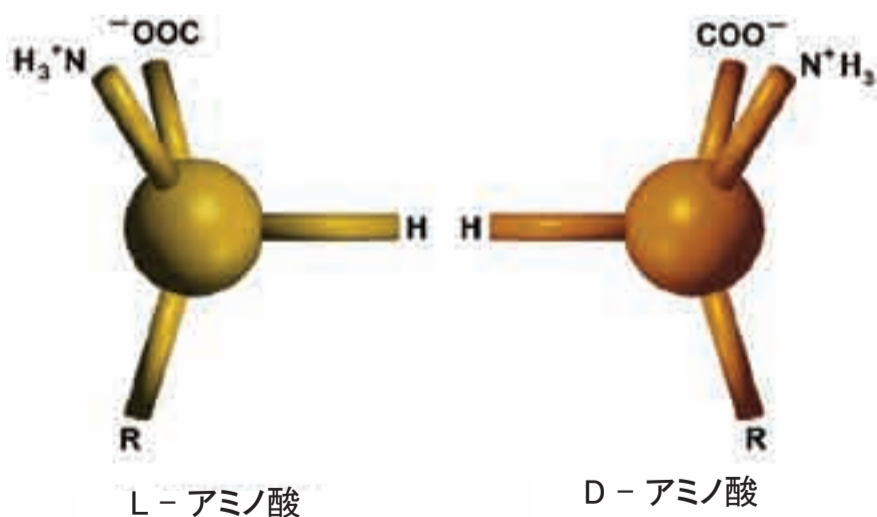
全てのアミノ酸の中から、タンパク質がどうして左利きのアミノ酸だけを選ぶことができるのか？そしてどうしてたった1つの右利きのアミノ酸も生命過程に関わっていないのか？という疑問は進化論者を当惑させ、こうした特別かつ意識的な選択は、進化論が直面している大きな壁の1つである。

更に、タンパク質のこの特性は、進化論者が直面している“偶然”に関する問題をさらに悪化させる。“意味のある”タンパク質が形成されるためには、特定の数と配列のアミノ酸が存在するだけでは不十分であり、それらが三次元に正しく組み合わされなければならない。加えて、全てのアミノ酸は左利きでなければならず、たった1つの右利きアミノ酸も混じってはならない。自然選択のメカニズムでは、右利きのアミノ酸が配列に加わった場合、それを認識し除去できない。この事実は、今一度、偶然やたまたまという可能性を永遠に消し去る。

進化論の積極的な擁護者『Brittanica Science Encyclopaedia』では、地球上の全ての生命体のアミノ酸、タンパク質などの複雑な重合体の構成要素は、全く同じ左利きの非対称であると言っている。加えて、これは百万回コインを投げて常に表が出ることと等しいとしている。もちろんこの百科事典は分子がなぜ左利きと右利きになったのか解明できず、だからこそこの選択が地球上の生命の起源に魅力を投げかけているのだという。[114]

もし、コインを百万回投げていつも表が出るのだとすると、それを偶然のせいにするよりは、意図的介入があったと考えるほうがより論理的ではないだろうか？答えは明らかである。しかし、それほど明らかだと思えることでも、進化論者は“意図的介入”の存在を認めたくがないために偶然に逃げている。

アミノ酸の左利き性に似た状況は、DNAとRNAを構成する核酸の一番小さな単位、ヌクレオチドにも見られる。左利きのアミノ酸のみ選択されているタンパク質とは対照的に、核酸では、そのヌクレオチド成分の好ましい形は全て右利きである。これもまた、偶然では説明し難い事実の1つである。

要するに、先ほど説明した確率からも、生命の起源は偶然からは起こりえないということは疑う余地もなく証明されている。左利きのみの400個のアミノ酸から成る平均サイズのタンパク質の確率を計算しようとすると、2^{400}の1、または10^{120}の1という数字になる。わかりやすく比較すると、宇宙に存在する電子の数は、約10^{79}個と言われており、これもとてつもなく大きな数だが、先ほどの確率と比べるとアリ程の大きさであると言えよう。1つのアミノ酸が必要な配列と機能性を持って形成される確率はとてつもなく大きな数字であり、これより大きな種類のタンパク質形成の確率を計算した場合、その数値は想像もつかないものになる。

自然界には、“左利き”と“右利き”の2種類のアミノ酸が存在する。この2種類の違いは、人間の右利きと左利きの人の違いに似ており、三次元で見たときに鏡面対称になっている。

極めて重要な正しい結合

進化論が越えることのできないたった1つのタンパク質形成に関する困難な問題には、これまでに我々が説明した以上の事実がある。アミノ酸が正しい数と順序で三次元構造に配列されただけではタンパク質として十分でない。タンパク質の形成には、アミノ分子の最低1つの腕が、正しい方法で他のアミノ分子の腕と繋がっていなければならない。これは"ペプチド結合"と呼ばれている。アミノ酸は、色々なアミノ酸とさまざまな結合法をとることができるが、タンパク質は、これらのアミノ酸が"ペプチド"結合していてのみ成り立つ。

アミノ酸は、色々なアミノ酸とさまざまな結合法をとることができるが、タンパク質を構成するアミノ酸分子は"ペプチド結合"と呼ばれる方法でお互いに結びついていなければならない。この方法以外で結合しても、アミノ酸鎖は意味を成さず、タンパク質は形成されない。.

この点を明確にするためにある例を挙げよう。たった1つの車輪が通常のナットとボルトとは異なるワイヤーを使って地面の向きに取り付けられたこと以外は、全ての部品が正しく組み立てられた車が一台あるとする。この車は、どのような複雑な技術を持っていても、どのようにパワフルなエンジンを持っていても、ほんの少しも動かない。ひと目見ただけでは、全ての部品が正しく組み立てられているように見えるが、車輪がたった1つ間違って組み立てられただけで、この車は役に立たない。同様に、たった1つのアミノ酸がペプチド結合していないタンパク分子は使いものにならない。

研究では、アミノ酸はランダム結合を行った場合、通常50%がペプチド結合になり、残りの50%はタンパク質には見られない結合になる。タンパク質が正しく機能するためには、全てのアミノ酸が左利きでなければいけなかったように、ペプチド結合でのみ結合していなければならない。

この確率は、タンパク質が左利きである確率と同じである。つまり、400個のアミノ酸でできたタンパク質で考えた場合、全てのアミノ酸がペプチド結合で繋がる確立は、2^{399}分の1となる。

確率ゼロ

有効なタンパク質の形成に必要な3つの基本条件は以下の通りである。
まず、タンパク質鎖内のアミノ酸が正しい種類で正しい配列であること。
次に、全てのアミノ酸が左利きであること。
最後に、全てが"ペプチド結合"と呼ばれる化学結合で結合していること。

タンパク質が偶然形成されるためには、上記全ての条件が同時に存在しなければならない。その確率は、各条件の発生確率を掛けることで得られる。

例えば、500個のアミノ酸で形成されている平均的な大きさの分子の場合は以下のようになる。
1. アミノ酸が正しい配列である確率：
タンパク質を形成するのに使われるアミノ酸は20種類。これをもとにすると、

- 20種類のアミノ酸から正しいアミノ酸が選択される確立は　1/20
- 500個のアミノ酸が正しく選択される確率は　$= 1/20^{500} = 1/10^{650}$
$= 10^{650}$分の1の確率

2. アミノ酸が左利きである確率：
- 1つのアミノ酸が左利きである確率は　1/2
500個全てのアミノ酸が左利きである確率は　$= 1/2^{500} = 1/10^{150}$
$= 10^{150}$分の1

3. 全てのアミノ酸が"ペプチド結合"である確率：
アミノ酸は、さまざまな化学結合で結合することができる。有効なタンパク質を形成するには、全てのアミノ酸が"ペプチド結合"していなければならない。アミノ酸がペプチド結合する確率は50%と言われている。これをもとにすると、

- 2つのアミノ酸が"ペプチド結合"する確立は　1/2
- 500個のアミノ酸全てがペプチド結合する確率は　$= 1/2^{499} = 1/10^{150}$
$= 10^{150}$分の1

3つの条件が全て同時に起こる確率は、　$1/10^{650} \times 1/10^{150} \times 1/10^{150} = 1/10^{950}$

$= 10^{950}$分の1 となる。

試験的作用または誤差作用は自然に存在するのか？

最後に、既にいくつかの例で説明した確率計算の基本論理に関して、重要なポイントで締めくくろう。確率計算が天文学的数値を超えたこと、そしてこうした天文学的確率は、実際に起こる可能性が無いことを指摘したが、これ以外にも、進化論者が直面するより重要かつ不利な事実が存在する。自然状況下では、タンパク質が出現するような試行錯誤作用は存在しないという事実である。

これまでのページで論証してきた500個のアミノ酸から成るタンパク質が形成される確率は、実際の地球環境ではなく人工的に作られた理想的な試験環境下でのみ起こる。つまり、実用的なタンパク質が得られる10^{950}分の“1”という確率は、見えざる手が、間違った結合を分解し、正しい結合を見つけながら並べ替えるという作業を繰り返しながら、500個のアミノ酸を無作為に結合するという望ましい環境が存在したと仮定した場合にのみ言える。この試行中、アミノ酸は1つ1つ分離され、新しい配列に並べ替えられなければならない。500個目のアミノ酸が追加された時点で、統合は停止され、余分なアミノ酸が1つも混ざっていないことも確かにしなければならない。試行はここで完了し、機能的なタンパク質が形成されたかを確認する。そして、そのタンパク質が機能的でなかった場合には、全てのアミノ酸を再び分解し、他の配列を試さなければならない。加えて、各試行においてたった1つの異物も混ざってはならない。また、499番目の結合が完了するまで、それまでに作られた鎖は分離したり、壊れたりしてはならない。これは先ほど説明した確率論が、“正しいアミノ酸の選択”を行う意識的に管理された環境下でのみ可能であり、このような環境が自然状況下にないということは明確である。従って、自然環境の中でタンパク質が形成されることは、論理的にも技術的にも不可能である。実際、このような確率の話をするということが非常に非科学的だ。

この問題を広い視点で見られない人は、小手先の観点から物を見、タンパク質形成は単純な化学反応だと仮定し、“アミノ酸結合はその化学反応の1つでありタンパク質形成が可能だった”などという非現実的な推論を立てる。しかし、無生物組織が偶然起こす化学反応では、簡単かつ原始的な変化しか生まれない。起こりうる変化の数はあらかじめ決まっており、限定されている。複雑な化学物質の変化には、大きな工場、化学工場、または研究所が関わっていなければならない。我々が普段使う、薬やその他の化学物質は、常にこのように作られている。タンパク質は、人間が作り出す化学物質よりも複雑な構造をしており、全ての部分が正しい配列で並んでいるその驚くべき物質が化学反応で偶然発生する可能性はない。

これまでに説明した全ての不可能性をひとまず置いておき、実用的なタンパク分子が“偶然”自然に発生したとしよう。もしそうだとしても、タンパク質が生き延びるためには、生息環境から分離され、非常に特別な状況で保護されていなければならず、これは進化では説明がつかない。保護されていないタンパク質は、地球上の自然条件にさらされ分離してしまうか、その他の酸、アミノ酸、または化学物質と混ざり、その特性を失い、全く異なる他の物質、または使い物にならない物質となってしまう。

生命の起源に関する進化論の空騒ぎ

“生命がどのように誕生したのか”は、進化論者が抱える非常に困難な問題であり、彼らは通常、この問題には触れたがらない。彼らは、「最初の生命体は、水中で無作為の事象が起こった結果生まれた」と言うだけでこの問題をやり過ごそうとする。彼らは、抜け道のない行き止まりにいる。古生物学的進化論を主張しながら、その仮定を支持する化石を見つけることもできていない。従って、進化論は最初から論破されているのである。

ここで一番重要な点は、進化の過程のたった1つでも不可能だと証明されたら、進化論そのものが完全に間違った論理であると証明するのに十分であるということだ。例えば、タンパク質が偶然形成されることは不可能だと証明したら、進化のその後のステップに関するその他全ての主張も論破される。つまり、人間や猿の骨を比較し、その関連を調べるという行為は全く無意味である。

進化論者は、生体が無生物からどのように発生したのかという問題を長年避けて通ってきたが、結局はその解明に取り組まれならなければならなくなり、20世紀の第2四半期にはこの問題解決のためのさまざまな実験が行われた。

進化論が直面する一番の問題は、最初の生体細胞がどのように地球の原始大気に出現したのか？ということである。進化論者はこれをどのように説明しているのだろうか？

この問題への答えは、実験を通して徹底的に探求された。進化論信者の科学者や研究家は、質問の答えを引き出すための実験を重ねたが、興味深い結果は得られなかった。一般的に一番高い評価を受けている生命の起源の研究は、1953年にアメリカの研究者スタンレー・ミラー(Stanley Miller)が行ったミラーの実験(Miller experiment)である。(この実験は、ミラーの教授だったシカゴ大学のハロルド・ユリー(Harold Urey)の名も取り"ユリー・ミラーの実験"としても知られている)

この実験は、生命の起源の発端となった進化の過程となる"分子進化論"を証明したとされている進化論者たちの唯一の"証拠"である。実際、半世紀が過ぎ、より高度な技術が生まれた現在でも、誰もこの実験以上の成果をあげていない。しかしそれにも関わらず、ミラーの実験は、生命体の初期生成を進化論的に説明する教科書と考えられている。最近の進化論研究者たちは、生命体を形成するという実験が自分たちの主張を支持するどころか論破さえしてしまう事実を知っているため、こうした実験に取り組むことを意図的に避けている。

ミラーの実験

スタンレー・ミラーの目的は、タンパク質の構成要素であるアミノ酸が、何億年も前の生物のいなかった地球上で"偶然"発生したことを証明することだった。

この実験で、ミラーは、原始地球に存在したと彼が推測したアンモニア、メタン、水素、および水蒸気の混合気体(のちにこれは実際に存在した気体ではなかったと証明された)を使用した。これらの気体は、自然条件では反応を起こさないため、反応を起こさせるためにエネルギーを加えた。このエネルギーは原始地球の雷だったと想定し、電流をこれに代用した。

ミラーは、この混合ガスを1週間、100℃で熱し続け、電流を流した。1週間後、ミラーは、ビンの底に化学物質が発生したことを確認し、その20個のアミノ酸のうち3つにタンパク質の基本要素となる構成物を観察した。

この実験は、進化論者を興奮させ、最高の成功だと賞賛された。その上、興奮状態の多くの出版社は、"ミラーが生命を生み出した"と大きく見出しをうってこれを紹介した。しかし、ミラーが作り出したのは、ほんの少しの"無生物"分子にすぎない。

この実験に後押しされ、進化論者はすぐに新しいシナリオを作り出し、アミノ酸出現に続く段階の仮説が急激に誕生した。アミノ酸が偶然に正しい配列で結合し、タンパク質を形成したという仮説が。そして偶然発生したこれらのタンパク質のいくつかが、細胞膜のような構造を形成し、それらが"何らかの形で"基本細胞であるタンパク質を形成し、そしてそれらの細胞が長い年月をかけて多細胞性の生体となったという。しかし、ミラーの実験は見せかけでしかなく、多くの側面から間違いであることが証明されている。

見せかけでしかないミラーの実験

ミラーの実験は、アミノ酸が原始地球に似た条件下で形成されることを証明しようとしたが、実際多くの矛盾が見つかっている。

1. "冷却トラップ"と呼ばれる方法を使用し、ミラーは、形成されたアミノ酸をすぐに隔離した。アミノ酸が形成された環境条件が、すぐにその分子を破壊することもあるため、彼はアミノ酸をすぐに隔離しなければならなかった。

しかし恐らく、原始地球にはこのような意図的隔離方法は存在しなかったであろう。こうした方法がなくては、例えアミノ酸が形成されたとしても、それはすぐに破壊されてしまう。化学者のリチャード・ブリス(Richard Bliss)は、これに関して「実際には、このトラップがなければ、形成されたアミノ酸はエネルギー源によって破壊されていたであろう」[115]と言っている。

そして、案の定、ミラーが冷却トラップ方法を用いる前に行っていた実験では、アミノ酸を形成することはできな

ミラーの実験に反する最新の進化論情報

今日、ミラーの実験は、進化論科学者の間ではなかったものとされている。

1998年2月に発行された進化論擁護科学誌の『Earth』に『Life's Crucible』という記事が掲載された。

地質学者は、原始大気は主に二酸化炭素、窒素などの1953年のミラーの実験で使われた気体より化学反応を起こしにくい気体で覆われていたと考えている。例えミラーの作り出した大気が存在したとしても、アミノ酸などのたった1つが、タンパク質のような複雑な化合物や重合体になるために必要な化学変化をどのように起こしたと言うのだろうか？ミラー自身もこの謎にはお手上げであった。「これは問題だ」と、彼はため息をつき「重合体はどうやって作るのだろう？これは簡単なことではない」と嘆いている。[1]

今日、ミラー自身も彼の実験が生命の起源の説明にはならなかったことを認めている。それでも進化論科学者がこの実験を熱烈に支持した事実は、擁護者の自暴自棄ぶりと進化論の直面する問題を示すだけである。

1998年3月発行の『National Geographic』内の記事「The Emergence of Life on Earth」では、次のようなコメントがされている。

多くの科学者は、原始大気がミラーの実験で使用されたものとは異なり、水素、メタン、アンモニアよりも二坂炭素や窒素で構成されていたと思っている。

これは科学者には痛い事実である。二酸化炭素と窒素を誘発すると、プールの中に色の付いた水滴を数滴落とした程度の取るに足りない有機分子しか得られない。科学者にとって、このような厳しい環境下で生命が出現したと想像するのは難しい。[2]

まとめると、ミラーの実験も、その他のいかなる試みも、地球上での生命出現の謎に答えられない。全ての研究が明らかにしたのは、生命体が偶然形成される可能性はなく、よって神が創造したものであるという事実である。

1- Earth, "Life's Crucible", February 1998, p.34
2- National Geographic, "The Rise of Life on Earth", March 1998, p.68

かった。

2. 実験用にミラーの作り出した原始大気環境は現実的でなかった。1980年代に、科学者は、この実験にはメタンとアンモニアではなく窒素と二酸化炭素を使用するべきであったと認めている。その後長らくの沈黙を得て、ミラー自身も彼が実験に使用した大気環境は現実的なものでなかったと認めている。[116]

ではなぜミラーはこれらの気体を使用することにこだわったのか？答えは簡単である。アンモニアがなければ、アミノ酸を合成することができないからだ。ケビン・マッキーン(Kevin Mc Kean)は、雑誌『Discover』で、この件に関して以下のように述べている。

ミラーとユリーは、地球の古代大気を模造するのにメタンとアンモニアを使用した。彼らによると、地球は、金属、岩、そして氷の均一混合物だった。しかし、最近の研究で、当時の地球はとても熱く、溶けたニッケルと鉄から成っていたことがわかった。つまり、当時の化学的大気は、そのほとんどが窒素(N2)、二酸化炭素(CO2)、そして水蒸気(H2O)で形成されていた。しかしこれらは、メタンやアンモニアと違い有機分子を形成するのには適していない。[117]

アメリカの科学者J・P・フェリス(J.P. Ferris)とC・T・チェン(C.T. Chen)も、ミラーの実験が二酸化炭素、水素、窒素、および水蒸気で作られた大気環境で行われていたら、1つのアミノ酸分子も得られなかったであろうと言っている。[118]

3. ミラーの実験を無効にするもう1つの重要な点は、アミノ酸が形成されたと推定される頃、大気には形成されたアミノ酸を破壊するのに十分な酸素があったことである。ミラーが見落としたこの事実は、約3億5千万年前のものと推定される岩から酸化鉄やウランの痕跡が発見されたことで明らかになった。[119]

その他にも、当時の大気中の酸素量が、進化論者が最初に主張していた量よりも多いことを証明する事実が見つかっている。また、研究では、当時の地球への紫外線量は、進化論者の推定よりも一万倍も多かったことがわかっている。この強い放射線は、大気内の水蒸気と二酸化炭素を分解し、確実に酸素を生成していたであろう。

この条件は、酸素の存在を完全に無視していたミラーの実験を完全に否定する。実験で酸素が使用されていたら、メタンガスが二酸化炭素と水に、アンモニアが窒素と水に分解していた。一方で、酸素が存在しない環境にはオゾン層も存在せず、従って、オゾン層の保護を受けずに強い紫外線にさらされたアミノ酸は即座に破壊されていた。原始地球に酸素が存在していようともしていなくとも、どちらにしてもアミノ酸には致命的な環境だったと言える。

4. ミラーの実験の最後では、生命体の構造と機能に弊害をもたらす特性を持ったたくさんの有機酸が形成された。アミノ酸が隔離されず、これらの化学物質と同じ環境にそのまま放置されていたら、これらの化学反応により破壊されたり、異なる化合物に変質していたことは間違いない。

更に、実験の終盤には、大量の右利きのアミノ酸が形成された。[120]右利きのアミノ酸が生命体の構成要素に成り得ないことは、進化論自身が認めている事実である。実際、この媒体は、形成された分子を破壊または酸化してしまう酸性混合物であり結論として、アミノ酸の形成されたミラーの実験における条件は生物には適していなかった。

これら全ての事実は、ミラーの実験は原始地球に似た条件下で偶然生命体が形成された証明にはならないというたった1つの真実を強く示唆する。ミラーの実験は、アミノ酸を合成するための慎重に管理された室内実験でしかない。実験で使用された気体の種類と量はアミノ酸が発生しやすいように理想的に決められたものである。使われたエネルギー源は化学反応を起こさせるために綿密に手配された。実験装置は隔離されており、アミノ酸の形成の妨げになるような有害・破壊要素は遮断されていた。原始地球にはなかったであろう分子、鉱物、または混合物が実験に使用され、これらが化学反応の結果を変えている。酸化によりアミノ酸の形成を妨げるとされる酸素は、たくさんある有害な分子のほんの1つである。そしてこのような理想的な室内実験状況下ですら、"冷却トラップ"方法が用いられなければ形成されたアミノ酸が生き延び、破壊を免れることはできなかった。

実際、この実験により、ミラーは、"無意識の偶然により生命が誕生した"という進化論の主張を叩きのめしてしまったのである。この実験が何か証明したとするならば、それは、アミノ酸は意識的に条件を調えられ管理された実験室環境でのみ形成されるということである。つまり、生命体を生み出す力は、無意識ではなく意識的なものであったと言える。

進化論者がこの証拠を受け入れない理由は、進化論信仰の盲従という完全に非化学的なものである。大変興味深いことに、自分の生徒であったスタンレー・ミラーとともにミラーの実験を行ったヘラルド・ユリーは、実験に関して以下のように告白している。

生命の起源を研究する者はみな、研究をすればするほど、進化によってそれが起こったことが難しいと感じる。我々はある意味宗教のように生命は地球上の無機物から進化したと信じている。しかし、そのあまりの複雑さゆえ、どのように進化したのかを想像することすら難しい。[121]

原始世界の大気とタンパク質

こうした全ての矛盾にも関わらず、進化論関係者はその後もアミノ酸の起源に関する質問をごまかすためにミラーの実験を用いる。全く無効な実験が種の起源の問題を解決したように見せることで、進化論の欠陥を取り繕っているのである。

しかし、生命の起源の第二段階を説明するには、特定の順序で結合した何百種類ものアミノ酸によって成る生命体の構成要素であるタンパク質の起源を証明するというより高い壁が存在する。

自然条件のもとで、タンパク質が偶然形成されたと主張することは、アミノ酸が偶然形成されたという主張よりも非現実的かつ不合理である。これまで、アミノ酸が正しい配列で結合し偶然タンパク質を形成することは、確率計算

進化論者の幻想の1つは、上記写真に見られる原始地球と呼ばれる環境で、生命体が自然発生したと信じていることである。彼らはこれをミラーの実験などで証明しようとした。しかし、1970年代に原始地球の環境は生命体には適していなかったことが解明し、進化論者は再び科学的事実の壁に打ち負かされた。

から考えた数学的にも不可能だとわかった。ここからは、原始地球条件でタンパク質が生成されることが化学的にも不可能であることを論証しよう。

水中では不可能なタンパク質の合成

前にも述べたように、アミノ酸がタンパク質を形成するためには"ペプチド結合"と呼ばれる特別な結合をしなければならない。このペプチド結合においては水分子が発出される。

この事実は、原始生命は水中で誕生したという進化論者の主張を論破する。なぜなら、化学の「ル・シャトリエの原理(Le Châtelier principle)」によると、水を発出するいかなる化学反応(縮合反応)も含水環境では起こり得ない。こうした反応が含水環境で起こる可能性は、全ての化学反応の中で"一番発生の可能性がない"とされている。

海中での生命やアミノ酸の誕生を主張する進化論は、この化学的事実がある限り、根本的に間違っている。一方で、アミノ酸は陸上では紫外線によって破壊されてしまい、アミノ酸が守られた場所は海のみであったことから、進化論者が生命が陸上で誕生したと主張を変更することも不合理である。つまり、ル・シャトリエの原理は、生命の起源が海であったという主張が誤りであったことを証明する。これもまた、進化論が直面するジレンマの1つである。

もう1つの絶望的な努力：フォックスの実験

このジレンマに見舞われ、進化論者は、進化論を決定的に論破してしまう"水の問題"を解決するための非現実的なシナリオをまた考案し始めた。シドニー・フォックス(Sydney Fox)は、最も良く知られているこの問題の研究者の1人である。フォックスは、この問題を解決するため、以下の論理を発展させた。彼によれば、最初のアミノ酸は原始海洋で形成された後すぐに、火山の近くの断崖に運ばれた。このアミノ酸を含む混合物を得た断崖周辺の水は、沸点近くまで温度が上がり蒸発した。アミノ酸はこの方法で"乾燥"し、タンパク質を形成することが可能になった。

しかし、研究ではアミノ酸は高温にさらされるとすぐに破壊されてしまうことが確認されており、アミノ酸がそのような高温に耐えられないという事実から、この"理解し難い"方法は業界では多くの人に受け入れられていない。

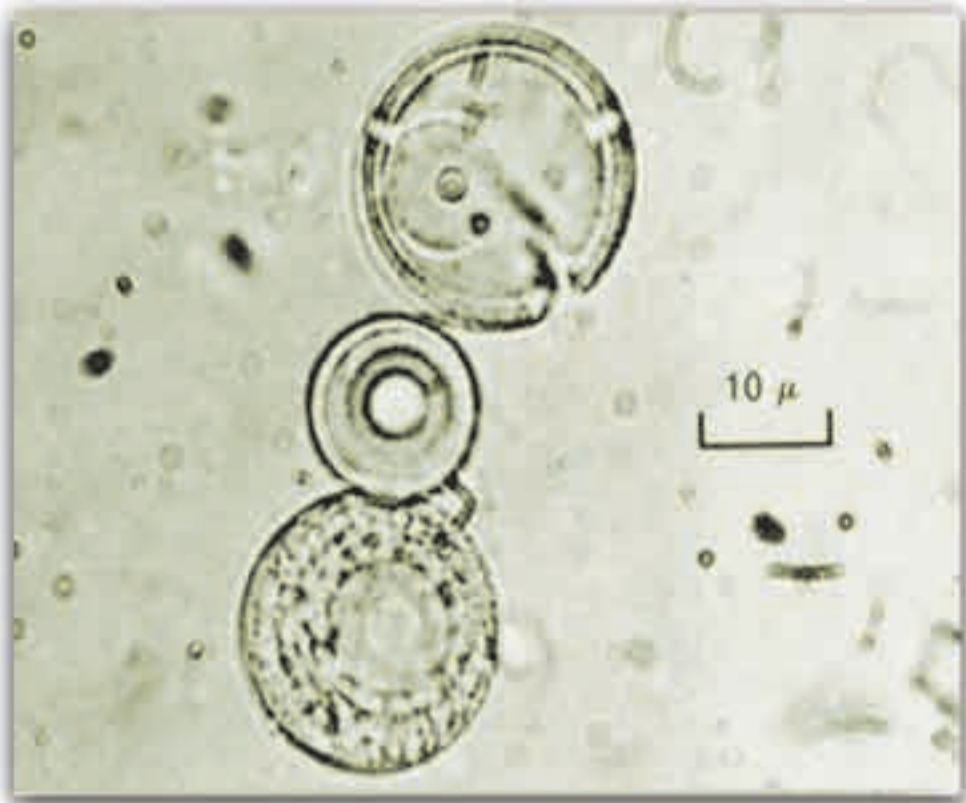
しかし、フォックスはあきらめなかった。彼は、乾燥した環境で熱を加えるという"特別な条件下"で精製したアミノ酸の結合を試みた。アミノ酸は結合はしたものの、タンパク質にはならなかった。実験では、単に不規則に環状になったタンパク質のものとは似ても似つかない任意結合のアミノ酸が得られただけである。更に、フォックスがアミノ酸を一定の温度で熱し続けたら、これらの環状も分解されていたのは明らかである。[122]

この実験をより無意味なものにする事実に、フォックスがミラーの実験で得られたアミノ酸ではなく、通常の生命体より取り出したアミノ酸を使用したことが挙げられる。ミラーの実験の続きであるはずのこの実験は、ミラーの実験によって得られたアミノ酸を使用すべきであったが、フォックスのみならず、いかなる研究者も、ミラーの実験によって得られたアミノ酸以外のアミノ酸を使用して実験を行っている。[123]

フォックスが実験で作り出したアミノ酸鎖(彼はこれを"プロテイノイド"と言った)が自然環境下で形成されることは不可能だったことから、この実験は進化論者たちにすら受け入れられなかった。更に、生命の基本単位であるタンパク質が形成されることはなく、タンパク質の起源という問題が未解決のまま残った。1970年代より発行されている有名な科学雑誌『Chemical Engineering News』では、フォックスの実験に関して以下のように述べられている。

> **シドニー・フォックスとその他の研究者は、実際には当時の地球の原始環境とは異なった状況下で、特別な加熱方法を使って"プロテイノイド"という形にアミノ酸を結合することに成功した。また、このプロテノイドは、現在の生命体のタンパク質とは全く異なるものであった。プロテノイドは実用性のない不規則な化学物質だ。しかも、地球初期に、このような分子が形成されたとしても、すぐに破壊されたであろうことが説明されている。**[124]

I全く、フォックスが獲得したプロテイノイドは、構造も機能も実際のタンパク質とはかけ離れていた。タンパク質とこれらのプロテイノイドの違いは、ハイテク機械と鉄の塊ほどの違いがあった。

更に、紫外線にもろにさらされるという有害・破壊的な物理的および化学的影響や、その他の自然条件の不安定

フォックスは、実験で"プロテイノイド"と呼ばれる物質を作り出した。プロテイノイドは、ランダムなアミノ酸の集合体であり、生命体のタンパク質とは違う何の機能性も持たない化学物質である。
プロテイノイドの顕微鏡写真を以下に示そう。

さは、プロテイノイドの分解を起こしたに違いなく、原始大気内でこれらの不規則なアミノ酸鎖が生き延びる可能性はなかった。ル・シャトリエの原理により、アミノ酸が、紫外線の届かない水中で結合することも不可能であり、こうした全ての観点から、プロテイノイドが生命の起源であるという考えは結局科学者の支持を失った。

無生物は生命を生み出せない

ミラーの実験やフォックスの実験などの数々の進化論者の実験は、無生物は有機化せず、よって複雑な生命体を生成できないことを証明した。これは完全に非科学的な信念であり、全ての実験観察結果は物質にそのような能力がないことを証明している。有名なイギリスの天文学者であり数学者でもあるフレッド・ホイル(Sir Fred Hoyle)は、物質は意図的介入がない限り生命体を出現させることはできないと言っている。
もし、有機的組織を生命体に変えることのできる物質の基本原理があるのなら、それは研究で簡単に検証できるであろう。例えば、プールを原始環境とみなし、非生物学的化学物質を投入し、好きなだけ気体や光に当てて良いこととし、これを1年間続け、生命体が生産するタンパク質である2,000個の酵素のうち、いくつが作られたか見てみるとする。このような実験への時間や費用が勿体ないので私が答えを教えよう。アミノ酸がタール状になった物質やシンプルな有機化学物質以外、プールの中には何もない。[1]
進化論生物学者のアンドリュー・スコット(Andrew Scott)もこの事実を認めている。
ある物質を温めながらかきまぜて待つ。これが現代の創始である。重力の"原理"、電磁気力、そして強弱の核力が残りをやってくれるだろう。しかし、このおとぎ話の一体どれほどが確立されているのだろうか？そしてどれだけの希望が残っているのだろうか？実際、化学前駆から最初に発見された細胞まで、ほぼ全てのステップのメカニズムは、進化論と正反対である。[2]

1- Fred Hoyle, The Intelligent Universe, New York, Holt, Rinehard & Winston, 1983, p. 256
2- Andrew Scott, "Update on Genesis", New Scientist, vol. 106, May 2nd, 1985, p. 30

奇跡の分子：DNA

これまでの我々の調査では、分子レベルで進化論がかなりの苦境に立たされていることを示した。進化論者は、アミノ酸の形成に関して、1点の光も当てることができていない。一方で、タンパク質の形成も謎のままである。

しかし、問題はアミノ酸やタンパク質のみに留まらない。アミノ酸やタンパク質は問題のほんの一部にすぎなく、これら以外にも、究極に複雑な構造を持つ細胞が進化論者の壁となっている。そしてこの細胞は、アミノ酸が集合して成るただのタンパク質とは異なり、人類が遭遇した最も複雑な細胞である。

進化論が、細胞構造の基本である分子の存在を理路整然と説明することすらできない中で、遺伝子科学の発展と核酸(DNAとRNA)の発見は、進化論に新たな問題をもたらした。1953年、ジェームス・ワトソン(James Watson)とフランシス・クリック(Francis Crick)がDNAの驚くべきほど複雑な構造を解明し生物学に新時代をもたらした。

人間の体内に100兆個ある細胞核にあるDNAとして知られている分子は、人体構造の完全な青写真を含んでいる。性格、外見、臓器構造まで、全ての情報がDNAに保存されている。

人間に100兆個もある細胞の1つ1つに見られるDNAとして知られる分子は、人体構造の完全な青写真を含んでいる。その人の性格、外見、そして臓器までもの情報が、4つの特別な基盤列から成る分子であるDNAに記録されている。この基盤は、それぞれの名前の頭文字を取ったA、T、G、Cとして知られている。人間の構造の違いは、これら4つの基盤の並び方の違いである。DNAは、4つの文字からなるデータバンクだと言える。

DNAに含まれる文字の順次的配列は、その人のほんのわずかな特徴の詳細までをも記録している。身長、目、髪、肌の色の他にも、1つの細胞内のDNAには206個の骨、600個の筋肉、100億個の細胞(神経細胞)、脳と神経細胞を繋ぐ1,000兆もの接続パターン、97,000キロメータの血管、および人体にある100兆個の細胞の情報が記録されている。DNAに含まれるデータを書き出した場合、1冊500ページの本を900冊集めた図書館の大きさになる。しかし、この莫大な情報が、1/100ミリメータよりもはるかに小さなDNA分子の細胞核にコーディングされているのである。

なぜDNAは偶然発生しえないのか？

ここで、注目に値する重要な話をしよう。ヌクレオチドの配列に間違いがあった場合、その遺伝子は完全に役立たずとなる。人体には、約3万個の遺伝子があると考えられており、遺伝子を形成する何百万ものヌクレオチドが、偶然、正しい配列で形成されることは不可能だということは明らかである。進化論者で生物学者でもあるフランク・ソルズベリー(Frank Salisbury)は、この不可能性に関して以下のように述べている。

中間サイズのタンパク質は、約300個のアミノ酸から成る。これを記憶しているDNA遺伝子の鎖には、約1,000個のヌクレオチドが含まれている。1つのDNA鎖には、4種類のヌクレオチドが存在し、1,000の鎖の輪で成り立っているDNA鎖の場合、41,000パターンの配列がある。簡単な代数(対数)で置き換えると、$4^{1000}=10^{600}$となる。当然のことだが、10を600回かけると1の後に０が600個続く数字になる!これは、人間では想像もつかない数値である。[125]

DNA分子のスティックモデルを前にしたワトソン(Watson)とクリック(Crick)

4^{1000}という数値は、10^{600}に等しい。これは、1の後に0が600個続くという意味である。1の後に0が12個ついたものが兆を表すのだから、0が600個というのはとてつもない数字だ。RNAとDNAが、ヌクレオチドの偶然の積み重なりでは形成されないという事実を、フランス人の科学者ポール・オージェ(Paul Auger)は以下のように述べている。

化学的事象によってヌクレオチドなどの複雑な分子が形成される確率は、2段階に分けなければならない。まずヌクレオチドを1つ1つ形成する確率、そしてそれらを特別な配列に組み合わせる確率。どちらも明らかに不可能である。[126]

長年の間、フランシス・クリックは、分子進化論を信じてきた。しかしその彼ですら、最終的には、進化の過程においてこのような複雑な分子が自然に偶然発生するのは不可能だと認めざるを得なかった。

現在の科学的知識を身につけた正直者は、ある意味、生命の起源はほとんど奇跡のようなものだと認めざるを得ないだろう。[127]

トルコ人の進化論者アリ・デミルソイ(Ali Demirsoy)教授は、この問題に関して、次の発言をせざるを得なかった。

実際、タンパク質と核酸(DNAとRNA)の形成の確率は、我々には想像もできないような確率である。更に、特定のタンパク鎖の出現は、天文学的だとしか言いようがない確率だ。[128]

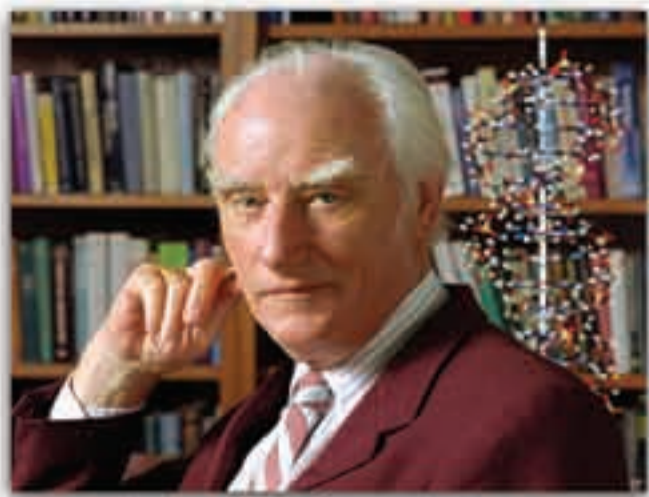
ここで、とても興味深い矛盾が発生する。DNAが特定のタンパク質(酵素)の助けを得てのみ複製できる中で、これらのタンパク質の統合法は、DNAにコードされた情報からのみ得ることができる。これらはお互いに依存しているため、両方が同時に複製されるか、どちらかが先に“創造されて”いなければならなかった。アメリカ人の微生物学者ホーマー・ジェイコブスン(Homer Jacobson)は、以下のように述べている。

複製の計画、その環境下からのエネルギーと各部の抽出、成長順序、および成長促進のために必要なメカニズムを行える全てが、“生命誕生”の瞬間に同時に存在していなければならなかった。これらの事象が偶然同時に存在することはあり得ず、よって神が介入したと言われてきたのである。[129]

上記引用は、DNAがワトソンとクリックに発見された2年後に書かれたものである。しかし、その後の科学の発展にも関わらず、進化論者は未だにこの問題を解決できていない。2人のドイツ人科学者ユンカー(Junker)とシェーラー(Scherer)は、化学進化に必要な分子の統合はそれなりの条件を必要とし、理論的に言えばこれらが形成される方法はないことを次のように言っている。

化学進化に必要な全ての分子を得ることのできた実験は今日まで1つもない。従って、さまざまな分子をそれぞれに環境の整った異なる場所で生産し、それらを加水分解や光分解などの分子に有害な要素から守り、化学反応を起こす環境に移すことが絶対不可欠である。[130]

要するに、進化論は、分子レベルで起こったとされているいかなる進化段階も証明できない。科学の進歩は、進化論が抱える問題への答えを証明するどころか、その問題をより複雑で解決できないものにした。

信じられないことに、進化論者の多くは、完全に非科学的なこのおとぎ話をまるで事実のように信じている。天地創造を認めるわけにはいかない彼らには、不可能を信じる道しか残されていない。オーストラリアの有名な生物学者マイケル・デントン(Michael Denton)は、自身の著書『Evolution: A Theory in Crisis』でこのテーマに関して議論している。

フランシス・クリック(Francis Crick)教授:「生命の起源はほとんど奇跡のようである」

懐疑論者の言う、1,000冊の本がある小さな図書館の文字の配列に等しい、何百万もの細胞を管理する10億近い情報によって形成されている生物の遺伝的プログラムが偶然発生したという主張は、元来の目的を遥かに逸脱した不可能な過程の連続でのみ成り立っている。しかし、ダーウィニズムの信奉者にとっては、その概念が一番大切であり、彼らは何の疑問も抱かない![131]

『RNAワールド(The RNA World)』などというものを試した進化論者もいる。

1970年代に地球の原始大気を構成していた気体が解明されたことが当時の環境下でのアミノ酸合成を不可能なものとし、これは分子進化論に深刻な打撃を与えた。その上、進化論者は、スタンレー・ミラー、シドニー・フォックス、シリル・ポナムペルマ(Cyril Ponnamperuma)などが行った"原始大気の実験"が失敗に終わるという事実に直面した。このため彼らは1980年代に他の試みを開始し、その結果"RNAワールド"という仮説が進化した。これは、タンパク質ではなく、タンパク質の情報を持ったRNA分子が一番最初に形成されたとするシナリオである。

トーマス・チェック(Thomas Cech)の"リボザイム"に関する発見をもとに、1986年にハーバード大学の化学者ウォルター・ギルバート(Walter Gilbert)によって先進されたこのシナリオによると、何十億年も前に、自身を複製することができるRNA分子が偶然形成された。その後、このRNA分子が外部から何らかの影響を受け、タンパク質の生産を始めた。そして二番目の分子にその情報を保存する必要があり、そのために何らかの形でDNA分子が姿を現した。

全ての進化の段階が不可能の連鎖でしかないこのとても信じ難い想定は、生命の起源を証明するのにはほど遠く、ただ問題を拡大し、回答できない謎を増やしただけである。

1. RNAを形成するヌクレオチドのたった1つも、偶然形成されたと受け入れられない中で、ヌクレオチドが集まり、特定の列を成してRNAを形成するということは、一体どのように可能なのか?進化論者ジョン・ホーガン(John Horgan)は、RNAが偶然形成されるのは不可能だという事実を以下のように認めている。

研究者がRNAワールド仮説を詳しく研究していくうちに、さらなる問題が現れた。RNAは最初にどのように発生したのか?RNAとその構成要素は、最良の環境が整った実験室でも形成するのが難しく、実際の原始大気では形成の可能性は更に低くなる。[132]

2. 仮にRNAが偶然形成されたとしても、ヌクレオチド鎖だけから成るこのRNAは、どのように自己複製することを"決定"し、その自己複製過程は一体どのような手段をもって行われたのか?自己複製を行うためのヌクレオチドはどこにあったのか?進化論者で微生物学者でもあるジェラルド・ジョイス(Gerald Joyce)とレスリー・オーゲル(Leslie Orgel)は、彼らの著書『RNAワールド(In the RNA World)』で、この状況の絶望的な見解を以下のように述べている。

ポリヌクレオチドが入ったスープの中から自己複製するRNA分子が新たに生まれたというこの論議は、架空のものでしかない。前生物化学の現時点での知識を踏まえると、これは非現実的である概念でしかなく、このように楽観主義的にRNAの触媒能力を信じることが信じ難い。[133]

3. 仮に、全種類の多数のアミノ酸をRNAが使用できる状態にあった原始世界に、自己複製を行うRNAが存在し不可能が全て実際に起こったとしたところで、それらはタンパク質の形成へは結びつかない。RNAには、タンパク質の構成情報のみが含まれている。反対に、アミノ酸はタンパク質の母材である。つまり、タンパク質を生成する手段が存在しない。RNAの存在がタンパク質生成に十分だと言うことは、一台の車が堆積した山ほどある部品の山から設計図をもとに勝手に組み立てられるというほど馬鹿げている。工場があり、そこで作業する人が設計図に書かれた指示に従って組み立てない限り車は完成しない。同様に、RNAに含まれる設計図は、RNAにある指示に従う細胞成分の協力なしではタンパク質を形成できない。

タンパク質は、多くの酵素の助けを経て、リボゾーム工場で作られる細胞内の非常に複雑な工程である。リボゾームは、タンパク質でできた複雑な細胞小器官であり、これはつまり、リボゾームも生命誕生の瞬間に偶然存在していなければいけなかったという不合理な仮定を生み出す。ノーベル賞受賞者であり、狂信的な進化論擁護者、無心論者の1人であったジャッカス・モノー(Jacques Monod)ですら、タンパク質合成は、核酸に保存された情報にただ依存したとは考えられないと言っている。

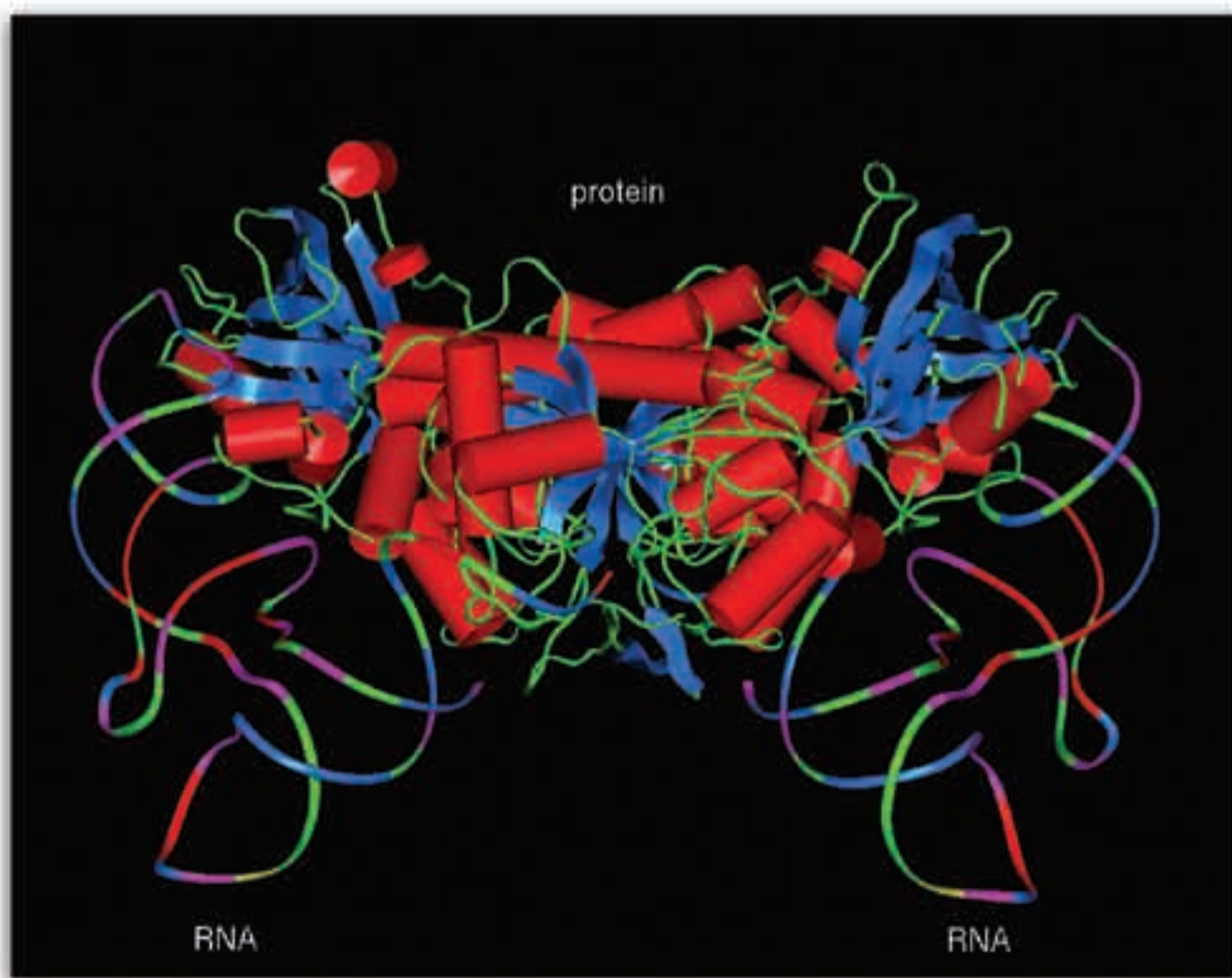
コードは解読されていなければ意味が無い。機械解読された現代の細胞には、DNAにコードされた少なくとも50個の高分子成分が含まれている。omne vivum ex ovo(生物は卵より生ず)というように、このコードは、コード自身が自らを解読し、生産しなければならない。最初のコード発生・解読がいつどのように行われたのかは非常に想像し難い。[134]

RNA鎖は、原始世界にてどのようにこれを決定し、また、50個の特定の粒子はどのような方法でタンパク質を形成したのだろうか？進化論者は答えられない。

サンディエゴのカリフォルニア大学にてスタンレー・ミラーとフランシス・クリックと共に実験を行ったレスリー・オーゲル教授は、"RNAワールドから生命が誕生した"可能性に"想定"という言葉を使っている。オーゲルは、1994年10月発行の雑誌『American Scientist』内の自身の記事『生命の起源(The Origin of Life)』で、このRNAがどのような特長を持っていなければならず、それがいかに不可能であったかを説明している。

この想定は、もし前生物的RNAが今日は存在しない2つの特性を持っていれば可能であった。タンパク質の助けなしに自己複製できたことと、タンパク質合成の全段階を触媒できたということ。[135]

ここまでの話でわかるように、RNAなどの分子の複雑かつ非常に重要な進化は、進化論者の観点で、彼らの強力な想像力をもってしてのみ可能であり、現実の科学的事実は、生命の形成に挑戦する新しいモデルであるRNAワールド仮説が信じ難い寓話であることを明白にしている。

テキサス大学の生化学者ゴードン・C・ミルズ(Gordon C. Mills)と、サンフランシスコ州立大学の分子生物学者ディーン・ケニヨン(Dean Kenyon)は、『The RNA World: A Critique』という記事の中で次のように述べている。「RNAは卓越した分子であるが、RNAワールド仮説はこれとは別問題である。我々は、RNAワールド仮定が確かである、または見込みのあるものだという何の根拠も見出せなかった」[136]

進化論者の告白

タンパク質や核酸(RNAとDNA)のような複雑な分子が、他方なしに偶然形成されることは、確率計算的にありえない。よって進化論者は、生命体が出現するためにはこれらの複雑な分子が同時に共存したと証明しなければならない。進化論は、この条件によって難局に立たされている。これにより著名な進化論者も懺悔しなければならなかった。例えば、スタンレー・ミラーやフランシス・クリックの仲間であるUniversity of San Diego Californiaの進化論者レスリー・オーゲル(Leslie Orgel)博士は次のように言っている。

複雑構成であるタンパク質と核酸が同時に同じ場所で発生したということがとても大事である。しかし、このどちらもが発生するのに他方を必要とする。従って、生命体は化学物質からは生まれなかったと結論付けなければならないだろう。[1]

レスリー・オーゲル博士:はっきり言うが、生命体は化学物質からは生まれえない。

他の化学者もこの事実を認めている。

DNAは、触媒となるタンパク質や酵素がないと、自己複製も含めて何も行うことができない。タンパク質はDNAなしでは形成されず、DNAはタンパク質なしでは形成されない。[2]

遺伝子コードは、その解読(リボゾームとRNA分子)メカニズムも含め、どのように発生したのだろうか？現時点では我々に答えはなく、疑問と畏敬で満たされている。[3]

『New York Times』の科学記者ニコラス・ウェイド(Nicholas Wade)は2000年の記事で次のようにコメントしている。

地球上の生命の起源に関しては、全てが謎であり、詳細がわかればわかるほど、謎は深まるばかりだ。[4]

1- Leslie E. Orgel, "The Origin of Life on Earth", Scientific American, vol. 271, October 1994, p. 78
2- John Horgan, "In the Beginning", Scientific American, vol. 264, February 1991, p. 119
3- Douglas R. Hofstadter, Gödel, Escher, Bach: An Eternal Golden Braid, New York, Vintage Books, 1980, p. 548
4- Nicholas Wade, "Life's Origins Get Murkier and Messier", The New York Times, June 13, 2000, pp. D1-D2

科学著述者のブリッグ・クライス(Brig　Klyce)は、2001年の記事で、進化論科学者は非常にこの問題に固執しているが、これまでに得られた結果はこうした努力が無駄なものだと示している、と述べた。

RNAワールドの研究は中型業界である。この研究は、地球上にある無機質から偶然生細胞が発生することがどれだけ難しいかを証明した。この証明は科学にとって貴重な貢献である。更なる研究も価値のあるものになるであろう。しかし、無生化学物質から新たに分かった難解に直面しても、生命が自然に出現すると主張し続けることは不可解である。これは、中世の錬金術師が、むきになって鉛を金に変えようと試みたのと変わらない。[137]

生命は、単なる分子の山を越えた概念である。

これまで、生命体の形成が偶然起こることがどれほど不可能かを説明してきた。ここでまた、この不可能が仮に事実だったと仮定し、タンパク質形成には恐ろしく不適切で何の制御もなかった原始地球のような環境にてタンパク質分子が形成されたとしよう。1つのタンパク質が形成されるだけでは不十分である。このタンパク質は、何千年もしくは何百万年もの間、この何の制御もない環境下で、他の分子が同じ環境にて偶然形成されるのを、自身は何のダメージも受けずにただひたすら待たなければならない。何百万もの正しいタンパク質が全て“偶然”により形成されるのをただひたすら待つ。初期に形成されたタンパク質は、紫外線や過酷な機械的影響に破壊されず、自身のすぐ右側に仲間が形成されるのをより長い間待っていなければならない。そして、十分な数のタンパク質が周りに誕生した後、それらは正しく結合し細胞小器官となる。この時、タンパク質鎖の邪魔をするかもしれないいかなる異物、有害分子も混ざってはならない。そして細胞小器官が互いに調和し協力して計画通りの順序で結合した後、それは必要な酵素を備え、タンパク質にとって理想的環境である特別な液体で中が満たされた細胞膜で覆われなければならない。では、こうした“極めて可能性の低い”事象が全て偶然起こったとしたところで、この分子の山は生命体になるのだろうか？

答えはノーである。なぜなら、研究で、生命体に必要な要素が単に結合しただけでは生命は誕生しないということが解明されたからである。生命体を成すために必要な全てのタンパク質を集め、試験管に入れても、生細胞は発生しない。生細胞を生み出すために行われた全ての実験は失敗に終わっている。今までに行われた全ての観察、実験は、生命体は生命体からのみ発生することを示唆している。無生物から生命体が進化したという主張、言わゆる“自然発生説”は、進化論者の夢の中にのみ存在する物語でしかなく、全ての実験や観察の結果に反している。

この点において、地球上の最初の生命体は、他の生命体から生まれたと言えよう。これが、神の形容辞“Hayy(生命の創造主)”のはじまりである。生命体は、神の意思により生まれ、続き、終わる。進化論は、生命体がどのように誕生したのか説明できないだけでなく、生命体に必要な要素がどのように形成され、合成されたのかすら説明ができていない。

チャンドラ・ウィックラマシンゲ(Chandra Wickramasinghe)は、生命体は偶然の一致の結果生まれたと教えられてきた科学者として彼が直面した現実に関して、以下のように述べている。

> **まず最初に、科学は、いかなる宗教的創造とも意見が一致しないことを教え込まれ、洗脳された。今、私は、神への改宗を理論的に打ち負かす方法を見つけ出せない。昔は我々ももっと広い心を持っていたのではないか。そして今、我々は、生命の起源に関して最も道理にかなっているのは神の創造だと実感している。**[138]

進化論を倒す熱力学

物理学の基本法則として受け入れられている熱力学第二法則は、通常の環境下にそれのみで放置されたいかなるシステムも時間経過に比例して収縮、分散、または崩壊する。有機か無機かに関わらず、全てが消耗、腐敗、分解し、崩壊する。熱力学第二法則によれば、これは全ての物質に当てはまる避けることができない法則である。

この法則は、誰でも目の当たりにしたことがある。例えば自動車を砂漠に放置したら、何年か後に自動車が綺麗になって戻ってくるとは誰も思わないだろう。それどころか、タイヤはパンクし、窓は割れ、車体は錆び、エンジンはもちろん動かない。生命体でもこの不可避のプロセスが行われた。

熱力学第二法則は、自然のプロセスを物理的方式と計算で表したものである。

この有名な物理学の法則は"エントロピーの法則"としても知られている。物理学では、エントロピーはシステムの不規則性を測る。システムのエントロピーは、秩序・組織・計画が整った環境では、無秩序・拡散・無計画の環境のものより増大する。システムが無秩序の環境にあればあるほどエントロピーは高い。エントロピーの法則は、宇宙全体が無秩序・無計画・無組織の環境に向かうことは避けられないとしている。

熱力学第二法則またはエントロピーの法則の真実は、実験的および論理的に確立されている。第一線に身を置く科学者はみな、エントロピーの法則が予測し得る未来の基本パラダイムだと認めている。偉大な科学者アルバート・アインシュタイン(Albert Einstein)は、この法則を"全ての科学の法則の筆頭"だと述べた。アーサー・エディントン(Sir Arthur Eddington)も"全宇宙で一番の形而上学法則"だと言っている。[1]

進化論は、物理法則の基本を無視している。進化論が提唱するメカニズムは、第二法則に完全に反している。進化論では、無秩序で分散した無生原子と無生分子が長い間に正しい順序で自然に集まり、タンパク質、DNA、RNAなどの非常に複雑な分子を形成し、さらに複雑な何百万という生命種に段々と進化していった。進化論によると、実際には計画・順序・秩序・組織を必要とするこの想定された過程が自然の環境下で勝手に起こったという。エントロピーの法則は、この自然過程と呼ばれているものは、物理学の法則に反していることを明らかにしている。

進化論科学者もこの事実に気付いており、J・H・ラッシュ(J.H. Rush)は次のように述べている。

> 進化の複雑な過程にて、生命体は、熱力学第二法則で定められた傾向に全く反する行動をと

った。[2]

進化論者のロジャー・ルーウィン(Roger Lewin)は雑誌『Science』の記事で、熱力学が進化論を不可能にすることを次のように述べている。

> 生物学者が直面した問題は、熱力学第二法則が進化論と矛盾していることである。いかなるシステムも、時とともに腐敗するものである。[3]

進化論擁護者ジョージ・ストラブロポウロス(George Stravropoulos)は、生命体の自然形成の熱力学的不可能さと、自然の法則下では複雑な生命体の発生を説明できないことを、雑誌『American Scientist』で次のように述べている。

> 通常の環境下では、複雑な有機分子は自然に形成されないどころか、第二法則が言うように崩壊する傾向にある。分子は複雑であればあるほど不安定であり、遅かれ早かれ崩壊する。光合成など全ての生命現象や生命体そのものは、熱力学やその他の科学では説明がつかない。[4]

熱力学第二法則は、科学的にも理論的にも進化論のシナリオが打ち破ることが出来ない壁である。この壁を越えられる科学的説明が出来ないため、進化論者は想像の世界にのみ生きている。例えば、著名な進化論者ジェレミー・リフキン(Jeremy Rifkin)は、進化論が物理の法則を乗り越える“魔法の力”を持っていると信じている。

> エントロピーの法則は、進化は地球上の生命体の全てのエネルギーを消散すると言っている。我々の進化論は、進化は地球全体の価値や順序を魔法のように作ったと、エントロピーの法則とは全く反対のことを推定している。[5]

こうした発言は、進化論が科学的根拠のないただの信仰だということを明らかにしている。

“オープンシステム”の謎

進化論の提案者は、熱力学第二法則が“クローズドシステム”にのみ当てはまり“オープンシステム”はこの法則に支配されないと主張する。

“オープンシステム”とは、エネルギーや物質がシステム内に出入りする熱力学システムのことである。進化論者は、地球は太陽エネルギーの流れがあるオープンシステムであり、エントロピーの法則は地球そのものには当てはまらず、従って複雑な生命体は無秩序・単純・無生構造から発生しえたと言う。

しかし、これはこじつけでしかない。システムにエネルギーの流れがあるからと言って、システムが秩序的であるとは限らない。エネルギーを機能的なものにするためには、特別なメカニズムが必要である。例えば、自動車がガソリンをエネルギーとして使うためには、エンジン、変速装置、その他の管理メカニズムが必要である。エネルギー変換システムがなければ、ガソリンを入れても自動車は動かない。

これは生命体にも言えることである。確かに生命体は太陽からエネルギーを得る。しかし、太陽エネルギーは複雑なエネルギー交換システム(植物の光合成や人間や動物の消化器系など)があってはじめて化学エネルギーになる。エネルギー変換システムなしでは、いかなる生物も生存できない。エネルギー交換システムがなければ、太陽はただの有害エネルギーである。

エネルギー変換システムのない熱力学的システムは、オープンシステムであれクローズシステムであれ進化に有利にはならない。原始地球の環境下で、このように複雑で意識的な機能が存在したとは誰も思わない。進化論者が直面している問題は、現代の技術をもってしても再現不可能な植物の光合成などの複雑なエネルギー

変換システムが、どうやって自己発生したのかということである。

地球への太陽エネルギーの流入は、それだけでは何も生み出さない。更に、どれだけ温度が上がっても、アミノ酸は正しい配列で結合しない。エネルギーだけではアミノ酸はタンパク質などの複雑な物質を形成することはできず、タンパク質も細胞小器官などを形成できない。全てのステップにおいて、神の意図的介入が行われたのが真実である。

“物質の自己組織化”の神話

熱力学第二法則が進化を不可能にする中で、進化論者は不可能を可能にするための試行錯誤を繰り返している。もちろんこうした試みも全て、進化論が不可能であると証明してしまうのだが。

熱力学と進化論の両立にはまってしまった一人に、ベルギーの科学者イライヤ・プリゴギン(Ilya Prigogine)がいる。カオス理論から着手したプリゴギンは、カオス(無秩序)から秩序を生み出す仮説をいくつも提案した。彼は、オープンシステムによっては、外部エネルギーの流入によってエントロピーで減少を描くことができ、それが“物質が自己発生可能”だという証拠だと言った。その後、進化論者と唯物論者の間で“物質の自己組織化”が非常に有名になった。彼らは、生命体の複雑性に唯物論的起源を発見し、唯物論が生命の起源の解決案だと喜んだ。

しかし、注意深く考えれば、この提案もただの願望でしかないことは明らかである。それどころか、これには非常に素朴な偽装が含まれている。2つの概念“秩序”と“組織化”が混同されてしまっている点である。[6]

これを明らかにしよう。海辺の平らな砂浜を想像して欲しい。強い波が砂浜に寄せると、砂の表面には隆起が発生する。

これが“秩序”である。海辺はオープンシステムで、エネルギー(波)が砂に模様を形成する。熱力学的観点からすると、ここに秩序が生まれる。しかし、波が砂の城を作り出さないことは明らかである。砂の城を見たら、誰もが誰かが作ったのだと思うであろう。なぜならば、城は“組織化”されているからである。言い換えれば、城は明確に設計され、情報を持っている。その全てが、意識的な計画を持って何者かに作成されている。

砂と砂の城の違いは、それが“秩序的なもの”と“組織化されたもの”ということである。秩序は例えばアルファベットの[a]のキーを押し続け[aaaaaaaaaaaaa]と得るという反復から生まれる。しかしこの[a]の配列は何の情報も複雑性も含んでいない。情報を含んだ複雑な文字列を書くためには(文節、段落、本など)、知能の存在が欠かせない。

埃っぽい部屋に風が吹くケースも同様である。風が吹くと、部屋の中の埃は一箇所に集まる。このように熱力学的に言って秩序はあらゆるところに存在するが、埃が床にポートレートを作成するという“組織化”が行われることはない。

これは、複雑で組織化されたシステムは自然過程の結果としては存在し得ないことを意味する。秩序はある程度自然で説明できるが、それ以上のことが自然に行われることはない。

進化論者の自然過程における自己発生が進化の証明だと言う主張は、“自己組織化”とひとまとめにして説明されている。この2つの概念を混同させ、生命体は自然環境の化学反応により自己発生したと言う。プリゴジーン(Prigogine)とその仲間が行った研究は、この見

掛け倒しの論理をもとに行われた。

アメリカの科学者チャールズ・B・サクストン(Charles B. Thaxton)、ウォルター・L・ブラッドレー(Walter L. Bradley)、およびロジャー・L・オルセン(Roger L. Olsen)は、著書の『The Mystery of Life's Origin』で次のように述べている。

> どの実験でも流体内の分子の移動は非常に秩序的に起こった。プリゴジーン、アイゲン、その他の参加者は、このような自己組織化は有機化学の本質的なものであり、生命体の高分子にも当てはまるように思える。しかしこの類似性は生命の起源の答えとしては不十分である。なぜならば、秩序と組織化の説明ができないからである。規則性や秩序では、生命体に大量の情報を保存することはできず、より不規則で、特別な構造が必要となる。類似性の提案には大きな欠陥があるエネルギー流入によって起こる秩序性とDNAやタンパク質などの高分子に非同期的情報を構築する機能性は同等ではない。[7]

実際、プリゴジーンですら自身の論理は生命体の分子レベルには当てはまらないことを認めている。

> 生物学的秩序の問題は、細胞の分子活動から超分子秩序にも当てはまる。この問題の解決糸口は見つかっていない。[8]

では、なぜ進化論者は科学的根拠のない"物質が自己組織化"したというシナリオを信じ続けているのだろうか？生命体に見られる創造の力をなぜ否定し続けるのだろうか？彼らは唯物論、そして物質に生命体を生み出す謎の力があることを盲目的に信じているからである。ニューヨーク大学の化学教授であり、DNAの専門家でもあるロバート。シャピーロ(Robert Shapiro)は、進化論者の"物質自己組織化"の信仰と唯物論の教義に関する心を次のように述べている。

> 1つの自然科学物質から自己複製物質を作り出すという進化論の概念が必要だった。この概念は、未だ実証されていないが、今後実証されるであろう。アレキサンダー・オパーリン(Alexander Oparin)の生命の起源で言われているように、唯物論弁証の哲学としてこの概念は存在する。[9]

全ての状況は、進化論が科学に反するドグマでしかにことを証明しており、生命体の起源は、神の万能の力によってのみ説明がつく。神が無から全宇宙を創造した。科学は、熱力学の観点などから見ても進化論は不可能だと実証し、よって神の存在を認めざるを得ないのである。

---

1. Jeremy Rifkin, Entropy: A New World View, New York, Viking Press, 1980, p.6
2. J. H. Rush, The Dawn of Life, New York, Signet, 1962, p 35
3. Roger Lewin, "A Downward Slope to Greater Diversity", Science, vol. 217, 24.9.1982, p. 1239
4. George P. Stravropoulos, "The Frontiers and Limits of Science", American Scientist, vol. 65, November-December 1977, p.674
5. Jeremy Rifkin, Entropy: A New World View, p.55
6. For further info, see: Stephen C. Meyer, "The Origin of Life and the Death of Materialism", The Intercollegiate Review, 32, No. 2, Spring 1996
7. Charles B. Thaxton, Walter L. Bradley & Roger L. Olsen, The Mystery of Life's Origin: Reassessing Current Theories, 4. edition, Dallas, 1992. chapter 9, p. 134
8. Ilya Prigogine, Isabelle Stengers, Order Out of Chaos, New York, Bantam Books, 1984, p. 175
9. Robert Shapiro, Origins: A Sceptics Guide to the Creation of Life on Earth, Summit Books, New York: 1986, p. 207

第11章

偶然では説明できない設計

前章では、生命が偶然形成されたことがどれほど不可能かを説明した。ここでもう一度、こうした不可能を無視し、何百年も昔、生命体に必要な全てのものを兼備えた細胞が形成され、それが正当に"生命体となった"と仮定しよう。しかし進化論はこの時点で崩壊する。なぜならば、最初の細胞は、遺伝子情報を持っておらず、自分自身を複製したり、新しい遺伝子を生み出したりすることができなかったため、例えこの細胞がしばらくの間生きていたとしても、結局は死んでしまい、その後には何も残らず、また振り出しに戻らなければならなかったからである。

遺伝系は、DNAからのみ成るわけではない。DNAのコードを読む酵素、RNAがこのコードに従って付け加える情報のメッセンジャーであるリボゾーム、リボゾームへアミノ酸を移送するRNA、および数多くの中間プロセスを担う非常に複雑な酵素が必要である。このような環境は、細胞などの全ての重要な要素とエネルギー資源を備えた完全に管理された環境以外には存在しない。

結果的に、有機物は、全ての細胞小器官を備え、そこで存続し、要素を交換し、周りからエネルギーを得ることのできる適切な環境で完全に形成された細胞内に存在する場合のみ、自己複製を行える。地球上で最初に"突然"形成された細胞は、この驚くべき複雑な構造を持って形成されなければならなかった。

ここで、この複雑な構造が突然発生したとして、これは何を意味するのだろうか？

その複雑さの観点からハイテク車を使った例を挙げながら話を進めよう。(実際、細胞は、エンジンやその他全ての技術装置を備えた車よりもはるかに複雑で発達したシステムである)木々がうっそうと茂る森の奥深くにハイキングに行って、そこで木々の間に真新しい車を見つけたらあなたはどう思うだろう？森の中のさまざまな資源が、何百年もの年月をかけて車を生み出したと思うだろうか？車に使用される全ての部品は、地球上に実際に存在する鉄、同、およびゴムなどの原材料からできているが、だからといってあなたは、これらの原材料が"偶然"合成され、更にそれらが勝手に一体となって車を作り上げたと思うだろうか？

常識的な考えを持つ人であれば、その車が人によって設計され、工場で組み立てられた物であると思い、その車がどうしてこんな森の中にあるのか不思議に思うだろう。複雑な構造物が完全型で唐突に現れたら、それは誰かの意識的介入を意味し、細胞のような複雑なシステムは、そうして作られたとしか言いようが無い。言い換えれば、神

の創造により生まれたということである。

単なる偶然が完全型を生み出すと信じることは、良識の範囲を遥かに超えている。それにも関わらず、生命の起源に関する進化論の全ての説明はこの偶然を主張するばかりである。この問題に関して積極的に発言を行っているのは、フランス科学アカデミーの会長であったフランスの動物学者ピエール・ポール・グラッセ(Pierre-Paul Grassé)である。グラッセは、物質主義者であったが、ダーウィンの進化論はその基幹である"偶然"論の主張や生命の誕生を説明できないということを次のように認めている。

動物や植物のニーズを満たす突然変異体が都合よく出現したとは信じ難い。その上、ダーウィンの進化論には更なる条件が必要である。植物や動物は、何千もの幸運かつ適切な偶然を必要とした。それはつまり奇跡が法則であるということになる。無限小確率の事象はほぼ起こらないのが事実であり、空想をしてはいけないという法律はないが、科学はそれにふけってはいけない。[139]

グラッセは、進化論者にとって"偶然"の概念が何を意味するのかを次のようにまとめている。"…無心論という名のもと、公には話されないが、偶然はある意味で神業である"[140]

進化論者の論理的ミスは、偶然の概念を神聖なものと扱ったことである。コーランには、神以外の生物を崇拝するものは常識を欠いていると書かれている。

われは地獄のために、ジンと人間の多くを創った。かれらは心を持つがそれで悟らず、目はあるがそれで見ず、また耳はあるがそれで聞かない。かれらは家畜のようである。いやそれよりも迷っている。かれらは(警告を)軽視する者である。(アル・アアラーフ章179節)

ダーウィンの進化論の方式

これまでに取り扱った全ての技術的証拠に加えて、進化論者の迷信を子供でもわかるほど簡単な例を挙げてもう一度検証してみよう。

進化論は、生命が偶然形成されたと主張する。この主張によれば、無生物かつ無意識の原子が細胞を形成するために一体となり、その後何らかの形で人間などの生物となった。これについて考えてみよう。炭素、リン、窒素、カルシウムなどの生命体を構成する要素を一箇所に集めると、ただの塊が形成される。どのような処理をしても、この原子の塊は生命体にはならない。ここで、進化論者が"ダーウィンの進化論の方式"なるもののもとで主張する方式を"実験検証"してみよう。

進化論者に、現在生命体の構成要素となっているリン、窒素、炭素、酸素、鉄、マグネシウムなどの原料を大きな容器に入れさせる。更に、この容器に、通常の環境には存在しないが、進化論には必要である原料も入れさせる。そこに、自然環境下では自己発生しないアミノ酸、10^{-950}の発生確率であるタンパク質も、彼らが望むだけ加えて良いことにする。これを彼らが望むだけの熱や湿度にさらし、彼らが望む技術的に発展した装置でかき混ぜてよい。容器の横に、一流の科学者を配置し、何十億年、または何兆年もの間、じっと待っていてもらおう。生命体の形成に必要だと彼らが思う条件は何でも使ってよい。しかし、彼らが何をしたところで、容器の中に生命体を作り出すのは無理であると自身の細胞構造を電子顕微鏡で調べた大学教授は言うであろう。キリン、ライオン、ハチ、カナリア、ウマ、イルカ、バラ、ラン、ユリ、カーネーション、バナナ、オレンジ、リンゴ、ナツメヤシ、トマト、メロン、スイカ、イチジク、オリーブ、ブドウ、モモ、クジャク、キジ、多色のチョウなど、その他何百万もの生物のいずれにもなりえないと。実際、彼らはたった1つの細胞ですら得たことがないのである。

端的に言えば、無意識の原子は、ただ集まっただけでは細胞を形成できない。これらは、自身で考え、細胞を分割し、電子顕微鏡を最初に作った教授を作りだし、自分たちをその顕微鏡で観察するなどということはできない。物質は、神の優れた創造によりのみ生命を得る。

これと反する主張をする進化論は、科学的証拠に反している完全に誤った推論である。

酸素
窒素
アミノ酸
炭素
リン
脂質
Ca
水
二酸化炭素

進化論者は、偶然が創造的な力だと信じている。彼らが望むだけの原料を大きな容器に入れさせる。これを彼らが望むだけ熱し、凍らせ、電流を流させる。そして何十億年、または何兆年もの間、じっと待っていてもらおう。その間、全てを好きなように監視し、生命体の形成に必要だと彼らが思う条件は何でも使って良いことにしよう。

けれども容器の中にはたった1つの細胞も作り出せない。馬、蝶、花、ガチョウ、サクランボ、レモンの木、フクロウ、またはアリ…彼らが何をしたところで、自分の細胞を顕微鏡で観察する科学者や、物を考え、理由を見出し、判断し、喜び、興奮する人間は作り出せないのである。

目と耳の技術

進化論が答えることのできないもう1つの題材は、目や耳の優れた認識である。

目の話を始める前に、まず、我々が"どうやって物を見るのか"をお教えしたい。物体から来る光線は、目の網膜に逆さまに映る。ここで、細胞がこれらの光線を電気信号にて視覚中心点と呼ばれる脳の奥にある小さな部分へ伝達する。この一連のプロセスを得た後、これらの電気信号は脳の中心にて映像として受け取られる。この専門知識をもとに考えてみたい。

脳は、光から隔離されている。つまり、脳の中は真っ暗であり、光は脳には届かない。視覚中心点と呼ばれる部分は光が届かない真っ暗な場所であり、それはもしかしたらこの世で一番暗い場所かもしれない。しかし、人間は明るく輝く世界をこの真っ暗な部分で見るのである。

目が作り出すイメージは、とても鮮明ではっきりしており、20世紀の技術ですらそれを生み出すことができていない。例えば、読んでいる本を見て、本を持っている手を見、それから頭を上げて回りを見てみて欲しい。こんなに鮮明ではっきりしたイメージを、他に見たことがあるだろうか？どんなに発達したテレビ画面で、世界一のテレビプロデューサが作成した映像を見ても、これほど鮮明なイメージは得られない。目の作り出すイメージは、三次元で色付きであり、非常に鮮明である。何百年もの間、何千人もの技術者がこの鮮明さを作り出そうと試みてきた。このために工場や大きな施設が建てられ、多くの研究が行われ、さまざまな計画や設計が生まれた。ここで、もう一度テレビ画面を見て、自分の手を見て欲しい。鮮明度に大きな違いがあることがわかるだろう。更に、目は三次元で物を捉えるのに対し、テレビ画面は二次元映像でしかない。注意して見ると、テレビの映像にはぼやけがあるのがわかるだろう。目で捉えるイメージはぼやけているだろうか？そんなことはない。

長年、何万人もの技術者が、三次元のテレビを作り、視覚と同じ品質を得ようと試みてきた。三次元テレビはできたものの、メガネをかけなければならず、その上、所詮人工的な三次元映像にすぎない。背景は不鮮明であり、表面は紙のようである。目のような鮮明ではっきりとした映像は作り出すことができない。カメラやテレビでは必ず映像品質が落ちてしまう。

進化論者は、この鮮明ではっきりとしたイメージを作り出す機能が偶然できたと主張する。では、あなたの部屋にあるテレビが、全ての原子が勝手に結合し、映像を映し出す装置になったという偶然の結果現れたと誰かが言ったどう思うだろうか？何千人もの人間ができなかったことを、どうして原子にできようか？

ほぼ1世紀にわたり、何万人もの技術者が、ハイテク施設や工業団地で、最新の技術装置を使って研究と努力を繰り返しているが、この程度の三次元テレビしか作り出されていない。

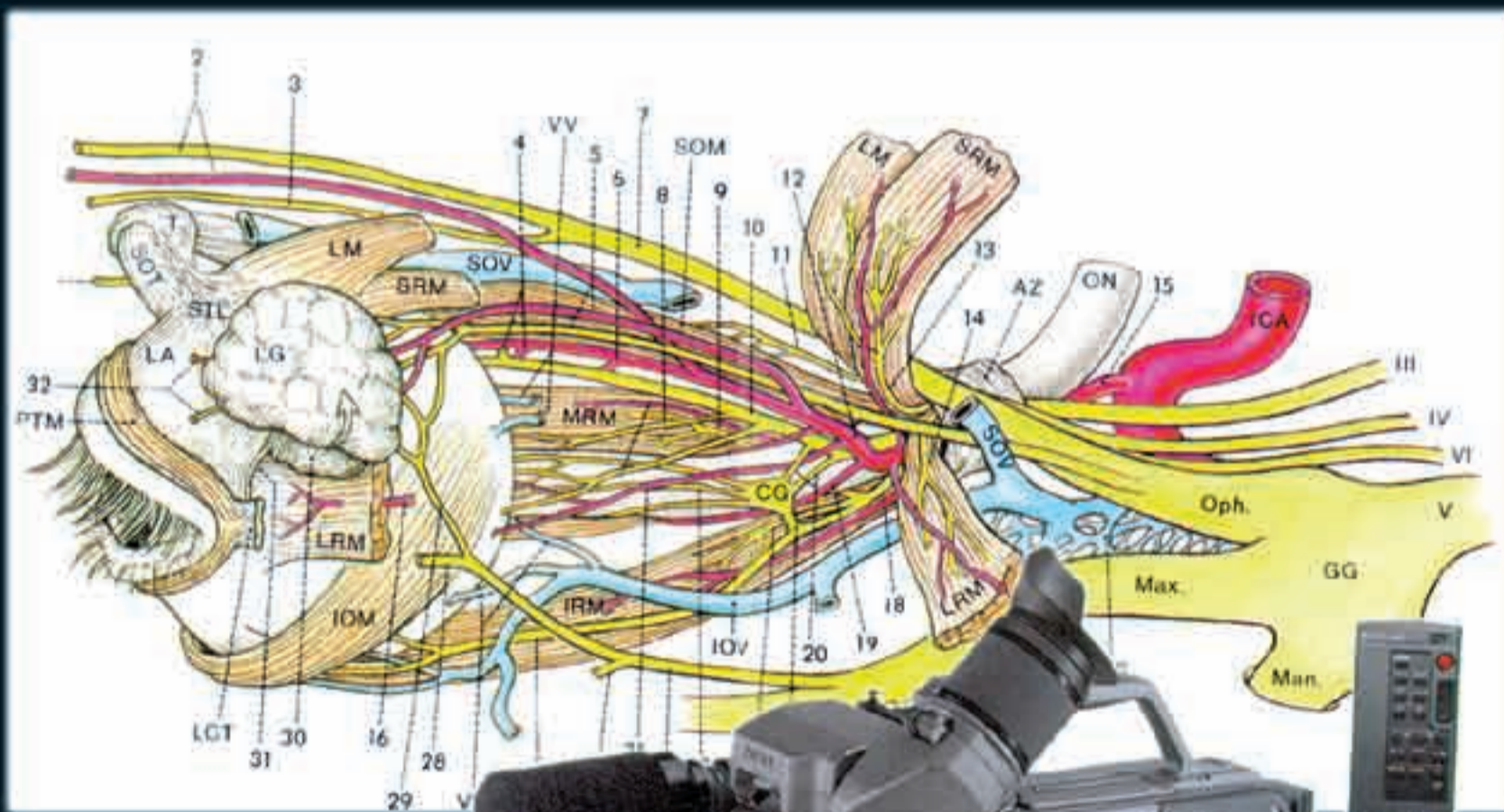
目が作り出す映像よりも原始的な映像を作る装置が偶然できたのではないとするのなら、目が写す映像も偶然できたものではないという証拠になるではないか。目は、テレビが作り出す映像よりも詳細で、驚異的な設計を必要とするのだから。鮮明なイメージを作る機能の設計と創造は、全てを意のままに操ることのできる神のものである。

耳にも同じことが言える。まずは外耳の心耳で音を拾い、それが中耳に送られ、中耳がそれを増大しながら音の振動を伝達する。内耳はこれらの振動を電気信号で脳に送る。目と同様、聴力は脳の聴覚中心点が司る。

目の状況と耳の状況は全く同じである。つまり、目が光から隔離されているように、耳も音から隔離されている。耳には音は入らない。従って、いくら外がうるさくても、脳の中は完全な静寂だ。それにも関わらず、どのような音も脳で受け取られる。音から隔離された脳内で、オーケストラのシンフォニーを聞き、混雑した場所の騒音を聞く。しかし、その時の脳内の音を正確な装置で測ったとしても、そこには完全な静寂があるだけである。

ここで再び、耳と脳が備える高品質かつ高度な技術と、人間の作り出した技術を比較してみよう。画像を作り出すのと同じように、オリジナルの音に忠実な音の生成するため、何十年もの歳月が費やされた。この結果が録音装置、高品質システム、音検知システムなどを生んだ。こうした技術や何千人もの技術者や専門家の試みにも関わらず、耳が受け取る音と同じ鮮度、透明度の音を得ることはできていない。音楽業界の大企業が作り出した高品質ハイファイシステムを考えて欲しい。これらの装置でも、音を録音するときにはある程度の音が失われるし、または、ハ

目と耳の技術

目と耳をカメラや録音機と比べると、こうした技術よりも目や耳のほうが遥かに複雑で機能性に優れていることがわかる。

イファイシステムで音楽を聴くときも、最初に必ず歯擦音が聞こえる。しかし、人体の技術が作り出す音は、非常に鮮明で透明である。人の耳で聞く音には、ハイファイシステムのように音に付随する歯擦音がない。音は、実際の鮮明度と透明度で受け取られる。人間が誕生して以来、これが普通であった。

簡潔だが、人体の技術は、収集された情報、経験、および機械を使って人間が作り出す技術より遥かに優れている。ハイファイシステムやカメラが偶然の結果生まれたという人は誰もいない。ではどうしてこれらより遥かに優れた人体に備わる技術が進化と呼ばれる偶然の積み重なりでできたと言えようか？

目、耳、そして人体の全ての部位は、優れた創造の生産物である。これは、神が独自に、その無限の知識と権力を持って創造したものだと一点の曇りもなく示している。

ここで視覚や聴覚について具体的に述べたのは、これほど明確な創造の証拠を進化論者が理解できていないからである。もしあなたが、進化論者に目や耳に見られる素晴らしい構造と技術がどうして偶然の結果だと言えるのかという説明を求めても、彼らは道理的かつ論理的な回答ができないことが分かるだろう。ダーウィンですら、1860年4月3日にアサ・グレー(Asa　Gray)に送った手紙にて"目の構造を考えたら恐ろしさに鳥肌がたった"と、生命体の偉大なる創造に直面した進化論者の絶望を認めている。[141]

進化論は、この世の中で一番強力な魔術である

本書の中で、進化論がいかに科学的証拠に欠いており、それどころか、古生物学、微生物学、および解剖学などの科学部門が行った科学的証明が、進化論が破綻した論理であることを証明していることを説明した。科学的発見、理由、論理は、進化に不適合であることが次々と明らかになったのである。

先入観がなく、特定の観念の影響を受けておらず、自身の理由と論理でのみものを考える人は、科学や文明の知識のない社会の迷信である進化論の信仰が間違っているということを何の疑いもなく理解できるだろう。

上記で説明したように、進化論を信じるものは、巨大な樽に入れられた原子と分子が、大学教授や生徒、アインシュタイン(Einstein)やガリレオ(Galileo)のような科学者、ハンフリー・ボガート(Humphrey　Bogart)、フランク・シナトラ(Frank　Sinatra)、パバロッティ(Pavarott)のような芸能人、それにアンテロープやレモンの木やカーネーションを勝手に生み出したと信じている。更に、このナンセンスを信じる科学者や大学教授は、教養のある人たちなのだから恐ろしい。これが、進化論が"最も強力な魔法である"ということを実に筋を通して証明している。今まで、これほどまでに人の理性を取り除き、人がまるで目隠しをされたように知的かつ論理的に考えることを拒否させた信念や発想はなかった。これは、エジプト人が太陽神ラーを崇拝したり、アフリカの一部でトーテム像が崇拝されたり、シバ人が太陽を崇拝したり、預言者アブラハムの信者が、自分たちの作った偶像を崇拝したり、預言者モーゼの信者が物質的富の崇拝をすることより悪く、信じ難い信仰である。

実際、神はコーランでこの事実を指摘している。彼は、その多くの詩の中で、人々の心が閉ざされ、真実を見ることができなくなると言っている。以下にいくつかを紹介しよう。

「本当に信仰を拒否する者は、あなたが警告しても、また警告しなくても同じで、(頑固に)信じようとはしないであろう。アッラーは、かれらの心も耳をも封じられる。また目には覆いをされ、重い懲罰を科せられよう」(アル・バカラ章6～7節)

「かれらは心を持つがそれで悟らず、目はあるがそれで見ず、また耳はあるがそれで聞かない。かれらは家畜のようである。いやそれよりも迷っている。かれらは(警告を)軽視する者である」(アル・アアラーフ章179節)

「仮令われがかれらのために天の門を開いて、(随時)かれらを登らせようとしても、かれらは必ず、「わたしたちの目は本当に眩んでしまった。いやわたしたちは魔法にかけられている」と言うであろう」(アル・ヒジュル章14～15)

この魔法が非常に大きな群衆を捉え、彼らを真実から遠ざけ、150年もの間守られてきたという驚くべき事実は言葉では表現できない。ほんの数人がこの不可能な論理を信じているのなら話は別だが、世界中の人々が、無意識の無機物から突然生命体が生まれ、組織、規律、理由、意識が完璧に制御された機能となり、それぞれの生物が各環境にあった特別な特徴を有するようになったと信じているのは"魔術"という言葉でしか表せない。

クロコダイルを神とあがめていた人々の信仰が現在では信じ難いのと同じように、進化論者の信仰も信じ難い。進化論者は、偶然と無生物、無意識な原子を創造的な力だと信じ、まるで宗教のようにそれに献身的である。

実際、神は、コーラン中の、無神論哲学を信じる人々が魔法で他の人を支配するであろうという預言者モーセとファラオの章でこの事実に触れていた。真の宗教の話をするよう言われたファラオは、預言者モーセに魔法使いに会って欲しいと頼んでいる。預言者モーセが魔法使いに会った時、彼はまずその力を見せて欲しいと頼んだ。

「かれ(ムーサー)は言った。「あなたがたが(先に)投げなさい」。そこでかれらは投げて人々の目を惑わし、かれらを恐れさせ、大魔術を演出した」(アル・アアラー章116節)

そしてわたしは、かれらを前から、後ろから、右てからも左てからも襲いましょう。あなたはかれらの多くの者が、(御慈悲に対し)感謝しないことが御分かりになるでしょう」かれは仰せられた。「恥辱を受けて追われて、ここから出て行け。凡そかれらの中あなたに従う者があれば、われはあなたがたの人々で地獄を満たすであろう」(それからアーダムに仰せられた)

「アーダムよ、あなたとあなたの妻は楽園に住み、随所であなたがた(の好むものを)食べなさい。只この樹に近付いて不義を犯してはならない」(アル・アアラー章117～119節)

この節からもわかるように、人々が最初にかけられた魔法はただの錯視であり、魔法をかけた人々は信仰を失った。今日でも、科学的隠蔽をもとにした馬鹿げた主張を信じ、擁護するという魔法にかかった者たちは、魔法がとけて真実が明るみに出たら恥をかくだけである。実際、無神論哲学者のマルコム・マガーリッジ(Malcolm Muggeridge)は、60年間進化論を擁護していたがある時真実に気付き、自身の心配を以下のように語った。

私は、進化論が将来的には歴史の教科書で史上最大のジョークとして紹介されるであろうことを確信している。我々の後世は、こんなに脆弱でうさんくさい仮説が信じられないほど受け入れられていたことに驚くであろう。[142]

その未来は遠くはない。人々は“偶然”を主張する進化論が、史上最大の愚かな魔法であったことに近いうちに気付くであろう。魔法はそろそろとけはじめている。進化論の真実を突き止めた人々は、なぜ自分がそれに捕らわれたのか不思議に思うに違いない。

第12章

進化論者の主張が間違っている理由

前章では、化石に見られる体の証拠および分子生物学の観点から進化論の無効性を検証した。本章では、進化論者が理論的証拠だというさまざまな生物学的現象と概念から進化論を検証する。これは、進化を支える科学的証拠が一切なく、逆に進化論者がこじつけを増長し、人々を騙している事実を明らかにする点で重要である。

変異と種

遺伝学で使用される用語、変異は、ある種の個体またはグループが、1つの特性から別の特性を得る遺伝的変化である。例えば、地球上の全ての人は、基本的に同じ遺伝情報を持っているが、それでも、遺伝子情報の変異潜在性により、つり目の人、髪の毛の赤い人、鼻が長い人、背の低い人など、特徴が異なる。

進化論者は、同じ種類でも特徴が異なることが、進化論の証拠だと断言する。しかし、こうした差異は、既存の遺伝子情報のさまざまな組み合わせによってのみ起こり、遺伝子情報に新しい特性が加わるわけではないので、変異ではなく、進化の証明にはならない。進化論に必要なのは、真新しい情報が、どのように真新しい種を作り出したのかを証明することである。

変異は、遺伝子情報の範囲内でのみ起こる。遺伝子科学では、これは"遺伝子プール"と呼ばれている。ある種の遺伝子プールに存在する全ての特性が、変異によって表面化するだけのことである。例えば、既にその遺伝子プールに情報があったため、ある種の爬虫類に相対的に長い尾や短い脚が発生する。しかし、変異は爬虫類を鳥類に変えたり、その代謝を変えたりすることはない。このような違いを生み出すには、生命体の遺伝子情報が増えなければならず、これは変異によっては不可能である。

ダーウィンが進化論を作った際、こうした情報はまだ明らかになっていなかった。彼は、変異には限界がないと思っていた。1844年に彼が書いた記事で「変異に限界があるという者もいるが、私はそれが事実だという証拠は1つも発見できない」と述べている。[143]『種の起源(The Origin of Species)』では、自身の論理の一番の証拠として、別の変異例を挙げている。

ダーウィンによると、例えば、より多くの牛乳を作り出す新しい種を作ろうと、異なる種の蓄牛を交配させたブリーダーは異なる種への変換を試みたことになる。ダーウィンの"無限変異"の概念は、『種の起源』の以下の段落に最も良くみてとれる。

自然選択によってクマが進化し、より大きな口を得て、最終的にクジラになったという考えに、私は何の疑問も抱かない。[144]

ダーウィンがこのようなこじつけの例を挙げたのは、当時は科学がまだ十分に理解されていなかったからである。その後20世紀には、生命体で行った実験の結果、科学は"遺伝的安定性(Genetic Homeostasis)"の原則を肯定

種の差異は進化論に当てはまらない

種の起源では、ダーウィンは、種間での変異と完全に新しい種の発生という2つの概念を混同している。ダーウィンは、さまざまな犬の交配から変種を観察し、それがある日異なる種になると夢見た。今日でも、進化論者は種内の変異を"進化"だと言い張っている。

しかし、種内で起こる変異は進化ではないと科学的に証明されている。例えば、犬をどれだけ交配させてもそれは犬のままである。種が別の種になる変異はいまだかつて一度も起こっていない。

的に仮定した。この原則は、新種を作り出そうと行われた全ての交配では望むような結果は得られず、従って、生命体の異種間には厳重な障壁があるというものである。これは、ブリーダーが異なる蓄牛を交配させても、他種生物に変えることはできなかったことを意味し、ダーウィンの想定とは異なる。

『Darwin Retried』にてダーウィン説を反証したノーマン・マクベス(Norman Macbeth)は、その本の中で次のように述べている。

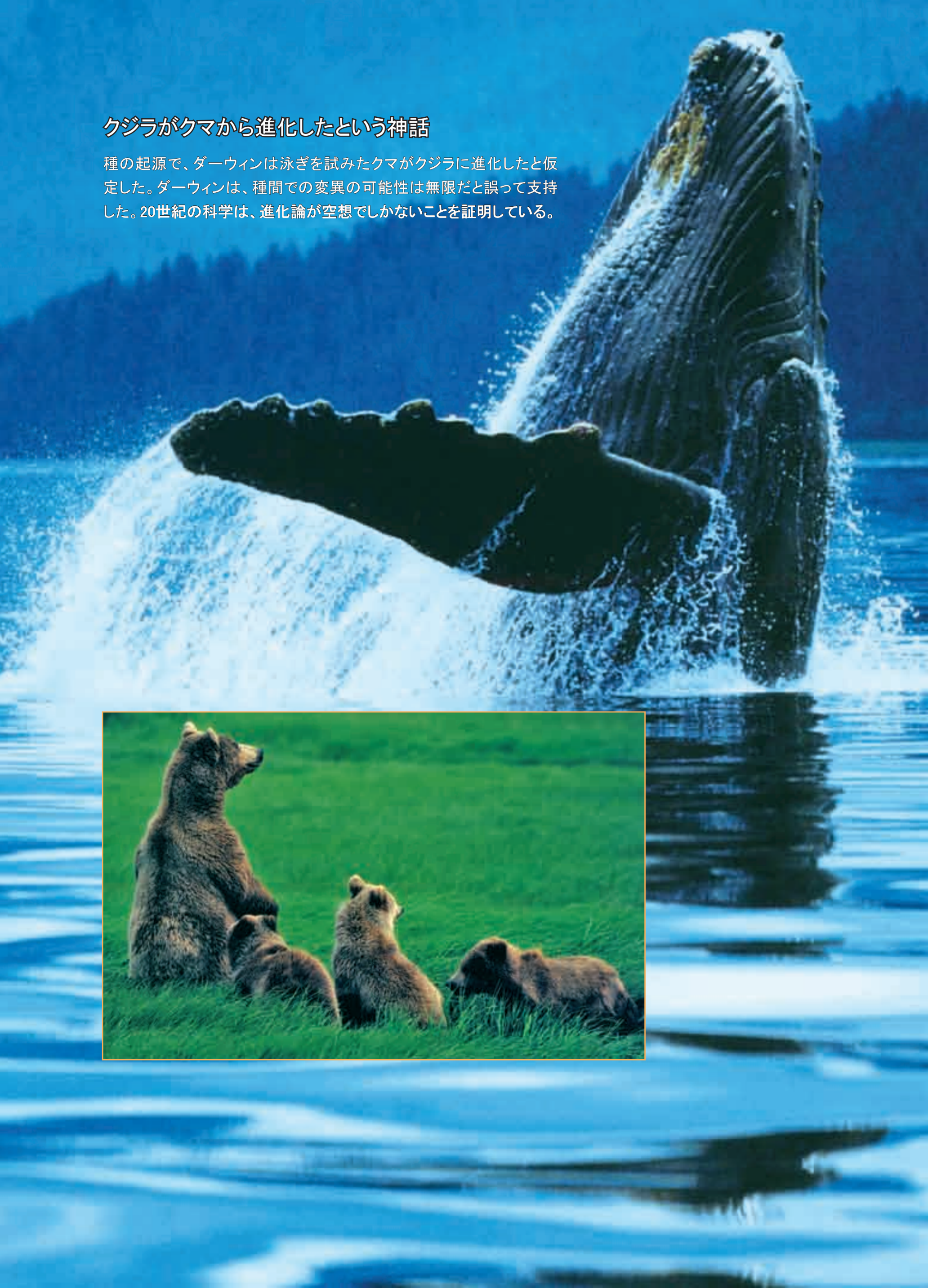
問題の中心は、生命体が無限に変化することが可能かどうかだ。種は安定しているようだ。新しい動物や植物を生み出そうとして、結局は最初の状態に戻ってしまったブリーダーの話はたくさん聞いている。2～3世紀にわたる多大な努力にも関わらず、青いバラや黒いチューリップは未だに生まれていない。[145]

史上最高のブリーダーだと言われているルーサー・バーバンク(Luther Burbank)は、この事実に関して"種の開発には限度があり、この限度は目には見えない法に支配されている"と言っている。[146]オランダ人の科学者W・L・ヨハンセン(W. L. Johannsen)は、全ての事実を次のようにまとめている。

ダーウィンやウォレスが重要視した変異は、ある時点を超えたら選択されず、変異に'不定逸脱'はない。[147]

ガラパゴス諸島にてダーウィンが見たフィンチは、これが"進化"の証拠でないというまた別の例として挙げられる。最近の所見では、ダーウィン説が前提するように、フィンチは無限の変異を遂げたわけではないということがわかっている。更に、ダーウィンが14種に分けたフィンチは、実際はお互いに交配しただけで、実はもとは同じ1種だということがわかっている。科学的観察から、ほぼ全ての進化論関連資料にて神話的に解釈されているフィンチの口ばしは、実際はただの"変異"の例であり、従って、進化論の証拠にはなりえない。例えば、ダーウィン説の証拠を見つけるために、何年間もガラパゴス諸島にてフィンチの種類を観察したピーター・グラント(Peter Grant)とローズマリー・グラント(Rosemary Grant)は、そこでは新形質を生み出す"進化"は行われなかったと結論付けねばならなかった。148

クジラがクマから進化したという神話

種の起源で、ダーウィンは泳ぎを試みたクマがクジラに進化したと仮定した。ダーウィンは、種間での変異の可能性は無限だと誤って支持した。20世紀の科学は、進化論が空想でしかないことを証明している。

進化論の証拠ではない抗生物質抵抗性とDDT免疫力

進化論者が、進化論の証拠としてあげようと試みてきた生物学的概念の1つが、抗生物質に対する細菌の抵抗性である。多くの進化論関連資料が、抗生物質抵抗性を"有利な突然変異による生命体の発展の例"だとしている。同様の主張が、DDTなどの殺虫剤への免疫力を作り出す昆虫にも言われている。

しかし、これにおいても進化論者は間違いを犯している。

抗生物質とは、微生物が他の微生物に抵抗するために産生する"キラー分子"である。最初の抗生物質は、1928年にアレキサンダー・フレミング(Alexander Fleming)が発見したペニシリンである。フレミングは、カビがブドウ球菌細菌を死滅させる分子を産生することを発見し、これは薬学界のターニング・ポイントとなった。微生物から派生した抗生物質は、細菌性の病気の治療に使われ、大きな成功を収めた。

程なく、また新しい発見があった。細菌は、やがてその抗生物質に対する免疫を産生する。その抗生物質にさらされると、たいていの細菌は死滅するが、それに影響を受けなかった細菌が増殖し、その細菌全体が、その抗生物質に対する免疫を持つようになる。

進化論者は、これを"条件に適応する最近の進化"だとした。

しかし、真実は、この小手先の解釈とは全く異なっている。これに関して、詳細な研究を行った科学者の1人に、イスラエルの生物物理学者で、1997年に発行された『Not by Chance』の著者でもあるリー・スペットナー(Lee Spetner)が挙げられる。スペットナーは、細菌の免疫力は、以下の2つの作用から起こるが、そのどちらも進化論の証拠とは成りえないと支持している。

1) 細菌内に既に現存する耐性遺伝子の移入

2) 突然変異による遺伝子データ損失の結果による耐性の構築

スペットナー教授は、2001年に発行された記事にて最初の作用に関して以下のように説明している。

細菌によっては、こうした抗生物質へ抵抗を与える遺伝子に恵まれているものがある。この抵抗遺伝子は、細胞から抗生物質分子を分解する。このような遺伝子を持つ有機体は、これらの遺伝子を他の細菌に譲渡し、その細菌も抵抗力のあるものにすることができる。抵抗作用は特定の抗生物質に対してのみ有効であるが、ほとんどの病原菌は、さまざまな抗生物質に抵抗する何組かの遺伝子セットを蓄積することに成功している。[149]

スペットナーは、これが"進化論の証拠"ではないことを次のように述べている。

このような形での抗生物質抵抗性の取得は、進化論を説明するのに必要な突然変異体の原型とはなりえない。進化論を説明する遺伝的変異は、細菌のゲノムに情報を追加するだけではなく、細菌のバイオコスモにも新しい情報を追加しなければならない。遺伝子の水平伝達は、ある種に既に存在する遺伝子間でのみ行われる。[150]

従って、新しい遺伝情報が産生されるわけではなく、単に既存の遺伝情報が細菌間で伝達されるだけの話であり、これは進化論を語るに値しない。

突然変異の結果とされる二番目の免疫力も進化論の例にはならないとスペットナーは書いている。

微生物は、時によって、1つのヌクレオチドをランダムに置換することにより抵抗力を得ることができる。セルマン・ワックスマン(Selman Waksman)とアルバート・シャッツ(Albert Schatz)によって発見され、1994年に最初に報告されたストレプトマイシンは、細菌がこの方法によって抵抗力を得た抗生物質である。細菌が起こした変異は、ストレプトマイシンの存在下で有効であるが、NDT(Neo Darwinian Theory:新ダーウィン説)に必要な突然変異の原型とはなりえない。ストレプトマイシンへの抵抗力を生んだ変異の種類は、リボソームに発症し、抗生物質分子と合う自身の分子を分解する。微生物のリボソームの表面で起こるこの変化は、ストレプトマイシン分子の抗生物質機能の付着および搬出を抑制する。この分解は、特性の損失を起こし、結果として遺伝子情報を損失する。要点は、この種の変異が何回起ころうとも、これでは進化は達成されない。進化は、特異性を分解するだけの変異では構築できないということである。[151]

つまり、細菌のリボソームに影響を起こす突然変異が、ストレプトマイシンへの細菌の抵抗性を生む。これは、突然変異によるリボソームの"分解"が原因である。細菌に新しい遺伝情報が追加されたわけではない。それどころか、リボソームの構造が分解され、すなわち、細菌が"負傷した"状態になったと言える。(また、突然変異を起こした

リボソームは、通常の細菌のリボソームよりも機能性が悪いことが発見されている)この"障害"が、抗生物質がリボソームへ付着するのを防ぐため、"抗生物質抵抗性"が生まれるのである。

最後に、今までに"遺伝情報を作り出す"突然変異の例は発見されていない。

昆虫がDDTや同様の殺虫剤に対して作り出す抵抗性にも同じことが言える。多くの場合、既に存在する免疫遺伝子が使用される。進化論者であり生物学者でもあるフランシスコ・アヤラ(Francisco Ayala)は、これを認め、「さまざまな種類の殺虫剤に対する抵抗性の遺伝的変異は、これらにさらされた種に元々存在していたものだ」[152]と言っている。他にも、上記のリボソーム変異のような突然変異によって説明された例は、昆虫の"遺伝情報損失"が原因で起こったとされている。

この場合、細菌や昆虫の突然変異作用が進化論の証拠だとは主張できない。なぜならば、進化論は、生物が突然変異を通して発展したと主張しているからである。しかしスペットナーは、抗生物質免疫力も、その他のいかなる生物学的減少も、変異の例とはなりえないと説明している。

大進化に必要な突然変異は未だかつて観察されたことがない。分子レベルで情報が加わると主張するNDTが必要とするランダムな突然変異は発見されていない。私の疑問は、今までに観察された突然変異は、進化論を支持するのに十分なものかどうか?ということであり、その答えはノーである![153]

痕跡器官の誤謬

長い間、"痕跡器官"の概念が、進化の"証拠"として時折進化論者の文献に見られた。結局は、この概念が無効なものだと証明された時点で主張は静かに幕を閉じたのだが。しかし、今でもこの概念を信じている進化論者は、"痕跡器官"を進化論の重要な証拠として進展させようとする。

"痕跡器官"の概念は、1世紀前に最初に提唱された。進化論者にもあるように、生物の体内にはいくつかの非機能的器官が存在する。これらは先祖から受け継がれており、使用する機会がなくなって次第に痕跡となった。

この仮定そのものが非常に非科学的であり、全く不十分な知識に基づいている。これらの"非機能的器官"は、実際は"まだその機能が発見されていない"器官である。進化論者が作成した痕跡器官の長いリストが、徐々に、しかし確実に減少しているのを見ればこの事実は明らかである。進化論者のS・R・スキャディング(S. R. Scadding)は、雑誌『Evolutionary Theory』に掲載された自身の記事『痕跡器官は進化

進化論者は、抗生物質に対する細菌の抵抗性を進化の証拠だとしたが、それは虚偽的なものだった。

論の証拠になるのか？』でこの事実に同意している。

それが痕跡器官だと自信を持って言うことは不可能であり、この論議そのものが科学的に有効だとは言えないことから、私は、"痕跡器官"が進化論の何の証拠にもならないと結論付ける。[154]

1895年にドイツ人解剖学者、R・ウィーデルスハイム(R. Wiedersheim)によって作成された痕跡器官のリストには、虫垂および尾骨を含む約100個の器官が含まれていた。科学の進化につれ、ウィーデルスハイムのリストに載っていた全ての器官は、それぞれ重要な機能を持つことが発見された。例えば、"痕跡器官"だとされていた虫垂は、体内の感染症と戦うリンパ器官だということが1997年に明らかにされた。"胸腺、肝臓、脾臓、虫垂、骨髄、へんとう線などの小さなリンパ組織、小腸のパイエル板などの組織は、リンパ系の一部である。これらも体が感染症と戦うのを助けている[155]

痕跡器官のリストにあったへんとう線も、特に青年期までの間、咽喉を感染症から守るという重要な役割を果たしていることがわかった。脊椎の一番下にある尾骨も、骨盤の周りの骨を支える小筋肉の収束点であり、そのため人は尾骨なしでは楽に座れないことがわかっている。それから数年の間、胸腺は人体の免疫システムをT細胞を活性化することにより始動させること、松果体は重要なホルモンの分泌に関していること、甲状腺は幼児や子供の健全な発育を促すこと、下垂体はホルモン分泌線が正しい働きをするよう管理していることがわかった。これらは全て一度は"痕跡器官"だと考えられていた器官である。最後に、ダーウィンが痕跡器官だとした目の半月襞は、実際は、眼球の掃除と潤滑の役割を担っていることがわかった。

痕跡器官に関する進化論者の主張には重要な論理的誤りがある。この主張では、生物の痕跡器官は先祖より受け継がれたものとされている。しかし、"痕跡"器官であると言われている器官のいくつかは、人間の先祖だと言われている種には見られないのである！例えば、人類の先祖だとされているいくつかの類人猿には虫垂はない。痕跡器官の論理に取り組んだ有名な生物学者、H・イーノック(H. Enoch)は、論理的な誤りを次のように述べている。

ある類人猿には虫垂があったが、それにごく近い類である下等類人猿には虫垂はなかった。しかし、オポッサムなどの下等哺乳類には虫垂が見られる。進化論者はこれをどう説明するのだろうか？[156]

簡潔に言えば、進化論者が提唱した痕跡器官のシナリオには多くの論理的欠陥があり、このシナリオがただの虚偽であることが科学的に証明されている。人間は今と同じ特長を持って神により創造されたものであり、偶然によって他の生物から進化したわけではない。よって痕跡器官も受け継がれたものではない。

相同性の神話

生物学では、異なる種間の構造的類似性を"相同性"と呼ぶ。進化論者は、この類似性を進化論の証拠として提示してきた。

ダーウィンは、類似した(相同の)器官を持つ生き物は、お互いに進化的関係を持ち、これらの器官は、共通の先祖より受け継がれたと考えた。彼の仮説によると、ハトにもワシにも翼があり、従って、ハト、ワシ、そして翼を持つその他全ての鳥類は、共通の先祖より進化した。

相同性は、現在の身体的類似にのみ頼っただまし論議である。この論議は、ダーウィンの頃より、1つの具体的な発見もなく、一度も立証されていない。相同構造を持った生き物の共通先祖の化石は、世界で今までに一度も発見されていない。更に、相同性が進化が起こったという証拠にならないことを以下の問題が明白にする。

1. 進化論者が進化的関係を見つけることのできない完全に異なる群

ワシ、コウモリ、昆虫には羽がある。類似器官を持っていても、共通先祖から進化したという証明にはならない。

ワシ、コウモリ、昆虫には羽がある。類似器官を持っていても、共通先祖から進化したという証明にはならない。

の生き物に相同器官が見られる。

2. 相同器官を持つ2つの生き物の遺伝子コードが全く違う。

3. 2つの生き物における相同器官の胎生発育が全く違う。

これらを1つ1つ検証していこう。

完全異種に見られる類似器官

進化論者が、進化関係では説明できない数多くの相同器官が異群間にある。翼がそれの一例である。鳥類だけではなく、哺乳類であるコウモリ、昆虫にも翼があり、絶滅した爬虫類である恐竜にも翼があるものがあった。これら4つの異群の生物の進化的関係や親類関係は、進化論者ですら事実だと仮定していない。

もう1つの特筆すべき例は、異なる生き物の目にみられる類似性、構造類似点である。例えば、タコと人間は、進化的関係が提唱されたことのない全く異なる2つの種であるが、その目の構造と機能に関しては、非常に類似している。進化論者ですら、その目の類似性からタコと人間が共通先祖を持つと推測したことはない。このような例が他にもたくさんあり、これらは、進化論者が類似性に基づいた主張をするのは完全に非科学的だと指摘する。

実際、相同器官は、進化論者の大きな恥でしかない。有名な進化論者フランク・ソルズベリー(Frank Salisbury)の、異なる生物がどうして似たような目を持つことになったのかに関するコメントは、相同性の行き詰まりを強調している。

例えば、イカ、脊椎動物、節足動物などでも目などの複雑器官に共通性が見られる。こうした器官の起源がたった1つだと主張するのは難しく、かと言ってそれらが異なる場所で似たように偶然何度も形成されたと主張しなければならないと考えると頭がクラクラする。[157]

非常に似通った身体的特徴を持ちながらも、進化的関係を不可能だとする生き物が多く存在する。哺乳類の二大分類である有胎盤類と有袋類がその例である。進化論者は、この区別は哺乳類が最初に現れた時点で起こり、各分類は、完全に異なる進化史を持つと考えている。しかし、有胎盤類と有袋類には、ほぼ同じ"対"が見られることがある。アメリカの生物学者ディーン・ケニヨン(Dean Kenyon)とパーシバル・デービス(Percival Davis)は、以下のようなコメントをしている。

ダーウィンの進化論では、オオカミ、ネコ、リス、ウッドチャック、アリクイ、モグラ、そしてネズミなどは、一度は有胎盤類として、そして有袋類としてそれぞれ二度進化したことになる。異種間で"対"が見つかるという事実も、偶然の突然変異でそれが各種で起こったというこの驚くべき主張の上に成り立つ。[158]

進化論生物学者が"相同性"の例として認められない非常に類似性のあるこうした器官は、共通先祖から進化したと主張することが証明できないことを意味する。その場合、これらの類似構造の科学的な説明は何なのか?答えはダーウィンの進化論が科学の世界の中心となるずっと前からあった。類似構造をもとに、最初に生物を分類した科学者カール・リンネ(Carl Linnaeus)とリチャード・オーウェン(Richard Owen)は、これらの構造を"共通"進化の例

ホモロジーを否定する双胎哺乳類

北米オオカミの頭蓋骨

大きな歯を持った二種類の絶滅哺乳類

胎盤哺乳類と有袋類でまるで“双子”のようにそっくり類似した例として、巨大な前歯を持っていた絶滅したスミロドン(写真下)とティラコスミルス(写真上)が挙げられる。頭蓋骨と歯の構造は非常に似ていたが、この二種類には進化の繋がりが全くなく、類似器官が進化の証明だというホモロジーの観点を覆す。

タスマニアオオカミの頭蓋骨

タスマニアオオカミと北米オオカミの類似点

胎盤哺乳類と有袋類の“双子”のような類似点は、ホモロジーの主張に大きく影をさす。胎盤哺乳類であるタスマニアオオカミ(写真上)と北米オオカミは非常に類似している。頭蓋骨を見ると、この二種類はほぼ同じと言っても良いぐらいである。しかし、この二種間に“進化関係”はなく、これもまたホモロジーを反証している。

構造に関していうと、人間とタコの目は非常に似ている。しかし、構造が似た器官があるからと言って共通先祖から進化したわけではなく、進化論者ですら、タコの目の共通性を進化論の例には使わない。

だとした。言い換えれば、類似器官(最近では類似遺伝子もある)は、特定の機能のために作られたものであり、共通先祖より偶然進化したものではないと。

現代の研究結果は、類似器官に関する"共通先祖"の主張は間違っており、共通先祖に可能な唯一の説明は、生命体が神に創造されたということである。

相同性の遺伝学および胎生学的行き詰まり

"相同性"に関する進化論者の主張を真剣に受け止めるには、異なる生物間に見られる類似(相同)器官が、類似(相同)DNAコードを持つことが必要である。しかし、両者のDNAコードは全く違う。類似器官は、たいてい、非常に異なる遺伝子(DNA)コードに解読される。さらに、異なる生物のDNAにある類似遺伝子コードは、たいてい、全く異なる器官のものである。

オーストラリアの生物化学者マイケル・デントン(Michael Denton)は、自身の著書『Evolution: A Theory in Crisis』で、進化論者の相同性解釈の行き詰まりを次のように述べている。「相同構造は、通常、非相同遺伝システムで特定されており、相同性の概念は、胎生学に幅を広げられない」[159]

有名な例は、たいていの進化論関連テキストで引用されている、四肢動物の"五本の指の骨格の造り"である。陸上脊椎動物などの四肢動物は、その前肢と後肢に五本の指を持つ。場合によっては、五本の指に見えない場合もあるが、骨格の構造からそれらは全て五指と数えられる。カエル、トカゲ、リス、サル、これら全ての前肢と後肢はこの構造になっている。鳥やコウモリの骨格でさえ、この基本構造に一致する。

進化論者は、全ての生物が共通先祖の子孫であると主張し、この証拠として五指の四肢を引き合いに出す。この主張は20世紀を通じて、進化論の強力な証拠としてほぼ全ての資料で使われてきた。しかし、1980年代の遺伝子に関する発見がこの進化論者の主張を論破した。異なる生物の五指の四肢パターン形成は、完全に異なる遺伝子によって制御されていることがわかったのである。進化論者である生物学者ウィリアム・フィックス(William Fix)は、五指に関す

る進化論の主張の崩壊を次のように話している。

これまでの進化論のテキストは、異なる動物間の四肢の骨格が非常に類似していることを指摘し、相同性の考えを大事にしてきた。人間の腕、鳥の翼、鯨のヒレに"五指"肢パターン形成を見つけ、これが共通起源の証拠とされてきた。ここで、これらの構造が、突然変異や環境選択により時とともに変わった同一の遺伝子対から伝わったのであれば、進化論は鋭い点を突いていると言えよう。しかし残念なことに、事実は異なる。異なる生物の相同器官は、完全に異なる遺伝子複合体から形成されていることが現在はわかっている。よって類似遺伝子が共通先祖から伝わっているとする相同性の概念は崩壊した。[160]

相同性に関する進化論の主張のもう1つのポイントは、胎生発育に関する機関の類似構造であり、言い換えれば、卵の中や母体の至急で胎児が発育する段階は類似していなければならないが、実際は、類似構造の胎生期間は全ての生物で全く異なっている。

結論として、遺伝学的および胎生学的研究は、ダーウィンが"生物が共通先祖から派生した進化の証拠"とした相同性の概念が、何の証拠にもならないことを証明した。この点において、科学は、ダーウィン説が間違いであることをまた証明したと言える。

分子相同性の主張の無効性

進化論者が進化論の証拠としての相同性の進展は、形態学的レベルからのみでなく分子レベルからも間違えていると言える。進化論者は、異なる生物種のDNAコードや関連するタンパク質構造が類似しているとし、この類似が生物種が共通先祖から、または互いに進化した証拠であると言う。

しかし、実際は、分子比較の結果は進化論を支持するようなものではなかった。類似性があり、関連していると考えられている生物間には、大きな分子相違がある。例えば、呼吸するために不可欠なタンパク質であるシトクロムCは、同網の生物でも全く異なる。この件に関して行われた研究によると、異なる爬虫類種間のこの違いは、鳥と魚や魚と人間のものよりも大きい。他の研究では、鳥の間での分子差が、鳥と人間のものよりも大きな場合があることがわかった。類似している細菌の分子差が、哺乳類と両生類や昆虫のものよりも大きなケースも見つかっている。[161]同じように、ヘモグロビン、ミオグロビン、ホルモン、遺伝子などを比較したところでも似たような結果が得られた。[162]

分子生物学の分野のこの発見について、マイケル・デントン(Michael Denton)博士は以下のように述べている。

各網は、分子レベルで比類がなく、独立しており、同一連鎖群に属さない。従って、化石などの分子は、進化生物学が追求してきた中間体を提供できなかった。分子レベルでは、"先祖の"、"原始の"、または"進化した"生命体は存在しない。こうした分子の証拠が1世紀前にあったとは考えられず、分子レベルでの生物進化の考えが受け入れられていたとは思えない。[163]

マイケル・デントン(Michael Denton)教授：
「進化論は危機に立たされている」

“生命の樹”の崩壊

1990年代の遺伝子コードの研究は、この観点にて既に苦境に立っていた進化論をより苦しめた。この研究では、タンパク質配列に限られていた初期の比較に加え、“リボソームのRNA”(rRNA)配列も比較された。この結果をもとに進化論科学者は“系統樹”を作ろうとしていたが、結局はこの試みは断念された。1999年にフランスの生物学者エルベ・フィリップ(Hervé Philippe)とパトリック・フォートレ(Patrick Forterre)が書いた記事によると「より多くの配列を解読すればするほど、たいていのタンパク質系統がrRNA系統樹同様、正反対であることがわかる」[164]。

rRNA比較に加え、生物のDNAコードも比較されたが、その結果は、進化論が前提していた“生命の樹”とは反対のものであった。分子生物学者ジェームス・A・レイク(James A. Lake)、ラビ・ジェーン(Ravi Jain)およびマリア・C・リベラ(Maria C. Rivera)は、1999年の記事でこの詳細について以下のように述べている。

「科学者は、さまざまな有機体の遺伝子の分析を始め、DNAコードはrRNA分析から派生した生命の系統樹に反していることを発見した」[165]

タンパク質、rRNA、遺伝子などの比較はどれも、進化論の仮定を立証できなかった。非常に有名なイリノイ大学の生物学者カール・ウーズ(Carl Woese)は“系統発生”の概念が分子研究に直面し、その意味をなくしたことを次のように述べている。

一貫性のある生物形系統発生は、タンパク質系統からは認められない。系統発生的不一致は、普遍的系統樹の根から枝先にまで、異なるさまざまな種間で見ることができる。[166]

分子比較の結果が進化論に賛成するどころか反対である事実は、1999年発行の雑誌『Science』の記事「Is it Time to Uproot the Tree of Life?」でも認められている。エリザベス・ペニッシ(Elizabeth Pennisi)によるこの記事は、“生命の樹”に光を当てるためにダーウィン説を信じる生物学者が行った遺伝子分析と遺伝子比較が、実際は期待とは全く反対の結果を出したため、“新たなデータが進化のイメージをにごらせてしまった”としている。

1年前、十数種の微生物の新しいゲノム配列を調べていた生物学者は、これらのデータが生命の起源に関する物語を支持するだろうと思っていた。しかし、実際の発見は彼らを困惑させた。ゲノムの比較は生物の種がどのように進化したかを明らかにするどころか、より混同してしまったからである。そして現在、8つの微生物配列を見ていたら、状況はより複雑になった。進化生物学者の多くは、その配列にそれなりの共通点を見出せると思っていた。他の遺伝子とのDNA配列が完全に比較できるようになった時、研究者は、この系統樹に単に詳細を追加するだけで大丈夫だろうと思っていた。しかし、メリーランド州ロックビルのTIGR(The Institute for Genomic Research)長のクレア・フレーザー(Claire Fraser)が言うように「現在の系統樹ほど真実から遠いものはない ― 全くの偽りだ」という結果が出た。それどころか、遺伝子の比較は、rRNA系統樹とは異なる新しい系統樹を必要とし、多くの矛盾が生じる。[167]

要するに、分子生物学の発展に伴い、相同性概念は形成不利になっていった。タンパク質、rRNA、遺伝子の比較は、進化論では親類だとされている生物が、実際はお互いに全く異なったものであることを明らかにした。1996年に行われた88個のタンパク質配列の研究は、ウサギをげっ歯類ではなく霊長類に、1998年の19動物種の13の遺伝子の分析は、ウニを脊索動物に分類し、そして1998年の12個のタンパク質に基づいた研究は、ウシがウマよりもクジラに近いことを明らかにした。分子科学者ジョナサン・ウェルズ(Jonathan Wells)は、2000年にこれを以下のようにまとめた。

さまざまな分子分析に基づいた元来の系統樹の矛盾、および分子分析の結果から得た奇妙な系統樹は、分子系統発生論を危機に落とし込んだ。[168]

“分子系統発生論”は重大な局面に立たされており、それは進化論も同局面に立たされているということである。(系統発生論は、さまざまな生物を“家族関係”と呼ばれている単位で参照し、進化論の仮想基礎となっている)科学は、全ての生物グループがそれぞれ独立して生まれたことを証明し、生命体がお互いに進化したという主張を弱体化させた。

胎生学的反復の神話

以前"反復説"と呼ばれていたこの概念は、長い間、科学の文献から排除されてきたが、未だに科学の真実として進化論者の発行物で紹介されることがある。"反復説"とは、19世紀の終わりに進化生物学者アーンスト・ヘッケル(Ernst Haeckel)が提唱した"個体発生は系統発生を繰り返す"を言いやすくまとめたものである。

ヘッケルのこの論理は、胚細胞は、その偽先祖が経験した進化の過程を繰り返す形で行われると主張する。彼は、母体子宮内での発育段階で、人の胚細胞は最初は魚のように見え、次には虫類のような形になり、最後に人間の形になると理論化した。

この論理は、全くの偽者だということが証明されている。人の胚細胞の初期段階に見られる"魚のえら"は、実際は中耳道、副甲状腺、および胸腺の第一段階であることがわかっている。"卵黄嚢"だとされた胚細胞の部分は、幼児の血液を作り出すための嚢であった。ヘッケルが"尾"だと指摘した部分は、実は脊柱であり、尾のように見えるのは脚がまだ形成されていないからであった。

これは現代の科学の世界では広く認められた事実であり、進化論者ですらこれを認めている。ネオ・ダーウィニズムの成立者ジョージ・ゲイロード・シンプソン(George Gaylord Simpson)は、次のように書いている。

ヘッケルは、関連する進化論の原則を誤って述べている。現在は、個体発生が系統発生を繰り返さないことが証明されている。[169]

『American Scientist』に掲載された記事では、次のように書かれている。

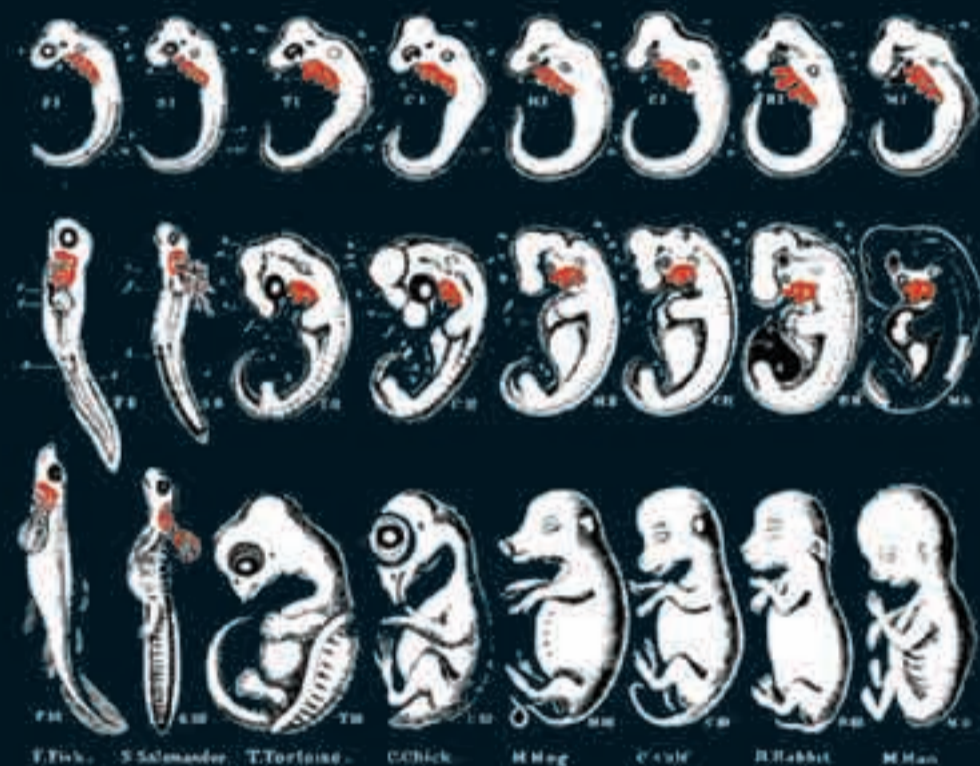
生物発生原則は非常に絶望的である。この概念は、50年代についに生物のテキストからも排除された。理論的研究の題材としては、既に20年代には消滅していたのだが。[170]

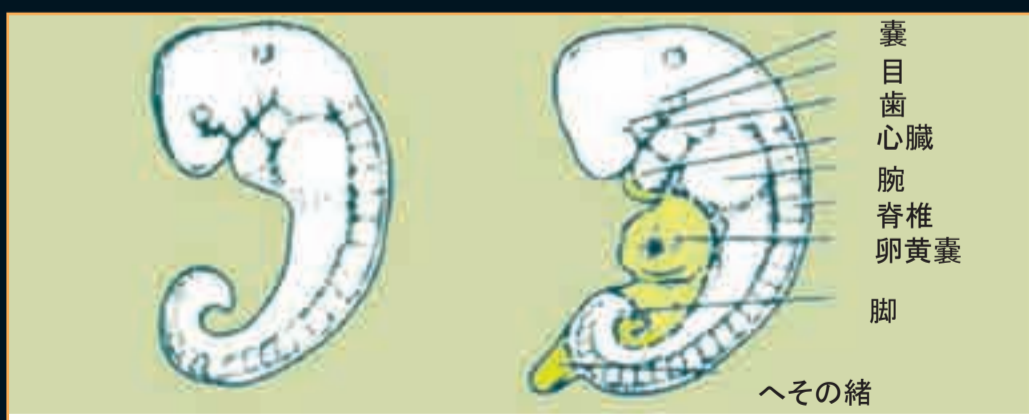
ハッケル(Haeckel)は、ダーウィンよりも遥かに進化論に熱心であったため、彼は科学データを改ざんし、さまざまな捏造を行うことをためらわなかった。

自己の概念を強調するために図を歪曲したペテン師アーンスト・ヘッケル自身が、この“反復”に関する面白い局面であろう。ヘッケルの捏造物は、魚と人の胚細胞が互いに似ていることを示すためのものであった。捏造が見つかった際のヘッケルの言い訳は進化論者も同等の罪を犯しているというものだった。

> **この“捏造”の恥ずべき告白の後、私は非難され、落ちるところまで落ちたと思われるであろう。他の優れた生物学者を中心にした私と同じ罪をおかしている仲間がいなければ、私は自分を本当にひどいヤツだと思わねばならない。優れた生物のテキスト、専門書、雑誌にある全図の大部分は、その全てが不正確であり、多かれ少なかれ加工、図式化、構成されている点から“捏造”の罪では同罪である。**[171]

実際、偏った結論、こじつけ、場合によっては捏造をしている“世に信頼されている研究者や高く尊敬されている生物学者にも、私と同じ犯人が何百も”いる。これは、進化論者にとって、それを裏付ける科学的証拠が断片もないにも関わらず、進化論を擁護することが暗黙の了解になっているからである。

ヘッケルの改ざん図

加工された図　　正しい図

魚の胚と人間の“類似性”を見せるためにヘッケルが加工した図。彼のスケッチと実際の人間の胚を比べると実際にはある臓器を意図的に消しているのがわかる。(Francis Hitching, The Neck of the Giraffe: Where Darwin Went Wrong, p. 205)

第13章

進化論：物質的障害

本書でここまで説明してきた情報より、進化論には科学的根拠が一切なく、それどころか、進化論者の主張が科学的事実に対立することを述べた。言い換えれば、進化論を擁護し続ける力は科学ではない。進化論は、“科学者”によって支持されているが、それは彼らの仕事にも影響を及ぼす。

これが、唯物論的思想である。

唯物論的思想は、世界で最も古い概念の1つであり、その基本原則は物質の存在である。この概念によると、物質は最初から存在し、実在する全てのものは物質で構成されている。物質が最初から存在し、全てが物質で構成されているのであれば、それを創造した創造者は必要なく、ゆえに創造者の概念を否定する。従って、唯物論は、神を信仰する全ての宗教と長い間敵対していた。

では、唯物論者の考えが正しいのだろうか？この哲学が正しいものかどうか調べる手段の1つは、科学的方法を使いこの主張を調べることである。例えば、10世紀の哲学者は、月面に神の樹があり、全ての生命体はこの樹の枝に果物のようになり、地球に落ちてきたと主張できた。この哲学を魅力的だと感じ、信じた人もいるだろう。しかし、人類が月面歩行に成功した20世紀には、この考えを信じることはできない。神の樹が存在したかどうかは、観察と実験という科学的方法で検証できる。

我々は、科学的方法を用いて、物質が永遠に存在し、創造者を必要とせず自己を編成でき、生命を誕生させたと言う唯物論者の主張を検証できるのである。科学的検証を始める前に、宇宙が無から生まれたとするビッグバン論により、最初から物質があったとするこの概念は崩壊していると言える。そして物質が自身を編成し、生命を誕生させたという主張は、我々が“進化論”と呼ぶ本書で既にその間違いが証明されているものである。

しかし、自分の考えとして唯物論的思想を一番最初に受け入れた者はおかしな行動を取る。彼がまず唯物論者であり、次に科学者である場合、科学によって進化論が半鐘されても唯物論からは離れない。それどころか、何があっても進化論を支持することで、唯物論を支持し擁護するであろう。これは、今日も進化論者が進化論を擁護する窮地と全く同じである。

大変興味深いことに、彼らも時としてこの真実を認める。有名な遺伝子学者であり、率直に物事を語る進化論者でもあるハーバード大学のリチャード・C・レオンティン(Richard C. Lewontin)は、彼が“まずは唯物論者で次に科学者”であることを次のように述べている。

科学の方法や機関は、我々が原始地球の物質説明を無理やり受け入れなければならないとは言っていない。しかしどれほど直感に反していても、どれほど不可解であっても物質論は先天的に強制されているようなものである。更に、唯物論は絶対であり、ゆえに我々はDivine Foot(神の足跡)を受け入れることができない。[172]

ここでは、レオンティンが使った"先天的"という言葉が重要である。哲学の語彙は、実験や知識に基づかない前提を参考にする。考えは"先天的"であり、それが正しいと思いそれを受け入れたとき、それを立証する方法がなくとも成り立つ。進化論者レオンティンが率直に述べているように、唯物主義は、進化論者の"先天的"義務であり、その先入観に科学で挑戦するのである。唯物主義は創造者の存在を否定しなければならないため、その唯一の代替案である進化論を容認する。"先天的"に進化論を事実と受け入れた科学者にとって、進化論が科学的事実に反していることはどうでも良いのである。

この偏った考えが、進化論者を科学ばかりでなく良識にも反する"無意識の物質が自身を構成した"という概念へ導く。ニューヨーク大学の化学教授であり、DNA専門家でもあるロバート・シャピーロ(Robert Shapiro)は、この進化論者と唯物論者の信念の基本を次のように述べている。

最初の自己複製子へと自然化学を導くためには進化論の基本が必要だった。これはまだ詳細には実証されていないが、化学進化や物質の自己製造を想定している。アレキサンダー・オパーリン(Alexander Oparin)による種の起源で言われているように、進化論ではその根本として弁証法的唯物論の哲学が事実だと思われている。[173]

西洋のメディアや、有名で"高く評価されている"科学雑誌で常に見かける進化論の宣伝は、この思想的必然性の結果である。彼らの概念では進化が不可欠なものであるため、科学の標準として進化論の批判が許されない慣習となった。

科学者によっては、自分の名声を保つため、このこじつけの論理を擁護せざるを得ない立場にあること、または少なくとも、この論理に反するような発言は控えなければならないことをわかっている。西洋諸国の学者たちは、教授職を獲得したり保持したりするために、特定の科学雑誌に記事を書かなければならない。生物学に関係している全ての雑誌は進化論者の管理下にあり、反進化論的な記事は一切載せることが許されない。そのため、生物学者は、この論理の支配下で研究を行わなければならない。彼らもまた、進化論を思想的必然と考える体制の中にあり、そのため、本書内で検証してきた"不可能な偶然の一致"を盲目的に擁護するのである。

唯物論者の告白

ドイツの生物学者であり、有名な進化論者であるホイマー・フォン・ディトフルト(Hoimar von Ditfurth)が、この頑迷な唯物論者の理解の良い例である。ディトフルトは、生命の極めて複雑な組成の例を引用した後、これが偶然起こったのかどうかという疑問に対して彼は以下のように言っている。

現実的に、偶然だけの結果としてこのような調和は可能であろうか?これは生物的進化全体の基本的な疑問である。これに対して"可能です"と答えることは、現代科学への信仰心を確認するようなものである。きわどく言えば、現代科学を容認している人は、神の介入がない自然の法則を擁護しなければならず、"可能だ"と答える以外の道がない。つまり現時点では、自然の法則、偶然の一致を用いて全てを説明すること以外の道がないということである。偶然の一致以外には信じるべきものは何もなかったのだから。[174]

ディトフルトが述べたように、唯物論者の科学的アプローチは、その基本原則が、例えば創造などの"神の介入"を否定することである。この原則が認められれば、どんなに不可能な想定も簡単に認められるのである。進化論者の文献で、この独断的考え方の例を見つけるのは難しい。トルコの有名な進化論提唱者アリ・デミルソイ(Ali Demirsoy)教授がその1人である。前にも述べたように、デミルソイによると、生命体に必要不可欠なタンパク質シトクロムCが偶然の一致で形成された確率は"サルが人類の歴史を間違えなしにタイプライターを使って書くほど"である。[175]

この可能性を認めることは、進化論の基本原則や常識を否定することになる。もし、たった1つでも正しく書かれ

ダーウィニズムと唯物論

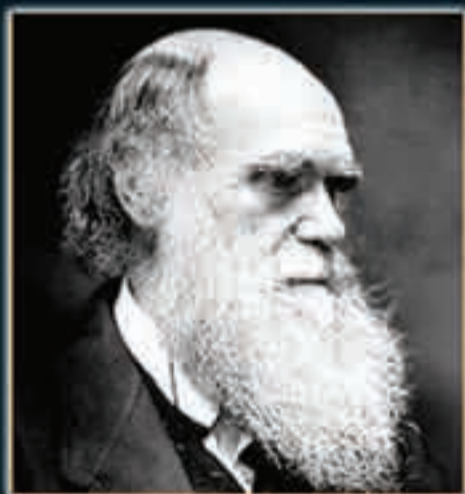
科学がダーウィンの進化論を論破したにも関わらず、進化論が今でも擁護されている理由は、進化論と唯物論の関係につきる。ダーウィンは、唯物論的哲学を自然科学に適応した。進化論信者であるマルクス主義者は、何があろうとも進化論を擁護している。

最近の進化論の一番の支持者である生物学者のダグラス・フツイマ(Douglas Futuyma)は「マルクスの唯物論の歴史にとってはダーウィンの進化論はなくてはならない基幹政策だ」と書いている。この発言からも、進化論を擁護することが彼らにとって重要なのは明らかである。[1]

もう一人の進化論支持者、古生物学者のステファン・J・グールド(Stephen J. Gould)は「ダーウィンは自然の解釈に唯物論の哲学を適応した」と述べている。[2] レーニン(Lenin)に並ぶロシアの共産革命家リオン・トロツキー(Leon Trotsky)は「ダーウィンの発見は、有機体の弁証において最高の勝利を収めた」と言っている。[3] しかし科学は、ダーウィニズムは唯物論に勝利をもたらさず、ただの哲学思想だということを証明している。

1– Douglas Futuyma, Evolutionary Biology, 2nd ed., Sunderland, MA: Sinauer, 1986, p. 3

2– Alan Woods and Ted Grant, ″Marxism and Darwinism″, Reason in Revolt: Marxism and Modern Science, London, 1993

3– Alan Woods and Ted Grant. ″Marxism and Darwinism″, London, 1993

ダーウィン

マルクス

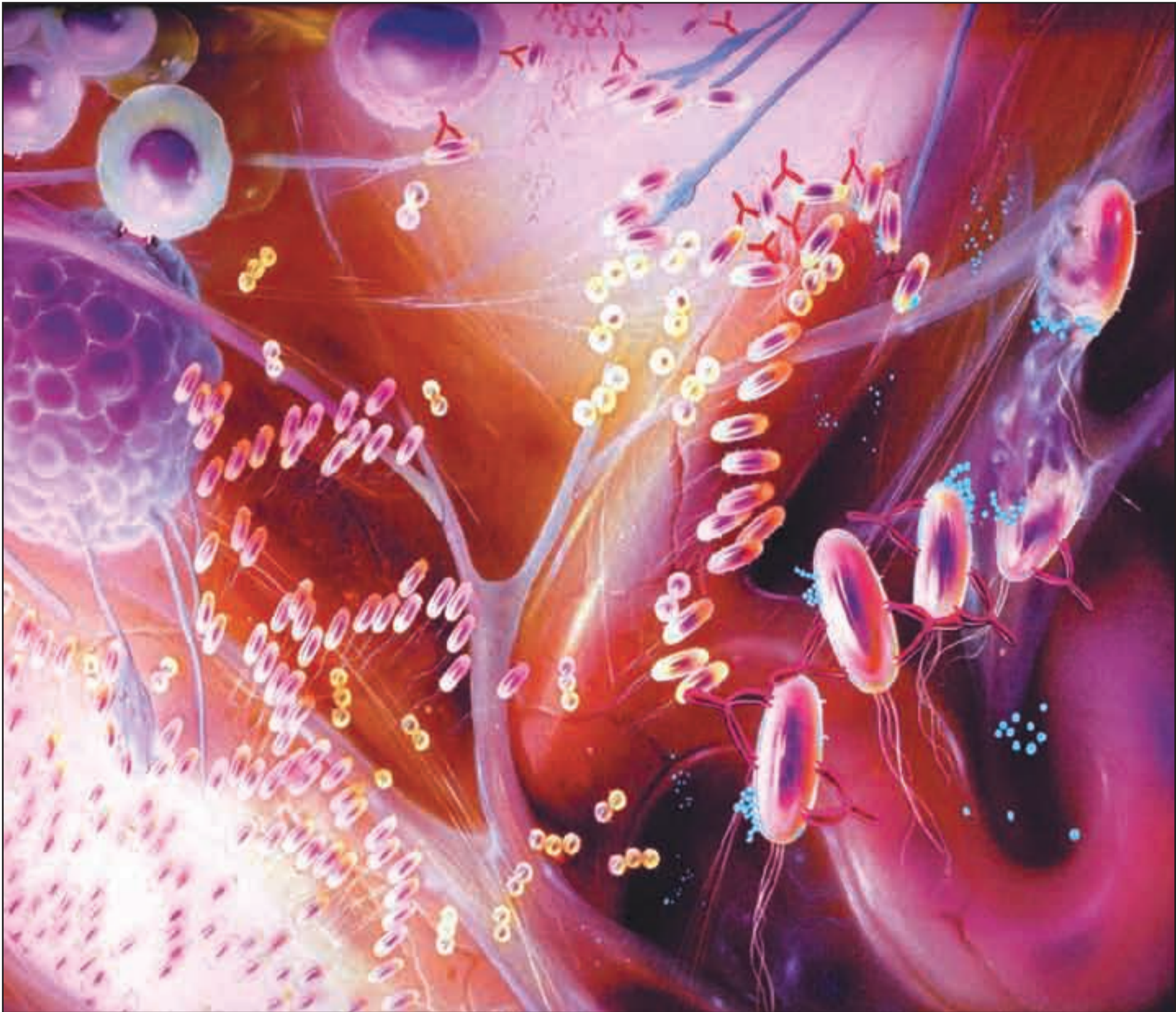
トロツキー

た文字があった場合、それは人間が書いたことを意味し、世界の歴史の本を見る時、それはどこかの著者によって書かれたと誰もが理解できる。論理的な人間なら誰でも、そのような厚い本が“偶然の一致”でできたとは思わないだろう。

しかし、“進化論者科学者”のアリ・デミルソイ教授が、このような不合理な定義を認めているのは面白い。

本質的に、シトクロムC配列の形成の可能性はゼロに近い。つまり、生命体が特定の配列を必要とする場合、それはたぶん宇宙全体で実現されたと言えるだろう。そうでなければ、我々の理解を超えた霊的力がこれを形成したのであろう。後者を認めることは、科学にとって適切ではない。従って、我々は最初の説を研究するのである。[176]

デミルソイは、“神の介入を認めない”、つまり創造者の存在を認めないためなら、不可能を信じるほうが良いと言っている。このアプローチが科学と何ら関係ないことは明白である。当然のことながら、デミルソイがもう1つのテーマ、細胞内のミトコンドリアの起源を引き合いに出した際、彼はそれが“非常に科学的考えに反して”いても、偶然の一致を支持している。

問題の核心は、たった1つの個体が偶然の一致で得る可能性が非常に低く、不可解であるこの特性を、ミトコンドリアがいかに得たかである。呼吸を提供し、各ステップで触媒機能を果たす酵素は、さまざまな形をしており、これが作用

の中心となっている。細胞にはこの完全な酵素配列が含まれており、それでなければ意味がない。ここで、生物学の見解に反さず、以上の独断的な説明や推測を避けるために、不本意ではあるが、我々は細胞内には、呼吸酵素が細胞が最初に酸素に触れる前に存在していたと認めなければならない。[177]

このような表明から言える結論は、進化論が、科学的研究を通して到達されたものでないということだ。それどころか、進化論の形成と物質は、唯物論的哲学の必要性から決定付けられた。その後、具体的な科学的事実のないまま信念や定説となった。もう一度言うが、進化論者の文献に対する努力が"目的"を持っていることは明確である。その目的は、いかなる対価を払っても、生命体が創造されたものだという信仰を邪魔することである。

進化論者は、この目的が"科学的"だという。しかし、実際はそれは科学ではなく唯物論的思想である。唯物論は、物質を"超える"いかなるもの(または超自然)も否定する。科学には、そのような定説を受け入れる義務はない。科学とは、自然を探り、1つの発見から結論を出すことである。これらの発見が"創造された"という結論にたどり着いた場合、科学はそれを受け入れなければならない。真の科学の義務はそれであり、時代遅れな19世紀の唯物論定説にまとわりついて不可能な想定を擁護することではない。

唯物論の科学的消滅

進化論の哲学的論拠が続く中、19世紀の唯物論は、宇宙は無限に存在し、誰かに創造されたものではなく、よって生命体は物質の相互作用で説明できるとした。しかし、200世紀科学の発見は、この仮説を完全に論破した。

宇宙は無限に存在したという提唱は、150億年前に(“ビッグバン”と呼ばれる)巨大な爆発によって宇宙が誕生したと発見されたことによって論破された。ビッグバンは、宇宙の全ての物質は無からはじまったとする。つまり、宇宙は創造されたわけである。著名な唯物論擁護者、無神論者である哲学者アンソニー・フリュー(Anthony Flew)は、次のように認めている。

当たり前のことだが、懺悔は魂を癒す。だから私はここに無神論が現代の宇宙論的総意(ビッグバン)に論破されたことを告白しよう。宇宙学者は、宇宙にはじまりがあったという科学的証拠を持っているのだから。[1]

ビッグバンは、宇宙が各段階で意識的な力に管理されていたことも示している。自然に起こった爆発から生まれたとは考えられない完璧な段階が。有名な物理学者ポール・デイビス(Paul Davies)はこの件に関して次のように述べている。

ほんの小さな事まで非常に繊細にできている現在の宇宙の構造は、緻密に計算されて作られたものとしか思えない。自然が基礎定数に割り当てられるという数値の一致の奇跡は、宇宙設計の要素が創造されたという証拠に他ならない。[2]

この現実はアメリカの天文学教授ジョージ・グリーンステイン(George Greenstein)にも以下のような発言をさせている。

全ての証拠を調査したら、超自然が関わっていたとしか考えられない結果を得た。[3]

従って、生命体は物質の相互作用によって自己発生できるという唯物論の仮説は、科学の発見の前に論破された。特に、遺伝子情報の起源は、いかなる生命体も物質のみの作用では発生しえないという結果を得ている。進化論擁護者の一人であるジョージ・C・ウィリアムズ(George C. Williams)は、1995年の記事で次のように認めている。

進化論を信じる生物学者は、遺伝子が情報であり物質ではないという通常の物質の基準では計れないものだと気付いていない。物質と情報という2つの存在は、異なるものとして論議・検証されなければならない。[4]

これは、万能の神が遺伝子情報を創造したという証拠に他ならない。物質は、自身の中に情報を生成することはできない。ドイツのFederal Institute of Physics and Technologyの理事長ワーナー・ギット(Werner Gitt)は、次のように述べている。

全ての実験から、遺伝子の生成には偉大なる力が必要だったとわかる。物質が自分で情報を生み出すと証明した自然の法則は存在しない。[5]

こうした科学的事実は全て、無限の力と知識を持つ神が宇宙と生命体を創造したことを証明する。唯物論に関しては、著名な哲学者アーサー・ケストラー(Arthur Koestler)が「これ以上科学的哲学とは呼べない」と言っている。[6]

1- Henry Margenau, Roy A. Vargesse, Cosmos, Bios, Theos, La Salle IL: Open Court Publishing, 1992, p. 241

2- Paul Davies, God and the New Physics, New York: Simon & Schuster, 1983, p. 189

3- Hugh Ross, The Creator and the Cosmos, Colorado Springs, CO: Nav-Press, 1993, pp. 114-15

4- George C. Williams, The Third Culture: Beyond the Scientific Revolution, New York, Simon & Schuster, 1995, pp. 42-43

5- Werner Gitt, In the Beginning Was Information, CLV, Bielefeld, Germany, pp. 107, 141

6- Arthur Koestler, Janus: A Summing Up, New York, Vintage Books, 1978, p. 250

第14章

進化論の酸素:メディア

これまでの調査で検証されたように、進化論には何の科学的根拠もない。しかし、世界中のほぼ全ての人間は、その事実を知らず、進化論が科学的事実のもとに成り立っていると信じている。この幻想の一番の理由は、進化論に対してメディアが行っている計画的な教化と宣伝である。ここでは、こうした教化と宣伝の特長について話そう。

西洋諸国のメディアを慎重に見ていると、高い頻度で進化論を詳説するニュースに出くわす。このリーダー的組織である"有名で社会的地位のある"雑誌は、定期的にこの題材を持ち出す。ここであるアプローチが研究されると、人は議論の余地なしに、この論理が完全に証明されている真実だという印象を受ける。

これらのニュースを読む一般の人々は、自然に、進化論が数学の法則のように確かな事実だと考える。有名なメディアにこうしたニュースが掲載されると、これらは地元のマスコミでも取り上げられる。"雑誌『Time』によると、進化論の失われた環を埋める新しい化石が発見された"とか"『Nature』が進化論の最終問題に光を"などの見出しを大きく印刷する。実際は、何を証明したわけではないので、"進化の最後の失われた環"の発見は何も意味しないのだが。これまでに説明したように、証拠として提供されるものは全て誤りである。こうしたメディアに加え、科学の資料、百科事典、生物の本でも同じことが行われている。

要するに、非宗教的で、権力がものをいうメディアも学会も、進化論者の観点を完全に支持し、それを社会に押し付けている。この押し付けは、進化論を絶対に否定されない概念に変えるほど効果的であった。進化論は証明されていないという基本事実を無視し、進化論の否定は科学に矛盾するとされた。このため、(特に1950年代以降)進化論の多くの不備が証明され、それを進化論科学者自身が認めたにも関わらず、今日も学会やメディアで進化論の批判を見つけることができない理由である。

生物や科学の分野で"評判の良い"雑誌として西洋諸国で幅広く受け入れられている『Scientific American』、『Nature』、『Focus』、『Discover』、『Science』、および『National Geographic』などは、進化論を公式な思想として採用し、それが証明された事実であるかのように提示し続けるのである。

進化論者のプロパガンダ

有名な科学雑誌は、進化論プロパガンダのリーダーであり、大衆が進化論を受け入れるよう宣伝する重要な役割を果たしている。

進化論者の“おとぎ話のクジラ”

進化論の寓話の1つに世界で一番科学的で本格的な出版物の1つである『National Geographic』で取り上げられた“クジラの進化”の話が挙げられる。

最大の哺乳類であるクジラは、6千万年前に毛で覆われた四肢歩行をする哺乳類が食物や避難所を求めて海に入ったことに始まる。長い年月を経て、少しずつ変化が起こっていった。後足がなくなり、前足はひれとなり、毛は体脂肪となり、鼻孔が頭の上に移動し、尻尾が尾びれになり、浮力のある水中で体が巨大化していった。[1]

この話には科学的証拠は1つもなく、自然の原理にも反している。『National Geographic』に掲載されたこの寓話は、一見本格的に見える進化論擁護出版物が誤った推論を掲載することが明らかである注目すべき事実である。

1- Victor B. Scheffer, "Exploring the Lives of Whales", National Geographic, vol. 50, December 1976, p. 752

まとめられた嘘

進化論者は、メディアの"洗脳"プログラムを非常に有効に使っている。多くの人は、無条件で進化論を信じているため、"どうやって"や"なぜ"という疑問すら持たない。これが、進化論者が、進化論を説得力のあるものにするために、その嘘を丸め込むのにとても役立っている。

例えば、一番"科学的"な進化論者の本でも、最も説明のついていない進化論の現象である"水から陸への移行"が信じられないほど容易に"説明"されている。進化論によると、生命体は水中で生まれ、最初に出現した動物は魚類である。進化論では、魚類が何らかの理由で(たいていの場合、干ばつが理由だとされている)陸上に放り出され、陸上で住むことになった魚類が、ヒレの代わりに脚を、エラの代わりに肺を得たとされている。

しかし、たいていの進化論者の本には、これが"どうやって"行われたのか書かれていない。最も"科学的"な資料でも、この主張の不合理は"水から陸への移行が成された"などという文章でごまかされている。

この"移行"はどのように達成されたのか？水から出た魚が数分間しか生きられないことは誰でも知っている。主張されているような干ばつが起こり、魚が陸に上がったとしても、魚はどうなっただろうか？答えは明白である。陸上にあがった全ての魚は数分間以内に死んでしまった。これが何千万年繰り返されたとしても答えは変わらない。なぜなら、完全な肺などの複雑な器官は、突然"偶然"発生することはなく、つまり、突然変異で使い物にならない半肺ができても意味が無い。

しかし、これが進化論者の主張である。"水中から陸上への移行"や"陸上から空中への移行"、およびその他主張されている飛躍は、こうした非論理的な表現で"説明"されている。そして、目や耳などの非常に複雑な器官の形成に関しては、進化論者は口を閉ざす。

世間一般の人に対する"科学"の案の影響は大きい。水中から陸上への移行の架空の図を描き、水中の動物、陸上生物の"子孫"、"移行中間体"(想像上の生物である)、にラテン語の名前を付け、そして"まず、EusthenopteronがRhipitistian Crossoptergianとなり、その後長い進化過程を経てIchthyostegaとなった"という精巧な嘘を作り出す。分厚い眼鏡に白衣を着た科学者がこれを言ったら、進化論を支持することに献身的なメディアが情熱をもってそれを発表し、多くの人がそれに納得するであろう。

第15章

結論：進化論は詐欺である

その他にも、進化論を無効にする色々な証拠、科学の法則があるが、この本では全てを紹介することはできなかった。しかし、本書で紹介した例だけでも重要な真実を明かしている。科学の装いに隠されているが、進化論は唯物論的思考の利益のためのみに擁護されている、科学ではなく洗脳、宣伝、ペテンの上にのみ成り立っている詐欺以外のなにものでもない。

これまでに説明したことを以下にまとめる。

進化論は崩壊している

進化論は、第一歩から失敗している論理である。なぜならば、進化論者はたった1つのタンパク質の形成すら説明できず、確率の法則も物理や化学の法則も生命体が偶然形成されたことを支持できない。

偶然形成されたタンパク質がたった1つも存在しないのに、何百万ものタンパク質が生命体の細胞を産生するよう組み合わさり、何十億もの細胞が偶然集まり生命体を形成し、それが魚類からは虫類や鳥類に変化し、ゆえに現在地球上に何百万種の生命体が存在するという説明が、論理的、または筋が通っているように聞こえるだろうか？

これがいくら論理的に見えなくても、科学者はこの寓話を信じているのだから恐ろしい。

しかし、これを立証する証拠は1つも無く、これは単なる信仰、しかも間違った信仰でしかない。半魚・半爬虫類、または半爬虫類・半魚の移行型は1つも発見されたことがない。タンパク質やそれを構成するアミノ酸分子ですら、彼らの言う原始地球環境下で、それどころか精巧な機器を揃えた実験室ですら作り出すことに成功していない。それどころか、彼らの全努力をもって、進化論者は、地球上で今までに進化の過程が一度も起こっていないことを証明した。

進化論は今後も証明されることはない

進化論者は、将来的には科学がこれらのジレンマを解決してくれると自分たちを慰めている。しかし、その科学が、何年かすれば完全に事実無根で思想的なこの主張を解決してくれると思うことが論外である。それどころか、科学が進化すればするほど、進化論者の主張がたわごとであることがより明確になる。

今までもそうだったように。生細胞の構造や機能がより詳細にわかればわかるほど、それがダーウィンの時代の原始生物学で考えられていたようなシンプルで不規則に形成されているものではないことが明確になった。

こうした状況が証明があるのに、創造の事実を拒否し、生命の起源は非常にまれな偶然の一致と信じ、これらを後から屈辱のネタにされる例を挙げて擁護する。進化論の実質がより明白になり、世間が真実に近づこうとすると、進化論の盲目的な支持者は、恥ずかしくて世の中を歩けなくなるだろう。

進化論の一番の障害物：心

世の中には、互いに似通っている種がたくさんある。そしてウマやネコと共通点を持つ生物や、お互いに似ている昆虫などの共通点には誰も驚かない。

そして人類と猿人の外見上の共通点は、なぜか人々の興味を引き、この興味が、時に人々を謝った論理を信じさせるまでになる。実を言うと、人類と猿人の外見の類似性は何も意味しない。カブトムシとサイも外見に類似性があるが、昆虫と哺乳類のこの2種間に共通性を理由に進化のつながりがあると考えることが馬鹿げているのと同じぐらいに。

外見的類似性以外で、猿人は他の動物よりも人類に近かったとはいえない。実際、知能のレベルで考えた場合、奇跡のような幾何学的構造の巣を作るミツバチやクモのほうが人間に近いと言える。見方によっては、彼らのほうが優れている。

単なる外見の類似性に関わらず、人類と猿人には大きな違いがある。猿人はウマやイヌと同じ意識レベルを持つ動物である。しかし人類には知覚があり、ものを考え、話し、理解し、決定し、判断する能力を持つ。これは、人類のみが持つ心の機能である。この心は、人類とその他の生物の大きなギャップとなる重要な違いであり、いかなる身体的類似性も人類とその他の生物のこのギャップを埋めることはできない。自然界で心を持つ生き物は人間だけである。

神の神の意思による創造

進化論者のシナリオが実際に起こったのかどうかは大事だろうか？はっきり言って、こんなことは全く大事ではない。なぜならば、進化論の言う進化の過程で繰り返された偶然の一致は、奇跡の結果でしかないからである。もし生命がこうした偶然の繰り返しで起こったとしても、それは意図的な思いがあってのみ可能であった。これらが偶然起こったとは信じ難いだけではなく不可能だった。

タンパク分子が原子大気環境下で形成されたというが、確率の法則、生物や化学の法則ですら、これが偶然起こることはないと証明している。しかし、例え産生されたと仮定しても、それは創造者の意思にて起こったという以外ない。進化論者が提唱する全ての家庭にこの論理は当てはまる。例えば、水中の魚類が陸上生物になったという古生物学的、物質的、生物学的証拠、または正当論理は1つもない。しかし、仮に魚類が陸上に上がり、爬虫類になったとしても、この主張をする者は、自身の意志によって何でも作り出すことのできた創造者の存在を認める必要がある。このような奇跡の他のいかなる説明も、本質的に自己矛盾しており、根拠の原則を犯している。

事実は明白である。全ての生命は、完全に設計された優れた創造の結果である。これが、無限の力、知識、知性を持った創造者の存在の具体的な証拠である。

創造者とは神——天地の王である。

進化論の崩壊創造の真実

最近活発である進化論プロパガンダは、モラルの観点から考えても非常に危険である。この事実を認識している科学研究財団はその告知義務を遂行し、トルコでこの問題の科学的事実を公表した。

第一回会議 – イスタンブール

科学研究財団が開催した"進化論の崩壊と創造の真実"と題された最初の国際会議は、1998年4月4日にイスタンブールで行われた。有名な専門家が世界中から集まって行ったその会議は大成功を収め、はじめて進化論の主張に疑問が投げかけられた。あらゆる分野のトルコ人専門家が会議に出席し注目を集めた。会議にはTVシステムで参加した者もいた。

会議にはトルコそして世界中から著名な人々が参加した。進化論のイデオロギー的動機の裏側を暴露した科学研究財団メンバーのスピーチ後、科学研究財団が作成したビデオ映像が流された。

アメリカのInstitute for Creation Researchの世界的に有名な科学者デュアン・ギッシュ(Duane Gish)博士とケニス・カミング(Kenneth Cumming)博士は、生物化学と古生物学の権威である。二人は、進化論が無効であると実質的に検証証明した。会議中、今日の科学界で高く評価されているトルコの科学者セバット・バブナ(Cevat Babuna)博士が、進化論の"偶然仮説"を震撼させた人間形成の各段階の奇跡をスライドショーで見せた。

デュアン・ギッシュ(DUANE GISH)教授：

「化石記録は進化論を論破し、種が地球上に完全設計された状態で現れたことを証明している。これは神の創造の確固たる証拠である」

トルコ議会員ネブザット・ヤルシンタスから科学研究財団の盾を受け取る著名な進化研究かデュアン・ギッシュ

第二回会議 – イスタンブール

第二回国際会議は3ヵ月後の1998年7月5日にイスタンブールのジェマル・レシット・レイのカンファレンスホールで開催された。6人のアメリカ人と1人のトルコ人発表者が、ダーウィニズムが現代科学にてどのように打ちのめされたのかを検証した。1,000人収容可能なジェマル・レシット・レイのカンファレンスホールは聴衆で溢れかえっていた。

発表者と発表の概要は以下の通りである。

マイケル・P・ジルアード(Michael P. Girouard)教授：「生命体は偶然発生しうるのか？」のタイトルのスピーチで、サザンルイジアナ大学の生物の教授であるマイケル・ジルアードは、生命体の基本構成単位であるタンパク質の複雑さをさまざまな例をもって説明し、これは意識的に設計されたものとしか考えられないと結論付けた。

エドワード・ブードロー(Edward Boudreaux)博士：「化学の設計」というタイトルのスピーチで、ニューオリンズ大学の化学の教授エドワード・ブードローは、生命体が発生するためには、いくつかの化学要素が意図的にアレンジなければならなかったとまとめた。

カール・フライヤーマンズ(Carl Fliermans)教授：アメリカ国防省が支援する「バクテリアで化学廃棄物を中和する」研究の第一人者で、アメリカで幅広く知られているインディアナ大学の微生物学の教授カール・フライヤーマンズは、微生物学の観点から進化論の主張を否定した。

エディップ・ケハ(Edip Keha)教授：生化学の教授エディップ・ケハは、今回たった一人のトルコ人発表者だった。細胞の基本情報を説明し、それは完全創造の結果の証明であると強調した。

デビッド・メントン(David Menton)教授：ワシントン大学の解剖学の教授デビッド・メントンは、コンピュータを使った非常に興味深いスピーチを行い、鳥の羽の解剖と爬虫類のウロコの解剖を比較し、鳥が爬虫類から進化したという仮説が間違っていることを証明した。

デュアン・ギッシュ(Duane Gish)教授：進化論に詳しいデュアン・ギッシュは、「人間の起源」というスピーチで猿人から人間へ進化したという仮説を否定した。

ICR会長ジョン・モリス(John Morris)教授：Institute for Creation Researchの会長であり有名な地質学者でもあるジョン・モリスは、進化論の背後にあるイデオロギー的および哲学的誓約に関してスピーチを行った。そして、進化論は定説になっており、擁護者はダーウィニズムを宗教的に信じていると説明した。

こうした発表者の話を聞き、観衆は進化論がさまざまな側面から科学に反している狂信的な信仰だということを知った。また、科学研究財団が企画した"The Collapse of the Theory of Evolution: The Fact of Creation"というポスター展示会では、ロビーに進化論の主張と神の創造を比較表示した35種類のポスターが展示し、人々の興味を集めていた。

エドワード・ブードロー(Edward Boudreaux)教授：

「我々が住む世界と自然の法則は、人間に有利なように創造者によって精密に設計された

デビッド・メントン(David Menton)教授：

「私は生命体の解剖学的特長を30年以上研究してきた。そこにいつも私が見たものは、神の創造の証拠であった」

カール・フライヤーマンズ(Carl Fliermans)教授：

「現代の生物化学は、有機体が見事に設計されていることを証明し、これだけでも創造者の存在を証明するのに十分である」

第三回会議 – アンカラ

第三回国際会議は1998年7月12日にアンカラのシェラトンホテルで開催された。アメリカ人3人とトルコ人1人の発表者が、現代科学が進化論をどのように論破するのか説明した。

アンカラのシェラトンホテルは1,000人程度の観衆を収容できるが、実際の参加者は2,500人を超えた。カンファレンスルームに入れなかった人たちのために、部屋の外にもスクリーンが設置された。カンファレンスルームの隣の部屋では"The Collapse of the Theory of Evolution: The Fact of Creation"というポスター展示会が開催され、人々の興味を集めていた。カンファレンスの最後には、発表者全員がスタンディングオベーションを受け、今までにメディアがどれほど科学的事実を曲げて進化論を擁護し、神の創造を否定してきたかが証明された。

こうした国際会議の成功を経て、科学研究財団はトルコ中で同様の会議を開催しはじめた。1998年8月から2005年の終わりまでに、トルコの72都市、150地区で、実に2,800回もの会議が行われた。科学研究財団は、トルコ国外にも活動を広げ、イギリス、オランダ、ブルネイ、インドネシア、シンガポール、アゼルバイジャン、オーストラリア、アメリカ、カナダなどさまざまな国で会議が開催されている。

第16章

創造の真実

本書前章では、生命が創造されたものではないとする進化論が、科学的事実に完全に反した誤りであると検証した。古生物学、生化学、解剖学などの科学分野を通し、現代科学は、全生命体は神の創造物であるという明確な事実を明らかにした。

実際、この事実を提示するには、生化学研究所や地質学的掘削から得られた複雑な結果に訴える必要はない。並外れた天の知恵は、どのような生命体にも見ることができる。昆虫や人間が到達したことのない深い海に住む小さな魚の体内にも、卓越した技術と設計が備わっており、また、生物によっては、脳を持たずして人間にすら達成できない複雑な作業を完璧にやり遂げる。

自然界に普及するこうした知恵、設計、そして仕組みは、究極の創造者の存在の確固たる証拠である。神が、全生命体をそれぞれ並外れた特徴で飾り、その存在と力の証拠を人類に残したのである。

数ある神の創造の証拠のうち、いくつかをこれから検証しよう。

建築学的観点から見たハチの巣の不思議

ハチは、自分たちが消費する以上の蜂蜜を生産し、蜂の巣に保存する。その巣が六角形の構造になっていることは誰もが知っている。ではなぜこれが八角形でも五角形でもなく、六角形なのかを、何人の人が知っているだろうか？

この答えを探していた数学者は、“六角形は、領域を最大限に活用するのに一番適した形である”という面白い結論に達した。

ハチの巣の六角形の個室は、作るのに最小量のワックスを必要とする一方で、最大量の蜂蜜を保存しておくことができる。つまり、ハチは、一番適切な形を使っているのである。

ハチの巣を作るのに使われている方法がまたすごい。まず、巣箱の2～3箇所から建築をはじ

め、同時に2〜3列の巣を作り始める。大量のハチは、全く同じ六角形を作り続け、全く異なる場所から作り始めるにも関わらず、最後に巣箱の真ん中でこれらの巣を組み合わせる。その接合点は、後から組み立てられたものだとはわからないほど精巧である。

この驚くべき行動を目の当たりにした我々は、こうした生物を創り出した神の存在をはっきりと認めなければならない。進化論者は、これを"本能"という言葉で片付け、単なるハチの特性だという。しかし、これが本能が成す作業だとしたら、お互いに協調し合いながら作業させるというその本能を、天の知恵が、この小さな生き物に与えたからである。

更に明確に言うと、この小さな生物の創造主である神が、彼らに何をすべきかを"吹き込んだ"という事実が、14世紀も前にコーランで明かされている。

またあなたの主は、蜜蜂に啓示した。「丘や樹木の上に作った屋根の中に巣を営み、(地上の)各種の果実を吸い、あなたの主の道に、障碍なく(従順に)働きなさい」それらは、腹の中から種々異った色合いの飲料を出し、それには人間をいやすものがある。本当にこの中には、反省する者への一つの印がある。(アン・ナフル章68〜69節)

驚くべき建築家:シロアリ

シロアリが地下に作った巣を見て驚かない人はいないだろう。シロアリの巣は、高さ5〜6メートルにもなる建築的驚異であり、太陽に当たることができないというシロアリの特性に応じた高性能システムになっている。巣の中には、換気システム、用水路、幼虫の部屋、通路、特別な菌の生産畑、非常口、暑い日・寒い日用の部屋など、手短に言えば全てが揃っている。更に驚くべきことに、この驚異的な構造の巣を作るシロアリは目が見えない。[178]

目が見えないにも関らず、シロアリは、自分たちの300倍もある建築プロジェクトを成功させるのである。

シロアリには他にも驚くべき特長がある。建築途中の巣を半分に分け、しばらくしてから再結合すると、通路、水路、道路などは全て寸分の狂いもなく交わる。シロアリは、まるで巣が分離されたことがないかのように巣を作り続けるのである。

キツツキ

キツツキが樹の幹をつついて巣を作ることは誰でも知っている。それだけ強くコツコツとたたき続けるのに、どうしてキツツキは脳内出血を起こさないのだろうか？キツツキがやっているのは、人間が頭で壁に釘を打ち付けるのと同じことであり、もし人がそれを試みた場合、脳震盪を起こし、脳内出血を起こすだろう。しかし、キツツキは、2.10〜2.69秒の間に、38〜43回も木をつつくが何も起こらない。

これは、キツツキの頭にある特別な構造による。キツツキの頭蓋骨には、打撃の力を減少・吸収する"緩衝"システムがある。頭蓋骨の骨の間に特別な緩衝組織があるのである。[179]

コウモリのソナーシステム

コウモリには面白いナビゲーションシステムが備わっており、真っ暗闇でも問題なく飛べる。"ソーナー"システムと呼ばれているそのシステムは、超音波を発し、その反響を検知することで、回りの障害物の形や大きさを判断する。

人間は、1秒間に2万回の振動数を検知するのがやっとであるが、"ソーナーシステム"を持ったコウモリは、1秒間に5万〜20万回の音振動を検知できる。コウモリは、毎秒20〜30回の超音波をあらゆる方向に発信し、その音の反響により、飛行先にある障害物を感知できるだけでなく、獲物である昆虫等を見つけたりすることができる。[180]

クジラ

哺乳類は、一定の間隔で呼吸しなければならず、そのため、水中生活には向いていない。しかし、海の哺乳類であるクジラは、陸上で生活する哺乳類よりも遥かに効率的な呼吸システムを持ち、水中での生活を問題としない。クジラは、一度に

肺内の90％もの空気を入れ換えるため(人間は通常10～15％)、一度の呼吸で長時間潜っていることができる。また、クジラは、筋肉に酸素を貯蔵する助けをする“ミオグロビン”と呼ばれる高濃度物質を持っている。こうしたシステムのおかげで、例えばナガスクジラは、500メートルの水深を呼吸せずに40分間泳ぐことができる。[181]また、クジラの鼻孔は、陸上生物とは違って背中についており、海面での呼吸が簡単にできるようになっている。

ブヨの構造

ブヨは空を飛ぶ昆虫であるが、実際は、発育段階は水中で過ごし、特殊な“設計変更”を経て地上に出る。

まずブヨは、獲物を感知する特別なシステムを持っている。そのシステムは、熱、ガス、湿気、そして臭気を検知する機械を装備した戦闘機に似ており、“熱による形態の把握”機能も備えているため、真っ暗闇でも獲物を見つけることができる。

ブヨの“吸血”テクニックは、非常に複雑で、6つの刃の付いた切断システムを使い、のこぎりのように肌を切る。切断している間、切断部にかけられる分泌物が細胞に麻酔をかけるため、人はブヨに刺されたことに気付かない。また、この分泌物は、血液の凝固を防ぎ、ブヨが血を吸い続けることができるようにする。

この機能のどれか1つでも欠けていたら、ブヨは血を吸うことができず、存続していけない。この小さな生物に存在するこのような特別な構造は、神の存在の証拠であり、コーランでは、ブヨは神の存在の例として挙げられている。

本当にアッラーは、蚊または更に小さいものをも、比喩に挙げることを厭われない。信仰する者はそれが主から下された真理であることを知る。だが不信心者は、「アッラーは、この比喩で一体何を御望みだろう」と言う。かれは、このように多くの者を迷うに任せ、また多くの者を(正しい道に)導かれる。かれは、主の掟に背く者の外は、(誰も)迷わさない。(アル・バカラ章26節)

優れた視力を持つ猛禽類

猛禽類は、優れた視覚を持ち、獲物までの距離を完璧に把握することができる。これは、その大きな目にたくさんの視覚細胞が備わっているためで、猛禽類の目には、百万個以上の視覚細胞がある。

上空千メートルを飛んでいるワシは、その距離から地上のものをはっきりと見ることができる。戦闘機が何千メートルも先から敵を見つけるように、地上のわずかな色の動きを感知することでワシも獲物を見つける。ワシの目は、360度の視野があり、イメージを6～8倍にまで拡大できる。上空4,500メートルを飛行している時は、3万エーカー内のもの全てを見ることができる。上空1,500メートルから、草むらに隠れているウサギを探すことなど朝飯前。これは、この目がワシのために特別に創られたという証拠である。

冬眠する動物

冬眠する動物は、体温が外気と同じぐらいの非常に低い温度になっても生きていることができる。なぜだろう？

哺乳類は温血動物である。つまり、通常は、体内のサーモスタットにより体温が一定に保たれている。しかし、冬眠中、通常40度ほどの体温であるリスなどの小動物の体温は、何かのスイッチで調整したかのように、氷点のあたりまで下がる。代謝もとても下がり、呼吸は遅くなり、通常1分間に300回ほどの心拍が、7～10回にまで落ちる。反射神経は活動しなくなり、脳内の電気的活動は、ほぼ検知できなくなる。

静止状態で危険なことの1つは、細胞組織が凍ってしまい、破壊されてしまうことであるが、冬眠動物は、この危険から身を守る特別な機能を持っている。冬眠動物の体液は、高い分子量を持つ化学物質によって留保されるため、氷点自体が下がり、危険から守られるのである。[182]

電気魚

ウナギや電気エイなど、ある種の魚類は、敵から身を守ったり、獲物をしびれさせたりするのに、体内に発生する電気を利用する。人間も含め、全ての生物は体内にある程度の電気を持っている。しかし、人間は、この電気を自分でコントロールし、何かに使うことはできない。一方で、電気ウナギなどは、その体内にある500～600ボルトもの電気を、自身はその電気から何の影響も受けずに敵などに対して使うことができる。

保身や捕獲のために使った電気は、電池を充電するように一定の時間がたつと充電され、再び使用できる。魚は、保身のためだけに高電圧の電気を使うわけではなく、深く暗い水中で道を見つける手段や物体を見ることなく存在を感知する手段としても利用する。体内の電気を使用し信号を送ることで、送られた電気が何かの物体にぶつかると反響し、魚に物体の存在を伝えるのである。この方法で、魚は物体のサイズとその距離を知ることができる。[183]

クモの糸

メダマグモは、狩りに適した頭蓋骨を持つ。クモの巣を張り獲物を待つのではなく、特殊な小さな巣を編み、敵に投げつける。そして捕まえた獲物をその巣でグルグル巻きにする。捕まった獲物は成す術がない。巣は非常に良くできており、獲物はもがけばもがくほど捕られてしまう。捕まえた獲物の保存は、サランラップで巻くように獲物を巣でパックして行う。

このクモは、どうやってこの機能性と化学構造を持った巣を作るのだろうか？進化論者が主張するように偶然この能力を得ることは不可能である。クモには学習能力や記憶能力はなく、それどころかこうした動作を司る脳さえない。ゆえに万能の力を持つ神がクモにこの能力を与えたことは明らかである。

クモの糸には重要な奇跡が隠されている。1,000分の1ミリ以下の直径であるこの糸は、同じ太さのスチール線の5倍の強度を持つ。その上、この糸は非常に軽い。世界一周するために必要な糸の重さはたった320グラムである。*工業製品に良く使われるスチールは、人間が作った物質でも強度が強いほうである。しかし、クモはこのスチールよりも遥かに頑丈な糸を体内で製造することが可能だ。人間が何世紀も前からの知識と技術を集結してスチールを生産するが、クモは一体何を使って糸と作るのだろうか？

クモの前には、人間の技術は本当にちっぽけなものである。

(*) "The Structure and Properties of Spider Silk", Endeavour, January 1986, vol. 10, pp.37-43

動物の賢い仕組み：カモフラージュ

動物が、種の存続のために取得した1つの特長に"カモフラージュ"と呼ばれる自身を隠す手段がある。

動物にとって、狩猟と保身の2つの理由から身を隠すことが必要である。カモフラージュは、最高の知能、技術、美学、そして調和であり、他のいかなる手段とも異なる。

動物のカモフラージュ機能は実に素晴らしく、木の幹や葉っぱの下に隠れている昆虫や動物を見つけるのはほとんど不可能である。

植物の液を吸う葉シラミは、木の茎にトゲに成りすまし、鳥やその他の敵がその木に近寄らないようにする。

枝に隠れたトカゲ(左上)、木の幹に隠れたガ(右上)、枝に止まっているフクロウ(左下)、葉と区別のつかないカマキリ(右下)

イカ

イカの皮の下には、色素胞と呼ばれる伸縮する色素嚢の層がある。嚢は通常、黄色、赤、黒、茶色である。信号を受け取ると、それを大きくしたり小さくしたりして体色を変化させる。これにより、イカは完全にカモフラージュできるのである。

この機能は非常に優れており、イカは、シマウマのような縦じまをも作り出すことができる。[184]

異なる視覚システム

多くの海中生物にとって、狩猟と保身のため、視覚は非常に大切である。そのため、たいていの海中生物は、水中で物を見ることに適した目を持つ。

水中では、特に水深30メートル以降、深さが深くなればなるほど、視覚は制限される。しかし、その深さに生息する生物は、その状況に適した目を持っている。

陸上生物とは異なり、海中生物は、自分が住む水の密度に必要な、球形のレンズを持っている。陸上生物の楕円形の目と比べると、この球形構造のほうが、水中で物を見やすく、物質を詳細観察するのに優れている。遠くの物質に焦点を当てると、目の特別な筋肉構造により、レンズが引っ込められる。

魚の目が球形であるもう1つの理由は、水中の光の屈折である。魚の目は、水とほぼ同じ密度の液体で満たされており、目に外部イメージが反映されても、屈折しない。そのため、レンズは外部オブジェクトを正確に網膜に伝えることができる。魚は、人間とは異なり、水中でもはっきりと物を見ることができる。

タコなどは、光があまり当たらない水深で生活しているため、それを補うために大きな目を持つ。水深300メートル以下では、大きな目の魚は、周辺生物の存在をつかむため、フラッシュを感知しなければならない。特に、水中を通るわずかな青い光を感知する必要がある。このため、目の網膜には、青色に敏感な細胞がたくさんある。

こうした例から、全ての生物はそのニーズに合わせた特別な目を持っていることがわかる。この事実は、全ての生物が全知全能の創造者によって創られたことを証明する。

特別な冷凍システム

凍っているカエルは、特異な生物学的構造を見せる。それには生きている兆候が全くなく、心拍、呼吸、血流は完全に停止している。しかし、氷が溶けると、まるで眠りから覚めたかのように普通に活動を始める。

通常、凍結状態の生物は、多くの致命的リスクに直面する。しかし、カエルにはその危険性は全くない。カエルは、凍結状態において大量のグルコースを産生する特性を持つ。糖尿病と同じで、カエルの血糖値は非常に高くなる。高い場合、1リットル中に550ミリモルにもなることがある。(カエルの血糖値は通常1リットルに1〜5ミリモルで、人間でも4〜5ミリモルである)この極度なグルコース濃度は、普通は深刻な問題となりうる。

しかし、凍結したカエルにおいては、この大量のグルコースが生細胞の水分を維持し、収縮を防いでいる。カエルの細胞膜は、浸透性が高く、グルコースが細胞内に入ることがたやすい。体内の大量のグルコースが氷点を下げるため、非常に少量の細胞しか凍らない。研究では、グルコースが凍結した細胞にも栄養を与えることがわかっている。グルコースは、この間、体の燃料となるだけでなく、尿素合成などの物質代謝も止め、細胞の栄養素が消費されるのを防いでいる。

カエルの体内の大量のグルコースは、一体どのように作られたのだろうか？この答えがまた面白い。カエルには、グルコースを作るための特別な機能が備わっている。皮膚に氷が付き始めると、その信号が肝臓に送られ、肝臓がグリ

コーゲンをグルコースへと変化させる。この肝臓に送られる信号の謎は、未だにわかっていない。信号が送られてから5分もすると、血糖値が着々と上がり始める。[185]

必要に応じて代謝を完全に変える機能を持つ動物は、全知全能の神が創り出したということは疑いようもない。いかなる偶然も、このように完全で複雑なシステムを生み出すことはできない。

アホウドリ

渡り鳥は、通常と異なる"飛び方"をすることで、エネルギー消費を最小限に抑える。アホウドリは、この飛行スタイルを使うことが確認されている。一生の92%を海上で過ごすアホウドリは、翼幅3.5メートルにもなる。一番重要なアホウドリの特長は、羽ばたくことなく何時間も飛んでいられるというその飛行スタイルである。アホウドリは風を利用し、グライダーで飛ぶように空を飛ぶ。

幅3.5メートルにもなる翼を開いたままでいることは、大量のエネルギーを必要とする。しかし、アホウドリは、生まれつき持つ特別な身体構造システムのおかげで何時間もその体勢でいることができる。アホウドリの翼は、飛行中、固定される。つまり、翼を動かすための筋力を一切必要としない。翼は、筋層のみにより支えられ、これが大きく飛行を助け、エネルギー消費も抑える。アホウドリは、羽ばたく必要がなく、翼を開いておく筋力も使わないため、エネルギーを使わない。何時間もの飛行は、風が与える無限のエネルギーを使用しているだけである。例えば、重さ10キロのアホウドリは、1,000キロ飛行するのにその体重のたった1%のエネルギーという非常に少ないエネルギーしか消費しない。人間は、アホウドリの飛行スタイルをモデルにしてグライダーを生み出した。[186]

大変な移動

太平洋サケは、自分が生まれた河に戻り、そこで産卵するという特性を持つ。基本的に海で生活した後、産卵のために淡水に戻るのである。

初夏に移動を始めるとき、サケは明るい赤色をしているが、最後には黒に変わる。まず最初は沿岸で過ごし、そして河へとたどり着く。自分の生まれた場所へ、急流に逆らい、滝や岩脈を飛び越えて、根気よく進み続ける。この3,500〜4,000キロの移動の最後は自分が孵化した場所に戻り、メスサケは3,000〜5,000個の卵を産み、オスサケが精子で受精させる。移動と産卵で、サケはひどく傷ついており、産卵・受精を終えたサケの尾びれは切れ、その体は黒に変色していく。河はすぐに死んだサケで溢れかえる。しかし、翌

左：砂と同化するイカ

右：危険を察し黄色に変色する魚

年にはまた別のサケが同じ移動を行うのである。

なぜサケがこのような移動を行うのか、孵化後にどのように海までたどり着くのか、そしてどうして生まれた河に戻ってくるのかなど、まだ解き明かされていない謎がたくさんある。もちろん、これまでに多くの提唱がなされたが、そのどれもが確実な答えにはなっていない。何がサケを何千キロも泳がせ、覚えているはずもない孵化した場所へと戻らせるのか？まるで力のある誰かがコントロールしているとしか思えない。そう、もちろんそれは神である。

コアラ

ユーカリの木から採れる油は、多くの動物にとって有毒である。この毒は、ユーカリが敵から身を守るためにある。しかし、これを利用し、有 毒なユーカリの葉 を食べる有袋類が存在する。コアラである。コアラは、ユーカリの木に巣を作り、ユーカリの葉を食べ、水分もユーカリから得る。

他の哺乳類同様、コアラは、ユーカリの木にあるセルロースを消化できない。このため、セルロース消化微生物に依存している。これらの微生物は、小腸と大腸の収束点、腸の後方伸長である盲腸に密集している。盲腸は、コアラの消化システムで一番面白い働きをする。ここが、微生物がセルロースを消化し、ユーカリの葉の通過を遅くする発酵室の機能を果たしているため、コアラはユーカリの葉の毒を中和することができる。[187]

動かずに獲物を捕獲する能力

南アフリカのモウセンゴケは、粘毛を使って昆虫をしとめる。モウセンゴケの葉は非常に長く、赤い毛状になっており、毛の先端から昆虫をおびき寄せる香りの液体を出す。この液体は、非常に粘着力が高い。香りにおびき出された昆虫は、この粘毛に捕まる。昆虫が粘毛にくっつくと、全ての葉っぱが閉じ、モウセンゴケは、昆虫を消化することで生きるために必要なタンパク質を得る。[188]

根を下ろした場所にて獲物を捕まえることができるこの機能は、誰かが特別な配慮をしたことの証明である。植物がこのような捕獲スタイルを偶然得たことはあり得ず、これは、神がそのように創造したとしか言いようがない 。

鳥の羽の設計

パッと見ると、鳥の羽は、非常に簡単な構造をしているように見える。しかし、羽をよく研究すると、その構造は複雑で、軽量ながらも非常に頑丈で、しかも防水機能も持っているということがわかる。

鳥は、楽に空を飛べるようにできるだけ軽くなければならない。そのため、羽はケラチンタンパク質でできている。羽の軸の両端に羽根があり、各羽根には、400ほどの小さな羽枝がある。そして各羽枝には800の小羽枝がある。小さな羽毛で満たされているその800もの小羽枝は、それぞれに更に20ほどの小鉤があり、これが羽枝を小羽枝と結合している。一羽の鳥には全部で7千億もの小鉤があるのだ。

鳥の羽が羽枝や羽毛で固く結びついているのには大きな理由がある。羽は、いかなる動きをした場合でも壊れないほど固く結びついていなければならない。羽枝や羽毛で結びついた羽は、強風、雨、雪などのいかなる環境にも負けないほど強く結びついており、抜け落ちることはない。

更に、腹部の羽は翼や尾の羽とは異なる。尾の羽は、舵やブレーキの機能を果たすため比較的大きく、翼の羽は飛行力を上げるため、羽ばたいている間は広がるようになっている。

左:開いたモウセンゴケ　右:閉じているモウセンゴケ

鳥の羽の構造

パッと見ると、鳥の羽は、非常に簡単な構造をしているように見える。しかし、羽をよく研究すると、その構造は複雑で、軽量ながらも非常に頑丈で、しかも防水機能も持っているということがわかる。

鳥は、楽に空を飛べるようにできるだけ軽くなければならない。そのため、羽はケラチンタンパク質でできている。羽の軸の両端に羽根があり、各羽根には、400ほどの小さな羽枝がある。そして各羽枝には800の小羽枝がある。小さな羽毛で満たされているその800もの小羽枝は、それぞれに更に20ほどの小鉤があり、これが羽枝を小羽枝と結合している。一羽の鳥には全部で7千億もの小鉤があるのだ。

鳥の羽が羽枝や羽毛で固く結びついているのには大きな理由がある。羽は、いかなる動きをした場合でも壊れないほど固く結びついていなければならない。羽枝や羽毛で結びついた羽は、強風、雨、雪などのいかなる環境にも負けないほど強く結びついており、抜け落ちることはない。

更に、腹部の羽は翼や尾の羽とは異なる。尾の羽は、舵やブレーキの機能を果たすため比較的大きく、翼の羽は飛行力を上げるため、羽ばたいている間は広がるようになっている。

セビレトカゲ:水中歩行の達人

水面を歩くことができる動物がいる。中央アメリカに生息するセビレトカゲ(写真下)は、その珍しい動物の1つである。セビレトカゲのつま先には皮弁があり、水を撒き散らすことができる。この皮弁は、陸上を歩いている際は閉じた状態になっているが、身に危険を感じると、皮弁が開き、河や湖の表面を非常に速く走れるのである。[189]

セビレトカゲのこの独特な機能は、神の創造の証拠にほかならない。

水と空気をバランス良く捕らえるセビレトカゲ

光合成

植物が、地球を生物が住むのに適した場所にしていることは明白である。空気を綺麗にし、温度を一定化し、大気中のガスの比率を保つ。我々が呼吸するために必要な酸素は、植物が作り出している。我々の食生活にも植物は欠かせない。植物の栄養価は、その細胞の特別な構造によるものであり、植物の細胞は、他の植物の特性にも関係している。

植物細胞は動物細胞と違い、太陽エネルギーを直接使うことができる。太陽エネルギーを化学エネルギーに変え、特別な方法で栄養素を保存する。この過程は“光合成”と呼ばれている。実際、光合成は、植物の細胞ではなく、葉緑体と呼ばれる植物を緑色にする細胞小器官で行われる。顕微鏡でしか見ることができないこの緑色の小さな細胞小器官は、有機物に太陽エネルギーを蓄積することのできる、地球上でたった1つのものである。

地球上の植物が生産する物質は、年間2,000億トンにもなる。そしてこの生産物は地球上の全ての生命体に欠かせない。植物の生産物は、非常に複雑な化学プロセスを経て放出される。葉緑体内の何千もの“クロロフィル”色素は、1,000分の1秒という非常に短い時間で光に反応する。これが、クロロフィル内で何が起こっているのか未だにはっきりと解明できない理由である。

太陽エネルギーを電気や化学エネルギーに変えることは、つい最近のハイテク機器を用いて技術的に成功した。しかし人間の目では見ることのできないこの小さな植物細胞は、何百年もの間これを行ってきた。

無比の工場が植物の葉のほんの小さな部分に凝縮されているのである。この完全なシステムは、やはり、創造されたとしか言いようがない。非常に複雑な光合成のシステムは、全世界・全生物を創りだした神が意図的に作り出したメカニズムである。

顕微鏡でしか見えないほど小さな植物の細胞で、奇跡的な変換が行われる。
太陽からのエネルギーで、動物や人間が必要とするエネルギーを排出する光合成を行う。

警告

ここからの章には、あなたの人生にとって重大な秘密が隠されている。外的な世界に対するあなたの見方を根本から覆すことになる内容が含まれているので、とりわけ心して、入念に読んでいただきたい。本章では、単なる物の見方や、異なるアプローチの方法、あるいは伝統的な哲学的思想について述べられているだけではない。信ずる者も信ぜざる者も、誰もが認めるべき、そして今日の科学によって証明された事実が書かれている。

第17章

物質を超越する秘密

自分を取り巻く状況についてじっくり考える者は、生物も非生物も、この世における全てのものが創られたものであることに気付くだろう。そしてそこには「これらのものを創った創造主は誰なのか？」という疑問がわき起こる。

当然のことではあるが、世界に存在するさまざまな創造物は全てこの世界そのものから自然に発生したわけではない。例えば、昆虫が昆虫を創ることはできず、太陽系が太陽系を生み出すこともできない。植物も、人間も、バクテリアも赤血球細胞も、チョウも自らを創り上げることはできない。また本書で一貫して述べているように、これらの物質の起源が『偶然』によるということはありえない。

従って、私たちの目に入るものは全て創られたものであるという結論に達する。しかしそれら自身が“創造主”とはなりえない。創造主とは、私たちの目に入る全てのものとは全く異なる―同時にそれを超越する―優れた力(Superior Power)であり、その姿は私たちの目には見えないが、その存在と特性はそれによって創造された全てのものの中に示されているのである。

神の存在を否定する者は、自分たちの目で神を見ないかぎりその存在を信じようとせず、全世界で証明されている創造の事実を隠匿して、この世界とそこに生きるもの全てが創造されたものではないと主張している。しかも、嘘いつわりを利用して、その主張を押しつけている。先に説明したように、進化論は彼らの嘘を示す典型的な一例である。だが、それが無駄な努力であることは言うまでもない。

神を否定する者はみなこの基本的な誤りを犯しているが、神の存在を否定しない者の中にも同じく誤った考えを持つ者がいる。神についての認識が間違っているためである。社会の大多数を構成するこういった人々は、この世にあるものが創造されたということは否定しないが、神についての迷信、すなわち神は“空の上にいる”だけだと信じている。彼らは、神は遙かかなたの惑星の裏側に存在し、ときおり世間の俗事に介入してくるだけであると暗黙のうちに考えている。あるいは神は私たち人間には一切の干渉をしないとさえ思っている人もいる。だが、どちらも誤った考えだ。この世界を創造したのは神であり、その後、この世界を私たち人類に託し、人類が自ら運命を決定するよう導いたのも神なのである。

その他にも、コーランの中で示されているように、神は“あらゆるところに”存在するという事実を耳にしたことはあっても、その意味を正確に把握できていない人々もいる。神はまるで電波や目に見えず実体のないガスのように私たちを取り囲んでいるのだという迷信にとらわれているのである。(当然ながら、神はそれ以上の存在である。)

しかしながら、神の居場所を明確にすることは(つまるところ神の存在を否定することも)できないというこうした概念の根底には、共通の誤解が存在する。いわば神について誤った考え方へと導く根拠のない偏見である。

この偏見は何なのだろうか。これは、物事の存在と本質に関わっている。これまで大半の人々は、私たちが目にする物質世界が真の現実そのものだと思い込まされてきた。しかし近代の科学の発達によってこういった見解は覆され、最も重要で際だった事実が明らかになってきた。コーランが指摘するこの偉大なる現実を、以下に説明していきたい。

電気信号の世界

この世界についての情報は、全て五感によって私たちにもたらされる。つまり私たちが知るこの世界は、目で見るもの、手で感じるもの、鼻で匂うもの、舌で味わうもの、そして耳で聞こえるものによって成り立っている。外的な世界は人間の感覚によってもたらされるものにすぎないことを私たちは信じようとしない。それは、私たちはこの世に生まれた日からそういった感覚に依存してきているからである。

しかし、様々な科学分野における現代の研究では全く異なった見解が指摘され、私たちが感覚によって認識している"外的な"世界について真剣な疑問が生まれている。

この新たな見解を理解するためのスターティングポイントは、私たちが外的なものとして知覚しているものは全て、脳における電気信号によって形作られたものにすぎないということにある。リンゴの赤い色や木材の堅さ—更には私たちの母、父、家族、そして人間が所有するもの、家、仕事、そしてこの本のページなどありとあらゆるもの—はみな、電気信号のみによって構成されているにすぎない。

この点に関して、今は亡きドイツの生化学者フレデリック・フェスター(Frederic　Vester)は、科学的に到達した見地について以下のように説明している。

人間はイメージだと仮定すると、いわゆる経験というものは全て一時的で欺瞞的なものであり、またこの世界は影にすぎないという科学者の発言は全て、現代の科学によって証明されていると思われる。[190]

これを更に明確にするために、外的な世界についての全ての情報を私たちに提供してくれている五感について考えてみたい。

どうやってものを見て、聞いて、味わうのか？

見るという行為は、進行的に発生する。物体から送られる光(光子)は眼球のレンズを通過して眼球に入り、そこで屈折して弱まり、上下逆さまの状態で眼球の後部の網膜に到達する。ここで視覚的刺激は電気信号に変換され、神経細胞によって脳中枢として知られる脳の後部にある小さなスポットに送られる。一連のプロセスを経た後、脳中枢に送られたこれらの電気信号がイメージとして認識される。見るという行為は実際には脳の後部、完全に光から遮断された真っ暗で小さな場所で起こっているのだ。

このプロセスが大々的に理解されているとはいえ、私たちが"ものが見える"と言うとき、実は目に届いていた刺激が電気信号に変換され、更に脳に送られたその結果を認識している。つまり"ものが見える"と言っても、実は頭の中の電気信号を知覚しているにすぎない。

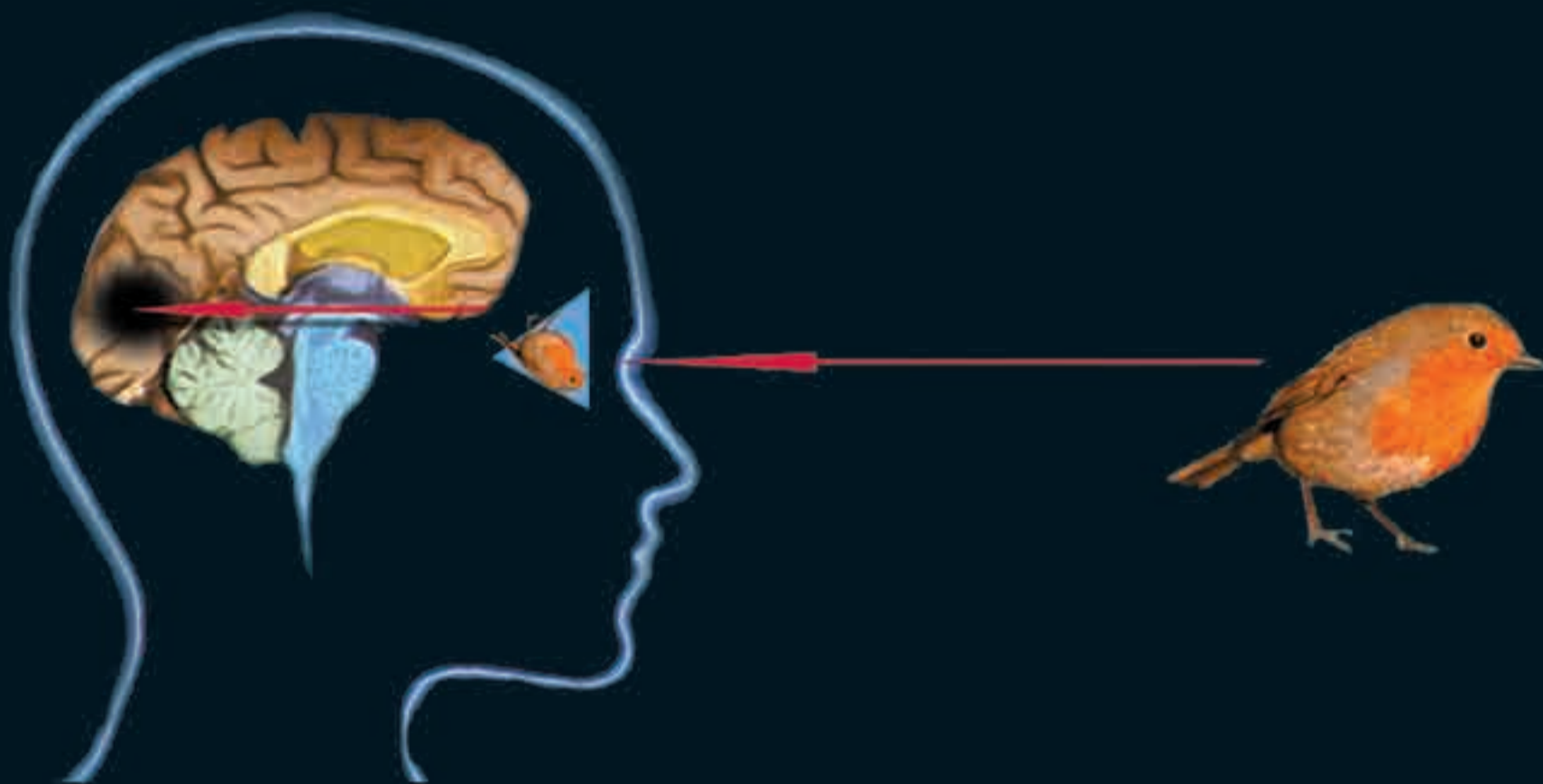
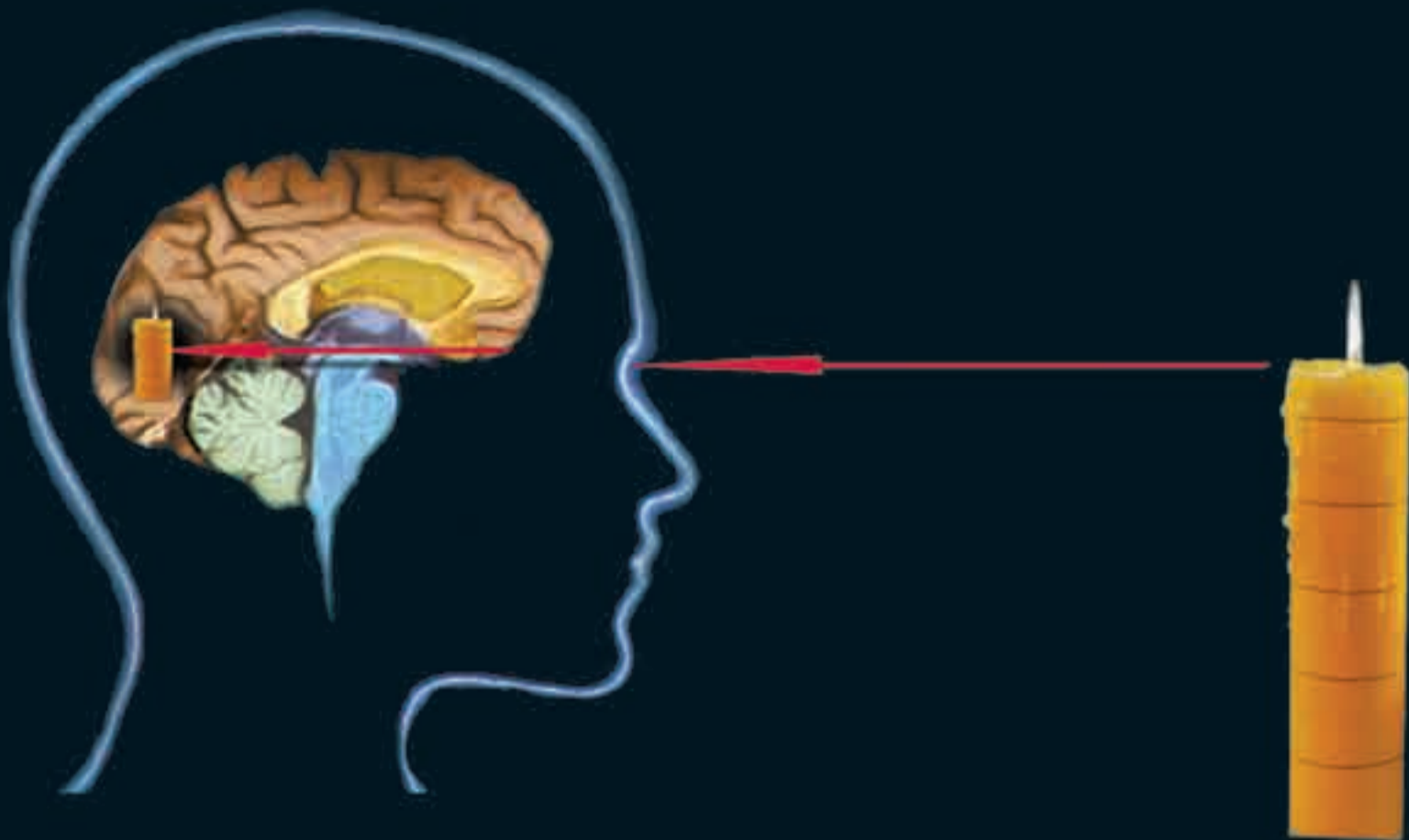
私たちが生活する中で目にするイメージは、全て、脳全体のうちほんの数立方センチメールにすぎない視覚中枢で形成されている。あなたが今読んでいる本も、水平線を見つめたときに見える限りない風景も、どちらもそんな小さな空間で起こっている。そして先に述べたように脳は光から遮断されていることを忘れないでいただきたい。頭蓋骨の中は真っ暗であり、脳そのものが光と接触するわけではないのである。

この興味深いパラドックスを説明するために1つの例を挙げよう。今、あなたの目の前に炎を上げているろうそくを置くとする。あなたはこのろうそくを挟んで私の反対側に座り、このろうそくをじっと見つめている。しかしながら、このとき、あなたの脳はろうそくの光そのものと直接的に触れあうことはできない。ろうそくの光を認識することはできても、脳の内側には光は入らない。私たちは、真っ暗な脳の内側で、明るくて色鮮やかな世界を見ているのである。

R・L・グレゴリー(R. L. Gregory)は、私たちが当然のように思っている『見る』ということの奇跡的な側面について次のように説明している。

> 私たちはものを見るということに馴染みすぎてしまっていて、想像力を駆使しないかぎり解決すべき問題があることに気付かない。だが、よく考えてみるといい。私たちの目は小さくて歪んでいて逆さまのイメージを目の中で受け取り、特定の硬い物質を周囲の空間から区別して見ている。網膜への刺激のパターンから物質を認識しているというこの事実は、奇跡にほかならない。[191]

同じことは他の感覚にもあてはまる。音、触感、味、においはいずれも電気信号として脳に伝えられ、脳の関連中枢で認識される。

聴感も同じように伝わっていく。外耳の耳介が音を拾い、それを中耳へ伝える。中耳は音の振動を増強しなが

物質から放射された光の束は、逆さまになって網膜に届く。網膜に到達した時点でイメージは電気信号に変換され、脳の奥にある視覚中枢に送られる。脳は光から遮断されているため、光が直接、視覚中枢に届くことはない。これはすなわち、人間は光から遮断された脳のある小さな一部分で広大な光の世界を見ていることを意味する。

ら内耳に伝える。内耳はそれらの振動を電気信号に変え、脳に送る。目と同じように、聞くという行為も、脳の聴覚中枢で行われる。脳は光と同様、音からも遮断されている。従って、外がどれほど騒がしくても、脳の中は静寂そのものなのだ。

とはいえ、脳は音を最も正確に認知するため、健康な人の耳は、空気のノイズや障害をのぞく全ての音を聞き取ることができる。もちろん脳に直接音が響くわけではないが、オーケストラのシンフォニーを聴いたり、混雑した観客席の音を耳にしたり、葉のこすれ合う音からジェット機の轟音にいたるまで幅広い周波数の全ての音を認識することができる。しかし、脳のサウンドレベルを計測する鋭敏な装置があったとしたら、脳そのものは完全な静寂に包まれていることがわかるだろう。

においの感覚も同じようなものだ。バニラ抽出物やバラの花から発する揮発性の分子が嗅覚器官上皮の細かな毛にある受容器に届き、電気信号として脳に送られ、においとして認識される。良いにおいだと思うものから不快なにおいまで、電気信号に変換された揮発性分子の反応として脳が認識することが、におうという行為なのである。香水や花、おいしい食べ物、海、その他好き嫌いに関わらずあらゆるにおいはみな、脳で認識されている。分子そのものが脳に届いているわけではない。音や映像と同じように、感覚中枢に届くものは単に電気信号の寄せ集めにすぎない。言い換えれば、あなたが生まれて以来、外的なものによると考えていた感覚は全て、感覚器官を通して変換された単なる電気信号だということだ。

物質の放つ刺激は電気信号に変換され、脳に影響を与える。人間がものを“見る”と言うのは、実際には脳の中の電気信号によって作られたイメージを見ているのである。

同様に、舌の先端には、塩辛さ、甘さ、酸っぱさ、苦さを感じる四種類の異なる化学受容器がある。一連の科学的プロセスの後、味覚受容器はこれらの味を電気信号に変えて脳に送る。信号を受け取った脳はそれを味として認識するのである。大好きなチョコレートや果物を食べて感じる味覚は、脳に送られた電気信号なのだ。人間は、外界にある物質に直接触れることはできない。チョコレートそのものを、見たり、においをかいだり、味わったりすることはできない。例えば、舌と脳の間にある神経を切断したら、味覚は完全に失われるだろう。

ここで、私たちはまた別の事実に行き当たる。自分がある食べ物を味わっているとき、果たして他の人も同じ味を味わっているのだろうか？あるいはある声が聞こえたとき、別の人間にも全く同じように聞こえているかだろうか？それは決してわからない。これに関して、科学ライターのリンカーン・バーネット(Lincoln Barnett)は「誰もが自分と同じように赤い色や基音の“ド”という音を他人が感じているかどうかは、誰にもわからない」と書いている。[192]

触感についても同じことが言える。ある物体を触ったときに、私たちにその物体と認識させる全ての情報は、肌の感覚神経によって脳に伝達される。触感も脳で作られているのである。世間一般の通念とは異なり、私たちは指先や肌で触感を認識しているのではなく、脳の触覚中枢で認識している。肌から送られてくる電気的刺激を脳が査定した結果、堅さや柔らかさ、熱さや冷たさといったその物体に属するさまざまな感覚を感じ取る。こうした刺激から、その物体を認識するのに役立つ詳細な情報を引き出すのである。この重要な事実に関しては、二人の有名な哲学者B・ラッセル(B. Russell)とL・J・J・ウィットゲンスタイン(L. J. J. Wittgenstein)の理論を紹介したい。

> 「例えば、レモンが本当に存在するのかどうか、それがどうやって存在にいたったかということを問うたり、調べたりすることはできない。レモンは、舌で感じた味覚と、鼻で感じた嗅覚と、目で感じた色と形から形成されているにすぎない。これらの特徴は、検査や調査の方法によって結果が異なる可能性がある。物理的世界を科学で判断することはできない」[193]

人間は脳の外側にある物理的世界に触れることはできない。私たちが接している全てのものは、視覚、聴覚、触覚といった認識の寄せ集めである。人間の脳は、一生、感覚中枢に集めたデータを処理しつつ、私たちの外側に存在する物質の“原型”ではなく、脳の中に形成された複製と向かい合っている。

脳の内側にある“外的な世界”

こうした物理的事実より、私たちは次のような疑う余地のない結論に達する。私たちが“物質”、“世界”、“宇宙”として見聞きし、触れたり、認識したりしている全てのものは、実は脳に伝達された電気信号である。脳の外側にある物質そのものと直接触れることは絶対にできない。私たちは、脳に形成された外界のイメージを味わい、聞き、見ているだけにすぎない。リンゴを食べている人は、決してリンゴそのものに向かい合っているのではなく、脳に伝わったリンゴのイメージに向かい合っているのだ。人間がリンゴとみなしているものは、実際には、脳が認識したその果物の形、味、におい、肌触りに関する電気信号から成り立っている。もし脳につながる視覚神経が切断されたら、リンゴのイメージはたちまち消え去ってしまうだろう。鼻の受容器から脳につながる嗅覚神経が切断されれば、においの感覚を失うことになる。簡単に言えば、そのリンゴは脳に送られた電気信号にすぎない。

距離感についても考えてみたい。あなたとこのページの間にある空間は、あなたの脳で形成された空間の感覚にすぎない。視界の遠くに見える物質も、存在しているのは脳の中だ。例えて言えば、夜空の星を見ている人は、その星が数百万光年先にあると考えるだろうが、その星はその人自身、その人の視覚中枢にあるものだ。この文章を読んでいるあなたも、実際にはあなたがいるとみなしている部屋にいるわけではない。むしろ、部屋があなたの中に存在しているのだ。肉体を意識すると、あなたはその中にいると考えるであろう。しかし、あなたの肉体そのものも、脳の中で形成されたイメージの組み合わせである。

全てのことがその他の認識についても当てはまる。例えば隣の部屋のテレビの音が聞こえてきたとする。だが、実際には、音を聞くという体験をしているのはあなたの脳である。数メートル先から聞こえてくると考える騒音や、すぐ隣にいる人の話声はどちらも、脳の中のわずか数立方センチメートルの聴覚中枢で認識されている。この知覚中枢以外に、前後左右といった概念は存在しない。つまり、音はあなたの右、左、あるいは上から聞こえてくることはない。音が来る方向そのものが存在しないからである。

同じように、あなたが認識するにおいも、どこか離れたところから届いているわけではない。あなたは嗅覚中枢

で認識されるにおいは、外側のもののにおいと思っていることだろう。しかし、バラの花のイメージが視覚中枢に存在するように、においも嗅覚中枢に存在する。外側に存在する物質の原型を直接見たり、そのにおいをかいだりすることは決してできない。

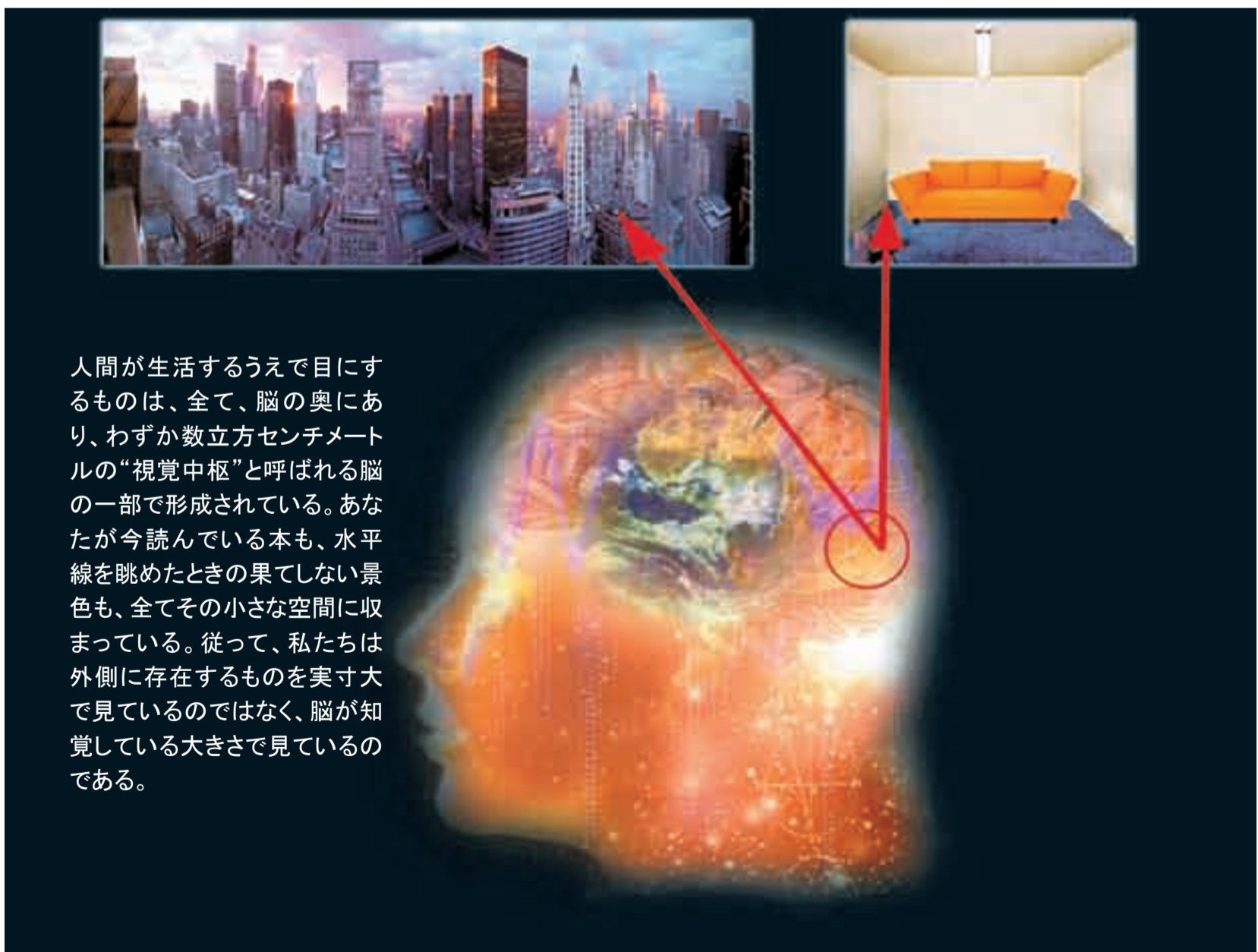
私たちにとって、“外的な世界”とは、脳に同時に届く電気信号の集まりにすぎない。脳はそれらの信号を処理しているだけなのに、私たちはそれらが「外的な世界」に存在する物質の本物の、オリジナルの姿だという誤った認識を持ったまま生活している。感覚というものによって、物質そのものには決して触れることができないにも関わらず、私たちは大きな誤解をしているのである。

ここで再び、私たちが“外的な”ものと考えているものは、脳が受け取っている信号にすぎないことを述べておきたい。例えば、聴覚について考えてみよう。私たちの脳は耳に届いた音波をシンフォニーへと変換する。音楽もまた、脳によって—脳の中で—形成される認識である。同じように、色を目にしたときには、様々な波長を持った光が目に届き、脳がそれらの波長を色に変換する。“外的な世界”には色というものは一切ないのである。リンゴの赤や空の青、木の緑も同様だ。それらは全て、わたしたちがそういうものとして認識しているから、そう存在するのである。

目の網膜にわずかでも傷が生じれば、色盲になる。青いものを緑と認識する人がいれば、赤いものを青と認識する人もいるし、全ての色が様々な色調の灰色に見えるという人もいる。こうなると、外的なものに色がついているかどうかなど、問題ではなくなってしまう。

著名なアイルランド人の思想家ジョージ・バークレー(George Berkeley)もこの点について言及している。

> 最初は、色、形、動き、そしてそれ以外の知覚的な感覚は、知性がなくても存在するものだと考えられていた。しかし、これらがそれを知覚する精神や心がなければ存在しえないことが明らかになってからは、物質の存在を肯定する理由を失った……。[194]

要するに、私たちに物体の色が見えるのは、物体に色があるからだとか、私たちの外側に存在する物質だから、ではないのだ。私たちが物体に帰してきた性質は全て“外的な世界”ではなく、私たちの内にあるのである。

人間が生活するうえで目にするものは、全て、脳の奥にあり、わずか数立方センチメートルの“視覚中枢”と呼ばれる脳の一部で形成されている。あなたが今読んでいる本も、水平線を眺めたときの果てしない景色も、全てその小さな空間に収まっている。従って、私たちは外側に存在するものを実寸大で見ているのではなく、脳が知覚している大きさで見ているのである。

物理学の発見は、世界が知覚の集合体であることを示している。以下の質問は、この事実を1999年1月30日号で扱ったアメリカの有名な科学雑誌『New Scientist』の表紙に掲載されたものである。「現実を超えた事実：この世界は基本的情報の戯れにすぎず、物質は単なる幻想なのか？（Beyond Reality: Is the Universe Really a Frolic of Primal Information and Matter just a Mirage?)」

2002年4月27日に出版された『New Scientist』の『うわべだけの世界（The Hollow Universe)』と題された記事には次のように書かれている。「あなたは雑誌を持っている。それは固体であり、一定の空間のなかである種の独立した存在感を持っているように感じているはずだ。身の回りにあるコーヒーカップやパソコンについても同じことが言える。それらはみな本物で、そこに存在している。しかし、それらはみな幻想なのだ。形をもった物体と私たちが考えているものは全て、単なるイメージであり、私たちの世界との境界線上にある万華鏡から発せられている刻々と変わりゆく映像なのである」

では、果たして私たちは“外的な世界”を完全に知っていると断言することができるだろうか？

人間の限られた知識

これまで述べてきた事実が暗示することの1つは、人間の外的な世界についての知識が、極端に限られているということである。

人間は、五感で感じられるものの知識しか持っておらず、私たちがそれらの感覚を通して認識している世界が“実際の”世界と同一のものであると証明することはできない。

従って、私たちの認識している世界は“実際の”世界とは大きく異なっている可能性もある。私たちが気付いていない側面やものが存在しているかも知れない。宇宙の果ての果てに到達したとしても、私たちの知識は、やはり限られているであろう。

あらゆるものの創造主である全能の神は、神によって創造され、神に許された知識のみを所有することのできるあらゆる生物に関して、完全な知識を有している。これはコーランの中で次のように説明されている。

「アッラー、かれの外に神はなく、永生に自存される御方。仮眠も熟睡も、かれをとらえることは出来ない。天にあり地にある凡てのものは、かれの有である。かれの許しなくして、誰がかれの御許で執り成すことが出来ようか。かれは(人々の)、以前のことも以後のことをも知っておられる。かれの御意に適ったことの外、かれらはかれの御知識に就いて、何も会得するところはないのである。かれの玉座は、凡ての天と地を覆って広がり、この2つを守って、疲れも覚えられない。かれは至高にして至大であられる」(アル・バカラ章255節)

人工的に構成された“外的な世界”

私たちが知っている唯一の世界は、あらかじめ計画され、記録され、そして色鮮やかに彩られた世界…つまり、私たちの頭の中で創られ、存在する世界である。脳の中で私たちが見ている概念は、時に、人工的なものに端を発することもある。

これについて例を挙げながら説明したい。

まず、人工的な方法を使えば、脳は体とは別に存在できるということを考えてほしい。仮にコンピューターはあらゆる種類の電気信号を生み出すことができるとしよう。そして特定の環境に関連するデータの電気信号…視覚、音、においといったもの—を人工的に生み出す。最後に、このコンピューターと脳の感覚中枢を電気コードでつなぎ、記録された信号を送る。これらの信号を認知すれば、あなたの脳(つまり“あなた”)はその人工的信号が提示する環境を見て経験することができることになる。

このコンピューターはまた、あなたの脳にあなた自身のイメージに関連する電気信号を送ることができる。例えば、机に向かっているときに耳にする音、目にする光景、そして触感など相互に関連する感覚を電気信号として送れば、オフィスで働くビジネスマンになることもできる。コンピューターが刺激を送り続けるかぎり、この想像上の世界が失われることはない。自分が脳だけでできていると自覚することはないだろう。関連する中枢への刺激さえあれば、脳の中で1つの世界を形成することができるからである。人工的な信号でこれらの刺激(つまり知覚)を発生させることは完全に可能なのだ。

これについて、名高い哲学者バートランド・ラッセル(Bertrand Russell)は次のように書いている。

> 指でテーブルを押したときの触感は、現代物理学によれば、テーブルの電子と陽子の近接によって生じる、指の電子と陽子に対する電気的障害だと言う。他の方法で指先に同じ触感を与えたら、その場にテーブルがなかったとしても同じ感覚を覚えるはずだ。[195]

人間は、物質的な相関関係がなくても、知覚したものを現実として容易に思い込んでしまいがちだ。この幻想を私たちはしばしば夢の中で経験することがある。夢の中である出来事を経験し、いかにも本物のような人やもの、風景を目にする。しかし、それらはみな単に知覚したものにすぎない。どちらも、脳の中で起こっているのである。

知覚者の正体は？

私たちが住んでいると思っている“外的な世界”は、実は脳の内側で創られたものだということは間違いない。しかしながら、ここで最も重要な疑問が生じる。この世の全ての物体が本質的に知覚されたものであるとしたら、私たちの脳そのものはどうなのだろうか？脳も腕や脚、あるいはその他の物質と同様に物体の一部であるのだから、やはり知覚されたものでなければおかしい。

この点については例を挙げて説明しよう。脳の中で夢を知覚するとする。夢の中では、私たちは想像上の体や腕、目、そして想像上の脳を持っている。夢を見ている間に「あなたはどこで見ていますか？」と尋ねられたら、「私は脳の中で見ています」と答えるだろう。しかし実際には、本物の脳は存在せず、想像上の体と想像上の頭、そして想像上の脳があるだけだ。夢のさまざまなイメージを見ているものは、夢を見ている想像上の脳ではなく、それを遙かに超えた人間なのである。

夢の背景と私たちが実生活と呼んでいる背景に、物質的区別はない。従って、“実生活”で「あなたはどこで見ていますか？」という同じ質問をされても、「脳の中で」という、やはり意味のない答えになるはずだ。どちらの場合においても、ものを見て知覚しているもの自体は脳ではなく、神経細胞の塊にすぎない。

これまで、私たちが脳の中で外的な世界の複製をどうやって見ているかについて述べてきた。その結果引き出された重要な結論の1つは、私たちは外的な世界をありのままで知ることは決してできないということである。

2つめの重要な事実は、この世界を見ている脳の中の“自分自身”は、脳そのものではないという点である。これはいわゆる統合的コンピューターシステムに似ている。中枢に届いたデータを処理し、イメージに転換し、スクリーンに映し出すという働きをするからだ。しかし、コンピューターはそれ自体を見ることはできないし、そのものの存在を意識することもない。

人工的刺激により生み出される現実

仮想現実とは、様々な装置の助けを借りてコンピューター上に再現された三次元映像である。こういった“現実に似た世界”の映像は、様々な分野で主にトレーニングを目的として利用されている。
仮想現実の最大の特徴は、特殊装置を使っている人間が、それらのイメージが現実のものではないことを忘れ、その世界にすっかり入り込んでしまうことにある。このように、まるでオリジナルのもののように現実的で活気のあるように見える物質世界が人々の感覚を刺激し、脳の中にその世界が確立してしまうことがある。そういった人工的刺激を与え続けると、その人間は実際には存在していない鳥を見たり触ったりしたようなイメージを浮かべるようになる。

脳を分析してこの意識という点を調べても、人体の他の臓器にも含まれている脂質とタンパク質の分子があるだけだ。これは、私たちが“脳”と呼んでいる組織の中には、イメージを解析し、意識を構成したり、あるいは“自分自身”と呼ぶ人間を作り出したりするものは何も存在しないということを意味する。

脳内のイメージの知覚に関して、知覚を研究する科学者R・L・グレゴリー(R. L. Gregory)は、人々の思い違いについてこう述べている。

> 目が脳の中の映像を生み出すのだと考えたくなるのはもっともだが、これは誤った考え方だ。脳の中の映像を見るには、ある種の内なる目が必要だが、その映像を見るためには更に別の目を必要とする。これが永久的に繰り返されることになるわけで、それほど愚かしいことはない。[196]

この疑問によって、物質以外に現実は存在しないと考えている唯物論者は途方に暮れることになる。ものを見る目の後ろには誰がいるのか？見ているものを何が認識し、それに反応しているのか？

著名な認識神経科学者カール・プリブラム(Karl　Pribram)は、科学と哲学の両方の世界に関する、知覚者は誰かというこの重要な疑問に着目した。

> ギリシャ時代から哲学者は機械の中の“幽霊”や“小人の中の小人”などについて思いをめぐらせてきた。わたし—脳を使っている存在者—はどこにいるのだろう？実際に認識するのは誰なのか？アッシジの聖フランシス(Saint Francis of Assisi)の言葉を借りれば“私たちが探しているものは、わたしたちが見ているものである”[197]

あなたが手にしているこの本、あなたがいる部屋—簡単に言えば、あなたの目の前の全てのイメージ—はあなたの脳の中で認識されている。これらのイメージを見ているのは、目が見えず、耳も見えず、意識もない構成原子なのだろうか。一部の原子だけがこのような機能を手に入れた理由は何か。考えたり、理解したり、覚えたり、喜んだり、悲しんだりという全ての人間の行為は、これらの原子に起こる科学反応から成り立っているのだろうか？

原子の中に意志を見いだそうとするのは意味がない。見て、聞いて、感じることのできる人間は単なる物質を超えた存在であり、“生きて”いる。物質でもイメージでもない。この存在が、私たちの体のイメージを使って、目の前にある知覚に従って反応しているのだ。

この存在とは魂である。

この文章を読んでいる知性ある存在は、原子や分子の寄せ集めでもそれらが化学反応したものでもなく、魂なのだ。

真の絶対的存在

ここで私たちは、実に意義深い疑問に直面する。私たちが立ち向かっている世界は、私たちの魂の知覚で成り立っている。では、それらの知覚の源は何なのか？

それに答えるためには、私たちが物質を認識するのは想像の中だけで、外的な世界にあるそれに対応するものに直接触れることはできない、ということを考えてほしい。物質は実際には私たちにとって知覚されたものであり、いわば“創造された”ものである。つまり、当然ながら別の力が働いたことを意味する。更にこの創造は連続したものでなければならない。断続的であるとすれば知覚されてもすぐに消え、失われてしまう。同じことがテレビの画像にも言える。テレビが映るのは、信号が電波で運ばれている間だけである。

それでは、私たちが目にする星や地球、植物、人間、私たちの体やその他のものを連続的に見ている魂を作っているのは誰なのか？

答えは明確だ。この世界には、物質世界そのものを創り出した優れた創造主が存在する。創造主は今も止むことなく彼の創造物を創り続けている。この創造主の創造力の素晴らしさから考えても、創造主は永遠の力を持っていると言える。

創造主は、彼が私たちに贈ってくださった本の中で、創造主自身、この世界、そして私たちの存在の理由について述べている。

この創造主こそ神であり、創造主のお書きになった本がコーランである。

「本当にアッラーは、天と地の運行が外れないよう支えられる。もしそれら両者が、外れることがあるならば、かれをおいて何ものもこれを支え得るものはない。本当にかれは、我慢強い方、何回も赦される方であられる」(ファティール章41節)

この節では、神の力のもとで物質世界がどう維持されているかについて述べられている。神が、この宇宙、地球、山や全ての生物・非生物を創造し、絶えずその力で全てを維持している。神はこの物質世界において自らをアル・ハーリクという名で表される。神はアル・ハーリク、すなわちあらゆるものの創造主、無からの創造主である。このことは、神によって創られた存在物から構成される物質世界が私たちの脳の外側にあることを示している。しかし、創造と全知という優れた力の奇跡とそれを明示する手段として、神は私たちに"幻想"、"影"あるいは"イメージ"という形でこの物質的世界を示されているのだ。神の創造力があまりに完璧である結果、人間は決して脳の外側の世界に直接触れることができなくなった。物質的世界の真の姿を知るのは、神のみなのである。

上記の節はまた違った解釈ができる。神は、人々が目にする物質的世界のイメージを保持しているというものだ。(神は、何でも知っている。)神が、この世界のイメージを私たちの心に映し出すつもりがなければ、世界そのものの存在が失われ、私たちは決してそこに触れることができなくなる。

私たちが物質的世界に決して接触することができないという事実は、また「神はどこにいるのか？」という多くの人々が抱える疑問に対する答えにもなる。

最初に述べたように、多くの人々が神の力を理解できずにいる。そこで、神が天国のどこかにいて、世間の俗事には一切干渉していないと考えてみよう。(神がそれ以上の存在であることは確かだ)この論理は、世界が物質の集まりであり、神はこの物質的世界の"外側"にいるという仮定に基づいている。

しかし、私たちは物質的世界には決して接触できないように、それに関する知識も持つことができない。私たちにわかるのは、これらのものを存在せしめた創造主—つまり神—の存在だけである。この事実を説明するために、イマム・ラッバニ(Imam Rabbani)のような偉大なるイスラム教学者たちは、唯一絶対の存在は神であり、神を除いては、全てのものは影の存在であると述べてきた。

これは、私たちが見ている世界は、完全に私たちの脳の中にあり、外的な世界にあるそのものに直接的に触れ、経験することは全く不可能であるためだ。

つまり、私たちが決して到達することのできない物質的世界の"外"に神がいるという考えは、全くの誤りであることになる。

神は"あらゆるところに"存在し、全てを取り囲んでいる。この現実は、コーランでは次のように説明されている。

「…かれの玉座は、凡ての天と地を覆って広がり、この2つを守って、疲れも覚えられない。かれは至高にして至大であられる」(アル・バカラ章255節)

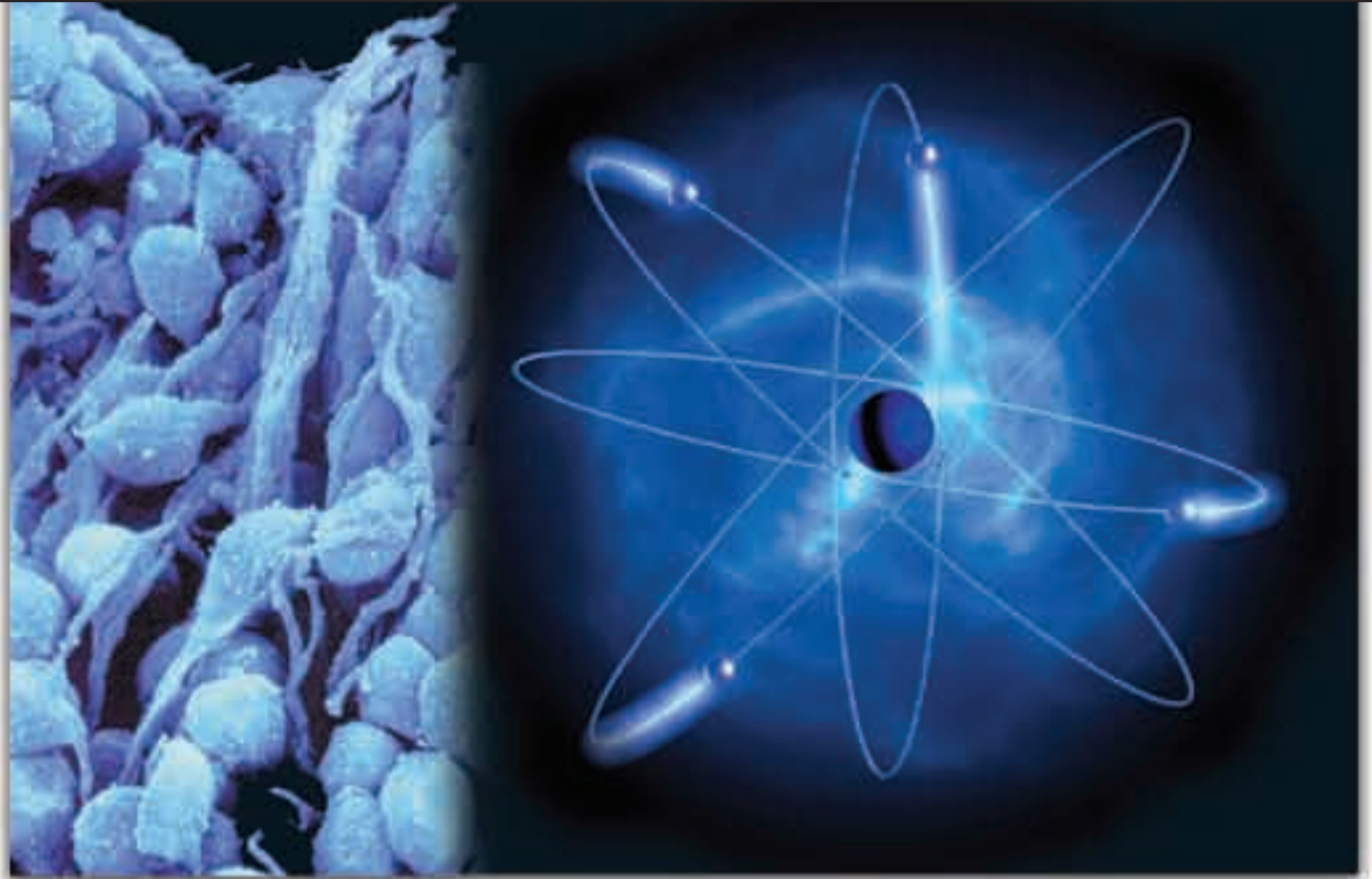
「ああ、かれらは主との会見に就いて疑っているのか。本当にかれこそは、凡てのものを取り囲む方であるのに」(フッシィラ章54節)

神は空間に縛られず、また全てのものを取り囲んでいるという事実は、次の節でも言及されている。

「東も西も、アッラーの有であり、あなたがたがどこに向いても、アッラーの御前にある。本当にアッラーは広大無辺にして全知であられる」(アル・バカラ章115節)

物質は神の姿を見ることはできない。しかし、神は神があらゆる姿に創り出した物質を見ることができる。このことについて、コーランでは次のように述べられている。**「視覚ではかれを捉えることはできない。だがかれは視覚そのものさえ捉える。またかれは全てのことを熟知され、配慮されておられる」**(アル・アンアーム章103節)つまり、私たちは神の存在を目で認識することはできないが、神は、私たちの内も外も、つまり視界も考えも全てを完全に取り囲んでいるのである。私たちは神の知識を借りるほかに言葉を発することはできず、また息を吸うこともできないのだ。

人間は、自分たちが"外的な世界"とみなしている概念を見ているが、私たちに最も近い存在は神自身である。次のコーランの節の秘密がこの現実の中に隠されている。**「本当にわれは人間を創った。そしてその魂が囁くことも知っている。われは(人間の)脛動脈よりも人間に近いのである」**(カーフ章16節)人間の体が"物質"で作られていると考えると、この重要な事実は理解できない。脳を自分自身だと考えれば、"外的な世界"として受け入れているものは、ほんの20センチから30センチしか離れていないことになる。しかし、物質と考える全てのものが脳の中の概念に過ぎない

脳はタンパク質と脂肪の分子でできた細胞の塊である。ニューロンと呼ばれる神経細胞で構成されている。肉の塊である脳は、イメージを見たり、意識を構成したり、あるいは“自我”と呼ぶ存在を創り上げるたりするような能力を持たない。このことから、魂の存在というものが明白に察せられる。

とすれば、外側とか内側、遠いとか近いといった概念は全て意味を失う。神は人間を取り囲んでいて、際限なく近い場所に存在するのである。

神は「**われのしもべたちが、われに就いてあなたに問う時、(言え)われは本当に(しもべたちの)近くにいる…**」(アル・バカラ章186節)という節で、彼が“**とても近くにいる**”ことを人々に知らしめている。同じことを述べている節はほかにもある。「**あなたの主は本当に人間を取り囲まれる**」(アル・イスラー章60節)

自分に最も近い存在が自分自身だという人間の考えは誤った考え方である。実は、神のほうが自分自身よりももっと近いところにいる。神は次の節でこの点に注意するよう促している。「**それならあなたがたは、(臨終の人の魂が)喉もとを塞ぐ時、(座って只)見守るばかりなのか。われはあなたがたよりもかれに近いのである。だがあなたがたには見えはしない**」(アル・ワーキア章83-85節)しかし、この節で明らかなように、人々は自分の目で見ることができないため、この驚くべき事実に気付かずにいるのだ。

一方、イマム・ラッバーニが指摘するように、影にすぎない人間が神から独立した力を持つことは不可能だ。「**本当にアッラーは、あなたがたを創り、またあなたがたが、創るものをも(創られる)**」(アッ・サーッファート章96節)というこの節は、私たちが経験することは全て、神の支配下で起こることを示している。コーランでは、これについては「**あなたが射った時、あなたが当てたのではなく、アッラーが当てたのである**」(アル・アンファール章17節)に述べられており、人間のいかなる行為も全て神に依存していることが強調されている。私たち人間は影の存在であるため、自ら行動を起こすことはできないのだ。しかしながら、神は私たちが自分で行動しているという感覚を我々影の存在に与えてくださっている。実際には、全ての行為を行っているのは神なのである。

人間はこの現実を認めたくないと考え、自分は神から独立した存在であると思い続けようとするかもしれない。だが、それでは何も変わらないのだ。

あなたが所有するものは全て本質的に存在しない

私たち人間は“外的な世界”に直接触れることはできず、ただ神が私たちの魂に見せてくださっている複製物を現実だと思っている。これは科学的にも論理的にも、筋の通った明白な事実である。しかし人々はこれを受け入れようとしない。

この問題について誠実に正面から取り組めば、あなたの家も、その中の家具も、自動車も、オフィスも、宝石も、銀行口座も、衣服も、配偶者も、子供たちも、同僚も、あなたが所有する全てのもの、つまり、五感で認知するものは“レプリカ世界”の一部であることにすぐに気付くはずだ。もちろん、お気に入りの歌手の歌声も、座っている椅子の堅さも、好きなにおいの香水も、温かいと感じる太陽も、花々の美しい色も、窓を横切って飛ぶ鳥も、水の上を疾

ここに書かれたことについて深く考えれば、誰かに教わらなくとも、この驚くべき、素晴らしい事実に気付くはずだ。地球は人間を試すためだけに創られた球体である。短い人生という形で、華やかで魅力的に描かれる概念によって、人間はその力を試されているのだ。しかし、そうした概念の本質に触れることは決してできない。

走するボートも、土の肥えた庭も、仕事で使うコンピューターも、最新技術を搭載したハイファイステレオも、全て例外ではない。

これが現実なのである。なぜならば、この世界は人間を試すために創られたにすぎないからだ。人間は限られた命の中で、手の届かない本物の世界を故意に魅力的に映し出した幻を知覚させられ、試されているのである。このことについては、コーランにも述べられている。

「様々な欲望の追求は、人間の目には美しく見える。婦女、息子、莫大な金銀財宝、(血統の正しい)焼印を押した馬、家畜や田畑。これらは、現世の生活の楽しみである。だがアッラーの御側こそは、最高の安息所である」(アーリ・イムラーン章14節)

たいていの人々は、財産や富、金銀財宝、銀行口座、クレジットカード、デザイナーブランドの服、新型車—つまり、彼らが所有している、あるいは所有したいと願う、贅沢品に魅せられて宗教を捨てる。彼らには現世しか目に入っていない。来世のことを忘れているのである。現世のうわべだけの魅力的な豊かさに騙され、来世において自分が豊かになるために必要な、祈りを捧げることや貧しい人々への施し、礼拝を忘れている。彼らは「私にはすることがたくさんある」、「私には理想がある」、「私には責任がある」、「時間がない」、「やらなければならない仕事がある」、「そのうちにやるから」と言い訳をする。自分たちの人生を全て現世での繁栄のためだけに注ぎ込もうともする。この誤った概念はコーランでは次のように述べられている。**「かれらの知るのは、現世の生活の表面だけである。かれらは(事物の)結末に就いては注意しない」**(アッ・ローム章7節)

この章で取り扱っている事実は大変重要なものである。なぜなら欲や他人との境界は全く意味がないことを伝えているからである。この事実を立証すれば、人々が苦労して手に入れたもの、欲にかられてためた富、自慢の子供たち、自分に一番近いはずの配偶者、親友、体、地位、学校、祝日といったものは全て、影以外のなにものでもないことが明らかになる。それまで費やした努力と時間が無駄なものであることがわかるのだ。

自分の富や所有物、ヨットやヘリコプター、工場、土地、邸宅などをまるで自分が直接保持しているかのように自慢する人々がいるが、彼らは知らず知らずに自分を笑い者にしているようなものだ。これみよがしにヨットを走らせたり、自動車を見せびらかしたり、自分がいかに金持ちであるかを匂わすような富裕階級は、誰よりも人間としての地位が高いと思っている。彼らが自慢するものが実は単なる脳の中のイメージにすぎないと気付いたら、彼らは一体どうするだろうか。

夢の中では、確かに大きな家や、速い車、高価な宝石や札束の山、山のような金銀を所有しているだろう。あるいは高い役職に就き、工場をいくつも所有して何千人もの労働者を雇い、皆がうらやましがるような衣服を着ているかもしれない。しかし、夢の中の持ち物を自慢したら馬鹿にされるように、自分のイメージにすぎない現世の所有物を自慢してもやはり馬鹿にされるのが関の山だ。結局のところ、夢の中のものも、この世のものだと思っているものも、どちらも脳の中の単なるイメージにすぎないのである。

同じように、人々も現実というものを認識し、この世の世俗的な出来事に自分たちがどう反応してきたかを思い出せば、さぞかし罰の悪い思いをするだろう。他人と激しく争った人、金をだまし取った人、賄賂を受け取った人、偽作をした人、嘘をついた人、欲張る人、他人に迷惑をかける人、他人に危害を加えようとする人、地位欲や名誉欲の強い人、誰かをねたむ人、みせびらかすのが好きな人、誰よりも位の高い人間になりたい人……こういった人々はみな、それらが全て幻想の世界で行われていたにすぎないことに気が付けば、自らの行為を恥じることだろう。

この世界は神がお創りになり、それを個々の人間に見せてくださっている。つまり、この世の全てのものの究極的所有者は、神しか存在しない。これはコーランにもはっきり示されている。

「凡そ天にあり、地にある凡てのものは、アッラーの有であり、アッラーは凡ての事を、包含なされる」(アン・ニサーア章126節)

どんなに望んでも手の届かないものへの情熱で宗教を捨て、その結果永遠の命を失うことほど実に愚かしいことである。

ここで重要なことが1つある。全ての所有物、富、子供たち、配偶者、地位、名誉など、私たちの望むものが全て来世では消えてしまい、無意味になると言うわけではない。ここで示しているのは、私たちはそういった所有物に直接触れることはできないということである。それらは神が私たちを試すためにお示しになっているイメージでできた、脳の中で見ている概念にすぎないということを言っているだけだ。お分かりではあろうが、この2つには大きな違いがある。

中にはこの事実をすぐに認めたがらず、自分の持ち物は全て実際に存在しているとみなして自分自身を欺くほうを好む者もいるが、その人間とていつかは死ぬ。彼が来世で生まれ変わったとき、全ては明らかになり、**"視覚は鋭敏"**になる。(カーフ章22節)。その日が来たとき、彼は全てのものがもっとはっきりと見えるようになる。しかし、もし彼が想像上の目標を追いかけることに人生を費やしていたなら、生きなければよかったと願い、こう言うだろう。**「ああ、その(死)が(わたしの)終末であったならば、富は、わたしに役立たなかった。権威は、わたしから消え失せてしまった」**(アル・ハーッカ章27-29節)。一方、賢明なる者は、まだ時間があるうちに、現世の世界の偉大なる真実を理解しようとするだろう。さもなければ、彼はその人生の全てを夢を追う事に費やし、最後には嘆かわしいペナルティーを背負うことになる。コーランでは、現世で幻想(あるいは妄想)を追い続け、私たちの創造主である神を忘れた人々の最終的な状況について次のように述べられている。

「しかし信仰のない者は、そのすることなすこと、砂漠の中の蜃気楼のようなもので、渇き切った者には水だと思われる。だがやってくれば何も見出せない。そこではアッラーの御前であり、かれの勘定が払われることを知るであろう。アッラーは精算に迅速であられる」(アン・ヌール章39節)

唯物論者の論理的欠陥

本章では当初から、物質は―唯物論者が言うところの―絶対的なものではなく、むしろ神が無から創り出した影であり、その原型には人間は決して触れることができないと明言してきた。唯物論者は極端に独断的な方法で、彼ら

の哲学を打ち砕くこの明白なる事実を拒否し、それに異議を唱えるために根拠のない反訴を起こしている。

例えば、熱心なマルクス主義者で、物質哲学の20世紀における最も偉大なる代弁者のひとりであるジョージ・ポリッツァー(George Politzer)は、彼が物質の原型に触れることができることを証明する最大の証拠として“バスの例”を上げている。ポリッツァーによれば、理想主義者の哲学者でさえ、バスが自分に向かって走ってくれば逃げ出す、これはすなわち、彼らが現実に存在する物質にまさに直面しているから起こることであるという。[198]

また別の有名な唯物論者サミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson)も、本質的な物質には誰も触れることができないと言われ、石を蹴ることで石の本質に触れることができることを証明しようとした。[199]

ポリッツァーの師であるフリードリッヒ・エンゲルス(Friedrich Engels)も、弁証唯物論の創始者であるマルクスとともに、同じような例を示した。彼は「私たちが口にするケーキが単なる概念だとしたら、私たちの飢えを止めることはない」と言っている。[200]

マルクス、エンゲルス、レーニン(Lenin)といった有名な唯物論者の著書にも、「顔を叩かれれば、物質の存在は理解できる」といった衝撃的な文章とともに、同様の例が挙げられている。

そういった例を生み出した奇妙な解釈は、“私たちは本当の物質に触れることはできない”という説明を、唯物論者が視覚のみに限定したことから起こったものだ。彼らは、知覚とは視覚に限られていて、触覚的には物質の本質に直接的に触れていると考えている。バスが人をはねたところを見ると人々はこう言う。「見て！人がバスにはねられた！だからあの人は本物にぶつかったんだ」と。だが、彼らは衝突した際に経験する知覚―硬い金属の感触、衝突した際の衝撃、痛み―それらが実は脳で形成されたものであることを理解していないのだ。

夢の例

スターティングポイントが五感のうちのいずれであっても、私たちは私たちの外側に存在する外的な世界の実体に直接触れることはできない。これは明白な事実である。しかし、夢の中には実は存在しないものの存在を私たちは思い浮かべることができる。これは、上記の事実をはっきりと証明する方法の1つである。夢の中で、私たちはとても現実的な出来事を経験できる。階段から落ちて脚を折ったり、大きな自動車事故を起こしたり、バスの下敷きになったり、たっぷりと食事をして、満腹感を味わうこともある。こうした日常生活での経験によく似たことは夢の中でも経験でき、やはり日常生活での経験と同じような知覚を覚え、同じような気持ちがわき起こる。

バスにひかれる夢を見た人が目を開けると、そこは病院の中で―また夢の中にいて―自分が動けなくなっていることに気付く。しかし、これは全て夢のままだ。また、自動車事故で自分が死んだり、死の天使が魂を取りに来たり、来世での生活が始まる夢を見ることもできる。

イメージ、音、硬さ、痛み、光、色―夢の中で経験する出来事に関連した感覚―は、はっきりと認識できる。それらはまるで実生活での経験のように自然なものだ。夢の中で食べるケーキは、たとえそれが概念にすぎなくても、食べた者の胃袋を満たす。なぜなら、満足したという感覚も概念だからである。しかしながら、このとき、この人はベッドに横たわっている。階段も、交差点も、バスも、ケーキも存在しない。なぜならば、夢を見ている本人は“外的世界”に存在しない知覚と感覚を体験しているからだ。夢の中でも肉体的かつ外的な相関現象のない出来事を経験できるということは“私たちの外にある世界”の本質を決して知ることはできないことを証明している。“外的な世界”の本当の姿は、創世主である全能の神の啓示によってしか、知ることはできない。

唯物論者の哲学を信じる人々、特にマルクス主義者は、この事実を告げられると腹を立てる。彼らは、マルクスやエンゲルス、あるいはレーニンといった人々の表面的でいかにもばからしい理論を引き合いに出し、感情的に反論しようとする。

しかし、そういった反論は夢の中でもできることを彼らは気付くべきだ。彼らとて、夢の中で『資本論』を読んだり、会合に出席したり、素手での殴り合いをしたときの痛みを感じることはできる。夢の中で尋ねられれば、そのときに見ているものが絶対的な現実だと思うことだろう。起きているときに目にしているものが絶対的な現実であると考えるように。しかし、彼らが経験することは全て夢の中であろうと、日常の生活の中であろうと―その“原型”に触れることはできないということを知るべきだ。

共通の神経組織の例

ポリッツァーの自動車事故を例にとってみよう。もし、けがをした犠牲者の、五感から脳へつながる神経が、別の人間―仮にポリッツァーとしよう―の神経に平行してつながっていたとしたら、その犠牲者がバスに当たった瞬間、同時刻に自宅で腰を降ろしていたポリッツァーも同じ衝撃を感じるだろう。同じテープレコーダーにつながれた二台の異なるスピーカーから同じ曲が流れるように、ポリッツァーも事故に遭った人と全く同じ感覚を覚えるはずだ。ポリッツァーにもバスのブレーキ音が聞こえ、体への衝撃を感じ、折れた腕や血が流れ出すのが見え、骨折の痛みを覚え、手術室へ入っていくところや、ギブスの型の堅さ、治りつつある腕の弱々しさを感じるだろう。

ポリッツァーと同じく、事故の犠牲者の神経と神経をつなげば、誰でも事故をまるごと経験することができる。事故の犠牲者が昏睡状態に陥れば、みなが同じように昏睡する。それどころか、自動車事故に関係する知覚を全て何らかの装置で記録でき、それを繰り返す誰かに送ることができれば、その人は何度もバスに衝突される経験を味わうことになる。

しかし、この場合の人々がぶつかったバスのうち、一体どれが本物なのだろうか？この質問に対し、唯物論の哲学者たちは一貫した答えを持っていない。正しい答えはこうだ。自動車事故の犠牲者たちはみな、脳の中で細部にわたって事故を経験したのである。

同じ原理が他の例にもあてはまる。もし、ケーキを食べて満足感を覚えているエンゲルスの感覚神経が別の人間の脳につながれていたら、その人もエンゲルスがケーキを食べ終わった直後に満足感を感じるだろう。石を蹴ったあとで自分の足に痛みを感じた唯物論者のジョンソンの脳が別の人間につながっていたら、その人間も石を蹴った感覚と、足の痛みを感じるだろう。

さて、それでは、どちらのケーキまたは石が本物なのか？唯物論の哲学者たちはここでまた一貫した答えを出すことができない。正しく、かつ一貫した答えはこうだ。エンゲルスともうひとりの人間はどちらも同じケーキを食べ、脳の中で満足感を覚えた。ジョンソンともうひとりの人間はどちらも、石を思い切り蹴り上げた―もちろん、脳の中で、である。

前の例を使って、入れ替えをしてみよう。バスにはねられた人の神経をポリッツァーの脳に、自宅で腰掛けているポリッツァーの神経を事故の犠牲者の脳につなぐ。この場合、ポリッツァーは自分がバスにはねられたと感じるが、実際にバスにはねられた人は、衝撃を感じず、自分はポリッツァーの家で座っていると思うことだろう。全く同じ論理がケーキと石を取り上げた例にもあてはめることができる。

これらのことにより、唯物論がどれほど独断的であるかが明らかになったはずだ。唯物論の哲学は、物質以外何ものも存在しないという仮定に基づいている。しかしながら、実際には、人間は誰も物質に直接触れることはできず、つまり全てのものが物質から成り立っているという主張は正当とは認められないのである。有名な英国の哲学者デビッド・ヒューム(David Hume) はこの点について彼なりの意見を表明している。

自分自身と呼ぶ最も親しみのある場所へ足を踏み入れると、私はいつも熱あるいは冷たさ、光または影、愛または憎しみ、痛みまたは楽しみといった特定の知覚に遭遇する。知覚を覚えない自分に巡りあうことはできず、知覚以外の何ものも認められない。[201]

こうした知覚の外側に足を踏み出し、"ありのままの"物質に遭遇することはできない。従って、物質を人間が直接的に経験できる絶対的な存在だとみなす哲学を組み立てることは全く無意味である。理論としての唯物論は最初から全く根拠がないのである。

脳における知覚の構成は哲学ではなく、科学的事実である

唯物論者は、私たちがここで述べていることを哲学的見方だと主張している。しかし、人間が"外的な"物質世界と交わることができず、実際に交わっているのは脳の中の世界であるということは、明白な科学的事実である。これは哲学の問題ではない。医学部ではイメージと感覚が脳の中でどのように形成されるかを詳細に講義されている。20世紀の科学によって証明された事実、特に物理学によって証明された事実は、人間が物理的物質の原型に触れることができないこと、そしてある意味で、人間はみな脳にある"モニター"で見ていることをはっきりと示している。

科学を信じる者はみな、無神論者であろうと、仏教徒やその他の宗教の信者であろうと、この事実を受け入れなくてはならない。神の存在を否定する唯物論者でさえ、科学的な現実を否定することはできない。

カール・マルクス、フリードリッヒ・エンゲルス、ジョージ・ポリッツァーほか、その他の唯物論者たちがそういった簡単で明白な事実を理解できなかったということは驚きに値するが、彼らの科学的理解レベルが非常に低く、不十分であったことは確かだ。しかし、現代の私たちは、高度な科学技術によりこの明白なる事実を容易に理解できるはずである。一方で、唯物論者たちは、この事実を部分的に理解しただけで、それが彼らの哲学を完全に覆す可能性があることに気付き、恐れ、混乱しているという状態だ。

唯物論者の大きな不安

トルコの唯物論者グループは、しばらくの間、本書で検討されている事実―物質は脳で認識される―に対し実質的な反発運動は起こさなかった。このことから、私たちはまだ、こちらの論点を明快に示してはおらず、さらなる説明が必要なのではないかと考えた。だが、まもなくこの話題が世間に流布することに唯物論者が不安を感じ、大きな危惧を抱いていることが明らかになった。

しばらくすると、唯物論者は、その出版物や会議、パネルにおいて彼らが抱く危惧や恐怖心を声高に叫び始めた。動揺し、望みを失ったような彼らの話しぶりは、彼らが激しい知的危機に苦しんでいることを暗示していた。彼らのいわゆる科学的哲学の根源である進化論はすでに大きく揺るぎ始めていた。今や、彼らは更に大きな危機に瀕していたのだ。彼らにとってはダーウィン説以上に心の拠り所であった物質の絶対的優越性に対する信頼が、失われつつあることに気付いたからである。彼らにとってこの問題は、彼らの文化的構造を完全に覆す大きな脅威であることを宣言した。

唯物論者グループの不安と恐怖を最も率直な方法で表明したのは、レナン・ペクンル(Renan Pekunlu)という名の学者兼ライターで、唯物論を擁護する任務を負った定期刊行誌『サイエンス・アンド・ユートピア』に寄稿していた。彼は『サイエンス・アンド・ユートピア』の記事と参加したパネルの両方で、私たちの本『The Evolution Deceit』を最も脅威となる本として挙げている。ダーウィン説を否定する章以上にペクンルを当惑させたのは、今、あなたが読んでいる章であった。ペクンルはわずか一握りの読者に、理想主義の鼓吹に流されず、唯物論を信じ続けることを警告した。彼はまた、ロシアの残虐な共産主義革命の指導者であるヴラディミール・レーニン(Vladimir I Lenin)を引き合いに出した。人々にレーニンの100年前の著書『唯物論と経験批判論(Materialism and Empirio-Criticism)』を読むように薦め、「この問題については深く考えないほうがいい、さもなければ唯物論を見失い、宗教に流されることになる」というレーニンの勧告を繰り返すのみであった。先に述べた定期刊行物の記事の中で、ペクンルはレーニンの著書から次のくだりを引用した。

> 感覚として我々に与えられる外的な現実を一度でも否定すれば、信仰主義に対する武器を失うことになる。それは、不可知論または主観主義に陥ったことを意味するからである。そして、それこそが信仰主義なのである。爪一本でわなに陥り、鳥は墜とされる。そして我々マッハ主義者(現代実証主義者の哲学であるマッハ主義の信奉者)はみな理想主義のわなに陥る。“感覚”を外的な世界のイメージではなく、特別な“要素”として捉えた瞬間から、罠にかけられたも同然だ。それは誰の感覚でもなければ、誰の心でも、精神でも、意志でもないのだから。[202]

これらの言葉は、レーニンが私たちの論理を危険なものとみなし、自分の心や“共産党員”の心から抹消したいと考えていたことをはっきりと示している。現代の唯物論者についても同じことが言える。しかし、ペクンルやその他の唯物論者は、更に大きな悩みを抱えていた。というのも、100年前に比べ、明白なる説得力をもってこの確定的事実が社会に浸透しつつあるのを知っているからである。初めて、この問題が全く反駁できない状態で説明されつつあるのだ。

それでも、実に多くの唯物論科学者が表面的とはいえ、誰も物質の本質に触れることはできないという事実に反

窓の外の景色を見ている人は、実際にはその人の外側の景色を見ているわけではない。見ているのは、脳の中に映されたイメージである。

人間の目に届く光は、目の中の細胞によって電気信号に変換され、脳の奥にある視覚中枢へ送られる。脳の中の"意識"が脳に入った電気信号を受け取り、それを景色として認識するのである。

対の立場を取っている。本章で扱っているテーマは、人間が人生において偶然出会う中でも最も重要で最も刺激的なテーマだ。これらの科学者がこれほど重大なテーマに直面したことがないとは考えにくいが、彼らの発言や投稿記事における反応や立場を考えると、その理解度がいかに浅く、また表面的であるかがうかがい知れる。

何人かの唯物論者の反応が示すかぎり、唯物主義に対する彼らの盲目的な固執が、その論理をねじ曲げ、この問題の理解を更に妨げているように思われる。例えば、レナン・ペクンル同様、学者であり『サイエンス・アンド・ユートピア』のライターでもあるアラエディン・セネル(Alaeddin Senel)は「ダーウィン説の崩壊を忘れよ。本当に脅威となるテーマはこれである」と述べ、自分の哲学に根拠がないことを実感しつつ"言うことを証明する"よう暗に要求している。更に興味深いのは、セネルは彼が脅威とみなしているこの事実について全く把握できていないことを示す文章を書いていることである。

例えば、セネルがこの問題のみを議論した記事の中で、彼は脳が外的な世界をイメージとして知覚することを認めている。ところが、その後、イメージは2つのカテゴリーに分けられると主張する。それは、物理的相関関係を持つものと、持たないものの2種類で、外的な世界に関連するイメージの物理的相関物には人間は直接触れることができるというのである。これを証明するために、彼は次のように書いている。「脳の中のイメージが外的な世界と相関関係を持つのか、そうでないのかは、私にはわからない。しかし、同じことは電話での会話にもあてはまる。電話で誰かと話をするとき、私には話している相手の姿は見ることができない。しかし、相手と対面したときには、電話の内容を確認することができる」[203]

この言葉で彼は、知覚を疑うのであれば、その元になるものを見て、事実かどうかを確認することができる、ということを暗に示している。しかしながら、これは明らかに誤った概念である。というのも、私たちは物質そのものに直接触れることはできないからだ。"外側"にあるものに触れるために、心の外側に手を伸ばすことは私たちにはできない。電話の声は、客観的な相関物だろうか？確かに話をした相手と対面すれば、確認することはできる。しかし、その確認とて、脳の中での経験ではないか！

実際、彼のようなライターも、夢の中で同じ出来事を体験することができる。例えば、セネルが電話で話す夢を見て、話した相手に内容について確認する場合だ。あるいはペクンルの場合なら、夢の中で恐ろしい脅威に立ち向かっていると感じ、人々に100年前のレーニンの著書を読むように薦めることもできる。しかし、彼らが何をしたとしても、彼らが経験したそれらの出来事や、彼らが話をした人々が彼らにとっては概念にすぎないことを否定することはできない。

それでは、脳の中のイメージの相関性を肯定できるのは誰なのか？視覚中枢で見ている影の存在だろうか？唯物

論者であろうと、脳の外側にある情報を確認する“外側の”情報源を見つけることは不可能である。

全ての概念が脳の中で形成されていることを認めつつも、その概念の世界を“抜け出して”、“本当の”外的な世界に確認を求めることができると考えている者がいるとすれば、それは、その者の知覚能力が限られていて、歪んだ論理を有することを示すものだ。

しかしながら、ここで関連づけられている事実は、普通の理解度と論理を持った人ならば誰にでも簡単に把握できることである。これまで述べてきたこと全てを関連づければ、全く偏見を持たない状態であれば、私たちの感覚は外的な世界に直接触れることができないことを理解できるだろう。しかし、唯物論に盲目的に執着することで、人々の論理性は歪んでしまう。現代の唯物論者は、石を蹴ったり、ケーキを食べたりすることで物質の本質に触れることができることを“証明”しようとしていた彼らの師のように、重大な論理的欠点を持っている。

これは驚くべき状況ではない。真の論理を理解できないこと—つまり世界とその出来事を人並みの論理で解釈すること—は、不信心者には共通する特徴だからだ。コーランの中で、神はそういった人々のことを**「理解しない民」**(アル・マーイダ章58節)と特に称している。

唯物論者は、歴史上最大の罠に陥っている

この章で言及したトルコの唯物論者社会に吹き荒れている混乱の嵐は、唯物論者が完全なる敗北に直面していることを示している。現代科学は私たちが物質の原型に触れられないことを証明したばかりか、この事実を明白かつ率直、そして説得力に満ちた方法で説明している。唯物論者は、彼らの哲学そのものの基盤としている唯物世界が、決して渡ることのできない知覚的境界線のかなたにあることを認めている。この事実に直面し、彼らは何もできずにいるのだ。有史以後、唯物論的考え方は常に存在してきた。自分自身とその哲学に自信を持つために、唯物論者は彼らを創造された神に反旗を翻した。物質は永遠なものであり、それには創造主などは存在しない、というのが彼らの主張だった。自らの傲慢から神の存在を否定し、彼らが直接触れることができると信じている物質のみに救いを求めた。自分たちの哲学に自信を持っていた彼らは、いかなる議論もそれを否定することはできないと信じていたのだ。

物質の本質について表した本書の事実がこうした人々を驚愕させている理由はここにある。私たちがここで語ったことは、彼らの哲学の根拠を打ち破り、さらなる議論の礎を失わせるものなのだ。彼らの思想、生き方、傲慢、否定の拠り所であった物質が突然消えてしまった。人間はいまだかつて物質を“本来の姿”で見たことはなく、従って物質はいかなる哲学の根拠ともなりえない。

神の特性の1つに、不信論者に対する計略がある。これは次の説で述べられている。**「かれらは策謀したが、アッラーもまた計略をめぐらせられた。本当にアッラーは最も優れた計略者であられる」**(アル・アンファール章30節)

神は、唯物論者が物質が絶対的存在であるとみなし、そう信じさせることで彼らを罠に陥れ、これまで見たことのない方法でかれらを辱めている。唯物論者は彼らの持ち物、地位、彼らが属する社会、世界全体が絶対的なものだと思っている。更に、それらに依存することによって、神に対してますます傲慢になっている。自画自賛することで神に背き、不信心を募らせていく。またその一方で、物質の絶対性に強い確信を抱いていった。ところが、神についての理解が足りないために、彼らは神に囲まれていることに気付かなかったのである。神は、愚鈍な不信心者のなれの果てについてこう宣言している。

「それとも(あなたに対して)策を巡らす積もりか。だが背信者たちこそ、策謀にかかるであろう」(アッ・トール章42節)

唯物論者の敗北は、おそらく人類史上最大の知的敗北と言えよう。こうして、ひとりでに傲慢になっていった一方、唯物論者は神に対する戦いで途方もない策を用いたが、それでもやはり惨敗を喫している。**「このようにわれは、それぞれの町の有力者を罪深い者にして、そこで策謀させる。しかしかれらは自分自身に対して策謀するだけで、それに自ら気付かない」**(アル・アンアーム章123節)というこの節には、創造主に背こうとする人々が何も気付いておらず、その結果どうなるかがはっきりと示されている。別の節にも同じようなことが述べられている。

「かれらはアッラーと信仰する者たちを、欺こうとしている。(実際は)自分を欺いているのに過ぎないのだが、かれらは(それに)気付かない」(アル・バカラ章9節)

策略を図る一方で、不信心者は重要な事実に気付いていない。それは、彼らが経験することは全て、実は彼ら

の脳の中での経験にすぎず、彼らが練っている策略も、他の全ての行動と同じく頭の中で形成されたものにすぎないという事実である。彼らは自らが起こした愚行のあまり、常に神とともにあること忘れ、彼ら自身のよこしまな計画にはまっているのだ。

過去の不信心者と同様、現代の不信心者たちも、彼らのよこしまな計画の基盤を揺るがす現実に直面している。**「本当に悪魔の策謀は弱いものである」**(アン・ニサーア章76節)という節により、神はこれらの策略は全て、それが企まれた日にすでに失敗に終わることを運命づけられていることを語っており、信じる者には次の節により良い知らせを伝えている。**「かれらの陰謀は少しもあなたがたを害しないであろう」**(アーリ・イムラーン章120節)

また別の節で神はこう述べておられる。**「しかし信仰のない者は、そのすることなすこと、砂漠の中の蜃気楼のようなもので、渇き切った者には水だと思われる。だがやってくれば何も見出せない」**(アン・ヌール章39節)唯物論でも反逆者には蜃気楼が提供される。唯物論を用いるとき、その哲学は欺瞞以外の何ものでもないことを知るからである。神はそうした蜃気楼で彼らを欺き、物質の知覚を絶対的なものとして信じ込ませる。唯物論者として有名な教授や天文学者、生物学者、物理学者等はみな、地位や役職に関わらず単純に騙され、辱めを受ける。物質を神と考えたためである。人間がその本質に決して触れることのできない物質を絶対的なものと考え、彼らはそれを哲学やイデオロギーの根拠として、真剣に討議を進め、いわゆる"知性的"対話を行った。彼らは自分自身を賢いとみなし、宇宙の真実を論じたり、その限られた知性で神の言葉を真剣に解釈しようとしたりした。神は彼らの状況を次のように述べている。

「かれら(不信者)は策謀したが、アッラーも策謀なされた。だが最も優れた策謀者は、アッラーであられる」(アーリ・イムラーン章54節)

人間は世間一般の策謀から逃れることはできるかもしれない。しかし、不信者に対する神の策謀は断固たるものであり、それを逃れることはできない。彼らが何をしようと、だれに訴えようと、神よりほかに救い手を見つけることはできないのだ。コーランの中で神はこう述べている。**「アッラーの外にはどんな守護も援助も見いだすことは出来ない」**(アン・ニサーア章173節)

唯物論者はそういった罠に陥るとは思ってもいなかった。様々な手段が彼らの自由になる21世紀にあって、彼らは神の教えを否定し、他の人々をも不信心者にできると信じている。この不信心者たちの果てしない精神性とその目的について、コーランでは次のように述べられている。

「かれらは策謀して企んだが、われも策を巡らした。だがかれらは(それに)気付かない。だから見るがいい。かれらの策謀の最後がどんなものであったかを。本当にわれは、かれらとその民を一斉に滅ぼしてしまった」(アン・ナムル章50-51節)

これは、別の意味でコーランで述べられている事実が重要となってくる。つまり、唯物論者の所有物はみな頭の中にあり、従って彼らが所有するものは全て何の価値もないのだということを彼らに伝えているのだ。彼らの持ち物、工場、金、お金、子供、配偶者、地位、そして彼ら自身の体—いずれも彼らが絶対的とみなしているもの—はその手からこぼれ落ちてしまう。いわば、破壊されてしまうのである。そのときこそ、物質ではなく、神こそが唯一の絶対的存在であるという事実に直面するのだ。

この事実に気が付くことは、唯物論者にとってはおそらく最悪の出来事であろう。彼らが信頼を置いている物質が、決して足を踏み込むことのできない領域によってひきはなされてしまうことは、彼らの言葉を借りれば、この世で"臨終を迎える前に死ぬ"に等しいことだ。

これにより、神のみが彼らに残される。**「われが創った者を、われ一人に任せなさい」**(アル・ムッダッスィル章11節)というこの節で、人間はみなひとりひとり神と一緒にいるという事実を呼びかけている。この驚くべき事実は他の節でも繰り返されている。

「まさにあなたがたは、われが最初あなたがたを創った時のように、一人ひとりわれの許に来た。われがあなたがたに与えていたものを、凡て背後に残してきた」(アル・アンアーム章94節)

「また審判の日には、かれらは各々一人でかれの御許に罷り出る」(マルヤム章95節)

これはまた次の意味にも解釈される。物質を神と考えている者も、神から生まれ、神に返される。彼らは望むと望まざるとに関わらず、自らを神に捧げているのである。今や彼らは審判の日を待っている。その日が来れば、それを自ら理解しようとせずとも、神の許に召還され、審判を受けることになる。

主体の重要性

本書で説明されている物質を超える秘密を正確に理解することは最も重要なことである。山、平原、花、人々、海―簡単に言えば、私たちの目にする全てのもの、そして神がコーランの中でその存在を知らしめ、神が無から作り出した全てのものは、創られたものであり、確かに存在する。しかし、人間はその感覚組織を通じて、これらの存在の本質を見たり、感じたり、あるいは聞いたりすることはできない。人間が目にし、感じるものは、脳の中に見えるそれらの複製にすぎない。これは、全ての医学部で教えられる科学的事実である。同じことが、あなたが読んでいるこの本にもあてはまる。あなたは、この本の本質を見ることもできなければ触れることもできない。実物の本から発せられる光が目の細胞によって電気信号に変換され、その電気信号が脳の奥にある視覚中枢に伝えられているのだ。ここで、この本の姿が創り上げられている。言い換えれば、あなたは目を通して目の前にある本を読んでいるわけではない。この本は、あなたの脳の奥にある視覚中枢で創られているのである。あなたが今読んでいる本は脳の中の"本のコピー"にすぎない。原型となっている本は、神が見ているのである。

しかし、忘れてはいけないことがある。それは、物質が脳の中で形成される幻想であるという事実は物質を"受けつけない"ということではなく、物質の本質、つまり誰もその実物に直接触れることはできないことを知らしめているだけだということだ。更に、外側にある物質は、私たちに見えないだけでなく、他の存在物にも見えない。神が監視役として遣わす守護の天使も、私たちと同じようにこの世界を見ている。

「見よ、右側にまた左側に坐って、2人の(守護の天使の)監視役が監視する。かれがまだ一言も言わないのに、かれの傍らの看守は(記録の)準備を整えている」(カーフ章17-18節)

何よりも重要なのは、神が全てをご覧になっているということだ。神はこの世を詳細に創り上げ、その様子を隅々まで見守っておられる。これについて、コーランで次のように述べている。

「アッラーは、あなたがたの行いを御存知であられることを知れ」(アル・バカラ章233節)

「言ってやるがいい。アッラーは、わたしとあなたがたとの間の立証者として万全であられる。本当にかれは、そのしもべたちを知り尽くし、見ておられる方である」(アル・イスラー章96節)

忘れてはならないことは、神が『Lawh Mahfuz』(Preserved Tablet)と呼ばれる帳簿に全てを記載しているということである。私たちには全てが見えなくても、それらはみな帳簿の中にある。神は帳簿と呼ばれる"書物の母"に全てを記録していることを次の節でお示しになっている。

「それはわが許の母典の中にあり、非常に高く英知に溢れている」(アッ・ズフルフ章4節)

「またわが手許には、(凡ゆる始終の)記録の帳簿がある」(カーフ章4節)

「天と地の隠されたことは、等しく明瞭に書冊の中に(記されて)ある」(アン・ナムル章75節)

結論

これまで説明してきた内容は、あなたがたが今後の人生で目にするであろう最大の真実の1つである。私たちが見るもの、"物質的世界"と呼ぶものは実は私たちの心にある、私たちは外側の世界に存在する物質の原型に直接触れることはできない―これを証明することが、神と神の創造物の存在を理解し、神こそが唯一の絶対的存在であることを理解するのには欠かせない。

これを理解している人間は、この世界が大半の人々が考えているような種類の場所ではないことに気付くであろう。この世界は、道を目的もなくぶらついたり、居酒屋で喧嘩をしたり、豪華なカフェを見せびらかしたり、自分の財産を自慢したり、あるいは無意味な目標のために人生を捧げようとしている人々が考えているような、外的な存在を持った絶対的な場所ではない。この世界は、私たちの脳に映し出されたイメージであり、その本質に手を触れることはできないのである。先ほど述べたような人々が見ているのは心の中の概念であるのに、そのことには全く気付いていない。

この大変重要な概念は、神の存在を否定する唯物論者の哲学を根本から揺るがすものである。マルクスやエンゲルス、レーニンが動揺し、腹を立て、彼らの同胞にこんな概念を聞かされても"深く考えない"ように警告した理由はそこにある。そういった人々は、精神的に欠陥があり、知覚が脳の中で形成されているという事実を理解すること

さえできないのだ。彼らが脳で見ているものが“外的な世界”であると思いこみ、彼らはそうではない明白な理由を把握できないのである。

このように気付かないのは、神が信心者にお与えになった英知が彼らに欠けているのが原因である。コーランでは不信心者について次のように述べられている。**「かれらは心を持つがそれで悟らず、目はあるがそれで見ず、また耳はあるがそれで聞かない。かれらは家畜のようである。いやそれよりも迷っている。かれらは(警告を)軽視する者である」**(アル・アアーラフ章179節)よく反省すれば、誰でも理解できることである。精神を集中し、自分の周りのものがどのように見え、どのように感じるかをよく考えてみるといい。注意深く考えれば、今、考え、この本を読んでいる存在が、内なるスクリーンに映した“物質”と呼ばれる概念を見ているだけの単なる魂にすぎないことを感じ取れるはずだ。このことを把握できた者は誰でも、人類の大半を欺く物質世界の領域を離れ、真の存在の領域に入ったといえよう。

これは、歴史上数多くの有神論者や哲学者に理解されてきた事実である。ワーダートゥル・ウージュード(Wahdatul Wujood)の見方はこの事実を誤解し、全ての創造物の存在を拒否しているという点で真実から外れているものの、偉大なる学者イマム・ラッバーニはこの問題について正当な意見を述べている。イマム・ラッバーニによれば、全ての存在物はアッラーに対する“影の存在”だという。

イマム・ラッバーニ、ムヒディン・イブン・アラビ(Muhyddin Ibn Arabi)、メヴラナ・カミ(Mevlana Cami)のようなイスラム系知識人は、コーランのしるしと、彼らなりの推論を使ってこの事実に気付いた。ジョージ・バークレーのような西洋の哲学者たちも、彼らの道理を通して同じ事実を掴んだ。イマム・ラッバーニはその著書『手紙』(Mektubat)の中で、「物質世界そのものが“幻想と推測(概念)”であり、唯一絶対的な存在が神である」と書いている。

> 「神…神が創られたこれらの存在は実質的には無である…神は感覚と幻想の領域にそれら全てをお創りになった…宇宙もまた感覚と幻想の領域に存在するが、これは物質ではない…実際のところ、外側の世界には栄光なる存在(すなわち神)のほかには何もない」[204]

しかし、これまでにこの事実を理解しているものの数は常に限られている。イマム・ラッバーニのような偉大な学者は、この事実を大衆に伝えることには不都合があり、ほとんどの人々がこの事実を知らないと書いている。

だが、私たちが生きている現在、科学に後押しされた証拠により、この事実は経験的なものとなっている。物質が絶対的なものではなく、物質についての私たちの知識はごく限られているという事実は、初めて、具体的、かつ明快に文章として著わされた。このため、21世紀は一般の人々が神の事実を理解し、唯一の絶対神である神の民として導かれる転機となるだろう。21世紀には、唯物論的な19世紀の信条は歴史のゴミ箱へ追いやられる。そして神の存在と創造とが認識され、空間、時間といったものは実は存在しないという事実がより理解されることだろう。人間はようやく100年来包まれてきたベールと欺瞞と、迷信から解き放たれるのである。

いかなる影の存在も、この必然的な過程を妨げることはできない。

第18章

時間の相対性と運命の現実性

これまで述べてきたことで、私たちが“三次元空間”という現実に直接触れることはできず、脳の中でその一生を過ごすということを示してきた。反証を挙げることで、道理と科学的事実から引き離された迷信的な信条を明らかにすることは可能だ。いかなる方法をとっても、外的な世界の物質の原型に直接触れることはできないからである。これは、進化論を根元とする唯物論哲学の大きな前提―すなわち物質が絶対的で永久的なものであるという前提―に異議を唱えるものである。また、唯物論哲学の2つめの前提、時間もまた絶対的で永久的なものであるという前提も、やはり迷信的な仮定にすぎない。

時間の概念

私たちが“時間”と呼ぶものは、ある一瞬を別の一瞬と比較するための手段である。例えば、ある者が1つの物質をたたくと、特定の音が聞こえる。5分後に同じ物質をたたくと、今度は別の音が聞こえる。2つの音の間に間隔が空いていることを考慮し、この間隔のことを“時間”と呼ぶのである。しかし、2つめの音が聞こえたときには、最初に聞いた音はすでにその者の心の中の記憶になっていて、想像上の情報の一部でしかない。人間は、心に留めた記憶とともに生き、その中における特定の瞬間を比較することで時間という概念を生み出す。もしその人間が比較をしなければ、時間の概念も持ち得ないことになる。

同様に、ある者が誰かがドアから入って来て、部屋の真ん中にある肘掛け椅子に座るのを見たとする。相手が肘掛け椅子に座ったときには、彼がドアを開けて肘掛け椅子まで近づいてきたときのイメージが記憶のなかに情報の一部として蓄積される。この場合、肘掛け椅子に到着するまでの情報を思い出しながらそこに腰掛ける様子を比較したときに、時間の概念は発生するのである。

簡単に言えば、時間とは、脳に蓄積された情報を比較した結果、発生するものである。記憶ができなければ、脳はそういった解釈をすることができず、従って時間の概念を形成することはない。自分が30歳だと人間が決められるのは、彼がそれまでの30年に関する情報を心に蓄積してきたことによるのである。もし記憶というものが存在しなければ、それまでの30年について考えることはできず、その人間が生きているその“瞬間”しか経験できない。

時の超越を科学的に説明する

このテーマについては、様々な科学者や学者の説明を引用して明らかにしたい。

有名な知識人であり、ノーベル賞を受賞した分子遺伝学者のフランソワ・ジャコブ(Francois Jacob)は、時間がさかのぼって流れることについて彼の著書『Le Jeu des Possibles』で次のように述べている。

> 映画を逆回転させてみると、時間がさかのぼって流れる世界を想像できる。コーヒーからクリームが飛び出し、クリーマーに戻っていく世界。光源から光が放射されるのではなく、壁から光線が放出され、光源に集まってくる世界。水面に投げられた石が、数え切れないほどの水滴を引き寄せながら、ぴょんぴょんと人間の手に戻ってくる世界。しかし、そういう時間を遡らせた、日常とは全く逆の特徴を持つ世界では、人間の脳の情報処理過程や脳が情報を蓄積する方法も同じように逆に機能する。過去と現在についても同じことが言えるが、世界そのものは、私たちには今と同じように見えるだろう。[205]

しかし、人間の脳は、特定の出来事の連続に慣れてしまっているため、実際には先に述べたようにはいかない。私たちは常に時間は前に流れていくものと思っている。しかし、これは脳が決めたことであり、従って全く相対的なものにすぎない。現実には、時間がどう流れるかを私たちが知ることはできない。実際に流れているのかどうかさえ、定かではないのである！これは、時間が絶対的事実ではなく、単なる概念の形でしかないからだ。

ここで言う時間とは、アルバート・アインシュタイン(Albert Einstein)が著書『一般相対性理論(Theory of General Relativity)』の中で実証した概念のことでもある。リンカーン・バーネットはその著書『相対論はいかにしてつくられたか』(The Universe and Dr.Einstein)の中で、こう書いている。

> アインシュタインは、絶対的空間とともに、絶対的時間という概念―無限の過去から無限の未来へと流れ続ける、一定不変で、普遍的な時間の流れ―を放棄した。一般相対性理論を包む不明瞭さの大半は、色の感覚が知覚の1つであるように、人間が時間の感覚を知覚することに積極的でないことから派生している。宇宙空間が物質的物体の単なる羅列であるように、時間も単に出来事の羅列にすぎない。時間の主観性はアインシュタインが自身の言葉でわかりやすく説明している。「個人の経験は、一連の出来事の羅列に見える。このうち私たちが記憶している個々の出来事は、"前に"あるいは"後で"という基準に従って並べられているようにも見える。従って、個々の人間に"私時間"すなわち主観的時間が存在する。この主観的時間は計測できるものではない。ただ、わたしには、大きい番号の出来事は、それよりも小さい番号より後に起こった出来事であるというように出来事と番号を関連づけることはできる」[206]

人間の時間に対する主観的概念は、ある瞬間を別の瞬間と比較・対照することから発生する。例えば、種をまいて花を咲かせ、その花を切ってブーケを作る、という一連の流れを想像してみよう。この流れが"時間"である。しかし、現実には、時間とは"今この瞬間"に起きていることを、それ以前に起きた特定の時間と比較することで発生する概念である。

時間の相対性は、夢を使って簡単に説明できる。夢の中では何時間も経っているように感じていても、実際には数分、あるいは数秒しか経っていないこともある。

バーネットが書いているように、アインシュタインが示しているのは「空間と時間は直覚を表現したものであり、色や形、大きさといった概念と同様、私たちの意識から切り離すことはできない」ということである。一般相対性理論によれば、「時間は、私たちが時間を計測する手段である出来事の順序から切り離して存在することはできない」[207]という。

時間は知覚から構成されている以上、知覚者に全て依存している―ゆえに相対的なのである。

時間の流れる速度は、私たちが計測に使う対象物によって異なる。人間の体には、どれだけ速く時間が過ぎているかを正確に示す自然の時計がないからだ。バーネットはこう書いている。「色を認識する目がなければ色というものが存在しないように、時間を区切るための出来事がなければ、その瞬間だとか、何時、何日といったものは存在しえない」[208]

時間の相対性は、夢の中で容易に経験できる。何時間も夢を見ていたように思っても、実はわずか数分だったり、ほんの数秒しかたっていなかったりすることもあるからだ。

要点を明確にするために、例を挙げよう。あなたは特別に設計された窓が1つしかない部屋に入れられ、ある一定の期間、そこに閉じこめられているとする。壁には時計があり、どれだけ時間が過ぎたかはわかるようになっている。この“間”、部屋の窓から、日の出、日の入りを特定の間隔で見ることができる。数日後、部屋でどれほどの時間を過ごしたかと尋ねられたら、あなたはときどき時計を見たり、太陽が上ったり沈んだりする回数を数えたりすることで収集した情報を基に、質問に答えるはずだ。例えば、たぶん3日だろう、というように。しかし、あなたをそこへ閉じこめた人間は、2日しか経っていないと言う。あなたが窓から見た太陽は、偽の太陽で、部屋の中の時計は、正確な時計よりも速く動くように調整されており、あなたの計算は間違っている、と。

この例は、知覚者が何を参考とするかによって、過ぎ去る時間の早さが変わることを示している。

時間が相対的なものであるということは科学的事実であり、科学的方法論によっても証明されている。アインシュタインの一般相対性理論は、対象物の速さと重心からの距離によって時間の速さは変わると主張している。速度が増せば、時間は短くなり―圧縮され―やがて速度を落としながら停止点に近づき、完全に停止する、という論理である。

アインシュタイン自身も例を挙げている。ここに双子がいるとする。そのうちのひとりが地球に残り、もうひとりは光の速度に近い速度で宇宙へ出る。後者が地球に帰ってきたとき、自分の兄弟は自分よりもずっと歳をとっていることに気付く。なぜこのようなことが起こるかというと、光速に近い速度で旅をする人にとっては、時間の流れがずっと遅くなるためである。では父親が宇宙旅行に出て、息子が地球に残った場合はどうなるのか？出発したとき父親は27歳で、息子が3歳だったとしたら、30年後に戻ってきた父親はまだ30歳であるが、息子は33歳になっている。

時間の相対性は、時計の針をゆっくり進めるか、速く進めるかというだけの問題ではない。むしろ、原子を構成する粒子のような深いところで起きる物質システム全体の分化によるものである。時間が引き延ばされるような状況においては、人間の鼓動や細胞の複製、脳の働きといった機能の速度も落ちる。人間は日常的な生活を続けているので、時間の速度が落ちることには全く気付かないのである

コーランの相対性

現代科学の発見によって導かれた結論は、時間は唯物論者が考えているような絶対的なものではなく、相対的概念にすぎないということである。更に興味深いのは、20世紀になって初めて科学によって明らかになったこの事実が、すでに14世紀前に、コーランによって人類に伝えられていたということだ。コーランには、時間の相対性に関する様々な記述がある。

時間は出来事や状況、条件に依存する心理学的概念であるとする科学的に証明された事実は、コーランの様々な節に記載されている。例えば、人間の一生は、コーランで告げられているようにとても短い。

「その日かれは、あなたがたを呼び出される。その時あなたがたは答え、かれを讃える。またあなたがたが(墓の中に)留まったのは、片時に過ぎないと思うであろう」(アル・イスラー章52節)

「かれが、かれらを招集なされる日、かれらは昼間の一刻も滞留しなかったのように(感じて)、互いによく覚えているであろう」(ユーヌス章45節)

中には、人によって時間の認識の仕方が異なることや、ときにはとても短い時間をとても長いものに認識することについても言及されている。次の、来世で審判を受けている最中に交わされる会話はよい例である。

「かれらは仰せられよう。『あなたがたは、地上に何年滞在していたのか』かれらは申し上げよう。『わたしたちは一日か、一日の一部分滞在していました。勘定役(天使)にお問い下さい』かれは仰せられよう。『あなたがたの滞在は束の間に過ぎない、あなたがたが(このことを)知っていたならば』」(アル・ムウミヌーン章112-114)

また別の節では、状況が異なれば時間の流れる速さも異なることが述べられている。

「かれらはあなたに、すばやい懲罰を求める。だがアッラーは約束に背かれない。本当に主の御許における一日は、あなたがたの計算する千年に当る」(アル・ハッジ章47節)

「天使たちや聖霊(大天使ジブリール)は、一日にして、かれの許に登る。その(一日の)長さは、5万年である」(アル・マアーリジュ章4節)

「かれは、天から地までの(凡ての)事物を統御なされる。それからそれ(万有)は一日にちして、かれの許に登って行く。その(一日の)長さは、あなたがたの計算する千年である」(アッ・サジダ章5節)

これらは全て、時間の相対性を明白に説明した文言である。20世紀の科学においてようやく理解されたばかりの真理が、1400年前にコーランによって人々に伝えられていたという事実は、コーランがあらゆる時間と空間を取り囲む神による啓示であることを示している。

コーランにはその他にも時間が概念であることを示す節がたくさん存在する。これは特に物語において明らかになっている。例えば、神は洞窟の仲間(Companions of the Cave)とコーランの中で呼ばれる信者の一団を3世紀以上もの間深い眠りにつかせた。しかし目覚めた彼らは、それほど長い間眠っていたとは思わなかった。

「われはそれから洞窟の中で幾年もの間、かれらの聴覚を妨げた。それからわれは、かれらを呼び起こし、2団のどちらが、よくかれらの(滞在)期間を計算出来るかを知ろうとした」(アル・カハフ章11-12節)

「こんな(状態の所)に、われはかれらを(眠りから)覚して、互いに問わさせた。一人が言った。『あなたがたは(ここに)どれ位滞在したのですか』するとかれらは、『わたしたちは一日か、一日足らずの滞在です』と(答えて)言った。(しばらくしてまた)言った。『アッラーはあなたがたが滞留したことを最もよく知っておられます……』」(アル・カハフ章19節)

また、下記の節の状況からも、時間が心理学的概念であることがはっきりとわかる。

「また、根底から壊滅してなくなった町を通り過ぎた者のようにかれは言うのであった。『アッラーは、どうのように死に絶えたこの町を甦らされるのだろうか』ところがアッラーは、百年の間かれを死なせ、それから甦らせた。そして『あ

時間とは、完全に知覚者の主観による概念である。同じ時間が、ある人にとってはとても長く感じることがあれば、別の人には短く感じることがある。どちらが正しいかを理解するためには、時計やカレンダーといった基準となるものが必要だ。そういった基準となるものがなければ、正しい判断を行うことはできない。

なたはどれくらい滞在したのか』と言われた。かれは(答えて)申し上げた。『わたしは1日か半日過ごしました』かれは言われた。『いや、あなたは百年滞在したのだ。だがあなたの食べ物と飲み物を見なさい。それはまだ年を経ていない。またあなたのロバをみなさい。われは、それを人々への一つの印としよう。なおその骨を見なさい。われがどうそれらを起こし、それから肉を着せるかを』それが明示された時かれは、『アッラーが凡てのことに全能であられることが分かりました』と言った」(アル・バカラ章259節)

上記の節では、時間を創作した神は時間に縛られていないことが明確に強調されている。一方、人間は神が定めた時間に縛られる。節にあるように、人間は、自分がどれだけ眠っていたかを知ることさえできない。こういった場合、[精神の歪んだ唯物論者のように]時間が絶対的なものであると主張することは全く非論理的である。

運命

時間の様々な相対性はきわめて重要な事実を明らかにしている。私たちにとって10億年とも思われる長さの時間でも、別の次元ではほんの1秒にしかならないかもしれない。更に、この世界の始まりから終わりまでにあたるような莫大な長さの時間でも、また別の次元では1秒どころかほんの一瞬かもしれない。

これこそが、ほとんどの人々、特に運命を完全否定する唯物論者には理解されていない運命の本質である。運命とは、過去または未来におけるあらゆる出来事を知る神の全知なのだ。ほとんどとまではいかないまでも多くの人々は、神がまだ人間が経験していない出来事をどうやって知りえるのかを疑問に思っており、それが運命の正当性を理解されないことにつながっている。しかし、まだ経験していないのは、あくまでも人間の側の話だ。神は時間や空間に縛られることはない。なぜならば神自身が創られたものだからである。それだからこそ、神にとっては、過去も、未来も、現在も全て同じなのである。神にとっては、あらゆることがすでに起こっており、終わっているのである。

著書『相対論はいかにしてつくられたか』の中で、リンカーン・バーネットは一般相対性理論がいかにしてこうした洞察につながったかを説明している。バーネットによれば、宇宙は「宇宙規模の知性によってのみ、その荘厳さの内に取り囲まれる」[210]ことができるという。バーネットが言う「宇宙規模の知性」とは、宇宙全体を支配する神の叡智と知識である。定規の始まり、中間、最後やその間の単位が容易に計れるように、最初から終わりまでを一瞬のように支配している時間を神は御存知なのだ。人間は、神がその者のために創りだした運命を目撃する時間が来たときにのみ、その出来事を経験できるのである。

社会が運命というものを歪めて理解していることについて、考え直す必要もある。この歪められた信念によって、神は全ての人間に"運命"を決定づけているが、時に人間はそれらの運命を変えることができるという迷信を信じ込んでいる人々がいる。例えば、死の淵から生還した患者について、人々は「彼は運命に打ち勝った」というような迷信的発言をする。しかし、誰も自分の運命を変えることはできない。死の淵から生還した人は、そのときにはまだ死ぬ運命になかっただけだ。「私は運命に打ち勝った」と言って自らを欺き、そういう考えを改めようとしない人々にとっては、それが運命だということを、ここでもう一度強調しておきたい。

運命とは、神の永遠の知識である。時間とは一瞬であることをあることを知り、あらゆる時間と空間を支配する神にとって、全てのことは運命の中で決定され、完了するのだ。

時間は神のためにあるもの、人間にとって未来に起こるように思える出来事でも、コーランの中では、すでにずっと前に起こったかのように語られているということは、コーランの一節を読むことで理解できる。例えば、未来において神が授けることになっている勘定がすでに授けられている出来事として書かれている節がある。

「ラッパが吹かれると、天にあるものまた地にあるものも、アッラーがお望みになられる者の外は気絶しよう。次にラッパが吹かれると、見よ、かれらは起き上がって見まわす。その時大地は主の御光で輝き、(行いの)記録が置かれ、預言者たちと証人たちが進み出て、公正な判決がかれらの間に宣告され、(少しも)不当な扱いはされない。人々は、その行ったことに対して、十分に報いられよう。かれは、かれらの行った凡てを最もよく知っておられる。不信者は集団をなして地獄に駆られ、かれらがそこに到着すると、地獄の諸門は開かれる。そして門番が言う。『あなたがたの間からでた使徒は来なかったのですか。(そして)主からの印をあなたがたのために読誦し、またあなたがたのこの会見の日のことを警告しなかったのですか』かれらは(答えて)言う。『その通りです。そして不信者に対する懲罰の言葉が、真に証明されました』(かれらは)『あなたがたは地獄の門を入れ。その中に永遠に住みなさい』と言われよう。何と哀れなことよ、高慢な者の

住まいとは。またかれらの主を畏れたものは、集団をなして楽園に駆られる。かれらがそこに到着した時、楽園の諸門は開かれる。そしてその門番は、『あなたがたに平安あれ、あなたがたは立派であった。ここに御入りなさい。永遠の住まいです』と言う」(アッ・ズマル章68-73節)

これについて書かれた節はこれ以外にもある。

「そして各々の魂は、追手と証言者に伴われて来る」(カーフ章21節)

「また大空は千々に裂ける。天が脆く弱い日であろう」(アル・ハーッカ章16節)

「かれらが耐え忍んだので、かれは楽園と絹(の衣)でかれらに報われ、その(楽園の)中で、寝床の上にゆったりと身を伸ばし、かれらは酷暑の太陽も、凍える寒気もおぼえないであろう」(アル・インサーン章12-13節)

「また獄火は、誰でも見る(程の)者に(ありありと)現わされる」(アン・ナーズィアート章36節)

「だがこの日は、信仰する者が不信者たちを笑い」(アル・ムタッフィフィーン章34節)

「犯罪者たちは火獄を見て、そこに落とされると知るが、それから逃れる術のないことが分かるであろう」(アル・カハフ章53節)

これらを読めばわかるように、(人間の視点から見て)死後に起こる出来事は、コーランのなかではすでに経験した過去の出来事として扱われている。神は人間が閉じこめられている相対的な時間枠に縛られてはいない。神が時間に関係なくこれらの出来事を望まれたのである。つまり人間はすでにそれらを行っているのであり、そういった出来事を全て乗り越え、終了しているのだ。どんな出来事も、大小に関わらず、全ては神の知識の中にあり、書物に記録されているということは、次の節ではっきりと示されている。

「あなたが何事に従事していても、またクルアーンのどの部分を読誦していても、またあなたがたがどんな行いをしていようとも、あなたがたがそれにうちこんでいる限り、われは必ずあなたがたのための立証者である。天地の微塵の重さも、あなたの主から逃れられない。またそれよりも小さいものでも、大きいものでも(凡て)はっきりと書物の中に(記されて)ないものはないのである」(ユーヌス章61節)

唯物論者の不安

本章で論じられている事実、特に物質、時間、空間に関する事実は、極めて明確である。前述したように、これらはある種の哲学とかものの考え方といったものではなく、明白なる科学的事実であり、疑問の余地はない。この点に関しては、道理的にも、論理的にも異論の入る余地はないのである。私たちにとって、世界—それを構成する物質とそこで暮らす人間たち—は錯覚に基づいた存在であり、私たちの心の中で経験し、直接触れることの出来ない知覚の集合体なのだ。

唯物論者は、このことをなかなか理解することができない。ポリッツァーのバスの話はその良い例だ。ポリッツァーは彼が概念から抜け出すことができないのを技術的には知っていても、特定のケースのみでしかそれを認めることができなかった。彼は、出来事は脳の中で起こるが、バスが衝突した瞬間にその出来事は脳を抜け出し、肉体的現実とみなされると考えていた。この場合の論理的欠陥は明らかだ。ポリッツァーは、「私が石を蹴る。私の足が痛む。ゆえに石は存在する」と言った、同じ唯物論者であるサミュエル・ジョンソンと同じ過ちを犯している。ポリッツァーはバスが衝突した後の衝撃も単なる知覚にすぎないことを理解できなかったのである。

唯物論者がこの事実を理解できない潜在的な理由として、彼らがそれを理解した場合に直面しなければならない現実を恐れていることが挙げられる。リンカーン・バーネットは、この事実を"認める"だけで唯物論科学者に大きな影響を与えることになるという不安を語っている。

物質的な現実は、実は知覚という影の世界にすぎないと哲学者が意見を変えたことで、科学者も人間の感覚には限界があるという警告に耳を傾け始めた。[211]

物質の本質に手を触れることができないという事実や、時間は概念であるという事実を理解し始めると、唯物論者の心のなかに大きな不安が頭をもたげる。唯物論者は唯物論を絶対的なものとしてそれだけを心の拠り所としているからである。ある意味で、唯物論者にとって唯物論は崇拝すべき偶像のようなものなのだ。自分が進化を経て、物質と時間によって創られた存在だと考えているためである。

自分が住んでいる世界にも、その本質にも、自分自身の体や他人、その他、その考え方に大きく影響を受けた唯

物論哲学者など、端的に言えばどんなものであっても、それに触れることができないと感じると、唯物論者はそれに対する不安に圧倒されてしまう。彼が拠り所とし、信じてきたもの全てが突然消え去るのだ。次の節にも述べられているように審判の日に経験するはずの絶望を、本当の意味で味わうのである。**「その日かれらはアッラーに服従、帰依を申し出で、またかれらが捏造していたものは、かれらからはぐれ去るであろう」**(アン・ナフル章87節)

それ以後、この唯物論者は、彼が本当は外側にある本物の物質と対峙していると信じようとし、"証拠"を作り上げようとする。拳で壁を叩き、石を蹴り、叫び声を上げるだろう。しかし現実からは決して逃れられないのだ。

唯物論者は自分が頭の中からこの現実を忘れ去りたいと願うように、他の人々に対してもそれを忘れてほしいと願う。物質の本質が世間一般の人々に知られるようになれば、彼ら自身の哲学の古さや彼らの世界観の無知さが世間の目にさらされることに気付く。彼らのものの見方を合理的に解釈する根拠はなくなる。ここに述べられた事実に彼らが激しく動揺するのは、こういった不安のせいなのだ。

神は、不信心者の不安は、来世ではもっと強くなると述べている。審判の日に彼らはこう告げられるのである。

「われが一斉にかれらを招集する日、邪神を信仰した者たちに(問うて)言う。『あなたがたが言い張っていた、仲間(邪神ども)はどこにいるのか』」(アル・アンアーム章22節)

来世においては不信心者は、彼らの所有物、子供たち、親しい友人たちが彼らのもとを離れ姿を消すのをいやでも目撃することになる。彼らは俗世界でそれらの原型と直接触れあっていると思い、自分たちは神のパートナーだと得意がっていたのだ。これについては、次の節に述べられている。**「見なさい。如何にかれらが自らを欺くか。またかれらの虚構したものが、かれらを迷わせたかを」**(アル・アンアーム24節)

信ずる者の利益

物質は絶対的ではなく、時間は概念であるという事実は、唯物論者に警告を与えるものだが、真に神を信ずる者にとっては、その逆が当てはまる。神を信ずる者は、物質の背後にある秘密を認識できたことを喜ぶようになる。この事実が全ての疑問を解く鍵となるからである。この事実を認識することで全ての秘密の鍵が解き放たれ、それまでは把握できないように感じていた多くの問題が容易に理解できるようになる。

前述したように、死、天国、地獄、来世、そして変化する次元といったものについて理解ができるようになるのだ。例えば「神はどこにいるのか？」、「神の前には何が存在していたのか？」、「神を創造したのは誰か？」、「墓地での人生はどれくらい続くのか？」、「天国と地獄はどこにあるのか？」そして「天国と地獄は今でも存在するのか？」といった重要な疑問に簡単に答えられるようになる。神がゼロからこの世界を創り上げたのだということがわかれば「いつ？」だとか「どこで？」という疑問は無意味なものになる。なぜなら、時間や場所というものは存在しないからである。空間が存在しないということが理解できれば、地獄も天国も地球も、実際には全て同じ位置にあることが理解できる。時間というものが存在しないことがわかれば、全てのことが一瞬にして起こるということが理解できる。何も私たちを待ち受けているものはなく、時間も過ぎ去っていかない。全てのことがすでに起こり、終わっているからだ。

この秘密が理解できれば、この世界は信ずる者にとって天国のような場所になる。あらゆる物質的心配や不安、恐れは消えてなくなる。世界には1つの主権国しか存在せず、神が神の望むままに物質的世界を創り上げたのであり、人間は神の方を向くだけでいいということがわかる。それにより人間は自らの全てを「あなたに奉仕のために捧げ」(アル・イムラーン章35節)ることになるのだ。

この秘密を理解することこそ、この世における最大の利益なのである。

更に、この秘密を理解することで、コーランに書かれているもう1つの重要な事実が明らかになる。それは「神は(人間の)頸動脈よりも人間に近いのである」(カーフ章16節)という事実である。誰もが知るように、頸動脈は人間の体内にある。体内にあるものより近いものが他に存在するだろうか？このことは、私たちが自分の脳を出ることができないという事実によって容易に説明がつく。この節もまた、この秘密を理解することでよりわかりやすくなるのである。

これは明白なる事実である。人間にとって神より他に救い主も供給主も存在しえないと言う事実を確立すべきである。神以外に絶対的なものは存在しない。神こそが、人間が逃避し、救いを求め、報酬を期待すべき唯一の絶対的存在である。

私たちがどの方向を向こうとも、そこには神の御顔があるのだから…

NOTES

1. Cliff, Conner, "Evolution vs. Creationism: In Defense of Scientific Thinking", International Socialist Review (Monthly Magazine Supplement to the Militant), November 1980.
2. Ali Demirsoy, Kalitim ve Evrim (Inheritance and Evolution), Ankara: Meteksan Publishing Co., 1984, p. 61.
3. Michael J. Behe, Darwin's Black Box, New York: Free Press, 1996, pp. 232-233.
4. Richard Dawkins, The Blind Watchmaker, London: W. W. Norton, 1986, p. 159.
5. Jonathan Wells, Icons of Evolution: Science or Myth? Why Much of What We Teach About Evolution is Wrong, Regnery Publishing, 2000, pp. 235-236
6. Dan Graves, Science of Faith: Forty-Eight Biographies of Historic Scientists and Their Christian Faith, Grand Rapids, MI, Kregel Resources.
7. Science, Philosophy, And Religion: A Symposium, 1941, CH.13.
8. Max Planck, Where is Science Going?, www.websophia.com/aphorisms/science.html.
9. H. S. Lipson, "A Physicist's View of Darwin's Theory", Evolution Trends in Plants, Vol 2, No. 1, 1988, p. 6.
10. Although Darwin came up with the claim that his theory was totally independent from that of Lamarck's, he gradually started to rely on Lamarck's assertions. Especially the 6th and the last edition of The Origin of Species is full of examples of Lamarck's "inheritance of acquired traits". See Benjamin Farrington, What Darwin Really Said, New York: Schocken Books, 1966, p. 64.
11. Michael Ruse, "Nonliteralist Antievolution", AAAS Symposium: "The New Antievolutionism," February 13, 1993, Boston, MA.
12. Steven M. Stanley, Macroevolution: Pattern and Process, San Francisco: W. H. Freeman and Co. 1979, pp. 35, 159.
13. Colin Patterson, "Cladistics", Interview with Brian Leek, Peter Franz, March 4, 1982, BBC.
14. Jonathan Wells, Icons of Evolution: Science or Myth? Why Much of What We Teach About Evolution is Wrong, Regnery Publishing, 2000, pp. 141-151
15. Jerry Coyne, "Not Black and White", a review of Michael Majerus's Melanism: Evolution in Action, Nature, 396 (1988), pp. 35-36
16. Stephen Jay Gould, "The Return of Hopeful Monsters", Natural History, Vol 86, July-August 1977, p. 28.
17. Charles Darwin, The Origin of Species: A Facsimile of the First Edition, Harvard University Press, 1964, p. 189.
18. Ibid, p. 177.
19. B. G. Ranganathan, Origins?, Pennsylvania: The Banner Of Truth Trust, 1988.
20. Warren Weaver, "Genetic Effects of Atomic Radiation", Science, Vol 123, June 29, 1956, p. 1159.
21. Gordon R. Taylor, The Great Evolution Mystery, New York: Harper & Row, 1983, p. 48.
22. Michael Pitman, Adam and Evolution, London: River Publishing, 1984, p. 70.
23. Charles Darwin, The Origin of Species: A Facsimile of the First Edition, Harvard University Press, 1964, p. 179.
24. Charles Darwin, The Origin of Species, Oxford University Press, New York, 1998, pp. 140, 141, 227.
25. Derek V. Ager, "The Nature of the Fossil Record", Proceedings of the British Geological Association, Vol 87, 1976, p. 133.
26. Mark Czarnecki, "The Revival of the Creationist Crusade", MacLean's, January 19, 1981, p. 56.
27. R. Wesson, Beyond Natural Selection, MIT Press, Cambridge, MA, 1991, p. 45
28. David Raup, "Conflicts Between Darwin and Paleontology", Bulletin, Field Museum of Natural History, Vol 50, January 1979, p. 24.
29. Richard Monastersky, "Mysteries of the Orient", Discover, April 1993, p. 40.
30. Richard Fortey, "The Cambrian Explosion Exploded?", Science, vol 293, No 5529, 20 July 2001, pp. 438-439.
31. Ibid.
32. Richard Dawkins, The Blind Watchmaker, London: W. W. Norton 1986, p. 229.
33. Douglas J. Futuyma, Science on Trial, New York: Pantheon Books, 1983, p. 197.
34. Charles Darwin, The Origin of Species: A Facsimile of the First Edition, Harvard University Press, 1964, p. 302.
35. Stefan Bengston, Nature, Vol. 345, 1990, p. 765.
36. The New Animal Phylogeny: Reliability And Implications, Proc. of Nat. Aca. of Sci., 25 April 2000, vol 97, No 9, pp. 4453-4456.
37. Ibid.
38. Gerald T. Todd, "Evolution of the Lung and the Origin of Bony Fishes: A Casual Relationship", American Zoologist, Vol 26, No. 4, 1980, p. 757.
39. R. L. Carroll, Vertebrate Paleontology and Evolution, New York: W. H. Freeman and Co. 1988, p. 4.; Robert L. Carroll, Patterns and Processes of Vertebrate Evolution, Cambridge University Press, 1997, p. 296-97
40. Edwin H. Colbert, M. Morales, Evolution of the Vertebrates, New York: John Wiley and Sons, 1991, p. 99.
41. Jean-Jacques Hublin, The Hamlyn Encyclopædia of Prehistoric Animals, New York: The Hamlyn Publishing Group Ltd., 1984, p. 120.
42. Jacques Millot, "The Coelacanth", Scientific American, Vol 193, December 1955, p. 39.
43. Bilim ve Teknik Magazine, November 1998, No: 372, p. 21.
44. Robert L. Carroll, Vertebrate Paleontology and Evolution, New York: W. H. Freeman and Co., 1988, p. 198.
45. Engin Korur, "Gözlerin ve Kanatlar›n S›rr›" (The Mystery of the Eyes and the Wings), Bilim ve Teknik, No. 203, October 1984, p. 25.
46. Nature, Vol 382, August, 1, 1996, p. 401.
47. Carl O. Dunbar, Historical Geology, New York: John Wiley and Sons, 1961, p. 310.
48. L. D. Martin, J. D. Stewart, K. N. Whetstone, The Auk, Vol 98, 1980, p. 86.
49. Ibid, p. 86; L. D. Martin, "Origins of Higher Groups of Tetrapods", Ithaca, New York: Comstock Publising Association, 1991, pp. 485, 540.
50. S. Tarsitano, M. K. Hecht, Zoological Journal of the Linnaean Society, Vol 69, 1985, p. 178; A. D. Walker, Geological Magazine, Vol 177, 1980, p. 595.
51. Pat Shipman, "Birds do it... Did Dinosaurs?", New Scientist, February 1, 1997, p. 31.
52. "Old Bird", Discover, March 21, 1997.
53. Ibid.
54. Pat Shipman, "Birds Do It... Did Dinosaurs?", p. 28.
55. Robert L. Carroll, Patterns and Processes of Vertebrate Evolution, Cambridge University Press, 1997, pp. 280-81.
56.. Jonathan Wells, Icons of Evolution, Regnery Publishing, 2000, p. 117.
57. Pat Shipman, "Birds Do It... Did Dinosaurs?", p. 28.
58. Ibid.
59. Roger Lewin, "Bones of Mammals, Ancestors Fleshed Out", Science, vol 212, June 26, 1981, p. 1492.
60. George Gaylord Simpson, Life Before Man, New York: Time-Life Books, 1972, p. 42.
61. R. Eric Lombard, "Review of Evolutionary Principles of the Mammalian Middle Ear, Gerald Fleischer", Evolution, Vol 33, December 1979, p. 1230.
62. David R. Pilbeam, "Rearranging Our Family Tree", Nature, June 1978, p. 40.
63. Earnest A. Hooton, Up From The Ape, New York: McMillan, 1931, p. 332.
64. Malcolm Muggeridge, The End of Christendom, Grand Rapids, Eerdmans, 1980, p. 59.
65. Stephen Jay Gould, "Smith Woodward's Folly", New Scientist, February 5, 1979, p. 44.
66. Kenneth Oakley, William Le Gros Clark & J. S, "Piltdown", Meydan Larousse, Vol 10, p. 133.
67. Stephen Jay Gould, "Smith Woodward's Folly", New Scientist, April 5, 1979, p. 44.
68. W. K. Gregory, "Hesperopithecus Apparently Not An Ape Nor A Man", Science, Vol 66, December 1927, p. 579.
69. Philips Verner Bradford, Harvey Blume, Ota Benga: The Pygmy in The Zoo, New York: Delta Books, 1992.
70. David Pilbeam, "Humans Lose an Early Ancestor", Science, April 1982, pp. 6-7.
71. C. C. Swisher III, W. J. Rink, S. C. Antón, H. P. Schwarcz, G. H. Curtis, A. Suprijo, Widiasmoro, "Latest Homo erectus of Java: Potential Contemporaneity with Homo sapiens in Southeast Asia", Science, Volume 274, Number 5294, Issue of 13 Dec 1996, pp. 1870-1874; also see, Jeffrey Kluger, "Not So Extinct After All: The Primitive Homo Erectus May Have Survived Long Enough To Coexist With Modern Humans, Time, December 23, 1996.
72. Solly Zuckerman, Beyond The Ivory Tower, New York: Toplinger Publications, 1970, pp. 75-94.
73. Charles E. Oxnard, "The Place of Australopithecines in Human Evolution: Grounds for Doubt", Nature, Vol 258, p. 389.
74. Holly Smith, American Journal of Physical Antropology, Vol 94, 1994, pp. 307-325.

75. Fred Spoor, Bernard Wood, Frans Zonneveld, "Implication of Early Hominid Labryntine Morphology for Evolution of Human Bipedal Locomotion", Nature, vol 369, June 23, 1994, pp. 645-648.
76. Tim Bromage, New Scientist, vol 133, 1992, p. 38-41.
77. J. E. Cronin, N. T. Boaz, C. B. Stringer, Y. Rak, "Tempo and Mode in Hominid Evolution", Nature, Vol 292, 1981, pp. 113-122.
78. C. L. Brace, H. Nelson, N. Korn, M. L. Brace, Atlas of Human Evolution, 2.b. New York: Rinehart and Wilson, 1979.
79. Alan Walker, Scientific American, vol 239 (2), 1978, p. 54.
80. Bernard Wood, Mark Collard, "The Human Genus", Science, vol 284, No 5411, 2 April 1999, pp. 65-71.
81. Marvin Lubenow, Bones of Contention, Grand Rapids, Baker, 1992, p. 83.
82. Boyce Rensberger, The Washington Post, November 19, 1984.
83. Ibid.
84. Richard Leakey, The Making of Mankind, London: Sphere Books, 1981, p. 116.
85. Marvin Lubenow, Bones of Contention, Grand Rapids, Baker, 1992. p. 136.
86. Pat Shipman, "Doubting Dmanisi", American Scientist, November-December 2000, p. 491.
87. Erik Trinkaus, "Hard Times Among the Neanderthals", Natural History, vol 87, December 1978, p. 10; R. L. Holloway, "The Neanderthal Brain: What Was Primitive", American Journal of Physical Anthropology Supplement, Vol 12, 1991, p. 94.
88. Alan Walker, Science, vol 207, 1980, p. 1103.
89. A. J. Kelso, Physical Antropology, 1st ed., New York: J. B. Lipincott Co., 1970, p. 221; M. D. Leakey, Olduvai Gorge, Vol 3, Cambridge: Cambridge University Press, 1971, p. 272.
90. S. J. Gould, Natural History, Vol 85, 1976, p. 30.
91. Time, November 1996.
92. L. S. B. Leakey, The Origin of Homo Sapiens, ed. F. Borde, Paris: UNESCO, 1972, p. 25-29; L. S. B. Leakey, By the Evidence, New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1974.
93. "Is This The Face of Our Past", Discover, December 1997, p. 97-100.
94. A. J. Kelso, Physical Anthropology, 1.b., 1970, pp. 221; M. D. Leakey, Olduvai Gorge, Vol 3, Cambridge: Cambridge University Press, 1971, p. 272.
95. Donald C. Johanson & M. A. Edey, Lucy: The Beginnings of Humankind, New York: Simon & Schuster, 1981, p. 250.
96. Science News, Vol 115, 1979, pp. 196-197.
97. Ian Anderson, New Scientist, Vol 98, 1983, p. 373.
98. Russell H. Tuttle, Natural History, March 1990, pp. 61-64.
99. Ruth Henke, "Aufrecht aus den Baumen", Focus, Vol 39, 1996, p. 178.
100. Elaine Morgan, The Scars of Evolution, New York: Oxford University Press, 1994, p. 5.
101. Solly Zuckerman, Beyond The Ivory Tower, New York: Toplinger Publications, 1970, p. 19.
102. Robert Locke, "Family Fights", Discovering Archaeology, July/August 1999, p. 36-39.
103. Ibid.
104. Henry Gee, In Search of Time: Beyond the Fossil Record to a New History of Life, New York, The Free Press, 1999, p. 126-127.
105. W. R. Bird, The Origin of Species Revisited, Nashville: Thomas Nelson Co., 1991, pp. 298-99.
106. "Hoyle on Evolution", Nature, Vol 294, November 12, 1981, p. 105.
107. Ali Demirsoy, Kalitim ve Evrim (Inheritance and Evolution), Ankara: Meteksan Publishing Co., 1984, p. 64.
108. W. R. Bird, The Origin of Species Revisited, Nashville: Thomas Nelson Co., 1991, p. 304.
109. Ibid, p. 305.
110. J. D. Thomas, Evolution and Faith, Abilene, TX, ACU Press, 1988. pp. 81-82.
111. Robert Shapiro, Origins: A Sceptics Guide to the Creation of Life on Earth, New York, Summit Books, 1986. p.127.
112. Fred Hoyle, Chandra Wickramasinghe, Evolution from Space, New York, Simon & Schuster, 1984, p. 148.
113. Ibid, p. 130.
114. Fabbri Britannica Bilim Ansiklopedisi (Fabbri Britannica Science Encyclopaedia), vol 2, No 22, p. 519.
115. Richard B. Bliss & Gary E. Parker, Origin of Life, California: 1979, p. 14.
116. Stanley Miller, Molecular Evolution of Life: Current Status of the Prebiotic Synthesis of Small Molecules, 1986, p. 7.
117. Kevin Mc Kean, Bilim ve Teknik, No 189, p. 7.
118. J. P. Ferris, C. T. Chen, "Photochemistry of Methane, Nitrogen, and Water Mixture As a Model for the Atmosphere of the Primitive Earth", Journal of American Chemical Society, vol 97:11, 1975, p. 2964.
119. "New Evidence on Evolution of Early Atmosphere and Life", Bulletin of the American Meteorological Society, vol 63, November 1982, pp. 1328-1330.
120. Richard B. Bliss & Gary E. Parker, Origin of Life, California, 1979, p. 25.
121. W. R. Bird, The Origin of Species Revisited, Nashville: Thomas Nelson Co., 1991, p. 325.
122. Richard B. Bliss & Gary E. Parker, Origin of Life, California: 1979, p. 25.
123. Ibid.
124. S. W. Fox, K. Harada, G. Kramptiz, G. Mueller, "Chemical Origin of Cells", Chemical Engineering News, June 22, 1970, p. 80.
125. Frank B. Salisbury, "Doubts about the Modern Synthetic Theory of Evolution", American Biology Teacher, September 1971, p. 336.
126. Paul Auger, De La Physique Theorique a la Biologie, 1970, p. 118.
127. Francis Crick, Life Itself: It's Origin and Nature, New York, Simon & Schuster, 1981, p. 88.
128. Ali Demirsoy, Kal›t›m ve Evrim (Inheritance and Evolution), Ankara: Meteksan Publishing Co., 1984, p. 39.
129. Homer Jacobson, "Information, Reproduction and the Origin of Life", American Scientist, January 1955, p. 121.
130. Reinhard Junker & Siegfried Scherer, "Entstehung und Geschichte der Lebewesen", Weyel, 1986, p. 89.
131. Michael Denton, Evolution: A Theory in Crisis, London: Burnett Books, 1985, p. 351.
132. John Horgan, "In the Beginning", Scientific American, vol. 264, February 1991, p. 119.
133. G.F. Joyce, L. E. Orgel, "Prospects for Understanding the Origin of the RNA World", In the RNA World, New York: Cold Spring Harbor Laboratory Press, 1993, p. 13.
134. Jacques Monod, Chance and Necessity, New York: 1971, p.143.
135. Leslie E. Orgel, "The Origin of Life on the Earth", Scientific American, October 1994, vol. 271, p. 78.
136. Gordon C. Mills, Dean Kenyon, "The RNA World: A Critique", Origins & Design, 17:1, 1996.
137. Brig Klyce, The RNA World, http://www. panspermia.org/rnaworld.htm
138. Chandra Wickramasinghe, Interview in London Daily Express, August 14, 1981.
139. Pierre-P Grassé, Evolution of Living Organisms, New York: Academic Press, 1977, p. 103.
140. Ibid, p. 107.
141. Norman Macbeth, Darwin Retried: An Appeal to Reason, Boston: Gambit, 1971, p. 101.
142. Malcolm Muggeridge, The End of Christendom, Grand Rapids: Eerdmans, 1980, p. 43.
143. Loren C. Eiseley, The Immense Journey, Vintage Books, 1958, p. 186.
144. Charles Darwin, The Origin of Species: A Facsimile of the First Edition, Harvard University Press, 1964, p. 184.
145. Norman Macbeth, Darwin Retried: An Appeal to Reason, Harvard Common Press, New York: 1971, p. 33.
146. Ibid, p. 36.
147. Loren Eiseley, The Immense Journey, Vintage Books, 1958. p. 227.
148. H. Lisle Gibbs and Peter R. Grant, "Oscillating selection on Darwin's finches", Nature, 327, 1987, pp. 513; For more detailed information, please see Jonathan Wells, Icons of Evolution, 2000, pp. 159-175.
149. Dr. Lee Spetner, "Lee Spetner/Edward Max Dialogue: Continuing an exchange with Dr. Edward E. Max", 2001, http://www.trueorigin. org/spetner2. ap
150. Ibid.
151. Ibid.
152. Francisco J. Ayala, "The Mechanisms of Evolution", Scientific American, Vol. 239, September 1978, p. 64.
153.Dr. Lee Spetner, "Lee Spetner/Edward Max Dialogue: Continuing an exchange with Dr. Edward E. Max", 2001, http://www.trueorigin. org/spetner2. ap
154. S. R. Scadding, "Do 'Vestigial Organs' Provide Evidence for Evolution?", Evolutionary Theory, Vol 5, May 1981, p. 173.
155. The Merck Manual of Medical Information, Home edition, New Jersey: Merck & Co., Inc. The Merck Publishing Group, Rahway, 1997.

156. H. Enoch, Creation and Evolution, New York: 1966, pp. 18-19.
157. Frank Salisbury, "Doubts About the Modern Synthetic Theory of Evolution", American Biology Teacher, September 1971, p. 338.
158. Dean Kenyon & Percival Davis, Of Pandas and People: The Central Question of Biological Origins, (Dallas: Haughton Publishing, 1993), p. 33.
159. Michael Denton, Evolution: A Theory in Crisis, London, Burnett Books, 1985, p. 145.
160. William Fix, The Bone Peddlers: Selling Evolution (New York: Macmillan Publishing Co., 1984), p. 189.
161. W. R. Bird, The Origin of Species Revisited, Thomas Nelson Co., Nashville: 1991, pp. 98-99; Percival Davis, Dean Kenyon, Of Pandas and People, Haughton Publishing Co., 1990, pp. 35-38.
162. W. R. Bird, The Origin of Species Revisited, pp. 98-99, 199-202.
163.Michael Denton, Evolution: A Theory in Crisis, London: Burnett Books, 1985, pp. 290-91.
164. Hervé Philippe and Patrick Forterre, "The Rooting of the Universal Tree of Life is Not Reliable", Journal of Molecular Evolution, vol 49, 1999, p. 510
165. James Lake, Ravi Jain ve Maria Rivera, "Mix and Match in the Tree of Life", Science, vol. 283, 1999, p. 2027
166. Carl Woese, "The Universel Ancestor", Proceedings of the National Academy of Sciences, USA, 95, (1998) p. 6854
167. Ibid.
168. Jonathan Wells, Icons of Evolution, Regnery Publishing, 2000, p. 51
169. G. G. Simpson, W. Beck, An Introduction to Biology, New York, Harcourt Brace and World, 1965, p. 241.
170. Keith S. Thompson, "Ontogeny and Phylogeny Recapitulated", American Scientist, Vol 76, May/June 1988, p. 273.
171. Francis Hitching, The Neck of the Giraffe: Where Darwin Went Wrong, New York: Ticknor and Fields 1982, p. 204.
172. Richard Lewontin, "The Demon-Haunted World", The New York Review of Books, January 9, 1997, p. 28.
173. Robert Shapiro, Origins: A Sceptics Guide to the Creation of Life on Earth, Summit Books, New York: 1986, p. 207.
174. Hoimar Von Dithfurt, Im Anfang War Der Wasserstoff (Secret Night of the Dinosaurs), Vol 2, p. 64.
175. Ali Demirsoy, Kalitim ve Evrim (Inheritance and Evolution), Ankara: Meteksan Publishing Co., 1984, p. 61.
176. Ibid, p. 61.
177. Ibid, p. 94.
178. Bilim ve Teknik, July 1989, Vol. 22, No.260, p.59
179. Grzimeks Tierleben Vögel 3, Deutscher Taschen Buch Verlag, Oktober 1993, p.92
180. David Attenborough, Life On Earth: A Natural History, Collins British Broadcasting Corporation, June 1979, p.236
181. David Attenborough, Life On Earth: A Natural History, Collins British Broadcasting Corporation, June 1979, p.240
182. Görsel Bilim ve Teknik Ansiklopedisi, pp.185-186
183. WalterMetzner, http://cnas.ucr.edu/ ~bio/ faculty/Metzner.html
184. National Geographic, September 1995, p.98
185. Bilim ve Teknik, January 1990, pp.10-12
186. David Attenborough, Life of Birds, Princeton University Press, Princeton-New Jersey, 1998, p.47
187. James L.Gould, Carol Grant Gould, Life at the Edge, W.H.Freeman and Company, 1989, pp. 130-136.
188. David Attenborough, The Private Life of Plants, Princeton Universitye Press, Princeton-New Jersey, 1995, pp. 81-83.
189. Encyclopedia of Reptiles and Amphibians, Published in the United States by Academic Press, A Division of Harcourt Brace and Company, p. 35.
190. Frederick Vester, Denken, Lernen, Vergessen, vga, 1978, p.6
191. R.L.Gregory, Eye and Brain: The Psychology of Seeing, Oxford University Press Inc. New York, 1990, p. 9.
192. Lincoln Barnett, The Universe and Dr.Einstein, William Sloane Associate, New York, 1948, p. 20.
193. Orhan Hancerlioglu, Dusunce Tarihi (The History of Thought), Istanbul: Remzi Bookstore, 6.ed., September 1995, p. 447.
194. V.I.Lenin, Materialism and Empirio-criticism, Progress Publishers, Moscow, 1970, p. 14.
195. Bertrand Russell, ABC of Relativity, George Allen and Unwin, London, 1964, pp. 161-162.
196. R.L.Gregory, Eye and Brain: The Psychology of Seeing, Oxford University Press Inc. New York, 1990, p. 9.
197. Ken Wilber, Holographic Paradigm and Other Paradoxes, p.20
198. George Politzer, Principes Fondamentaux de Philosophie, Editions Sociales, Paris 1954, p. 53.
199. Orhan Hancerlioglu, Dusunce Tarihi (The History of Thought), Istanbul: Remzi Bookstore, 6.ed., September 1995, p. 261.
200. George Politzer, Principes Fondamentaux de Philosophie, Editions Sociales, Paris 1954, p. 65.
201. Paul Davies, Tanr› ve Yeni Fizik, (God and The New Physics), translated by Murat Temelli, Im Publishing, Istanbul 1995, pp. 180-181.
202. Rennan Pekunlu, "Aldatmacanin Evrimsizligi", (Non-Evolution of Deceit), Bilim ve Utopya, December 1998 (V.I.Lenin, Materialism and Empirio-criticism, Progress Publishers, Moscow, 1970, pp. 334-335).
203. Alaettin Senel, "Evrim Aldatmacasi mi?, Devrin Aldatmacasi mi?", (Evolution Deceit or Deceit of the Epoch?), Bilim ve Utopya, December 1998.
204. Imam Rabbani Hz. Mektuplari (Letters of Rabbani), Vol.II, 357, Letter, p.163.
205. Francois Jacob, Le Jeu des Possibles, University of Washington Press, 1982, p.111.
206. Lincoln Barnett, The Universe and Dr.Einstein, William Sloane Associate, New York, 1948, pp. 52-53.
207. Ibid., p. 17.
208. Ibid., p. 58.
209. Paul Strathern, The Big Idea: Einstein and Relativity, Arrow Books, 1997, p. 57.
210. Lincoln Barnett, The Universe and Dr.Einstein, William Sloane Associate, New York, 1948, p. 84.
211. Ibid., pp. 17-18.